

田口下田尻遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

本文編

2017.3

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

田口下田尻遺跡

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査(その3)報告書

本文編

2017.3

国 土 交 通 省
公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



田口下田尻遺跡遠景(東から)



調査区全景(南上空から・合成)



出土した緑釉陶器

序

国道17号は、首都東京と日本海側の政令指定都市である新潟県新潟市を結び、群馬県を通過して日本列島を縦断する交通の大動脈です。上武道路は国道17号の混雑緩和と沿線地域における物流の促進を図るため、大規模バイパスとして埼玉県熊谷市から群馬県前橋市田口町に至る路線が計画されました。

上武道路の沿線は、関東平野の北西縁部にあたり、旧石器時代から近世に至る約3万年間に亘る遺跡が累積しています。この地域は県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地が広がっており、群馬県教育委員会の調整の結果、道路建設に先だって埋蔵文化財の記録保存の措置がとられることになりました。

上武道路の建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和48年度から着手し、平成25年度で完了し、40年間の調査を無事に終了することができました。この度報告する田口下田尻遺跡は、平成23・25年度に発掘調査を行い、上武道路の最終端を掘り終えて、整理事業の最終年度に報告書を刊行する運びとなりました。遺跡からは古墳時代から平安時代に及ぶ大規模な集落が発見され、前橋台地の北側に位置する旧利根川が形成した氾濫原を古代の人々が開発した歴史の一端が明らかになりました。

発掘調査から報告書刊行に至るまでに、国土交通省関東地方整備局、同高崎河川国道事務所、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会をはじめ関係機関並びに関係各位の皆様には、多大なご高配とご協力を賜りました。ここに銘記して心より謝意を表しますとともに、本調査報告書が地域の歴史理解を深め、豊かな社会と未来を志向するための一助として広く活用されることを願い、序といたします。

平成29年3月

公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
理事長 中野三智男

例 言

1. 本書は、一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3) 田口下田尻遺跡の発掘調査報告書である。
2. 田口下田尻遺跡は、群馬県前橋市田口町下田尻98、99、100、102、103、104、105-1、106、107-1、107-3、107-4、107-5、107-6、108、109、110、111、112-1、112-2、113、114、115-1、126-1、127-1、128-1、129-1、130-1、131-1、132-4、132-5、133-3、133-4、133-5、134-3及び関根町赤城61-1、61-3に所在する。埋蔵文化財包蔵地の名称は前橋市0008遺跡、市町村遺跡番号は0008である。
3. 事業主体は、国土交通省関東地方整備局である。
4. 調査主体は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
5. 整理主体は、公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団である。
6. 発掘調査の体制と期間は次のとおりである。

平成23年度一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)

履行期間 平成23年4月1日～平成24年3月31日
調査期間 平成23年5月1日～平成24年3月31日
調査区 V・VI・VII・VIII・IX区
調査面積 13,135.5㎡
調査担当 主席専門員(総括) 新倉明彦、主任調査研究員 杉山秀宏、
上席専門員 友廣哲也、上席専門員 関 晴彦
遺跡掘削工事請負 技研測量設計株式会社
地上測量 株式会社測研
自然科学分析 株式会社火山灰考古学研究所(テフラ分析)

平成25年度一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)

履行期間 平成25年4月1日～平成26年3月31日
調査期間 平成25年4月1日～平成25年8月31日
調査区 X・XI・XII区
調査面積 2,494.9㎡
調査担当 上席専門員 菊池 実、主任調査研究員 藤井義徳
遺跡掘削工事請負 技研測量設計株式会社
地上測量 技研測量設計株式会社
自然科学分析 株式会社パレオ・ラボ(炭化材樹種同定)

7. 整理事業の体制と期間は次のとおりである。

平成25年度一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)

履行期間 平成25年4月1日～平成26年3月31日
整理期間 平成25年4月1日～平成26年3月31日
整理担当 上席専門員 新倉明彦

平成26年度一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)

履行期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日

整理期間 平成26年4月1日～平成27年3月31日

整理担当 上席専門員 新倉明彦

平成27年度一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)

履行期間 平成27年4月1日～平成28年3月31日

整理期間 平成27年4月1日～平成28年3月31日

整理担当 専門調査役神谷佳明、専門員(総括) 矢口裕之

平成28年度一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)

履行期間 平成28年4月1日～平成29年3月31日

整理期間 平成28年4月1日～平成29年1月31日

整理担当 専門員(総括) 矢口裕之

8. 本書作成の担当者は次のとおりである。

編集 新倉明彦、矢口裕之

本文執筆 第1章第1～3節 小島敦子、矢口裕之

第2章第1・2節 田村 博、矢口裕之

第6章第2節 神谷佳明

それ以外の章 矢口裕之

デジタル編集 佐藤元彦、齋田智彦

遺構写真 発掘調査担当者

遺物写真 石田典子、大西雅広、新倉明彦、関 邦一

遺物観察・観察表執筆

石器・石製品 岩崎泰一、石田典子、津島秀章

土師器・須恵器 徳江秀夫、神谷佳明

陶磁器 大西雅広、藤巻幸男

金属製品 関 邦一

鍛冶関連遺物 笹澤泰史、関 邦一

保存処理 関 邦一

9. 石器・石製品の石材同定は飯島静男氏に依頼し、獣骨の鑑定については宮崎重雄氏に依頼した。

10. 発掘調査の記録資料と出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターで保管している。

11. 発掘調査及び報告書作成にあたり、以下の機関にご指導とご協力をいただいた。

群馬県教育委員会文化財保護課、前橋市教育委員会文化財保護課、前橋市田口町自治会。

凡 例

1. 本書で使用した方位は、すべて座標・北である。遺跡内の測量は国家座標(世界測地系)第IX系を用いた。調査区は X=48,945~49,144、Y=-70,040~70,297の範囲に収まり、真北方位角は+0° 27' 54.44"である。
2. 遺構平面図や遺構断面図に示した数値は標高であり、単位はメートルである。
3. 遺構平面図の縮尺は1/60を基本とし、それ以外の縮尺は各図にそれぞれ示した。遺物実測図の縮尺は1/3を基本として、それ以外の縮尺は各図にそれぞれ示し、遺物番号に()で縮尺を示した。
4. 本書で使用した図の凡例は以下のことを表す。

遺構図	● 土器・陶磁器	○ 土製品	▲ 石器・石製品	■ 鉄・金属製品						
灰		炭化物		焼土		攪乱				
遺物実測図	赤彩		黒色		すず		付着物		燻	
	釉・灰釉		灰釉(濃色)		緑釉		緑釉(濃色)			
	埴塼		すり面		降灰					
	石器鉄付着		砂鉄焼結		鉄塊付着		酸化土砂			

5. 遺構の名称や番号は、原則として発掘調査で付した名称・番号を踏襲し、変更したものについては別表にまとめた。
6. 遺構の位置は遺構が含まれるグリッドと方位を記載した。竪穴住居の主軸方位はカマドがある壁の直交方向、カマドを伴わない竪穴住居は長辺の方位を記載した。
7. 遺構の形状は正方形、長方形、隅丸方形(隅が丸い正方形)、隅丸長方形(隅が丸い長方形)に分類し、歪みの有無を記載した。
8. 遺構の規模は遺構検出面での大きさを計測し、残存部分は+を付して記載した。なお、竪穴住居の面積は住居外のカマドの部分は含まれない。竪穴住居の面積は、床面の面積をプランメーターで計測した。
9. 遺物の器種名の杯や椀は「木偏」を使用し、中世以降の陶磁器は「石偏」を使用した。
10. 観察表や地層の色調は、農林水産省農林水産技術会議監修・(財)日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』1996年版に基づいている。
11. 遺物観察表の留意点は以下のとおりである。
土器・土製品胎土の細砂粒と粗砂粒は、直径2mmを境に区別した。成形・整形の特徴の項目にあるハケ目の本数は、1cmあたりの本数を示す。土器計測位置の表現は、口径が「口」、底径が「底」、器高は「高」と略記した。遺物の計測値で、欠損品の場合は、()で残存部の計測値を記載した。
12. 本書で使用した地形図は、国土地理院地勢図 1/200,000「長野」宇都宮(平成18年4月1日発行)、地形図 1/25,000「前橋」(平成22年12月1日発行)、前橋市原形図(平成21年発行)であり、個々の図に出典を明示した。
13. 本書で使用した火山砕屑物の鍵層は、通常はテフラの略称を使用した。主なテフラの略称の表記は次のとおりである。
浅間Aテフラ[As-A]、浅間Bテフラ[As-B]、浅間B'テフラ(粕川テフラ)[As-Kk]、榛名二ツ岳伊香保テフラ[Hr-FP]、榛名二ツ岳渋川テフラ[Hr-FA]、浅間Cテフラ[As-C]。
なお、榛名火山二ツ岳の渋川テフラ及び伊香保テフラは、降下火砕物を除いて堆積物に含まれる単体の軽石は分離・識別が不可能である。発掘調査で検出されたこれらのテフラ起源の軽石は「二ツ岳の白色軽石」と総称した。
14. 遺構の年代は、出土遺物の相対年代によって推定されたものについて「○世紀の前半・後半」及び「○世紀の第○四半期」の範囲で示した。

目次

口絵

序

例言

凡例

目次

挿図目次

表目次

本文中写真目次

写真目次

第1章 調査の経過

第1節 上武道路について	1
第2節 上武道路と埋蔵文化財	2
第3節 調査に至る経緯	6
第4節 発掘調査と資料整理の方法	6
第5節 調査面と調査区の設定	11
第6節 発掘調査と資料整理の経過	12

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境	14
第2節 歴史的環境	16
第3節 遺跡の層序	23

第3章 第1面の遺構と出土遺物

第1節 調査の概要	33
第2節 復旧痕	33
第3節 配石	46
第4節 溝	47
第5節 畠	56
第6節 土坑	58
第7節 遺構外から出土した遺物	61

第4章 第2面の遺構と出土遺物

第1節 調査の概要	63
第2節 住居	63
第3節 掘立柱建物	605
第4節 竪穴	609

第5節 溝	618
第6節 土坑	653
第7節 鍛冶	798
第8節 集石	819
第9節 墓坑	821
第10節 畠・耕作痕	825
第11節 遺構外から出土した遺物	827

第5章 自然科学分析による遺跡の理解

第1節 VII区の地層とテフラ	837
第2節 VII・VIII区の地層とテフラ	840
第3節 炭化材の樹種同定	846
第4節 遺跡から出土した獣骨	850
第5節 遺跡から出土した鉄関連遺物他の 金属学的調査	853
第6節 自然科学分析の成果とまとめ	875

第6章 調査成果のまとめ

第1節 古代集落の変遷	876
第2節 田口下田尻遺跡出土の 施軸陶器について	886

抄録

遺物観察表(遺物観察表・写真図版編)

写真図版(遺物観察表・写真図版編)

挿図目次

第1図	上武道路と道跡の位置	1	第64図	V区1号住居	80
第2図	上武道路調査道跡一覧	3	第65図	V区1号住居と出土遺物	81
第3図	上武道路8工区の道跡	5	第66図	V区1号住居の出土遺物	82
第4図	大・中グッド設定図	8	第67図	V区2号住居	83
第5図	グッド設定図	9	第68図	V区2号住居の出土遺物	84
第6図	田口下田尻遺跡の範囲	10	第69図	V区3号住居と出土遺物	85
第7図	調査区設定図	11	第70図	V区4号住居	86
第8図	道跡周辺の地形と地質	15	第71図	V区4号住居と出土遺物	87
第9図	周辺道跡分布図	17	第72図	V区5・12号住居(1)	88
第10図	道跡の順序	23	第73図	V区5・12号住居(2)	89
第11図	調査区の順序(位置)	25	第74図	V区12号住居と5・12号住居の出土遺物	90
第12図	調査区の順序(柱状図)	26	第75図	V区6・7号住居	92
第13図	周辺道跡の順序(位置)	27	第76図	V区6・7号住居と出土遺物	93
第14図	周辺道跡の順序(柱状図)	28	第77図	V区6号住居	94
第15図	道跡周辺の地質断面図(位置)	30	第78図	V区8号住居と出土遺物	95
第16図	道跡周辺の地質断面図	31	第79図	V区9・10号住居(1)	97
第17図	道跡周辺の地質図	32	第80図	V区9・10号住居(2)	98
第18図	V区1面 道構全体図	34	第81図	V区10号住居と9・10号住居の出土遺物	99
第19図	V区1面 道構全体図	35	第82図	V区11・26号住居	100
第20図	V区1面 道構全体図	36	第83図	V区11号住居と出土遺物	101
第21図	X区1面 道構全体図	37	第84図	V区26号住居	102
第22図	V区1号復旧痕	38	第85図	V区13・20号住居	103
第23図	V区2号復旧痕	39	第86図	V区13号住居と13・20号住居の出土遺物	104
第24図	V区3号復旧痕	40	第87図	V区14・38号住居	106
第25図	V区3号復旧痕の出土遺物	41	第88図	V区14号住居と14・38号住居の出土遺物	107
第26図	V区1号復旧痕	42	第89図	V区15～17号住居(1)	108
第27図	V区2・3号復旧痕	43	第90図	V区15～17号住居(2)	109
第28図	V区1号復旧痕	44	第91図	V区15～17号住居の出土遺物	110
第29図	V区2・3号復旧痕	44	第92図	V区18号住居	111
第30図	X区1～3号復旧痕	45	第93図	V区18号住居と出土遺物	112
第31図	X区1・2号配石	46	第94図	V区19号住居	113
第32図	V区1面2・3号溝と2号溝の出土遺物	48	第95図	V区19号住居と出土遺物	114
第33図	V区1面4・5号溝	49	第96図	V区22・23号住居と出土遺物	115
第34図	V区1面1・2号溝と2号溝の出土遺物	50	第97図	V区22号住居	116
第35図	V区1面3号溝と出土遺物	51	第98図	V区24・27号住居(1)	117
第36図	V区1面4・5号溝と5号溝の出土遺物	52	第99図	V区24・27号住居(2)	118
第37図	V区1面6・7号溝	53	第100図	V区24・27号住居の出土遺物	119
第38図	V区1面8号溝と出土遺物	54	第101図	V区28・29号住居(1)	120
第39図	V区1面1号溝	54	第102図	V区28・29号住居(2)	121
第40図	X区1面1号溝	55	第103図	V区28・29号住居(3)	122
第41図	X区1面2号溝と出土遺物	56	第104図	V区28・29号住居の出土遺物	123
第42図	V区1号島と出土遺物	57	第105図	V区30号住居	124
第43図	V区2号島	58	第106図	V区30号住居の出土遺物	125
第44図	V区1～11号土坑と5・6号土坑の出土遺物	60	第107図	V区31号住居	127
第45図	V区12～18号土坑・V区1号土坑と13・17号土坑の出土遺物	62	第108図	V区31号住居の出土遺物	128
第46図	V・V・X区1面 道構外から出土した遺物	62	第109図	V区32号住居と出土遺物	129
第47図	V区2面 道構全体図	64	第110図	V区33・34号住居	130
第48図	V区2面 土坑全体図	65	第111図	V区33・34号住居と33号住居の出土遺物	131
第49図	V区2面 道構全体図	66	第112図	V区34号住居の出土遺物	132
第50図	V区2面 土坑全体図	67	第113図	V区35号住居(1)	133
第51図	V区2面 道構全体図	68	第114図	V区35号住居と出土遺物	134
第52図	V区2面 土坑全体図	69	第115図	V区35号住居(2)	135
第53図	V区2面 道構全体図(1)	70	第116図	V区36号住居	136
第54図	V区2面 道構全体図(2)	71	第117図	V区36号住居の出土遺物	137
第55図	V区2面 土坑全体図(1)	72	第118図	V区37号住居の出土遺物	138
第56図	V区2面 土坑全体図(2)	73	第119図	V区39号住居と出土遺物	139
第57図	V区2面 道構全体図	74	第120図	V区39号住居	140
第58図	V区2面 土坑全体図	75	第121図	V区40号住居	141
第59図	X区2面 道構全体図	76	第122図	V区40号住居と出土遺物(1)	142
第60図	X区2面 土坑全体図	77	第123図	V区40号住居と出土遺物(2)	143
第61図	X区2面 道構全体図	78	第124図	V区41号住居	144
第62図	X区2面 道構全体図	78	第125図	V区41号住居と出土遺物	145
第63図	X区2面 土坑全体図	79	第126図	V区42号住居	146

第1278席	V区42号住居と出土遺物	147	第193席	V区15号住居と出土遺物	213
第1280席	V区43号住居	148	第194席	V区15号住居の出土遺物	214
第129席	V区43号住居の出土遺物	149	第195席	V区16・17号住居(1)	214
第1300席	V区44号住居と出土遺物	150	第196席	V区16・17号住居と出土遺物	215
第131席	V区45号住居	151	第197席	V区16・17号住居(2)	216
第132席	V区45号住居の出土遺物	152	第198席	V区18号住居と出土遺物	217
第133席	V区46号住居と出土遺物	153	第199席	V区19・20号住居(1)	218
第134席	V区46号住居	154	第200席	V区19・20号住居(2)	219
第135席	V区47号住居と出土遺物	155	第201席	V区19号住居と出土遺物	220
第136席	V区48号住居と出土遺物	156	第202席	V区20号住居の出土遺物	221
第137席	V区48号住居	157	第203席	V区21号住居と出土遺物	222
第138席	V区49号住居と出土遺物	158	第204席	V区22号住居	223
第139席	V区52号住居と出土遺物	159	第205席	V区22号住居と出土遺物	224
第140席	V区53号住居	160	第206席	V区23号住居	225
第141席	V区53号住居と出土遺物	161	第207席	V区24号住居	225
第142席	V区53号住居の出土遺物(1)	162	第208席	V区24号住居の出土遺物	226
第143席	V区53号住居の出土遺物(2)	163	第209席	V区25号住居と出土遺物	227
第144席	V区56号住居と出土遺物(1)	164	第210席	V区25号住居の出土遺物	228
第145席	V区56号住居と出土遺物(2)	165	第211席	V区26号住居	228
第146席	V区58号住居(1)	166	第212席	V区26号住居と出土遺物	229
第147席	V区58号住居(2)	167	第213席	V区28号住居	230
第148席	V区58号住居の出土遺物	168	第214席	V区28号住居の出土遺物	231
第149席	V区59号住居	169	第215席	V区29号住居	232
第150席	V区59号住居と出土遺物	170	第216席	V区29号住居と出土遺物	233
第151席	V区59号住居の出土遺物	171	第217席	V区29号住居の出土遺物	234
第152席	V区61・63号住居(1)	172	第218席	V区30・31・33号住居(1)	235
第153席	V区61・63号住居(2)	173	第219席	V区30・31・33号住居(2)	236
第154席	V区63号住居と出土遺物	174	第220席	V区30号住居と30・31・33号住居の出土遺物	237
第155席	V区61号住居の出土遺物	175	第221席	V区32号住居	238
第156席	V区70・73号住居と73号住居の出土遺物	176	第222席	V区32号住居と出土遺物	239
第157席	V区70・73号住居(1)	177	第223席	V区34・43号住居(1)	241
第158席	V区70・73号住居(2)	178	第224席	V区34・43号住居(2)	242
第159席	V区70号住居の出土遺物	179	第225席	V区34号住居の出土遺物	243
第160席	V区64号住居と出土遺物	180	第226席	V区43号住居の出土遺物	244
第161席	V区64号住居	181	第227席	V区37・38・57号住居	245
第162席	V区65・66号住居と出土遺物	183	第228席	V区37・38・57号住居と37号住居の出土遺物	246
第163席	V区65・66号住居	184	第229席	V区37・38号住居	247
第164席	V区67・69号住居(1)	185	第230席	V区38・57号住居の出土遺物	248
第165席	V区67・69号住居(2)	186	第231席	V区39・40号住居	249
第166席	V区67・69号住居の出土遺物	187	第232席	V区39号住居と出土遺物	250
第167席	V区68号住居と出土遺物	188	第233席	V区39号住居の出土遺物	251
第168席	V区71号住居	189	第234席	V区41・42号住居(1)	252
第169席	V区71号住居と出土遺物	190	第235席	V区41・42号住居(2)	253
第170席	V区72号住居	191	第236席	V区41号住居の出土遺物(1)	254
第171席	V区72号住居の出土遺物	192	第237席	V区41号住居の出土遺物(2)	255
第172席	V区74・76号住居(1)	192	第238席	V区42号住居の出土遺物	255
第173席	V区74・76号住居(2)	193	第239席	V区44号住居と出土遺物	256
第174席	V区74・76号住居の出土遺物	194	第240席	V区45号住居と出土遺物	258
第175席	M区1・10号住居(1)	195	第241席	V区46・47・58号住居	259
第176席	M区1・10号住居(2)	196	第242席	V区46・47・58号住居と46号住居の出土遺物	260
第177席	M区1号住居の出土遺物	197	第243席	V区46・58号住居	261
第178席	M区10号住居と出土遺物	198	第244席	V区47・58号住居の出土遺物	262
第179席	M区2号住居	199	第245席	V区48号住居	264
第180席	M区2号住居の出土遺物	200	第246席	V区48号住居と出土遺物	265
第181席	M区4号住居	201	第247席	V区48号住居の出土遺物	266
第182席	M区4号住居の出土遺物	202	第248席	V区49・51・55号住居(1)	267
第183席	M区5号住居と出土遺物	203	第249席	V区49・51・55号住居(2)	268
第184席	M区6号住居(1)	204	第250席	V区51・55号住居	269
第185席	M区6号住居(2)	205	第251席	V区49・51・55号住居の出土遺物	270
第186席	M区6号住居の出土遺物	206	第252席	V区55号住居の出土遺物	271
第187席	M区7・8号住居(1)	207	第253席	V区52・53・54号住居	272
第188席	M区7・8号住居(2)	208	第254席	V区52・53・54号住居と52号住居の出土遺物	273
第189席	M区7・8号住居の出土遺物	209	第255席	V区53号住居と出土遺物	274
第190席	M区9号住居と出土遺物	210	第256席	V区53・54号住居の出土遺物	275
第191席	M区11号住居と出土遺物	211	第257席	V区54号住居の出土遺物	276
第192席	V区14号住居と出土遺物	212	第258席	V区56号住居と出土遺物	276

第259区	Ⅷ区59号住居(1)	277	第325区	Ⅷ区38号住居	345
第260区	Ⅷ区59号住居(2)	278	第326区	Ⅷ区38号住居と出土遺物	346
第261区	Ⅷ区1号住居	279	第327区	Ⅷ区38号住居の出土遺物	347
第262区	Ⅷ区1号住居の出土遺物	280	第328区	Ⅷ区39号住居	348
第263区	Ⅷ区2号住居と出土遺物	281	第329区	Ⅷ区39号住居と出土遺物	349
第264区	Ⅷ区3・5号住居(1)	282	第330区	Ⅷ区40号住居	350
第265区	Ⅷ区3・5号住居(2)	283	第331区	Ⅷ区40号住居と出土遺物	351
第266区	Ⅷ区3・5号住居の出土遺物	284	第332区	Ⅷ区40号住居の出土遺物	352
第267区	Ⅷ区4・28号住居(1)	286	第333区	Ⅷ区42号住居	353
第268区	Ⅷ区4・28号住居(2)	287	第334区	Ⅷ区42号住居の出土遺物	354
第269区	Ⅷ区28号住居と4・28号住居の出土遺物	288	第335区	Ⅷ区43号住居	355
第270区	Ⅷ区6～8号住居(1)	290	第336区	Ⅷ区43号住居と出土遺物	356
第271区	Ⅷ区6～8号住居(2)	291	第337区	Ⅷ区43号住居の出土遺物	357
第272区	Ⅷ区7・8号住居	292	第338区	Ⅷ区44号住居	358
第273区	Ⅷ区6～8号住居の出土遺物	293	第339区	Ⅷ区44号住居と出土遺物	359
第274区	Ⅷ区8号住居の出土遺物	294	第340区	Ⅷ区44号住居の出土遺物	360
第275区	Ⅷ区9号住居	294	第341区	Ⅷ区45号住居	361
第276区	Ⅷ区9号住居と出土遺物	295	第342区	Ⅷ区45号住居の出土遺物(1)	362
第277区	Ⅷ区10号住居	296	第343区	Ⅷ区45号住居の出土遺物(2)	363
第278区	Ⅷ区10号住居の出土遺物	297	第344区	Ⅷ区47・48号住居(1)	364
第279区	Ⅷ区12号住居と出土遺物	297	第345区	Ⅷ区47・48号住居(2)	365
第280区	Ⅷ区12号住居	298	第346区	Ⅷ区48号住居と47・48号住居の出土遺物	366
第281区	Ⅷ区13号住居と出土遺物	299	第347区	Ⅷ区48号住居の出土遺物	367
第282区	Ⅷ区14号住居	300	第348区	Ⅷ区49号住居(1)	368
第283区	Ⅷ区14号住居と出土遺物	301	第349区	Ⅷ区49号住居(2)	369
第284区	Ⅷ区14号住居の出土遺物	302	第350区	Ⅷ区49号住居と出土遺物	370
第285区	Ⅷ区18号住居(1)	303	第351区	Ⅷ区51号住居	371
第286区	Ⅷ区18号住居と出土遺物	304	第352区	Ⅷ区51号住居と出土遺物	372
第287区	Ⅷ区18号住居(2)	305	第353区	Ⅷ区52号住居と出土遺物	373
第288区	Ⅷ区18号住居の出土遺物(1)	306	第354区	Ⅷ区53号住居と出土遺物	374
第289区	Ⅷ区18号住居の出土遺物(2)	307	第355区	Ⅷ区54号住居(1)	375
第290区	Ⅷ区19号住居	308	第356区	Ⅷ区54号住居(2)	376
第291区	Ⅷ区19号住居と出土遺物	309	第357区	Ⅷ区54号住居の出土遺物	377
第292区	Ⅷ区20号住居と出土遺物	310	第358区	Ⅷ区55号住居	378
第293区	Ⅷ区21・22号住居(1)	311	第359区	Ⅷ区55号住居と出土遺物	379
第294区	Ⅷ区21・22号住居(2)	312	第360区	Ⅷ区55号住居の出土遺物	380
第295区	Ⅷ区21号住居	313	第361区	Ⅷ区56号住居	381
第296区	Ⅷ区21・22号住居の出土遺物	315	第362区	Ⅷ区56号住居の出土遺物	382
第297区	Ⅷ区22号住居と出土遺物	316	第363区	Ⅷ区57号住居	383
第298区	Ⅷ区22号住居の出土遺物	317	第364区	Ⅷ区57号住居と出土遺物	384
第299区	Ⅷ区23・24号住居	318	第365区	Ⅷ区57号住居の出土遺物(1)	385
第300区	Ⅷ区23号住居	319	第366区	Ⅷ区57号住居の出土遺物(2)	386
第301区	Ⅷ区23・24号住居の出土遺物	320	第367区	Ⅷ区59号住居と出土遺物	387
第302区	Ⅷ区25・90号住居	322	第368区	Ⅷ区60・97号住居(1)	388
第303区	Ⅷ区25号住居の出土遺物	323	第369区	Ⅷ区60・97号住居(2)	389
第304区	Ⅷ区27号住居	323	第370区	Ⅷ区60号住居と60・97号住居の出土遺物	390
第305区	Ⅷ区29・94・100号住居(1)	325	第371区	Ⅷ区62号住居と出土遺物	391
第306区	Ⅷ区29・94・100号住居(2)	326	第372区	Ⅷ区63・64号住居(1)	392
第307区	Ⅷ区94号住居と29号住居の出土遺物	327	第373区	Ⅷ区63・64号住居(2)	394
第308区	Ⅷ区94・100号住居の出土遺物	328	第374区	Ⅷ区64号住居と63号住居の出土遺物	395
第309区	Ⅷ区30・101号住居	329	第375区	Ⅷ区64号住居の出土遺物	396
第310区	Ⅷ区30・101号住居の出土遺物	330	第376区	Ⅷ区65号住居	397
第311区	Ⅷ区31号住居	331	第377区	Ⅷ区65号住居と出土遺物	398
第312区	Ⅷ区31号住居と出土遺物	332	第378区	Ⅷ区66号住居	400
第313区	Ⅷ区31号住居の出土遺物	333	第379区	Ⅷ区66号住居の出土遺物	401
第314区	Ⅷ区32号住居と出土遺物	334	第380区	Ⅷ区67号住居	402
第315区	Ⅷ区33・36号住居(1)	335	第381区	Ⅷ区67号住居の出土遺物	403
第316区	Ⅷ区33・36号住居(2)	336	第382区	Ⅷ区68号住居	403
第317区	Ⅷ区33・36号住居の出土遺物	337	第383区	Ⅷ区68号住居と出土遺物	404
第318区	Ⅷ区36号住居の出土遺物	338	第384区	Ⅷ区70号住居	405
第319区	Ⅷ区34号住居	339	第385区	Ⅷ区70号住居と出土遺物	406
第320区	Ⅷ区34号住居と出土遺物	340	第386区	Ⅷ区71・91号住居(1)	408
第321区	Ⅷ区35号住居と出土遺物	341	第387区	Ⅷ区71・91号住居(2)	409
第322区	Ⅷ区37号住居	342	第388区	Ⅷ区91号住居と71号住居の出土遺物	410
第323区	Ⅷ区37号住居と出土遺物	343	第389区	Ⅷ区71・91号住居の出土遺物	411
第324区	Ⅷ区37号住居の出土遺物	344	第390区	Ⅷ区72号住居	412

第391図	Ⅷ区72号住居と出土遺物	413
第392図	Ⅷ区73号住居	414
第393図	Ⅷ区73号住居の出土遺物	415
第394図	Ⅷ区74・102号住居(1)	416
第395図	Ⅷ区74・102号住居(2)	417
第396図	Ⅷ区74号住居	418
第397図	Ⅷ区102号住居	419
第398図	Ⅷ区74号住居の出土遺物	420
第399図	Ⅷ区102号住居の出土遺物	421
第400図	Ⅷ区103号住居	422
第401図	Ⅷ区103号住居の出土遺物	423
第402図	Ⅷ区75・111・115号住居	424
第403図	Ⅷ区75号住居	425
第404図	Ⅷ区75・111号住居の出土遺物	426
第405図	Ⅷ区76・110号住居	427
第406図	Ⅷ区76号住居と76・110号住居の出土遺物	428
第407図	Ⅷ区77・112号住居(1)	430
第408図	Ⅷ区77・112号住居(2)	431
第409図	Ⅷ区77号住居の出土遺物	432
第410図	Ⅷ区112号住居の出土遺物	433
第411図	Ⅷ区78号住居	433
第412図	Ⅷ区78号住居と出土遺物	434
第413図	Ⅷ区79号住居	435
第414図	Ⅷ区79号住居の出土遺物	436
第415図	Ⅷ区82・85号住居	437
第416図	Ⅷ区82・85号住居と82号住居の出土遺物	438
第417図	Ⅷ区85号住居の出土遺物	439
第418図	Ⅷ区84号住居と出土遺物	439
第419図	Ⅷ区86号住居(1)	440
第420図	Ⅷ区86号住居(2)	441
第421図	Ⅷ区86号住居(3)	442
第422図	Ⅷ区86号住居(4)	443
第423図	Ⅷ区86号住居の出土遺物(1)	444
第424図	Ⅷ区86号住居の出土遺物(2)	445
第425図	Ⅷ区87号住居(1)	446
第426図	Ⅷ区87号住居(2)	447
第427図	Ⅷ区87号住居と出土遺物	448
第428図	Ⅷ区89号住居	449
第429図	Ⅷ区89号住居と出土遺物	450
第430図	Ⅷ区95号住居	451
第431図	Ⅷ区95号住居と出土遺物	452
第432図	Ⅷ区96号住居	454
第433図	Ⅷ区96号住居と出土遺物	455
第434図	Ⅷ区98号住居	456
第435図	Ⅷ区98号住居と出土遺物	457
第436図	Ⅷ区98号住居の出土遺物	458
第437図	Ⅷ区104号住居	458
第438図	Ⅷ区104号住居と出土遺物	459
第439図	Ⅷ区105号住居	460
第440図	Ⅷ区105号住居と出土遺物	461
第441図	Ⅷ区106号住居	462
第442図	Ⅷ区106号住居と出土遺物	463
第443図	Ⅷ区116・117号住居	464
第444図	Ⅷ区116・117号住居の出土遺物	465
第445図	Ⅷ区119号住居と出土遺物	466
第446図	Ⅷ区1号住居	467
第447図	Ⅷ区2号住居	468
第448図	Ⅷ区2号住居と出土遺物	469
第449図	Ⅷ区3号住居(1)	470
第450図	Ⅷ区3号住居(2)	471
第451図	Ⅷ区3号住居の出土遺物	472
第452図	Ⅷ区4～7号住居	474
第453図	Ⅷ区4～7号住居と4号住居の出土遺物	475
第454図	Ⅷ区5～7号住居の出土遺物	476
第455図	Ⅷ区8号住居と出土遺物	477
第456図	Ⅷ区10号住居と出土遺物	478

第457図	Ⅷ区12・23号住居(1)	479
第458図	Ⅷ区12・23号住居(2)	480
第459図	Ⅷ区12・23号住居の出土遺物	481
第460図	Ⅷ区14号住居と出土遺物	482
第461図	Ⅷ区15号住居	482
第462図	Ⅷ区15号住居の出土遺物	483
第463図	Ⅷ区16号住居と出土遺物	484
第464図	Ⅷ区17号住居と出土遺物	485
第465図	Ⅷ区18号住居と出土遺物	486
第466図	Ⅷ区19号住居と出土遺物	487
第467図	Ⅷ区20号住居	488
第468図	Ⅷ区21・22号住居	489
第469図	Ⅷ区21号住居の出土遺物	489
第470図	Ⅷ区24号住居	490
第471図	Ⅷ区24号住居と出土遺物	491
第472図	Ⅷ区24号住居の出土遺物	492
第473図	Ⅷ区25号住居	492
第474図	Ⅷ区1・2号住居	493
第475図	Ⅷ区1号住居	494
第476図	Ⅷ区2号住居	495
第477図	Ⅷ区1・2号住居の出土遺物	496
第478図	Ⅷ区3号住居と出土遺物	497
第479図	Ⅷ区4・5号住居(1)	498
第480図	Ⅷ区4・5号住居(2)	499
第481図	Ⅷ区5号住居	500
第482図	Ⅷ区4・5号住居の出土遺物	501
第483図	Ⅷ区6・7・20号住居	502
第484図	Ⅷ区6号住居	503
第485図	Ⅷ区7・20号住居と6・7号住居の出土遺物	504
第486図	Ⅷ区6・20号住居	505
第487図	Ⅷ区8号住居	506
第488図	Ⅷ区9～11号住居	507
第489図	Ⅷ区9～11号住居と9号住居の出土遺物	508
第490図	Ⅷ区9号住居と出土遺物	509
第491図	Ⅷ区10号住居と出土遺物	510
第492図	Ⅷ区11号住居の出土遺物(1)	511
第493図	Ⅷ区11号住居の出土遺物(2)	512
第494図	Ⅷ区12号住居と出土遺物	513
第495図	Ⅷ区12号住居	514
第496図	Ⅷ区14号住居	514
第497図	Ⅷ区14号住居と出土遺物	515
第498図	Ⅷ区15号住居	516
第499図	Ⅷ区15号住居の出土遺物	517
第500図	Ⅷ区17号住居	518
第501図	Ⅷ区17号住居の出土遺物	519
第502図	Ⅷ区18・22号住居(1)	519
第503図	Ⅷ区18・22号住居(2)	520
第504図	Ⅷ区18・22号住居の出土遺物	521
第505図	Ⅷ区26号住居	522
第506図	Ⅷ区26号住居の出土遺物	523
第507図	Ⅷ区1号住居(1)	524
第508図	Ⅷ区1号住居(2)	525
第509図	Ⅷ区1号住居と出土遺物	526
第510図	Ⅷ区1号住居(3)	527
第511図	Ⅷ区1号住居の出土遺物	529
第512図	Ⅷ区2号住居	530
第513図	Ⅷ区2号住居の出土遺物	531
第514図	Ⅷ区3号住居(1)	532
第515図	Ⅷ区3号住居(2)	533
第516図	Ⅷ区3号住居の出土遺物	534
第517図	Ⅷ区11・12号住居	535
第518図	Ⅷ区11・12号住居の出土遺物	536
第519図	Ⅷ区4号住居と出土遺物	536
第520図	Ⅷ区4号住居	537
第521図	Ⅷ区5号住居	538
第522図	Ⅷ区5号住居と出土遺物	539

第523区	X区6号住居	539	第589区	X区1号独立建物	605
第524区	X区6号住居と出土遺物	540	第590区	Ⅹ区1号独立建物	606
第525区	X区7号住居と出土遺物	541	第591区	Ⅹ区2号独立建物	607
第526区	X区8・24号住居(1)	542	第592区	Ⅹ区3号独立建物	608
第527区	X区8・24号住居(2)	543	第593区	Ⅹ区4号独立建物	610
第528区	X区24号住居の出土遺物	544	第594区	V区1号整穴	611
第529区	X区9号住居と出土遺物	545	第595区	V区2・3号整穴	611
第530区	X区10・13号住居(1)	546	第596区	V区4・5号整穴と5号整穴の出土遺物	612
第531区	X区10・13号住居と10号住居の出土遺物	547	第597区	V区6号整穴と出土遺物	613
第532区	X区10・13号住居(2)	548	第598区	V区1・2号整穴	614
第533区	X区10・13号住居と13号住居の出土遺物	549	第599区	V区3号整穴と出土遺物	615
第534区	X区13号住居の出土遺物(1)	550	第600区	V区4～6号整穴	616
第535区	X区13号住居の出土遺物(2)	551	第601区	V区1～3号整穴と3号整穴の出土遺物	617
第536区	X区14号住居(1)	552	第602区	V区2面1号溝	618
第537区	X区14号住居(2)	553	第603区	V区2面6号溝	619
第538区	X区14号住居(3)	554	第604区	V区2面7・8号溝と出土遺物	621
第539区	X区14号住居と出土遺物	555	第605区	V区2面9・10号溝	622
第540区	X区14号住居の出土遺物	556	第606区	V区2面11号溝	623
第541区	X区15・17・26号住居(1)	557	第607区	V区2面12号溝と出土遺物	624
第542区	X区15・17・26号住居(2)	558	第608区	Ⅹ・Ⅶ区2面1号溝	625
第543区	X区15号住居と出土遺物	559	第609区	Ⅶ区2面1号溝の出土遺物	626
第544区	X区15・17・26号住居の出土遺物	560	第610区	Ⅶ区2面1号溝の出土遺物	626
第545区	X区16号住居と出土遺物	561	第611区	Ⅶ区2面2号溝と出土遺物	627
第546区	X区16号住居の出土遺物	562	第612区	Ⅶ区2面3～5号溝	628
第547区	X区18・22・23号住居(1)	563	第613区	Ⅶ区2面6号溝	629
第548区	X区18・22・23号住居(2)	564	第614区	Ⅶ区2面6号溝の出土遺物	630
第549区	X区23号住居と18号住居の出土遺物	565	第615区	Ⅶ区2面7・8号溝	631
第550区	X区22・23号住居の出土遺物	566	第616区	Ⅶ区2面9・10号溝	632
第551区	X区19・31号住居	567	第617区	Ⅶ区2面9号溝と出土遺物	633
第552区	X区19・31号住居と出土遺物	568	第618区	Ⅶ区2面9号溝の出土遺物	634
第553区	X区20号住居	569	第619区	Ⅶ区2面11・12号溝	634
第554区	X区21号住居の出土遺物	570	第620区	Ⅶ区2面13号溝と出土遺物	635
第555区	X区27号住居	571	第621区	Ⅶ区2面14・15号溝と14号溝の出土遺物	636
第556区	X区27号住居の出土遺物	572	第622区	Ⅶ区2面16・17号溝と17号溝の出土遺物	638
第557区	X区30号住居	572	第623区	Ⅶ区2面19号溝	639
第558区	Ⅹ区4号住居と出土遺物	573	第624区	Ⅶ区2面9・11号溝(1)	640
第559区	Ⅹ区1号住居と出土遺物	574	第625区	Ⅶ区2面9・11号溝(2)	641
第560区	Ⅹ区2号住居	575	第626区	Ⅶ区2面9号溝の出土遺物	641
第561区	Ⅹ区2号住居の出土遺物	576	第627区	Ⅶ区2面11号溝の出土遺物	641
第562区	Ⅹ区3号住居	576	第628区	Ⅶ区2面10・12号溝	642
第563区	Ⅹ区4・5号住居	578	第629区	Ⅶ区2面10号溝の出土遺物	643
第564区	Ⅹ区4号住居と出土遺物	579	第630区	Ⅶ区2面12号溝の出土遺物	643
第565区	Ⅹ区7・8号住居(1)	580	第631区	Ⅶ区2面2号溝	644
第566区	Ⅹ区7・8号住居(2)	581	第632区	Ⅶ区2面2号溝と出土遺物	645
第567区	Ⅹ区7・8号住居の出土遺物	582	第633区	Ⅶ区2面3・4号溝	646
第568区	Ⅹ区9号住居	583	第634区	Ⅶ区2面5～7号溝	647
第569区	Ⅹ区10号住居	584	第635区	Ⅶ区2面8号溝	648
第570区	Ⅹ区10号住居と出土遺物	586	第636区	X区2面6号溝と出土遺物	649
第571区	Ⅹ区11号住居	587	第637区	X区2面6号溝の出土遺物	650
第572区	Ⅹ区11号住居と出土遺物	588	第638区	X区2面7・8号溝	650
第573区	Ⅹ区12号住居	589	第639区	X区2面10・11号溝	651
第574区	Ⅹ区12号住居と出土遺物	590	第640区	X区2面10・11号溝の出土遺物	652
第575区	Ⅹ区14・15号住居	591	第641区	V区1～4・6～8・10号土坑と3号土坑の出土遺物	654
第576区	Ⅹ区14号住居と14・15号住居の出土遺物	592	第642区	V区5・11～13・25・26・28号土坑と5号土坑の出土遺物	656
第577区	Ⅹ区16号住居	594	第643区	V区14～16号土坑と16号土坑の出土遺物	658
第578区	Ⅹ区16号住居と出土遺物	595	第644区	V区17～24号土坑	659
第579区	Ⅹ区17号住居	596	第645区	V区27・29・31号土坑と29号土坑の出土遺物	661
第580区	Ⅹ区18・19号住居(1)	597	第646区	V区33～37・39・41・43号土坑と34・43号土坑の出土遺物	663
第581区	Ⅹ区18・19号住居(2)	598	第647区	V区44・46～51・54・58・87号土坑	665
第582区	Ⅹ区18・19号住居(3)	599	第648区	V区52・55・56・59～65号土坑	667
第583区	Ⅹ区18・19号住居の出土遺物	600	第649区	V区66～74号土坑	669
第584区	Ⅹ区20・21号住居	601	第650区	V区75～84号土坑と79号土坑の出土遺物	671
第585区	Ⅹ区20号住居と出土遺物	602	第651区	V区85・86・88・89・94・96・98・99号土坑と94号土坑の出土遺物	673
第586区	Ⅹ区21号住居と出土遺物	603			
第587区	Ⅹ区22号住居	604			
第588区	V区1号独立建物	605			

第652区	V区100-104・106号土坑と104号土坑の出土遺物	675	第710区	X区38-47・84号土坑	788
第653区	V区107・109-116号土坑	677	第711区	X区48-51・53-58号土坑と53号土坑の出土遺物	790
第654区	VI区1-11号土坑	679	第712区	X区59-66・69号土坑と60号土坑の出土遺物	792
第655区	VI区13-20号土坑と16・18号土坑の出土遺物	681	第713区	X区67・68・70-74・85号土坑	794
第656区	VI区21・25-32号土坑と25号土坑の出土遺物	683	第714区	X区75-83号土坑と76号土坑の出土遺物	796
第657区	VI区34-37・39・40号土坑	685	第715区	VI区27号住居(1)	799
第658区	VI区41・42・45-49号土坑	687	第716区	VI区27号住居(2)	800
第659区	VI区19-26・70号土坑と20・26・70号土坑の出土遺物	689	第717区	VI区1号竈治	800
第660区	VI区27-33・90号土坑と27・28・32号土坑の出土遺物	691	第718区	VI区1号竈治の出土遺物(1)	801
第661区	VI区34-41号土坑と39-41号土坑の出土遺物	693	第719区	VI区1号竈治の出土遺物(2)	802
第662区	VI区42-50号土坑と49号土坑の出土遺物	695	第720区	VI区1号竈治の出土遺物(3)	803
第663区	VI区51-55号土坑と51・55号土坑の出土遺物	697	第721区	VI区1号竈治の出土遺物(4)	804
第664区	VI区56-61・71号土坑と56・58号土坑の出土遺物	699	第722区	VI区1号竈治の出土遺物(5)	805
第665区	VI区62-65・97号土坑と63・65号土坑の出土遺物	701	第723区	VI区1号竈治の出土遺物(6)	806
第666区	VI区66-69・72号土坑と67-69号土坑の出土遺物	703	第724区	VI区1号竈治構成図	807
第667区	VI区73-76号土坑と74・75号土坑の出土遺物	704	第725区	VI区1号竈治(1)	808
第668区	VI区77-83・88号土坑と81号土坑の出土遺物	706	第726区	VI区1号竈治(2)	809
第669区	VI区84-87・89・91-93号土坑と 84・89・92号土坑の出土遺物	708	第727区	VI区1号竈治の出土遺物(1)	810
第670区	VI区94-96・98-101・118号土坑	710	第728区	VI区1号竈治の出土遺物(2)	811
第671区	VI区102-110号土坑と104号土坑の出土遺物	712	第729区	VI区1号竈治の出土遺物(3)	812
第672区	VI区111・112・114-117・119・120号土坑	714	第730区	VI区1号竈治の出土遺物(4)	813
第673区	VI区121-123・126-132・195-197号土坑	716	第731区	VI区1号竈治構成図	814
第674区	VI区133-135・137-139・141・158・163号土坑と 134・141・163号土坑の出土遺物	719	第732区	X区1号竈治と出土遺物	816
第675区	VI区142-146・148・150・153-155号土坑と 142・155号土坑の出土遺物	721	第733区	X区1号竈治の出土遺物	817
第676区	VI区156・157・159・162・164-167・169号土坑と 162・169号土坑の出土遺物	723	第734区	X区1号竈治構成図	818
第677区	VI区170-178号土坑と170・175号土坑の出土遺物	725	第735区	VI区1-4号集石	820
第678区	VI区179-188号土坑	727	第736区	VI区1-4号集石	822
第679区	VI区189-194・198-204号土坑と 189・203・204号土坑の出土遺物	729	第737区	X区1号集石と出土遺物	823
第680区	VI区205-213号土坑と 206・208・210・213号土坑の出土遺物	731	第738区	VI区1号墓坑・VII区1号墓坑・X区55号土坑・X区52号土坑 と VI区1号墓坑・X区55号土坑の出土遺物	824
第681区	VI区2・3・5-9号土坑と3・9号土坑の出土遺物	733	第739区	VI区1-3号耕作痕	826
第682区	VI区10-16・19号土坑	735	第740区	VI区1号品	826
第683区	VI区17・18・20-23号土坑と 18・22・23号土坑の出土遺物	737	第741区	V区道構外の出土遺物(1)	828
第684区	VI区24-26・28-32号土坑	741	第742区	V区道構外の出土遺物(2)	829
第685区	VI区33・35・37-40号土坑と33・35号土坑の出土遺物	741	第743区	VI区道構外の出土遺物(1)	830
第686区	VI区41-47・51・53・55号土坑	743	第744区	VI区道構外の出土遺物(2)	831
第687区	VI区48・50・52・54・57・58号土坑と 57号土坑の出土遺物	745	第745区	VI区道構外の出土遺物(1)	831
第688区	VI区56・59-64号土坑	747	第746区	VI区道構外の出土遺物(2)	832
第689区	VI区66-73号土坑	748	第747区	VI区道構外の出土遺物(3)	833
第690区	IX区1-8号土坑と2号土坑の出土遺物	750	第748区	VI区道構外の出土遺物(4)	834
第691区	IX区9-14・16・17号土坑と12号土坑の出土遺物	752	第749区	VI区道構外の出土遺物(1)	834
第692区	IX区18-24・53号土坑と20号土坑の出土遺物	754	第750区	VI区道構外の出土遺物(2)	835
第693区	IX区25-30・32号土坑と25・28号土坑の出土遺物	756	第751区	IX区道構外の出土遺物	835
第694区	IX区31・33-38号土坑と31・34・38号土坑の出土遺物	758	第752区	IX区道構外の出土遺物	836
第695区	IX区39-42・44・48・49号土坑と42号土坑の出土遺物	760	第753区	IX区道構外の出土遺物	836
第696区	IX区43・45号土坑	761	第754区	2号道構外の出土遺物	836
第697区	IX区43・45号土坑の出土遺物	762	第755区	A地点西壁の土層柱状図	838
第698区	IX区46・47・50-52号土坑と46・50号土坑の出土遺物	764	第756区	A地点西壁南部の土層柱状図	839
第699区	IX区1-5・7-9・33・34号土坑	766	第757区	A地点北壁の土層柱状図	839
第700区	IX区10-20号土坑と10号土坑の出土遺物	768	第758区	B地点の土層柱状図	840
第701区	IX区21-30号土坑と27号土坑の出土遺物	770	第759区	C地点の土層柱状図	842
第702区	X区31・32・35-39・41号土坑	772	第760区	VI区1号竈坑白濁測定	851
第703区	X区42-45・47-50号土坑と50号土坑の出土遺物	774	第761区	4世紀の住居分布	877
第704区	X区51-54・56-60号土坑	776	第762区	7世紀の住居分布	877
第705区	X区61-69号土坑	778	第763区	8世紀の住居分布	878
第706区	X区1-8・10・17号土坑と8号土坑の出土遺物	780	第764区	9世紀の住居分布	878
第707区	X区9・11-16・18・19・24号土坑	782	第765区	10世紀の住居分布	879
第708区	X区20-23・25-28・36号土坑	784	第766区	11世紀の住居分布	879
第709区	X区29-31・34・35・37号土坑と 35・37号土坑の出土遺物	786	第767区	7世紀前半の住居分布	881
			第768区	7世紀後半の住居分布	881
			第769区	8世紀前半の住居分布	882
			第770区	8世紀後半の住居分布	882
			第771区	9世紀前半の住居分布	883
			第772区	9世紀後半の住居分布	883
			第773区	10世紀前半の住居分布	884
			第774区	10世紀後半の住居分布	884
			第775区	11世紀前半の住居分布	885

第776図	11世紀後半の住居分布	885
第777図	田口下田尻遺跡出土緑釉陶器集成(1)	887
第778図	田口下田尻遺跡出土緑釉陶器集成(2)	888

第779図	田口下田尻遺跡出土緑釉陶器集成(3)	889
第780図	田口上田尻・下田尻遺跡緑釉陶器出土位置図	891

表 目 次

第1表	上武道路の調査遺跡	4
第2表	上武道路8工区調査遺跡一覧表	5
第3表	田口下田尻遺跡周辺遺跡一覧表	18
第4表	X区1号住居カマドの碑一覽	528
第5表	テフラ検出分析結果	839
第6表	テフラ検出分析結果	843
第7表	火山ガラスの分析結果	844
第8表	重鉱物組成分析結果	844
第9表	屈折率測定結果	844

第10表	樹種同定結果	847
第11表	遺構別の樹種構成	847
第12表	試料の履歴と調査項目	863
第13表	試料の組成	864
第14表	出土遺物の調査結果	865
第15表	施釉陶器出土についての比較	892
第16表	遺構の対照	895
第17表	田口下田尻遺跡 未掲載遺物一覧	896

本文中写真目次

写真1	V区3号住居調査風景	12
写真2	X区1号住居調査風景	13
図版1	田口下田尻遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)	848
図版2	田口下田尻遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(2)	849
Photo.1		866
Photo.2		867
Photo.3		868

Photo.4		869
Photo.5		870
Photo.6		871
Photo.7		872
Photo.8		873
Photo.9		874

写真目次

Pl.1	V区1面全景 南上空より
Pl.2	V区1面全景 西上空より V・V区1面全景 北上空より
Pl.3	V区2面全景 南上空より V・V区2面全景 西上空より
Pl.4	V区2面全景 東上空より V区2面全景 北上空より
Pl.5	V区2面全景 南上空より V・V区2面全景 南西上空より
Pl.6	V区2面西側全景 西上空より V・V区2面全景 南西上空より
Pl.7	X区2面全景 北上空より X区調査区2面全景 北より X区調査区2面東端部全景 南より
Pl.8	X区2面全景 北上空より X区2面北側全景 北上空より
Pl.9	V区1号復旧痕A-A'断面 西より V区2号復旧痕北西部全景・A-A'断面 南東より V区2号復旧痕北西部全景・A-A'断面 南東より V区2号復旧痕北西部全景・A-A'断面 南東より V区2号復旧痕北西部全景・A-A'断面 南東より
Pl.10	V区2号復旧痕北西部全景・A-A'断面 東より V区2号復旧痕北西部全景・A-A'断面 東より V区2号復旧痕北西部全景・A-A'断面 東より V区2号復旧痕北西部全景・A-A'断面 東より V区2号復旧痕北西部全景・A-A'断面 東より V区2号復旧痕北西部全景・A-A'断面 東より V区2号復旧痕北西部全景・A-A'断面 東より V区2号復旧痕北西部全景・A-A'断面 東より V区2号復旧痕北西部全景・A-A'断面 東より
Pl.11	V区3号復旧痕A-A'断面 西より V区3号復旧痕A-A'断面 西より V区3号復旧痕B-B'断面 南より

V区3号復旧痕B-B'断面 南より	
V区3号復旧痕B-B'断面 南より	
Pl.12	V区3号復旧痕A-A'断面 西より V区1号復旧痕A-A'断面 東より
Pl.13	V区2号復旧痕A-A'断面 東より V区3号復旧痕A-A'断面 東より
Pl.14	X区1号復旧痕全景 南東より X区1・2号復旧痕全景 南東より X区1号復旧痕全景 南西より X区2号復旧痕全景 南西より X区1・2号復旧痕全景 南東より
Pl.15	V区2号溝全景 南上空より V区2号溝A-A'断面 南より X区1号配石全景 南より X区1・2号配石全景 南西より
Pl.16	V区1号住居全景 西より V区1号住居カマドB-B'断面 南より V区1号住居カマドB-B'断面 南より V区1号住居カマド掘方全景 西より V区1号住居掘方全景 西より
Pl.17	V区2号住居全景 西より V区2号住居カマド遺物出土状態 西より V区2号住居カマドD-D'断面 南より V区2号住居カマド掘方全景 西より V区2号住居遺物出土状態 西より
Pl.18	V区2号住居土坑1・2全景 南より V区2号住居遺物出土状態 西より V区2号住居土坑3全景 南より V区2号住居出土遺物 西より V区2号住居掘方全景 西より
Pl.19	V区3号住居全景 西より V区3号住居カマドD-D'断面 南より

	V区3号住居P1全景 西より	V区16号住居貯蔵穴全景 西より
	V区3号住居カマド掘方全景 西より	V区16号住居遺物出土状態全景 西より
	V区3号住居P2全景 西より	V区16号住居貯蔵穴C-C'断面 西より
PL-20	V区3号住居掘方全景 西より	V区16号住居掘方全景 西より
	V区4号住居遺物出土状態全景 西より	PL-34 V区17号住居全景 西より
	V区4号住居カマド全景 西より	V区17号住居掘方全景 西より
	V区4+5号住居A-A'断面 南より	PL-35 V区18号住居全景 西より
	V区4号住居掘方全景 西より	V区18号住居カマドC-C'断面 南より
PL-21	V区5号住居炭化物・遺物出土状態全景 北西より	V区18号住居土坑1全景 西より
	V区5号住居カマド全景 西より	V区18号住居カマド掘方全景 西より
	V区5号住居炭化物・遺物出土状態 北西より	V区18号住居掘方全景 西より
	V区5号住居出土遺物 北西より	PL-36 V区19号住居全景 南より
	V区5号住居掘方全景 西より	V区19号住居土坑1全景 南より
PL-22	V区6号住居全景 南西より	V区19号住居掘方断面 南より
	V区6号住居カマド全景 西より	V区19号住居P1E-E'断面 南より
	V区6号住居カマド遺物崩落状況 西より	V区19号住居P2F-F'断面 南より
	V区6号住居カマド掘方全景 西より	PL-37 V区20号住居全景 西より
	V区6号住居掘方全景 西より	V区20号住居遺物出土状態全景 西より
PL-23	V区6号住居土坑1全景 西より	V区20号住居掘方全景 西より
	V区6号住居出土遺物 南西より	V区20号住居出土遺物 西より
	V区6号住居P1全景 西より	V区20号住居カマド全景 西より
	V区6号住居出土遺物 西より	PL-38 V区22号住居全景 西より
	V区7号住居全景 西より	V区22号住居カマド全景 西より
PL-24	V区7号住居貯蔵穴全景 南東より	V区22号住居カマドB-B'断面 南より
	V区7号住居出土遺物 西より	V区22号住居カマド掘方B-B'断面 南西より
	V区7号住居土坑1全景 西より	V区22号住居掘方全景 西より
	V区7号住居遺物出土状態全景 南西より	PL-39 V区23号住居全景 西より
	V区7号住居掘方全景 西より	V区23号住居カマド遺物出土状態 西より
PL-25	V区8号住居全景 西より	V区23号住居遺物出土状態全景 西より
	V区8号住居掘方全景 西より	V区23号住居出土遺物 西より
PL-26	V区9号住居全景 西より	V区23号住居掘方全景 西より
	V区9号住居カマド全景 西より	PL-40 V区24号住居遺物出土状態全景 西より
	V区9号住居遺物出土状態全景 西より	V区24号住居カマド全景 西より
	V区9号住居カマド掘方E-E'断面 南西より	V区24号住居カマド遺物出土状態 西より
	V区9号住居掘方全景 西より	V区24号住居カマド掘方全景 西より
PL-27	V区10号住居全景 西より	V区24号住居掘方全景 西より
	V区10号住居カマド全景 西より	PL-41 V区26号住居カマド全景 西より
	V区10号住居貯蔵穴遺物出土状態 西より	V区27号住居遺物出土状態全景 西より
	V区10号住居貯蔵穴全景 西より	PL-42 V区27号住居カマド全景 西より
	V区10号住居掘方全景 西より	区27号住居カマドE-E'断面 南西より
PL-28	V区11号住居遺物出土状態全景 西より	V区27号住居カマド掘方全景 西より
	V区11号住居カマド全景 西より	V区27号住居掘方全景 西より
	V区11号住居カマド遺物出土状態 西より	V区28号住居全景 西より
	V区11号住居カマドB-B'断面 南より	PL-43 V区28号住居カマド全景 北西より
	V区11号住居掘方全景 西より	V区28号住居遺物出土状態全景 西より
PL-29	V区12号住居全景 西より	V区28号住居カマド遺物出土状態 北西より
	V区12号住居カマドF-F'断面 南より	V区28号住居掘方全景 西より
	V区12号住居出土遺物 西より	V区29号住居全景 西より
	V区12号住居カマド掘方F-F'断面 南より	PL-44 V区29号住居遺物出土状態全景 西より
	V区12号住居掘方全景 西より	V区29号住居カマド全景 西より
PL-30	V区13号住居全景 西より	V区29号住居カマド遺物出土状態 西より
	V区13号住居カマド全景 西より	V区29号住居カマドH-H'断面 南より
	V区13号住居カマドC-C'断面 南より	V区29号住居掘方全景 西より
	V区13号住居貯蔵穴全景 西より	PL-45 V区30号住居全景 西より
	V区13号住居掘方全景 西より	V区30号住居カマド全景 西より
PL-31	V区14号住居全景 西より	V区30号住居遺物出土状態全景 西より
	V区14号住居カマド全景 西より	V区30号住居カマド掘方全景 西より
	V区14号住居出土遺物 西より	V区30号住居掘方全景 西より
	V区14号住居カマドD-D'断面 南より	PL-46 V区31号住居遺物出土状態全景 西より
	V区14号住居遺物出土状態全景 西より	V区31号住居カマド遺物出土状態 西より
PL-32	V区15号住居全景 西より	V区31号住居出土遺物 西より
	V区15号住居貯蔵穴全景 西より	V区31号住居カマド掘方全景 西より
	V区15号住居土坑1D-D'断面 西より	V区31号住居掘方全景 西より
	V区15号住居土坑2全景 西より	PL-47 V区32号住居全景 西より
	V区15号住居掘方全景 西より	V区32号住居カマド全景 西より
PL-33	V区16号住居全景 西より	V区32号住居遺物出土状態全景 西より

	V区32号住居貯蔵穴遺物出土状態 西より	V区48号住居遺物出土状態全景 北西より	
	V区32号住居掘方全景 西より	V区48号住居掘方全景 北西より	
PL-48	V区33号住居遺物出土状態全景 南より	PL-63	V区49号住居全景 西より
	V区33号住居カマド遺物出土状態 西より		V区49号住居掘方全景 北西より
	V区33号住居カマドA'ーA'断面 南より	PL-64	V区53号住居遺物出土状態全景 西より
	V区33号住居出土遺物 西より		V区53号住居出土遺物 北より
	V区33号住居掘方全景 北より		V区53号住居出土遺物 北より
PL-49	V区34号住居全景 西より		V区53号住居掘方全景 西より
	V区34号住居カマド全景 西より	PL-65	V区56号住居全景 西より
	V区34号住居カマド出土遺物 西より		V区56号住居カマド遺物出土状態 西より
	V区34号住居カマド遺物出土状態 西より		V区56号住居カマド遺物出土状態 西より
	V区34号住居掘方全景 南西より		V区56号住居カマド掘方全景 西より
PL-50	V区35号住居全景 西より		V区56号住居遺物出土状態全景 西より
	V区35号住居カマド2全景 西より	PL-66	V区58号住居全景 西より
	V区35号住居遺物出土状態全景 西より		V区58号住居掘方全景 西より
	V区35号住居カマド1全景 西より	PL-67	V区59号住居全景 西より
	V区35号住居掘方全景 西より		V区59号住居カマド全景 西より
PL-51	V区36号住居遺物出土状態全景 西より	PL-68	V区61号住居全景 西より
	V区36号住居掘方・35号土坑全景 西より		V区61号住居遺物出土状態全景 西より
PL-52	V区37号住居遺物出土状態全景 西より	PL-69	V区61号住居全景 西より
	V区37号住居カマド遺物出土状態 西より		V区61号住居カマド遺物出土状態 西より
	V区37号住居掘方全景 西より		V区61号住居遺物出土状態全景 西より
	V区38号住居遺物出土状態 西より		V区61号住居カマド掘方全景 西より
	V区38号住居出土遺物 西より	PL-70	V区61号住居掘方全景 西より
PL-53	V区38号住居遺物出土状態全景 西より		V区70号住居遺物出土状態全景 西より
	V区38号住居掘方全景 西より		V区70号住居遺物出土状態 西より
PL-54	V区39号住居遺物出土状態全景 西より		V区70号住居カマド全景 西より
	V区39号住居カマド遺物出土状態 西より		V区70号住居カマド遺物出土状態 西より
	V区39号住居カマドBーB'断面 南より	PL-71	V区70号住居カマド掘方KーK'断面 南より
	V区40号住居カマド2カマド掘方全景 北西より		V区70号住居全景 西より
	V区40号住居カマド1掘方全景 西より	PL-72	V区70号住居掘方全景 西より
PL-55	V区40号住居全景 西より		V区63号住居全景 西より
	V区40号住居カマド2遺物出土状態 北西より		V区63号住居カマド遺物出土状態 西より
	V区40号住居遺物出土状態全景 西より		V区63号住居遺物出土状態全景 西より
	V区40号住居掘方全景 西より	PL-73	V区63号住居カマド掘方全景 西より
PL-56	V区41号住居遺物出土状態全景 西より		V区64号住居カマド掘方全景 西より
	V区41号住居カマド遺物出土状態 西より		V区64号住居カマドEーE'断面 南より
	V区41号住居出土遺物 西より		V区64号住居出土遺物 西より
	V区41号住居カマドBーB'断面 南より	PL-74	V区64号住居カマド遺物出土状態 西より
	V区41号住居掘方全景 西より		V区64号住居掘方全景 西より
PL-57	V区42号住居遺物出土状態全景 北西より		V区65号住居全景 西より
	V区42号住居カマド掘方全景 西より		V区65号住居カマド全景 西より
	V区42号住居出土遺物 西より		V区65号住居遺物出土状態全景 西より
	V区42号住居貯蔵穴全景 西より		V区65号住居カマド遺物出土状態 西より
	V区42号住居掘方全景 西より	PL-75	V区65号住居掘方全景 西より
PL-58	V区43号住居全景 西より		V区66号住居全景 西より
	V区43号住居カマド遺物出土状態 西より		V区66号住居カマド掘方全景 西より
	V区43号住居遺物出土状態全景 西より		V区66号住居出土遺物 西より
	V区43号住居カマド出土遺物 西より		V区66号住居カマドEーE'断面 南より
	V区43号住居掘方全景 西より		V区66号住居遺物出土状態全景 西より
PL-59	V区44号住居遺物出土状態全景 西より	PL-76	V区67号住居全景 西より
	V区45号住居カマド全景 南西より		V区67号住居カマド掘方全景 西より
	V区45号住居出土遺物 西より		V区67号住居遺物出土状態全景 西より
	V区45号住居カマド2掘方全景 西より	PL-77	V区68号住居全景 西より
	V区45号住居遺物出土状態全景 西より		V区69号住居全景 北西より
PL-60	V区46号住居全景 西より	PL-78	V区71号住居全景 西より
	V区46号住居カマド掘方BーB'断面 南より		V区71号住居カマド掘方全景 西より
	V区46号住居遺物出土状態全景 西より		V区71号住居遺物出土状態全景 西より
	V区46号住居掘方全景 西より		V区71号住居カマド遺物出土状態 西より
PL-61	V区47号住居掘方全景 西より		V区71号住居掘方全景 西より
	V区48号住居全景 北西より	PL-79	V区72号住居全景 西より
PL-62	V区48号住居カマド掘方全景 北西より		V区72号住居カマド掘方全景 西より
	V区48号住居土坑2遺物出土状態 南より		
	V区48号住居カマド掘方全景 北西より		

	V区72号住居カマド遺物出土状態 西より		MI区16号住居方全景 西より
	V区72号住居カマド掘方全景 西より	PL-96	MI区17号住居全景 西より
	V区72号住居掘方全景 西より		MI区17号住居カマド全景 西より
PL-80	V区73号住居全景 西より		MI区17号住居遺物出土状態全景 西より
	V区73号住居掘方全景 西より		MI区17号住居カマド遺物出土状態 西より
PL-81	V区74号住居遺物出土状態全景 北西より		MI区17号住居方全景 西より
	V区76号住居遺物出土状態全景 北より	PL-97	MI区18号住居遺物出土状態全景 西より
PL-82	MI区1・10号住居全景 西より		MI区18号住居掘方全景 西より
	MI区1号住居カマド全景 西より	PL-98	MI区19号住居全景 西より
	MI区1号住居カマド掘方D-D'断面 南より		MI区19号住居カマド掘方全景 西より
	MI区1号住居掘方全景 西より		MI区19号住居遺物出土状態全景 西より
PL-83	MI区2号住居全景 西より	PL-99	MI区19号住居掘方全景 西より
	MI区2号住居カマド全景 西より		MI区20号住居全景 西より
	MI区2号住居遺物出土状態全景 西より		MI区20号住居カマド掘方全景 南より
	MI区2号住居カマドC-C'断面 南より		MI区20号住居遺物出土状態全景 西より
	MI区2号住居掘方全景 西より		MI区20号住居・51号土坑遺物出土状態 西より
PL-84	MI区4号住居全景 西より		MI区20号住居掘方遺物出土状態全景 西より
	MI区4号住居カマド全景 西より	PL-100	MI区21号住居遺物出土状態全景 西より
	MI区4号住居遺物出土状態全景 西より		MI区21号住居掘方全景 西より
	MI区4号住居カマド掘方全景 西より	PL-101	MI区22号住居全景 西より
	MI区4号住居掘方全景 北西より		MI区22号住居カマド遺物出土状態 南西より
PL-85	MI区5号住居全景 西より		MI区22号住居遺物出土状態全景 西より
	MI区5号住居カマド全景 西より		MI区22号住居カマド掘方D-D'断面 南西より
	MI区5号住居遺物出土状態全景 西より		MI区22号住居掘方全景 西より
	MI区5号住居カマド掘方B-B'断面 南より	PL-102	MI区23号住居遺物出土状態全景 西より
	MI区5号住居掘方全景 西より		MI区24号住居全景 西より
PL-86	MI区6号住居全景 西より	PL-103	MI区24号住居遺物出土状態全景 西より
	MI区6号住居カマドE-E'断面 南より		MI区24号住居掘方全景 西より
	MI区6号住居遺物出土状態 北西より	PL-104	MI区25号住居全景 南より
	MI区6号住居カマド掘方E-E'断面 南西より		MI区25号住居掘方全景 西より
	MI区6号住居遺物出土状態全景 西より	PL-105	MI区26号住居全景 西より
PL-87	MI区7・8号住居遺物出土状態全景 西より		MI区26号住居遺物出土状態全景 西より
	MI区7号住居カマド断面 南より		MI区26・MI区89号住居掘方全景 東より
	MI区7号住居・13号溝掘方遺物出土状態 西より		MI区26号住居掘方全景 西より
	MI区7号住居・13号溝掘方遺物出土状態 西より		MI区26号住居B-B'断面 東より
	MI区7号住居・13号溝掘方遺物出土状態全景 西より	PL-106	MI区27号住居掘方全景 西より
PL-88	MI区8号住居全景 西より		MI区28号住居全景 西より
	MI区8号住居カマドG-G'断面 北西より	PL-107	MI区28号住居掘方全景 西より
	MI区8号住居遺物出土状態全景 西より		MI区29号住居全景 南より
	MI区8号住居カマド掘方G-G'断面 西より	PL-108	MI区29号住居カマド全景 南より
	MI区8号住居掘方全景 西より		MI区29号住居遺物出土状態全景 西より
PL-89	MI区9号住居全景 西より		MI区29号住居カマドD-D'断面 南西より
	MI区9号住居カマドB-B'断面 南より		MI区29号住居掘方全景 西より
	MI区9号住居遺物出土状態全景 西より		MI区30号住居全景 西より
	MI区9号住居カマド掘方B-B'断面 南より	PL-109	MI区30号住居カマド全景 西より
	MI区9号住居掘方全景 西より		MI区30号住居カマド掘方全景 西より
PL-90	MI区1・10号住居全景 西より		MI区30号住居掘方全景 西より
	MI区1・10号住居遺物出土状態全景 西より		MI区31・33号住居全景 西より
	MI区1・10号住居遺物出土状態 南西より	PL-110	MI区31号住居カマドH-H'断面 南より
	MI区10号住居掘方遺物出土状態 西より		MI区31・33号住居遺物出土状態全景 西より
	MI区1・10号住居掘方遺物出土状態全景 西より		MI区31号住居カマド掘方H-H'断面 南西より
PL-91	MI区11号住居遺物出土状態全景 西より		MI区31・33号住居掘方全景 西より
	MI区11号住居掘方全景 西より		MI区32号住居全景 西より
PL-92	MI区11号住居B-B'断面 東より		MI区32号住居カマド掘方D-D'断面 西より
	MI区14号住居全景 西より	PL-111	MI区32号住居遺物出土状態全景 西より
PL-93	MI区14号住居遺物出土状態全景 西より		MI区32号住居カマドC-C'断面 南西より
	MI区14号住居掘方全景 西より		MI区32号住居掘方全景 西より
PL-94	MI区15号住居全景 北より		MI区34号住居遺物出土状態全景 西より
	MI区15号住居遺物出土状態全景 北西より	PL-112	MI区37・38号住居全景 西より
	MI区15号住居遺物出土状態全景 北より		MI区37号住居カマド1掘方F-F'断面 南西より
	MI区15号住居遺物出土状態 北西より		MI区38号住居C-G'断面 南より
	MI区15号住居掘方全景 北より		MI区37号住居カマド2掘方E-E'断面 南より
PL-95	MI区16号住居全景 西より		MI区37・38号住居掘方全景 東より
	MI区16号住居カマド全景 西より	PL-113	MI区39・40号住居全景 西より
	MI区16号住居遺物出土状態全景 西より		MI区39号住居カマドB-B'断面 南西より
	MI区16号住居カマドD-D'断面 南西より		

	Ⅷ区40号住居遺物出土状態	西より	Ⅷ区3号住居カマド付近全景	南西より	
	Ⅷ区39号住居カマド掘方B-B'断面	南西より	Ⅷ区3号住居カマドB-B'断面	南西より	
	Ⅷ区39・40号住居掘方全景	西より	Ⅷ区3号住居掘方全景	西より	
PL-114	Ⅷ区41・42号住居全景	西より	PL-135	Ⅷ区4号住居全景	西より
	Ⅷ区41号住居カマドB-B'断面	南より	Ⅷ区4号住居カマド2全景	西より	
	Ⅷ区41・42号住居遺物出土状態	北西より	Ⅷ区4号住居カマド1全景	西より	
	Ⅷ区41号住居カマド掘方B-B'断面	南より	Ⅷ区4号住居カマド2掘方B-B'断面	南西より	
	Ⅷ区41号住居掘方全景	西より	Ⅷ区4号住居カマド1掘方全景	西より	
PL-115	Ⅷ区41・42号住居遺物出土状況全景	西より	PL-136	Ⅷ区4号住居掘方全景	北西より
	Ⅷ区42号住居カマドD-D'断面	南より	Ⅷ区5号住居全景	西より	
	Ⅷ区42号住居カマド遺物出土状態	北西より	PL-137	Ⅷ区5号住居カマド全景	西より
	Ⅷ区42号住居カマド掘方D-D'断面	南西より	Ⅷ区5号住居カマドG-C'断面	南西より	
	Ⅷ区41・42号住居A-A'断面	南より	Ⅷ区5号住居カマド掘方H-H'断面	西より	
PL-116	Ⅷ区43号住居遺物出土状態全景	西より	Ⅷ区5号住居掘方全景	西より	
	Ⅷ区43号住居掘方全景	南より	Ⅷ区6号住居全景	西より	
PL-117	Ⅷ区44号住居遺物出土状態全景	西より	PL-138	Ⅷ区6号住居カマド全景	西より
	Ⅷ区44号住居掘方全景	西より	Ⅷ区6号住居カマド掘方C-C'断面	南西より	
PL-118	Ⅷ区45号住居全景	西より	Ⅷ区6号住居カマド掘方C-C'断面	南西より	
	Ⅷ区45号住居掘方全景	西より	Ⅷ区6号住居貯蔵穴遺物出土状態	西より	
PL-119	Ⅷ区46号住居全景	西より	Ⅷ区7号住居全景	西より	
	Ⅷ区46号住居カマドC-C'断面	南西より	PL-139	Ⅷ区7号住居カマド全景	西より
	Ⅷ区46号住居遺物出土状態全景	西より	Ⅷ区7号住居カマドE-E'断面	南西より	
	Ⅷ区46号住居カマド掘方C-C'断面	南西より	Ⅷ区7号住居カマドF-F'断面	北西より	
	Ⅷ区46号住居掘方全景	西より	Ⅷ区7号住居掘方全景	西より	
PL-120	Ⅷ区47号住居全景	西より	PL-140	Ⅷ区8号住居全景	西より
	Ⅷ区47号住居掘方全景	西より	Ⅷ区8号住居カマド全景	西より	
PL-121	Ⅷ区48号住居全景	西より	Ⅷ区8号住居カマド掘方全景	西より	
	Ⅷ区48号住居カマドC-C'断面	南西より	Ⅷ区8号住居掘方全景	西より	
	Ⅷ区48号住居遺物出土状態全景	西より	Ⅷ区9号住居全景	西より	
	Ⅷ区48号住居カマド掘方全景	南西より	PL-141	Ⅷ区10号住居遺物出土状態全景	北西より
	Ⅷ区48号住居掘方全景	西より	Ⅷ区10号住居カマド全景	北西より	
PL-122	Ⅷ区49号住居遺物出土状態全景	西より	Ⅷ区10号住居貯蔵穴全景	西より	
	Ⅷ区49号住居掘方全景	西より	Ⅷ区10号住居カマド掘方全景	西より	
PL-123	Ⅷ区51号住居遺物出土状態全景	西より	PL-142	Ⅷ区10号住居掘方全景	西より
	Ⅷ区51号住居掘方全景	西より	Ⅷ区12号住居全景	西より	
PL-124	Ⅷ区51号住居掘方全景	南西より	Ⅷ区12号住居カマド全景	北西より	
	Ⅷ区52号住居遺物出土状態全景	西より	Ⅷ区12号住居A-A'断面	東より	
PL-125	Ⅷ区52号住居掘方全景	西より	Ⅷ区12号住居カマド掘方B-B'断面	北東より	
	Ⅷ区53・54号住居全景	西より	Ⅷ区12号住居掘方全景	西より	
PL-126	Ⅷ区53・54号住居遺物出土状態全景	西より	PL-143	Ⅷ区13号住居全景	西より
	Ⅷ区53・54号住居掘方全景	西より	Ⅷ区13号住居カマドC-C'断面	南西より	
PL-127	Ⅷ区55号住居遺物出土状態全景	西より	Ⅷ区13号住居A-A'断面	西より	
	Ⅷ区55号住居掘方全景	西より	Ⅷ区13号住居カマド掘方C-C'断面	西より	
PL-128	Ⅷ区56号住居全景	西より	Ⅷ区13号住居掘方全景	西より	
	Ⅷ区56号住居掘方A-A'断面	南西より	PL-144	Ⅷ区14号住居遺物出土状態全景	西より
PL-129	Ⅷ区38・57号住居全景	西より	Ⅷ区14号住居カマド遺物出土状態	西より	
	Ⅷ区57号住居掘方全景	北東より	Ⅷ区14号住居カマドC-B'断面	南西より	
PL-130	Ⅷ区58号住居全景	西より	Ⅷ区14号住居カマド掘方全景	西より	
	Ⅷ区58号住居掘方全景	北西より	Ⅷ区14号住居掘方全景	西より	
PL-131	Ⅷ区59号住居遺物出土状態全景	西より	PL-145	Ⅷ区18号住居全景	西より
	Ⅷ区59号住居カマドC-C'断面	南より	Ⅷ区18号住居カマドG-C'断面	西より	
	Ⅷ区59号住居出土遺物	北西より	Ⅷ区18号住居カマド掘方E-F'断面	南西より	
	Ⅷ区59号住居カマド掘方全景	西より	Ⅷ区18号住居遺物出土状態全景	西より	
	Ⅷ区59号住居掘方全景	西より	Ⅷ区18号住居掘方全景	西より	
PL-132	Ⅷ区1号住居全景	西より	PL-146	Ⅷ区19号住居全景	北より
	Ⅷ区1号住居カマド遺物出土状態	西より	Ⅷ区19号住居カマド全景	北より	
	Ⅷ区1号住居カマド掘方B-B'断面	南西より	Ⅷ区19号住居カマド掘方全景	北より	
	Ⅷ区1号住居カマド遺物出土状態詳細	西より	Ⅷ区19号住居カマド掘方全景	北より	
	Ⅷ区1号住居掘方全景	西より	Ⅷ区19号住居A-A'断面	西より	
PL-133	Ⅷ区2号住居全景	北より	PL-147	Ⅷ区20号住居遺物出土状態カマド	東より
	Ⅷ区2号住居カマドB-B'断面	西より	Ⅷ区20号住居カマド全景	北西より	
	Ⅷ区2号住居掘方A-A'断面	南より	Ⅷ区20号住居カマドB-B'断面	南より	
	Ⅷ区2号住居カマド掘方B-B'断面	北西より	Ⅷ区20号住居カマド掘方B-B'断面	南西より	
	Ⅷ区2号住居掘方全景	北より	Ⅷ区20号住居掘方全景	北西より	
PL-134	Ⅷ区3号住居全景	西より	PL-148	Ⅷ区21号住居全景	西より
	Ⅷ区3号住居カマド全景	西より	Ⅷ区21号住居カマド遺物出土状態	西より	

	Ⅷ区21号住居カマド遺物出土状態 西より		Ⅷ区39号住居掘方全景 西より
PL-149	Ⅷ区21号住居掘方全景 西より		PL-167 Ⅷ区40号住居遺物出土状態全景 東より
	Ⅷ区22号住居全景 西より		Ⅷ区40号住居カマドC-C'断面 北西より
PL-150	Ⅷ区22号住居カマド全景 北より		Ⅷ区40号住居出土遺物 東より
	Ⅷ区22号住居カマドK-J'断面 南西より		Ⅷ区40号住居カマド掘方C-C'断面 北より
	Ⅷ区22号住居カマド掘方煙道部 南より		Ⅷ区40号住居掘方全景 東より
	Ⅷ区22号住居カマド掘方・貯蔵穴1-I'断面 西より	PL-168	Ⅷ区42号住居全景 西より
PL-151	Ⅷ区22号住居掘方・92号住居遺物出土状態全景 西より		Ⅷ区42号住居掘方全景 西より
	Ⅷ区92号住居遺物出土状態全景 西より	PL-169	Ⅷ区43号住居全景 西より
	Ⅷ区92号住居貯蔵穴遺物出土状態 南西より		Ⅷ区43号住居カマド全景 西より
	Ⅷ区21・22・92号住居A-A'断面 南東より		Ⅷ区43号住居遺物出土状態全景 西より
	Ⅷ区92号住居掘方全景 西より		Ⅷ区43号住居カマドC-C'断面 南西より
	Ⅷ区23号住居全景 南東より	PL-170	Ⅷ区43号住居掘方全景 西より
PL-152	Ⅷ区23号住居カマド全景 南東より		Ⅷ区44号住居全景 西より
	Ⅷ区23号住居カマドE-E'断面 北東より		Ⅷ区44号住居カマド遺物出土状態 西より
	Ⅷ区23号住居カマド掘方E-E'断面 北より		Ⅷ区44号住居カマドC-C'断面 南西より
	Ⅷ区23号住居掘方全景 東より		Ⅷ区44号住居掘方全景 北西より
	Ⅷ区24号住居全景 北東より	PL-171	Ⅷ区45号住居遺物出土状態全景 西より
PL-153	Ⅷ区25・90号住居全景 西より		Ⅷ区45号住居カマド全景 西より
	Ⅷ区25・90号住居掘方全景 西より		Ⅷ区45号住居カマドB-B'断面 南より
PL-154	Ⅷ区27号住居全景 東より		Ⅷ区45号住居カマド掘方B-B'断面 南西より
	Ⅷ区27号住居A-A'断面 北東より		Ⅷ区45号住居掘方全景 西より
PL-155	Ⅷ区28号住居全景 西より	PL-172	Ⅷ区47号住居全景 西より
	Ⅷ区28号住居掘方全景 西より		Ⅷ区47号住居カマド掘方E-E'断面 南より
PL-156	Ⅷ区29号住居全景 東より		Ⅷ区47号住居遺物出土状態 北西より
	Ⅷ区29号住居掘方全景 東より		Ⅷ区47号住居貯蔵穴D-D'断面 西より
PL-157	Ⅷ区30号住居遺物出土状態全景 西より		Ⅷ区47号住居掘方全景 西より
	Ⅷ区30号住居掘方全景 西より	PL-173	Ⅷ区48号住居全景 西より
PL-158	Ⅷ区31号住居全景 西より		Ⅷ区48号住居カマドF-F'断面 南東より
	Ⅷ区31号住居カマド全景 西より		Ⅷ区48号住居遺物出土状態全景 西より
	Ⅷ区31号住居カマド遺物出土状態 西より		Ⅷ区48号住居カマド掘方F-F'断面 南より
	Ⅷ区31号住居カマド掘方J-J'断面 西より		Ⅷ区48号住居掘方全景 西より
	Ⅷ区31号住居掘方全景 西より	PL-174	Ⅷ区49号住居全景 西より
PL-159	Ⅷ区32号住居全景 南西より		Ⅷ区49号住居カマド1D-D'断面 南より
	Ⅷ区32号住居掘方全景 南西より		Ⅷ区49号住居カマド2E-E'断面 南西より
PL-160	Ⅷ区33号住居A-A'断面 北より		Ⅷ区49号住居カマド3掘方G-C'断面 北より
	Ⅷ区33号住居掘方全景 西より		Ⅷ区49号住居掘方全景 西より
PL-161	Ⅷ区34号住居全景 西より	PL-175	Ⅷ区51号住居遺物出土状態全景 西より
	Ⅷ区34号住居カマド全景 西より		Ⅷ区51号住居カマドC-C'断面 南西より
	Ⅷ区34号住居遺物出土状態 西より		Ⅷ区51号住居遺物出土状態全景 北東より
	Ⅷ区34号住居カマド掘方C-C'断面 南西より		Ⅷ区51号住居カマド掘方C-C'断面 南西より
	Ⅷ区34号住居遺物出土状態全景 西より		Ⅷ区51号住居掘方全景 西より
PL-162	Ⅷ区35号住居全景 北より	PL-176	Ⅷ区52号住居全景 西より
	Ⅷ区35号住居カマド全景 北西より		Ⅷ区53号住居掘方全景 西より
	Ⅷ区35号住居カマドC-C'断面 南西より	PL-177	Ⅷ区54号住居全景 西より
	Ⅷ区35号住居カマド掘方全景 西より		Ⅷ区54号住居カマド遺物出土状態 西より
	Ⅷ区35号住居掘方全景 西より		Ⅷ区54号住居貯蔵穴断面 西より
PL-163	Ⅷ区36号住居全景 西より		Ⅷ区54号住居カマド掘方E-E'断面 南より
	Ⅷ区36号住居カマド全景 西より		Ⅷ区54号住居掘方全景 西より
	Ⅷ区36号住居上坑1C-C'断面 西より	PL-178	Ⅷ区55号住居全景 西より
	Ⅷ区36号住居カマド掘方C-C'断面 西より		Ⅷ区55号住居カマド全景 西より
	Ⅷ区36号住居掘方全景 西より		Ⅷ区55号住居出土遺物 西より
PL-164	Ⅷ区37号住居遺物出土状態全景 西より		Ⅷ区55号住居カマド掘方全景 西より
	Ⅷ区37号住居カマドF-F'断面 北西より		Ⅷ区55号住居掘方全景 西より
	Ⅷ区37号住居遺物出土状態 南西より	PL-179	Ⅷ区56号住居全景 北より
	Ⅷ区37号住居カマド掘方G-G'断面 南西より		Ⅷ区56号住居カマド全景 北より
	Ⅷ区37号住居掘方遺物出土状態全景 西より		Ⅷ区56号住居貯蔵穴全景 北より
PL-165	Ⅷ区38号住居遺物出土状態全景 北西より		Ⅷ区56号住居カマド掘方全景 北より
	Ⅷ区38号住居カマド全景 西より		Ⅷ区56号住居掘方全景 北より
	Ⅷ区38号住居カマドF-F'断面 南西より	PL-180	Ⅷ区57号住居全景 西より
	Ⅷ区38号住居カマド掘方F-F'断面 南西より		Ⅷ区57号住居カマド全景 西より
	Ⅷ区38号住居掘方全景 西より		Ⅷ区57号住居貯蔵穴全景 南より
PL-166	Ⅷ区39号住居全景 西より		Ⅷ区57号住居カマド掘方全景 西より
	Ⅷ区39号住居カマドC-C'断面 南より		Ⅷ区57号住居掘方全景 西より
	Ⅷ区39号住居遺物出土状態 西より	PL-181	Ⅷ区59号住居遺物出土状態全景 西より
	Ⅷ区39号住居カマド掘方C-C'断面 南より		Ⅷ区59号住居掘方全景 西より

PL-182	Ⅷ区60号住居全景 西より Ⅷ区60号住居カマド側方全景 北西より Ⅷ区60号住居カマド断面 南西より Ⅷ区60号住居側方全景 西より		
PL-183	Ⅷ区62号住居カマド全景 西より Ⅷ区62号住居側方全景 西より Ⅷ区63号住居カマド遺物出土状態 西より Ⅷ区63号住居側方全景 西より Ⅷ区63号住居遺物出土状態全景 西より		
PL-184	Ⅷ区64号住居全景 西より Ⅷ区64住居カマド全景 西より Ⅷ区64号住居側方全景 西より Ⅷ区64号住居カマド2側方G-C'断面 南西より Ⅷ区64号住居側方全景 西より		
PL-185	Ⅷ区65号住居遺物出土状態全景 西より Ⅷ区65号住居側方全景 西より		
PL-186	Ⅷ区66号住居遺物出土状態全景 北西より Ⅷ区66号住居カマドC-C'断面 南西より Ⅷ区66号住居断面 東より Ⅷ区66号住居カマド側方C-C'断面 南西より Ⅷ区66号住居側方全景 北西より		
PL-187	Ⅷ区67号住居側方全景 西より Ⅷ区68号住居遺物出土状態全景 西より		
PL-188	Ⅷ区67号住居カマドB-B'断面 南西より Ⅷ区68号住居カマドC-C'断面 南西より Ⅷ区68号住居カマド側方C-C'断面 南西より Ⅷ区68号住居カマド側方D-D'断面 西より Ⅷ区68号住居側方全景 西より		
PL-189	Ⅷ区70号住居遺物出土状態全景 西より Ⅷ区70号住居カマドB-B'断面 南より Ⅷ区70号住居遺物出土状態 西より Ⅷ区70号住居側方A-A'断面 南西より Ⅷ区70号住居側方全景 西より		
PL-190	Ⅷ区71号住居遺物出土状態全景 東より Ⅷ区71号住居カマド遺物出土状態 北東より Ⅷ区71号住居カマドD-C'断面 南東より Ⅷ区71号住居カマド側方D-D'断面 南東より Ⅷ区71号住居側方全景 東より		
PL-191	Ⅷ区72号住居遺物出土状態全景 西より Ⅷ区72号住居カマドD-C'断面 南西より Ⅷ区72号住居出土遺物 西より Ⅷ区72号住居カマド側方C-C'断面 南西より Ⅷ区72号住居側方全景 西より		
PL-192	Ⅷ区73号住居全景 西より Ⅷ区73号住居側方全景 西より		
PL-193	Ⅷ区74号住居遺物出土状態全景 西より Ⅷ区74号住居カマド2遺物出土状態 西より Ⅷ区74号住居カマド1側方D-D'断面 南西より Ⅷ区74号住居カマド2側方B-B'断面 北西より Ⅷ区74号住居側方全景 西より		
PL-194	Ⅷ区75号住居全景 西より		
PL-195	Ⅷ区75・111・115号住居側方全景 西より Ⅷ区111号住居側方全景 西より Ⅷ区76・110号住居A-A'断面 南西より		
PL-196	Ⅷ区76・110号住居側方全景 西より Ⅷ区110号住居遺物出土状態全景 西より		
PL-197	Ⅷ区77・112号住居全景 西より Ⅷ区77・112号住居遺物出土状態全景 西より		
PL-198	Ⅷ区77・112号住居側方全景 北西より Ⅷ区77・112号住居側方全景 西より		
PL-199	Ⅷ区78号住居全景 西より Ⅷ区78号住居カマドB-B'断面 南西より Ⅷ区78号住居カマドB-B'断面 北より Ⅷ区78号住居カマド側方B-B'断面 南西より Ⅷ区78号住居側方全景 西より		
PL-200	Ⅷ区79号住居遺物出土状態全景 西より		
PL-201	Ⅷ区79号住居側方全景 西より Ⅷ区82・85号住居全景 西より Ⅷ区82号住居カマドD-D'断面 南西より Ⅷ区82号住居側方全景 西より Ⅷ区82号住居カマド側方全景 西より Ⅷ区85号住居側方全景 西より		
PL-202	Ⅷ区84号住居全景 西より Ⅷ区84号住居側方全景 西より		
PL-203	Ⅷ区86号住居全景 西より Ⅷ区86号住居カマド全景 北西より Ⅷ区86号住居カマド遺物出土状態 南より Ⅷ区86号住居カマド側方全景 西より		
PL-204	Ⅷ区86号住居カマド出土遺物 西より Ⅷ区86号住居出土遺物 北西より Ⅷ区86号住居貯蔵穴全景 西より Ⅷ区86号住居遺物出土状態全景 西より Ⅷ区86号住居側方全景 西より		
PL-205	Ⅷ区86号住居周溝全景 北より Ⅷ区86号住居側方全景 南より		
PL-206	Ⅷ区87号住居全景 北西より Ⅷ区87号住居カマド1全景 北西より Ⅷ区87号住居カマド2全景 北東より Ⅷ区87号住居カマド1側方E-E'断面 西より Ⅷ区87号住居カマド2側方全景 北より		
PL-207	Ⅷ区87号住居カマド2側方全景 北より Ⅷ区87号住居土塔2全景 西より Ⅷ区87号住居カマド2側方全景 西より Ⅷ区87号住居遺物出土状態 北より		
PL-208	Ⅷ区87号住居遺物出土状態全景 北より Ⅷ区89号住居遺物出土状態全景 北より Ⅷ区89号住居側方全景 西より		
PL-209	Ⅷ区91号住居遺物出土状態全景 西より Ⅷ区91号住居側方全景 西より		
PL-210	Ⅷ区94号住居遺物出土状態全景 西より Ⅷ区94号住居側方全景 西より		
PL-211	Ⅷ区95号住居全景 西より Ⅷ区95号住居カマド全景 西より Ⅷ区95号住居カマドC-C'断面 南より Ⅷ区95号住居カマド側方全景 西より Ⅷ区95号住居側方全景 西より		
PL-212	Ⅷ区96号住居全景 西より Ⅷ区96号住居カマド全景 西より		
PL-213	Ⅷ区96号住居カマド側方全景・石組み状態 西より Ⅷ区96号住居カマド側方全景・石組み状態 南より Ⅷ区96号住居カマド側方全景・石組み状態 西より Ⅷ区96号住居カマド側方全景 西より Ⅷ区96号住居側方全景 西より		
PL-214	Ⅷ区97号住居全景 北より Ⅷ区97号住居側方全景 北より		
PL-215	Ⅷ区98号住居遺物出土状態全景 西より Ⅷ区98号住居カマド全景 西より Ⅷ区98号住居カマド側方全景 西より Ⅷ区98号住居側方全景 西より		
PL-216	Ⅷ区100号住居全景 北より Ⅷ区100号住居側方全景 北より		
PL-217	Ⅷ区101号住居側方全景 西より Ⅷ区102号住居遺物出土状態全景 西より		
PL-218	Ⅷ区102号住居カマド2E-E'断面 南西より Ⅷ区102号住居カマド1G-C'断面 南西より Ⅷ区102号住居カマド2側方E-E'断面 南西より Ⅷ区102号住居カマド1側方C-G'断面 南西より Ⅷ区102号住居側方全景 西より		
PL-219	Ⅷ区103号住居遺物出土状態全景 西より Ⅷ区103号住居カマド全景 西より Ⅷ区103号住居貯蔵穴遺物出土状態 西より Ⅷ区103号住居側方全景 西より		

PL-220	Ⅷ区104号住居全築 西より Ⅷ区104号住居カマド全築 西より Ⅷ区104号住居カマド遺物出土状態 西より Ⅷ区104号住居カマド掘方B-B'断面 南より Ⅷ区104号住居出土遺物 西より	Ⅷ区12号住居掘方全築 西より Ⅷ区14号住居全築 西より Ⅷ区14号住居掘方全築 西より Ⅷ区15号住居全築 北西より
PL-221	Ⅷ区104号住居出土遺物 西より Ⅷ区104号住居出土遺物 西より Ⅷ区104号住居出土遺物 西より Ⅷ区104号住居出土遺物 西より Ⅷ区104号住居掘方全築 西より	Ⅷ区15号住居遺物出土状態全築 北西より Ⅷ区15号住居遺物出土状態 北西より Ⅷ区15号住居A-A'断面 北東より Ⅷ区15号住居掘方全築 北西より
PL-222	Ⅷ区105号住居全築 西より Ⅷ区105号住居カマド遺物出土状態 西より Ⅷ区105号住居カマドB-B'断面 南より Ⅷ区105号住居カマド掘方全築 西より Ⅷ区105号住居掘方全築 西より	Ⅷ区16号住居全築 北西より Ⅷ区16号住居掘方全築 北西より Ⅷ区16号住居カマド全築 北西より Ⅷ区16号住居カマドC-C'断面 北西より Ⅷ区16号住居カマド掘方全築 北西より
PL-223	Ⅷ区106号住居全築 西より Ⅷ区106号住居カマド全築 西より Ⅷ区106号住居遺物出土状態全築 西より Ⅷ区106号住居カマド掘方全築 西より Ⅷ区106号住居掘方全築 西より	Ⅷ区17号住居全築 北西より Ⅷ区17号住居遺物出土状態全築 北西より Ⅷ区17号住居遺物出土状態 北西より Ⅷ区17号住居掘方全築 北西より
PL-224	Ⅷ区116号住居遺物出土状態全築 西より Ⅷ区116号住居掘方全築 西より	Ⅷ区18号住居全築 北東より Ⅷ区18号住居掘方全築 南東より Ⅷ区19号住居全築 北西より
PL-225	Ⅷ区117号住居遺物出土状態全築 西より Ⅷ区117号住居掘方全築 西より	Ⅷ区19号住居出土遺物 北東より Ⅷ区19号住居出土遺物 北東より Ⅷ区19号住居掘方全築 北西より
PL-226	Ⅷ区119号住居遺物出土状態全築 西より Ⅷ区119号住居掘方全築 西より	Ⅷ区20号住居全築 北西より Ⅷ区20号住居掘方全築 北西より Ⅷ区20号住居カマド掘方全築 北西より
PL-227	Ⅷ区1号住居全築 東より Ⅷ区1号住居カマド全築 東より Ⅷ区1号住居カマド掘方C-C'断面 西より Ⅷ区1号住居カマド掘方全築 東より Ⅷ区1号住居掘方全築 東より	Ⅷ区21号住居出土遺物 北西より Ⅷ区21号住居出土遺物 北西より Ⅷ区21号住居北東-A'断面 北東より Ⅷ区21号住居遺物出土状態全築 北西より Ⅷ区21・22号住居全築 北西より
PL-228	Ⅷ区2号住居全築 西より Ⅷ区2号住居カマド全築 西より Ⅷ区2号住居遺物出土状態全築 西より Ⅷ区2号住居カマド遺物出土状態 西より Ⅷ区2号住居掘方全築 西より	Ⅷ区23号住居全築 東より Ⅷ区23号住居カマド全築 東より Ⅷ区24号住居カマド掘方全築 南西より Ⅷ区23号住居カマド遺物出土状態 東より Ⅷ区24号住居カマド遺物出土状態 南西より
PL-229	Ⅷ区3号住居全築 西より Ⅷ区3号住居カマド全築 西より Ⅷ区3号住居遺物出土状態全築 西より Ⅷ区3号住居出土遺物 西より Ⅷ区3号住居掘方全築 西より	Ⅷ区24号住居遺物出土状態全築 南西より Ⅷ区24号住居掘方全築 西より
PL-230	Ⅷ区4号住居全築 西より Ⅷ区4号住居カマド全築 西より Ⅷ区4号住居カマド掘方D-D'断面 南より Ⅷ区4号住居カマド掘方全築 西より Ⅷ区4号住居掘方全築 西より	Ⅷ区24号住居掘方全築 西より Ⅷ区1号住居全築 西より Ⅷ区1号住居カマド全築 西より Ⅷ区1号住居カマド掘方全築 西より Ⅷ区1号住居掘方全築 西より
PL-231	Ⅷ区5号住居全築 西より Ⅷ区5号住居掘方全築 西より	Ⅷ区2号住居全築 西より Ⅷ区2号住居掘方全築 西より Ⅷ区2号住居カマド全築 西より Ⅷ区2号住居カマド掘方全築 西より Ⅷ区2号住居カマド遺物出土状態 西より
PL-232	Ⅷ区6・7号住居全築 西より Ⅷ区6・7号住居遺物出土状態全築 西より	Ⅷ区2号住居土坑1全築 南より Ⅷ区2号住居土坑2全築 北西より
PL-233	Ⅷ区6・7号住居掘方全築 西より Ⅷ区8号住居全築 西より	Ⅷ区3号住居全築 西より Ⅷ区3号住居掘方全築 西より Ⅷ区4号住居土坑1・4全築 西より Ⅷ区4号住居土坑2全築 北より
PL-234	Ⅷ区10号住居全築 北西より Ⅷ区10号住居掘方全築 北西より Ⅷ区10号住居カマド全築 北西より Ⅷ区10号住居遺物出土状態全築 北西より Ⅷ区10号住居カマド掘方全築 北西より Ⅷ区10号住居カマド掘方全築 北西より	Ⅷ区4号住居遺物・炭化物出土状態全築 西より Ⅷ区4号住居カマド全築 西より Ⅷ区4号住居土坑3全築 南より Ⅷ区4号住居カマド掘方全築 西より Ⅷ区4号住居掘方全築 西より
PL-235	Ⅷ区12号住居全築 西より Ⅷ区12号住居掘方全築 西より	Ⅷ区5号住居全築 西より Ⅷ区5号住居カマド2全築 北西より Ⅷ区5号住居カマド1掘方全築 西より Ⅷ区5号住居カマド2掘方全築 北西より Ⅷ区5号住居掘方全築 西より
PL-236	Ⅷ区12号住居P8全築 南より Ⅷ区12号住居ビット全築 南より Ⅷ区12号住居P5全築 南より Ⅷ区12号住居P7全築 東より Ⅷ区12号住居全築 西より	Ⅷ区6号住居全築 西より Ⅷ区6号住居カマド全築 西より Ⅷ区6号住居掘方全築 西より
PL-237	Ⅷ区12号住居遺物出土状態全築 西より	

	Ⅹ区 6号住居カマド掘方全景 西より		Ⅹ区 2号住居遺物出土状態全景 西より
PL-254	Ⅹ区 7号住居全景 西より		Ⅹ区 2号住居カマド遺物出土状態 北西より
	Ⅹ区 7号住居掘方全景 西より		Ⅹ区 2号住居掘方全景 西より
PL-255	Ⅹ区 8号住居全景 西より	PL-273	Ⅹ区 3号住居全景 西より
	Ⅹ区 8号住居掘方全景 西より		Ⅹ区 3号住居カマド全景 西より
	Ⅹ区 9号住居カマド全景 西より		Ⅹ区 3号住居貯蔵穴全景 西より
	Ⅹ区 9号住居カマド遺物出土状態 西より		Ⅹ区 3号住居カマド全景 北西より
PL-256	Ⅹ区 9号住居全景 西より		Ⅹ区 3号住居掘方全景 西より
	Ⅹ区 9号住居遺物出土状態全景 西より	PL-274	Ⅹ区 4号住居全景 南西より
PL-257	Ⅹ区 10号住居全景 西より		Ⅹ区 4号住居カマド全景 西より
	Ⅹ区 10号住居カマド全景 西より		Ⅹ区 4号住居遺物出土状態 南西より
	Ⅹ区 10号住居掘方遺物出土状態全景 西より		Ⅹ区 4号住居カマド掘方全景 東より
	Ⅹ区 10号住居カマド掘方全景 西より		Ⅹ区 4号住居掘方全景 東より
	Ⅹ区 11号住居遺物出土状態全景 南西より	PL-275	Ⅹ区 5号住居全景 西より
PL-258	Ⅹ区 11号住居全景・炭化物出土状態 西より		Ⅹ区 5号住居カマド遺物出土状態 北西より
	Ⅹ区 11号住居掘方全景 西より		Ⅹ区 5号住居遺物出土状態全景 西より
PL-259	Ⅹ区 12号住居全景 西より		Ⅹ区 5号住居カマド全景 北西より
	Ⅹ区 12号住居カマド全景 西より		Ⅹ区 5号住居掘方全景 西より
	Ⅹ区 12号住居遺物出土状態全景 西より	PL-276	Ⅹ区 6号住居全景 南西より
	Ⅹ区 12号住居カマド遺物出土状態 西より		Ⅹ区 6号住居カマド遺物出土状態 南西より
	Ⅹ区 12号住居掘方全景 西より		Ⅹ区 6号住居貯蔵穴全景 南西より
PL-260	Ⅹ区 14号住居全景 西より		Ⅹ区 6号住居カマド全景 南西より
	Ⅹ区 14号住居カマド全景 西より		Ⅹ区 6号住居掘方全景 南西より
	Ⅹ区 14号住居遺物出土状態全景 西より	PL-277	Ⅹ区 7号住居全景 西より
	Ⅹ区 14号住居カマド掘方全景 西より		Ⅹ区 7号住居掘方全景 東より
	Ⅹ区 14号住居掘方全景 西より	PL-278	Ⅹ区 8号住居全景 南東より
PL-261	Ⅹ区 15号住居全景 西より		Ⅹ区 8号住居掘方全景 南東より
	Ⅹ区 15号住居カマド全景 西より	PL-279	Ⅹ区 9号住居掘方全景 南西より
	Ⅹ区 15号住居掘方全景 西より		Ⅹ区 9号住居カマド全景 南西より
	Ⅹ区 15号住居遺物出土状態全景 西より		Ⅹ区 9号住居カマド掘方全景 南西より
PL-262	Ⅹ区 17号住居全景 北西より		Ⅹ区 10号住居カマド全景 南西より
	Ⅹ区 17号住居カマド全景 北西より		Ⅹ区 10号住居カマド掘方全景 南西より
	Ⅹ区 17号住居カマド掘方全景 北西より	PL-280	Ⅹ区 10号住居遺物出土状態全景 南西より
	Ⅹ区 17号住居掘方全景 北西より		Ⅹ区 10号住居掘方全景 南西より
PL-263	Ⅹ区 18号住居全景 西より	PL-281	Ⅹ区 13号住居遺物出土状態全景 南西より
	Ⅹ区 18号住居掘方全景 西より		Ⅹ区 13号住居カマド全景 南西より
PL-264	Ⅹ区 16号住居(Ⅷ区19号住居)全景 西より		Ⅹ区 13号住居カマド遺物出土状態 南西より
	Ⅹ区 16号住居(Ⅷ区19号住居)掘方全景 西より		Ⅹ区 13号住居カマド掘方全景 南西より
PL-265	Ⅹ区 22号住居全景 西より		Ⅹ区 13号住居掘方全景 南西より
	Ⅹ区 22号住居カマド全景 西より	PL-282	Ⅹ区 11・12号住居掘方全景 西より
PL-266	Ⅹ区 22号住居遺物出土状態全景 西より		Ⅹ区 12号住居全景 西より
	Ⅹ区 22号住居掘方遺物出土状態 西より	PL-283	Ⅹ区 14号住居全景 西より
PL-267	Ⅹ区 22号住居掘方全景 西より		Ⅹ区 14号住居カマド 3遺物出土状態 西より
	Ⅹ区 22号住居遺物出土状態全景 西より		Ⅹ区 14号住居カマド 2 全景 北西より
PL-268	Ⅹ区 26号住居全景 西より		Ⅹ区 14号住居カマド 3 全景 西より
	Ⅹ区 26号住居カマド全景 西より		Ⅹ区 14号住居カマド 2 掘方全景 北西より
	Ⅹ区 26号住居遺物出土状態全景 西より	PL-284	Ⅹ区 14号住居カマド 1 全景 北より
	Ⅹ区 26号住居カマド掘方 C-C' 断面 南より		Ⅹ区 14号住居カマド 1 遺物出土状態 北より
	Ⅹ区 26号住居掘方遺物出土状態 西より		Ⅹ区 14号住居カマド 1 掘方全景 北より
PL-269	Ⅹ区 26号住居出土遺物 西より		Ⅹ区 14号住居出土遺物 西より
	Ⅹ区 26号住居出土遺物 西より		Ⅹ区 14号住居掘方全景 西より
	Ⅹ区 26号住居出土遺物 西より	PL-285	Ⅹ区 15号住居遺物出土状態全景 西より
	Ⅹ区 26号住居出土遺物 西より		Ⅹ区 15号住居カマド全景 西より
	Ⅹ区 26号住居掘方全景 西より		Ⅹ区 15号住居カマド遺物出土状態 西より
PL-270	Ⅹ区 1号住居全景 西より		Ⅹ区 15号住居カマド掘方全景 西より
	Ⅹ区 1号住居炭化物・焼土・遺物出土状態全景 西より		Ⅹ区 15号住居掘方全景 西より
	Ⅹ区 1号住居炭化物・焼土出土状態全景 西より	PL-286	Ⅹ区 17・26号住居全景 西より
	Ⅹ区 1号住居北中央炭化物出土状態 西より		Ⅹ区 17・26号住居掘方全景 西より
	Ⅹ区 1号住居掘方全景 西より	PL-287	Ⅹ区 18号住居遺物出土状態全景 西より
PL-271	Ⅹ区 1号住居カマド 2 全景 西より		Ⅹ区 18号住居掘方全景 西より
	Ⅹ区 1号住居カマド 2 掘方遺物出土状態 西より	PL-288	Ⅹ区 19号住居・55号土坑全景 南西より
	Ⅹ区 1号住居カマド 1 全景 北西より		Ⅹ区 19号住居カマド 1 掘方全景 南西より
	Ⅹ区 1号住居カマド 2 掘方全景 西より		Ⅹ区 19号住居カマド 2 掘方全景 南西より
	Ⅹ区 1号住居カマド 1 掘方全景 北西より		Ⅹ区 19号住居掘方全景 南西より
PL-272	Ⅹ区 2号住居全景 西より	PL-289	Ⅹ区 20号住居カマド 1 掘方全景 東より
	Ⅹ区 2号住居カマド 1 掘方全景 北西より		Ⅹ区 20号住居カマド 2 掘方全景 東より

	X区21号住居カマド全景 西より		X区16号住居カマド掘方全景 西より
	X区21号住居カマド掘方全景 西より		X区16号住居掘方全景 西より
	X区22号住居全景 南より	PL-310	X区17号住居全景 西より
PL-290	X区22号住居掘方全景 南より		X区18号住居全景 北より
	X区23号住居全景 南西より	PL-311	X区18号住居カマド全景 北より
PL-291	X区23号住居掘方・30号住居カマド全景 西より		X区18号住居P1全景 西より
	X区24号住居遺物出土状態全景 東より		X区18号住居カマド掘方全景 北より
PL-292	X区27号住居全景 西より		X区18号住居掘方全景 北より
	X区27号住居掘方全景 西より		X区18号住居掘方全景 北より
PL-293	X区30号住居全景 西より	PL-312	X区19号住居全景 西より
	X区31号住居全景 東より		X区19号住居カマドG-C'断面 南より
PL-294	X区4号住居全景 北より		X区19号住居遺物出土状態 西より
	X区4号住居掘方全景 北より		X区19号住居遺物出土状態 西より
	X区4号住居カマド全景 西より		X区20号住居出土遺物 西より
PL-295	X区1号住居全景 南東より	PL-313	X区20号住居全景 西より
	X区1号住居掘方全景 南東より		X区20号住居カマド全景 西より
PL-296	X区2号住居全景 西より		X区20号住居貯蔵穴C-C'断面 西より
	X区2号住居カマド遺物出土状態 西より		X区20号住居カマド掘方全景 西より
	X区2号住居カマド遺物出土状態詳細 東より		X区20号住居掘方全景 西より
	X区2号住居カマド掘方全景 西より	PL-314	X区21号住居全景 西より
	X区2号住居掘方全景 西より		X区21号住居カマド全景 西より
PL-297	X区3号住居掘方全景 北より		X区21号住居出土遺物 西より
	X区4号住居全景 西より		X区21号住居カマド掘方全景 西より
PL-298	X区4号住居カマド全景 西より	PL-315	X区21号住居掘方全景 西より
	X区4号住居掘方全景 西より		X区22号住居全景 西より
	X区4号住居カマド遺物出土状態 西より		X区22号住居掘方全景 西より
	X区4・5号住居全景 西より	PL-316	V区1号掘立柱建物全景 西より
	X区5号住居全景 西より		X区1号掘立柱建物全景 西より
PL-299	X区7号住居全景 西より	PL-317	X区1号掘立柱建物全景 南東より
	X区7号住居カマド全景 西より		X区1・2号掘立柱建物全景 南東より
PL-300	X区7号住居掘方全景 西より	PL-318	X区3号掘立柱建物全景 南東より
	X区8号住居全景 西より		X区4号掘立柱建物全景 南東より
PL-301	X区8号住居遺物出土状態全景 西より	PL-319	V区1号窓穴全景 南より
	X区8号住居カマド全景 西より		V区2号窓穴全景 北より
	X区8号住居出土遺物 南西より	PL-320	V区1号窓穴A-A'断面 南より
	X区8号住居カマド掘方全景 西より		V区2号窓穴断面 北より
	X区8号住居掘方全景 西より		V区2号窓穴炭化物出土状態 東より
PL-302	X区9号住居全景 南東より		V区5号窓穴A-A'断面 南より
	X区9号住居掘方全景 南東より		V区3号窓穴全景 東より
PL-303	X区10号住居全景 西より	PL-321	V区4号窓穴全景 西より
	X区10号住居カマド遺物出土状態 西より		V区5号窓穴遺物出土状態全景 北西より
	X区10号住居カマド掘方全景 西より	PL-322	V区2号窓穴全景 北より
	X区10号住居、31・35号土坑掘方全景 西より		V区2号窓穴掘方全景 北西より
PL-304	X区11号住居遺物出土状態全景 西より	PL-323	V区2号窓穴A-A'断面 南西より
	X区11号住居カマド全景 西より		V区3号窓穴遺物出土状態全景 西より
	X区11号住居土坑1B-B'断面 西より	PL-324	V区4号窓穴全景 北東より
	X区11号住居カマドC-C'断面 北より		V区6号窓穴全景 北より
	X区11号住居掘方全景 西より	PL-325	V区1号窓穴遺物出土状態全景 西より
PL-305	X区12号住居遺物出土状態全景 西より		V区1号窓穴A-A'断面 東より
	X区12号住居カマド全景 西より		V区1号窓穴遺物出土状態 西より
	X区12・18・19号住居掘方全景 西より		V区1号窓穴遺物出土状態 西より
	X区12号住居カマド掘方全景 西より	PL-326	V区2号窓穴全景 西より
	X区12号住居掘方全景 西より		V区3号窓穴全景 南より
PL-306	X区12号住居、25・34号土坑全景 西より		V区3号窓穴掘方全景 南より
	X区12号住居、34号土坑全景 西より	PL-327	V区6号溝全景 南より
PL-307	X区14号住居遺物出土状態全景 西より		V区10号溝全景 西より
	X区14号住居カマド全景 西より		V区11号溝全景 西より
	X区14号住居カマド掘方全景 西より		V区12号溝全景 北より
	X区14号住居カマド掘方全景 西より		V区12号溝出土遺物 北より
	X区14号住居掘方全景 西より	PL-328	V区1号溝西原A-A'断面 東より
PL-308	X区15号住居全景 西より		V区1号溝C-C'断面 東より
	X区15号住居断面・遺物出土状態 南より		V区2号溝B-B'断面 南より
PL-309	X区16号住居全景 西より		V区6号溝B-B'断面 南より
	X区16号住居カマド全景 西より		V区7号溝A-A'断面 南より
	X区16号住居貯蔵穴B-B'断面 西より		V区8号溝A-A'断面 南より

	V区9号溝A-A'断面 東より	V区9号土坑・18号ビット断面 西より
	V区9号溝B-B'断面 東より	V区10号土坑全景 北より
PL-329	V区9号溝断面 南東より	V区11号土坑全景 北より
	V区10号溝断面 東より	V区12号土坑全景 南より
	V区10号溝西壁A-A'断面 南東より	V区13号土坑全景 南より
	V区11号溝A-A'断面 西より	V区14号土坑全景 北西より
	V区12号溝A-A'断面 南東より	V区15号土坑全景 西より
	V区13号溝A-A'断面 北より	PL-343 V区16・17号土坑全景 西より
	V区16・17号溝B-B'断面 南より	V区16・17号土坑遺物出土状態 西より
	V区17号溝断面 北より	V区16号土坑出土遺物 南より
PL-330	V区2号溝全景 西より	V区17号土坑全景 南より
	V区2・3号溝全景 南より	V区18号土坑断面 南西より
PL-331	V区4・5号溝全景 南より	V区19号土坑断面 南西より
	V区6号溝全景 南西より	V区21号土坑全景 西より
	V区7号溝全景 南東より	V区23号土坑全景 西より
	V区8号溝全景 北西より	V区24号土坑全景 南西より
PL-332	V区9号溝全景 北より	V区25号土坑全景 北東より
	V区9号溝全景 南より	V区26号土坑全景 東より
	V区9号溝A-A'断面 北より	V区27号土坑断面 南より
	V区9号溝遺物出土状態 南より	V区29号土坑全景 西より
	V区9号溝遺物出土状態全景 南より	V区29号土坑遺物出土状態 西より
PL-333	V区11号溝断面 南より	V区29号土坑遺物出土状態 西より
	V区11号溝B-B'断面 北より	PL-344 V区31号土坑断面 北より
	V区12号溝A-A'断面 南より	V区33号土坑断面 南より
	V区10号溝断面 南東より	V区33号土坑全景 北より
	V区12号溝断面 北より	V区34号土坑遺物出土状態 北より
PL-334	V区1号溝全景 南東より	V区35号土坑断面 南より
	V区2号溝全景 東より	V区36号土坑全景 北より
	V区1号溝A-A'断面 東より	V区37号土坑全景 北より
	V区2号溝西壁A-A'断面 東より	V区38号土坑断面 南より
	V区2号溝As-B下全景 北東より	V区39号土坑全景 西より
	V区2号溝東壁断面 西より	V区40号土坑全景 南西より
PL-335	V区3・4号溝全景 南東より	V区41号土坑全景 南西より
	V区3号溝A-A'断面 南東より	V区43号土坑断面 西より
	V区4号溝A-A'断面 南東より	V区43号土坑遺物出土状態 西より
	V区5号溝全景 北西より	V区44号土坑全景 南西より
PL-336	V区6号溝全景 北より	V区46号土坑断面 西より
	V区6号溝A-A'断面 北より	PL-345 V区46・47号土坑全景 南より
	V区7号溝全景 東より	V区48号土坑全景 西より
	V区8号溝全景 北東より	V区49号土坑全景 南より
	V区8号溝断面 北西より	V区50号土坑断面 南より
	V区7号溝A-A'断面 東より	V区51号土坑断面 西より
	V区8号溝A-A'断面 南西より	V区52号土坑断面 北東より
PL-337	D区8号溝(V区8号溝)全景 南西より	V区54号土坑全景 南より
	W・D区8号溝全景(左V区 右D区) 北西より	V区54号土坑全景 南より
PL-338	X区1号溝全景 南東より	V区55号土坑断面 南東より
	X区1号溝A-A'断面 南より	V区57号土坑断面 南より
	X区1号溝全景 南西より	V区59号土坑断面 西より
	X区2号溝全景 北西より	V区60号土坑断面 南東より
	X区2号溝全景 南東より	V区61・62号土坑断面 南東より
PL-339	X区6号溝全景 南東より	V区63号土坑断面 南東より
	X区7号溝全景 南より	V区64号土坑断面 南より
	X区8号溝全景 南西より	PL-346 V区65号土坑・21号ビット断面 南より
PL-340	X区10号溝全景 南東より	V区66号土坑断面 西より
	X区11号溝全景 南東より	V区67号土坑断面 北西より
	X区11号溝全景 南東より	V区68号土坑断面 西より
PL-341	V区溝群全景 南より	V区69号土坑断面 南より
	X区溝群全景 北より	V区70号土坑断面 南より
PL-342	V区1号土坑全景 南より	V区71号土坑断面 南より
	V区2号土坑断面 北西より	V区72号土坑全景 西より
	V区3号土坑断面 南西より	V区73号土坑・23号ビット全景 北より
	V区4号土坑遺物出土状態 西より	V区74号土坑全景 南より
	V区5・28号土坑全景 北より	V区75号土坑全景 南より
	V区6号土坑全景 南西より	V区77号土坑全景 西より
	V区7号土坑全景 南東より	V区78号土坑全景 西より
	V区8号土坑全景 南西より	V区80号土坑全景 西より

PL.347	V区81号土坑全景	西より	PL.353	Ⅷ区27号土坑全景	南西より
	V区82号土坑全景	西より		Ⅷ区28号土坑全景	南西より
	V区84号土坑全景	西より		Ⅷ区29号土坑全景	南より
	V区86号土坑・13号溝断面	南より		Ⅷ区30号土坑断面	南西より
	V区88号土坑断面	西より		Ⅷ区31号土坑全景	南より
	V区94号土坑断面	西より		Ⅷ区32号土坑全景	南より
	V区96号土坑全景	北より		Ⅷ区33号土坑全景	西より
	V区98号土坑断面	南西より		Ⅷ区34号土坑全景	北西より
	V区99号土坑断面	西より		Ⅷ区35号土坑全景	北より
	V区100号土坑断面	南より		Ⅷ区36号土坑全景	北より
PL.348	V区101号土坑断面	北西より	Ⅷ区37号土坑全景	北より	
	V区102号土坑全景	北西より	Ⅷ区38号土坑全景	西より	
	V区103号土坑断面	南西より	Ⅷ区39号土坑全景	西より	
	V区107号土坑断面	南より	Ⅷ区40号土坑遺物出土状態	西より	
	V区107号土坑遺物出土状態	南より	Ⅷ区40号土坑出土遺物	西より	
	V区109・110号土坑全景	南西より	Ⅷ区41号土坑全景	南より	
	Ⅷ区1号土坑断面	南より	Ⅷ区42号土坑全景	西より	
	Ⅷ区2・3号土坑全景	南より	Ⅷ区43号土坑全景	南より	
	Ⅷ区4号土坑全景	東より	Ⅷ区44号土坑全景	南より	
	Ⅷ区6号土坑断面	東より	Ⅷ区45号土坑全景	南より	
PL.349	Ⅷ区7号土坑全景	南西より	Ⅷ区46号土坑全景	南より	
	Ⅷ区8号土坑全景	北より	Ⅷ区47号土坑全景	南東より	
	Ⅷ区9号土坑全景	北より	Ⅷ区50号土坑全景	南より	
	Ⅷ区10号土坑炭化物出土状態	南より	Ⅷ区48号土坑全景	南より	
	Ⅷ区13号土坑全景	北西より	Ⅷ区49号土坑全景	北より	
	Ⅷ区14号土坑全景	北東より	Ⅷ区51号土坑全景	南より	
	Ⅷ区15号土坑全景	北東より	Ⅷ区52号土坑全景	北より	
	Ⅷ区16号土坑全景	北より	Ⅷ区53号土坑全景	西より	
	Ⅷ区17号土坑断面	南より	Ⅷ区54号土坑全景	東より	
	Ⅷ区18号土坑全景	西より	Ⅷ区55号土坑全景	南より	
PL.350	Ⅷ区19・20号土坑全景	南西より	Ⅷ区56号土坑全景	南より	
	Ⅷ区21号土坑全景	西より	Ⅷ区57号土坑全景	北西より	
	Ⅷ区25号土坑全景	北より	Ⅷ区58号土坑全景	南西より	
	Ⅷ区30号土坑全景	東より	Ⅷ区59・71号土坑全景	西より	
	Ⅷ区31・32号土坑全景	北より	Ⅷ区60号土坑全景	東より	
	Ⅷ区34号土坑全景	東より	PL.355	Ⅷ区61号土坑全景	南東より
	Ⅷ区35号土坑・15号溝断面	西より	Ⅷ区62号土坑全景	南より	
	Ⅷ区36号土坑全景	南西より	Ⅷ区63号土坑全景	南より	
	Ⅷ区37号土坑全景	北より	Ⅷ区63号土坑遺物出土状態	北より	
	Ⅷ区40号土坑全景	北より	Ⅷ区64号土坑全景	北西より	
Ⅷ区49号土坑全景	北西より	Ⅷ区65号土坑全景	北より		
PL.351	Ⅷ区39号土坑全景	西より	Ⅷ区66号土坑全景	北より	
	Ⅷ区1・2号土坑全景	南東より	Ⅷ区67号土坑全景	北より	
	Ⅷ区3号土坑全景	南西より	Ⅷ区68号土坑全景	北西より	
	Ⅷ区4号土坑全景	南西より	Ⅷ区69号土坑遺物出土状態	南より	
	Ⅷ区5号土坑全景	南東より	Ⅷ区70号土坑全景	北西より	
	Ⅷ区6号土坑全景	南西より	Ⅷ区72号土坑全景	北より	
	Ⅷ区7号土坑全景	南東より	Ⅷ区73号土坑全景	南西より	
	Ⅷ区9号土坑全景	南より	Ⅷ区74号土坑全景	北西より	
	Ⅷ区19号土坑全景	西より	PL.356	Ⅷ区74号土坑遺物出土状態	北東より
	Ⅷ区20号土坑断面	南東より	Ⅷ区74号土坑遺物出土状態	北東より	
PL.352	Ⅷ区8号土坑全景	西より	Ⅷ区74号土坑遺物出土状態	北東より	
	Ⅷ区10・11号土坑全景	南西より	Ⅷ区75・76号土坑全景	北より	
	Ⅷ区12号土坑全景	南西より	Ⅷ区77号土坑全景	南より	
	Ⅷ区13号土坑全景	南より	Ⅷ区78号土坑全景	北より	
	Ⅷ区14号土坑全景	南西より	Ⅷ区79号土坑断面	西より	
	Ⅷ区15号土坑全景	南西より	Ⅷ区81号土坑断面	北西より	
	Ⅷ区21号土坑全景	西より	Ⅷ区82・83号土坑全景	南より	
	Ⅷ区22号土坑全景	西より	Ⅷ区84号土坑全景	西より	
	Ⅷ区23号土坑全景	西より	Ⅷ区84号土坑全景	南より	
	Ⅷ区16号土坑全景	南西より	Ⅷ区85号土坑全景	西より	
PL.353	Ⅷ区17号土坑全景	北東より	Ⅷ区85号土坑全景	西より	
	Ⅷ区18号土坑全景	南東より	Ⅷ区87号土坑全景	西より	
	Ⅷ区24号土坑全景	南西より	Ⅷ区88号土坑全景	西より	
	Ⅷ区25号土坑全景	南より	PL.357	Ⅷ区89号土坑全景	西より
	Ⅷ区26号土坑全景	南西より	Ⅷ区90号土坑全景	西より	

	Ⅷ区91号土坑全景	西より		Ⅷ区159号土坑全景	東より
	Ⅷ区92号土坑全景	南より		Ⅷ区162号土坑断面	西より
	Ⅷ区93号土坑全景	西より		Ⅷ区162号土坑全景	東より
	Ⅷ区94号土坑全景	北より		Ⅷ区163号土坑全景	西より
	Ⅷ区95号土坑全景	東より		Ⅷ区164号土坑全景	西より
	Ⅷ区95号土坑遺物出土状態	北より		Ⅷ区167号土坑全景	東より
	Ⅷ区96号土坑断面	東より	PL_362	Ⅷ区169号土坑全景	西より
	Ⅷ区97号土坑全景	西より		Ⅷ区170号土坑全景	北西より
	Ⅷ区98号土坑全景	北より		Ⅷ区171号土坑全景	北より
	Ⅷ区99号土坑全景	南より		Ⅷ区172号土坑全景	西より
	Ⅷ区100号土坑全景	北東より		Ⅷ区173号土坑・11号溝全景	北西より
	Ⅷ区100号土坑全景	北より		Ⅷ区174号土坑全景	南より
PL_358	Ⅷ区101号土坑全景	北より		Ⅷ区175号土坑全景	南より
	Ⅷ区102号土坑全景	北より		Ⅷ区176号土坑全景	南より
	Ⅷ区104号土坑全景	北より		Ⅷ区177号土坑全景	南西より
	Ⅷ区103号土坑全景	北より		Ⅷ区178号土坑全景	南東より
	Ⅷ区105号土坑全景	北より		Ⅷ区179～181号土坑全景	南より
	Ⅷ区105号土坑遺物出土状態	北より		Ⅷ区179・180号土坑全景	南より
	Ⅷ区106号土坑全景	北より		Ⅷ区181号土坑全景	南より
	Ⅷ区107号土坑全景	北より		Ⅷ区182号土坑全景	南より
	Ⅷ区107号土坑遺物出土状態	北より		Ⅷ区183号土坑全景	南より
	Ⅷ区111号土坑全景	東より	PL_363	Ⅷ区184号土坑全景	南より
	Ⅷ区112号土坑全景	北西より		Ⅷ区185号土坑全景	南より
	Ⅷ区114号土坑断面	東より		Ⅷ区186号土坑全景	南より
	Ⅷ区114号土坑全景	東より		Ⅷ区187号土坑全景	南より
	Ⅷ区115号土坑全景	北より		Ⅷ区189号土坑全景	南より
PL_359	Ⅷ区116号土坑断面	南より		Ⅷ区190号土坑全景	北より
	Ⅷ区117号土坑全景	北より		Ⅷ区191号土坑全景	南より
	Ⅷ区118号土坑全景	北より		Ⅷ区182・192号土坑全景	南より
	Ⅷ区119号土坑断面	北より		Ⅷ区193号土坑全景	南より
	Ⅷ区122号土坑全景	西より		Ⅷ区194号土坑全景	南西より
	Ⅷ区123号土坑断面	西より		Ⅷ区208号土坑全景	北より
	Ⅷ区123号土坑断面	西より		Ⅷ区208号土坑遺物出土状態	北より
	Ⅷ区126号土坑断面	西より		Ⅷ区209号土坑全景	東より
	Ⅷ区126号土坑全景	南西より		Ⅷ区212号土坑断面	南より
	Ⅷ区127号土坑全景	西より		Ⅷ区213号土坑全景	東より
	Ⅷ区128号土坑全景	西より	PL_364	Ⅷ区1号土坑全景	北東より
	Ⅷ区129号土坑全景	西より		Ⅷ区2号土坑全景	東より
	Ⅷ区130号土坑全景	南西より		Ⅷ区3号土坑全景	北より
	Ⅷ区131号土坑全景	南西より		Ⅷ区5号土坑断面	南より
	Ⅷ区132号土坑全景	南西より		Ⅷ区5号土坑全景	東より
PL_360	Ⅷ区133号土坑全景	南西より		Ⅷ区6号土坑全景	西より
	Ⅷ区134号土坑全景	南西より		Ⅷ区7号土坑全景	南より
	Ⅷ区135号土坑全景	南西より		Ⅷ区8号土坑全景	東より
	Ⅷ区137号土坑断面	東より		Ⅷ区9号土坑全景	東より
	Ⅷ区138号土坑全景	西より		Ⅷ区10号土坑全景	東より
	Ⅷ区139号土坑全景	西より		Ⅷ区11号土坑全景	東より
	Ⅷ区141号土坑断面	南西より		Ⅷ区12号土坑全景	北東より
	Ⅷ区141号土坑全景	東より		Ⅷ区13号土坑全景	西より
	Ⅷ区142号土坑全景	北より		Ⅷ区14号土坑全景	北より
	Ⅷ区143号土坑全景	東より	PL_365	Ⅷ区15号土坑断面	南西より
	Ⅷ区144号土坑全景	北より		Ⅷ区16号土坑全景	西より
	Ⅷ区145号土坑全景	南より		Ⅷ区17号土坑全景	東より
	Ⅷ区146号土坑遺物出土状態	南東より		Ⅷ区18号土坑全景	東より
	Ⅷ区147号土坑全景	北より		Ⅷ区12・19号土坑全景	東より
	Ⅷ区148号土坑断面	東より		Ⅷ区20号土坑全景	南西より
	Ⅷ区148号土坑全景	南より		Ⅷ区21号土坑全景	北西より
PL_361	Ⅷ区150号土坑断面	南東より		Ⅷ区22号土坑全景	東より
	Ⅷ区150号土坑全景	南西より		Ⅷ区23号土坑全景	東より
	Ⅷ区153号土坑断面	南西より		Ⅷ区24号土坑全景	西より
	Ⅷ区153号土坑全景	南より		Ⅷ区25号土坑全景	西より
	Ⅷ区154号土坑全景	北より		Ⅷ区26号土坑全景	北より
	Ⅷ区155号土坑全景	西より		Ⅷ区28号土坑全景	東より
	Ⅷ区156号土坑全景	西より		Ⅷ区29号土坑全景	南より
	Ⅷ区157号土坑全景	西より		Ⅷ区30号土坑全景	南より
	Ⅷ区158号土坑全景	西より	PL_366	Ⅷ区31号土坑全景	東より

	Ⅷ区32号土坑全景	南西より			Ⅹ区27号土坑全景	北西より
	Ⅷ区33号土坑全景	南西より	PL..371		Ⅹ区28・29・32号土坑全景	南西より
	Ⅷ区35号土坑断面	南東より			Ⅹ区28号土坑全景	南西より
	Ⅷ区35号土坑全景	東より			Ⅹ区29号土坑全景	南西より
	Ⅷ区37号土坑全景	北東より			Ⅹ区30号土坑全景	北西より
	Ⅷ区38号土坑全景	北東より			Ⅹ区31号土坑全景	南西より
	Ⅷ区39号土坑全景	北東より			Ⅹ区32号土坑全景	南西より
	Ⅷ区40号土坑全景	北東より			Ⅹ区33号土坑全景	北西より
	Ⅷ区41号土坑全景	北西より			Ⅹ区34号土坑全景	西より
	Ⅷ区42号土坑全景	北東より			Ⅹ区35号土坑全景	南東より
	Ⅷ区43号土坑遺物出土状態	北東より			Ⅹ区36号土坑全景	西より
	Ⅷ区44号土坑全景	北東より			Ⅹ区37号土坑全景	西より
	Ⅷ区45号土坑全景	北東より			Ⅹ区38号土坑全景	南より
	Ⅷ区42～46号土坑断面	北東より			Ⅹ区39号土坑全景	北東より
PL..367	Ⅷ区46号土坑全景	北東より			Ⅹ区40号土坑遺物出土状態	南西より
	Ⅷ区47・48号土坑全景	南東より			Ⅹ区41号土坑遺物出土状態	西より
	Ⅷ区48号土坑全景	南東より	PL..372		Ⅹ区42号土坑全景	北西より
	Ⅷ区50～54号土坑断面	北東より			Ⅹ区43号土坑全景	北東より
	Ⅷ区50号土坑全景	北東より			Ⅹ区43号土坑遺物出土状態	北東より
	Ⅷ区51号土坑全景	北東より			Ⅹ区44号土坑全景	南西より
	Ⅷ区52号土坑全景	北西より			Ⅹ区45号土坑全景	南東より
	Ⅷ区52号土坑全景	北東より			Ⅹ区46号土坑断面	東より
	Ⅷ区53・54号土坑全景	北東より			Ⅹ区46号土坑全景	西より
	Ⅷ区55号土坑全景	北東より			Ⅹ区47号土坑全景	北西より
	Ⅷ区56号土坑全景	東より			Ⅹ区48号土坑全景	北西より
	Ⅷ区57号土坑全景	南西より			Ⅹ区49号土坑断面	南より
	Ⅷ区58号土坑全景	南より			Ⅹ区49号土坑全景	南より
	Ⅷ区59号土坑全景	北より			Ⅹ区50号土坑断面	北より
	Ⅷ区60号土坑全景	東より			Ⅹ区50号土坑全景	北より
PL..368	Ⅷ区61号土坑全景	西より			Ⅹ区51号土坑断面	南東より
	Ⅷ区62号土坑全景	南より			Ⅹ区52号土坑全景	南西より
	Ⅷ区63号土坑全景	東より	PL..373		Ⅹ区1号土坑全景	北より
	Ⅷ区64号土坑全景	西より			Ⅹ区2号土坑全景	南より
	Ⅷ区65号土坑全景	東より			Ⅹ区3号土坑全景	南より
	Ⅷ区66・67号土坑全景	北東より			Ⅹ区4号土坑全景	南より
	Ⅷ区67号土坑断面	北東より			Ⅹ区5・6・10号土坑全景	南西より
	Ⅷ区68号土坑全景	北東より			Ⅹ区7号土坑全景	南より
	Ⅷ区72号土坑全景	北東より			Ⅹ区8・9号土坑全景	南より
	Ⅷ区69号土坑全景	北東より			Ⅹ区11～13号土坑全景	南より
	Ⅷ区70号土坑全景	北東より			Ⅹ区14号土坑全景	北より
	Ⅷ区71号土坑全景	北東より			Ⅹ区15号土坑全景	南西より
PL..369	Ⅹ区1号土坑全景	南西より			Ⅹ区16・33・34号土坑全景	東より
	Ⅹ区2号土坑全景	南西より			Ⅹ区25号土坑全景	北東より
	Ⅹ区3号土坑全景	南東より			Ⅹ区26号土坑全景	南より
	Ⅹ区4号土坑全景	南より			Ⅹ区23号土坑全景	南より
	Ⅹ区5号土坑全景	西より	PL..374		Ⅹ区27号土坑全景	北東より
	Ⅹ区6号土坑全景	北より			Ⅹ区28号土坑全景	南より
	Ⅹ区7号土坑全景	北より			Ⅹ区30号土坑全景	南西より
	Ⅹ区8号土坑全景	北西より			Ⅹ区31号土坑全景	南東より
	Ⅹ区11号土坑全景	南西より			Ⅹ区32号土坑全景	西より
	Ⅹ区9号土坑全景	北西より			Ⅹ区36号土坑全景	北より
	Ⅹ区10号土坑全景	南東より			Ⅹ区37号土坑全景	南より
	Ⅹ区12号土坑遺物出土状態	南東より			Ⅹ区38・39号土坑全景	東より
PL..370	Ⅹ区13号土坑全景	南東より			Ⅹ区41号土坑・20号ピット全景	南東より
	Ⅹ区17号土坑全景	北東より			Ⅹ区42号土坑遠景	南東より
	Ⅹ区14号土坑全景	北西より			Ⅹ区42号土坑全景	南より
	Ⅹ区16号土坑全景	北東より			Ⅹ区43号土坑全景	南東より
	Ⅹ区18号土坑全景	北東より			Ⅹ区44号土坑全景	南東より
	Ⅹ区19・53号土坑全景	北より			Ⅹ区45号土坑全景	南より
	Ⅹ区20号土坑断面	西より			Ⅹ区36号土坑全景	南東より
	Ⅹ区21号土坑全景	東より	PL..375		Ⅹ区47号土坑全景	北西より
	Ⅹ区22号土坑全景	西より			Ⅹ区48号土坑全景	南より
	Ⅹ区23号土坑全景	西より			Ⅹ区49号土坑全景	西より
	Ⅹ区24号土坑全景	北西より			Ⅹ区50号土坑遺物出土状態	南より
	Ⅹ区25号土坑全景	南西より			Ⅹ区50号土坑全景	南より
	Ⅹ区26号土坑全景	南西より			Ⅹ区58号土坑・24号ピット全景	南西より

	X区59号土坑全景	南東より		V区1号観治遺物出土状態	西より
	X区60号土坑全景	西より		V区1号観治遺物出土状態	西より
	X区61号土坑・15号ビット全景	東より		V区1号観治9号方全景	南より
	X区63号土坑全景	南より	PL-382	V区1号観治遺物出土状態	南より
	X区64号土坑全景	南西より		V区1号観治出土遺物	北より
	X区66号土坑全景	南東より		V区1号観治遺物出土状態	南より
	X区67号土坑全景	南西より		V区1号観治遺物出土状態	北より
	X区68号土坑全景	南東より		V区1号観治遺物出土状態	南より
	X区69号土坑全景	南西より		V区1号観治出土遺物	南より
PL-376	ⅩⅩ区1～4号土坑全景	北西より		V区1号観治出土遺物	南より
	ⅩⅩ区4～7号土坑・1号ビット全景	南西より		V区1号観治出土遺物	南より
	ⅩⅩ区7・11号土坑・1・6号ビット全景	南より	PL-383	V区1号観治方全景	北より
	ⅩⅩ区20～24号土坑全景	東より		V区1号観治P1～6・11・13掘方全景	東より
	ⅩⅩ区75～79号土坑全景	北西より		V区1号観治P7～9・12掘方全景	北西より
PL-377	ⅩⅩ区8・17号土坑全景	北より		V区1号観治P9掘方全景	北より
	ⅩⅩ区9号土坑全景	北より	PL-384	ⅩⅩ区1号観治遺物出土状態全景	東より
	ⅩⅩ区13号土坑・14号ビット全景	北より		ⅩⅩ区1号観治鉄釘?全景	西より
	ⅩⅩ区19号土坑全景	南東より	PL-385	ⅩⅩ区1号集石全景	南西より
	ⅩⅩ区20号土坑全景	南東より		ⅩⅩ区1号集石掘方全景	南東より
	ⅩⅩ区22・23号土坑断面	南より	PL-386	V区1号墓坑曾出土状態全景	西より
	ⅩⅩ区25号土坑全景	南より		V区1号墓坑全景	北西より
	ⅩⅩ区26号土坑全景	南東より	PL-387	X区55号土坑全景	南東より
	ⅩⅩ区28号土坑全景	西より		ⅩⅩ区52号土坑全景	南より
	ⅩⅩ区29号土坑全景	北より	PL-388	V区3号復旧墳、1面2号溝、ⅩⅩ区1面8号溝、X区1面2号溝、ⅩⅩ区1号墓、ⅩⅩ区5・6号土坑、ⅩⅩ・ⅩⅩ区1面道溝横外、V区1号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区30号土坑全景	西より		V区1～5・12号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区35号土坑断面・出土遺物	西より	PL-389	V区6～10・13・14・38号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区36号土坑全景	南より	PL-390	V区15・16・19・22・24・28・29号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区37号土坑全景	南より	PL-391	V区30・31・33・35号住居の出土遺物	
PL-378	ⅩⅩ区38号土坑全景	南より	PL-392	V区36・37・39～42号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区39号土坑全景	南より	PL-393	V区43～49・52号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区40号土坑全景	北より	PL-394	V区53号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区41号土坑全景	北より	PL-395	V区53・56・61号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区42号土坑全景	北より	PL-396	V区58・59・73号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区43号土坑全景	西より	PL-397	V区64・65・67～72号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区44号土坑全景	西より	PL-398	V区74・76号住居、ⅩⅩ区1・2・4・10号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区45号土坑全景	北より	PL-400	ⅩⅩ区6～9号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区46号土坑全景	北より	PL-401	ⅩⅩ区11・15・17・20・22・24号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区47号土坑全景	西より	PL-402	ⅩⅩ区25・26・28・29号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区48～50号土坑・80号ビット全景	北より	PL-403	ⅩⅩ区30～34・37・38・43・57号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区51号土坑全景	南より	PL-404	ⅩⅩ区39・41号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区53号土坑断面	北より	PL-405	ⅩⅩ区42・45～47・52・58号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区53号土坑全景	西より	PL-406	ⅩⅩ区48・49・51・54～56号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区54号土坑断面	北より	PL-407	ⅩⅩ区53号住居、ⅩⅩ区1～3号住居の出土遺物	
PL-379	ⅩⅩ区56・57号土坑全景	南より	PL-408	ⅩⅩ区5～8・28号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区58号土坑全景	北より	PL-409	ⅩⅩ区10・14・19号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区59号土坑断面	西より	PL-410	ⅩⅩ区18・21号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区60号土坑全景	西より	PL-411	ⅩⅩ区22・23・25・30・32・92号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区61号土坑断面	北より	PL-412	ⅩⅩ区29・31・36・94・100・101号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区62号土坑・82号ビット全景	北西より	PL-413	ⅩⅩ区34・37・38号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区65号土坑全景	南より	PL-414	ⅩⅩ区39・40・42号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区67・68号土坑全景	西より	PL-415	ⅩⅩ区43～45・47号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区69号土坑全景	西より	PL-416	ⅩⅩ区48・49・51・54・55号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区70号土坑全景	西より	PL-417	ⅩⅩ区56・57号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区72・85号土坑全景	西より	PL-418	ⅩⅩ区57・59・60・63～65・67・69号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区74号土坑全景	西より	PL-419	ⅩⅩ区67・68・70・91号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区80号土坑全景	北より	PL-420	ⅩⅩ区71～74号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区81・82号土坑全景	西より	PL-421	ⅩⅩ区74・102・103・111号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区81号土坑全景	西より	PL-422	ⅩⅩ区75～78・112号住居の出土遺物	
	ⅩⅩ区84号土坑断面	南東より	PL-423	ⅩⅩ区79・82・84～86号住居の出土遺物	
PL-380	V区1号観治全景	東より	PL-424	ⅩⅩ区87・89・95・96・98・104号住居の出土遺物	
	V区1号観治遺物出土状態全景	東より	PL-425	ⅩⅩ区104～106・117号住居の出土遺物	
	V区1号観治遺物出土状態全景	東より	PL-426	ⅩⅩ区2～7号住居の出土遺物	
	V区1号観治が跡?全景	東より	PL-427	ⅩⅩ区8・10・13～17・19・21号住居の出土遺物	
PL-381	V区1号観治遺物出土状態全景	西より	PL-428	ⅩⅩ区24号住居、ⅩⅩ区1・4・5号住居の出土遺物	
	V区1号観治遺物出土状態	西より			

- PL.429 IX区6・7・9～11号住居の出土遺物
- PL.430 IX区11・12・14・15・18・22号住居の出土遺物
- PL.431 IX区26号住居、X区1号住居の出土遺物
- PL.432 X区2～4・6号住居の出土遺物
- PL.433 X区7・9・10・13・24号住居の出土遺物
- PL.434 X区13号住居の出土遺物
- PL.435 X区14～16号住居の出土遺物
- PL.436 X区16・18・19・27号住居、XII区2・4号住居の出土遺物
- PL.437 XII区7・8・10号住居の出土遺物
- PL.438 XII区11・12・14～16・18号住居の出土遺物
- PL.439 XII区19～21号住居、V区5・6号整穴、VII区3号整穴、VIII区3号整穴
- PL.440 V区2面7・8・12号溝、VII区2面1・2・6号溝の出土遺物
- PL.441 VII区2面9号溝、VIII区2面9～12号溝、VIII区2面2号溝の出土遺物
- PL.442 X区2面6・10・11号溝、V区3・5号土坑の出土遺物
- PL.443 V区16・29・34・59・79・94・104号土坑、VII区16・25号土坑、VIII区70号土坑の出土遺物
- PL.444 VII区28・40・63・67・68・74・89・92・134・155・162・169・170・175・189号土坑、VIII区9・18・22号土坑の出土遺物
- PL.445 VIII区33・35・57号土坑、IX区42・43号土坑、X区10・27・50号土坑、XII区8・76号土坑、VII区1号鍛冶の出土遺物
- PL.446 VII区1号鍛冶の出土遺物
- PL.447 VII区1号鍛冶、VIII区1号鍛冶の出土遺物
- PL.448 VII区1号鍛冶、XII区1号鍛冶、XII区1号集石の出土遺物
- PL.449 VII区1号墓坑、V区道橋外の出土遺物
- PL.450 VI・VII区道橋外の出土遺物
- PL.451 VII～IX区道橋外の出土遺物
- PL.452 X・XII区、2面道橋外の出土遺物

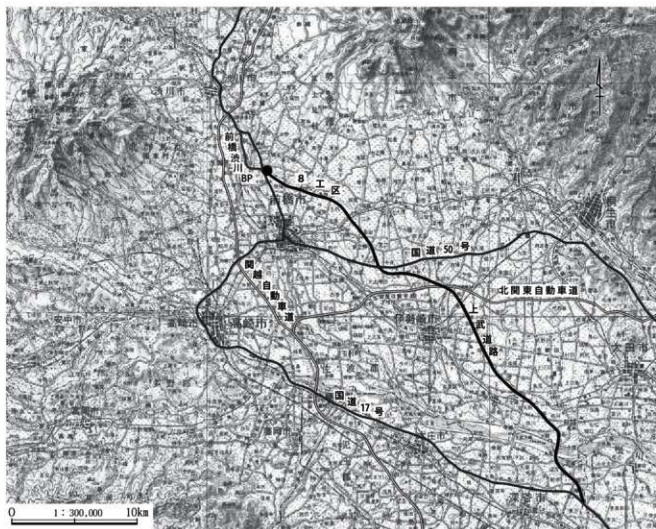
第1章 調査の経過

第1節 上武道路について

上武道路は一般国道17号の交通混雑に対応するために計画された大規模バイパスで、埼玉県熊谷市で深谷バイパスから分岐、群馬県前橋市田口町で現道に接続する延長40.5kmの道路である(第1図)。現道の西には、前橋渋川バイパス、その先には鯉沢バイパス、また計画では上信自動車道が続いて、県北西部の新たな交通幹線整備事業として期待されている。平成10(1998)年には、前橋渋川バイパスを含めて地域高規格道路「熊谷渋川連絡道路」として計画路線の指定を受け、群馬県では「幹線交通乗り入れ30分構想」の中で主要幹線のひとつに位置づけられている。

上武道路の建設事業は、昭和45年度から着手され、平成4年2月までには起点から国道50号までの延長27.4km区間が供用された。その後、供用区間が延伸するとともに交通量は増大し、平成元年度に着手された国道50号から前橋市上泉町までの4.9km区間(7工区)が、平成20年6月に暫定2車線で供用された。

一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)が対象とする8工区は、平成17年度に事業が着手され、平成24年度に主要地方道前橋赤城線までの4.7km区間の暫定開通を果たした。平成28年度末には最終3.5km区間の工事が終了し、全線が開通して発掘された道跡の発掘調査報告書がすべて刊行された。



第1図 上武道路と道跡の位置(国土地理院1/200,000地勢図「長野」「宇都宮」平成18年発行を縮小して使用)

第2節 上武道路と埋蔵文化財

上武道路が通過する地域は、群馬県内でも有数の埋蔵文化財包蔵地の多い地域である。群馬県は、昭和48年に文化財保護室を文化財保護課に拡充して調査にあたり、昭和53年度からは財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団(現公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)が調査事業を受託して、現在に至っている。

上武道路の建設事業は起点側から段階的に進められてきた。その工程は概ね①埼玉県境から国道50号まで、②国道50号から前橋市上京町まで、③前橋市上京町から前橋市田口町の現国道17号までの3つの区間に分けることができ、平成28年度末に全線の供用が開始された。上武道路の全区間では、79遺跡の発掘調査が行われ、調査の成果は65冊の発掘調査報告書として刊行された(第2図・第1表)。

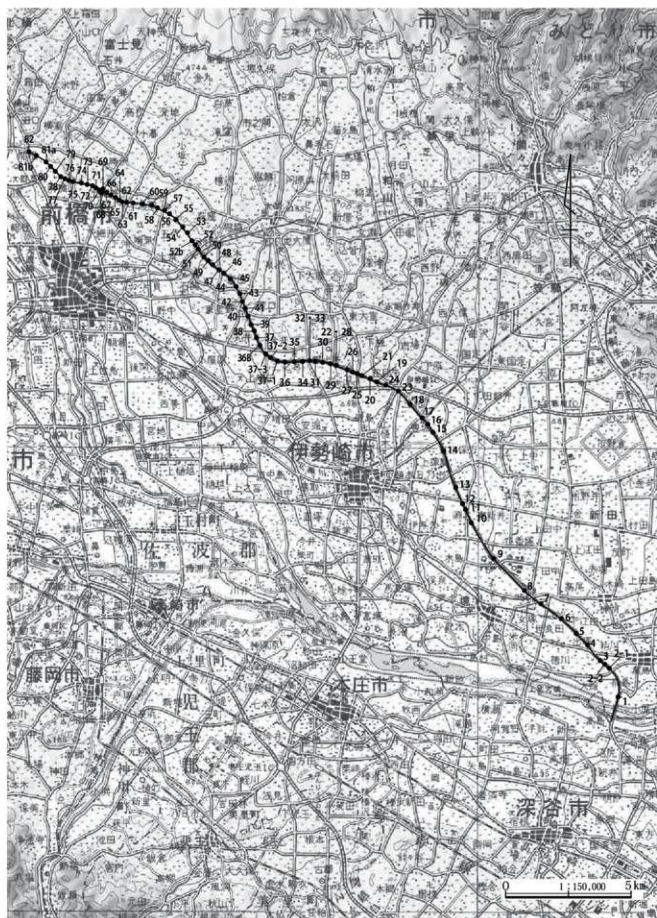
埼玉県境から国道50号までの区間では、35ヶ所の発掘調査が行われ、調査の成果は26冊の発掘調査報告書として刊行されている。この区間の事業が完了した平成7年には、埋蔵文化財調査の成果をより広く公開するため、冊子総集編『地域をつなぐ 未来へつなぐ—上武道路埋蔵文化財22年の軌跡—』が刊行された。この総集編では、「弥生時代の開拓者」といった平野部での発掘調査や「芳郷」の墓書土器出土で話題となった古代勢多郡の芳賀郷、東山道駅路のひとつにも推定されていた「あずま道」など、この地域の歴史的課題に対する検討の結果がまとめられており、今後取り組むべき考古学的課題も特記されている。

国道50号から前橋市上京町までの7工区では、17ヶ所の発掘調査が行われ、16冊の発掘調査報告書が刊行された。7工区では荒砥川の東で確認された古墳時代の集落が周辺の今井神社古墳や大室古墳群の築造と関連する可能性があること、荒砥前田Ⅱ遺跡では県内でも希少な巴形銅器破片が出土したこと、女堀の調査では浅間粕川テフラが確認されたことで開削年代を特定する手掛かりが得られたこと等が成果としてあげられている。荒砥川の西では、帯状低地に分断された台地ごとに縄文時代前期の集落が立地し、旧石器時代の遺物も暗色帯および上位の複数の土層から出土したこと等が注目されている。

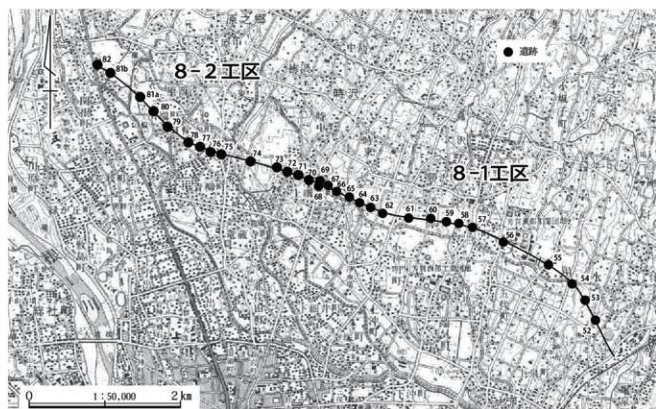
前橋市上京町から現国道17号までは8工区にあたり、28ヶ所の発掘調査が行われ、23冊の発掘調査報告書を刊行した。工区名称は県道前橋赤城線を境界にして東が8-1工区、西が8-2工区に区分した。8工区の調査は、平成18年度に8-1工区の東端から始められ、平成25年度に川端山下遺跡と田口下田尻遺跡の調査をもって終了した。

8-1工区は、これまでと同様に旧石器時代や縄文時代の遺構・遺物が多いのに対して、8-2工区では縄文時代より新しい遺跡の存在が明らかになった。遺跡の実態が未知数であった赤城白川流域の白川扇状地では、予想外の縄文時代の埋没谷や旧石器まで含まれていることが判明した。

これまで、群馬県内の上武道路関連で発掘調査を実施してきた遺跡には、J Kを冠した遺跡略号が付されている。Jが上武、Kが国道を指しており、南側の起点から順次算用数字を1から付している。8工区も、7工区の最終番号J K52に続けて、この略号を記録類作成に際して使用している。J K52だけは、上京唐ノ堀遺跡が供用部分の関係で7工区と8工区で分割されたことから、8工区分の上京唐ノ堀遺跡にはJ K52bをつけて7工区と区別している。また、J K59烏取塚田遺跡は、水田遺構の存在が想定されていたが、試掘調査で遺構の無いことが判明し、発掘調査対象から除外したものの略号は欠番とせず、そのままとした(第3図・第2表)。また、当初関根遺跡群で一括されていた遺跡が田口下田尻遺跡、関根細ヶ沢遺跡、関根赤城遺跡に細分されたこと、平成23年度に開始された田口下田尻遺跡を先行してJ K82としたことから、関根細ヶ沢遺跡はJ K81a、関根赤城遺跡はJ K81bとした。



第2図 上武道路調査道跡一覧(国土地理院1/200,000地勢図「宇都宮」平成18年発行を拡大して使用)



第3図 上武道路8工区の道跡(国土地理院1/50,000地形図「前橋」平成10年発行を使用)

第2表 上武道路8工区調査道跡一覧表

J K No.	道跡名	所在地	旧市町村 道跡番号	新市町村道跡番号 (道跡名)	調査年度	報告書 刊行年度
52b	上泉唐ノ艇道跡	前橋市上泉町	00774	前橋市00543道跡	平成18・19・20年度	平成23年度
53	上泉新田塚道跡群	前橋市上泉町	00775	前橋市0074道跡	平成18・19・20年度	平成24年度
54	上泉武田道跡	前橋市上泉町	00773	前橋市00055道跡	平成19年度	平成23年度
55	五代砂留道跡群	前橋市五代町	00772	前橋市00053道跡	平成18・19・20年度	平成24年度
56	芳賀東部印地道跡	前橋市鳥取町	00357	前橋市00023道跡	平成20年度	平成23年度
57	鳥取松合下道跡	前橋市鳥取町	00776	前橋市00045道跡	平成19年度	平成24年度
58	柳城道跡	前橋市鳥取町	00041	前橋市00039道跡	平成20・21年度	平成23年度
59	鳥取塚田道跡	前橋市勝沢町	—	—	調査除外	—
60	堤道跡	前橋市勝沢町	00034	前橋市00043道跡	平成20年度	平成24年度
61	小神明勝沢境道跡	前橋市小神明町	00778	前橋市00046道跡	平成20年度	平成23年度
62	小神明富士塚道跡	前橋市小神明町・上廻井町	00403	前橋市00043道跡	平成20・21年度	平成23年度
63	東田之口道跡	前橋市上廻井町	00125	前橋市00039道跡	平成20年度	平成24年度
64	丸子道跡	前橋市上廻井町	00134	前橋市00038道跡	平成20年度	平成24年度
65	上廻井五十嵐道跡	前橋市上廻井町	00777	前橋市00037道跡	平成20・21年度	平成24年度
66	天王・東廻屋谷戸道跡	前橋市上廻井町	00131	前橋市00037道跡	平成20・21年度	平成25年度
67		前橋市富士見町時沢	90094	前橋市00039道跡	平成20・21年度	平成24年度
68	上町・時沢西廻屋谷戸道跡	前橋市上廻井町	00798	前橋市00035道跡	平成21年度	平成24年度
69		前橋市富士見町時沢	90097	前橋市00035道跡	平成21年度	平成24年度
70	王久保道跡	前橋市上廻井町・富士見町時沢	00794	前橋市00034道跡	平成21・24年度	平成24年度
71	新田上道跡	前橋市上廻井町	00128	前橋市00034道跡	平成20・21年度	平成24年度
72	上廻井中島道跡	前橋市上廻井町	00787	前橋市00015道跡	平成21・24年度	平成25年度
73	上廻井餅山道跡	前橋市上廻井町	00786	前橋市00013道跡	平成21・24年度	平成24年度
74	山王・柴道跡群	前橋市青柳町	00795	前橋市00014道跡 前橋市00783道跡	平成21・22・23・25年度	平成27年度
75	引切塚道跡	前橋市青柳町	00434	前橋市00013道跡	平成24年度	平成26年度
76	青柳宮上道跡	前橋市青柳町	00325	前橋市00016道跡	平成24年度	—
77	日輪寺諏訪前道跡	前橋市日輪寺町	—	—	調査除外	—
78	諏訪道跡	前橋市日輪寺町	00144	前橋市00016道跡	調査除外	—
79	川原河岸道跡	前橋市川原町・日輪寺町	00807	前橋市0903道跡	平成24年度	平成28年度
80	川原山下(道東)道跡	前橋市川原町	00808	前橋市0903道跡	平成24・25年度	平成28年度
81a	間根畑ヶ沢道跡	前橋市間根町	00802	前橋市0903道跡	平成24年度	平成26年度
81b	間根畑中道跡	前橋市間根町	00803	前橋市0903道跡	平成24年度	平成25年度
82	田口下田尻道跡	前橋市田口町	00804	前橋市0908道跡	平成23・25年度	平成28年度

第3節 調査に至る経緯

上武道路7工区の発掘調査は、上京唐ノ堀遺跡を最後に平成16年度末で終了した。その後の工事は順調で、県道前橋大胡線までの供用が間近に迫っていた。さらに同16年度には、国道17号の混道から西の前橋渋川バイパスが着工されたことから、8工区は、開通部分と前橋渋川バイパスとの間に残された格好となり、早期着工を待ち望む声が一段と強まった。

8工区が建設に向けて動いたのは、平成18年度に入ってからである。国土交通省による路線測量、関係機関との調整や地元への協力要請を経て、用地取得等の工事着工準備が起点側から始まった。これまでの調査状況からみて、埋蔵文化財が用地内にあることは明確であったことから、埋蔵文化財の発掘調査を実施するための調整がおこなわれた。

埋蔵文化財の発掘調査について実施に向けての協議が、国土交通省関東地方整備局長と群馬県教育委員会教育長、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団理事長との間で行われ、平成18年2月16日付で「一般国道17号(上武道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査(その3)の実施に関する協定書」(以下、「協定書」という。)が三者の間で締結された。これによって、群馬県教育委員会の調整を経て、埋蔵文化財の発掘調査を財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が受託することとなった。

協定書では、協定の適用区間、発掘調査の実施場所・対象面積が示され、平成18年10月1日～平成29年3月31日に発掘調査を完了させることが明記された。なお、「協定書」は、平成18年6月20日付で、調査期間の開始を3ヶ月前倒しとする変更のための「変更協定書」が締結されて、現在に至っている。この「変更協定書」に基づいて、平成18年7月から東端の上京唐ノ堀遺跡・上京新田塚遺跡群の発掘調査が開始された。

また、各遺跡が発掘調査に入る前には、調査範囲と調査面積の確定、調査期間や経費算定のため、群馬県教育委員会文化財保護課により、平成18年4月25・26日、同年5月17・18日、同年8月11日、同年12月5～7日、平成19年8月16～27日、同年12月10日～14日、平成21年1月6日～8日、同年4月20日～5月7日、同年9月25～29

日、平成22年12月6～20日、平成23年5月12～23日、同年8月22日～24日、同年10月18日の13回にわたって、8工区の試掘調査が実施された。

田口下田尻遺跡の試掘調査は、平成22年12月6～20日に行われ、50ヶ所の試掘溝で奈良・平安時代の竪穴住居や溝を複数確認したが、近世以降の大規模な河道跡により大きく削られていた。試掘調査により竪穴住居が確認されたことから、群馬県教育委員会文化財保護課は、本遺跡の事業区域内で本調査が必要と判断した。

第4節 発掘調査と資料整理の方法

1. 埋蔵文化財包蔵地

文化財保護法第95条では「国及び地方公共団体は、周知の埋蔵文化財包蔵地について、資料の整備その他その周知の徹底を図るために必要な措置の実施に努めなければならない。」としている。ここでいう埋蔵文化財包蔵地とは、地下に埋蔵されている文化財を包蔵する範囲を呼び、遺跡は概ね埋蔵文化財包蔵地に相当する。

田口下田尻遺跡は、群馬県前橋市に所在することから前橋市教育委員会により登録・管理されている。その周知は、前橋市教育委員会と群馬県教育委員会により行われ、前者は「前橋市遺跡分布地図―市内遺跡詳細分布調査報告書」(平成25年3月発行)、後者はWebでの「マッピングぐんま」(作成は平成27年6月)で遺跡の情報が公開されている。

田口下田尻遺跡は、前橋市田口町106番地他に所在し、遺跡名は前橋市0008遺跡、遺跡№は0008の埋蔵文化財包蔵地に含まれる。前橋市0008遺跡の時代は古墳、奈良、平安、中世、近世で、種別は集落、生産遺跡である。前橋市0008遺跡は南と西を桃ノ木川、北は法華沢川、東は細ヶ沢川の範囲内にある微高地上に立地し、西から田口上田尻遺跡、田口下田尻遺跡、関根赤城遺跡の調査遺跡を含んでいる。

2. 調査区の位置

調査区及び遺構や遺物の位置は、グリッドと呼ばれる方眼で面的に把握し、グリッドを構成する座標を使って点としての位置を表した。グリッドは国家座標(世界

測地系)第IX系を利用し、上武道路8工区に1区画1km四方の大グリッドを設定し、東南から北西へ1から13の番号を付した。田口下田尻遺跡は12・13の大グリッドの境界に位置する(第4図)。大グリッドは、さらに1区画100m四方の中グリッドに100分割した。

中グリッドは、大グリッドの南東隅を起点にして、東から西に向かって1～10の番号を付し、また起点に戻り北に1柵ずらして11～20の番号を付す方法を繰り返し1～100に区分した。中グリッドは、さらに1区画5m四方の小グリッドに400分割した。

小グリッドは、調査区における最小の基本単位となる区画である。小グリッドは、中グリッドの南東隅を起点として東から西に向かってA～Tの記号を付し、同時に南から北に向かって1～20の番号を付して、A1～T20に区分した(第5図)。

発掘の調査区は、発掘作業の工程上で分けられた作業区の区分で、廃土や調査時期などの工程を勘案して付けられる。集落など遺構が一定の範囲に広がる遺跡を人為的に区分したものであるが、発掘調査の記録は調査区毎に行われるため、本報告書では発掘区とグリッドにより遺構や遺物を把握した。田口下田尻遺跡の調査区は、国家座標(世界測地系)第IX系のX=48,945～49,144、Y=-70,040～-70,297の範囲内にある(第6図)。

3. 発掘調査の方法

発掘調査は、調査担当者の監督下で重機により表土を掘削し、遺構の検出作業は発掘作業員による人力の掘削により行った。

遺構検出前で検出された遺構の分布や重複、埋土の観察から発掘調査の工程を計画し、遺構には原則として埋土を観察する帯を設定してから、人力による掘削を行った。なお、重機による掘削は作業委託で行われ、遺構の人力掘削は請負による遺跡掘削工事で実施した。

遺構の地層断面は、調査担当者が層相や色調、土壌等の観察を行い、その所見を記録した。

発掘した遺構は、調査担当者が埋土の地層断面、遺物の出土状況、全景を撮影して記録した。写真の撮影は一眼レフのデジタルカメラと中判カメラを使用し、デジタルデータと写真フィルムで記録した。調査区的全景はラジコンヘリコプターを利用した空中写真撮影を行い、そ

の業務を測量会社に委託した。

発掘した遺構は、断面図や遺構平面図を必要に応じて作成した。遺構は原則として20分の1の平面図で記録し、土坑や溝等の遺構は20・40分の1の平面図を作成した。なお、遺構の測量作業は、遺構平面図と断面図の一部を測量会社に委託した。

4. 資料整理の方法

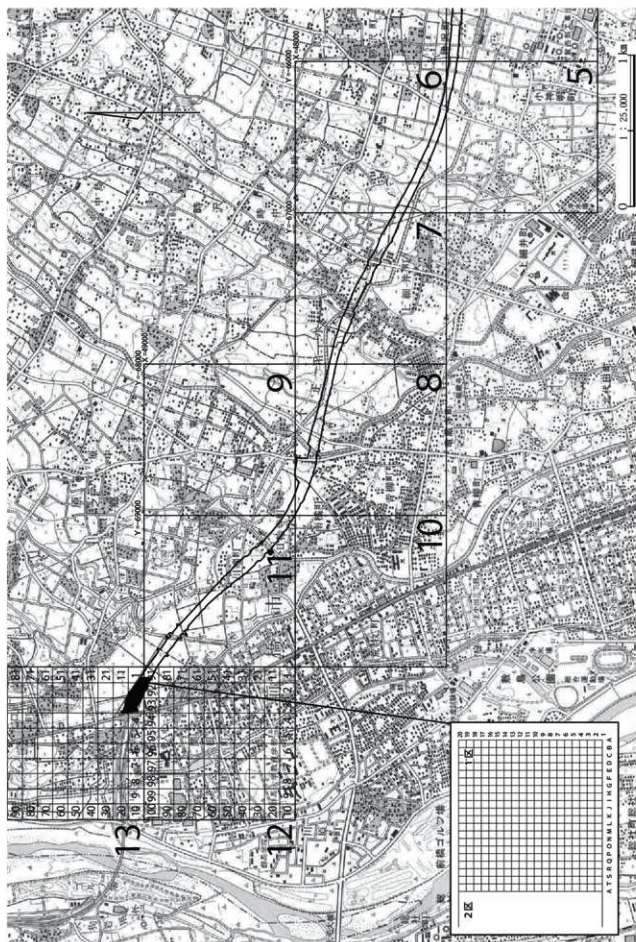
遺構平面図や断面図は調査区・遺構種毎に整理し、書類袋に入れて収納した。測量したデジタルデータはCD-ROMなどのメディアに保管した。

撮影した写真はフィルムケースに収納し、デジタルデータは調査区、遺構名、遺構番号、撮影方向、撮影内容などを数値化したファイル名に変換してDVD-ROMやハードディスクなどのメディアに保管した。

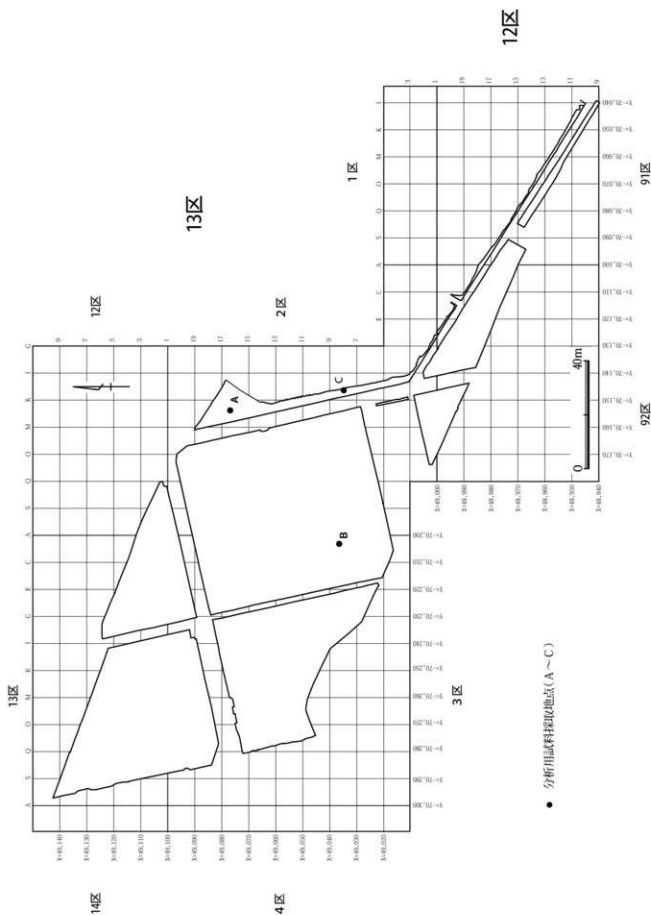
出土した遺物の整理は、遺構や包含層などを対象に土器や陶磁器、石製品の破片を接合して復元した。報告書に掲載した遺物は、遺構の埋没当初に堆積したものや遺構の年代を決定する根拠となる遺物を抽出して選択した。なお、報告書に掲載しなかった遺物は遺構や出土位置、種別、器種などを観察した後に遺物収納箱に整理して収納した。

報告書に掲載した土器や石製品、鉄製品は、デジタルカメラで撮影を行った後に遺物実測図を作成した。土器や石製品の遺物実測図は等倍で作成し、完形の土器は三次元計測システムを使用して実測図を作成した。作成した遺物実測図はトレースしたものをスキャナーで読み込んで編集した。

土器や石製品、鉄製品の観察記録は、表にまとめて観察表を作成した。土器の口径、底径、高さは遺物実測図から読み取り、陶磁器の観察は文様や整形技法などの特徴を記載した。石製品の石材はルーペを使用した肉眼観察により行い、風化面や割れた断面の観察による所見から分類した。



第4図 大・中グリッド設定図(国土地理院1/25,000地形図「波川」平成14年発行、「前編」平成22年発行を使用)



第5圖 グリッド設定図



第6図 田口下田尻遺跡の範囲(1/2,500前橋市現形図平成21年測図を使用)

第5節 調査面と調査区の設定

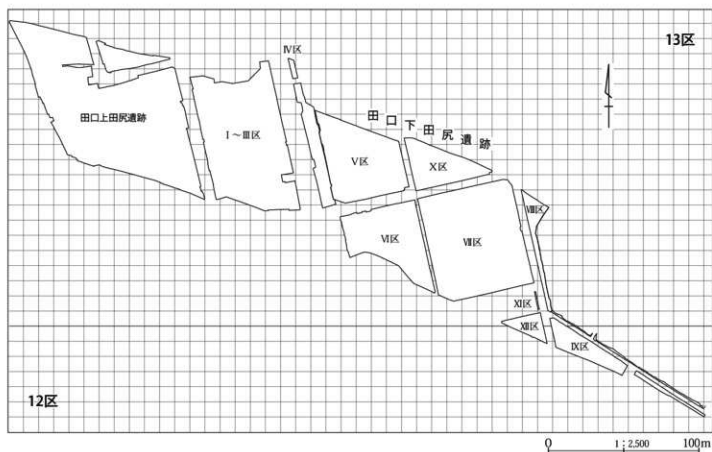
田口下田尻遺跡は、利根川旧流路にあたる広瀬川低地帯に位置し、旧利根川が形成した自然堤防の微高地から後背湿地の低地にかけて立地する。

発掘調査は文化財保護課の試掘調査を基にして最大2面の遺構検出面を設定した。これらは江戸時代の天明噴火に伴う泥流堆積物に覆われた遺構やそれ以降に形成された遺構群からなる1面、微高地に形成された古墳時代前期から近世の遺構群からなる2面からなる。なお、田口下田尻遺跡の層序に関しては第2章3節の調査区の層

序で述べる。

田口下田尻遺跡の調査区は、道路や水路で区画された区域をV～XII区に8区分した。これは発掘調査が工程上、廃土等を仮置きして発掘を順次進めるために、作業区として区分した調査場所を順次調査を進めるためである。

なお、田口下田尻遺跡I～IV区は、当事業団が一般国道17号(前橋渋川バイパス)改築工事に伴って平成17年度から21年度にかけて調査しており、平成23年度に調査報告書(事業団報告書527集)を刊行していることから、今回はこの調査成果を踏襲し田口下田尻遺跡IV区の東からV～XII区に設定した(第7図)。



第7図 調査区設定図

第6節 発掘調査と資料整理の経過

1. 発掘調査の経過

田口下田尻遺跡の発掘調査は、平成23年度と平成25年度に行われ、延べ調査期間は16か月、発掘調査の総面積は15630.4㎡に及ぶ。平成23年度調査は平成23年5月1日から平成24年3月31日にV～IX区で実施した。平成25年度調査は平成25年4月1日から平成25年8月31日にX～XII区で実施した。以下に発掘調査の経過を示す。

平成23年(2011)

【5月】

- 1日 調査担当者が着任。
- 9日 安全柵の設置、VII区の表土掘削を開始。
- 12日 調査事務所を設置。
- 17日 作業員による遺構検出作業を開始。
- 20日 VIII区の表土掘削を開始。
- 31日 VII区で復旧痕の調査を開始。

【6月】

- 3日 VII・VIII区1面の空中写真撮影。
- 10日 VII区鍛冶遺構の調査を開始。
- 15日 IX区の表土掘削を開始。
- 24日 VII区の遺構精査を開始。

【7月】

- 6日 VII区56号住居の遺構精査が進む。
- 12日 VIII区で壁面の安全対策。
- 21日 調査区の排水作業を開始。

【8月】

- 8日 VIII区31号住居の精査が進む。
- 9日 12日まで猛暑日(37℃)が継続。
- 23日 VIII区57号住居の遺構精査。
- 29日 VIII区43号住居の遺構精査。

【9月】

- 9日 VIII区2面の空中写真撮影。
- 16日 VIII区の遺構検出を開始。
- 29日 VIII区45号住居の遺構精査が進む。

【10月】

- 11日 VII・VIII区の遺構精査が進む。
- 20日 VIII区70号住居の遺構精査。
- 27日 IX区の遺構検出を開始。

【11月】

- 1日 V区の表土掘削を開始。
- 7日 VIII区でテフラ分析の調査。
- 15日 VII・IX区2面の空中写真撮影。
- 16日 V区の遺構検出を開始。
- 24日 VIII区103号住居の遺構精査。
- 29日 V区の空中写真撮影。

【12月】

- 1日 VI区の表土掘削を開始。
- 6日 V区2面の遺構検出を開始。
- 12日 IX区の表土掘削を開始。
- 21日 V・VII～IX区の遺構精査。

平成24年(2012)

【1月】

- 6日 V・VI・VII・IX区の遺構精査。
- 25日 V・VI区の遺構精査。
- 31日 V区17号土坑の遺構精査。

【2月】

- 8日 VI区14号住居の遺構精査が進む。
- 15日 V区31号住居の遺構精査。
- 24日 VI区32号住居の遺構精査。

【3月】

- 1日 除雪作業を開始。
- 7日 V・VI区の遺構精査。
- 15日 V・VI区2面の空中写真撮影。
- 27日 遺跡全景の空中写真撮影。



写真1 VII区3号住居調査風景

28日 V・VI区の埋戻しを開始。

31日 事務所を解体して撤収。

平成25年(2013)

【4月】

8日 担当者が着任し、現地で打ち合わせ。

19日 XII区の表土掘削を開始。

22日 X区の表土掘削を開始。

25日 XII区の遺構検出を開始。

【5月】

1日 XI区4号住居の遺構精査が進む。

14日 X～XII区の遺構精査。

20日 XI区の調査が終了。

27日 XII区鍛冶遺構の精査。

【6月】

5日 X・XII区の遺構精査。

20日 X区1号住居から出土した炭化材の樹種同定調査。

24日 XII区4号住居の遺構精査。

【7月】

8日 X・XII区1面の空中写真撮影。

11日 XII区の農道付け替え作業。

17日 鍛冶関連遺物の選別作業。

24日 X・XII区の遺構精査。

【8月】

9日 X・XII区2面の空中写真撮影。

19日 X・XII区の遺構精査が終了。

22日 XII区の調査が終了。

26日 調査区の埋戻し。

30日 調査区の埋戻しが終了し、事務所を解体して撤収。

2. 資料整理の経過

田口下田尻遺跡の資料整理は、平成25年4月1日～3月31日、平成26年4月1日～3月31日、平成27年4月1日～3月31日、平成28年4月1日～平成29年1月31日まで行い、延べ4年間の期間に亘って整理業務を行った。

平成25年度の資料整理は、主にV～IX区から出土した遺物の接合・復元作業、遺物の写真撮影や実測作業を行った。またV～IX区の遺構は、平面図や遺構写真の編集作業を中心に行った。平成26年度の資料整理はX～XII区から出土した遺物の接合・復元作業、遺物の写真撮影や実測作業を行った。またX～XII区の遺構は平面図や遺構写真の編集作業を中心に進め、V区から遺物実測図のトレース作業や遺物観察を開始した。

平成27年度の資料整理は、遺構平面図の編集を中心に、遺物実測図のトレース作業を進め、報告書のレイアウト作成とデジタル編集を行いながら本文の執筆を行った。

平成28年度の資料整理は、整理期間の最終盤に相当し、報告書のレイアウト完成後に全体のデジタル編集作業及びデジタル組版を行い、印刷・製本を委託して発掘調査報告書を刊行した。また、整理した遺物や写真は管理台帳を作成し、今後の活用へ備えた遺物や資料類の収納作業を行ってすべての整理業務を終了した。

3. 資料整理で変更した遺構名称と番号の対照

発掘調査で付けた遺構の名称及び番号は資料整理の過程で必要に応じて削除や変更を行った。調査区で記録された発掘資料は、後日の資料整理で内容の検討や解析を行い、その結果、必要に応じて変更や欠番化が行なわれる。発掘調査報告書の刊行後に掲載遺物を調べる場合、調査資料の原図には付け替え前の番号で検索することが可能である。巻末の第16表に遺構名称と番号の対照表を掲載した。



写真2 X区1号住居調査風景

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

田口下田尻遺跡は、前橋市北部の桃ノ木川北東に位置し、旧利根川が形成した広瀬川低地の微高地から低地に立地している(第8図)。

遺跡が所在する前橋市は、平成の大合併で平成16(2004)年12月に旧勢多郡の大胡町、宮城村、粕川村が合併し、さらに平成21(2009)年5月に旧勢多郡の富士見村を合併して成立した。なお、これにより『倭名類聚抄』に記された「勢多郡」が千年の歴史をもって消滅した。この間に前橋市は平成21年に群馬県初の中核市に移行した。

前橋市は群馬の県庁所在地で、政治や経済、文化の中心都市として、多くの行政機関や金融保険業などのサービス産業が集積している。『平成26年度群馬県市町村要覧』によると、産業就業別人口においては第3次産業人口の割合が高く、71.5%を占めている。

前橋市北部の地形を概観すると、北東部に赤城火山の山麓、南西部は榛名山南西麓から連続する扇状地上の台地である前橋台地。そしてそれらに挟まれた旧利根川が形成した低地帯である広瀬川低地からなる。現在の利根川は前橋台地を刻む谷状の流路を流れている。

赤城火山の火山活動は、約50万年前の古期成層火山形成期、約20万年前の新期成層火山形成期、5.5万年前の山頂カルデラ形成を経て、4.5万年前からの中央火口丘形成期からなる。

古期成層火山形成期にはスコリアの噴出や溶岩により大規模な成層火山が形成され、標高2,000m以上に達したと推定される。その後、22万年前に山体崩壊による岩屑なだれが起き、南麓から南西麓にかけて多田山や権現山、桶山などの流れ山が形成された。

古期成層火山形成後は、長い活動休止期があり山体の浸食が進んだ。新期成層火山の山体は溶岩から構成され、浸食の進んだ古期成層火山を覆っている。

中央火口丘形成期には、4.5万年前にはカルデラ内で大規模な噴火が発生し、噴出した軽石は太平洋岸に達し

た。これは「鹿沼土」と呼ばれる赤城鹿沼テフラである。その後、地蔵岳などの中央火口丘群が形成された。中央火口丘群の形成後は、赤城白川に火山麓扇状地が形成され、縄文時代には広瀬川低地を埋めて新期扇状地が形成された。

前橋台地は、浅間山の黒斑火山の山体崩壊によって引き起こされた前橋泥流堆積物によって形成され、その上位には前橋泥炭層が堆積する。これらの上位には一部で上部ローム層や黒色土が覆う台地と前橋泥炭層の上位に総社砂層が堆積して形成された台地が見られ、前橋台地は二面の台地面を構成している。そうした意味から前橋台地は、利根川が赤城や榛名山麓の間から関東平野北西縁を通過する場所に広がる合成扇状地でもある。

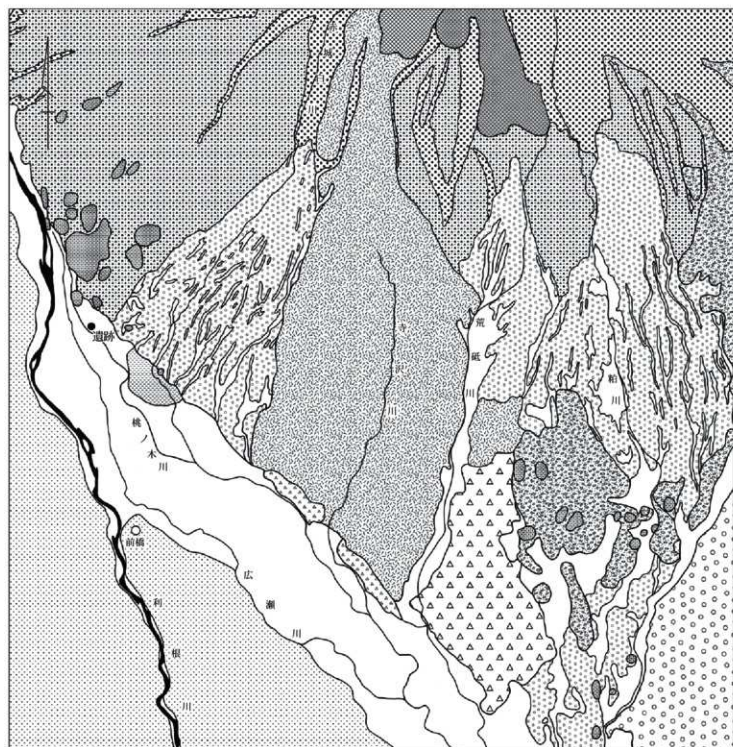
前橋台地の前橋泥流堆積物の上下には、浅間板鼻褐色テフラ2と3が確認されており、前橋泥流の堆積年代は2.3万年前と推定される。

前橋台地と赤城火山麓との間に位置する広瀬川低地帯は、旧利根川が2.05万年前から流れたことにより形成された。流路が変化した理由は、榛名山の陣場岩屑なだれにより当時の流路が埋積されたことによる。

田口下田尻遺跡は、広瀬川低地帯の微高地から低地に立地し、西側ほど比高が高い。これは広瀬川低地内に形成された自然堤防の一部を江戸時代の天明泥流堆積物が覆い、現利根川の左岸側がいわゆる土石流堤防の地形を呈しているためと思われる。

田口下田尻遺跡の周辺では更新世末から榛名山や浅間山の火山噴出物が流下し、そのたびに利根川の流路が変更された。このため河川と火山噴出物が織りなす様々な地形の変化が生まれた場所であり、いわば利根川が関東平野に注いでいく口の位置に相当している。

このようなことから本遺跡周辺は、旧利根川の自然堤防である微高地と後背湿地である低地や旧河道と現利根川沿いの微高地が地形を構成する要素となっている。明治43年(1910)に大日本帝国陸地測量部により発行された「二万分の一地形図前橋及び高崎近傍(5号)」では、現在の国道17号にあたる前橋馬車鉄道を境に西側が畑、東側が水田となり、その高低差は明確である。



凡例

0 2 km

- | | | | |
|--|------------------|--|------------------------------------|
| | 白川扇状地堆積物(新期・完新世) | | 火山扇状地堆積物(後期更新世後半) |
| | 噴削山溶岩 | | 大規模大砂流堆積物 |
| | | | 爆發的な山頂噴火期の大砂流堆積物(後期更新世前半) |
| | | | 爆發的な山頂噴火期以降の火山扇状地 |
| | | | 梨木岩割なだれ堆積物 |
| | | | 梨木岩割なだれ堆積物中の泥流丘 |
| | | | 克山溶岩 |
| | | | 古期成層火山～爆發的な山頂噴火期の火山砕屑物(中期～後期更新世前半) |
| | | | 相模川砂礫層及び谷底平野の堆積物(後期更新世末～完新世) |
| | | | 徳丸ラハール堆積物 |
| | | | 標名火山・前橋台地 |
| | | | 大間々扇状地 |

第8図 道跡周辺の地形と地質

第2節 歴史的環境

1. 旧石器時代

田口下田尻遺跡周辺の遺跡の分布と一覧を示す(第9図・第3表)。

遺跡周辺の旧石器時代の遺跡は、近年の上武道路建設に伴う調査で遺跡数が増加しているが、その分布は希薄である。遺跡周辺の旧石器遺跡は赤城火山の南西麓の緑に分布し、この地域は旧利根川と赤城山麓の境界に位置する場所からなる。青柳宿上遺跡(11)では浅間板鼻黄色テフラの下から黒色頁岩製石器2点が出土し、新田上遺跡(18)では珪質頁岩と黒色安山岩の石器109点が出土した。前橋市の鳥取福蔵寺II遺跡では珪質頁岩を中心に石器350点が出土した。また、前橋市の胴城遺跡では浅間板鼻黄色テフラと浅間大窟沢Iテフラの間から黒曜石を中心に石器79点が出土し、上細井蜷山遺跡(13)や上細井中島遺跡(13)では浅間大窟沢テフラの前後から頁岩製の剥片が出土している。

2. 縄文時代

縄文時代になると周辺の遺跡は増加する。とくに縄文時代前期の遺跡数は増加が著しく、中期以降は次第に減少に転じている。縄文時代草創期の遺物は前橋市の堤遺跡や小神明遺跡群湯気遺跡、端気遺跡群、小神明勝沢境遺跡から石器などが出土している。

縄文時代早期の集落は渋川市の城山遺跡で確認され、上細井中島遺跡(13)では縄文時代早期の竪穴住居や灰跡が検出された。早期の遺物は前橋市の上細井五十嵐遺跡や端気遺跡群から燃土土器、土子遺跡から条痕土器が出土したほか、青柳宿上遺跡(11)や引切塚遺跡(11)で縄文時代早期の遺物包含層が検出された。

縄文時代前期の遺跡は赤城火山の南西麓に多く分布している。下庄司原西遺跡、下庄司原東遺跡、上庄司原東遺跡、富士見地区遺跡群陣場遺跡(5)や上細井蜷山遺跡(13)、富士見地区遺跡群愛宕山遺跡(39)、富士見地区遺跡群田中田遺跡(40)・前橋市の上細井五十嵐遺跡や芝山遺跡、渋川市の下箱田向山遺跡などから集落が確認されている。

縄文時代中期に入ると遺跡数は減少に転じる。上細井中島遺跡(13)や新田上遺跡(18)、瓜山遺跡(74)などで集落が確認されている。縄文時代後期から晩期の遺跡は少ない。前橋市の堤遺跡や小神明遺跡群九科遺跡、鳥取福蔵寺遺跡などで後期の集落が確認されたほか、青柳宿上遺跡(11)や引切塚遺跡(11)では晩期の千綱式土器が出土している。

3. 弥生時代

弥生時代の遺跡数は、縄文時代晩期に続いて少なく、分布は赤城火山の南西麓などに限られる。弥生時代の遺跡は後期が多い。新田上遺跡(18)から中期、前橋市の小神明遺跡群湯気遺跡、倉本遺跡から中期～後期、土子遺跡から後期の集落が検出された。青柳宿上遺跡(11)からは弥生時代中期の遺物が出土している。

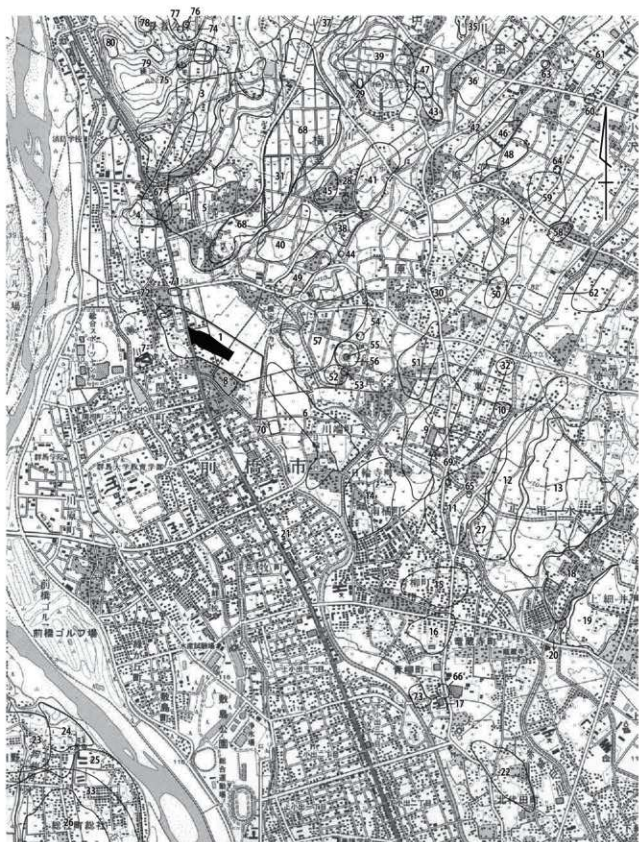
田口下田尻遺跡が立地する旧利根川沿いには、旧石器から弥生時代の遺跡が皆無である、これは遺跡周辺が当時の河川域にあたり集落を営む環境になかったことが上げられる。

4. 古墳時代

古墳時代になると周辺の遺跡数は増加し、赤城火山の南西麓から平野部に遺跡の分布が広がる。古墳時代前期の集落は下庄司原東遺跡(5)や田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡(1)、引切塚遺跡(11)、富士見地区遺跡群田中田遺跡(40)などで検出されている。上庄司原西遺跡(5・68)では集落に近接して周溝墓が検出された。山王・柴遺跡群(11・12)からは浅間Cテフラで埋まった高が検出され、古墳時代初期の生産域の存在が明らかになった。

古墳時代中期の集落は田口上田尻遺跡・田口下田尻遺跡(1)、富士見地区遺跡群田中田遺跡(40)などで検出されている。山王・柴遺跡群(65)では方墳と小石塚墓が検出され、周溝には榛名二ツ岳渋川テフラが堆積しており、その年代5世紀後半と推定される。

古墳時代後期から飛鳥時代の集落は下庄司原東遺跡(5)、田口上田尻遺跡、田口下田尻遺跡(1)、青柳宿上遺跡(11)、引切塚遺跡(11)、南橋東原遺跡(14)、富士見地区遺跡群田中田遺跡(40)などで検出された。また、九十九山古墳(富士見村16号古墳)(55)は前方後円墳で6世紀前半と推定される。山王・柴遺跡群(65)からは6



第9図 周辺遺跡分布図(国土地理院1/25,000「渋川」平成14年発行、「前橋」平成22年発行を使用)

第2章 周辺の環境

第3表 田口下田尻遺跡周辺遺跡一覧表

遺跡名・名称・I D			旧石	縄文	弥生	古墳	奈良	中近	近代	種別・概要	文献	
1	田口上田尻遺跡 田口下田尻遺跡 関根赤城遺跡	前崎市0008遺跡	04605							集落、生産遺跡。古墳～平安住居623、624、近世 後Ⅱ期Ⅶ1、水田区など。	本報告書	
			04606									
			04507									※1
			04571								集落、生産遺跡。古墳Ⅱ1、平安住居30など。	11
2	前崎市0001遺跡	02245							散布地。			
3	前崎市0002遺跡	02235							散布地。			
4	前崎市0003遺跡	04275							散布地。			
5	千手堂遺跡 田口八幡Ⅰ遺跡 田口八幡Ⅱ遺跡 天神窪遺跡 八幡遺跡 富士見地区遺跡群 陣場遺跡 下江司原西遺跡 下江司原東遺跡 上江司原西遺跡 上江司原東遺跡 上江司原北遺跡 家野下原遺跡	前崎市0004遺跡	00012							集落。		
			00013							集落、平安住居14など。	52	
			00014								集落、生産遺跡。平安住居24など。	53
			00017							集落。		
			00032							集落。		
			02917							集落、縄文住居24、平安住居73など。	20	
			02920							集落、縄文住居4、平安住居20など。		
			04506							集落、縄文住居6、古墳住居10、奈良平安住居41など。		
			02923							集落、古墳住居6、奈良平安住居6など。		
			02925							集落、縄文住居4、平安住居7など。		
	02928			不	明				集落。			
	02942								散布地。			
	00044								集落。			
6	田端榎戸遺跡 川端山下遺跡 関根瀬ヶ沢遺跡 白輪今観音前遺跡	前崎市0903遺跡	04563							集落、城跡、散布地、生産遺跡。	本報告書	
			04564							集落。	※1	
			04572							集落、生産遺跡。古墳Ⅱ7、水田2、平安住居149、 溝36、製鉄炉3、鍛冶1、中近世溝22、サケ煎8、餅 作痕4など。	13	
										集落、生産	※1	
7	関根内山遺跡	前崎市0009遺跡	02126						生産遺跡。江戸期8、溝1など。	42		
8	関根の宮区 堀久保遺跡	前崎市0010遺跡	00309							城跡。	55	
		前崎市0011遺跡	02955							集落。	24	
9	堀久保A遺跡 堀久保B遺跡 堀久保C遺跡 堀久保D遺跡 堀久保Ⅱ・Ⅲ遺跡 堀久保Ⅲ遺跡 原之郷新田遺跡		02956							集落、古墳住居1、中近世溝1など。	24,27	
			02957									
			02958								集落。	28
			02959									
			02960								集落。	32
			02961									
			02975								集落。	31
			02973								集落。	23,34
			02974			不	明					
			02980								散布地。	34
	02247								散布地。			
	04593								散布地。			
10	原之郷千石山遺跡	前崎市0012遺跡	02986							散布地。	26,30,33	
11	青柳遺跡 青柳百土遺跡 引切塚遺跡 引切塚Ⅱ遺跡 山王・柴遺跡群	前崎市0013遺跡	00283							集落、古墳住居1。	46	
			00284							集落、旧石器、縄文住居1、古墳住居29、縄文早期 包含層など。	14,46	
			00336							集落、古墳住居29、奈良住居3、縄文早期包含層など。	14,36	
			04557									
			00338							集落、古墳住居2など。	37	
			03705									
12	神明A遺跡 神明B遺跡 念仏遺跡 山王・柴遺跡群	前崎市0014遺跡	00302							集落、As-B下水田?	15	
			00303							集落。		
			03052							散布地。		
			04555							集落、As-B下水田?	15	
	02248							散布地。				
13	時沢西森林遺跡 時沢西森林Ⅱ遺跡 上藤井中島遺跡 上藤井嶺山遺跡	前崎市0015遺跡	03075							集落。	34,35	
			03076									
			04492							集落。		
			03864							集落、縄文住居7、平安住居7、縄文早期包含層など。	9	
	03865							集落、旧石器、縄文住居1、平安住居25など。	8			
	02320							散布地。				
14	滝沼遺跡 南橋東原遺跡	前崎市0016遺跡	00305							集落。		
			02127							集落、古墳～平安住居52など。	54	
15	前崎市0031遺跡 青柳宿前遺跡	前崎市0032遺跡	02250							散布地。		
			02285							集落。	39	
	青柳宿前Ⅱ遺跡		02798									
			01311							集落、平安住居12など。	40	
17	青柳寄居遺跡	前崎市0033遺跡	00288							集落、平安住居12など。	48	

道跡名・名称・I D		旧石	縄文	弥生	古墳	奈良	中近	近代	種別・概要	文献	
18	新田上遺跡	前橋市0034道跡	0000	○	○	○	○	○	集落。旧石器ブロック6、縄文住居13、配石1、古墳住居2、平安住居31など。	12	
	時沢四ツ塚遺跡		0451		○	○			散布地。		
	時沢原谷戸遺跡		0309		○	○			集落。	32	
19	王間久保遺跡	前橋市0035道跡	00293	○	○	○			集落。		
	薬師遺跡		00343	○	○	○			集落。		
	時沢宮東遺跡		03068		○	○			集落。	33, 35	
	時沢西高田遺跡		03069								
			03070			○				集落。	27, 28, 31
			03071								
	時沢西高田B遺跡		03072								
	時沢西高田B遺跡		03073			○			集落。	28	
	時沢西畑屋谷戸遺跡		03077			○	○		集落。	30	
			03078								
上町・時沢西畑屋谷戸遺跡		03862			○	○		集落。古墳～平安住居47など。	10		
王久保遺跡		03863			○	○		集落。古墳～平安住居25、平安遺跡1など。	7		
		04094			○	○		集落。			
20	八幡山の砦	前橋市0036道跡	00334			○	○	城跡。	55		
21	八幡前遺跡	前橋市0063道跡	01312			○	○	散布地。			
22		前橋市0068道跡	02253	○	○	○		散布地。			
23	若宮遺跡	前橋市0115道跡	00263			○	○	集落。平安住居14、溝3など。	49		
	植野小間土遺跡		04599		○			集落。			
24	鹽山城	前橋市0116道跡	00443			○	○	城跡。	5		
25	元景寺跡遺跡	前橋市0124道跡	00078			○	○	城跡。			
	総社城		00154			○	○	城跡。	55		
			01383			○	○	城跡。	43		
26	総社町屋敷南遺跡	前橋市0125道跡	03879	○	○			集落。	45		
	宝唐山古墳		04509		○			集落。	3, 44		
27	南橋村41号古墳	前橋市0126道跡	02797		○			古墳。	3		
	神明古墳		04615		○			古墳。			
28	横室古墳(富士見村13号古墳)	前橋市0589道跡	02943		○			古墳。	3		
29	富士見地区遺跡群	前橋市0591道跡	02950		○			古墳。	22		
	初室古墳(富士見村7号古墳)										
30		前橋市0595道跡	04351			○	○	集落。			
			04352			○	○				
31	陣場	前橋市0596道跡	02953				○	城跡。	5		
32	原之郷白川遺跡	前橋市0599道跡	02983		○			散布地。			
33	遠見山古墳(総社村6号古墳)	前橋市0603道跡	04444		○			古墳。	3		
	総社7号古墳(総社村8号古墳)		04443		○			古墳。	3, 38		
	宝塚山古墳(総社村9号古墳)		04447		○			古墳。	3, 47		
	愛宕山古墳(総社村10号古墳)		04445		○			古墳。	3, 46		
	総社二子山古墳(総社村11号古墳)		04446		○			古墳。	3, 4		
	稲荷山古墳(総社村12号古墳)		00016		○			古墳。	3, 51		
34	前橋市0639道跡	04454				○		散布地。			
	引田高塚遺跡	前橋市0725道跡	02843	○		○		集落。縄文住居1、平安住居1など。	29, 30		
			02844								
			02850	○	○			集落。	16		
引田諏訪三反田遺跡		02851		○			散布地。				
36	前橋市0726道跡	02845	○		○	○	○	集落。	21		
	赤城遺跡			○							
	富士見地区遺跡群		02938	○	○			集落。縄文住居2、平安住居4など。			
	長泉寺遺跡										
	富士見地区遺跡群		02913	○	○	○	○	集落。縄文住居2、平安住居23、掘立10など。	19		
引田高橋遺跡		02940	○	○			その他。				
37	未野足更遺跡	前橋市0727道跡	02854	○	○			散布地。			
38	横室寄居	前橋市0741道跡	02909			○		城跡。その他。	55, 56		
	富士見地区遺跡群		02914	○		○	○	城跡。その他。中近世溝4など。	18		

第2章 周辺の環境

道跡名・名称・I D		旧石	縄文	弥生	古墳	奈良	中近	近代	種別・概要	文献
39	富士見地区道跡群 愛宕山道跡	02910		○		○			集落、生産。縄文住居12、土坑150、平安院家1など。	22
	富士見地区道跡群 愛宕道跡		02901		○		○	生産道跡。近世採石跡。		
40	横室中道跡	02915		○					生産道跡。	27
	富士見地区道跡群 田中道跡	02930		○	○	○			集落。縄文住居9、古墳住居61、溝1など。	
41	富士見地区道跡群 田中道跡	02936		○	○				集落。縄文住居2、配石1など。	18
42	富士見地区道跡群 久保田道跡	02911		○	○	○			集落。縄文住居6、古墳住居1、奈良平安住居13など。	19
	富士見地区道跡群 白川道跡	02912		○	○	○	○		集落。縄文住居2、古墳住居20、奈良平安住居14、掘立11など。	
43	森山古墳(富士見村6号古墳)	02944			○				古墳。	3
	道上古墳	02945			○				古墳。	
44	笹井古墳(富士見村14号古墳)	02946			○				古墳。	3,16
45	横室新道跡	02948							散布地。	16,31
46	田島城	02952					○		城跡。	55
47	富士見地区道跡群 日向道跡	02939					○		城跡。	22
	森山城(弓田城)	02954					○		城跡。	
48	原之郷鎌塚道跡	02949		○	○				集落。散布地。	26
	田島上の台道跡	02951			○				散布地。	
49	富士見地区道跡群 岩之下道跡	02977		○	○	○			集落。縄文土坑3、古墳住居9、奈良平安住居15など。	18
	横室東(1)道跡	02982			○				散布地。	
50	原之郷崎沢道跡	02962							集落。平安住居2、掘立1など。	26
		02963								
		04597					○		集落。	
51	原之郷車原道跡	02976		○	○				集落。	23
	原之郷後原道跡	02978		○	○				集落。	
52	原之郷袴倉寺道跡	02984		○	○				集落。	28
53	富士見塚1号古墳	03724							古墳。	
54	原之郷ノノ後道跡	02985		○					散布地。	
55	九十九山古墳(富士見村16号古墳)	02987			○				古墳。	3
56	九十九山の岩	02988					○		城跡。	5
57	金山城	02989					○		城跡。	55
58	小沢的場道跡	02995			○	○	○		集落。古墳溝1、平安住居2、中近世溝1など。	25
		02996								
59	原之郷塚河赤道跡	03001		○	○	○			集落。	
60	田島鉄皮林道跡	03011			○				散布地。	
61	十二道跡	03016		○					集落。	
62	時沢中倉道跡	03051		○	○	○			墳墓。	
63	田島清水道跡	03015		○	○				散布地。	
64	鎌塚古墳(富士見村15号古墳)	03012							古墳。	3
65	山王・栄道跡群	04488			○				古墳。	15
66	青柳寄居道跡	03950				○			生産道跡。水田。	48
67	塩原塚古墳	00298			○				古墳。	46
	田江深延木道跡・田江冠木道跡1号古墳(南橋村24号古墳)	01245			○				古墳。	3,41
	富士塚古墳(南橋村28号古墳)	00340			○				古墳。	3
	南橋村32号古墳	02233			○				古墳。	
	南橋村33号古墳	02234			○				古墳。	
	諏訪古墳群	02236			○				古墳。	
	諏訪古墳群B(南橋村34・36・37号古墳)	02237			○				古墳。	
	諏訪古墳群C	02238			○				古墳。	
	冠木古墳群A(南橋村16～22号古墳)	02239			○				古墳。	
	冠木古墳群B(南橋村24～26号古墳)	02240			○				古墳。	

道跡名・名称・I D		旧石	縄文	弥生	古墳	奈良	中近	近代	種別・概要	文献
68	南橋村35号古墳	前橋市0847道跡	02241		○				古墳。	3
	下庄司原1号古墳・富士見村狐塚古墳(富士見村10号古墳)		02921		○				古墳。	3,20
	上庄司原1号古墳(富士見村8号古墳)		03955		○				古墳。	
	上庄司原2号古墳(富士見村9号古墳)		02929		○				古墳。	
	上庄司原3号古墳		02926		○				古墳。	
	上庄司原4号古墳(富士見村11号古墳)		02924		○				古墳。	
	陣場1号古墳(富士見村12号古墳)		02918		○				古墳。	
	陣場2号古墳		02919		○				古墳。	20
	富士見地区道跡群 陣場道跡		03952		○				古墳。内墳2。	
	上庄司原西道跡		03953		○				古墳。塚溝墓1。	
	上庄司原東道跡		03954		○				古墳。内墳2。	
	上庄司原北道跡		04028		○				古墳。内墳1。	
	田口八幡1道跡		04003		○				古墳。内墳1。	52
			04450		○				古墳。	
69	引切塚古墳(南橋村40号古墳)	前橋市0858道跡	00339		○				古墳。	36
	引切塚道跡		04329		○				古墳。	
70	前橋市0865道跡	04169		不		明		散布地。	43	
71	前橋市0901道跡	04583		不		明		生産、その他。		
72	田口上田尻道跡	前橋市0913道跡	04604		○	○	○		水田、生産。	6
73	青柳奇岩	前橋市0943道跡	04670				○		城郭。	56
74	瓜山道跡		○	○					散布地、集落。縄文住居2など。	1,2
75	峠峠道跡		○	○					散布地。	
76	道跡名無し			○					古墳。	
77	道跡名無し			○					古墳。	
78	道跡名無し			○	○				散布地。	
79	道跡名無し			○					散布地。	
80	道跡名無し			○					散布地。	

文献

- 北橋村教育委員会1990『東郷道跡・瓜山道跡』
- 北橋村教育委員会2000『北橋村村内道跡』Ⅶ
- 群馬県1938『上毛古墳踏査』
- 群馬県史編さん委員会1981『群馬県史』資料編3
- 群馬県教育委員会1988『群馬県の中世城跡群』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業所2012『田口上田尻道跡・田口下田尻道跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業所2013『王久保道跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業所2013『上川・時沢西原谷戸道跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業所2013『上川・時沢西原谷戸道跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業所2013『上川・時沢西原谷戸道跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業所2013『上川・時沢西原谷戸道跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業所2013『上川・時沢西原谷戸道跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業所2015『関根赤城道跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業所2015『新田上道跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業所2015『関根畑ヶ沢道跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業所2015『引切塚道跡・青柳奇岩上道跡』
- 群馬県埋蔵文化財調査事業所2016『山王・集落道跡群』
- 富士見村史編さん委員会1979『富士見村誌』続編
- 富士見村教育委員会1986『田中田道跡・宜谷戸道跡・見取道跡』
- 富士見村教育委員会1987『富士見地区道跡群 向吹張道跡・田中道跡・岩之下道跡・奇岩道跡』
- 富士見村教育委員会1989『富士見地区道跡群 白川道跡・由森道跡・久保田道跡』
- 富士見村教育委員会1991『富士見地区道跡群 陣場・庄司原古墳群』
- 富士見村教育委員会1993『富士見地区道跡群 赤城道跡・長泉寺道跡』
- 富士見村教育委員会1994『富士見地区道跡群 愛宕山道跡・初室古墳・愛宕道跡・日向道跡』
- 富士見村教育委員会1997『平成8年度村内道跡』
- 富士見村教育委員会1998『堀久保古墳道跡』
- 富士見村教育委員会1998『小沢の堀道跡』
- 富士見村教育委員会1998『原之郷堀沢道跡』
- 富士見村教育委員会1998『平成9年度村内道跡』
- 富士見村教育委員会1999『平成10年度村内道跡』
- 富士見村教育委員会2001『引田高塚道跡』
- 富士見村教育委員会2001『平成12年度村内道跡』
- 富士見村教育委員会2002『平成13年度村内道跡』
- 富士見村教育委員会2004『平成15年度村内道跡』
- 富士見村教育委員会2006『時沢西原道跡』
- 富士見村教育委員会2007『時沢西原道跡』
- 富士見村教育委員会2009『平成16～19年度村内道跡』
- 前橋市教育委員会1985『引切塚道跡』
- 前橋市教育委員会1993『引切塚道跡』
- 前橋市教育委員会1996『市内道跡発掘調査報告書』
- 前橋市教育委員会2000『市内道跡発掘調査報告書』
- 前橋市教育委員会2001『市内道跡発掘調査報告書』
- 前橋市教育委員会2004『年報』35
- 前橋市教育委員会2007『市内道跡発掘調査報告書』
- 前橋市教育委員会2008『市内道跡発掘調査報告書』
- 前橋市教育委員会2008『市内道跡発掘調査報告書』
- 前橋市教育委員会2009『年報』40
- 前橋市史編さん委員会1971『前橋市史』1
- 前橋市文化財研究所1976『能ヶ山古墳調査概報』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査班1984『青柳奇岩道跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査班1989『若宮道跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査班1996『肥後愛宕山道跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査班1998『稲荷山古墳』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査班2000『田口八幡1道跡』
- 前橋市埋蔵文化財発掘調査班2008『南橋東原道跡』
- 山崎—1971『群馬県古城原址の研究』上
- 山崎—1979『群馬県古城原址の研究』補遺編上

世紀後半～7世紀の円墳と推定される横穴式石室の一部が検出された。その他、前橋市0847遺跡(68)・引切塚古墳(69)などで古墳時代後期の古墳が確認されている。

5. 奈良・平安時代

律令制下において、群馬県域はほぼ上毛野国(和銅6(713)年までに上野国と改称)にあたり、国内には「碓氷・片岡・甘楽・多胡・緑野・那波・群馬・吾妻・利根・勢多・佐位・新田・山田・邑楽」の14郡が置かれた(当初は13郡、和銅4(711)年に多胡郡設置で14郡)。

前橋市域は、ほぼ利根川左岸側が勢多郡、利根川右岸側が群馬郡に属した。勢多郡には「深田、田邑、芳賀、桂萱、真壁、深栗、深澤、時澤、藤澤」の9郷が確認できる。本遺跡の北には真壁(渋川市北橋町真壁)、東には時澤(前橋市富士見町時沢)の地名が存在する。

田口下田尻遺跡の周辺では、田口下田尻遺跡や田口上田尻遺跡(1)、旭久保遺跡(9)、南橋東原遺跡(14)などで飛鳥時代から継続して集落が確認されており、関根細ヶ沢遺跡(6)では鍛冶遺構が検出された。また、王久保遺跡(19)、上町・時沢西組屋谷戸遺跡(19)では古代集落と鍛冶遺構が検出された。新田上遺跡(18)からは集落と集落の中心を東西に走る道路状遺構も検出された。日輪寺観音前遺跡(6)からは平安時代の集落が検出された。青柳寄居遺跡(66)からは平安時代の水田とその下位から古代の集落が検出された。山王・柴遺跡群(11・12)からは浅間Bテフラ下とさらに下位から水田が検出された。

広瀬川の低地内に位置する朝天山祈禱院日輪寺は、寺伝によると弘仁2(811)年創立とされ、観音堂の十一面観世音像は県指定重要文化財に指定されている。隣接する菅原神社は日輪寺の鎮守であったと考えられるが、創立の時期は不明である。

6. 中世と近世

天仁元(1108)年の浅間Bテフラの噴火後に上野国内では荘園開発への動きが活発になる。遺跡の周辺は栞志荘(林荘)または青柳御厨に含まれる可能性が高い。

『富士見村誌』続編は、栞志荘関係資料が日輪寺から西の赤城火山南西麓から西麓にかけて分布することから、この地域を栞志荘(林荘)と推定した。近世の史料で

明和7(1770)年の日輪寺棟札に「上野国勢多郡林正日輪寺村」と記述されている。『南橋村誌』は、神明宮(伊勢宮)や伊勢地名の分布から、前橋市荒牧町や日輪寺町付近から前橋市青柳町を中心とした地域を青柳御厨と推定した。

青柳御厨は、建久3(1192)年の「伊勢太神宮領注文」に「件勤所去長寛年中建立国司奉免了」とあり、長寛年間(1163～65年)に建立され国司の奉免を得ていたことが読み取れる。また、『神風抄』には「青柳御厨 布用段百廿町 建永符八十町」とあり、建永年間(1206～07年)に官符が出され、その規模は田80町であった。また、貞和3(1347)年と宝徳4(1452)年に青柳御厨関係文書が遠江国蒲御厨内安間郷関係文書とともに焼失し、紛失状が作成されたことが『氏経御記』に記されている。

享徳の乱(享徳3(1454)年)以後、関東地方は戦国時代に入り、周辺にはこの時期の城館が存在する。『富士見村誌』続編は、陣場(31)を文明9(1477)年に太田資長が長尾景春と対峙した時の陣跡と推定した。また周辺には、関根の寄居(8)、横室寄居(38)、青柳寄居(73)などの城館遺構が分布している。

地侍が共同して構える寄居は、長尾氏や桐生氏関係に限定して用いられる呼称で、本遺跡周辺のものは長尾氏に關係する地侍のものである。その他、本遺跡周辺には八幡山の砦(20)、田島城(46)、森山城(引田城)(47)、九十九山の砦(56)、金山城(57)などが存在する。これら城館は陣場(31)の他は、16世紀のものである。

第3節 遺跡の層序

1. 層序

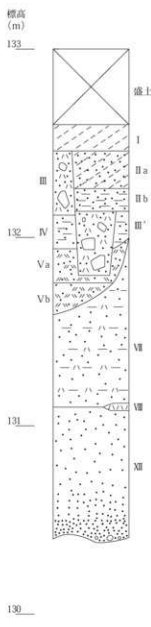
田口下田尻遺跡の地層は、下位より広瀬川砂礫層(新井1971)とそれを覆う前橋台地の表層を構成する堆積物からなる。調査区の層序を第10図に示す。田口下田尻遺跡の層序区分は、本調査区に隣接し、既存の発掘調査地

である田口上田尻遺跡と田口下田尻遺跡の基本土層(椋岡2012)を基にして作成し、その層序区分は前橋台地の層序(矢口1999)を踏襲した。

I層 灰色水田耕作土、表土を構成する。現代の表土上に盛られた碎石や盛土は含まない。

II層 明褐色水田耕作土。褐鉄鉱の汚染帯を呈する水田床土からなり、復旧痕により天明泥流堆積物と反転した旧耕作土を含む。

III層 灰褐色泥流堆積物である。天明3(1783)年の浅間



層序表

盛土

- I 耕作土(表土)
- II a 旧耕作土(水田耕土)
- II b 旧耕作土(反転した泥流下の旧耕作土)
- III' 復旧痕埋土(泥流堆積物の埋め土)
- III 灰褐色泥流堆積物。天明泥流堆積物で復旧痕の埋土から層序は復元した。
- IV 暗灰褐色シルト質土(泥流堆積物下の旧耕土)
- V a 黄褐色砂質土。As-Bを含む。
- V b 暗灰黄褐色砂質土。As-Bを多く含む。
- (VI 灰色軽石質火山礫。As-B。調査区では未検出)
- VII 灰黄褐色泥流堆積物。二ツ岳の白色軽石を多く含む、灰黄褐色軽石まじり砂質土の互層と暗黄褐色土壌。
- VIII 黄灰色細粒火山灰。Hr-FA。
- (IX 灰色軽石を多く含む黒色土。調査区では未検出)
- (X 灰色軽石。As-C。調査区では未検出)
- (XI 黒褐色シルト質土。調査区では未検出)
- XII 黄褐色砂。
- XIII 灰色砂礫。

凡例

第10図 遺跡の層序

山の噴火によりもたらされた天明泥流堆積物からなる。Ⅲ'は泥流堆積物起源のブロック土を主とする埋め土で復旧痕の遺構を構成する埋土である。

IV層 暗褐色耕作土。天明泥流堆積物に覆われた近世後期の土壌帯(前橋A土壌帯)を直上に有する地層である。

V層 暗灰褐～灰褐色の軽石まじりシルト質砂からなる土壌で、下位の色調が暗く軽石が多いVb(前橋D2土壌帯)と上位のVa(前橋D1土壌帯)に細分される。発掘現場では通称「B混」、「Bまじり」と呼ばれている浅間Bテフラを母材とする土壌である。

VI層 暗灰色軽石・スコリア質火山灰～火山礫の互層。天仁元(1108)年の浅間山の天仁噴火により降下した浅間Bテフラからなる。周辺地域では上位に浅間B'(粕川テフラ)が認められる。本層は調査区で未検出である。

VII層 灰～暗灰色火山灰質砂・シルトからなるラハール堆積物。二ツ岳の白色軽石を含み榛名二ツ岳渋川テフラや伊香保テフラに伴う洪水によってもたらされた堆積物である。これらは間に土壌を挟むることにより識別が可能な場合がある。

VIII層 黄灰～黄褐色細粒火山灰層。榛名二ツ岳渋川テフラの降下火山灰である。

IX層 暗灰～黒色の軽石まじり砂・シルトを主とする土壌からなる。灰色軽石は浅間Cテフラからなり、下位にX層が見られない場合は土壌化した降灰層準と考えられる。本層は調査区で未検出である。

X層 灰色軽石質火山礫層。浅間Cテフラからなる。本層は調査区で未検出である。

XI層 暗灰～黒色の砂まじりシルト質土(前橋H土壌帯)である。前後の土壌帯のなかで最も黒味が強く腐食成分に富む。本層は調査区で未検出である。

XII層 黄灰色砂質シルト～砂層。広瀬川砂礫層の一部で、河川が蛇行によって形成した蛇行州を構成する堆積物である。

XIII層 灰色砂礫層。広瀬川砂礫層の最上部を構成する地層で安山岩を主とし閃緑岩、泥質岩等の垂円～垂角礫からなる。

基本土層のI～XIII層は、前橋台地の層序区分に対して以下のように対比される。

I～II層はMb0～1a、III層はMb1c、IV層はMb2a、V層はMb5a～5b、VI層はMb5c(As-B)、VII層はMb6a～Mb7、VIII層

はMb8(Hr-FA)、IX層はMb10a、X層はMb10b(As-C)XI～XIII層はMb11a～Mb18に相当する。

田口下田尻遺跡の調査区の層序対比を第11・12図に示す。西に隣接する田口上田尻遺跡と田口下田尻遺跡の基本土層を標識地に調査区で検出された地層の層序を対比した。

地点1はV区の北西壁に位置し、下位よりXII層の砂層、VII層の二ツ岳の白色軽石を含む泥流状堆積物からなり浅間Bテフラを多く含む土壌のV層が覆う。泥流状堆積物は2～5cm大の白色軽石を多く含み、一部で密集しており礫を含まない。軽石の基質は火山灰質の砂～シルトで、標高132.3mの高さに達している。XII層の砂層は暗灰色の土壌と黄褐色砂の氾濫堆積物の互層からなり5サイクルが認められる。

地点2はX区の北壁西寄りに位置し、下位よりXII層の砂層、VII層の二ツ岳の白色軽石を含む泥流堆積物からなり、天明泥流堆積物起源の埋め土であるⅢ'層が復旧痕を埋める。天明泥流堆積物は径10cm大の安山岩礫を多く含み、泥流が埋めた地表は、復旧痕によって失われているが標高132～133mの範囲内であると考えられる。

地点3はX区の北壁東寄りに位置し、下位よりXII層の砂層、VII層の二ツ岳の白色軽石を含む泥流堆積物からなり、上位をIV～I層が覆う。泥流堆積物は標高132.2mの高さに達し、層厚は84cmである。地点4・5はVII区中央の東西に位置し、下位よりXII層の砂層、VII層の二ツ岳の白色軽石を含む泥流堆積物からなる。地点6はXI区の北寄りで下位よりXII層の砂層、VII層の二ツ岳の白色軽石を含む泥流堆積物からなり、II層の水田耕土が覆う。地点7はXII区の中央で下位よりXII層の砂層、VII層の二ツ岳の白色軽石を含む泥流堆積物からなる。XII層の底下は標高130.4mでその下位にはXII層の砂礫が検出されている。XII層は各地点のXII層底下で検出され、地点7では調査区では最も標高が低い。

田口下田尻遺跡の層序や地形の成り立ちを理解するために既存の発掘調査の成果を集めて、遺跡周辺の上武道路事業地の層序対比を第13・14図に示す。田口上田尻遺跡と田口下田尻遺跡の基本土層を標識地に区分された地層群を周辺遺跡で5区分して対比した。これらは表層を構成する土壌のI～IV層、浅間Bテフラを含有するV・VI層、二ツ岳の白色軽石を含むラハール堆積物のVII層、



第11図 調査区の層序(位置)

浅間Cテフラ前後の土壌であるIX～XI層、広瀬川砂礫層を覆う砂からなるXII層、基盤を構成する広瀬川砂礫層の本体であるXIII層である。層序対比は、田口上田尻遺跡から関根細ヶ沢遺跡間の東西方向の層厚を比較した。

地点A～Fは田口上田尻遺跡と田口下田尻遺跡(事業団2012)の調査区北寄りを走行する場所に位置する。標高131～133mにXII層の砂層が検出され、VII層の二ツ岳の白色軽石を含むラハール堆積物が約30cmの最大層厚で薄く覆っている。ラハール堆積物は標高132～133mから検出され、この周辺で最も高い場所から検出された。

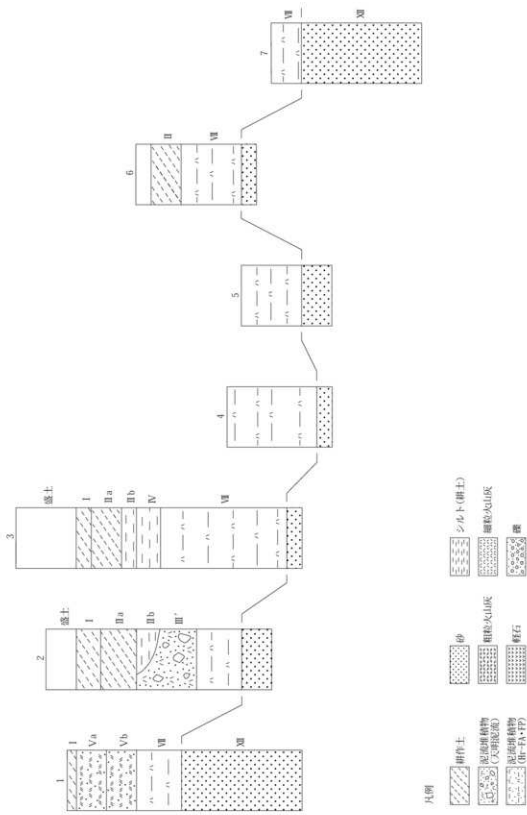
地点G～Jは前述した本遺跡の調査区北寄りを走行する場所に位置する(地点1・2・4・6)。標高131～132mにXII層の砂層が検出され、この辺りまで広瀬川砂礫層の微高地を形成している。これをVII層の二ツ岳の白色軽石を含むラハール堆積物が覆っている。ラハール堆積物は標高131～132mで検出され、東に向かって分布標高を下げ、層厚は増す傾向を示す。

地点K～Pは関根赤城遺跡(事業団2014)の調査区南寄りを走行する場所に位置する。標高128～129mにXII層の砂層が検出され、VII層の二ツ岳の白色軽石を含むラハール堆積物は地点Mの谷を埋めながら、これを覆っている。ラハール堆積物は概ね標高129～130mから検出され、各地点の層厚も0.20～1.30mとばらつきはあるが標高130m前後に堆積面を有するものと考えられる。標高127～129mにXII層の砂礫層が検出され、この付近から広瀬川砂礫層の低地帯を形成している。田口上田尻遺跡から田口下田尻遺跡が立地する微高地と関根赤城遺跡が存在する低地帯は、形成要因となった礫層上面の高低差が、約2～3mである。こうした地形的な要素は、VII層のラハール堆積物が田口下田尻遺跡よりも東側で急激に分布標高を下げ、層厚を増す傾向と極めて調和的である。

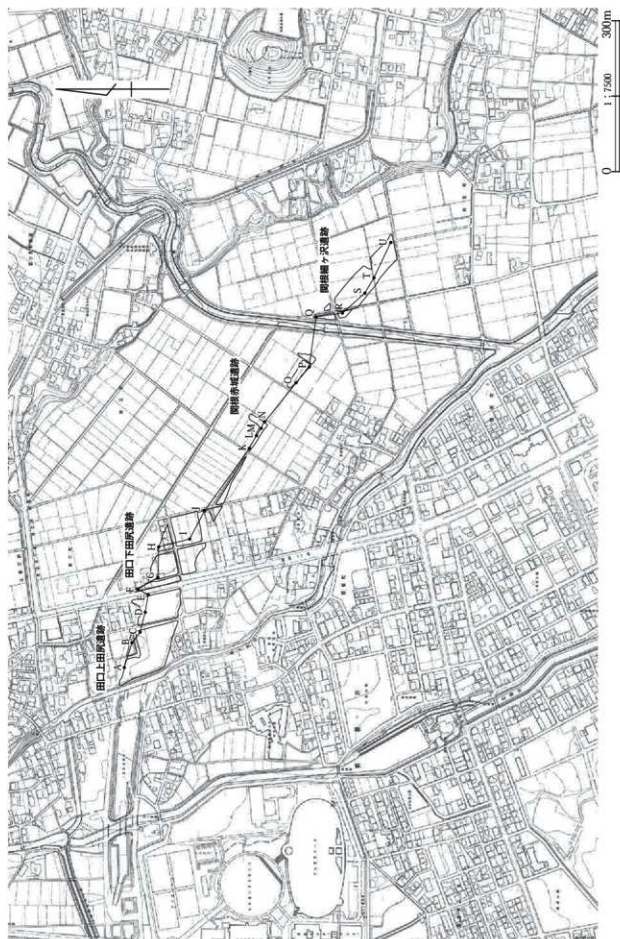
地点Q～Uは関根細ヶ沢遺跡(事業団2015)の調査区南寄りを走行する場所に位置する。標高127～128mにXII層の砂層が検出され、標高128～129mではIX層を主とした

標高
(m) 133

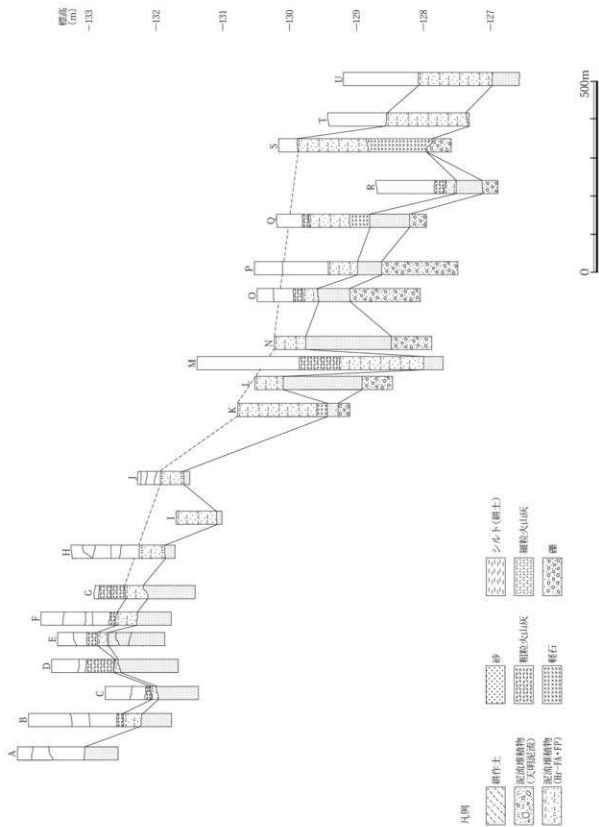
26



第12図 調査区の層序(柱状図)



第13図 岡田遺跡の層序(位置) (1/2,500前橋市現形図平成21年測図を縮小して使用)



第14図 周辺遺跡の順序(柱状図)

浅間Cテフラを多く含む低湿地堆積物が認められる。これらによってVII層の二ツ岳の白色軽石を含むラハール堆積物は標高127~130m弱で検出され、標高130m前後の堆積面が継続している。また、田口上田尻遺跡が立地する微高地で検出されたラハール堆積物は30cm程度の層厚であったものが、800m東の低地帯では約3mに層厚を増していることが窺える。こうしたことから浅間Cテフラの降灰以前に形成された微高地と低地の一部は5世紀末以降に利根川本流からもたらされた二ツ岳軽石のラハール堆積物によって埋め立てられたことが明らかとなった。

田口上田尻遺跡から関根細ヶ沢遺跡に至る東西1km間の上武道路建設事業地では、広瀬川低地帯(新井1971)に広がる微高地と低地を形成した堆積物が認められた。これらは比高差3mほどの高低差を有する旧利根川が形成した自然堤防と後背低地からなり、少なくとも浅間Cテフラ以降の古墳時代前期には乾燥の微高地と湿地性堆積物からなる低地が形成されていた(第15~17図)。

低地部分を構成する礫層の分布高度は127~129m前後で、これは現在の前橋市北部の田口町付近を流れる現利根川の河床高度に等しい。5世紀末から6世紀にもたらされた榛名火山二ツ岳の火山活動に伴うラハールは広瀬川低地帯の低地部を中心に堆積物が検出されたが、これらは軽石を含む砂やシルトを主体とした洪水による氾濫堆積物が主体である。少なくともこの間の発掘調査地や試掘地点から人頭大の軽石礫を多く含むような河川堆積物は確認されていない。つまり、ラハールの主体となった流れ(利根川の流路)は遺跡間の西側に存在すると考えられる。このことから古墳時代の利根川の流路は広瀬川低地帯を通過せず、前橋市北部で現在の流路付近を流れていたものと考えられる。

2. 周辺の地質

天明泥流堆積物

黒褐色を呈する亜角礫や角礫を含む火山灰質砂礫やシルト質砂からなる泥流堆積物である。礫は発泡した安山岩溶岩や黒色ガラス質安山岩、赤褐色の高温酸化を呈する火砕岩→溶岩(アグルチネート)、基盤の泥質岩、緑色安山岩や凝灰角礫岩からなり礫径は10~400mmである。田口下田尻遺跡の西方に位置する群馬県総合スポーツセ

ンター付近では、層厚5m弱に達し利根川の砂層を覆っている。

天明泥流堆積物は、天明3(1783)年8月5日午前中に浅間火山で発生した爆発に起因した岩なだれ堆積物が吾妻川に流れ下り、泥流堆積物として利根川まで達して堆積したものと考えられる。当日の14時には佐波郡玉村町まで達していることから、前橋市北部にはそれよりも早く達していたものと考えられる。

二ツ岳形成期ラハール堆積物

灰~白色角閃石含有デイサイト軽石や火山灰砂などからなる泥流堆積物から砂層。礫は灰色角閃石安山岩からなり、角閃石含有軽石を含む。噴火が起こった古墳時代に降下した火山灰や軽石が二次的に移動して堆積したもののから、降雨などの斜面崩壊によって山麓から供給された土砂などが平安時代に堆積している。古墳時代のものは一部に火砕流や高温ラハールから低温ラハールに変化したものも認められる。

榛名山東麓末端の台地では数mの層厚に達して地形面を形成している。

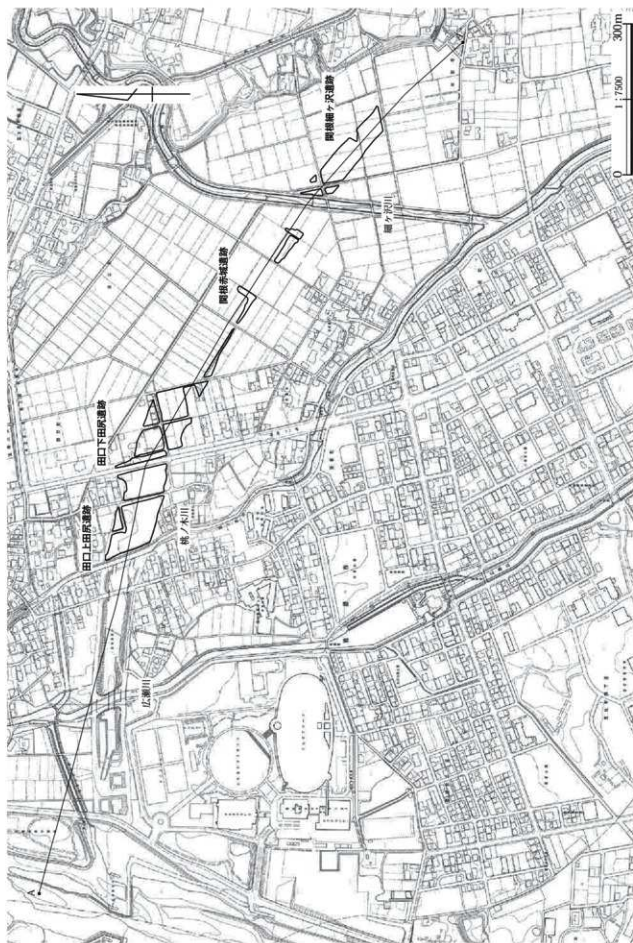
広瀬川砂礫層

灰~暗灰色砂礫層。更新世に広瀬川低地帯へ利根川が流路を変更した際に堆積した利根川の河川堆積物からなる。礫径は数十cmに達するものがあり、亜円~亜角礫からなり泥質岩、凝灰角礫岩、閃緑岩、蛇紋岩、安山岩、凝灰岩などから構成される。砂礫層に挟む砂層は黄灰~灰色砂層からなる。

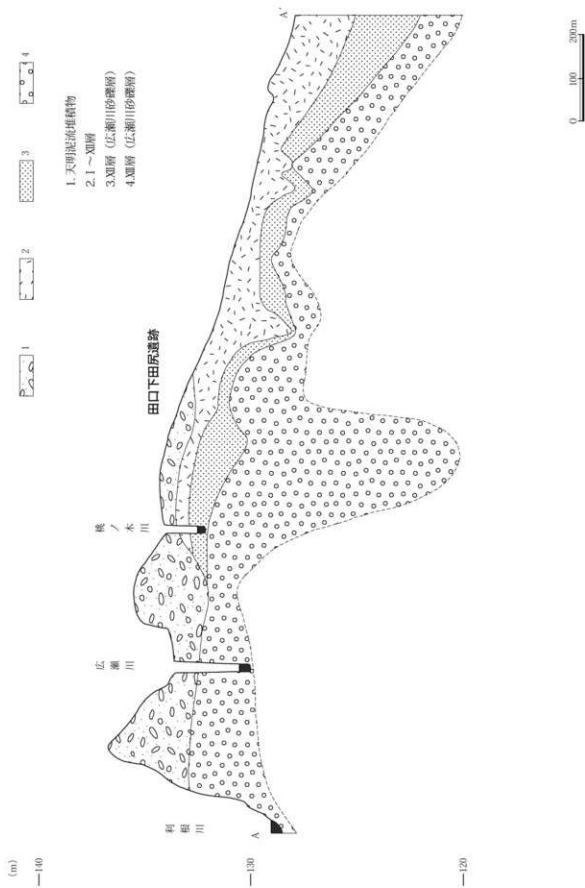
砂礫層を堆積させた利根川の流路は河川沿いに堆積地形を形成した。これらは流路の自然堤防に相当する微高地と氾濫原の低地であり、更新世末から完新世と完新世に複数の微高地帯が形成された。

障壁岩なだれ堆積物

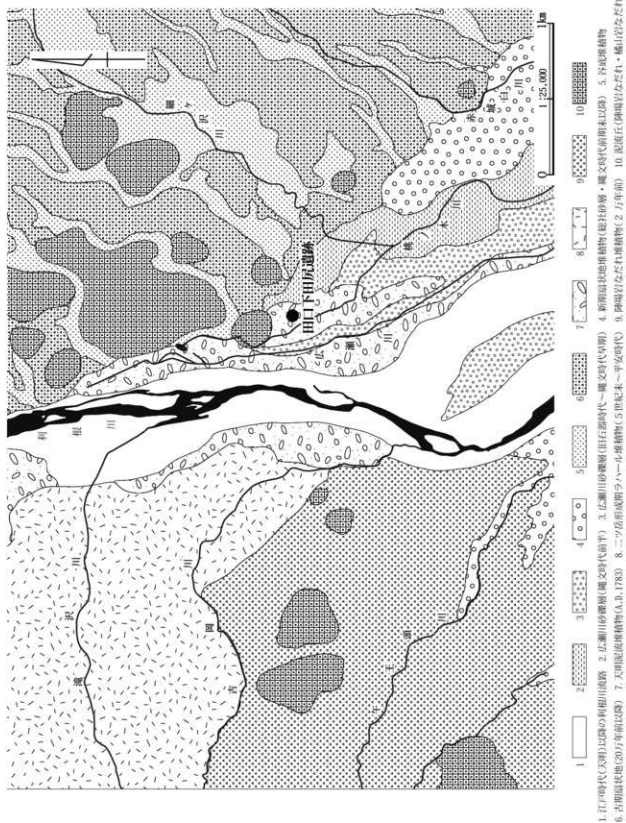
灰色泥流堆積物からなり黒~灰色安山岩、凝灰角礫岩の亜円~角礫、軽石を含む。2.05万年前に榛名山(駒山)の溶岩ドーム周辺が山体崩壊した際にもたらされた岩なだれ堆積物と泥流堆積物からなる。岩なだれにより運ばれた堆積物は溶岩や凝灰角礫岩の巨大なブロックを堆積物中に取り込んでいる。堆積物は前橋市北部を広く覆って利根川の流路を東側の広瀬川低地帯に移動させたが、これらの堆積物はその後の利根川によって浸食され失われている。



第15図 運輸周辺の地質断面図(位置) (1/2,500前橋市現形図平成21年測図を縮小して使用)



第16図 遺跡周辺の地質断面図



第17図 遺跡周辺の地図

第3章 第1面の遺構と出土遺物

第1節 調査の概要

1. 調査区の概要

本遺跡は広瀬川低地帯の自然堤防からなる微高地から後背湿地に相当する低地に立地するが、圃場整備による造成を受けて平坦化している。調査区は北北西～南南東方向の水路や道路によって区画され、V・VII区が路線の主軸に位置することから調査面積が大きい。以下に各調査区ごとの遺構の概要を述べる。

V区 復旧痕が3区画、溝4条を検出した(第18図)。

VI区 遺構は検出されなかった。

VII区 復旧痕が3区画、畝が2区画、溝8条、土坑18基を検出した(第19図)。

VIII区 復旧痕が3区画、溝1条、土坑1基を検出した(第20図)。

IX区 遺構は検出されなかった。

X区 復旧痕が3区画、配石が2基、溝2条を検出した(第21図)。

XI・XII区 遺構は検出されなかった。

第2節 復旧痕

1. 調査の概要

本節で述べるのは、江戸時代の天明3(1783)年におきた浅間火山の天明噴火によってもたらされた泥流堆積物とその後の時期に帰属する遺構群である。第1面の調査は表土である第1層と第II層を除去して、遺構に残された第III層起源の埋土を検出し、天明泥流堆積物(以下、天明泥流と略す)が江戸時代の地表を覆った後に構築された遺構である復旧痕を調査した。

復旧痕は群馬県内の天明泥流やその他の氾濫堆積物が分布する地域で検出される遺構の名称で、主に溝や土坑、耕作痕の形状を呈し、「復旧溝」「復旧坑」「復旧痕」などの名称で呼ばれている。遺構名に含まれる「復旧」の名称が

示すとおり天明泥流堆積後に埋没した旧耕土を復旧するために、天明泥流を掘削して埋設し、掘りだした耕作土と反転させて耕地を回復する行為、すなわち「天地返し」と呼ばれる作業で構築された遺構群である。

第1面から検出された復旧痕は、V区が3区画、VII区が3区画、VIII区が3区画、X区は3区画である。

2. V区

1号復旧痕(第22図、PL.9)

グリッド 13-13区R~T 7~9

区画の規模 調査区の北西隅に連なる東西と南北方向の浅い溝状土坑群である。東西の坑群は幅が広く、南北のそれは長さや幅が小さい。区画の長さは8.0m、幅は6.5m、面積は62.4㎡、坑は10条である。

規模 坑の長さは1.40~7.14m、幅は0.40~1.10m、深さ0.03~0.26mである。

走行方位 N S・E W

重複 なし。

対比 東西方向の幅の広い復旧痕4条は、隣接する田口下田尻遺跡IV区(群馬県埋蔵文化財調査事業団2012 以下引用は省略)の28号復旧痕に連続する。

埋土 浅間Aテフラの軽石を含む灰黄褐色砂質土からなり天明泥流起源のブロック土(埋め土)である。

所見 天明泥流堆積物と埋没した耕作土を入れ替える目的で構築された遺構群であり、坑間の掘り残し部分は狭いものが見られる。

2号復旧痕(第23図、PL.9・10)

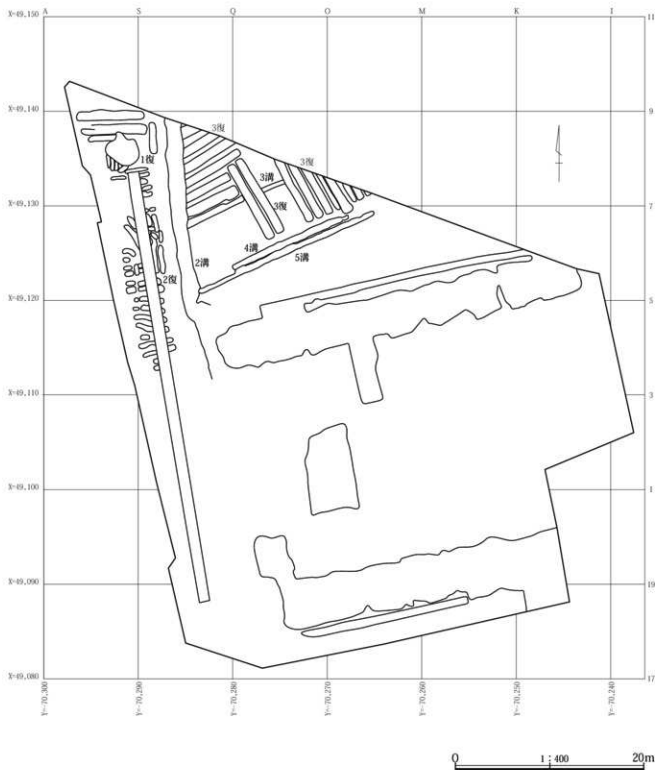
グリッド 13-13区R・S 3~7

区画の規模 調査区の北西部に南北に連なる東西方向と一部南北方向の溝状土坑群である。区画の長さは19.7m、幅は4.4m、面積は81.7㎡、坑は40条である。

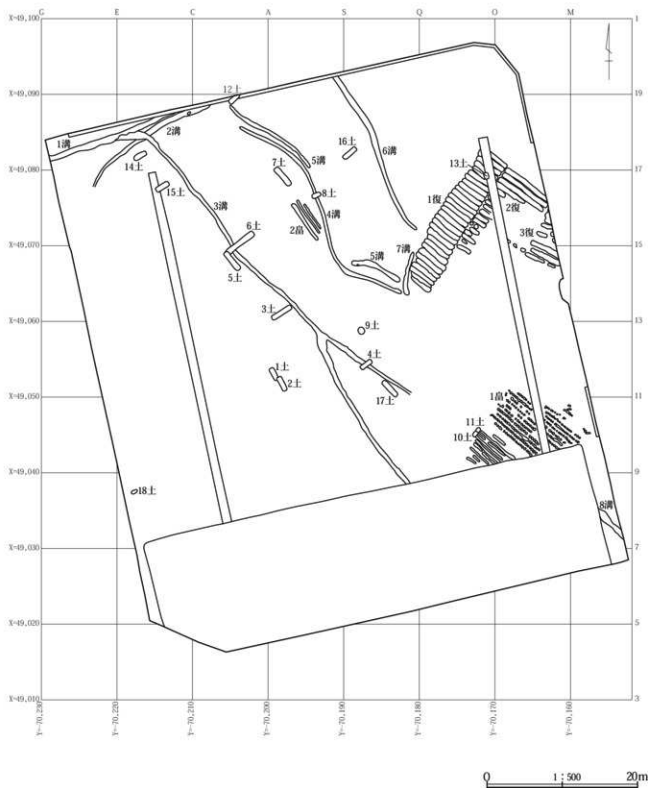
規模 坑の長さは0.53~3.74m、幅は0.35~0.49m、深さ0.01~0.58mである。

走行方位 N10°WとE W

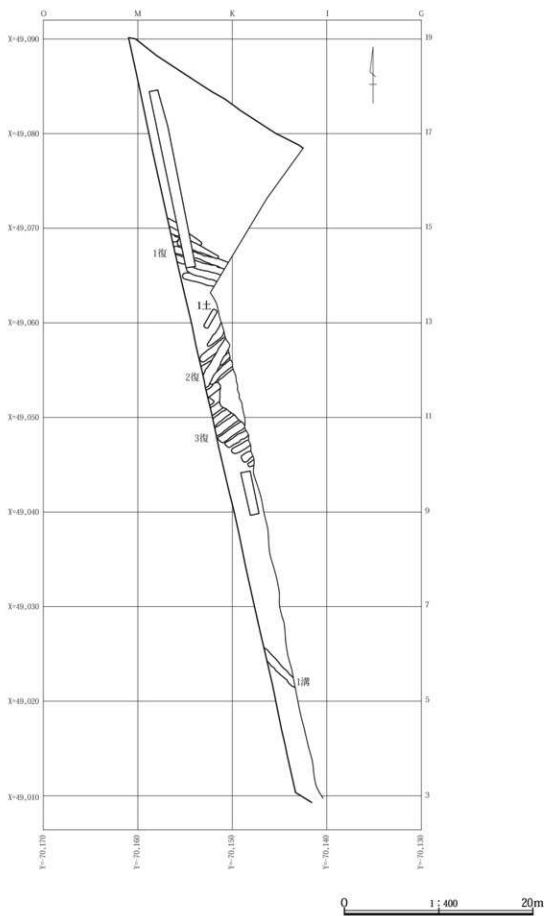
重複 なし。



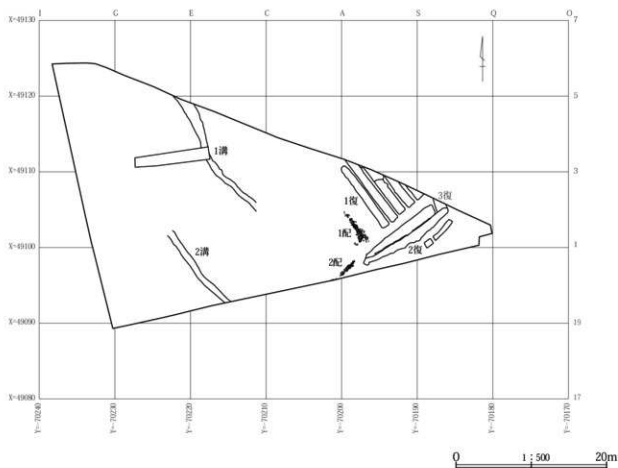
第18图 V区1面 遺構全体图



第19図 VII区1面 遺構全体図



第20図 VIII区1面 遺構全体図



第21图 X区1面 遺構全体图

対比 東西方向の復旧痕30条は、隣接する田口上田尻遺跡の21・25・27号復旧痕に連続する。

埋土 浅間Aテフラの軽石を含む暗褐色火山灰土からなり天明泥流起源のブロック土(埋め土)である。

所見 天明泥流堆積物と埋没した耕作土を入れ替える目的で構築された遺構群であり、断面は「V」字形や平底形、椀形状など様々な形状を呈している。これらは平面の形状から溝状土坑と土坑を呈するものに分けられる。

3号復旧痕(第24・25図、PL.11・388)

グリッド 13-13区N-R 6-8

区画の規模 調査区の北縁に連なる北東-南西と北西-南東方向の溝状土坑群である。坑は幅や深さは一定の規模で規格性が高い。区画の長さは15.0m、幅は14.0m、面積は100.0㎡、坑は17条である。

規模 坑の長さは0.65-8.89m、幅は0.44-0.98m、深

さ0.13-0.89mである。

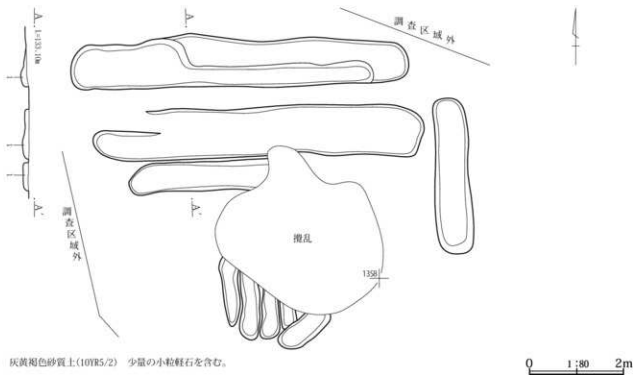
走行方位 N30°WとN70°E

重複 2号溝に切られる。3号溝を切る。復旧痕の南東縁には4・5号溝が接する。

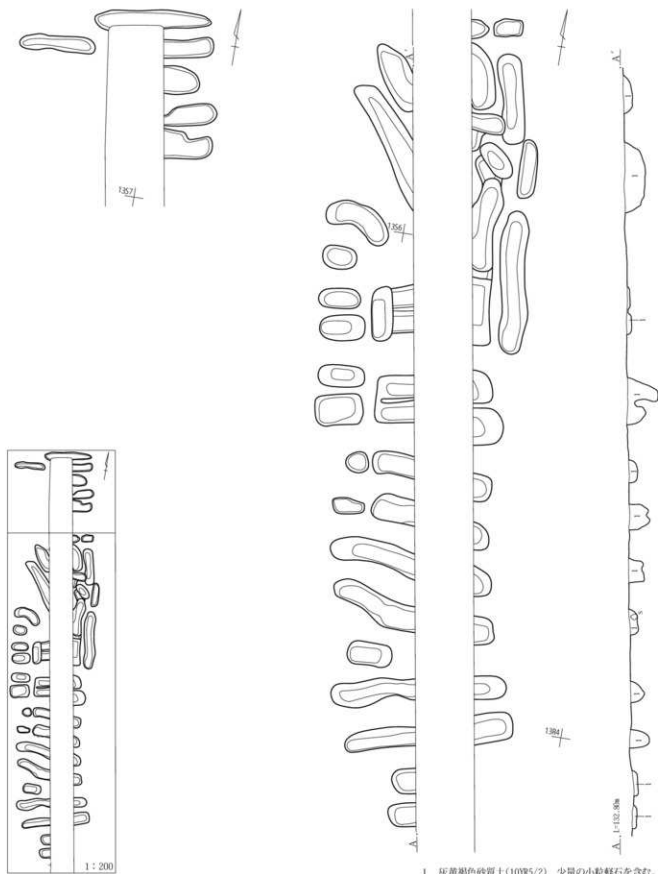
埋土 浅間Aテフラの軽石を含む灰褐色砂質土の天明泥流起源のブロック土(埋め土)を灰黄褐色砂質土(旧耕作土の反転土)が覆う。

遺物 埋土から瀬戸美濃窯のすり鉢(1)と在地系土器の焙烙(2)と鉄製品(3)が出土した。

所見 天明泥流堆積物と埋没した耕作土を入れ替える目的で構築された遺構群である。北東-南西方向の復旧痕は、天地返しの作業で反転した旧耕作土が南から北に向かって供給された可能性がある。下之宮中沖遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団2015)の復旧坑構築モデルから、この復旧痕は南から北へ作業を進行した可能性がある。



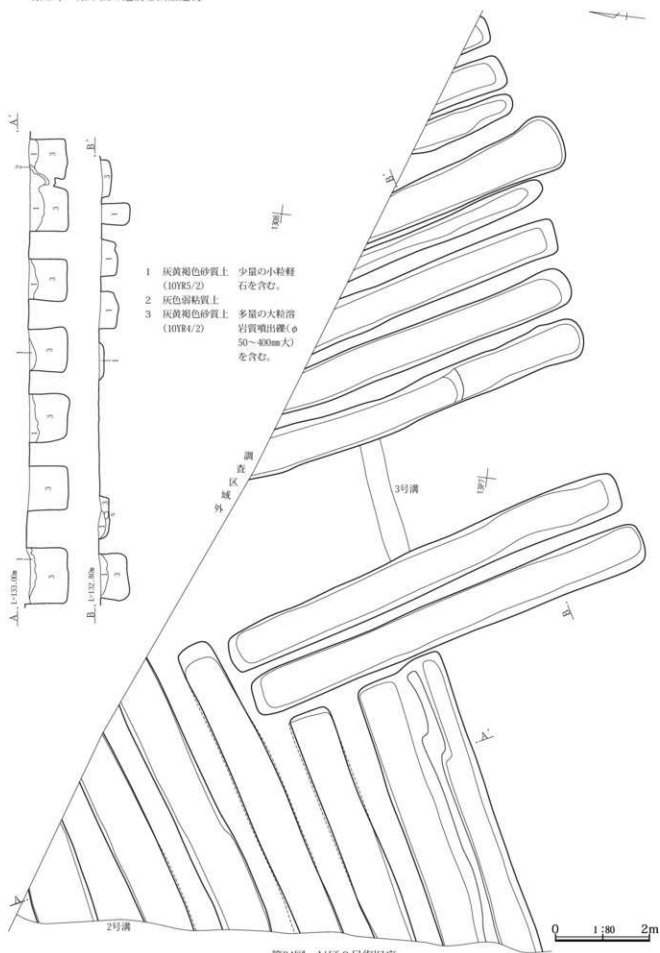
第22図 V区1号復旧痕



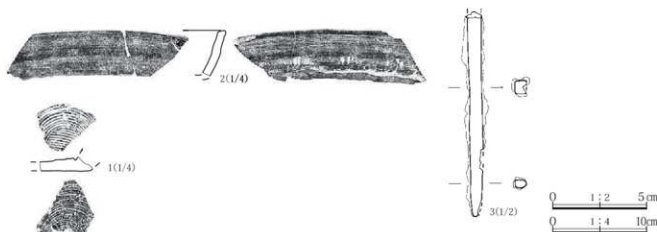
1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の小粒軽石を含む。

0 1:80 2m

第23図 V区2号復旧痕



第24図 V区3号復旧痕



第25図 V区3号復旧痕の出土遺物

3. VII区

1号復旧痕(第26図)

グリッド 13-2区N-Q 13-17

区画の規模 調査区の北東部で北東～南西方向に連なる北西～南東方向の溝状土坑群である。長さは南部で短いものがあるが、幅や深さは一定の規模で規格性が高い。区画の長さは19.7m、幅は3.2～4.5m、面積は79.9㎡、坑は30条である。

規模 坑の長さは3.18～4.48m、幅は0.48～0.76m、深さ0.06～0.42mである。

走行方位 N52°W

重複 7号溝、13号土坑に切られる。2号復旧痕に隙間なく隣接する。

埋土 浅間Aテフラの軽石を含む灰褐色砂質土の天明泥流起源のブロック土(埋め土)である。

所見 天明泥流堆積物と埋没した耕作土を入れ替える目的で構築された遺構群である。13号土坑は1号復旧痕を切って天明泥流堆積物の礫を廃棄した土坑と考えられる。このことから耕作土の復旧作業に後に礫の処理を行ったことが明らかである。

2号復旧痕(第27図)

グリッド 13-2区M・N 15-17

区画の規模 調査区の北東部で北東～南西方向に連なる北西～南東方向の溝状土坑群である。長さは北部に長いものと短いものがある。区画の長さは12.5m、幅は7.2m、

面積は38.3㎡、坑は18条である。

規模 坑の長さは0.44～1.90m及び7.24m、幅は0.48～0.82m、深さ0.05～0.13mである。

走行方位 N53°W

重複 1・3号復旧痕に隙間なく隣接する。

埋土 浅間Aテフラの軽石を含む灰褐色砂質土の天明泥流起源のブロック土(埋め土)である。

所見 天明泥流堆積物と埋没した耕作土を入れ替える目的で構築された遺構群で、1号復旧痕に連なる遺構群である。

3号復旧痕(第27図、PL.12)

グリッド 13-2区M・N 14・15

区画の規模 調査区の北東部で北東～南西方向に連なる北西～南東方向の溝状土坑群である。長さは長いものと短いピット状のものがある。区画の長さは6.9m、幅は6.3m、面積19.7㎡、坑は9条である。

規模 坑の長さは0.65～3.84m、幅は0.38～0.81m、深さ0.04～0.09mである。

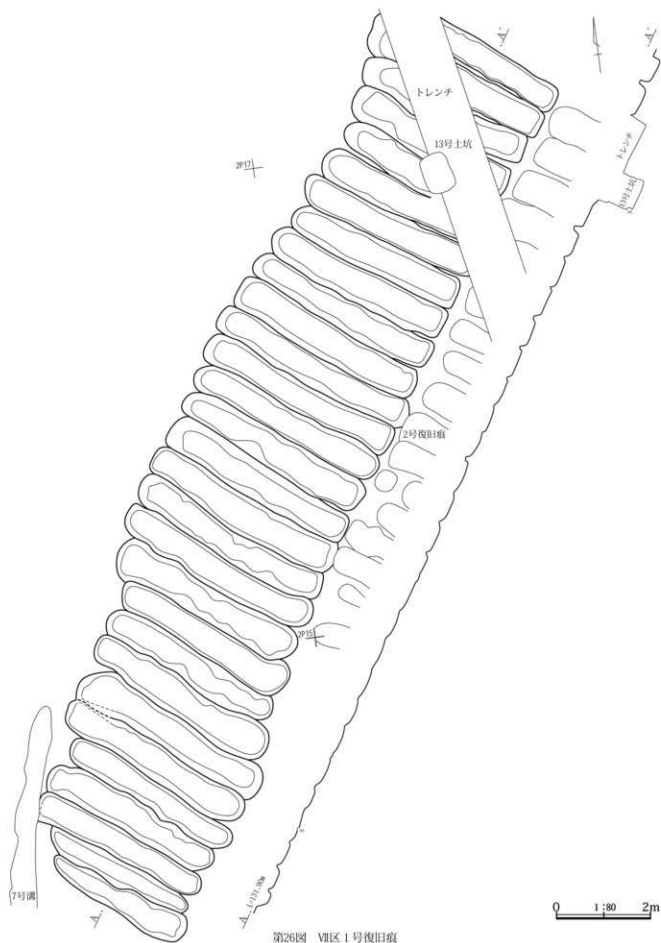
走行方位 N66°W

重複 2号復旧痕に隣接する。

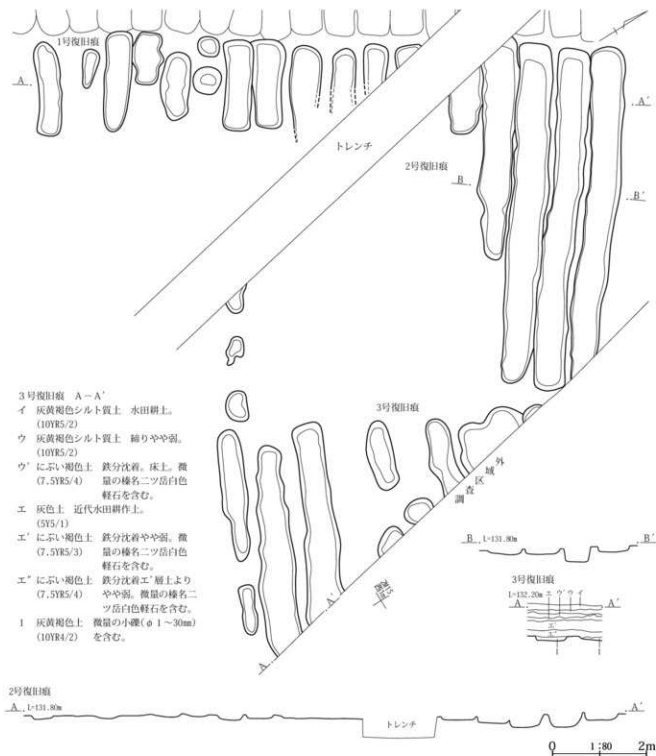
対比 VII区の1号復旧痕に連続するものと想定される。

埋土 浅間Aテフラの軽石を含む灰褐色砂質土の天明泥流起源のブロック土(埋め土)である。

所見 天明泥流堆積物と埋没した耕作土を入れ替える目的で構築された遺構群で、1・2号復旧痕に連なる遺構群である。



第26図 VII区1号復旧痕



第27図 VIII区2・3号復旧痕

4. VIII区

1号復旧痕(第28図, PL.12)

グリッド 13-2区K・L 13~15

区画の規模 調査区の北部で北東~南西方向に連なる北西~南東方向の溝状土坑群である。幅や深さは一定の規模で規格性が高い。区画の長さは5.5m、幅は7.7m、面

積は22.9㎡、坑は7条である。

規模 坑の長さは5.86m+、幅は0.72~0.80m、深さ0.11~0.32mである。

走行方位 N69°W

重複 なし。

対比 VII区の3号復旧痕に連続するものと想定される。

埋土 浅間Aテフラの軽石を含む灰褐色砂質土の天明泥

第3章 第1面の遺構と出土遺物

流起源のブロック土(埋め土)である。

所見 天明泥流堆積物と埋没した耕作土を入れ替える目的で構築された遺構群である。

2号復旧痕(第29図、PL.13)

グリッド 13-2区K 11~13

区画の規模 調査区の北東部に北西~南東方向に連なる北東~南西方向の溝状土坑群である。区画の長さは5.2m、幅は2.2m、面積は8.4㎡、坑は7条である。

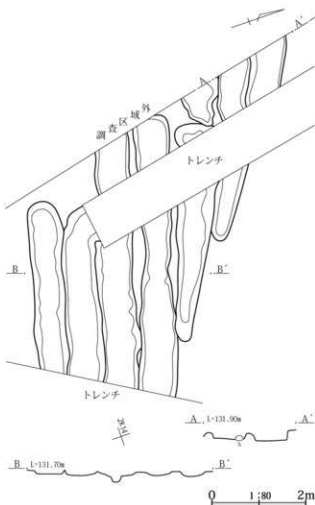
規模 坑の長さは0.71~4.88m+、幅は0.40~0.52m、深さ0.07~0.44mである。

走行方位 N60°E

重複 復旧痕内で坑の切合いが存在する。

埋土 浅間Aテフラの軽石を含む灰褐色砂質土の天明泥流起源のブロック土(埋め土)である。

所見 天明泥流堆積物と埋没した耕作土を入れ替える目的で構築された遺構群で、1号復旧痕に直交する遺構群

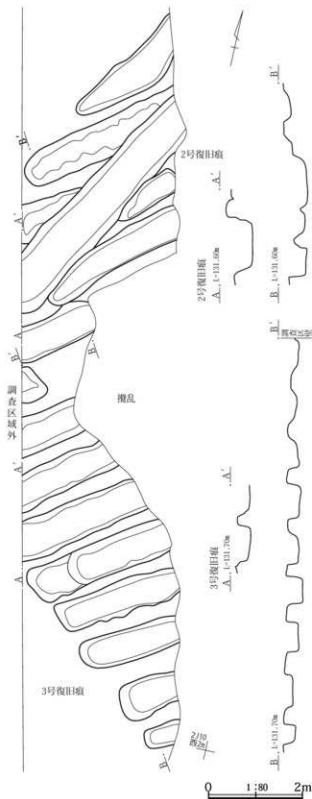


第28図 VII区1号復旧痕

である。

3号復旧痕(第29図、PL.13)

グリッド 13-2区J・K 9~11



第29図 VII区2・3号復旧痕

区画の規模 調査区の北東部に北西～南東方向に連なる北東～南西方向の溝状土坑群である。区画の長さは10.8m、幅は4.5m、面積は32.0㎡、坑は9条である。

規模 坑の長さは0.60～3.16m、幅は0.46～0.79m、深さ0.07～0.44mである。

走行方位 N61°E

重複 なし。

埋土 浅間Aテフラの軽石を含む灰褐色砂質土の天明泥流起源のブロック土(埋め土)である。

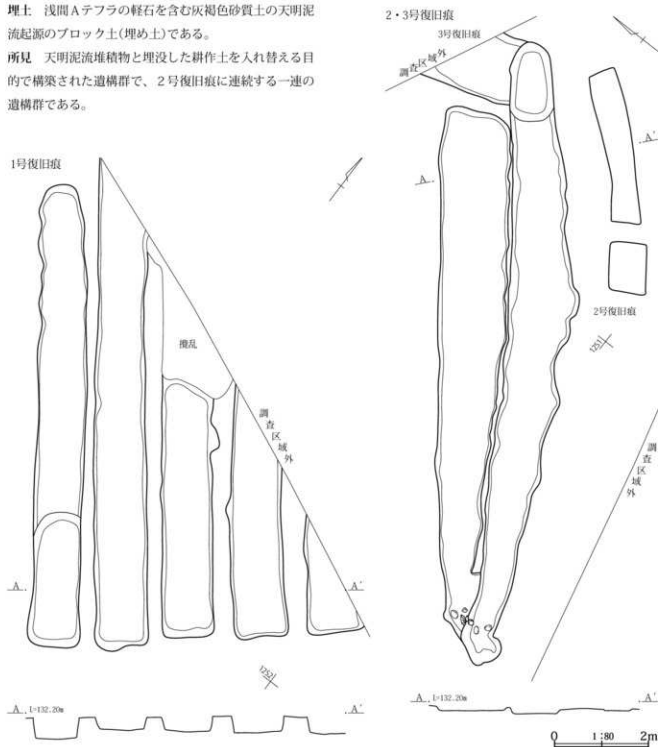
所見 天明泥流堆積物と埋没した耕作土を入れ替える目的で構築された遺構群で、2号復旧痕に連続する一連の遺構群である。

5. X区

1号復旧痕(第30図、PL.14)

グリッド 13～2区S・T 20と12区R～T 1・2

区画の規模 調査区の南東部で北東～南西方向に連なる北西～南東方向の溝状土坑群である。幅や深さは一定の規模で規格性が高い。区画の長さは10.4m、幅は7.1m、



第30図 X区1～3号復旧痕

第3章 第1面の遺構と出土遺物

面積は41.3㎡、坑は5条である。

規模 坑の長さは9.79～10.42m、幅は1.00～1.16m、深さ0.08～0.44mである。

走行方位 N37°W

重複 なし。

埋土 浅間Aテフラの軽石を含む灰褐色砂質土の天明泥流起源のブロック土(埋め土)である。

所見 天明泥流堆積物と埋没した耕作土を入れ替える目的で構築された遺構群であり、坑間の掘り残し部分は坑に対して10:4～3の割合で存在する。

2・3号復旧痕(第30図、PL.14)

グリッド 13-12区R～T 1～3

区画の規模 調査区の南東部に連なる北東～南西方向の溝状土坑群である。区画の長さは13.4m、幅は3.0m、面積は29.9㎡、坑は4条である。

規模 坑の長さは1.95～13.30m、幅は0.58～1.50m、深さ0.07～0.21mである。

走行方位 N56°E

重複 なし。

埋土 浅間Aテフラの軽石を含む灰褐色砂質土の天明泥流起源のブロック土(埋め土)である。

所見 天明泥流堆積物と埋没した耕作土を入れ替える目的で構築された遺構群で、1号復旧痕の南東縁に接して、直交する遺構群である。

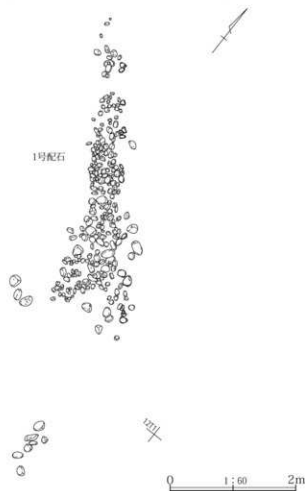
第3節 配石

1. X区

1号配石(第31図、PL.15)

グリッド 13-12区T1

区画の規模 調査区の南東部で北西～南東方向に分布の長軸を有し、まとまりを持って密に分布する礫群である。X区1面の1・2号復旧痕の検出面で上面が確認された。区画の長さは7.44m、幅は1.90mである。



第31図 X区1・2号配石

規模 礫の長径は0.03～0.24m、短径は0.02～0.14mである。

分布の長軸方位 N34°W

重複 一部が2号復旧痕に切られる。1号復旧痕の走行方位と1号配石の分布の長軸方位は調和的である。

埋土 暗褐色砂質土で埋没している。

所見 1・2号復旧痕の検出面で礫の上面が認められ、一部が2号復旧痕に切られるため、これらの遺構より下位にあることは確実である。

2号配石(第31図、PL.15)

グリッド 13-2区T 20と3区A 20

区画の規模 調査区の南東部で北東～南西方向に分布の長軸を有し、まとまりを持って密に分布する礫群である。

X区1面の1・2号復旧痕の検出面で上面が確認された。

区画の長さは4.20m、幅は0.58mである。

規模 礫の長径は0.02～0.12m、短径は0.01～0.10mである。

分布の長軸方位 N45°E

重複 なし。2号復旧痕の走行方位と2号配石の分布の長軸方位は調和的である。

埋土 暗褐色砂質土で埋没している。

所見 1・2号復旧痕の検出面で礫の上面が認められることから、これらの遺構より下位にあることは確実である。1・2号配石は1・2号復旧痕の走行方位に沿って分布しており、これは復旧痕以前の何らかの地割に沿って配石が構築されたためと想定される。こうしたことから1・2号配石は高等の耕作土から集められた礫を地境に集積した一種の耕作に伴う廃棄礫である可能性がある。

第4節 溝

1. V区

2号溝(第32図、PL.15・388)

グリッド 13-3区Q・R 3-8

形状と規模 全長は27.7mで南北方向に走行し、検出された幅は0.70～0.90m、深さは0.05～0.11mである。南北の底面比高差は0.13mで北から北南に走行する。溝の

断面形状は浅い皿形を呈する。

走行方位 N11°W

重複 3号復旧痕を切る。5号溝と同時期の可能性がある。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

遺物 埋土から肥前磁器の碗(1)、陶器のすり鉢(2)や甕(3)、中世の在地系土器の片口鉢(4)や内耳鍋(5)などが出土した。

所見 復旧痕を切ることから近世後期(天明)以降であることは確実である。遺物は17世紀後半から18世紀前半のものが出土している。埋土には水流の影響を示す堆積相は認められない。

3号溝(第32図)

グリッド 13-3区O～R 6-8

形状と規模 検出された長さは2.5mで北東～南西方向に走行し、検出された幅は0.33m、深さは0.04mであり、底面は水平である。溝の断面形状は浅い皿形を呈する。

走行方位 N70°E

重複 3号復旧痕に切られる。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

所見 3号復旧痕に切られるが、約3m弱の長さで規模の小さな溝状遺構である。隣接する2号復旧痕と同じ走行方位で、復旧痕と同時期の耕作痕の可能性が極めて高い。遺構は単独で存在するため溝の分類に留めた。

4号溝(第33図)

グリッド 13-13区N～P 5・6

形状と規模 全長は13.4mで北東～南西方向に走行し、検出された幅は0.80m、深さは0.08mである。東西の底面比高差は0.06mで西から東に走行するが、ほぼ水平である。溝の断面形状は浅い皿形を呈する。

走行方位 N68°E

重複 なし。3号復旧痕の南東縁に位置する。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

所見 3号復旧痕の南縁に位置する溝状遺構である。埋土に水流の影響を示す堆積相は認められない。隣接する2号復旧痕と同じ走行方位で、復旧痕と同時期の耕作痕や区画溝の可能性が極めて高い。

5号溝(第33図)

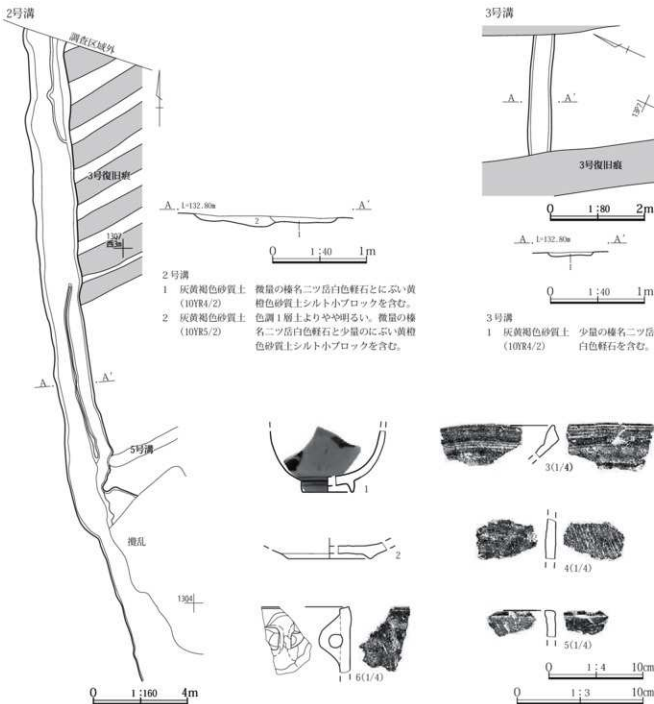
グリッド 13-13区N~Q 5・6

形状と規模 全長は20.3mで北東~南西方向に走行し、検出された幅は0.80m、深さは0.12mである。東西の底面比高差は0.01mで、水平である。溝の断面形状は浅い皿形を呈する。

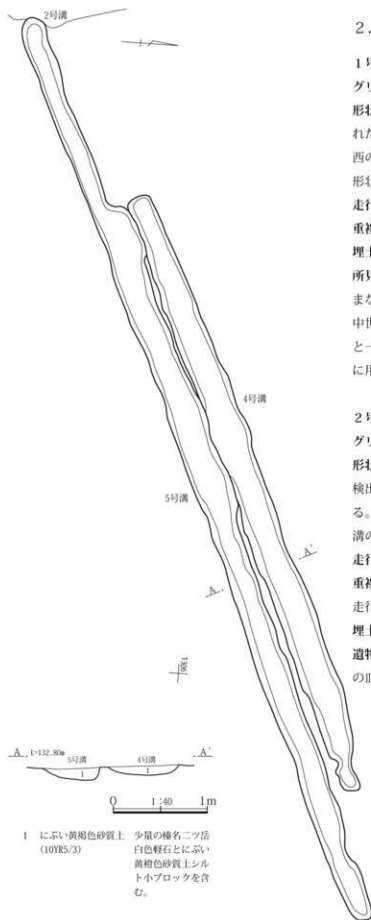
走行方位 N68°E

重複 なし。4号溝に沿うように位置し、3号復旧痕の南東縁に位置する。

埋土 ニツ島の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。
所見 3号復旧痕の南縁に位置する溝状遺構である。隣接する2号復旧痕と同じ走行方位で、4号溝と同様に復旧痕と同時期の耕作痕や区画溝の可能性が極めて高い。



第32図 V区1面2・3号溝と2号溝の出土遺物



1 にぶい黄褐色砂質土 少量の礫名二ツ岳
(10YR5/3) 白色軽石とにぶい
黄褐色砂質土シルト
小ブロックを含む。

2. VII区

1号溝(第34図)

グリッド 13-3区C~F 17・18

形状と規模 全長は17.8mで東西方向に走行し、検出された幅は1.00~1.35m、深さは0.05~0.19mである。東西の底面比高差は0.04mで、ほぼ水平である。溝の断面形状は皿形を呈する。

走行方位 N68°E

重複 3号溝を切る。

埋土 灰黄褐色シルト質土からなる。

所見 第1面で検出された溝で埋土に浅間Bテフラを含まないことからI~IV(III層を除く)層相当と考えられ、中世から近世に属する溝と考えられる。隣接する2号溝と一部が平行に走行し、2号溝と同様に微高地から低地に用水などの目的で構築された水路の可能性はある。

2号溝(第34図、PL.330)

グリッド 13-3区B~E 16~18

形状と規模 全長は18.2mで南西~北東方向に走行し、検出された幅は0.30~0.85m、深さは0.06~0.20mである。東西の底面比高差は0.17mで、西から東に走行する。溝の断面形状は浅い皿形を呈する。

走行方位 N52°E

重複 3号溝に切られる。北東部では1号溝に平行して走行する。

埋土 灰黄褐色シルト質土からなる。

遺物 埋土から須恵器の椀(1)、長頸壺(3)や緑釉陶器の皿(2)が出土した。

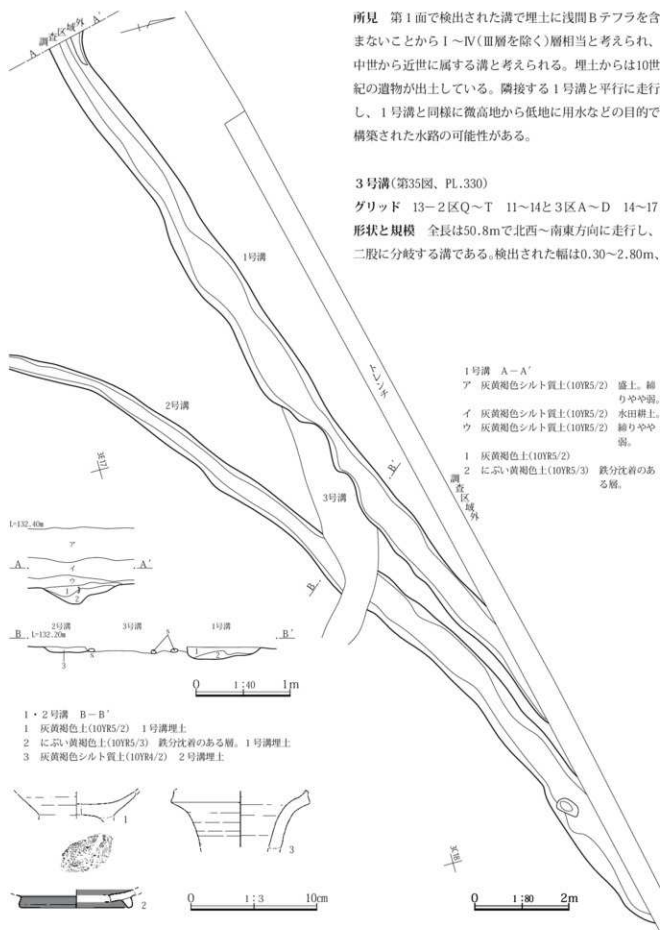
0 1:80 2m

第33図 V区1面4・5号溝

所見 第1面で検出された溝で埋土に浅間Bテフラを含まないことから1~IV(III層を除く)層相当と考えられ、中世から近世に属する溝と考えられる。埋土からは10世紀の遺物が出土している。隣接する1号溝と平行に走行し、1号溝と同様に微高地から低地に用水などの目的で構築された水路の可能性はある。

3号溝(第35図、PL.330)

グリッド 13-2区Q~T 11~14と3区A~D 14~17
形状と規模 全長は50.8mで北西~南東方向に走行し、二股に分岐する溝である。検出された幅は0.30~2.80m、



第34図 Ⅶ区1面1・2号溝と2号溝の出土遺物

深さは0.04~0.16mである。南北の底面比高差は0.27mで、北から南に走行する。溝の断面形状は浅い皿形を呈する。

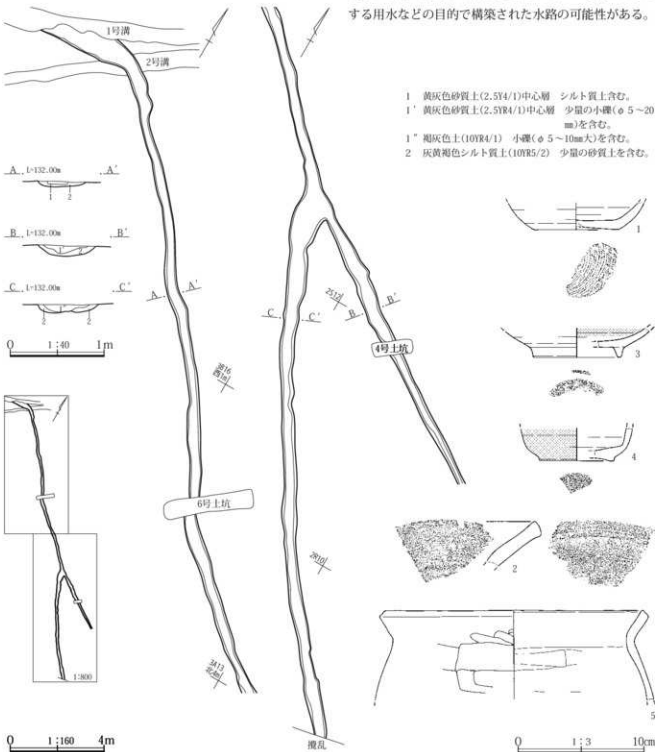
走行方位 N43°W

重複 1号溝、4・6号土坑に切られる。2号溝を切る。

埋土 灰黄褐色土からなる。

遺物 埋土から須恵器の杯(1)、鉢(2)、灰釉陶器の椀(3)、小瓶(4)や土師器の甕(5)が出土した。

所見 第1面で検出された溝で埋土に浅間Bテフラを含まないことからⅠ~Ⅳ(Ⅲ層を除く)層相当と考えられ、中世から近世に属する溝と考えられる。埋土からは10世紀前半の遺物が出土した。隣接する1号溝に切られ、1号溝から南に分岐する溝と想定される。1号溝から分岐する用水などの目的で構築された水路の可能性はある。



第35図 VII区1面3号溝と出土遺物

4号溝(第36図、PL.331)

グリッド 13-2区Q~T 13-17と3区A 17・18
 形状と規模 全長は32.8mで北西~南東方向にS字状に蛇行して走行する。検出された幅は0.30~0.7m、深さは0.12~0.20mである。南北の底面比高差は0.17mで、



北から南に走行する。溝の断面形状は皿形を呈する。

走行方位 N44°W

重複 8号土坑に切られる。隣接する5号溝に平行して蛇行する。

埋土 灰黄褐色シルト質土からなる。

所見 第1面で検出された溝で埋土に浅間Bテフラを含まないことからI~IV(III層を除く)層相当と考えられ、中世から近世に属する溝と考えられる。3号溝と同様に1号溝などから分岐する用水などの目的で構築された水路の可能性はある。

5号溝(第36図、PL.331)

グリッド 13-2区Q~T 14~18と3区A 18

形状と規模 全長は13.6mと6.8mの溝からなり延長すると34.60mと想定される。隣接する4号溝に沿って北西~南東方向にS字状に蛇行して走行する。検出された幅は0.25~0.80m、深さは0.05~0.13mである。南北の底面比高差は0.09mで、北から南に走行する。溝の断面形状はU字形を呈する。

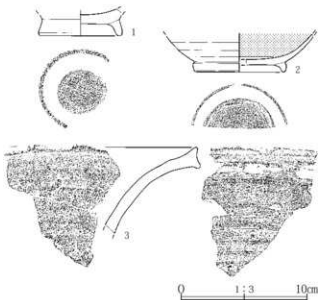
走行方位 N44°W

重複 なし。隣接する4号溝に平行して蛇行する。

埋土 灰黄褐色シルト質土からなる。

遺物 埋土から須恵器の椀(1)、甕(3)、灰釉陶器の椀(2)が出土した。

所見 第1面で検出された溝で埋土に浅間Bテフラを含まないことからI~IV(III層を除く)層相当と考えられ、



第36図 VII区1面4・5号溝と5号溝の出土遺物

中世から近世に属する溝と考えられる。埋土からは10世紀前半の遺物が出土した。4号溝と同様に1号溝などから分岐する用水などの目的で構築された水路の可能性はある。

6号溝(第37図、PL.331)

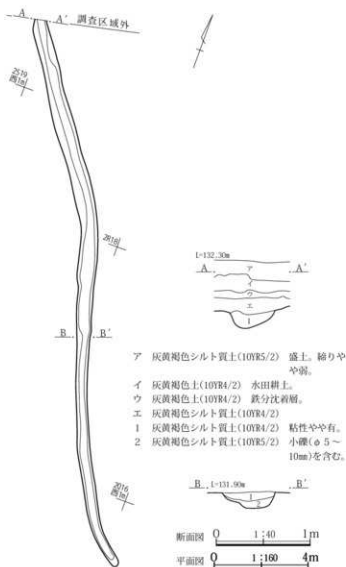
グリッド 13-2区Q-S 15-19

形状と規模 全長は23.60mで北西～南東方向に蛇行して走向し、検出された幅は0.35～0.80m、深さは0.07～0.24mである。南北の底面比高差は0.05mで、北から南に走行する。溝の断面形状はU字形を呈する。

走行方位 N28°W

重複 なし。やや離れた4・5号溝に平行して蛇行する。

6号溝



埋土 灰黄褐色シルト質土からなる。

遺物 なし。

所見 第1面で検出された溝で埋土に浅間Bテフラを含まないことからI～IV(III層を除く)層相当と考えられ、中世から近世に属する溝と考えられる。4・5号溝と同様に1号溝などから分岐する用水などの目的で構築された水路の可能性はある。

7号溝(第37図、PL.331)

グリッド 13-2区Q 13・14

形状と規模 全長は5.80mで南北方向に走行し、検出された幅は0.40～0.65m、深さは0.10～0.18mである。南北の底面比高差は0.08mで、南から北に走行するが、ほぼ水平である。溝の断面形状はU字形を呈する。

走行方位 N14°E

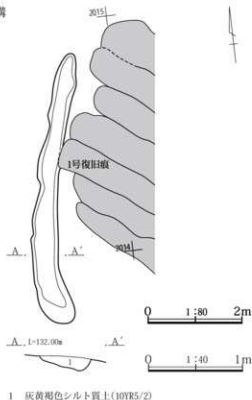
重複 1号復旧痕に切られる。

埋土 灰黄褐色シルト質土からなる。

遺物 なし。

所見 第1面で検出された溝で埋土に浅間Bテフラを含まないことからI～IV(III層を除く)層相当と考えられ、中世から近世に属する溝と考えられる。

7号溝



第37図 VIII区1面6・7号溝

8号溝(第38図、PL.331・388)

グリッド 13-2区K・L 7・8

形状と規模 全長は4.20mで北西-南北方向に走行し、検出された幅は0.50~1.05m、深さは0.17~0.22mである。南北の底面比高差は0.01mで、水平である。溝の断面形状は皿形を呈する。

走行方位 N44°W

重複 なし。

対比 VIII区の1号溝に連続する。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む暗褐~灰黄褐色シルト質土からなる。

遺物 埋土から須恵器の杯蓋(1)や瀬戸美濃窯の陶器碗(2)が出土した。



第38図 VII区1面8号溝と出土遺物

所見 第1面で検出された溝で埋土に浅間Bテフラを含まないことからI~IV(III層を除く)層相当と考えられ、中世から近世に属する溝と考えられる。

3. VIII区

1号溝(第39図、PL.334)

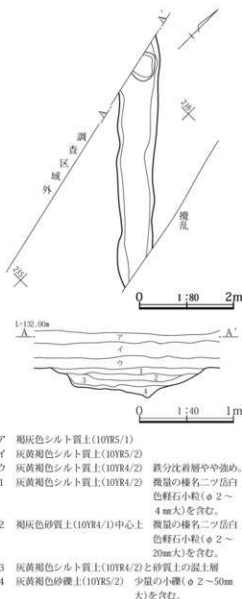
グリッド 13-2区I・J 5・6

形状と規模 全長は4.40mで北西-南北方向に走行し、検出された幅は0.80m、深さは0.12mである。南北の底面比高差は水平である。溝の断面形状は皿形を呈する。

走行方位 N44°W

重複 なし。

対比 VIII区の8号溝に連続する。



第39図 VIII区1面1号溝

埋土 下位より二ツ岳の白色軽石礫を含む灰黄褐色土や褐色砂質土、シルト質土が成層する。

遺物 なし。

所見 第1面で検出された溝で埋土に浅間Bテフラを含まないことからI～IV(III層を除く)層相当と考えられ、中世から近世に属する溝と考えられる。

4. X区

1号溝(第40図、Pl. 338)

グリッド 13-13区C～E 2～5

形状と規模 全長は16.53mで北西～南北方向に走行し、検出された幅は0.58～1.00m、深さは0.01～0.11mである。南北の底面比高差は0.08mで北から南に走行する。溝の断面形状は浅い皿形を呈する。

走行方位 N33°W

重複 なし。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色土からなりグライ化が著しい。

遺物 なし。

所見 第1面で検出された溝で埋土に浅間Bテフラを含まないことからI～IV(III層を除く)層相当と考えられ、中世から近世に属する溝と考えられる。微高地縁と低地の境界を走行する水路の可能性はある。



- エ 灰褐色土 礫名二ツ岳白色軽石を含む。硬く締る。(耕作土)
- 1 灰褐色土 少量の礫名二ツ岳白色軽石を含む。酸化鉄分を含む。硬く締る。
- 2 黄白色土 硬くて締り良い。粘性あまりない。
- 2' 2層上に近似。
- 3 灰白色土 硬くて締り良い。粘性あまりない。
- 4 砂礫層
- 5 黄灰色土 硬くて締り良い。
- 6 砂礫層
- 7 暗褐色土 砂利を含む。やや硬く締る。
- 8 茶褐色土 砂利を含む。やや硬く締る。
- 9 茶褐色砂質土 多量の砂利を含む。
- 10 灰褐色土 少量の礫名二ツ岳白色軽石を含む。やや硬く締る。
- 11 砂礫土
- 12 暗褐色土 少量の礫名二ツ岳白色軽石を含む。硬く締る。
- 13 暗褐色土 炭化物を含む。硬くて締り良い。粘性有。
- 14 暗褐色土 硬く締る。粘性有。

0 1:80 2m

第40図 X区1面1号溝

2号溝(第41図、PL.338・388)

グリッド 13-2区D・E 20と13区E 1

形状と規模 全長は7.96mで北西～南東方向に走行し、検出された幅は0.78～0.98m、深さは0.02～0.14mである。南北の底面比高差は0.08mで南から北に走行する。溝の断面形状は浅い皿形を呈する。

走行方位 N35°W

重複 なし。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む暗褐色土からなる。

遺物 埋土から須恵器の杯(1)、灰軸陶器の皿(2)が出土した。

所見 埋土から9世紀後半の遺物が出土した。2号溝は第1面で検出され、埋土に浅間Bテフラを含まないことから1～IV(Ⅲ層を除く)層相当と考えられ、中世から近世に属する溝と考えられる。

第5節 畠

1. VII区

1号畠(第42図、PL.388)

グリッド 2 L 9

区画の規模 調査区の南東隅に連なる北西～南東方向の溝状遺構～耕作痕群である。区画の長さは11.6m、幅は12.0m、面積は97.0㎡である。

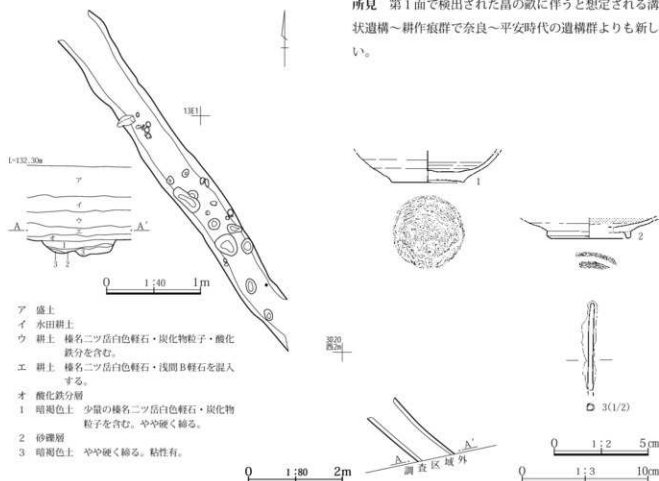
規模 1号畠は南西部の溝状遺構と北東部の耕作痕群からなる。溝は幅0.40m、深さ0.02～0.16m、溝間は0.24～0.32mで9条である。耕作痕群は幅0.32mの円～楕円形の窪みが連続し、窪み列が13条である。

走行方位 N50°W

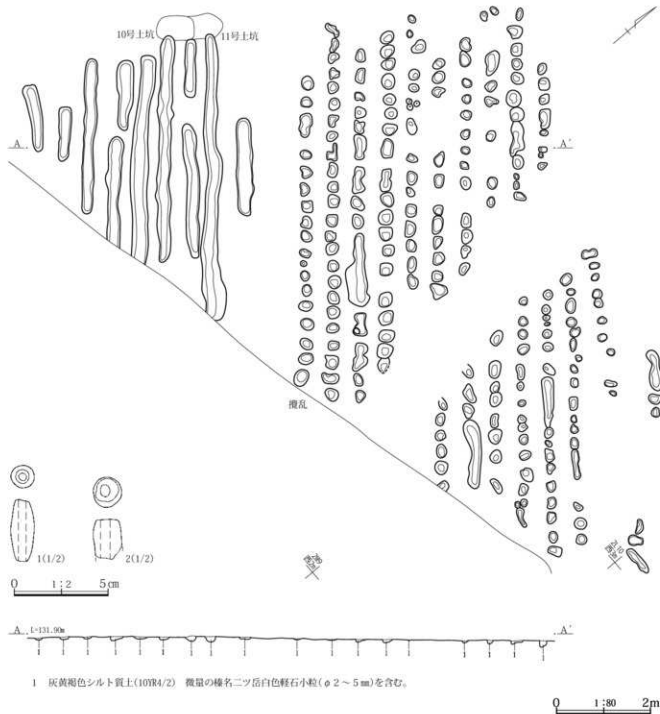
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

遺物 土鍾(1・2)が出土した。

所見 第1面で検出された畠の畝に伴うと想定される溝状遺構～耕作痕群で奈良～平安時代の遺構群よりも新しい。



第41図 X区1面2号溝と出土遺物



第42図 VI区1号畠と出土遺物

2号畠(第43図)

グリッド 2 S 15

区画の規模 調査区中央の北部に連なる北西～南東方向の溝状遺構である。区画の長さは5.80m、幅は1.60m、面積は8.3m²である。

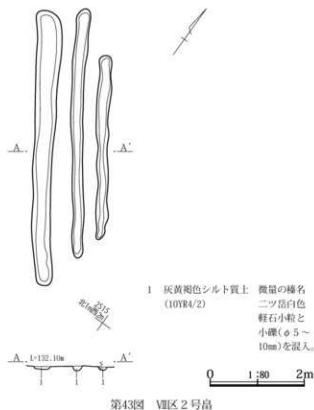
規模 溝は幅0.40m、深さ0.10m、溝間は0.40mで3条である。

走行方位 N35°W

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

遺物 なし。

所見 第1面で検出された畠の畝に伴うと想定される溝状遺構で奈良～平安時代の遺構群よりも新しい。



第6節 土坑

1. VII区

1号土坑(第44図、PL.350)

グリッド 13-2区T11

長軸方位 N29°W

重複 2号土坑に切られる。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長辺は1.75m、短辺は0.68m、深さは0.24mである。

埋土 VII層を起源とする灰黄褐色シルト質土からなる。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

2号土坑(第44図、PL.350)

グリッド 13-2区T11

長軸方位 N27°W

重複 1号土坑を切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長辺は2.00m、短辺は0.68m、深さは0.43mである。

埋土 VII層を起源とするニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

3号土坑(第44図、PL.350)

グリッド 13-2区T13

長軸方位 N59°E

重複 なし。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長辺は2.99m、短辺は0.68m、深さは0.56mである。

埋土 VII層を起源とするニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

4号土坑(第44図、PL.350)

グリッド 13-2区R11

長軸方位 N53°E

重複 なし。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は浅い箱形を呈する。長辺は1.72m、短辺は0.60m、深さは0.34mである。

埋土 VII層を起源とするニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

5号土坑(第44図、PL.350・388)

グリッド 13-3区A14

長軸方位 N40°W

重複 6号土坑を切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長辺は2.98m、短辺は0.76m、深さは0.70mである。

埋土 VII層を起源とするニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

遺物 砥沢石の砥石(1)が出土した。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

6号土坑(第44図、PL.350・388)

グリッド 13-3区A14

長軸方位 N53° E

重複 5号土坑に切られる。3号溝を切る。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長辺は4.62m、短辺は0.82m、深さは0.53mである。

埋土 VII層を起源とする二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

遺物 銅製品(2)が出土した。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

7号土坑(第44図、PL.350)

グリッド 13-2区T16

長軸方位 N41° W

重複 なし。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長辺は2.96m、短辺は0.76m、深さは0.88mである。

埋土 VII層を起源とする二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

8号土坑(第44図、PL.351)

グリッド 13-2区S16

長軸方位 N69° E

重複 4号溝を切る。

形状と規模 北北東～西南西方向に長軸を有する隅の丸い長方形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長辺は1.22m、短辺は0.64m、深さは0.21mである。

埋土 VII層を起源とする二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

9号土坑(第44図、PL.350)

グリッド 13-2区R12

長軸方位 N35° W

重複 なし。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有する円形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長径は0.97m、短径は0.86m、深さは0.22mである。

埋土 VII層を起源とする二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

色シルト質土からなる。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

10号土坑(第44図、PL.351)

グリッド 13-2区O9

長軸方位 N37° E

重複 11号土坑、1号溝を切る。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有する隅の丸い長方形を呈し、断面形状は浅い箱形を呈する。長辺は0.81m、短辺は0.53m、深さは0.30mである。

埋土 VII層を起源とする二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなり、垂門礫を含む。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

11号土坑(第44図、PL.351)

グリッド 13-2区O10

長軸方位 N37° E

重複 10号土坑に切られる。1号溝を切る。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有する隅の丸い長方形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長辺は0.62m+、短辺は0.56m、深さは0.20mである。

埋土 VII層を起源とする二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなり、垂門礫を含む。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

12号土坑(第45図、PL.351)

グリッド 13-3区A18

長軸方位 N50° E

重複 なし。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長辺は1.68m、短辺は0.66m、深さは0.39mである。

埋土 長径0.10m大の垂門礫からなる下層と灰黄褐色土の上層からなる。

時代 不明。

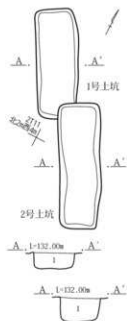
13号土坑(第45図、PL.351)

グリッド 13-2区O16

長軸方位 N13° W

重複 1号復旧痕に切られる。

1・2号土坑



1号土坑

1 灰黄褐色シルト質土 (10YR4/2)

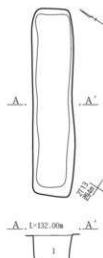
微量の炭化粒子・焼土
粒子と少量の小礫(φ
5~20mm)を含む。
締りやや弱。

2号土坑

1 灰黄褐色シルト質土 (10YR4/2)

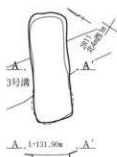
微量の種名ニツ岳白色
軽石小粒(φ2~7mm
大)と少量の小礫(φ
5~20mm大)を含む。

3号土坑



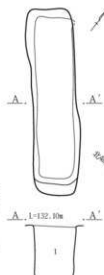
1 灰黄褐色シルト質土 (10YR4/2)

4号土坑



1 灰黄褐色シルト質土 (10YR4/2)
微量の種名ニツ岳白色軽石
小粒(φ2~7mm大)を含
む。締りやや弱。

7号土坑



1 灰黄褐色シルト質土 (10YR4/2)

8号土坑



1 灰黄褐色シルト質土 (10YR5/2)

微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ5~10mm大)を含む。締りやや弱。

5・6号土坑



5号土坑

1 灰黄褐色シルト質土 (10YR5/2)

微量の種名ニツ岳白色
軽石小粒(φ1~5mm
大)・小礫(φ1~30mm
大)を含む。

6号土坑

1 灰黄褐色シルト質土 (10YR4/2)

微量の種名ニツ岳白色
軽石小粒(φ2~10mm)
・小礫(φ5~20mm大)を
含む。

5号土坑



6号土坑



9号土坑



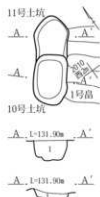
1 灰黄褐色土 (10YR4/2)

微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ10~20mm大)を含む。締りやや弱。

2 灰黄褐色土 (10YR4/2)

微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)・小礫(φ2~10mm大)を含む。締りやや弱。

10・11号土坑



10号土坑

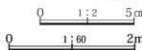
1 灰黄褐色シルト質土 (10YR5/2)

微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ2~5mm大)・小礫(φ5~20mm大)を含む。締りやや良。

11号土坑

1 灰黄褐色シルト質土 (10YR4/2)

微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ2~20mm大)を含む。



第44図 VIII区1~11号土坑と5・6号土坑の出土遺物

形状と規模 北北西～南南東方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長辺は1.24m、短辺は0.60m、深さは0.54mである。

埋土 長径0.10m大の垂円礫を多く含む灰黄褐色土からなる。

遺物 須恵器の羽釜(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀。

14号土坑(第45図、PL.351)

グリッド 13-3区D17

長軸方位 N61°E

重複 なし。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長辺は1.82m、短辺は0.70m、深さは0.38mである。

埋土 VII層を起源とする二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

15号土坑(第45図、PL.351)

グリッド 13-3区C16

長軸方位 N60°E

重複 なし。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は狭い箱形を呈する。長辺は1.92m、短辺は0.70m、深さは0.23mである。

埋土 VII層を起源とする二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

16号土坑(第45図、PL.352)

グリッド 13-2区R17

長軸方位 N50°E

重複 なし。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長辺は2.11m、短辺は0.67m、深さは0.35mである。

埋土 VII層を起源とする二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

17号土坑(第45図、PL.352)

グリッド 13-2区Q11

長軸方位 N45°W

重複 なし。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は半月形を呈する。長辺は2.68m、短辺は0.69m、深さは0.35mである。

埋土 VII層を起源とする二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

遺物 土師器の甕(2)が出土した。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

18号土坑(第45図、PL.352)

グリッド 13-3区D8

長軸方位 N63°E

重複 なし。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有する歪んだ楕円形を呈し、断面形状は浅い皿形を呈する。長径は0.87m、短径は0.43m、深さは0.06mである。

埋土 VII層を起源とする二ツ岳の白色軽石を含む灰黄色シルト質土からなる。

時代 埋土から中世～古代に属するものと考えられる。

2. VIII区

1号土坑(第45図、PL.364)

グリッド 13-2区K12

長軸方位 N32°E

重複 なし。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有する長方形を呈し、断面形状は箱形を呈する。長辺は2.16m、短辺は0.54m、深さは0.70mである。

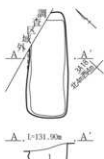
時代 不明。

第7節 遺構外から出土した遺物

第1面の調査ではVIII区とIX区、X区で遺構外から遺物が出土した(第46図、PL.388)。VII区では瀬戸美濃窯の碗(2)、肥前磁器の呉器手碗(1)、輸入陶磁器の青磁碗の破片(3)が出土した。VIII区では瀬戸美濃窯の皿(4)が、X区では輸入陶磁器の青磁碗の破片(6)、瀬戸美濃窯の鉢(5)が出土した。

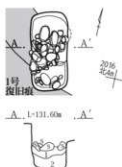
第3章 第1面の遺構と出土遺物

12号土坑



- 1 灰黄褐色シルト質土 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ2~10mm大)を含む。締りやや弱。

13号土坑



- 1 灰黄褐色土 少量の円礫(河原石φ50~300mm大)・浅間石(φ70~150mm大)を含む。
2 暗灰黄色シルト質土 締りやや弱。(2.5V4/2)

13号土坑

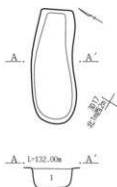


17号土坑



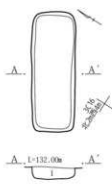
0 1:3 10cm

14号土坑



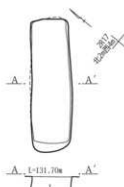
- 1 灰黄褐色シルト質土 少量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ2~5mm大)・円礫(φ20~100mm大)を含む。鉄分沈着。締りやや弱。

15号土坑



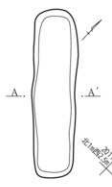
- 1 灰黄褐色シルト質土 少量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ2~5mm大)・円礫を含む。鉄分沈着少し有り。

16号土坑



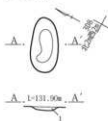
- 1 灰黄褐色シルト質土 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ2~5mm大)を含む。締りやや弱。

17号土坑



- 1 黒褐色土 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ2~10mm大)・円礫を含む。

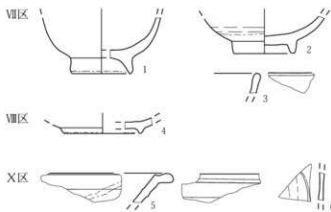
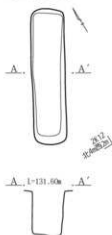
18号土坑



- 1 灰黄色シ 地山下層。少量シルト質土上の灰黄褐色土混(2.5V7/2)じりを含む。

0 1:60 2m

VIII区1号土坑



0 1:3 10cm

第45図 VIII区12~18号土坑・VIII区1号土坑と

13・17号土坑の出土遺物

第46図 VII・VIII・X区1面 遺構外から出土した遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物

第1節 調査の概要

本遺跡は広瀬川低地帯の自然堤防からなる微高地から後背湿地に相当する低地に立地するが、圃場整備による造成を受けて平坦化している。調査区は北北西～南南東方向の水路や道路によって区画され、V・VII区が路線の軸に位置することから調査面積が大きい。

V区 竪穴住居66棟、掘立柱建物1棟、竪穴6棟の73棟の建物が検出された。また、耕作痕4区画、溝9条、集石4基、土坑100基が検出された(第47・48図)。

VI区 竪穴住居51棟、竪穴6棟の57棟の建物が検出された。また、溝18条、鍛冶遺構1基、集石2基、墓坑1基、土坑41基が検出された(第49・50図)。

VII区 竪穴住居97棟、掘立柱建物3棟の100棟の建物が検出された。また、高1区画、溝3条、鍛冶遺構1基、土坑182基が検出された(51・52図)。

VIII区 竪穴住居22棟、溝7条、土坑67基が検出された(第53・54・55・56図)。

IX区 竪穴住居19棟、土坑52基が検出された(第57・58図)。

X区 竪穴住居28棟、掘立柱建物1棟の29棟の建物が検出された。また、溝6条、土坑66基が検出された(第59・60図)。

XI区 竪穴住居1棟が検出された(第61図)。

XII区 竪穴住居20棟、掘立柱建物4棟の24棟の建物が検出された。また鍛冶遺構1基、集石1基、土坑82基が検出された(第62・63図)。

調査区別では、V区が66棟、VI区が51棟、VII区が97棟、VIII区が22棟、IX区が19棟、X区が28棟である。XI区が1棟、XII区が20棟である。

第2節 住居

本節で述べるのは、古墳時代から平安時代の竪穴住居(以下住居と略す)と出土遺物である。検出された住居は、304棟で、時代別の遺構数では、古墳時代が5棟、飛鳥時代が3棟、奈良時代が12棟、平安時代が260棟、年代未詳の住居は24棟である。平安時代の住居は9世紀が64棟、10世紀が180棟、11世紀が12棟である。

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第47図 V区2面 遺構全体図

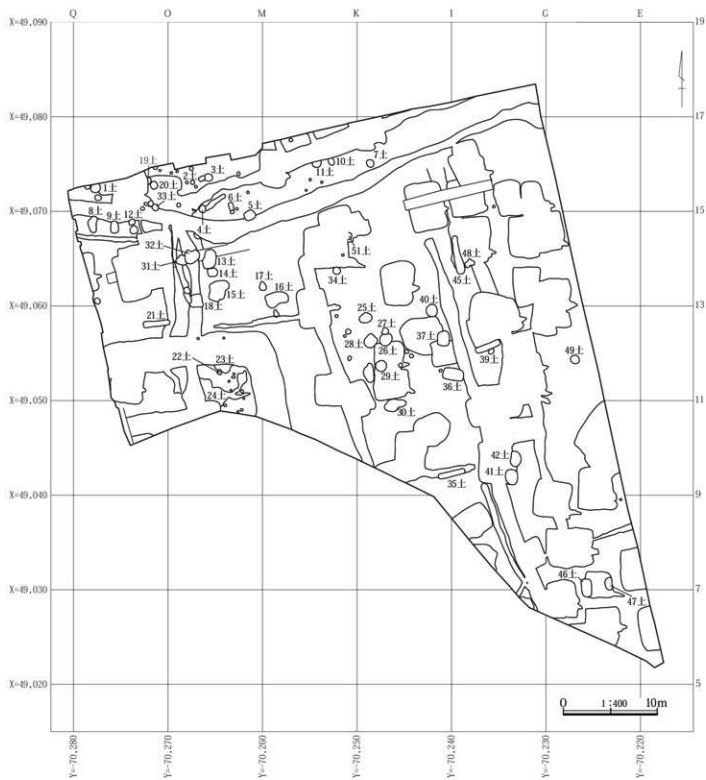


第48图 V区2面 土坑全体图

第4章 第2面の遺構と出土遺物

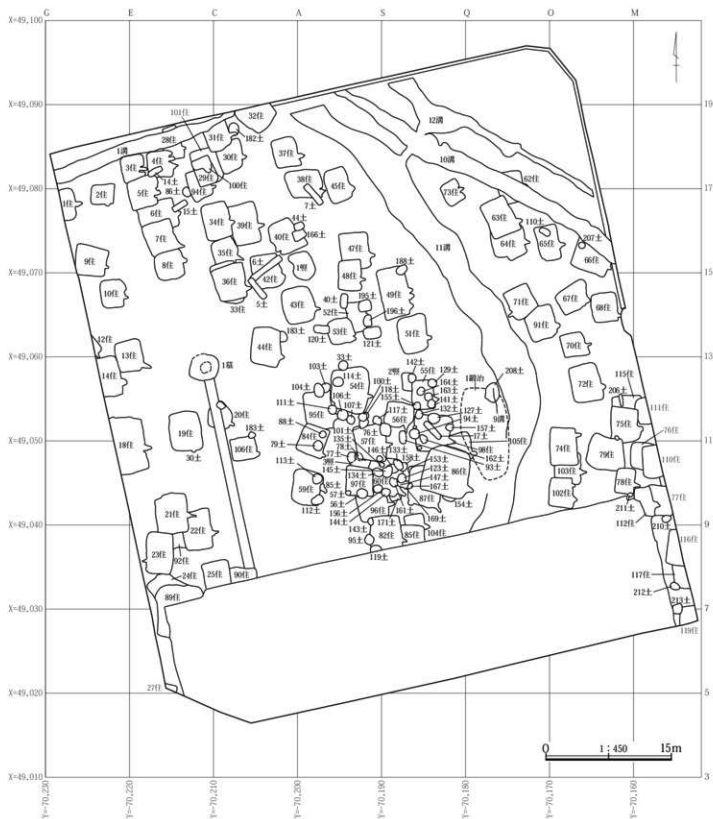


第49図 M区2面 遺構全体図



第50图 VI区2面 土坑全体图

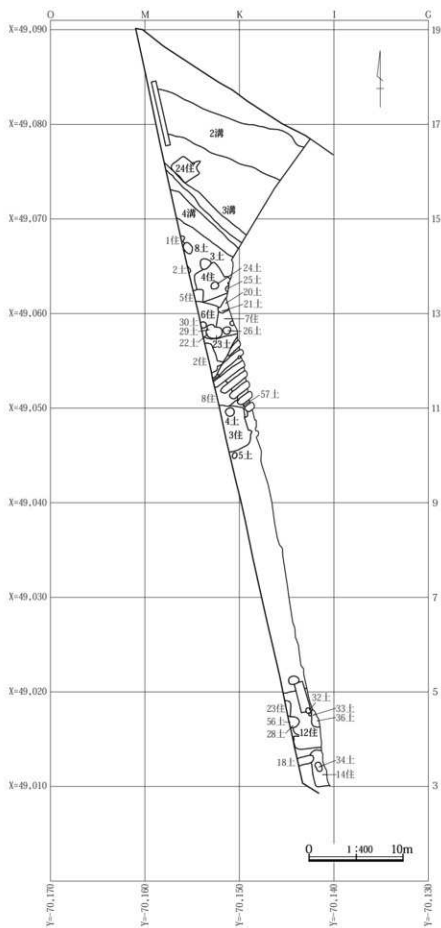
第4章 第2面の遺構と出土遺物



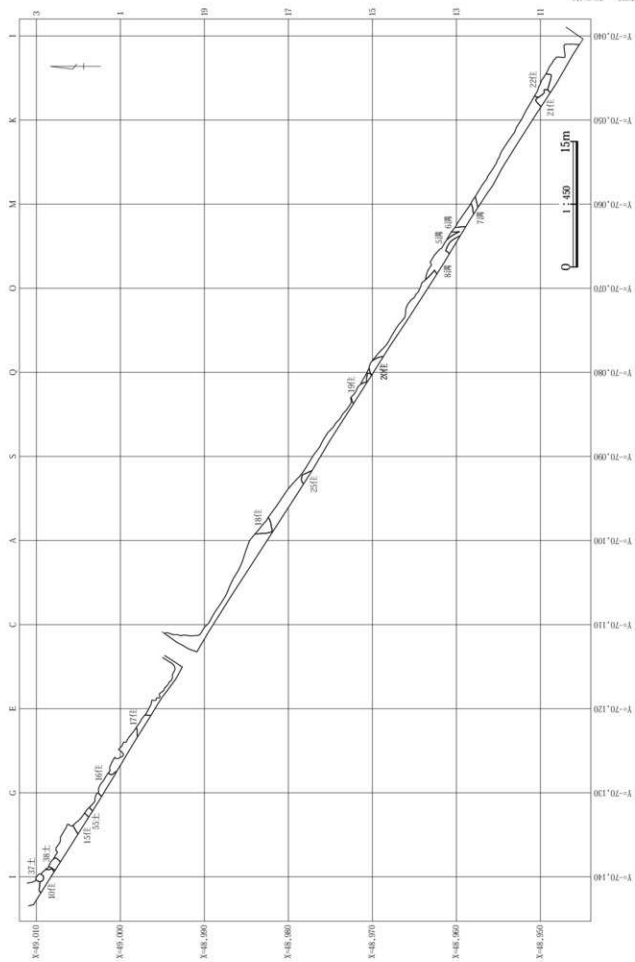
第51图 VII区2面 遺構全体图



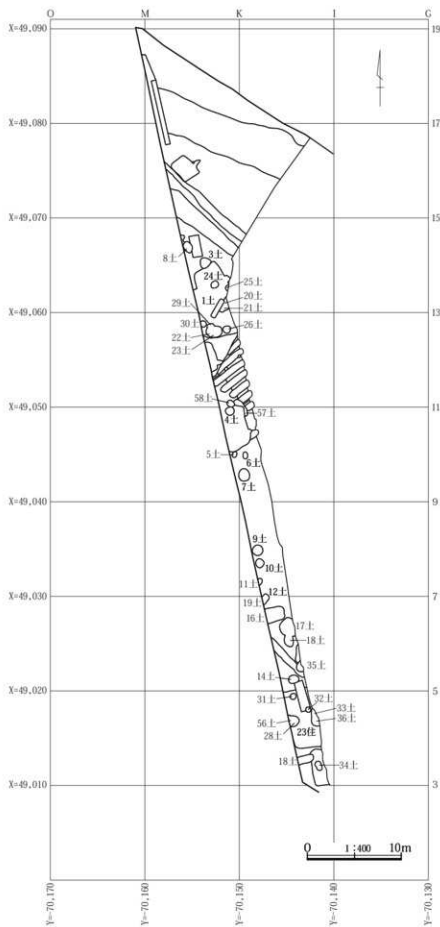
第52圖 VII区2面 土坑全体图



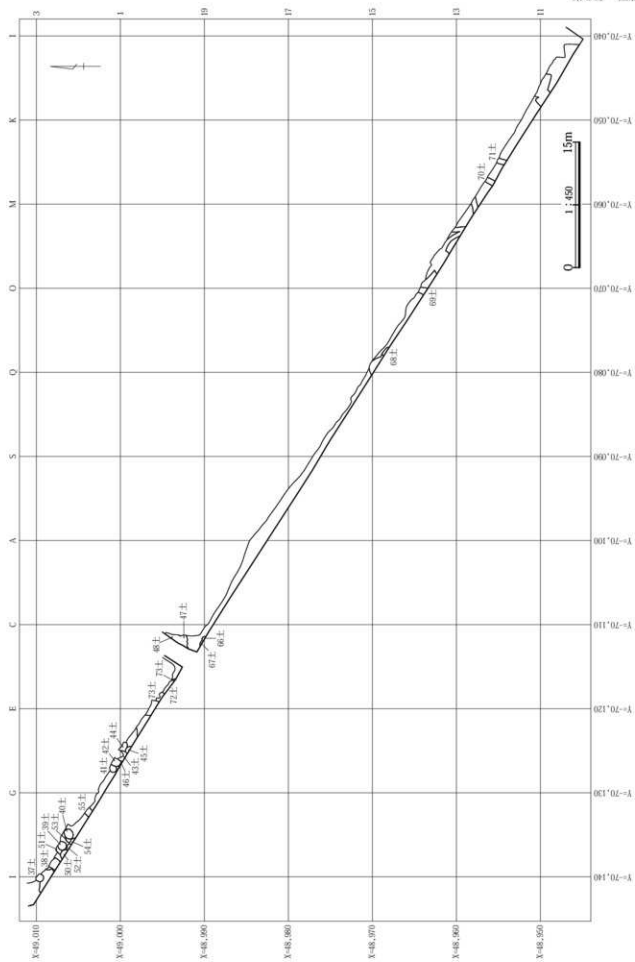
第53図 VIII区2面 遺構全体図(1)



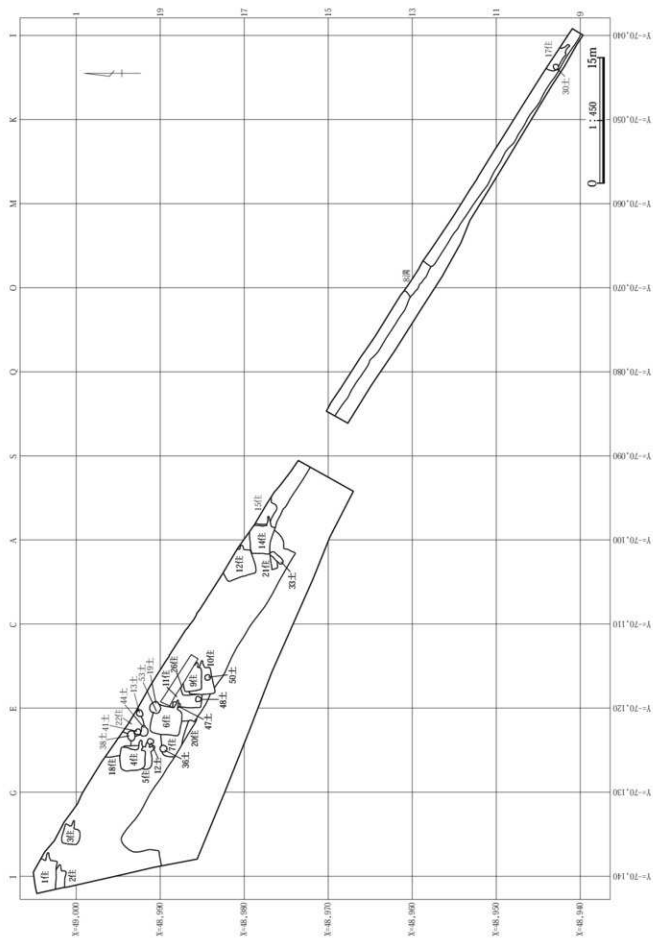
第54図 Ⅷ区2面 遺構全体図(2)



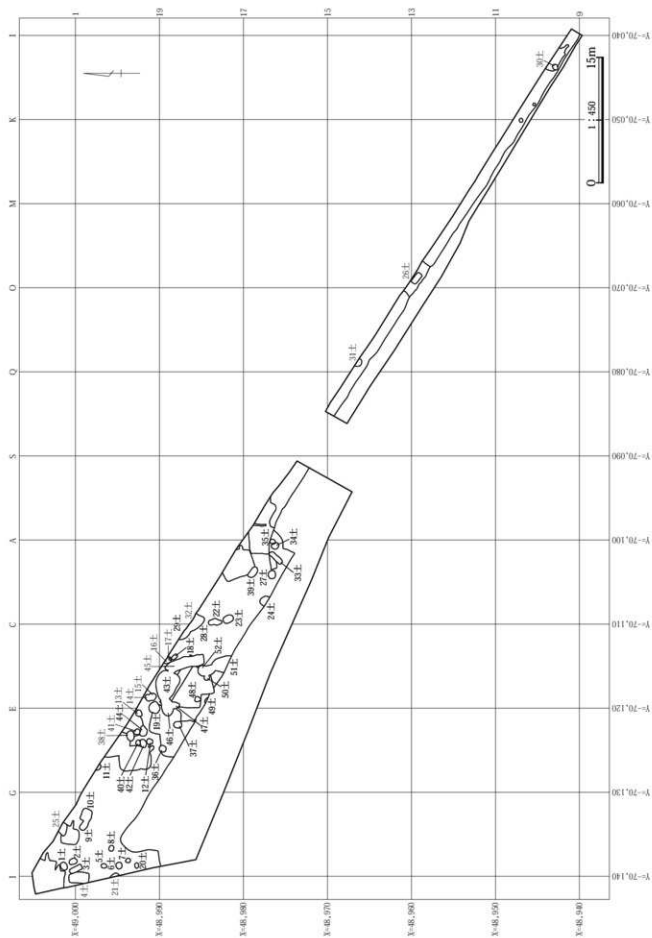
第55図 VIII区2面 土坑全体図(1)



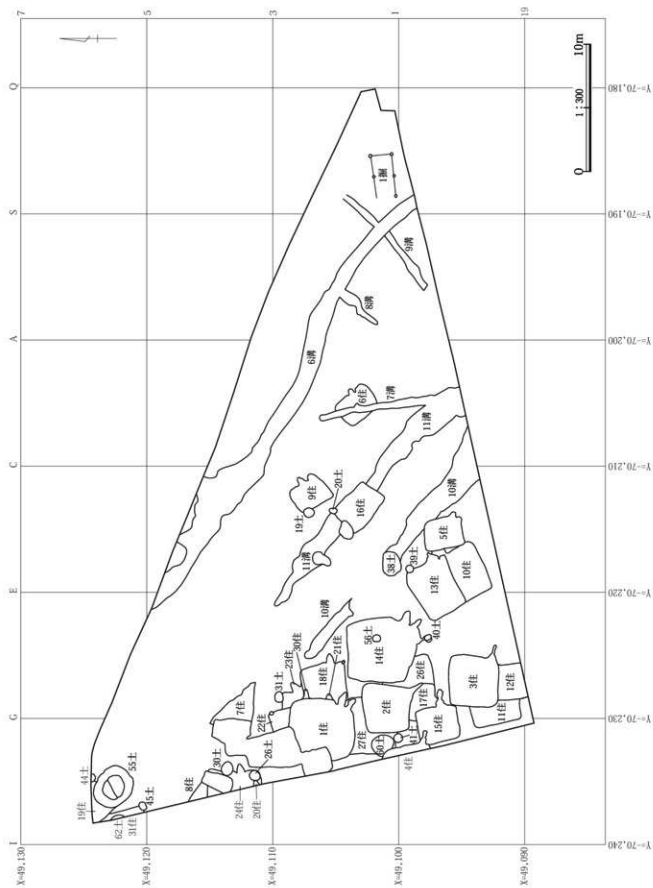
第56図 Ⅷ区2面 土坑全体図(2)



第57図 IX区2面 遺構全体図



第558图 IX区2面 土坑全体图



第59図 X区2面 遺構全体図

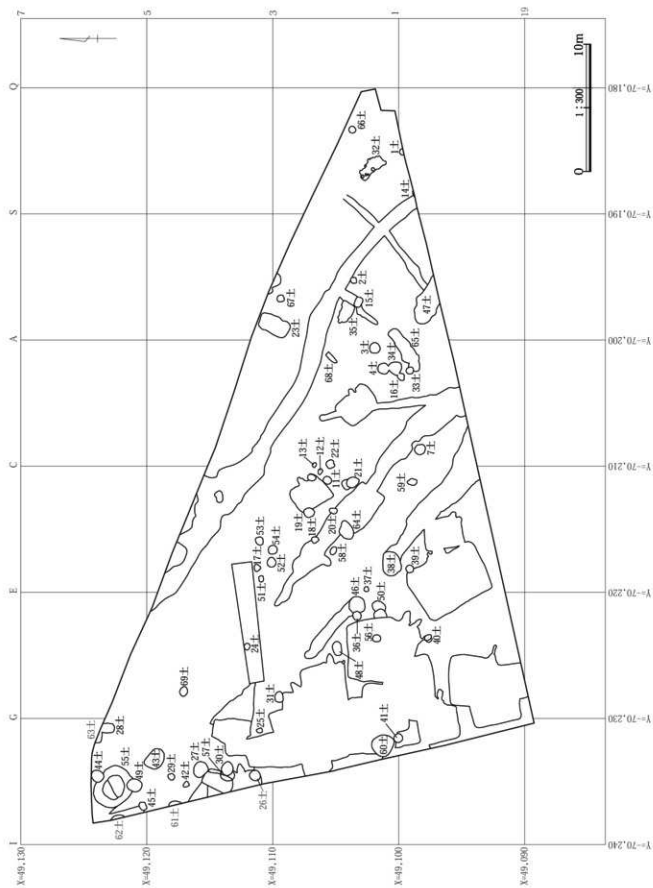
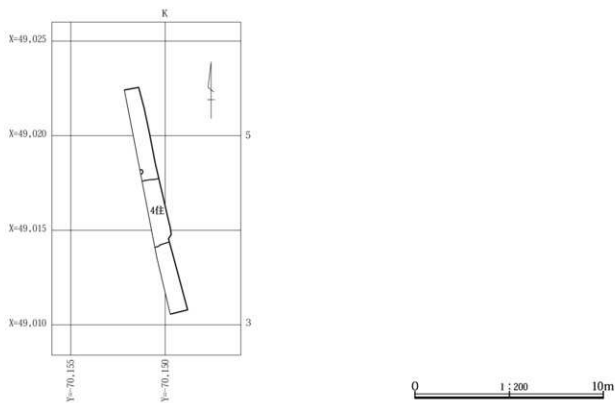
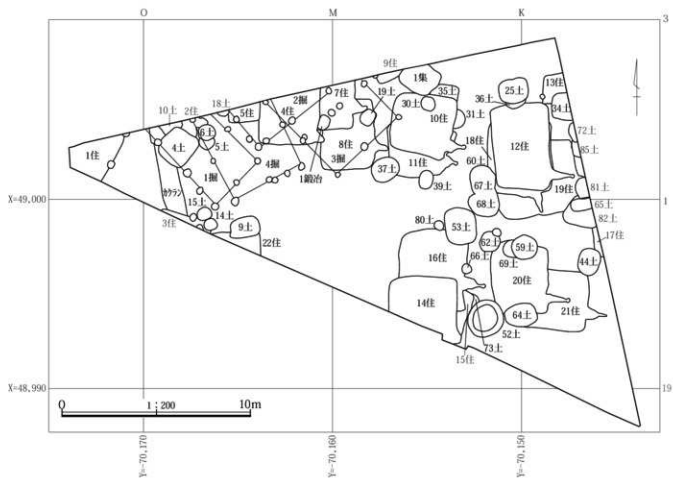


図500 Ⅹ区2面 土坑全体図

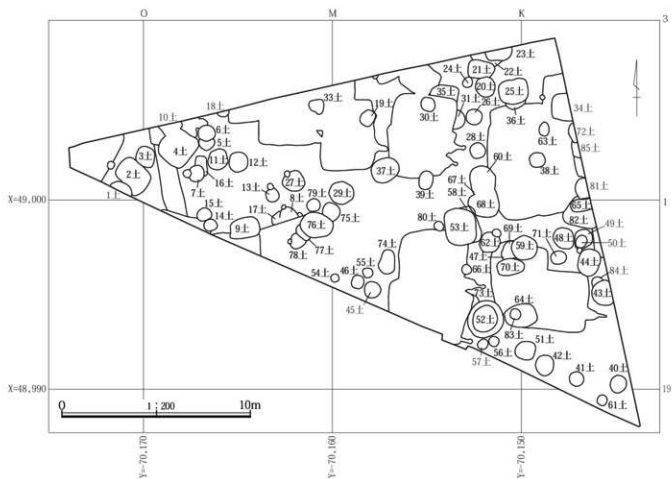
第4章 第2面の遺構と出土遺物



第61図 XI区2面 遺構全体図



第62図 XII区2面 遺構全体図



第63图 Ⅱ区2面 土坑全体图

1. V区

V区では古墳時代前期から平安時代の竪穴住居が66棟検出された。時代別の遺構数では、古墳時代が3棟、奈良時代が5棟、平安時代が54棟、年代未詳の住居は4棟である。平安時代の住居は9世紀が18棟、10世紀が35棟、11世紀が1棟である。

1号住居(第64～66図、PL.16・388・389)

グリッド 13Q 6 (以下、住居は大グリッドを略す)

主軸方位 N84° E

重複 3号復旧痕に切られる。2号土坑を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、復旧痕により北西部は失われている。長辺は2.70m+、短辺は2.42m、深さは0.16m、検出された最大の面積は5.20㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

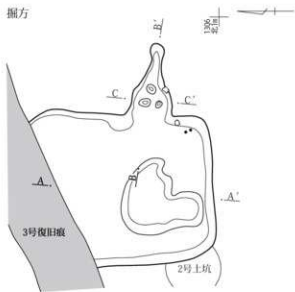
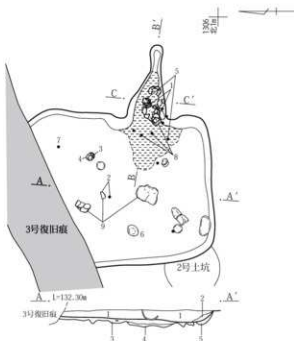
床面 ニツ岳の白色軽石や焼土粒を含む灰黄褐色砂質土を0.06mほど貼って、平坦な床面を構築している。カマ

下前には炭化物が広がり、硬化面を検出した。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築しており、南西部で不定形の窪みを検出した。掘方で2号土坑を検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、緩やかな勾配で立ち上がり煙道に続く。燃焼部の右壁には長径0.13～0.18mの垂円礫S 1・2が据えられ、奥の垂円礫の下から長径0.11mのピットを検出した。これらの礫はカマドの構築材、ピットは構築材の痕跡と考えられる。燃焼部の中央には長径0.20mの垂円礫S 3が据えられている。礫は0.11m埋め込まれており、下から長径0.29mのピットを検出した。これは支脚と考えられる。燃焼部底は焼土がなく炭化物が広がり、焚口付近で厚さ0.03mの炭化物を検出した。カマド埋土の上部には長径0.15～0.20mの垂円礫や土器片が多く出土した。これらはカマドの崩落時に埋没したものと考えられる。カマドは長さ1.53m、幅0.63m、深さ0.16mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たな

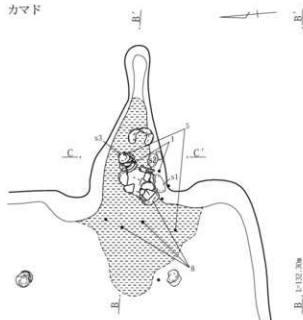


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の榛名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土ブロック(φ10～30mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質シルト土(10YR6/4) 壁の崩落土。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の榛名ニツ岳白色軽石・炭化粒子・焼土粒子(φ1～2mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の榛名ニツ岳白色軽石を含む。
- 5 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の焼土粒子を含む。締りやや弱。

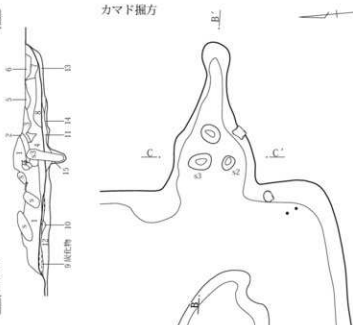
0 1:60 2m

第64図 V区1号住居

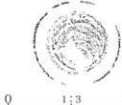
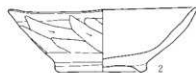
カマド



カマド掘方



C, 1:132, 30m

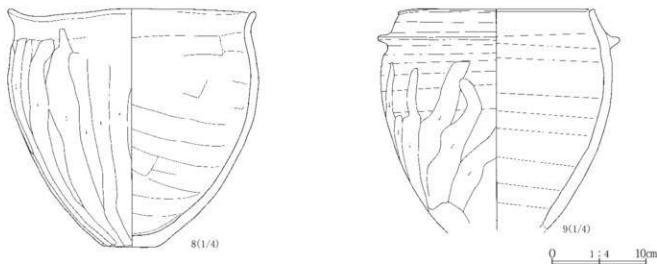


0 1:30 1m

0 1:3 10cm

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の椀名二ツ層白色軽石と微量の炭化物・焼土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の椀名二ツ層白色軽石小粒と多量の炭化物・焼土粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の椀名二ツ層白色軽石小粒を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の椀名二ツ層白色軽石小粒と多量の炭化物と少量の焼土粒子を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の焼土小ブロック(φ5~10mm大)を含む。=煙道天井部
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。=天井部
- 7 黒褐色砂質土(10YR3/1) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 8 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)を含む。
- 9 黒褐色土(10YR3/2) 多量の炭化物を含む。
- 10 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名二ツ層白色軽石小粒(φ1~20mm大)を含む。
- 11 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の浅黄色シルト質土を含む。
- 12 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量の椀名二ツ層火山灰に伴う泥流砂質土を含む。
- 13 暗褐色砂質土(10YR3/4) 微量の焼土粒子(φ1mm大)を含む。
- 14 暗灰色砂質土(2.5Y4/2) 微量の浅黄色シルト質土を含む。
- 15 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の椀名二ツ層火山灰(φ1~2mm大)を含む。

第65図 V区1号住居と出土遺物



第66図 V区1号住居の出土遺物

い構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面やカマド使用面から須恵器と土師器の椀(1・2・5・6)、土師器の甕(8)、須恵器の羽釜(9)、床面付近から須恵器の椀(4)、灰釉陶器の輪花皿(7)が出土した。

時代 平安時代10世紀第2・3四半期。

2号住居(第67・68図、PL.17・18・389)

グリッド 13R 8

主軸方位 N83°E

重複 3号復旧痕に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.61m、短辺は2.73m、深さは0.39m、面積は7.99㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が成層し、緩やかに縁から中央に向かって堅方を埋積している。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土と泥流堆積物を掘り込んで構築しており、南壁寄りに歪んだ円形の土坑1～3を検出した。土坑1はニツ岳の白色軽石を含む砂質土を埋土とし、土坑2に切られる。土坑2の埋土は、ニツ岳の白色軽石を含む砂質土が成層しており、長径0.45mの垂円礫が出土した。土坑3は南西隅の壁際に位置し、長径0.3mの垂円礫が出土した。土坑1は長径0.61m、短径0.54m+、深さ0.16m。土坑2は直径0.65m、深さ0.20m。土坑3は長径0.57m、短径0.50m、深さ0.31m

を呈する。竪穴の南壁や西壁中央には長径0.35～0.65m、深さ0.40～0.50mの浅いビット3基が検出された。これらと土坑2・3は壁際に構築された補助的な柱穴の可能性はある。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部の左壁には長径0.15mの垂円礫S1が置かれ、燃焼部の掘方から左右に長径0.20～0.40mのビットを2基検出した。左壁の礫はカマドの構築材、右壁下のビットは構築材の痕跡と考えられる。燃焼部の中央には長径0.23mの垂円礫S2が据えられ、0.11m埋め込まれている。礫の下には長径0.18mのビットを検出し、これらは支脚と考えられる。燃焼部底は支脚の周囲に焼土と炭化物の広がりを検出した。また支脚から焚口まで厚さ0.07～0.11mの炭化物を検出し、これは灰の抜き出しによって形成されたと想定される。カマド埋土は炭化物を含む灰黄褐色砂質土である。カマドは長さ0.83m、幅0.55m、深さ0.18mである。貯蔵穴は検出されなかった。

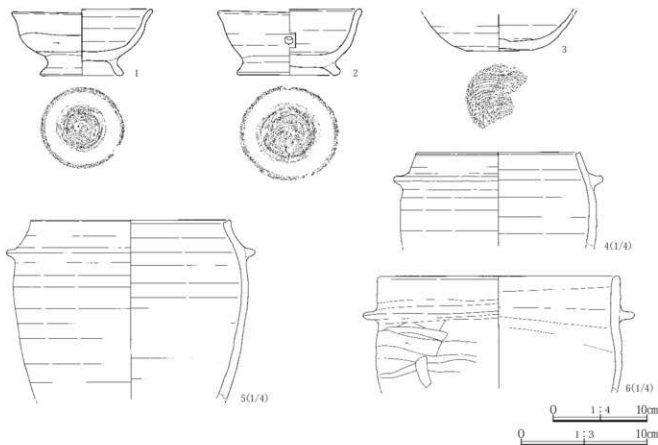
柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。掘方で検出された土坑やビットは壁際の補助的な柱の痕跡である可能性があり、主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(2)、カマド使用面付近から椀(1)が出土した。出土遺物は10世紀内に年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀。



第67図 V区2号住居



第68図 V区2号住居の出土遺物

3号住居(第69図、PL.19・20・389)

グリッド 13M 6

主軸方位 N85° E

重複 なし。北西1m以内に10号住居が存在し、同時存在の可能性はない。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は2.22m、短辺は1.95m、深さは0.12m、面積は3.43㎡で、極小規模の竪穴住居である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土のみからなる。

床面 ニツ岳の白色軽石や黄橙色砂質シルトブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.02mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。カマド前から中央北寄りで不定形の窪みを検出した。

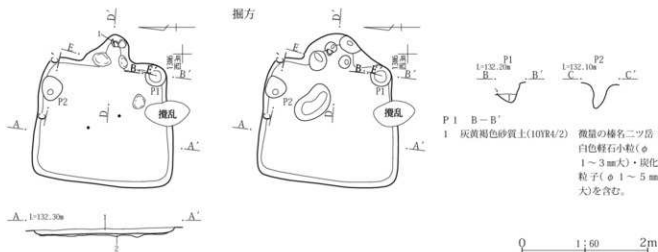
カマド 東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、約45°の勾配で

立ち上がる。燃焼部の両側には長径0.20~0.30m、短径0.12~0.21mの垂円礫S1・2の2点を検出し、礫は燃焼部底から浮いて埋土中から出土した。礫の下から長径0.20~0.30m、短径0.18~0.26m、深さ0.06mの小ピット2基を検出した。これらの礫は、カマドの崩落によって移動したカマド構築材と考えられる。燃焼部の中央奥には直径0.18m、深さ0.14mのピットを検出した。燃焼部底から焼土や炭化物は検出されなかった。カマド埋土は灰黄褐色砂質土である。カマドは長さ0.77m、幅0.56m、深さ0.13mである。

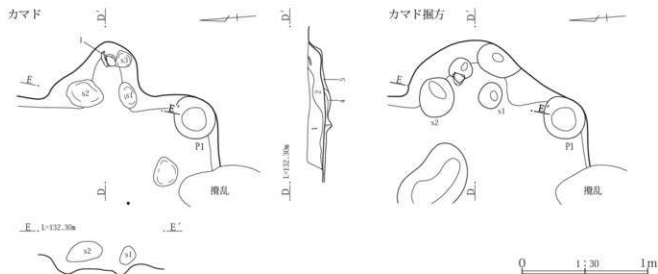
貯蔵穴と柱穴 東南隅と北壁の北東隅寄りからP1とP2を検出した。P1は直径0.33m、深さ0.15m。P2は長径0.39m、短径0.32m、深さ0.39mである。両方のピットは掘方で検出したが、壁際に位置しておりP1は貯蔵穴、P2は補助的な柱穴の可能性がある。3号住居は床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマド使用面から羽釜(1)が出土した。

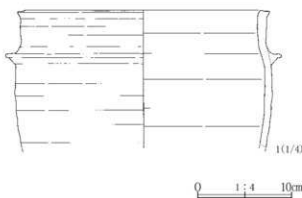
時代 平安時代10世紀第1四半期。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石とにふい黄褐色砂質土シルト粒子と微量の炭化物・焼土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石と多量のにふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~20mm大)を含む。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石とにふい黄褐色砂質土シルト粒子と微量の炭化物・焼土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石小粒・にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)と微量の炭化物・焼土粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の炭化物・焼土粒子(φ 1~2mm大)を含む。
- 4 にふい黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の焼土を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) にふい黄色シルト質土ブロックを含む。



第69図 V区3号住居と出土遺物

4号住居(第70・71図、Pl.20・389)

グリッド 13S 7

主軸方位 N86°W

重複 5号住居、19号土坑を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸方形を呈する竪穴住居で、攪乱により北半分は失われている。長辺は2.30m+、短辺は2.23m、深さは0.34m、検出された最大の面積は3.03㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土のみからなる。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。

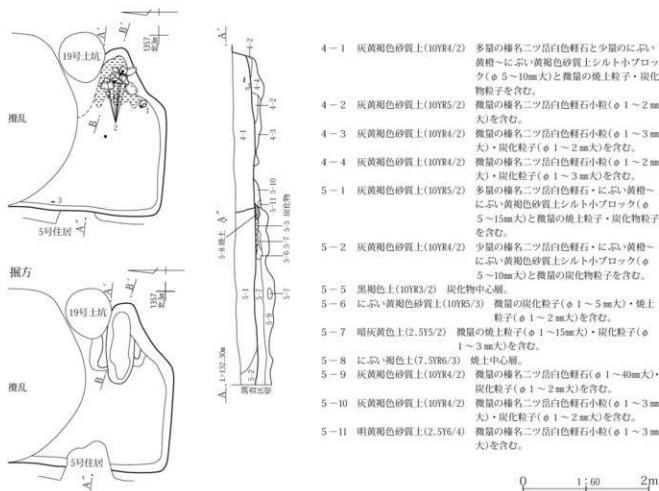
掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築し、凹凸のある小さな窪みが多く検出された。南壁側が0.03mほど深い。カマド掘方で19号土坑を検出した。土坑埋土と掘方埋土との切合いは不明であるが、カマド掘方埋土が土坑を切る可能性が高い。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、やや急な勾配で立ち上がる。燃焼部の右側には長径0.20～0.30m、短径0.11～0.16mの亜円礫S2・3の2点が据えられており、カマド構築材と考えられる。燃焼部の中央には長径0.24m、短径0.07m、厚さ0.11mの亜円礫S1が据えられ、0.13m埋め込まれている。礫の表面は被熱による酸化帯が認められ、これは支脚である。燃焼部底には炭化物が広がり、支脚から焚口までは厚さ0.03mの炭化物を層状に検出した。カマド埋土はニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土である。カマドは長さ0.68m、幅0.90m、深さ0.13mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

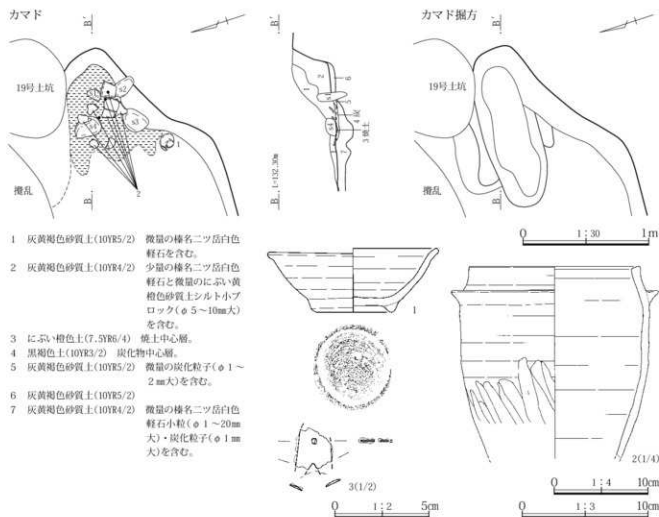
遺物 床面から須恵器の椀(1)、カマド使用面から羽釜(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀第1四半期。



- 4-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の椀名ニツ岳白色軽石と少量の赤い黄褐色にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と微量の焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。
- 4-3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 4-4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 5-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の椀名ニツ岳白色軽石・にふい黄褐色にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)と微量の焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 5-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石・にふい黄褐色にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と微量の炭化物粒子を含む。
- 5-5 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 5-6 にふい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子(φ1~5mm大)・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 5-7 暗黄褐色土(2.5Y5/2) 微量の焼土粒子(φ1~15mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 5-8 にふい褐色土(7.5YR6/3) 焼土中心層。
- 5-9 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石(φ1~40mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 5-10 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 5-11 明黄褐色砂質土(2.5Y6/4) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)を含む。

第70図 V区4号住居



第71図 V区4号住居と出土遺物

5号住居(第70・72~74図、PL.20・21・389)

グリッド 13S7

主軸方位 N86°W

重複 4号住居に切られる。12号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸方形を呈する堅穴住居で、南西部は調査区外にある。長辺は4.52m、短辺は2.89m、深さは0.35m、検出された最大の面積は9.31㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色～黄褐色砂質土からなり、埋土は縁から中央に向かって緩やかに堅穴を埋積している。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.30mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。カマド前から南壁にかけて不定形の窪

みを検出した。

カマド 東壁の中央に位置するが大部分が4号住居で失われている。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築したと推定される。燃焼部の右側には長径0.40m、短径0.20m、厚さ0.12mの垂門礫が据えられ、0.25m埋め込まれている。燃焼部の左右から長径0.20~0.25m、短径0.13~0.18m、深さ0.14~0.21mのビット2基を検出した。右壁の礫とビットはカマド構築材、左壁のビットは構築材の痕跡と考えられる。燃焼部底は焼土が広がり、焚口からカマド前の床面からは灰や硬化面を検出した。カマド埋土はニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土である。カマドは長さ0.63m、幅0.55m、深さ0.18mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.91m、短径0.72m、深さ0.17mの土坑を検出し、底から須恵器の窪

第4章 第2面の遺構と出土遺物

杯(3)、底から0.19m上から杯(2)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(5)、刀子(6)、床面付近から鉄釘(7)、埋土から杯(1・4)が出土した。

時代 平安時代9世紀第4四半期。

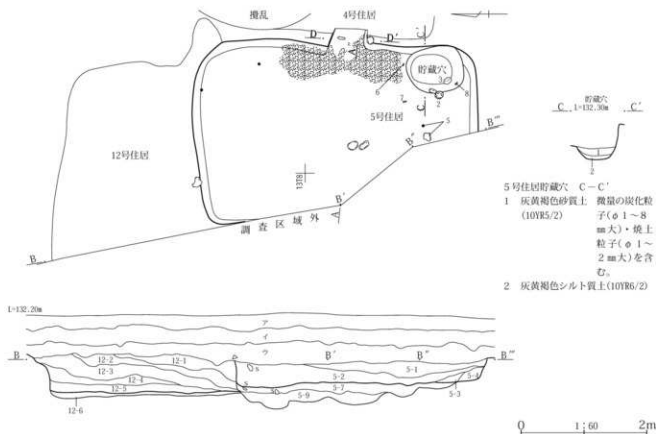
12号住居(第72~74図、PL.29・389)

グリッド 13 S 8

主軸方位 N83°W

重複 5号住居に切られる。

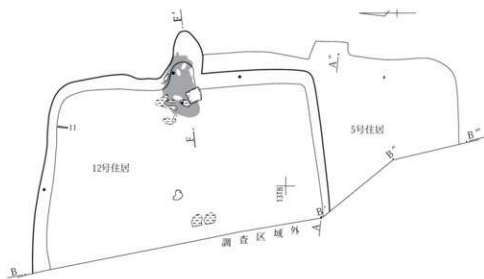
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸方形を呈する竪穴住居で、西部は調査区外にある。長辺は4.66m+、短辺は2.90m+、深さは0.40m、検出された最大の面積は10.36㎡である。



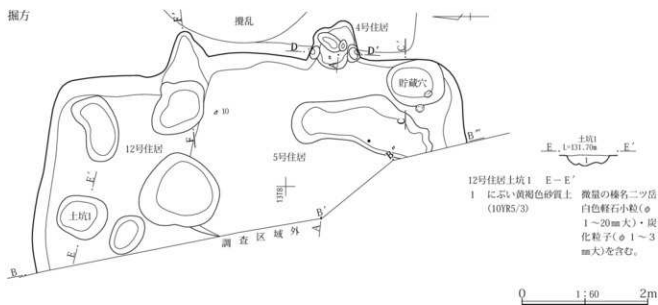
- 5号住居貯蔵穴 C-C'
- 1 灰黄褐色砂質土 微量の炭化粒子(φ1~8mm)・焼土粒子(φ1~2mm)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2)

- ア 灰黄褐色土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石(φ1~2mm)・榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm)を含む。
- イ 黄褐色砂質土(10YR5/6) 床土層。鉄分が酸化沈着している。
- ウ 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石(φ1~2mm)・榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm)を含む。
- 5-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の榛名二ツ岳白色軽石・にぶい黄橙~にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm)と微量の焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 5-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の榛名二ツ岳白色軽石・にぶい黄橙~にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm)と微量の炭化物粒子を含む。
- 5-3 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm)・焼土粒子(φ1~2mm)を含む。
- 5-4 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石・榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm)を含む。
- 5-7 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 微量の焼土粒子(φ1~15mm)・炭化粒子(φ1~3mm)を含む。
- 5-9 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の榛名二ツ岳白色軽石(φ1~40mm)・炭化粒子(φ1~2mm)を含む。
- 12-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の浅間B軽石・榛名二ツ岳白色軽石(φ1~40mm)を含む。
- 12-2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm)とにぶい黄褐色砂質土ブロックを含む。
- 12-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm)・炭化粒子(φ1~2mm)を含む。
- 12-4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm)・炭化粒子(φ1~2mm)を含む。
- 12-5 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm)・炭化粒子(φ1~2mm)を含む。
- 12-6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm)・炭化粒子(φ1~5mm)を含む。

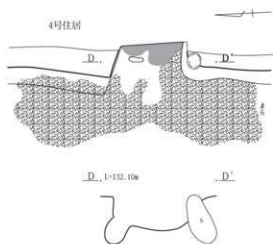
第72図 V区5号・12号住居(1)



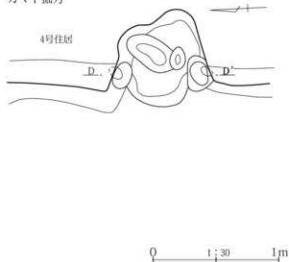
掘方



5号住居カマド



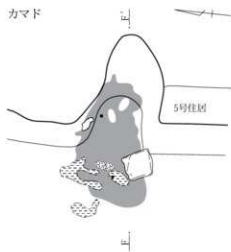
カマド掘方



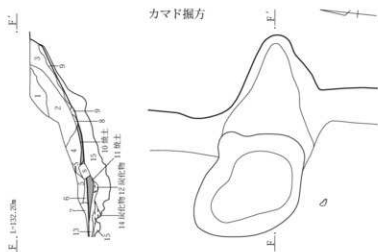
第73図 V区5・12号住居(2)

第4章 第2面の遺構と出土遺物

カマド



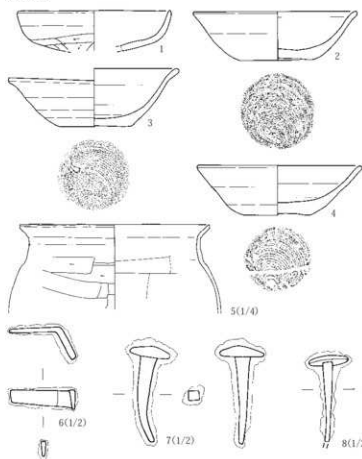
カマド掘方



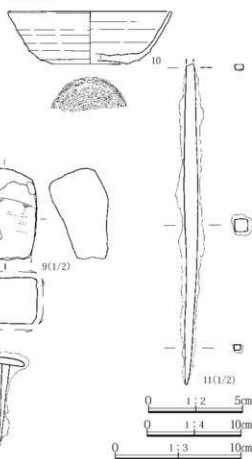
- 1 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ 1~5mm大)・焼土粒子を含む。
- 2 黄褐色砂質土(2.5Y5/3) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ 1~4mm大)・焼土粒子を含む。
- 3 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ 1~10mm大)・焼土・炭化物を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ 1~5mm大)・炭化物を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ 1~3mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の炭化物を含む。
- 7 灰黄褐色土(10YR6/2) 棒名ニッ岳火山灰泥流土。=硬崩落土
- 8 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2) 微量の焼土粒子を含む。
- 9 にぶい黄褐色土(10YR6/3) 微量の灰・焼土を含む。
- 10 にぶい橙色土(7.5YR6/4) 焼土中心層。
- 11 にぶい橙色土(7.5YR6/4) 焼土中心層。
- 12 黒黄褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。微量の焼土を含む。
- 13 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 少量の焼土。微量の焼土粒子(φ 1~2mm大)を含む。
- 14 黒黄褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 15 灰褐色土(7.5YR6/2) 少量の焼土と微量の炭化物を含む。

0 1:30 1m

5号住居



12号住居



第74図 V区12号住居と5・12号住居の出土遺物

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色～黄褐色砂質土が成層し、北から南に緩く傾いている。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築しており、床と掘方の間は0.05～0.12mである。北半部に歪んだ方～円形の窪みが見られ、北壁寄りから長径0.87m、短径0.65m、深さ0.12mの土坑1を検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、燃焼部底は緩く傾き、壁は28°の緩い勾配で立ち上がる。燃焼部の右から直径0.22mの垂円礫が出土した。燃焼部底から焚口には炭化物が広がり、焚口付近の床面には硬化面が認められる。カマド埋土はニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色～暗灰黄色砂質土である。カマドは長さ1.35m、幅0.60m、深さ0.45mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から棒状の鉄製品(11)が、掘方直上から須恵器の杯(10)が出土した。

時代 掘方から出土した遺物は、奈良時代8世紀第4四半期を示す。遺構はそれ以降から平安時代9世紀前半の時期と想定される。

6号住居(第75～77図、PL.22・23・390)

グリッド 13P7

主軸方位 N86°W

重複 7号住居、3号復旧痕、4号土坑に切られる。11号溝を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.62m、短辺は4.28m、深さは0.34m、面積は14.32㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築し、北東隅の壁際に長径1.14m、短径0.92m、深さ0.33mの土坑1と長径0.29m、短径0.24m、深さ0.25m

のP1を検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、燃焼部底は緩く傾斜し、燃焼部の奥壁は急勾配で立ち上がる。焚口と燃焼部境の左右には長径0.20～0.23m、短径0.10～0.13m、厚さ0.16～0.21mの垂円礫S2・3の2点が据えられており、上には長径0.57m、短径0.23m、厚さ0.17mの垂円礫S1が置かれている。これらは袖石と天井石からなるカマド構築材である。燃焼部の中央には長径0.27m、短径0.08m、厚さ0.10mの垂円礫S9が据えられ、0.10m埋め込まれている。礫の表面は被熱による酸化帯が認められ、これは支脚である。燃焼部底は炭化物が広がり、支脚から焚口までは厚さ0.03mの炭化物を検出した。カマド埋土はニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土である。カマドは長さ0.68m、幅0.90m、深さ0.13mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は掘方の調査で南西隅に長径0.50m、短径0.47m、深さ0.17mのP2と南西隅に長径0.78m、短径0.62m、深さ0.19mのP3を検出した。P2・3の柱間は2.90m、P3と土坑1の間は2.66mである。土坑1とP2・P3は建物の主柱穴の可能性が高い。これらの柱穴と竪穴の壁の方向は調和的であるが、6号住居は比較的規模の小さな竪穴住居である。このことから柱穴は6号住居の廃絶後に埋没した竪穴を利用して4号土坑を構築した際に上層として構築されたものと想定される。

遺物 床面から土製羽口(4)、カマド使用面から緑釉陶器の椀(2)、埋土から灰釉陶器の壺(3)が出土した。

時代 遺構は出土遺物から平安時代9世紀と想定される。

7号住居(第75・76図、PL.23・24・390)

グリッド 13Q7

主軸方位 N88°E

重複 3号復旧痕、4号土坑に切られる。6号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、北東部は調査区外にある。長辺は4.26m、短辺は3.26m、深さは0.35m、検出された最大の面積は10.62㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土のみからなる。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む暗灰黄色砂質土を0.05mほど貼って、6号住居と同じ高さの床面を構築している。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築し、中央から南壁際で長辺1.88m、短辺1.14m、深さ0.20mの歪んだ長方形の窪みを検出した。

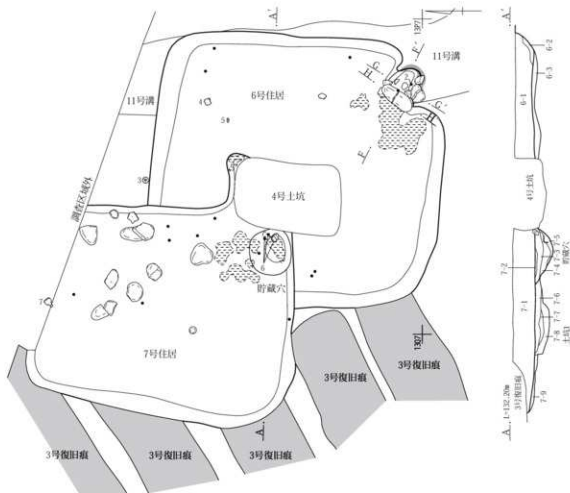
カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築していると想定されるが4号土坑でほとんどが失われている。カマド周辺の床面には炭化物の広がりを検出した。カマドは長

さ1.00m+である。

貯蔵穴 東南隅の南壁際で長径0.72m、短径0.68m、深さ2.27mの楕円形の土坑を検出した。底から0.11~0.13m上から須恵器の椀(6)が出土した。土坑はカマドとの位置関係から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は掘方の調査で南西隅に長径0.50m、短径0.47m、深さ0.17mのP1を検出した。床面に主柱穴を持たない構造の竅穴住居と想定される。

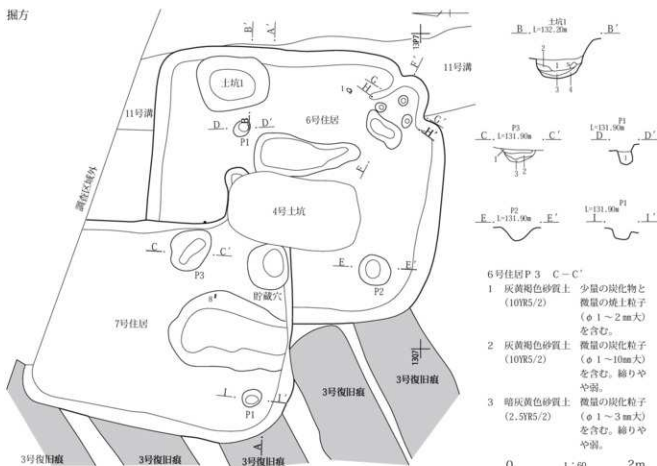
遺物 床面から灰軸陶器の瓶(7)、掘方から鉄製品(8)



- 6-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の種名ニツ岳白色軽石と少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
- 6-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~20mm大)を含む。
- 6-3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。
- 7-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 7-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。=貯蔵穴
- 7-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。締り弱。=貯蔵穴
- 7-4 黒褐色砂質土(10YR3/1) 少量の炭化物層。締り弱。=貯蔵穴
- 7-5 にふい黄褐色シルト質土(10YR6/4) 微量の炭化粒子(φ1mm大)を含む。締り弱。=貯蔵穴
- 7-6 暗灰黄褐色砂質土(2.5Y5/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。=土坑1
- 7-7 にふい黄褐色砂質土(10YR6/3) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)を含む。=土坑1
- 7-8 にふい黄褐色砂質土(10YR6/4) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。=土坑1
- 7-9 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)

第75図 V区6・7号住居

掘方



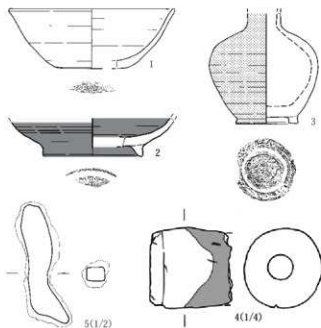
6号住居土坑1 B-B'

- 1 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) 微量の炭化粒子 ($\phi 1$ mm大) を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒 ($\phi 1 \sim 2$ mm大) を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) 微量の炭化粒子 ($\phi 1 \sim 2$ mm大) を含む。
- 4 にぶい黄褐色シルト質土 (10YR6/4) 微量の炭化粒子 ($\phi 1 \sim 2$ mm大) を含む。

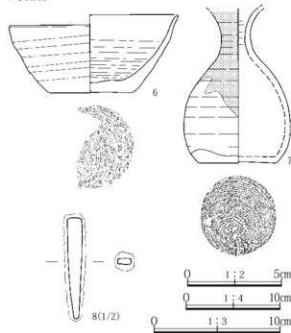
6号住居 P 1 D-D'

- 1 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒 ($\phi 1$ mm大) を含む。

6号住居

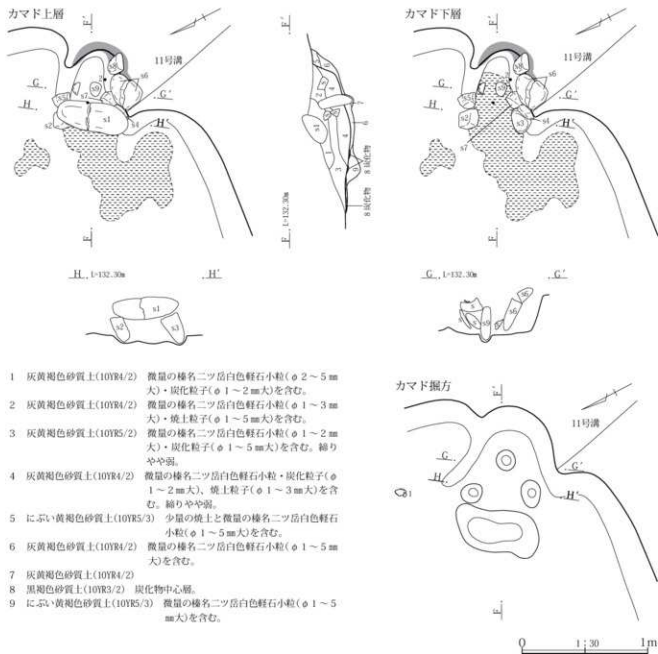


7号住居



第76図 V区6・7号住居と出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第77図 V区6号住居

が出土した。

時代 遺構は出土遺物から平安時代10世紀前半と想定される。

8号住居(第78図、PL.25・390)

グリッド 13K 5

主軸方位 N79°W

重複 なし。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、方形を呈する竪穴住居で、南部は大部分が攪乱で失われ、北部は調査区外

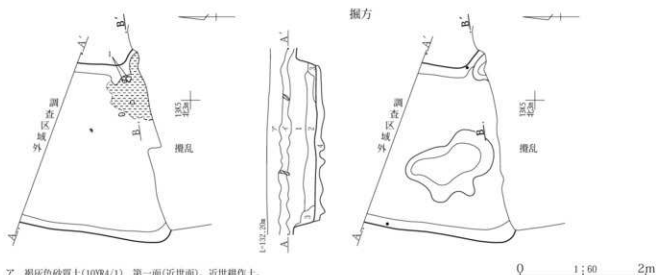
にある。長辺は2.67m、短辺は2.35m+、深さは0.35m、検出された最大の面積は4.14㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が成層する。

床面 ニツ岳の白色軽石を含むにぶい黄褐色砂質土を0.10mほど貼って床面を構築している。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築し、中央で長径1.25m、短径0.68m、深さ0.10mの不定形の浅い窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマド



ア 褐灰色砂質土(10YR4/1) 第一面(近世面)。近世耕作土。

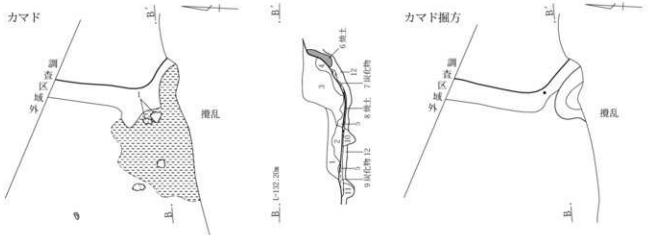
イ 1層上の水性酸化凝固による赤褐色化層=水田耕作床土

1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の棒名二ツ岳白色軽石と少量の炭化物粒子を含む。

2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名二ツ岳白色軽石・にぶい黄褐色にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)・炭化物粒子を含む。

3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。

4 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)を含む。



1 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量の棒名二ツ岳白色軽石小粒と微量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

3 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・炭化物粒子と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

4 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 多量の炭化物を含む。

5 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒と少量の炭化物粒子と多量の焼土粒子を含む。=使用面

6 灰褐色土(5YR5/2) 焼土中心層。微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。

7 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)・焼土粒子を含む。

8 灰褐色砂質土(5YR5/2) 焼土中心層。

9 黒褐色砂質土(10YR3/2) 炭化物中心層。

10 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化物粒子(φ1~5mm大)を含む。

11 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)を含む。

12 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・炭化物粒子(φ1~2mm大)を含む。



第78図 V区8号住居と出土遺物

の燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している想定されるが攪乱で南半部のほとんどが失われている。燃焼部底はほぼ平坦で、燃焼部の奥壁は約45°勾配で立ち上がる。燃焼部底には炭化物や焼土帯が広がり、焚口からカマド前までは厚さ0.01mの炭化物を検出し、カマド周辺の床面で炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は二ツ岳の白色軽石を含むにぶい黄褐色砂質土である。カマドは長さ0.67m+、深さ0.34mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマド使用面から土師器の杯(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

9号住居(第79～81図、PL.26・390)

グリッド 13N6

主軸方位 N80°W

重複 10号住居、8号溝、39号土坑を切る。発掘調査時に9・21号住居として調査したが、資料整理で9号住居に統合した。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、長辺は5.16m、短辺は2.85m、深さは0.40m、面積は14.70㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土と黄褐色砂質土ブロックを含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築し、西半分の壁際で長辺0.85～1.05m、短辺0.45～0.65m、深さ0.04～0.06mの歪んだ方形の浅い窪みを検出した。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の手前から奥に掘り込んで壁の前後ろに構築し、燃焼部底は緩く傾斜し、燃焼部の奥壁はほぼ直角に立ち上がり煙道に続く。燃焼部と煙道境の天井壁には長径0.40～0.45m、短径0.13～0.17m、厚さ0.15mの垂円礫S1・2の2点が据えられている。これらはカマド燃焼部から煙道の天井構築材である。煙道は燃焼部との境界のみ残されており、長径は0.20m、短径は0.14mである。燃焼部底の奥には焼土ブロックが、手前には炭化物が広

がり、焚口では厚さ0.03mの炭化物を検出した。カマド埋土は二ツ岳の白色軽石を含むにぶい黄橙～黄褐色及び灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.87m、幅1.12m、深さ0.47mである。

貯蔵穴 南東隅の壁際から長径0.91m、短径0.72m、深さ0.17mの土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面付近から土師器の台付甕(4)、埋土から須恵器の蓋(2)が出土した。

時代 10世紀に帰属する10号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代9世紀第2四半期と想定される。

10号住居(第79～81図、PL.27・390)

グリッド 13N6

主軸方位 N84°W

重複 9号住居に切られる。39号土坑を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、北部は調査区外にある。長辺は3.58m、短辺は3.00m+、深さは0.30m、検出された最大の面積は10.74㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土とにぶい黄橙色砂質土からなる。

床面 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.09mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土や39号土坑埋土を掘り込んで構築し、南壁際で長径0.31m、短径0.27m、深さ0.10mの浅い円形の窪みを検出した。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底はほぼ平坦で、燃焼部の奥壁は弧状に緩やかなカーブで立ち上がる。燃焼部壁の左右には長径0.19～0.25mの垂円～垂角礫S1・2の2点が据えられており、これらはカマド構築材と考えられる。燃焼部底には焼土ブロックと炭化物が広がり、焚口付近の床面では硬化面を検出した。燃焼部中央の掘方から長径0.23～0.30mの小ピットを検出した。カマド埋土は二ツ岳の白色軽石や径0.01～0.05mの赤褐色焼土ブロックを含む、にぶい黄橙～褐色

砂質土からなる。カマドは長さ1.25m、幅1.02m、深さ0.32mである。

貯蔵穴 南東隅の壁際から長径0.64m、短径0.55m、深さ0.23mの土坑を検出し、長径0.32~0.36mの円礫と割れた垂円礫S3・4の2点が底面から、底から0.23m土から須恵器の杯(7)が出土した。土坑は位置や形状から

貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

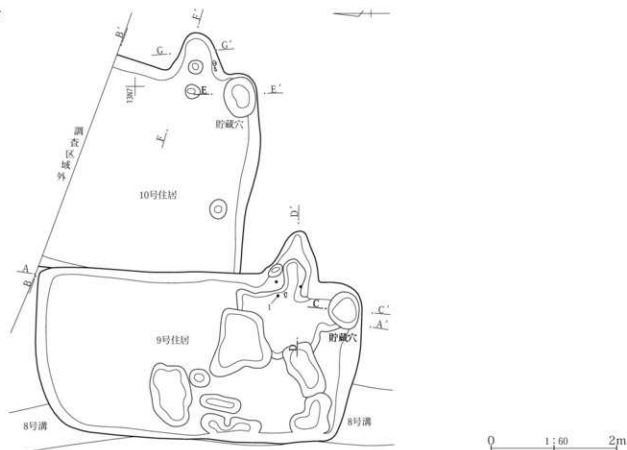
遺物 床面から羽釜(9)、カマド使用面付近から須恵器の椀(8)が出土した。

時代 9世紀に帰属する9号住居との調査での新旧関係



第79図 V区9・10号住居(1)

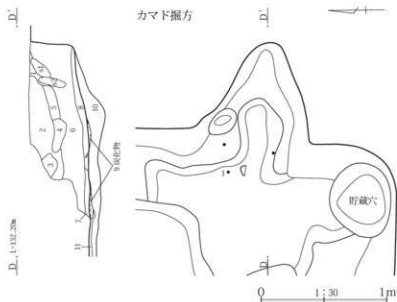
掘方



9号住居カマド

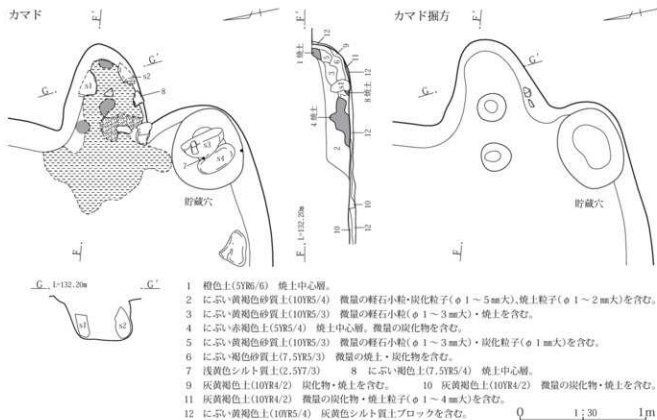


カマド掘方

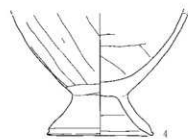
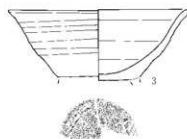
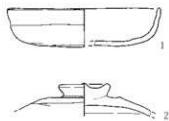


- 1 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量の焼土を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ1~4mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/4) 微量の極名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。
- 4 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/4) 微量の焼土を含む。
- 5 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の極名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)を含む。締りやや弱。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ1~3mm大)を含む。締りやや弱。
- 7 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の炭化物を含む。
- 8 にぶい褐色土(7.5YR5/3) 少量の焼土と微量の炭化物を含む。
- 9 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 10 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量のにぶい黄褐色シルト質土プロックを含む。
- 11 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の炭化物を含む。

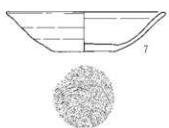
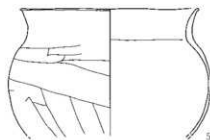
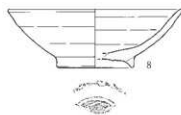
第80図 V区9・10号住居(2)



9号住居



10号住居



0 1:3 10cm

第81図 V区10号住居と9・10号住居の出土遺物

は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀第1四半期と想定される。

11号住居(第82・83図、PL.28)

グリッド 13 S 4

主軸方位 N76°W

重複 53号住居、48号土坑を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、南西部は調査区外にある。長辺は2.74m、短辺は2.04m、深さは0.07m、検出された最大の面積は4.89㎡である。

埋土 浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.06mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土や53号住居埋土を掘り込んで構築し、ほぼ平坦である。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底はほぼ平坦で、燃焼部縁は緩やかに立ち上

がる。燃焼部底の左には焼土ブロックと炭化物が広がり、焚口付近の床面では硬化面を、焚口の右側に炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は焼土ブロックを含む、にぶい黄褐～灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.94m、幅0.80m、深さ0.08mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の杯(1)、羽釜(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀第1四半期。

26号住居(第82・84図、PL.41)

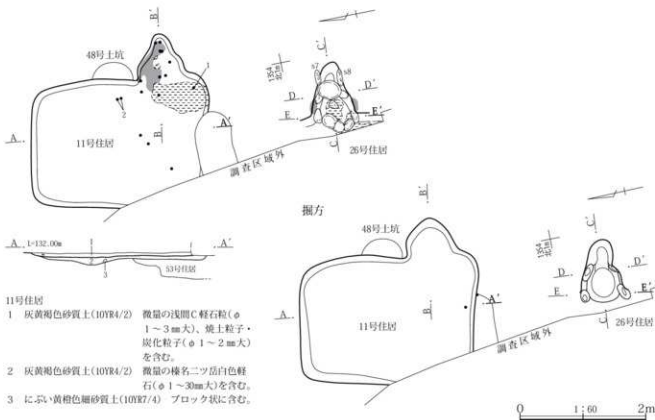
グリッド 13 S 4

主軸方位 N80°W

重複 53号住居を切る。

対比 位置から田口下田尻遺跡IV区の131号住居のカマドと想定される。

形状と規模 東西方向にカマドの長軸を有する竪穴住居と想定される。東西方向に長軸を有するカマドのみ検出され、それ以外は調査区外に存在する。



11号住居

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)、焼土粒子・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の榛名ニツ岳白色軽石(φ1~30mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色細砂質土(10YR7/4) ブロック状を含む。

第82図 V区11・26号住居

カマド埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

カマド掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んでニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を貼って構築している。

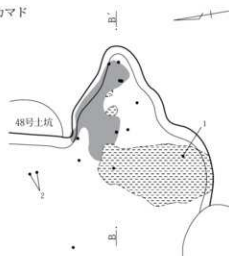
カマド 東壁の中央南寄りに位置するものと想定される。カマドの燃焼部は壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築していると想定される。燃焼部底は緩く傾斜し、燃焼部の奥壁は約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部の左右の壁には長径0.23～0.43m、短径0.21～0.28m、厚さ0.13～0.18mの亜円礫S 2～5・7・8の6点が据えられており、上には長径0.38m、短径0.30m、厚さ0.10m

の亜円礫S 1が据えられている。また、焚口には3点からなる亜円礫S 9が接合し、上部から崩落したものと考えられる。これらは袖石2点と側面の支柱石4点および天井石2点からなるカマドの構築材である。燃焼部の中央には長径0.27m、短径0.08m、厚さ0.15mの亜円礫S 6が据えられている。礫は0.11m埋め込まれており、支脚である。燃焼部底には炭化物が広がる。カマドは長さ1.13m、幅0.71m、深さ0.57mである。

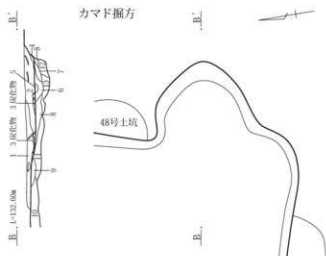
遺物 なし。

時代 田口下田尻遺跡IV区の131号住居の出土遺物から平安時代9世紀後半と想定される。

カマド

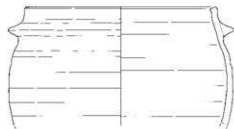


カマド掘方



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の灰・焼土粒子・炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。
- 2 にんい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の焼土・焼土粒子(φ2～5mm大)を含む。
- 3 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物物。一部灰を含む。締りやや弱。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) にんい黄褐色砂質土ブロックを含む。
- 5 にんい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の焼土を含む。
- 6 にんい黄褐色砂質土(10YR6/3)
- 7 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の焼土粒子(φ1～10mm大)にんい黄褐色砂質土ブロックを含む。
- 8 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～3mm大)を含む。
- 9 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(φ1～3mm大)。粘性やや有。
- 10 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の炭化物・炭化粒子(φ1～2mm大)、焼土粒子(φ1～2mm大)を含む。
- 11 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の炭化物・炭化粒子(φ1～3mm大)、焼土粒子(φ1mm大)を含む。
- 12 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～3mm大)、焼土・焼土粒子(φ1～4mm大)を含む。
- 13 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(φ1～2mm大)を含む。

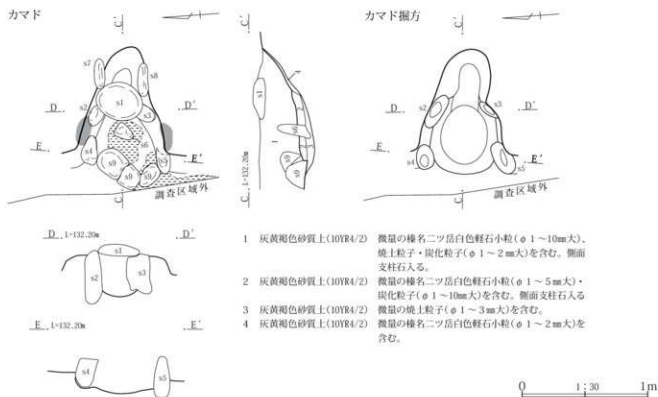
0 1:30 1m



0 1:4 10cm
0 1:3 10cm

第83図 V区11号住居と出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第84図 V区26号住居

13号住居(第85・86図、PL.30・390)

グリッド 13T 9

主軸方位 N77°W

重複 14・20・38号住居を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸方形を呈する竪穴住居で、北～西部は調査区外にある。長辺は3.15m+、短辺は2.53m+、深さは0.28m、検出された最大の面積は6.58㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐～にぶい黄褐色砂質土からなる。

床面 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.24mほど厚く貼って、平坦な床面を構築している。カマド前を除いて床面には広い硬化面が認められる。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土や14・38号住居埋土を掘り込んで構築している。南壁際で長径1.00m、短径0.86m、深さ0.07mの土坑1を検出した。

カマド 東壁の中央に位置すると想定される。カマドの燃焼部は東壁を少し掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は平坦で、約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部

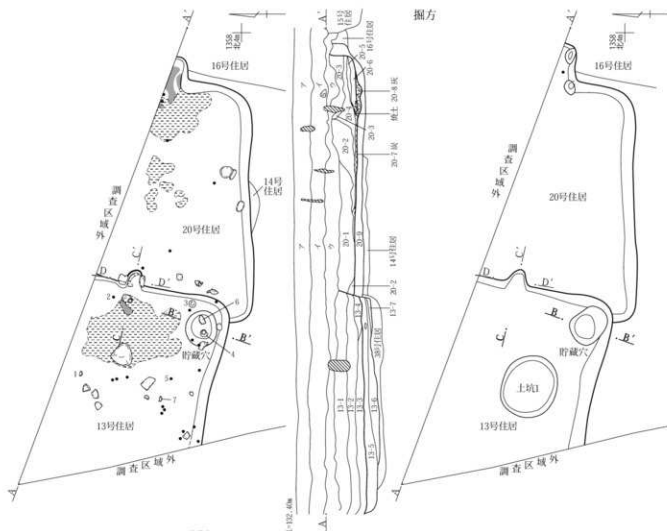
の左右の壁には長径0.19~0.24m、短径0.10~0.12m、厚さ0.18mの角礫と亜円礫のS1・2の2点が掘えられており、これらは袖石からなるカマドの構築材である。燃焼部底の左には若干の炭化物が広がり、焚口付近からカマドや貯蔵穴周辺では床面に炭化物の広がりを検出した。カマド埋土にはにぶい褐～灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.32m、幅0.42m、深さ0.04mである。

貯蔵穴 南東隅の壁際から長径0.55m、短径0.50m、深さ0.27mの土坑を検出し、底0.13~0.20mから須恵器の椀(6)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(3)、埋土から灰陶器の椀(7)が出土した。出土遺物は9・10世紀の年代幅を有する。

時代 平安時代9世紀第4半期。



13号住居貯蔵穴 B-B'

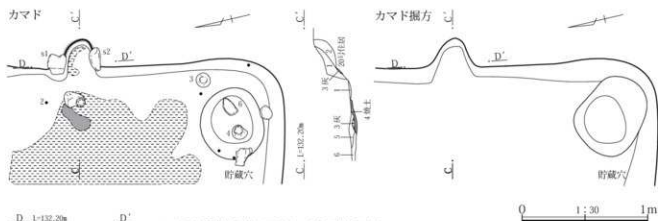
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/2)
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1mm大)を含む。

- ア にぶい黄褐色土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)・棒名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~10mm大)を含む。
- イ 黄褐色砂質土(10YR5/6) 床上層。鉄分が酸化沈着している。
- ウ 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)・棒名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~10mm大)を含む。
- 13-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。
- 13-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量のにぶい黄褐色砂質土ブロックと微量の炭化粒子(ϕ 1~3mm大)・焼土粒子(ϕ 1mm大)を含む。
- 13-3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 13-4 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1mm大)を含む。
- 13-5 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。
- 13-6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 13-7 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~2mm大)・炭化粒子・焼土粒子(ϕ 1mm大)を含む。
- 20-1 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子(ϕ 1mm大)・焼土粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。
- 20-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(ϕ 1~3mm大)・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 20-3 にぶい黄褐色土(10YR6/3) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~10mm大)・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。=カマド埋土
- 20-4 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(ϕ 1~3mm大)・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。=カマド埋土
- 20-5 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~3mm大)・焼土粒子・炭化粒子(ϕ 1mm大)を含む。=カマド埋土
- 20-6 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 少量の焼土と微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~2mm大)・炭化粒子を含む。=カマド埋土
- 20-7 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。=カマド埋土
- 20-8 褐灰色土(10YR4/1) 灰中心層。炭化物を含む。=カマド埋土
- 20-9 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。

0 1:60 2m

第85図 V区13・20号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物

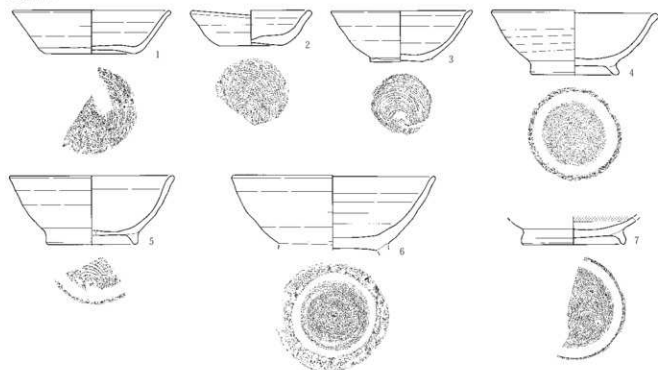


D_1-132.20m

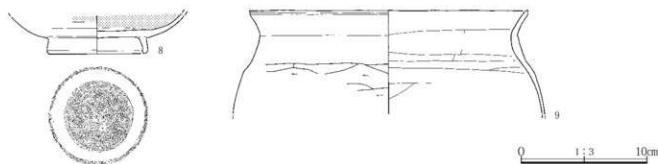


- 1 にふい・褐色砂質土(7.5YR5/4) 少量の焼土を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(ϕ 1mm大)を含む。
- 3 褐灰色土(10YR5/1) 灰中心層。
- 4 にふい・赤褐色土(5YR3/3) 焼土中心層。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・焼土粒子(ϕ 1mm大)・棒名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~3mm大)と炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。

13号住居



20号住居



0 1:3 10cm

第86図 V区13号住居と13・20号住居の出土遺物

20号住居(第85・86図、PL.37)

グリッド 13S 8

主軸方位 N89°E

重複 13号住居に切られる。14・16・38号住居を切る。
形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸方形を呈する
 竪穴住居で、北部は大部分が調査区外に、西壁は13号住
 居により失われている。長辺は3.75m、短辺は2.48m+、
 深さは0.26m、検出された最大の面積は4.11㎡である。
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐～にぶい黄褐色砂
 質土からなる。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む黄褐色砂質土を0.14mほ
 ど厚く貼って、平坦な床面を構築している。カマド前を
 除いた床面の広い範囲に硬化面が認められる。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土や14・38号
 住居埋土を掘り込んで構築し、ほぼ平坦である。

カマドと貯蔵穴 東壁に位置する。カマドの燃焼部は東
 壁を奥に掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は
 平坦で、焼土や炭化物が広がり、焚口周辺では床面に炭
 化物の広がりを検出した燃焼部右壁の掘方からは長径
 0.23～0.26mのピット2基を検出し、これらはカマド構
 築材の痕跡の可能性がある。カマド埋土はにぶい黄褐～
 灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.50m、幅0.50m
 である。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たな
 い構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から灰軸陶器の椀(8)、土師器の甕(9)が出
 土した。

時代 平安時代9世紀第4四半期。

14号住居(第87・88図、PL.31・390)

グリッド 13S 8

主軸方位 N72°W

重複 13・20号住居に切られる。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸方形を
 呈する竪穴住居で、北部は調査区外に、西部は13・38号
 住居によって失われている。長辺は2.15m+、短辺は
 2.09m+、深さは0.17m、検出された最大の面積は5.83㎡
 である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からな
 る。

床面 ニツ岳の白色軽石や浅間Cテフラの軽石を含む灰
 黄褐色砂質土を0.11mほど貼って、平坦な床面を構築し
 ている。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込
 んで構築し、ほぼ平坦である。

カマド 東壁に位置する。カマドの燃焼部は東壁を少し
 掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は平坦で、
 緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部底には焼土ブロック
 や炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂
 質土からなる。カマドは長さ0.60m、幅0.25m、深さ0.29m
 である。

貯蔵穴 南東隅の壁際から直径0.53m、深さ0.28mの土
 坑を検出し、上端縁から長径0.33mの垂角礫が出土した。
 土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たな
 い構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(3)、床面付近から須恵器の
 椀(1)、掘方から灰軸陶器の皿(2)が出土した。

時代 9世紀に帰属する13・20・38号住居との調査での
 新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世
 紀第2四半期に想定される。

38号住居(第87・88図、PL.52・53・390)

グリッド 13T 9

主軸方位 N88°E

重複 13・20号住居に切られる。14号住居を切る。

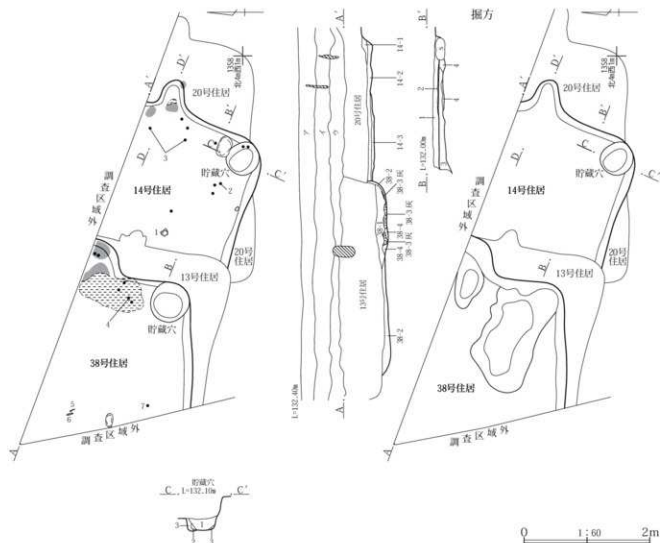
形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸方形を呈する
 竪穴住居で、北～西部は調査区外に存在する。長辺は
 2.45m+、短辺は2.30m+、深さは0.22m、検出された
 最大の面積は4.74㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含むにぶい黄褐色砂質土から
 なる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.13mほど貼って、平坦な床面
 を構築している。カマド前の床面からは硬化面を検出し
 た。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込
 んで構築し、南東隅には長径1.50m、短径0.84m、深さ
 0.10mの不定形の窪みを検出した。

カマド 東壁に位置する。カマドの燃焼部は東壁を掘り
 込んで壁の外に構築している。燃焼部底は平坦で緩い勾



14号住居貯蔵穴 C-C'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の浅間C軽石粒・榛名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~2mm大)、炭化粒子(ϕ 1~4mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2)

A-A'

- ア にぶい黄褐色土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)・榛名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~10mm大)を含む。
- イ 黄褐色砂質土(10YR5/6) 床土層。鉄分が酸化沈着している。
- ウ 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)・榛名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~10mm大)を含む。
- 14-1 黄褐色シルト質土(2.5Y5/3) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~5mm大)・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 14-2 暗黄褐色シルト質土(2.5Y5/2) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 14-3 灰黄色土(2.5Y6/2) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~2mm大)・炭化粒子(ϕ 1mm大)を含む。
- 38-1 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(ϕ 1~4mm大)、焼土粒子(ϕ 1~10mm大)を含む。
- 38-2 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~20mm大)・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 38-3 褐色土(10YR4/1) 灰中心層。一部炭化物を含む。
- 38-4 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。

B-B'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~20mm大)・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・榛名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 4 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/4)

第87図 V区14・38号住居

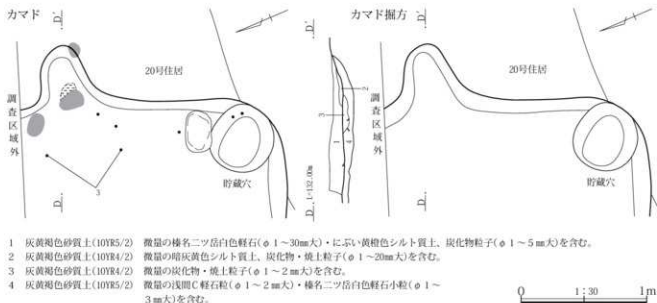
配で立ち上がる。燃焼部底には焼土、焚口周辺には炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.60m+、幅0.70m+である。

貯蔵穴 南東隅の壁際から直径0.64m、深さ0.18mの土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

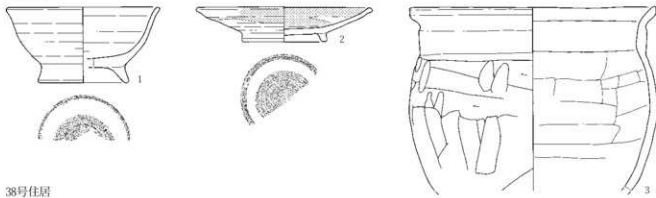
柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(4)、石製の紡輪(7)、埋土から鉄釘(5・6)が出土した。

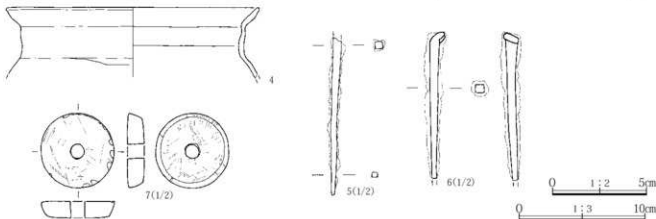
時代 平安時代9世紀第3四半期。



14号住居



38号住居



第88図 V区14号住居と14・38号住居の出土遺物

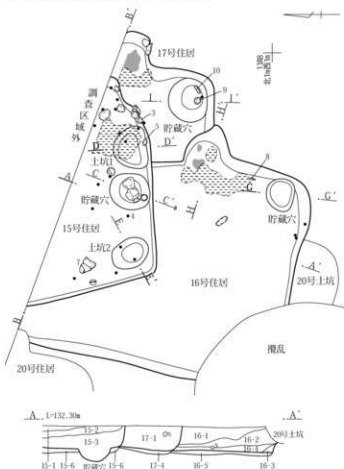
15号住居(第89～91図、PL.32・391)

グリッド 13R 8

主軸方位 N86°E

重複 16・17号住居を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、方形を呈する可能性のある竪穴住居で、北部の大部分が調査区外に存在する。長辺は2.70m、短辺は2.05m+、深さは0.30m、検出された最大の面積は3.65㎡である。



ア 15号住居貯蔵穴 C-C' 微量の浅間C軽石粒(φ1～2mm大)・棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm大)を含む。

イ 灰黄褐色砂質土(10YR5/6) 床土層。鉄分が酸化沈着している。

15-1 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1～2mm大)・棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)・炭化粒子(φ1～5mm大)を含む。

15-2 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石(φ1～30mm大)・炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。

15-3 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の炭化物粒子(φ1～2mm大)を含む。

15-4 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1mm大)・焼土粒子(φ1～2mm大)を含む。

15-5 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。少量の焼土を含む。

15-6 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・焼土粒子(φ1～3mm大)・炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。

16-1 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石(φ1～30mm大)を含む。

16-2 15号住居貯蔵穴 D-D' 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)を含む。

16-3 15号住居貯蔵穴 E-E' 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)を含む。

16-4 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1～5mm大)を含む。

16-5 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・焼土粒子(φ1～3mm大)を含む。

17-1 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)・炭化粒子(φ1～5mm大)を含む。

17-2 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・焼土粒子(φ1～3mm大)・炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。

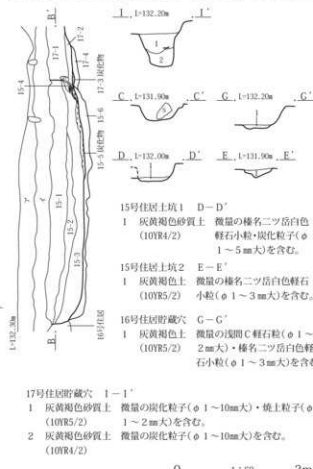
17-3 褐色土(10YR4/1) 炭化物中心層。

17-4 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・焼土粒子(φ1～3mm大)・炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。

埋土 下位より二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土、黒褐色砂質土、灰褐色砂質土からなり、周縁から中央に緩く傾きながら成層して竪穴を埋積している。

床面 灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築し、南壁際から長径0.46m、短径0.41m、深さ0.09mの土坑1と長径0.60m、短径0.45m、深さ0.21m



15号住居土坑1 D-D' 1 灰黄褐色砂質土 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1～5mm大)を含む。

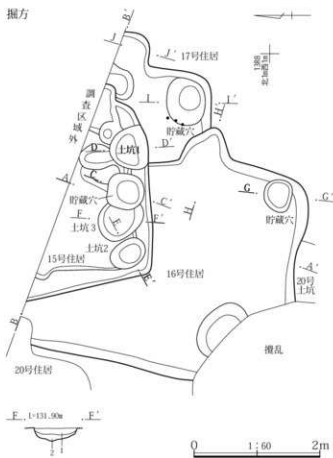
15号住居土坑2 E-E' 1 灰黄褐色土 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～3mm大)を含む。

16号住居貯蔵穴 C-C' 1 灰黄褐色土 微量の浅間C軽石粒(φ1～2mm大)・棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～3mm大)を含む。

17号住居貯蔵穴 1-1' 1 灰黄褐色砂質土 微量の炭化粒子(φ1～10mm大)・焼土粒子(φ1～2mm大)を含む。
2 灰黄褐色砂質土 微量の炭化粒子(φ1～10mm大)を含む。(10YR4/2)

第89図 V区15～17号住居(1)

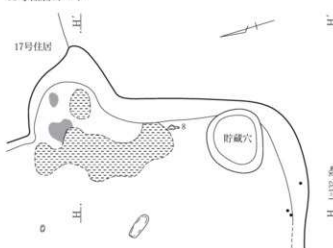
掘方



15号住居土坑3 F-F'

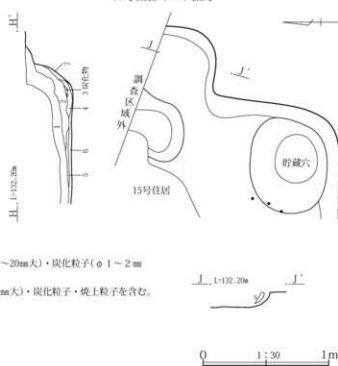
- 1 にふい、黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 3$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 10$ mm大)と少量のふい、黄褐色シルト質土を含む。

16号住居カマド



- 1 にふい、黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 20$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 2$ mm大)・炭化粒子・焼土粒子を含む。
- 3 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の炭化物を含む。締りやや強い。
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の焼土・炭化物を含む。
- 6 褐色砂質土(10YR4/1) 微量の棒名二ツ岳火山灰を含む。
- 7 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の焼土を含む。

17号住居カマド掘方



の土坑2を検出した。土坑1上部の床面からは炭化物や硬化面の広がりを検出した。また、南西壁際からは壁に平行な段差が検出された。これらの土坑や掘方の形状は竪穴住居の作り替えによる拡張の痕跡や拡張前の貯蔵穴の可能性がある。また、段差が15号住居に伴わず17号住居の掘方である可能性は少ないと思われるが、これを否定しない。

カマド 東壁の東南隅に位置するが大部分は調査区外に存在する。カマドの燃烧部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃烧部底は緩やかな勾配で立ち上がる。燃烧部底付近の埋土には炭化物が堆積しているが、使用面には焼土や炭化物の痕跡が認められない。燃烧部右壁や焚口には長径0.14~0.20mの垂円礫2点が出土し、これらカマドの崩落によって移動したカマド構築材の可能性がある。カマド埋土は灰黄褐色砂質土や黒褐色炭化物からなる。カマドは長さ0.48m、幅0.54mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南壁際の中央から長径0.68m、短径0.58m、深さ0.28mの土坑を検出した。土坑からは長径0.18~0.20mの垂角礫2点が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

第90図 V区15～17号住居(2)

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面やカマド使用面から須恵器の杯(3・4)、羽釜(7)、掘方から黒色土器の碗(1)、須恵器の杯(2)、埋土から緑釉陶器の碗(5)、灰釉陶器の皿(6)が出土した。出土した遺物は10世紀内に幅を持つ年代を示す。

時代 平安時代10世紀第4四半期。

16号住居(第89～91図, PL.33・391)

グリッド 13R 8

主軸方位 N77°W

重複 15・17住居、20号土坑に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、西北部は調査区外に存在し、北部は15・20号住居に、南西隅は攪乱によって失われている。長辺は3.91m+、短辺は3.57m、深さは0.34m、検出された

最大の面積は7.94㎡である。

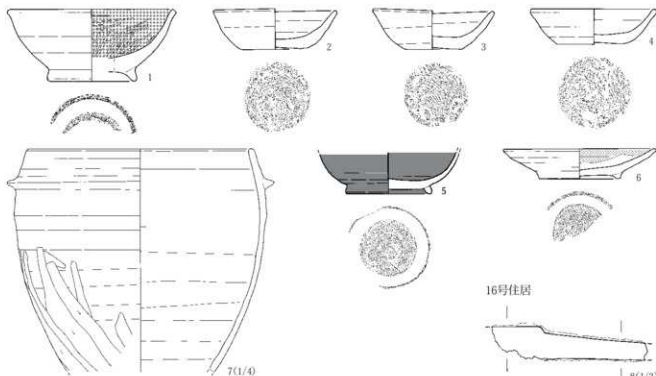
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む黄褐色砂質土からなる。20号土坑埋土との切合いは不明であるが土坑埋土に切られる可能性が高い。

床面 灰黄褐色砂質土を0.04mほど貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。カマドの焚口周辺の床面で硬化面を検出した。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築し、南西隅から長径0.95m、深さ0.13mの歪んだ円形の窪みを検出したが、それ以外はほぼ平坦である。

カマド 東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は平坦で奥壁は急な勾配で立ち上がり、煙道との境界に接続する。燃焼部底には焼土ブロックや炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土や黒褐色炭化物からなる。カマドは長さ0.71m、幅0.90m、深さ0.37mである。

15号住居



17号住居



第91図 V区15～17号住居の出土遺物

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.52m、短径0.45m、深さ0.11mの土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。

遺物 床面から刀子(8)が出土した。

時代 15・17号住居よりも古いことから10世紀以前である。

17号住居(第89～91図、PL.34)

グリッド 13R 8

主軸方位 N87°W

重複 15号住居に切られる。16号住居を切る。

形状と規模 カマドとカマド前の右側部分のみが検出された竪穴住居で、北部が調査区外に存在し、西側の大部分は15・16号住居により失われている。長辺は1.73m+、短辺は1.49m+、深さは0.21m、検出された最大の面積は1.47㎡である。

埋土 にぶい黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。

カマド 東壁に位置するが北側は調査区外に存在する。カマドの燃焼部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部底に

は焼土を、焚口では炭化物の広がりを検出した。燃焼部奥の右壁には長径0.23mの垂門礫が掘えられており、カマドの構築材と考えられる。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.82m、幅0.50m、深さ0.15mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.68m、短径0.55m、深さ0.45mの土坑を検出した。底から0.20mに長径0.12mの垂角礫や底から0.13～0.18mから灰輪陶器の椀(9)、羽釜(10)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

時代 貯蔵穴からの出土遺物から平安時代10世紀第1四半期と推定される。

18号住居(第92・93図、PL.35)

グリッド 3 P 18

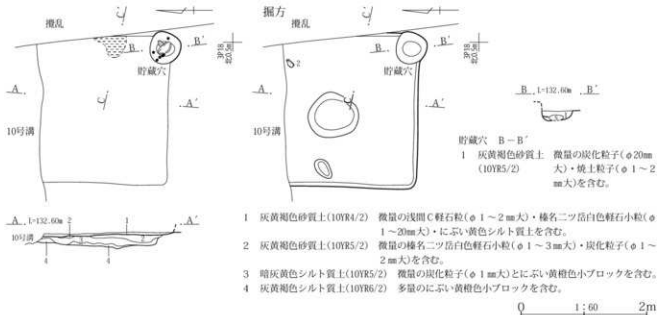
主軸方位 不明

重複 10号溝に切られる。

形状と規模 カマド前周辺の床のみが検出された竪穴住居で、北部は10号溝に、東部は攪乱により失われている。長辺は2.32m+、短辺は2.05m+、掘方の深さは0.06m、検出された最大の面積は4.76㎡である。

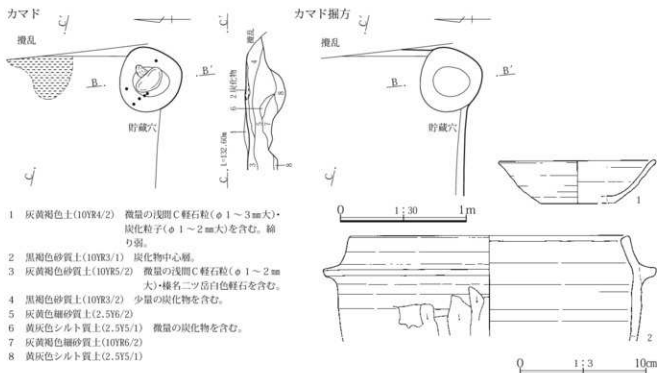
埋土 黄褐色砂質土からなる。

床面 黄褐色砂質土と暗灰黄色シルト質土を0.06mほど



第92図 V区18号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第93図 V区18号住居と出土遺物

貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。中央に浅い円形の窪みを検出した。

カマド 床面から炭化物の広がりを検出しており、東側に位置するものと想定される。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から直径0.50m、深さ0.15mの土坑を検出した。土坑からは垂角碟や土器片が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

遺物 埋土から須恵器の杯(1)、掘方から羽釜(2)が出土した。

時代 掘方から出土した遺物は平安時代10世紀第1四半期を示す。遺構は平安時代10世紀と想定される。

19号住居(第94・95図、PL.36・391)

グリッド 13Q18

主軸方位 N71°E

重複 10号溝に切られる。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有し、長方形を呈する規模の大きな竪穴住居である。長辺は6.36m、短辺は5.03m、深さは0.17m、面積は29.57㎡である。

埋土 下位より浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐色砂質

土、にぶい黄褐色砂質土、灰黄褐色砂質土からなり、最上位の埋土以外は二ツ岳の白色軽石を含まない。

床面 にぶい黄褐色砂質土を0.15mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築し、南東隅の壁際から長径1.21m、短径0.70m+、深さ0.30mの土坑1を検出した。

炉 床面からは検出されなかった。10号溝により失われた可能性が高い。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径1.02m、短径0.84m、深さ0.47mの土坑を検出した。底から0.12m上から土師器の高環(1)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方の調査で支柱穴のピット4基を検出した。

P1は長径0.53m、短径0.48m、深さ0.36m。

P2は長径0.48m、短径0.38m、深さ0.31m。

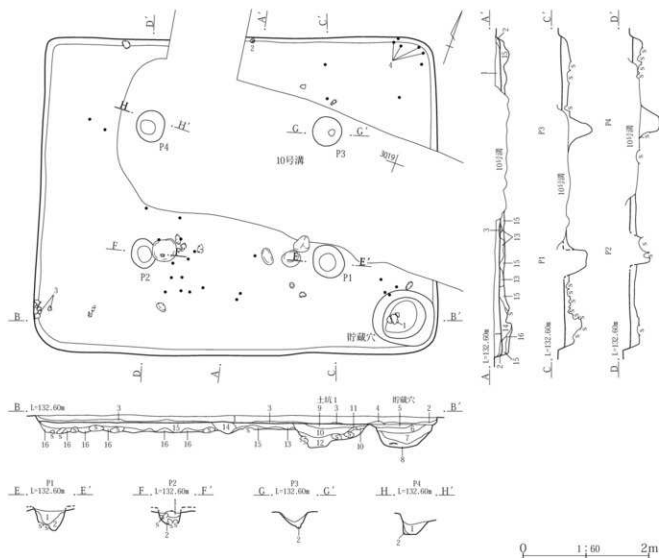
P3は直径0.48m、深さ0.49m。

P4は長径0.49m、短径0.47m、深さ0.43m。

柱間は梁行のP1・P3が2.00m、P2・P4が2.08m。

桁行のP1・P2とP3・P4がそれぞれ2.93mである。

なお柱穴には柱痕は認められなかったが、掘方はしっか

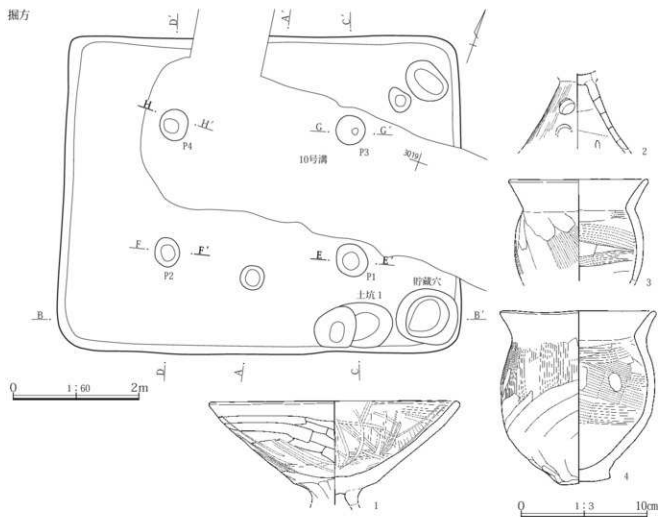


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)・極名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。
- 3 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。
- 4 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。
- 5 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)を含む。=貯蔵穴
- 6 黒褐色砂質土(10YR3/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)を含む。=貯蔵穴
- 7 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1~4mm大)を含む。=貯蔵穴
- 8 黒褐色砂質土(10YR3/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・炭化粒子(φ1~6mm大)を含む。=貯蔵穴
- 9 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)を含む。=土坑1
- 10 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の円礫(φ20~50mm大)を含む。=土坑1
- 11 灰黄色シルト質土(2.5Y7/2)=土坑1
- 12 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の円礫(φ20~100mm大)を含む。=土坑1
- 13 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)を含む。
- 14 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)を含む。
- 15 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の小円礫(φ2~3mm大)を含む。
- 16 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/4) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・円礫(φ20~200mm大)を含む。

P1~P4 E-E'~H-H'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・炭化粒子(φ1mm大)を含む。
- 2 暗灰黄色シルト質土(2.5Y5/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)を含む。

第94図 V区19号住居



第95図 V区19号住居と出土遺物

りしている。

遺物 床面から土師器の高杯(2)、小型甕(3・4)が出土した。

時代 古墳時代4世紀前半。

22号住居(第96・97図、PL.38・391)

グリッド 13P4

主軸方位 N88°E

重複 23号住居、11号溝を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ方形を呈する竪穴住居で、南部は大部分が攪乱により失われている。長辺は3.80m+、短辺は3.80m、深さは0.28m、検出された最大の面積は9.12㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐～にぶい黄褐色砂質土からなる。

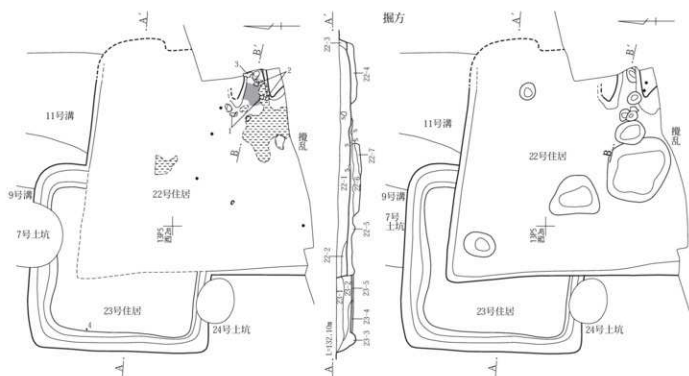
床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.10m

ほど貼って、平坦な床面を構築している。カマド前の床面には硬化面を検出した。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築し、カマド前には長辺1.15m、短辺0.95m、深さ0.11mの歪んだ方形の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁に位置する。カマドの燃焼部は東壁の手前に灰黄褐色土を貼って壁の内側に構築している。燃焼部の中央には長径0.18m、短径0.09m、厚さ0.08mの垂円礫S1が据えられている。礫は0.09m埋め込まれており、支脚と考えられる。燃焼部の掘方からは長径0.22mの小ピットが複数検出された。燃焼部底は平坦で、燃焼部底の左側には焼土が広がり、焚口周辺では右側の床面に炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.48m、幅0.55m、深さ0.16mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たな



22-1 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の榛名ニッ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 5$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。

22-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の榛名ニッ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 10$ mm大)を含む。

22-3 にぶい黄褐色土(10YR5/4)

22-4 黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の榛名ニッ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。

22-5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の榛名ニッ岳白色軽石($\phi 1 \sim 30$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 3$ mm大)を含む。

22-6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の榛名ニッ岳白色軽石($\phi 1 \sim 30$ mm大)・炭化物($\phi 8 \sim 30$ mm大)を含む。

22-7 にぶい黄褐色細砂質土(10YR6/4) 微量の小円礫($\phi 3$ mm大)を含む。

23-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の榛名ニッ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 5$ mm大)とにぶい黄褐色土ブロックを含む。

23-2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の榛名ニッ岳白色軽石($\phi 1 \sim 30$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 3$ mm大)を含む。

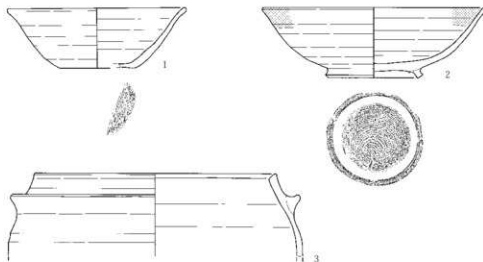
23-3 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 微量の榛名ニッ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 10$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。

23-4 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の榛名ニッ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。

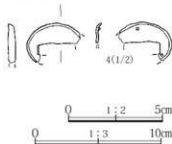
23-5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)

0 1:60 2m

22号住居

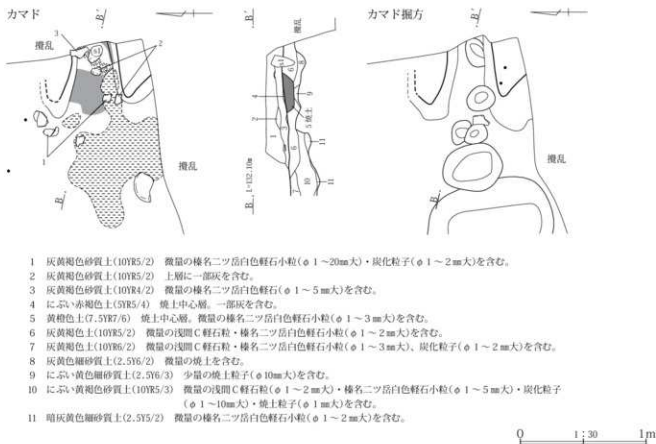


23号住居



第96図 V区22・23号住居と出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 上層に一部灰を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石(φ1~5mm大)を含む。
- 4 にぶい赤褐色土(5YR5/4) 焼土中心層。一部灰を含む。
- 5 黄褐色土(7.5YR7/6) 焼土中心層。微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石粒・椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。
- 7 灰黄褐色土(10YR6/2) 微量の浅間C軽石粒・椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 8 灰黄色細砂質土(2.5Y6/2) 微量の焼土を含む。
- 9 にぶい黄色細砂質土(2.5Y6/3) 少量の焼土粒子(φ10mm大)を含む。
- 10 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)・炭化粒子(φ1~10mm大)・焼土粒子(φ1mm大)を含む。
- 11 暗灰黄色細砂質土(2.5Y5/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。

第97図 V区22号住居

い構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマド使用面から須恵器の椀(1)や羽釜(3)、灰釉陶器の椀(2)が出土した。出土遺物は9・10世紀内に年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀第1四半期。

23号住居(第96図、PL.39・391)

グリッド 13P 5

主軸方位 N83°W

重複 9号溝を切る。22号住居、7・24号土坑に切られる。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、正方形を呈する竪穴住居で、南東部は22号住居により失われている。長辺は2.92m、短辺は2.88m、深さは0.27m、面積は7.40㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐～にぶい黄褐色砂質土からなる。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.02mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込ん

で構築している。

周溝 床面の精査では確認できず、掘方の調査で検出した。東南部の22号住居で失われた部分を除き壁際を周回する。最大の上幅は0.44m、最少の底幅は0.06m、深さは0.03mである。

カマドと貯蔵穴 22号住居の床面から掘方埋土に炭化物の広がりを検出した。23号住居の東壁の延長部に位置することから、東壁に存在したカマドが22号住居により失われたものと想定される。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面の0.07m上から銅製の丸軋(4)が出土した。

時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と想定され、10世紀初頭に帰属する23号住居よりも旧く、丸軋が出土したことから10世紀以前の奈良・平安時代に属すると思われる。

24号住居(第98~100図、PL.40・391)

グリッド 13S 5

主軸方位 N88°W

重複 27号住居に切られる。104号土坑を切る。

対比 田口下田尻遺跡Ⅳ区の130号住居に対比される。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、方形を呈する竪穴住居である。カマドと周辺以外は大部分が調査区外にある。長辺は2.50m+、短辺は0.65m+、深さは0.25m、検出された最大の面積は1.14㎡である。

埋土 浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を薄く0.01mほど貼って、床面を構築している。

掘方 Ⅶ層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央に位置すると思われる。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は平坦で、緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部の左壁には長径0.30~0.44mの亜円礫S1~3の3点が据えられ、燃焼部上部の埋土や焚口の左壁付近には、カマドの崩壊に伴い移動した亜円礫を検出した。左壁の礫2点はカマドの構築材、それ以外は構築材起源

の礫と考えられる。燃焼部底の左側は焼土ブロックを、底は炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土ブロックが断片的に堆積している。カマドは長さ1.13m、幅0.70m、深さ0.25mである。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物 カマド使用面から羽釜(3)、カマド掘方から土師器の裏(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

27号住居(第98~100図、PL.41・42)

グリッド 13S 5

主軸方位 N80°W

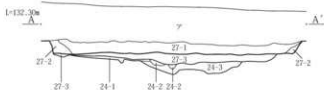
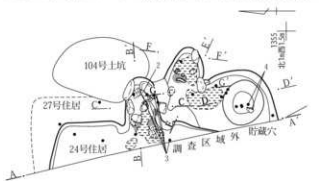
重複 24号住居、104号土坑を切る。

対比 田口下田尻遺跡Ⅳ区の136号住居に対比される。

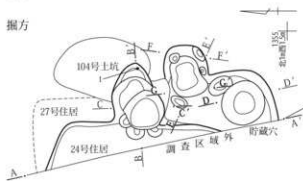
形状と規模 南北方向に長軸を有し、方形を呈する竪穴住居である。カマドと東壁の周辺以外は大部分が調査区外にある。長辺は3.98m、短辺は1.16m+、深さは0.16m、検出された最大の面積は3.55㎡である。

埋土 浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

掘方



- ア にぶい黄褐色土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・榛名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- 27-1 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 27-2 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)を含む。
- 27-3 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 24-1 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒を含む。
- 24-2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) ブロック状に混入する。
- 24-3 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)を含む。



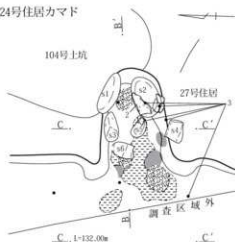
- 27号住居貯蔵穴 D-D'
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1mm大)・榛名ニツ岳白色軽石小粒(φ2mm大)・炭化粒子(φ1~10mm大)・にぶい黄褐色土を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1mm大)・榛名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)と炭化粒子(φ1~5mm大)と少量のにぶい黄褐色土を含む。

0 1:60 2m

第98図 Ⅳ区24・27号住居(1)

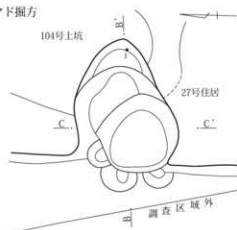
第4章 第2面の遺構と出土遺物

24号住居カマド



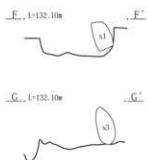
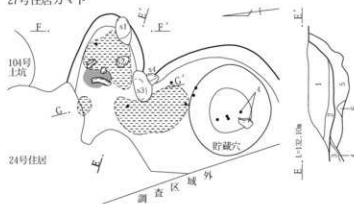
- 1 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/4)
- 2 にぶい黄褐色細砂質土(10YR6/4) 微量の焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・榛名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 2$ mm大)、炭化粒子・焼土粒子を含む。
- 4 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。
- 5 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子($\phi 1$ mm大)を含む。
- 6 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 7 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 微量の浅間C軽石粒($\phi 1$ mm大)・焼土粒子($\phi 1 \sim 3$ mm大)を含む。
- 8 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 微量の炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。

カマド掘方



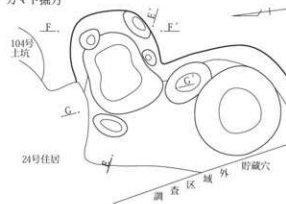
- 9 灰褐色土(7.5YR5/2) 多量の焼土を含む。
- 10 にぶい褐色土(5YR6/4) 焼土中心層。
- 11 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物中心層。微量の焼土を含む。
- 12 にぶい黄褐色シルト質土(10YR7/4)
- 13 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の炭化物を含む。
- 14 灰黄色砂質土(2.5Y7/4) シルト質土ブロックを含む。
- 15 黒褐色土(10YR3/1) 少量の炭化物を含む。
- 16 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の炭化物を含む。
- 17 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 灰・炭化物・灰土を含む。
- 18 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。
- 19 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 炭化物・灰を含む。
- 20 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子($\phi 1 \sim 10$ mm大)、円礫($\phi 50 \sim 150$ mm大)を含む。
- 21 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) にぶい黄褐色シルト質土ブロックを含む。

27号住居カマド



- 1 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒($\phi 1 \sim 2$ mm大)・榛名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 3$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 10$ mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子($\phi 1 \sim 20$ mm大)を含む。最下層に灰層有り。
- 3 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 5$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。
- 4 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量のにぶい黄褐色土と微量の浅間C軽石粒($\phi 1 \sim 3$ mm大)・榛名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 4$ mm大)を含む。
- 5 にぶい黄褐色シルト質土(10YR4/3) 微量のにぶい黄褐色土・浅間C軽石粒($\phi 1$ mm大)・榛名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 3$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)・焼土粒子($\phi 1$ mm大)を含む。粘性やや有。
- 6 にぶい黄褐色シルト質土(10YR7/4) 微量の浅間C軽石粒($\phi 1$ mm大)を含む。粘性やや有。

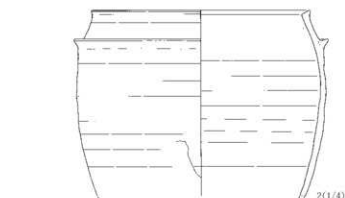
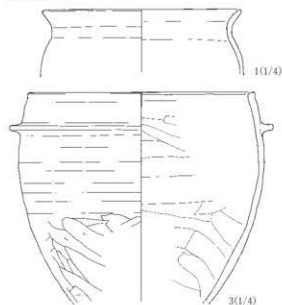
カマド掘方



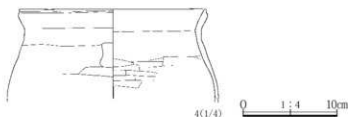
0 1:30 1m

第99図 V区24・27号住居(2)

24号住居



27号住居



第100図 V区24・27号住居の出土遺物

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.12mほど貼って、床面を構築している。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに窪み、約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部の右壁には長径0.30～0.41mの垂円礫S1・3の2点が置かれ、燃焼部の掘方から左右に長径0.19～0.37mのピットを3基検出した。右壁の礫はカマドの構築材、ピットは構築材の礫を埋めた痕跡と考えられる。燃焼部の中央には長径0.23mの垂円礫が据えられており、支脚と考えられる。燃焼部底は右側の底に焼土ブロックが見られた。底と焚口の右側には炭化物の広がりを検出し、これは灰の掻き出しによって形成された可能性がある。カマド埋土は炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土である。カマドは長さ1.05m、幅0.67m、深さ0.17mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から直径0.69m、深さ0.30mの土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

遺物 貯蔵穴上の床面の高さから土師器(4)が出土した。

時代 平安時代10世紀第1四半期。

28号住居(第101～104図、PL.42・43・391)

グリッド 13R 3

主軸方位 N72°W

重複 床面で切合いを認めており29号住居が新、28号住居が旧である。51・58号土坑は掘方埋土を切り、埋土に覆われるので住居廃絶後・埋土の堆積以前に構築された。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。南西隅が試掘溝で失われている。長辺は5.55m、短辺は4.18m、深さは0.24m、検出された最大の面積は20.18㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石や浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.09mほど貼って、床面を構築している。竪穴中央の南西側には直径0.50mの焼土帯を検出した。また北東隅寄りの床面から長径0.56m、短径0.38mの垂円礫が出土した。これらは鍛冶の痕跡と金床石の可能性はある。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。掘方から床下土坑を検出した。

床下土坑 土坑は、床面の精査では見つからず、掘方の調査で検出した。これらの土坑は57・90～93・95号土坑として調査され、資料整理で土坑1～6に変更した。これらは床面が一部埋没した竪穴住居の使用面から構築された可能性がある。

第4章 第2面の遺構と出土遺物

土坑1は隅丸方形を呈し、長辺は1.63m、短辺は1.48m、深さは0.33mである。

土坑2は円形を呈し、長径は0.82m、短径は0.62m、深さは0.07mである。

土坑3は歪んだ円形を呈し、長径は0.72m、短径は0.45m、深さは0.19mである。

土坑4は隅丸方形を呈し、長辺は1.80m、短辺は1.47m、深さは0.27mである。

土坑5は円形を呈し、長径は1.53m、短径は1.09m、深さは0.27mである。

土坑6は隅丸方形を呈し、長辺は0.87m、短辺は0.73m、深さは0.40mである。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築して

いる。燃焼底部は緩やかに窪み、奥壁では緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼底部は右側の底に焼土ブロックが見られた。底と焚口周辺及び焚口の右側には炭化物の広がりを検出した。これは灰の掻き出しによって形成された可能性がある。カマド埋土は炭化物を含むにぶい黄褐色砂質土である。カマドは長さ1.05m、幅0.67m、深さ0.17mである。貯蔵穴は検出されなかった。

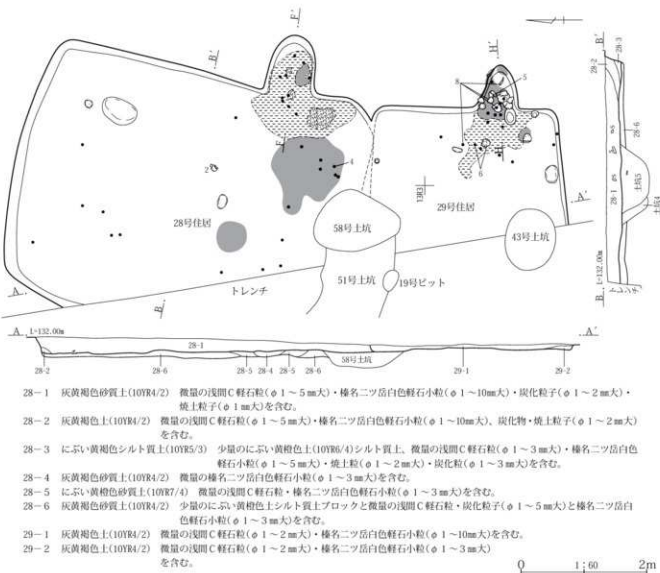
遺物 床面から土師器の甕(4)、カマド埋土から土師器の杯(1)が出土した。

時代 平安時代9世紀第4四半期。

29号住居(第101~104図、PL.43・44・391)

グリッド 13Q2

主軸方位 N84°E



第101図 V区28・29号住居(1)

重複 43号土坑に切られる。床面で切合いを認めており29号住居が新、28号住居が旧である。51・58号土坑は掘方埋土を切り、埋土に覆われるので住居廃絶後・埋土以前に構築された。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。試掘溝によって南部が大幅に失われている。長辺は3.20m、短辺は2.37m+、深さは0.22m、検

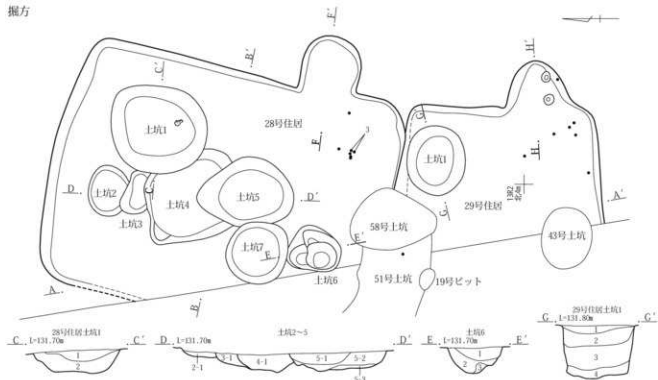
出された最大の面積は6.41m²である。

埋土 ニツ岳の白色軽石や浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.05mほど貼って、床面を構築している。カマド前の床面から硬化面の広がりを検出した。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込ん

掘方



28号住居土坑1 C-C'

1 灰黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒・樺名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)・炭化粒子(φ1~10mm大)を含む。
にぶい黄褐色土ブロックを混入する。

2 にぶい黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・樺名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)・炭化粒子(φ1~10mm大)を含む。

28号住居土坑2~5 D-D'

2-1 にぶい黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・樺名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)を含む。

3-1 にぶい黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(φ1~2mm大)・樺名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~4mm大)・焼土粒子(φ2mm大)を含む。

4-1 にぶい黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(φ1mm大)・樺名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。

5-1 にぶい黄褐色砂質土 微量の焼土粒子(φ1~2mm大)・炭化粒子(φ1~5mm大)と明黄褐色地山崩砂質土ブロックを含む。

5-2 灰黄褐色砂質土 微量の焼土粒子(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ2mm大)を含む。

5-3 にぶい黄褐色砂質土 明黄褐色地山崩砂質土ブロックを含む。

28号住居土坑6 E-E'

1 にぶい黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・樺名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)・炭化粒子(φ1~8mm大)・焼土粒子(φ1~3mm大)を含む。

2 灰黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒・樺名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ1~5mm大)を含む。

3 灰黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・樺名ニツ岳白色軽石小粒(φ1mm大)・焼土粒子(φ2mm大)を含む。

29号住居土坑1 G-G'

1 灰黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・樺名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)・炭化粒子(φ1~30mm大)を含む。粘性やや有。

2 灰黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)・樺名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1~5mm大)を含む。粘性やや有。

3 黒褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ1~5mm大)・炭化粒子(φ1~5mm大)とにぶい黄褐色砂質土ブロックを含む。

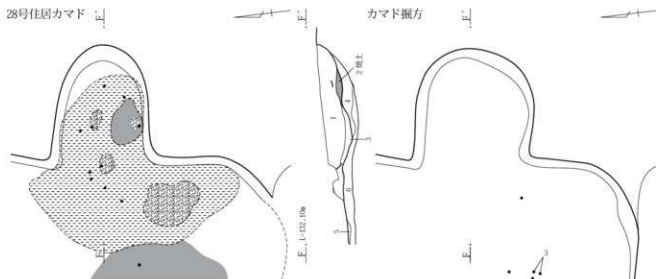
4 にぶい黄褐色土 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。

0 1:60 2m

第102図 V区28・29号住居(2)

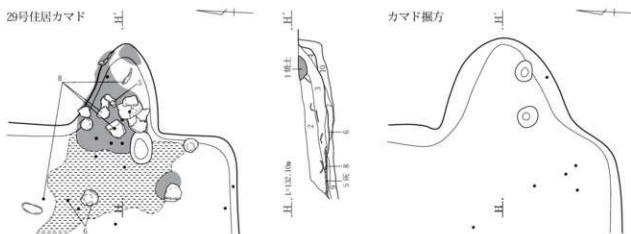
第4章 第2面の遺構と出土遺物

28号住居カマド



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子($\phi 1\sim 2$ mm大)、稀名ニツ岳白色軽石小粒・焼土粒子($\phi 1\sim 10$ mm大)を含む。
- 2 にぶい赤褐色土(5YR5/4) 焼土中心層。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・稀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 2$ mm大)、炭化粒子($\phi 1\sim 3$ mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・稀名ニツ岳白色軽石小粒・焼土粒子($\phi 1\sim 2$ mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒($\phi 1\sim 2$ mm大)、焼土粒子・炭化粒子($\phi 1\sim 3$ mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒($\phi 1\sim 2$ mm大)、稀名ニツ岳白色軽石小粒・焼土粒子($\phi 1\sim 5$ mm大)、炭化粒子($\phi 1\sim 3$ mm大)を含む。

29号住居カマド

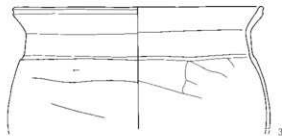


- 1 にぶい褐色土(5YR7/4) 焼土中心層。微量の浅間C軽石粒($\phi 1\sim 2$ mm大)・稀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 3$ mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・稀名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子($\phi 1\sim 5$ mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子($\phi 1\sim 5$ mm大)・炭化粒子($\phi 1\sim 3$ mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石粒($\phi 1$ mm大)・稀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 2$ mm大)・焼土粒子($\phi 1\sim 5$ mm大)を含む。
- 5 褐色土(10YR4/1) 灰中心層。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・稀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 2$ mm大)、焼土粒子($\phi 1\sim 5$ mm大)を含む。
- 7 にぶい褐色砂質土(7.5YR5/4) 少量の焼土と微量の浅間C軽石粒($\phi 1\sim 2$ mm大)を含む。
- 8 褐色土(10YR4/1) 少量の灰と微量の浅間C軽石粒($\phi 1$ mm大)を含む。
- 9 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・稀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 3$ mm大)を含む。
- 10 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒($\phi 1\sim 3$ mm大)を含む。

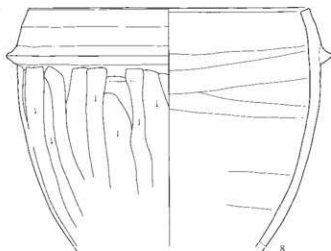
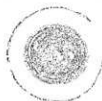
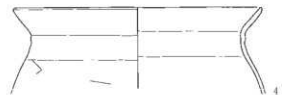
0 1:30 1m

第103図 V区28・29号住居(3)

28号住居



29号住居



0 1:3 10cm

第104図 V区28・29号住居の出土遺物

で構築している。掘方から床下土坑を検出した。

床下土坑 土坑1は隅丸方形を呈し、長辺は1.06m、短辺は0.84m、深さは0.39mである。土坑は床面の精査では見つからず、掘方の調査で検出されたが、竪穴住居の床面から構築された可能性がある。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに窪み、奥壁で急な勾配で立ち上がる。燃焼部底には淡い焼土帯が広がり、焚口周辺には炭化物の広がりを検出した。燃焼部の掘方からは直径0.16mのピットを2基検出した。ピットはカマド構築材の礎を埋めた痕跡と考えられる。カマド埋土は焼土ブロックを含むにぶい黄褐色砂質土である。カマドは長さ0.85m、幅0.61m、深さ0.26mである。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物 床面から須恵器の椀(6)、カマド使用面から羽釜(8)、カマド使用面付近から須恵器の椀(5)が出土した。出土遺物は10世紀内に年代の幅を有する。

時代 平安時代10世紀前半～中頃。

30号住居(第105・106図、PL.45・392)

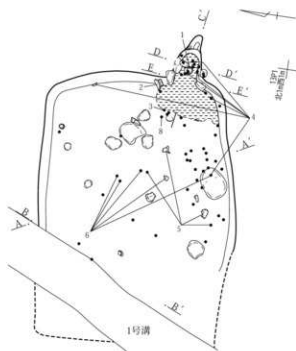
グリッド 13P1

主軸方位 N67°E

重複 1号溝に切られる。調査で切合い関係にある30・57号住居としたが、資料整理で30号住居に統合した。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。1号溝によって南西部が失われている。長辺は4.36m+、短辺は3.20m、深さは0.28m、検出された最大の面積は13.95㎡である。

埋土 灰黄褐～にぶい黄褐色砂質土からなる。

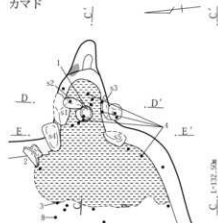


A-A', 1-132.50m

B-B', 1-132.50m

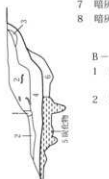
0 1:60 2m

カマド

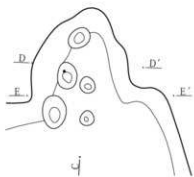


D-D', 1-132.50m

E-E', 1-132.50m

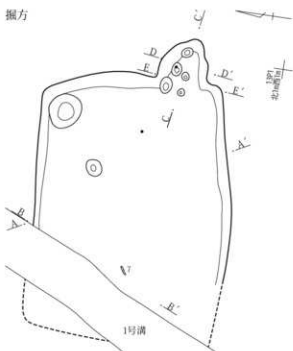


カマド掘方



第105図 V区30号住居

掘方



A-A'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~5mm大)・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)・にぶい黄褐色小粒を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/3) 微量の炭化粒子(ϕ 1~5mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~5mm大)とにぶい黄褐色シルト質土ブロックを含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~5mm大)・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)とにぶい黄褐色シルト質土ブロックとを含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)・炭化粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。
- 7 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 地上土をブロック状に混入している層。
- 8 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 壁が一部崩壊した層。微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)を含む。

B-B'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)、棒名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(ϕ 1~5mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1mm大)、棒名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~2mm大)・炭化粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。

- 1 黒褐色土 多量の焼土粒子(ϕ 1~3mm(10YR3/2)大)・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土 微量の炭化粒子・焼土粒子・にぶい黄褐色小粒(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土 微量の炭化粒子(ϕ 1~10YR5/2) 3mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土 微量の灰・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)・焼土粒子を含む。
- 5 褐色土 炭化物中心層。多量の炭化粒(10YR4/1)子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 6 暗灰黄色シルト質土 微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。

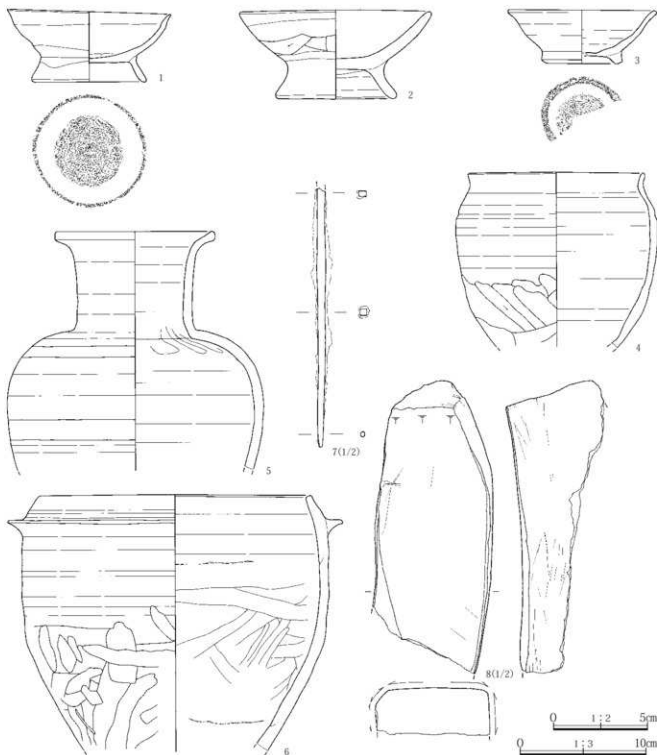
0 1:30 1m

床面 浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。北東隅から直径0.55m、深さ0.06mの円形の浅い窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅に位置する。カマドの燃

焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃烧部底は緩やかに窪み、奥壁で緩やかな勾配で立ち上がる。燃烧部左右の壁には長径0.25~0.32mの亜円礫S1・3・4・5の4点が据えられており、燃烧部左壁下の掘方からは直径0.18~0.25mのピットを3基検出した。4点の礫はカマド構築材、ピットはカマド構築材



第106図 V区30号住居の出土遺物

の礎を埋めた痕跡と考えられる。燃焼部の中央には長径0.25mの垂円礫S2が出土しており、支脚と考えられる。燃焼部底から焚口周辺には炭化物の広がりを見出した。カマド埋土は炭化物まじりの灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.25m、幅0.67m、深さ0.24mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器と須恵器の椀(1~3)、長頸壺(5)、砥石(8)、床面付近から土師器の小型甕(4)、羽釜(6)、掘方から棒状の鉄製品(7)が出土した。出土遺物は10世紀内に年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀第3四半期。

31号住居(第107・108図、PL.46・392)

グリッド 130 I

主軸方位 N78° E

重複 11号溝を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する。長辺は3.41m、短辺は2.78m、深さは0.21m、面積は8.10㎡でごく小規模な竪穴住居である。

埋土 浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.06mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。カマド前から中央で長径1.49m、短径1.18m、深さ0.15mの歪んだ方形を呈する土坑1を、南西隅の壁際から長径0.56m、短径0.44m、深さ0.25mのビットを検出した。

カマド 東壁の南東隅に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は平坦で緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部底で焼土帯を焚口周辺には炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は炭化物まじりのにぶい褐色土や灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.57m、幅0.57m、深さ0.12mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径1.00m、短径0.59m、深さ0.28mの土坑を検出した。底から0.17m上から土師器の椀(1)が、貯蔵穴上の床面の高さから土師器の甕(5)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴

と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から黒色土器の椀(2)、灰軸陶器の瓶(3)、羽釜(7)、埋土から羽釜(6)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

32号住居(第109図、PL.47)

グリッド 130 II

主軸方位 N75° E

重複 なし。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する。長辺は2.90m、短辺は2.33m+、深さは0.14mで北部は攪乱により失われている。検出された最大の面積は6.13㎡である。

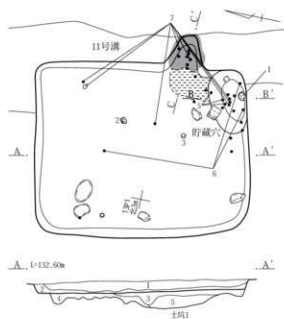
埋土 浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐色にぶい黄褐色砂質土からなる。

床面 にぶい黄褐色～黄褐色砂質土を0.03mほど薄く貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。

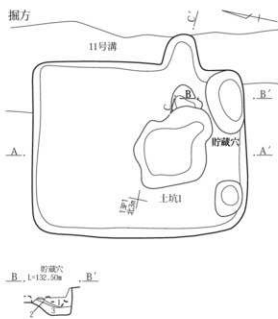
掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。南西隅の壁際から直径0.79m、深さ0.24mの土坑1を検出した。土坑からは垂円礫が多く出土した。

カマド 東壁の南東隅に位置するが攪乱で半分以上が失われている。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は平坦で緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部東壁には長径0.28mの垂円礫が据えられ、礫は0.08mほど埋められている。燃焼部の掘方からは直径0.22~0.35mのビットを2基検出した。礫はカマド構築材、ビットは支脚やカマド構築材の礎を埋めた痕跡と考えられる。燃焼部底からは炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は浅間Cテフラの軽石まじりのにぶい黄褐色～灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.95m、幅0.87m、深さ0.13mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.98m、短径0.75m、深さ0.23mの土坑を検出した。土坑からは長径0.21~0.30mの垂円礫が多く出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。しかし南西隅から検出した土坑1からも多くの礫が出土しており、竪穴住居の廃絶時に両者の土坑に礫を廃棄した可能性がある。



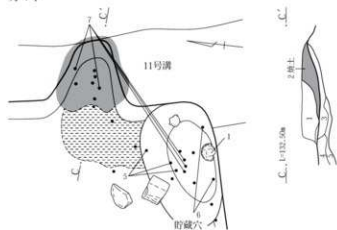
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(ϕ 1~3mm大)、焼土粒子(ϕ 1~4mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 3 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)・椋名ニッ岳白色軽石小粒(ϕ 1~3mm大)を含む。
- 4 黄褐色土(2.5Y5/3) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 5 黄褐色土(2.5Y5/3) 微量の浅間C軽石粒・椋名ニッ岳白色軽石小粒(ϕ 1~2mm大)を含む。=土坑1



- 貯蔵穴 B-B'
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 多量の土器を含む。
 - 2 暗灰黄色シルト質土(2.5Y6/2)
 - 3 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2)

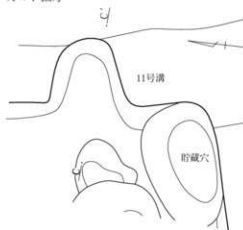
0 1:60 2m

カマド



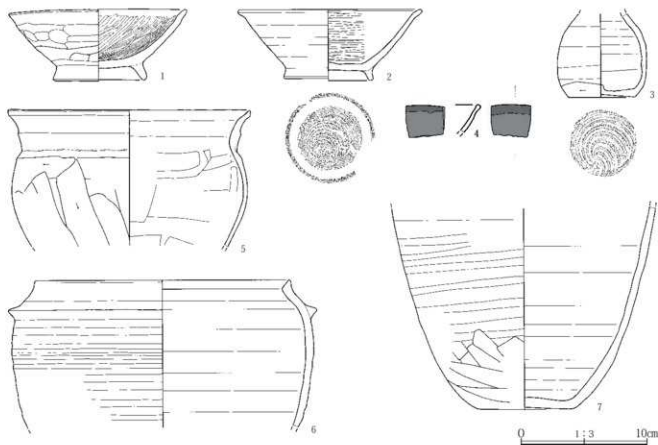
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 2 にぶい褐色砂質土(10YR5/3) 焼土中心層。微量の灰を含む。
- 3 褐灰色砂質土(10YR4/1) 微量の炭化粒子・焼土粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。
- 4 暗灰黄色シルト質土(2.5Y5/2) 一部に灰黄褐色土を含む。
- 5 暗灰黄色シルト質土(2.5Y5/2)

カマド掘方



0 1:30 1m

第107図 V区31号住居



第108図 V区31号住居の出土遺物

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の碗(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀第2四半期。

33号住居(第110・111図、PL.48・392)

グリッド 13P 3

主軸方位 N79° E

重複 34号住居、6号溝に切られる。11号溝を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸方形を呈する。長辺は2.38m、短辺は1.23m+、深さは0.30mで北部は攪乱により失われている。検出された最大の面積は2.80㎡である。

埋土 浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.02mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。焚口周辺では炭化物と硬化面の広がりを検出した。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込ん

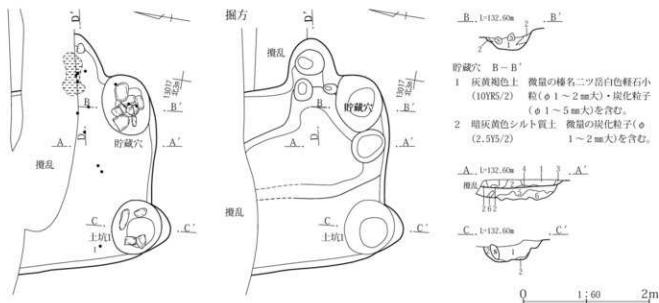
で構築している。カマド前から長径0.60m、短径0.38m、深さ0.09mの歪んだ楕円形の浅い窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅に位置するが攪乱で左側の一部が失われている。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに窪み、約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部右の奥壁と焚口の両側壁には長径0.21~0.28mの亜円礫S 1~3の3点が据えられている。燃焼部右壁の掘方からは直径0.16~0.35mのビットを3基検出した。礫は袖石2点を含むカマド構築材、ビットはカマド構築材の礫を埋めた痕跡と考えられる。燃焼部底からは焼土ブロックの広がりを検出した。カマド埋土は焼土ブロックを含む黒褐~灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.88m、幅0.70m、深さ0.63mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

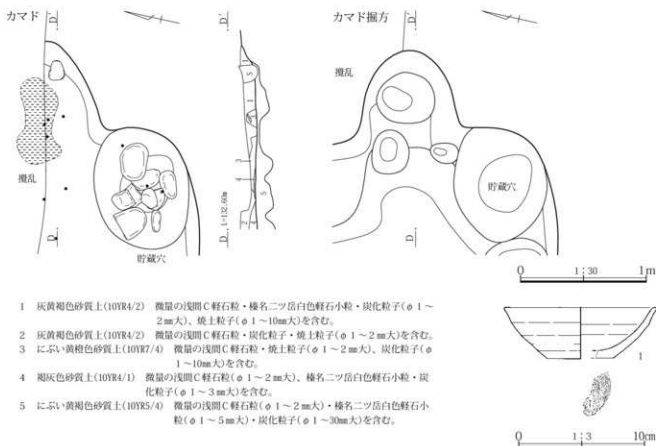
遺物 床面から鉄製品(3)、カマド埋土から羽釜(2)、埋土から土師器の小型甕(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。



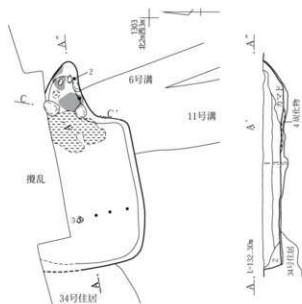
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・棒名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~2mm大)・炭化粒子(ϕ 1~5mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒・棒名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~2mm大)・炭化粒子(ϕ 1~5mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 5 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)・棒名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~5mm大)・炭化粒子(ϕ 1~30mm大)を含む。
- 6 にぶい黄褐色細砂質土(10YR6/4) 微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。

- 土坑1 C-C'
- 1 灰黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)・棒名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。
 - 2 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/4)



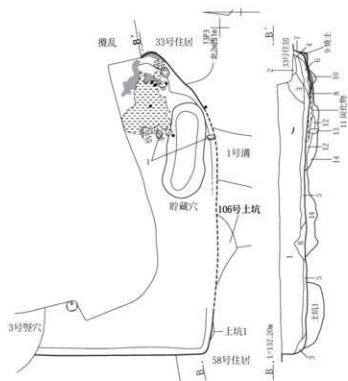
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・棒名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)・焼土粒子(ϕ 1~10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色砂質土(10YR7/4) 微量の浅間C軽石粒・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)・炭化粒子(ϕ 1~10mm大)を含む。
- 4 褐色砂質土(10YR4/1) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)・棒名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。
- 5 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)・棒名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~5mm大)・炭化粒子(ϕ 1~30mm大)を含む。

第109図 V区32号住居と出土遺物



33号住居 A-A'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・榛名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化粒子・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(φ1~2mm大)・榛名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)・焼土粒子(φ1~5mm大)を含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・榛名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)と焼土粒子(φ1~8mm大)を含む。



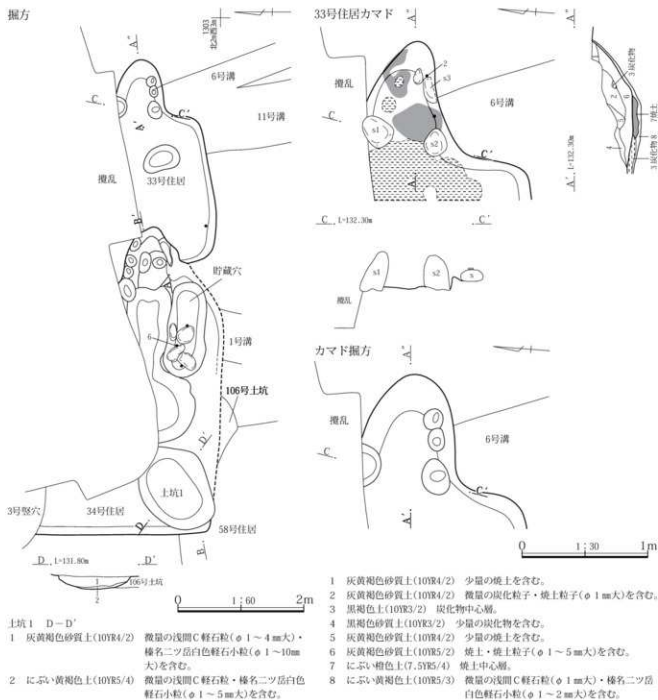
34号住居 B-B'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~5mm大)・榛名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)・焼土粒子・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ1~10mm大)を含む。にぶい黄褐色シルト質土ブロックを混入する。
- 4 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)・榛名ニツ岳白色軽石小粒(φ2mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ1~5mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1~5mm大)・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~4mm大)・榛名ニツ岳白色軽石小粒・焼土粒子(φ1~2mm大)・炭化粒子(φ1~10mm大)を含む。
- 7 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の焼土と微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)・榛名ニツ岳白色軽石小粒(φ3mm大)を含む。
- 8 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・榛名ニツ岳白色軽石小粒(φ2mm大)・焼土粒子(φ1~5mm大)・炭化物を含む。
- 9 にぶい赤褐色砂質土(5YR5/4) 焼土中心層。
- 10 灰褐色砂質土(5YR4/2) 少量の焼土粒子を含む。
- 11 黒褐色砂質土(10YR3/1) 炭化物中心層。
- 12 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子(φ1~5mm大)を含む。
- 13 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)
- 14 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ1~10mm大)を含む。

0 1; 60 2m

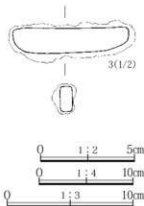
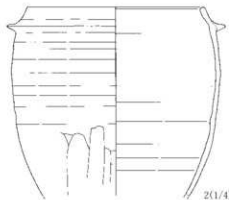
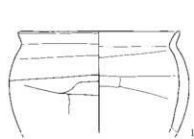
第110図 V区33・34号住居

掘方



土坑1 D-D'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~4mm大)・棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒・棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)を含む。



第111図 V区33・34号住居と33号住居の出土遺物

34号住居(第110~112図, PL.49)

グリッド 13P 3

主軸方位 N86°W

重複 3号竪穴、1号溝に切られる。33・58号住居、105・106号土坑を切る。調査では切合い関係にある34・55号住居としたが、資料整理で34号住居に統合した。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する。長辺は4.12m、短辺は2.74m+、深さは0.47mで北部は大部分が攪乱により失われている。検出された最大の面積は11.28㎡である。

埋土 浅間Cテフラの軽石を含むにぶい黄褐～灰黄褐色砂質土からなる。

床面 黄褐色シルト質土を0.18mほど厚く貼って、平坦な床面を構築している。焚口周辺では炭化物、中央では硬化面の広がりを検出した。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。南西隅の壁際から長径1.49m、短径0.98m、深さ0.20mの楕円形の土坑1を検出した。

カマド 東壁の南東隅に位置するが攪乱で左側の一部が失われている。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに窪み、奥壁は急な勾配で立ち上がる。燃焼部底からは焼土ブロックの広がり、奥壁には厚い焼土帯を検出した。カマ

ド埋土にはぶい黄橙～灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.40m、幅0.59m、深さ0.48mである。

貯蔵穴 掘方の調査でカマド右手前の壁際から長辺1.52m、短辺0.59m、深さ0.18mの隅丸長方形の土坑を検出した。土坑からは長径0.27~0.35mの垂円礫が多く出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から須恵器の椀(1~3)、灰軸陶器の椀(4)や壺(5)、掘方から羽釜(6)が出土した。

時代 平安時代10世紀第3~4半期。

35号住居(第113~115図, PL.50・392)

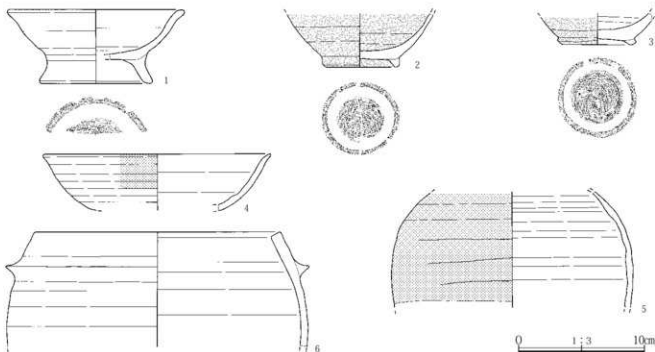
グリッド 13Q 5

主軸方位 N77°W

重複 2号竪穴に切られる。調査で切合い関係にある35・54号住居としたが、資料整理で35号住居に統合した。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.10m、短辺は3.80m、深さは0.48m、面積は12.20㎡で小規模な竪穴住居である。

埋土 二ツ岳の白色軽石や浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐色砂質土からなり、水平に成層して竪穴を埋めている。

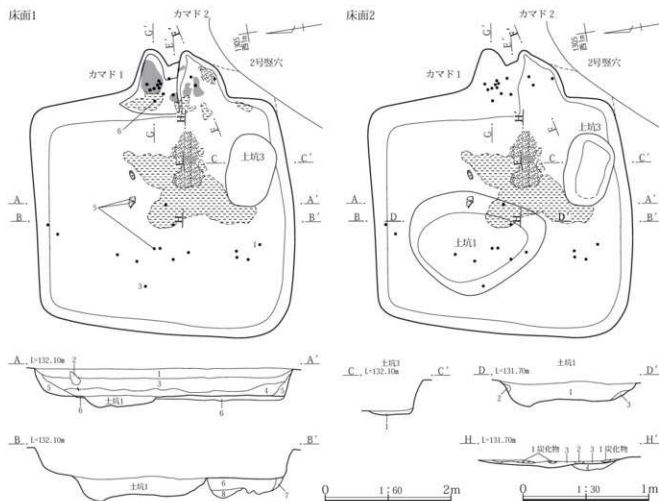


第112図 V区34号住居の出土遺物

床面 にくい黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。カマド2の焚口周辺では硬化面を抽出した。また床面の中央部で焼土や炭化物の広がりを抽出し、調査では掘方埋土として残存する54号住居のカマド痕跡と考えた。しかし焼土面は、にくい黄褐色土の

床面上に存在するのでこれは住居廃絶後に構築された好跡と考えられる。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。中央に北西寄りに長径1.92m、短径1.38m、深さ0.38mの歪んだ菱形を呈する土坑1を検出した。南



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・焼土粒子(φ1~2mm大)、極名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)・炭化粒子(φ1~10mm大)を含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物・母・ブロックを混入する。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~5mm大)・焼土粒子(φ1~4mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・焼土粒子(φ1~2mm大)、極名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1~5mm大)を含む。
- 5 にくい黄褐色砂質土(10YR4/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・極名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- 6 にくい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子(φ1~5mm大)を含む。
- 7 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)・極名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。
- 8 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)を含む。

- 土坑3 C-C'
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒(φ1mm大)を含む。

土坑1 D-D'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・極名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 2 にくい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1mm大)を含む。
- 3 にくい黄褐色砂質土(10YR5/3) ブロック状を含む。

H-H'

- 1 黒褐色砂質土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 2 にくい黄褐色砂質土(10YR4/3) 微量の焼土粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 3 にくい黄褐色砂質土(10YR4/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。最下層に灰がある。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 上部に灰層の集中があり、下部に焼土塊がある。

第113図 V区35号住居(1)

東側の壁際から長径0.60m、短径0.48m、深さ0.11mの歪んだ楕円形を呈する土坑2を検出した。土坑は位置や掘方埋土の層位からカマド2使用時の貯蔵穴の可能性はある。

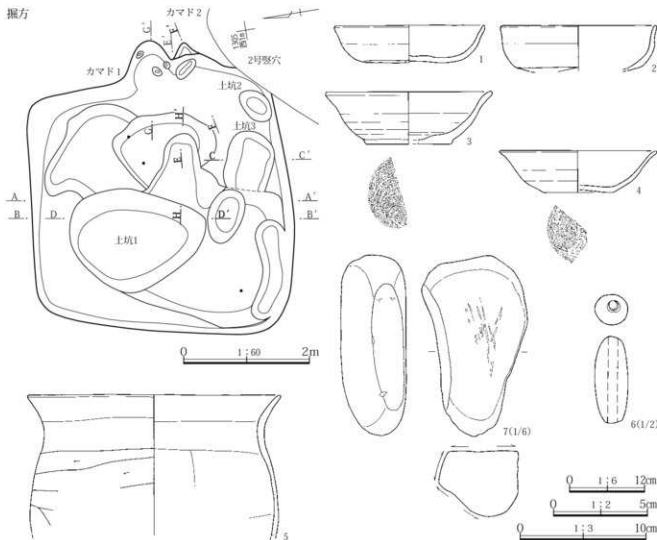
カマド 東壁の中央と南東隅に2基のカマドが位置し、南東隅をカマド2、中央をカマド1とした。35号住居は構築当初にカマド1を使用し、後にカマドを廃棄して東南隅のカマド2を再構築した。両方のカマド燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。両方のカマド燃焼部底は平坦で、奥壁はやや急な勾配で立ち上がる。カマド1の燃焼部底で焼土帯の広がりや、カマド2の燃焼部底では焼土ブロック炭化物の広がりを検出した。カマド1はカマド2により右側の焚口周辺が失われている。両方のカマド埋土にはふい黄褐～灰黄褐色砂質土からなる。カマド1は長さ0.97m、幅0.70m、深さ0.34m、

カマド2は長さ0.97m、幅0.95m、深さ0.38mである。
土坑 掘方の調査で東寄りの南壁際から長径0.95m+、短径0.64m、深さ0.21mの土坑3を検出した。土坑は床面に広がる炭化物や硬化面を切って埋没しており、壁穴の埋没直前に開口していたと考えられる。位置や形状から床面に構築されたがに関連する土坑の可能性はある。

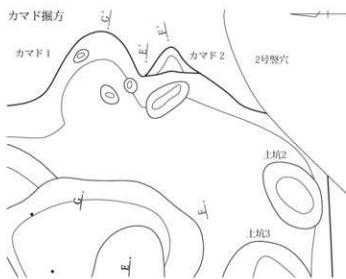
柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の壁穴住居と想定される。

遺物 床面付近から土師器の甕(5)、埋土から土師器や須恵器の杯(1～3)が出土した。また、カマド1の埋土から土鍾(6)、砥石(7)が出土した。埋土からの出土遺物は9・10世紀内に年代幅を有する。

時代 平安時代9世紀第2四半期。



第114図 V区35号住居と出土遺物



カマド1 G-G'

- 1 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3) 微量の浅間C軽石粒($\phi 1 \sim 3$ mm大)、棒名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子($\phi 1 \sim 5$ mm大)、焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量の焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)と微量の炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)・焼土粒子($\phi 1 \sim 10$ mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子($\phi 1 \sim 5$ mm大)を含む。
- 5 明赤褐色土(5YR5/6) 焼土中心層。
- 6 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒($\phi 1 \sim 3$ mm大)・棒名ニツ岳白色軽石($\phi 1 \sim 30$ mm大)を含む。
- 7 黒褐色砂質土(10YR3/2) 微量の浅間C軽石粒($\phi 1 \sim 5$ mm大)を含む。

E-E'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・焼土粒子・炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)、棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 10$ mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)、棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 20$ mm大)・焼土粒子($\phi 1 \sim 3$ mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子・炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/2) 灰土中心層。炭化物・焼土を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の灰・炭化物を含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の焼土を含む層。

カマド2 F-F'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒($\phi 1 \sim 3$ mm大)・棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 10$ mm大)・焼土粒子($\phi 1 \sim 5$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)、棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 10$ mm大)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒($\phi 1 \sim 2$ mm大)・棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 4$ mm大)・焼土粒子($\phi 1 \sim 20$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 3$ mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)・炭化粒子($\phi 1$ mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒($\phi 1 \sim 3$ mm大)・焼土粒子($\phi 1$ mm大)を含む。

0 1:30 1m

第115図 V区35号住居(2)

36号住居(第116・117図, PL.51・393)

グリッド 13L6

主軸方位 N72°W

重複 35号土坑、3号ピットに切られる。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸方形を呈する竪穴住居で、北部は調査区外に存在する。長辺は3.46m、短辺は3.22m+、深さは0.24m、検出された最大の面積は9.58㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石や浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 暗灰黄色砂質土を0.04mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。全面に長径0.28～0.48mの歪んだ円形を呈するピットを7基検出した。これらのピットは浅く、

位置も様々で主柱穴になる可能性は極めて少ない。

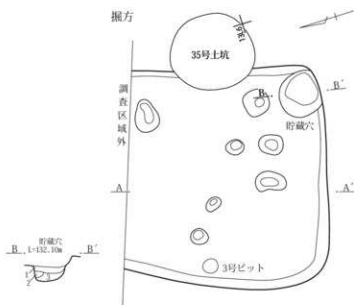
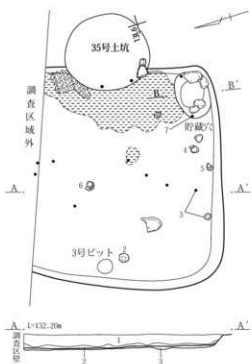
カマド 東南壁中央付近の床面に炭化物や灰の広がりを検出した。東南壁の中央は35号土坑により失われており、この位置にカマドが存在していた可能性が極めて高い。

貯蔵穴 南東側の壁際から長径0.75m、短径0.57m、深さ0.24mの楕円形の土坑を検出した。土坑からは長径0.16～0.29mの亜円礫が多く出土し、底から0.15mで羽釜(7)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(2～6)、埋土から土師器の杯(1)が出土した。

時代 平安時代9世紀第4四半期。



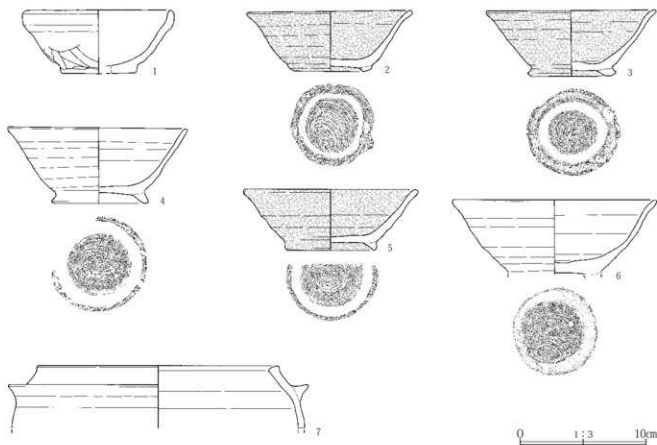
貯蔵穴 B-B'

- 1 灰黄褐色砂質土(2.5Y5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1mm大)、棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)、焼土粒子(φ1～3mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(2.5Y6/3) 下層の地上上を中心とする。微量の炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。
- 3 暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1～3mm大)を含む。

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(φ1～2mm大)、棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)、焼土粒子(φ1～3mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1mm大)、棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm大)、炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。
- 3 暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2) 下層の地上上を中心とする。微量の炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。

0 1:60 2m

第116図 V区36号住居



第117図 V区36号住居の出土遺物

37号住居(第118図、PL.52・393)

グリッド 13L 5

主軸方位 N75°E

重複 14・18号ピットに切られる。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、長方形を呈すると想定される竪穴住居で、南部は大部分が攪乱により失われている。長辺は3.40m+、短辺は3.02m、深さは0.38m、検出された最大の面積は3.74㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石や浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐色砂質土が水平に成層している。

床面 灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

カマド 東壁に位置するが攪乱で焚口付近が失われている。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに傾いて、緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部の右壁には長径0.20mの垂円礫S1が据えられており、焚口付近の埋土には長径0.24m

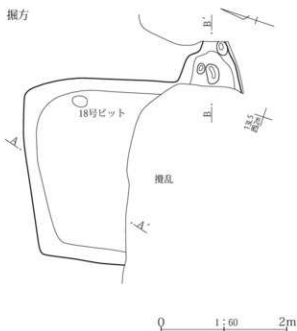
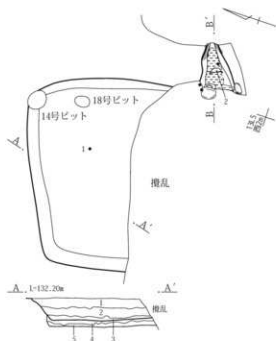
の垂円礫が出土した。これらはカマド構築材と埋土中に移動した構築材と想定される。燃焼部底は炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土やにぶい黄褐色シルト質土からなる。カマドは長さ1.01m、幅0.65m、深さ0.30mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

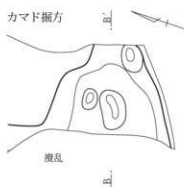
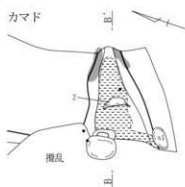
遺物 埋土から土師器の杯(1)、カマド埋土から土師器の甕(2)が出土した。

時代 奈良時代8世紀第1四半期。

第4章 第2面の遺構と出土遺物



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・焼土粒子(φ1~2mm大)、極名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)・炭化粒子(φ1~4mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1mm大)、極名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色細砂質土(10YR6/2) 地山土を中心とする層。微量の極名ニツ岳白色軽石小粒(φ1mm大)を含む。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(φ1~2mm大)、極名ニツ岳白色軽石小粒・焼土粒子(φ1~5mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/4) ブロックを含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1~2mm大)、焼土粒子(φ1~30mm大)を含む。
- 5 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2) 微量の浅間C軽石粒・極名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1mm大)を含む。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第118図 V区37号住居と出土遺物

39号住居(第119・120図, PL.54・393)

グリッド 13J 4

主軸方位 N70° E

重複 なし。47号住居と至近距離で接し、同時存在の可能性はない。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する。長辺は2.90m、短辺は2.32m、深さは0.40m、面積は5.38㎡で極小規模な竪穴住居である。

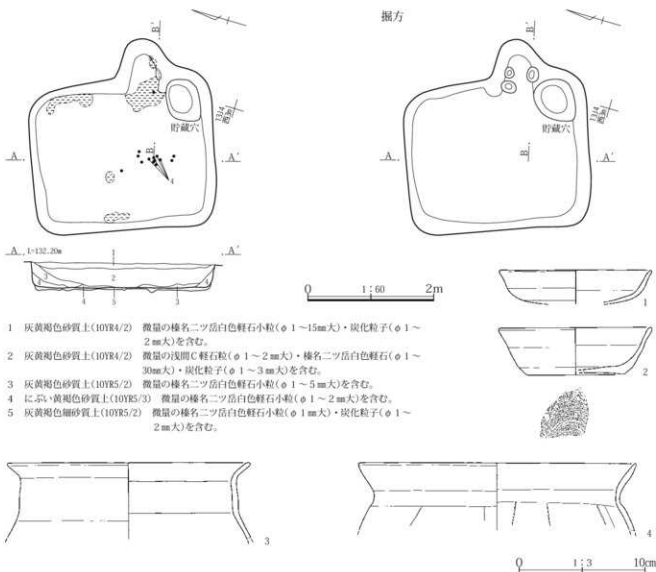
埋土 にぶい黄褐～灰黄褐色砂質土が竪穴の周縁に堆積し、灰黄褐色砂質土が竪穴中央に水平に堆積している。

床面 にぶい黄褐～灰黄褐色砂質土を0.06mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。カマドの焚口周辺で硬化面の広がりを検出した。また、北東壁際や南西壁際の中央付近で薄い炭化物の広がりが認められる。

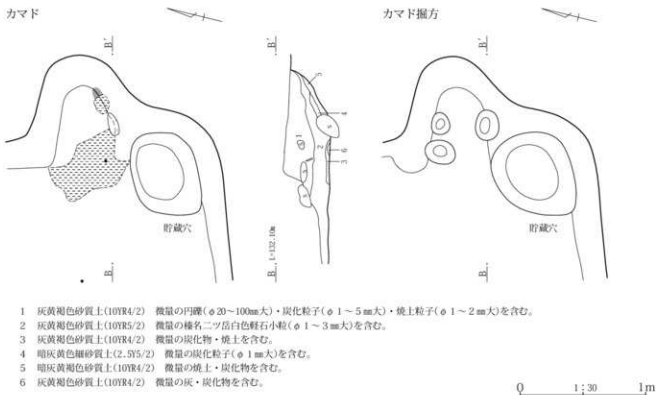
掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで、ほぼ平坦な掘方を構築している。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は平坦で、奥壁は約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部の右壁には長径0.22mの垂円礫が埋め込まれており、燃焼部底の掘方から長径0.18～0.24mの小ピット3基を検出した。これらはカマド構築材と構築材の痕跡と考えられる。燃焼部底で焼土帯を焚口周辺は炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は炭化物まじりににぶい褐色土や灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.80m、幅0.50m、深さ0.32mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.76m、短径0.63m、深さ0.09mの土坑を検出した。土坑は位置や



第119図 V区39号住居と出土遺物



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の円礫(φ20~100mm大)・炭化粒子(φ1~5mm大)・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒状二ツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化物・焼土を含む。
- 4 暗灰黄色細砂質土(2.5Y5/2) 微量の炭化粒子(φ1mm大)を含む。
- 5 暗灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の焼土・炭化物を含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の灰・炭化物を含む。

第120図 V区39号住居

形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面の土師器の甕(4)、埋土から須恵器の杯(2)、カマド埋土から土師器の杯(1)、掘方から土師器の甕(3)が出土した。

時代 平安時代9世紀。

40号住居(第121~123図、PL.54・55・393)

グリッド 13K 2

主軸方位 N86° E

重複 12号溝、41号住居に切られる。116号土坑を切る。
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は5.30m、短辺は4.73m、深さは0.46m、面積は21.98㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が周縁から竪穴中央を埋め、最上部には浅間Bテフラを多量に含む灰黄褐色砂質土が堆積する。

床面 浅間Cテフラの軽石や二ツ岳の白色軽石を含むに、黄褐~灰黄褐色砂質土を0.15mほど厚く貼って、床面を構築している。床面上には焼土ブロックや炭化物が

壁際周辺を除いてほぼ全面に広がっている。これらは竪穴住居が廃棄され埋没途上で火災により焼失した部材などからなると想定される。

掘方 Ⅷ層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築し、北東隅と北西隅の壁際は0.17~0.36mの落差で段状の落ち込みを呈する。

床下土坑 掘方の調査で6基の土坑を検出した。

土坑1は円形を呈し、長径0.92m、短径0.80m、深さ0.47mである。

土坑2は不定形で長径1.37m、短径1.10m、深さ0.23mである。

土坑3は円形で直径0.87m、深さ0.43mである。

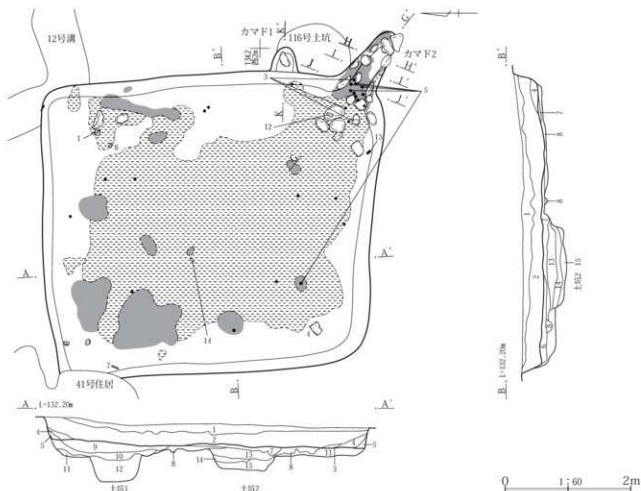
土坑4は歪んだ円形で長径0.85m、短径0.72m、深さ0.23mである。

土坑5・6は切合いが認められ長径1.60m、短径1.05m、深さ0.10~0.26mである。

カマド 東壁の南東隅寄りと南東隅に2基のカマドが位置し、南東隅をカマド2、南東隅寄りをカマド1とした。40号住居は構築当初にカマド1を使用し、後にカマドを廃棄して東南隅のカマド2を再構築した。両方のカマド燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築してい

る。カマド1 燃焼部底は平坦で、奥壁は約45°の勾配で立ち上がる。カマド1の燃焼部底や左壁に焼土ブロックの広がりを検出した。カマド1は焚口周辺の大部分が失われている。カマド1の埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマド1は長さ0.38m、幅0.42m、深さ0.18mである。カマド2の燃焼部底はほぼ平坦で、燃焼部の奥は緩やかなカーブで立ち上がり煙道に接続する。燃焼部右壁には

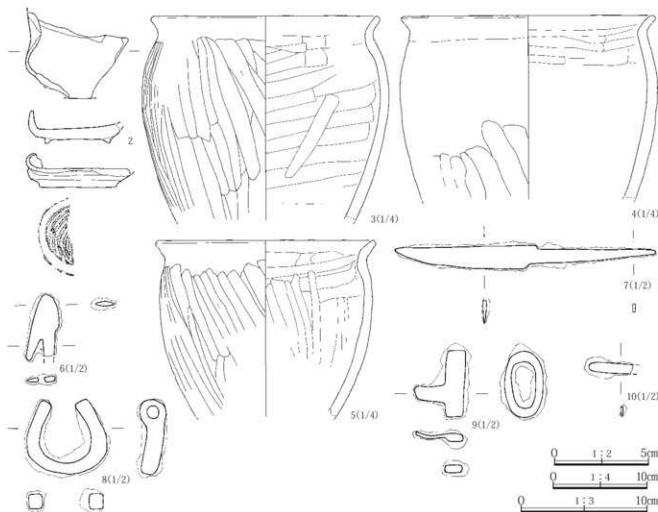
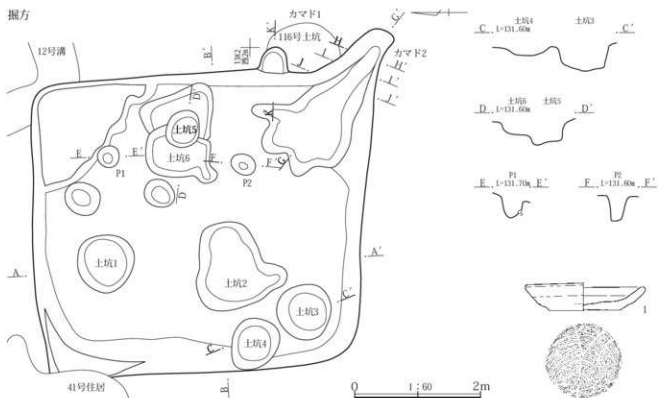
長径0.25~0.30mの亜円~垂角礫S4~6・8・9の5点が、燃焼部左壁には長径0.25~0.30mの垂角礫S7・10の2点が据えられており、これらは長軸方向を垂直にして並べられており、カマド構築材と考えられる。煙道の上には長径0.35mの亜円~垂角礫S1・2の2点が据えられており、これらは煙道の天井架構材と考えられる。燃焼部底には焼土帯、焚口では炭化物の広がりを検



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の浅間B軽石混を含む層。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)、極名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~3mm大)・炭化粒子(ϕ 1~5mm大)・円礫(ϕ 20~400mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の炭化物を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~4mm大)・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)とにふい黄褐色土ブロックを含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~8mm大)・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 7 黒褐色砂質土(10YR3/2) 多量の炭化物・炭化粒を含む。
- 8 にふい黄褐色砂質土(10YR5/4) 炭化物混入。
- 9 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~5mm大)、炭化粒子・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 10 にふい黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)、極名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~4mm大)を含む。
- 11 にふい黄褐色細砂質土(10YR5/4) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~5mm大)を含む。
- 12 暗灰黄色細砂質土(2.5Y4/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~2mm大)・炭化粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。=土坑1
- 13 暗灰黄色細砂質土(2.5Y5/2) 微量の浅間C軽石(ϕ 1~2mm大)・極名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~3mm大)・炭化粒子(ϕ 1~10mm大)を含む。=土坑2
- 14 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~10mm大)・炭化粒子(ϕ 1mm大)を含む。=土坑2
- 15 暗灰黄色細砂質土(2.5Y5/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。=土坑2

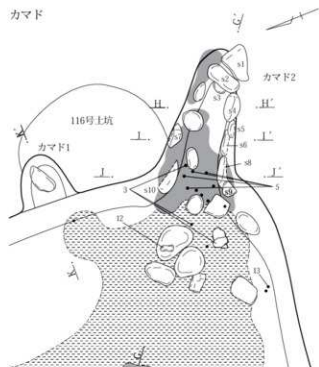
第121図 V区40号住居

掘方

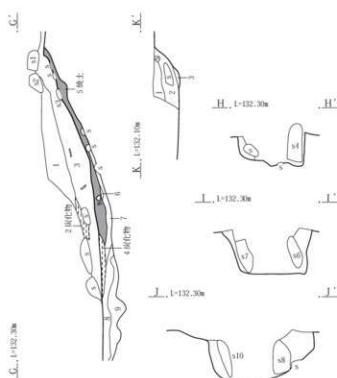
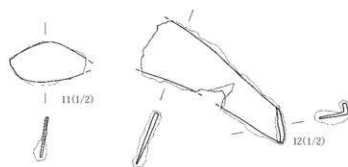
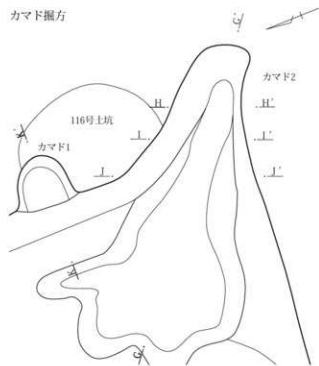


第122図 V区40号住居と出土遺物(1)

カマド



カマド掘方



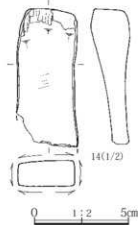
カマド1 K-K'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名ニッ岳白色軽石小粒(ϕ 1~3mm大)と焼土粒子(ϕ 1~2mm大)・焼土を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニッ岳白色軽石小粒(ϕ 1~2mm大)・焼土を含む。
- 3 にぶい褐色土(7.5YR5/3) 微量の焼土を含む。

カマド2 G-G'

- 1 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の焼土粒子(ϕ 1~5mm大)・焼土と炭化粒子(ϕ 1~20mm大)・物を含む。
- 2 黒褐色砂質土(10YR3/2) 炭化物中心層。微量の焼土粒子(ϕ 1~30mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の焼土粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物中心層。
- 5 にぶい赤褐色土(5YR5/4) 焼土中心層。小円礫(ϕ 50mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。
- 7 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 少量の焼土を含む。
- 8 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 9 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。

0 1:30 1m



第123図 V区40号住居と出土遺物(2)

出した。カマド埋土は二ツ岳の白色軽石や黒褐色炭化物を含む、にぶい黄褐色砂質土からなる。カマドは煙道を含む長さ1.27m、煙道長0.27m、幅1.02m、深さ0.32mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南西隅の壁際から土坑3を検出した。位置や形状から貯蔵穴の可能性はある

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方の調査で支柱穴と思われるピット2基を検出した。これらは直径0.35m、深さ0.17mのP1、長径0.40m、短径0.32m、深さ0.41mのP2である。柱間P1・P2が2.15mである。なお柱穴には柱痕は認められなかったが、掘方はしっかりしている。

遺物 床面から須恵器の杯(1)と土師器甕(4)、鉄製品(8・10)、鉄鎌(12)、床面付近から刀子(7)、カマド使

用面と使用面付近から土師器の甕(3・5)、掘方から須恵器の耳皿(2)が出土した。また、埋土から2点の砥石(13・14)が出土した。

時代 8世紀に帰属する41号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代11世紀前半と想定される。

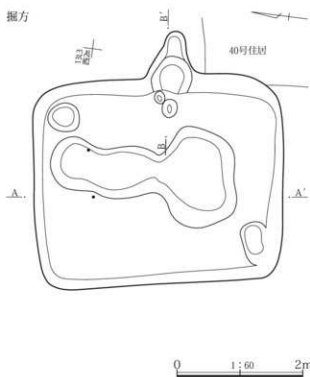
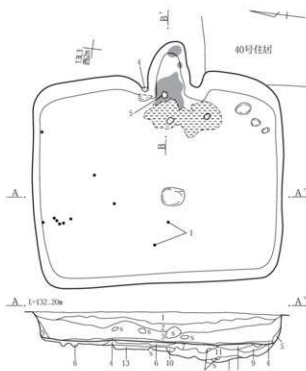
41号住居(第124・125図、PL.56・393)

グリッド 13L2

主軸方位 N80°E

重複 40号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.95m、短辺は3.30m、深さは0.46m、面積は10.62㎡である。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)・炭化粒子(φ1~5mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1~5mm大)と浅黄色細砂質土ブロックを含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~5mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~4mm大)と浅黄色土ブロックを含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1~2mm大)とにぶい黄褐色細砂質土ブロックを含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・焼土粒子(φ1~2mm大)、炭化粒子(φ10~20mm大)を含む。
- 7 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4) FAシルト質土ブロックを含む。炭化粒子(φ1~10mm大)を含む。
- 8 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/3) 棒名二ツ岳火山灰混じり。微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- 9 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)を含む。
- 10 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/4) シルト質土中心層。
- 11 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 微量の棒名二ツ岳火山灰・白色軽石小粒(φ1~20mm大)、炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ1mm大)を含む。
- 12 暗灰黄色砂質土(2.5Y4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)を含む。
- 13 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子(φ1~5mm大)・焼土粒子(φ1~20mm大)を含む。

第124図 V区41号住居

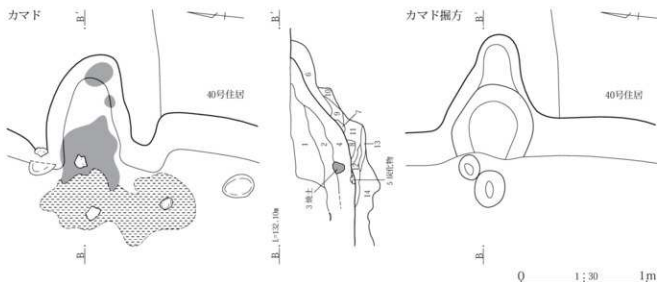
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が成層し、緩く傾きながら竪穴を埋めている。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼って床面を構築している。カマドの焚口付近から硬化面の広がりを検出した。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築し、北東隅と南西隅の壁際に長径0.50~0.70m、深さ0.03~0.12mの浅い円形の窪みを検出した。また、中央には南北方向に長軸を有し、長径2.93m、短径0.80~

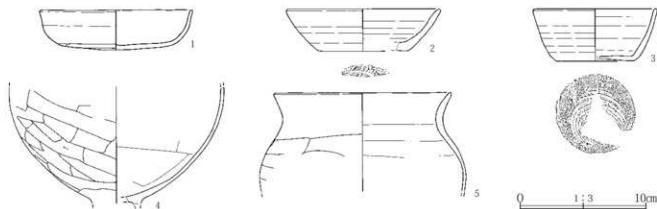
1.56m、深さ0.03~0.12m不定形の窪みを検出した。

カマド 東壁中央のやや南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかな傾きで、奥壁は約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部の左壁には長径0.24mの亜円礫が埋め込まれており、カマド構築材と考えられる。燃焼部底で焼土帯を、焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.95m、幅0.67m、深さ0.48mである。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~10mm大)とにぶい黄褐色土ブロックを含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/3) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 3 灰褐色砂質土(7.5YR5/2) 焼土中心層。
- 4 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の焼土粒子(ϕ 1~2mm大)とにぶい黄褐色土ブロックを含む。
- 5 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 6 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 7 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。

- 8 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量の炭化物と微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 2mm大)・焼土を含む。
- 9 にぶい褐色砂質土(7.5YR5/4) 少量の焼土と微量の炭化物を含む。
- 10 暗灰黄色細砂質土(2.5Y5/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1mm大)を含む。
- 11 にぶい黄褐色土(10YR6/3) 微量の炭化粒子・焼土粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。
- 12 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の焼土粒子(ϕ 1~4mm大)・炭化粒子(ϕ 1~10mm大)を含む。
- 13 暗灰黄色シルト質土(2.5Y6/2) 微量の焼土粒子(ϕ 1~4mm大)を含む。
- 14 にぶい黄色シルト質土(2.5YR6/3) 微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)・焼土粒子(ϕ 1~10mm大)を含む。



第125図 V区41号住居と出土遺物

貯蔵穴 掘方の調査で北東と南西隅の壁際から浅い窪みを検出した。これらが貯蔵穴である可能性は低い。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から土師器や須恵器の杯(1~3)、カマド埋土から土師器甕(5)や台付甕(4)が出土した。

時代 埋土からは8世紀後半~9世紀前半の遺物が出土しており、11世紀前半に帰属する40号住居との調査での新旧関係と矛盾する。遺構の時代は8世紀後半と想定される。

42号住居(第126・127図、PL.57・393)

グリッド 13L3

主軸方位 N83°W

重複 43号住居を切る。56号住居に近接し、同時存在の可能性はない。

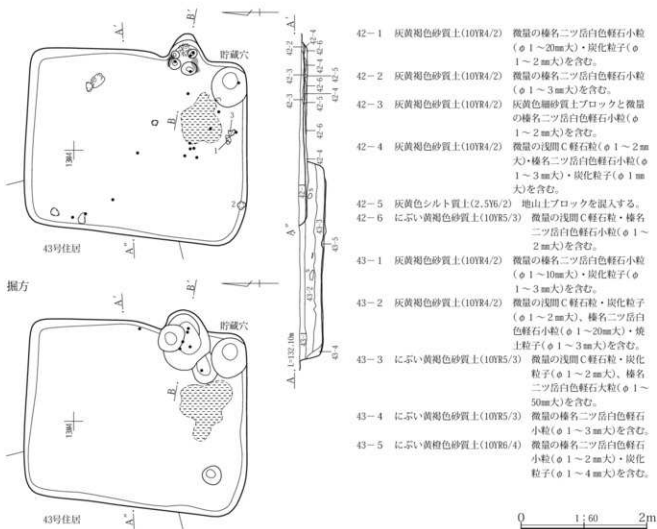
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.51m、短辺は2.92m、深さは0.12m、面積は9.06㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.05mほど薄く貼って平坦な床面を構築している。貯蔵穴付近から炭化物の広がりを検出した。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築し、南西隅の壁際に長径0.29m、深さ0.21mの円形の小ピットを検出した。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃烧部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃烧部底は平坦で緩やかな勾配で立ち上がる。燃烧部底からは長径0.13~0.26mの小ピット4基が検出された。これらは位置から推定してカマド構築材の痕跡の可能性はある。燃烧部底で焼土ブロックを検出した。カマド埋土



第126図 V区42号住居

は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.37m、幅0.65m、深さ0.06mである。

貯蔵穴 カマド右側、南東隅の壁際から土坑を検出した。土坑は長径0.65m、短径0.60m、深さ0.23mで、埋土中に長径0.19～0.29mの垂円～垂角礫を多く含む。礫は床面からはみ出して土坑を埋めており、床面と同じ高さには大きな礫が多い。これらの礫は表面に被熱の痕跡を持つものがあり、カマド構築材の可能性が高い。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられるが、住居の廃絶時にカマドの礫が廃棄された可能性が高い。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の碗(1)や灰釉陶器の碗(2)、羽

釜(3)が出土した。出土遺物は9世紀後半～10世紀内に年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀第1四半期。

43号住居(第126・128・129図, PL.58・394)

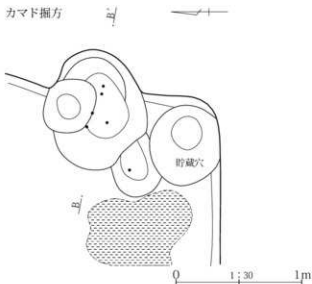
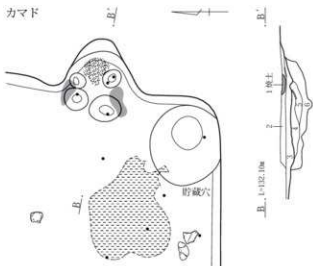
グリッド 13M3

主軸方位 N77°E

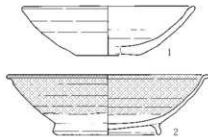
重複 42号住居に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で北部は攪乱により失われている。長辺は3.90m+、短辺は3.30m、深さは0.43m、検出された最大の面積は9.62㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含むふい黄褐～灰黄褐色砂



- 1 ふい褐色砂質土(7.5YR5/3) 焼土中心部。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1～2mm大)・焼土を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(ϕ 1～2mm大)、種名ニツ岳白色軽石小粒・焼土粒子(ϕ 1～3mm大)を含む。
- 4 灰黄色シルト質土(2.5Y6/2) 微量の焼土粒子・炭化粒子(ϕ 1～2mm大)を含む。(地山土をカマドに利用した土が崩壊したもの)
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 焼土粒子(ϕ 1～5mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の焼土と微量の浅間C軽石粒(ϕ 1～2mm大)を含む。



第127図 V区42号住居と出土遺物

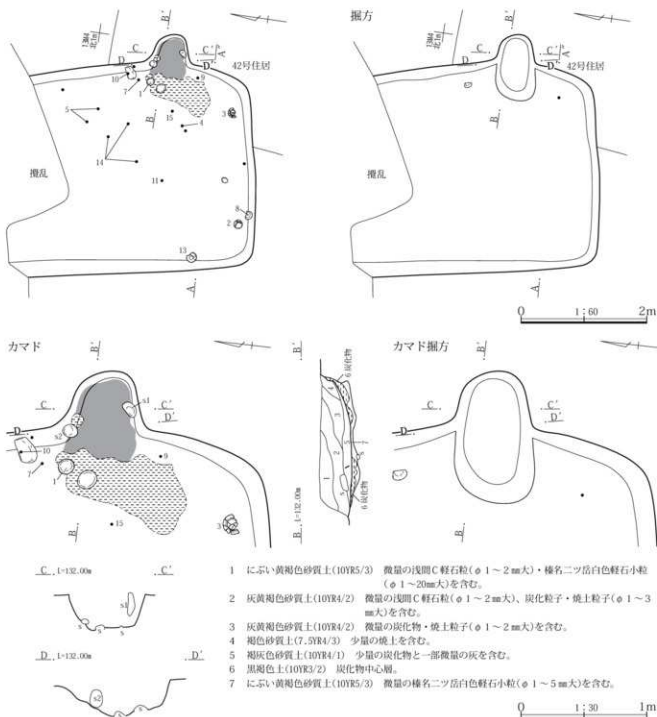
質土からなり、水平に成層している。

床面 ニツ岳の白色軽石を含むいぶい黄褐色砂質土を0.03mほど薄く貼って平坦な床面を構築している。焚口付近から炭化物和硬化面の広がりを検出した。

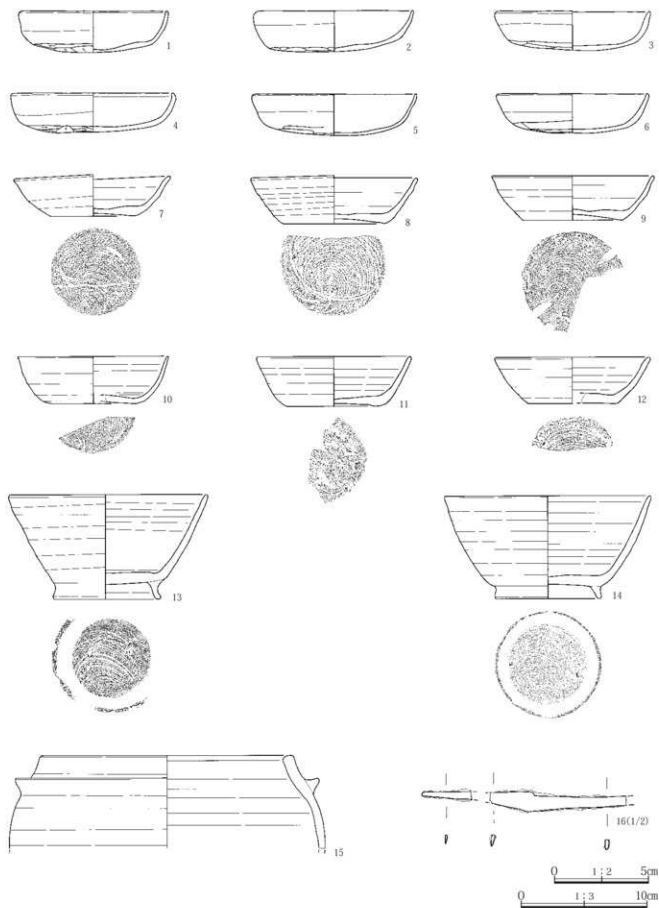
掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を極めて浅く掘り込んで構築している。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築して

いる。燃焼部底は平坦で、奥壁はやや急な勾配で立ち上がる。燃焼部左右の壁には長径0.14~0.18mの垂円礫S1・2が埋め込まれており、これらはカマド構築材と考えられる。燃焼部底からは灰や焼土ブロックが検出され、厚さ0.04mの炭化物が検出された。カマド埋土は灰黄褐~褐色砂質土が成層し、下位ほど褐色系堆積物が顕著である。カマドは長さ0.70m、幅0.55m、深さ0.24mである。貯蔵穴は検出されなかった。



第128図 V区43号住居



第129図 V区43号住居の出土遺物

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面及び床面付近から多くの遺物が出土した。床面からは土師器の杯(1~4)、須恵器の杯(7・8・10)や椀(13・14)、刀子(16)、床面付近からは土師器の杯(5)須恵器の杯(9・11)、埋土から羽釜(15)、カマド埋土から土師器の杯(6)が出土した。

時代 平安時代9世紀第1四半期。

44号住居(第130図、PL.59・394)

グリッド 13N3

主軸方位 N87°W

重複 7・8号溝に切られる。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸方形を呈すると想定される竪穴住居で、攪乱により北部の大部分が失われている。長辺は3.33m、短辺は1.54m+、深さは0.45m、

検出された最大の面積は2.73㎡である。

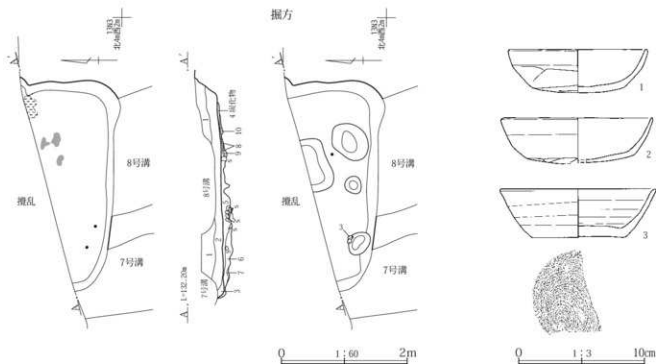
埋土 浅間Cテフラの軽石や二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなり成層している。

床面 二ツ岳の白色軽石を含むにぶい黄褐色砂質土を0.10~0.15mほど厚く貼って床面を構築している。焚口付近から灰や炭化物和硬化面の広がりを検出した。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築しており、東北東から西南西方向に掘方埋土は薄くなる。南壁際からは長径0.36~0.69m、短径0.28~0.49m、深さ0.04~0.15mの浅い円形の窪み3基を検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁に位置すると想定されるが、ほとんどが攪乱によって失われており、焚口付近の床面を残すのみである。カマドは長さ0.35m+、幅0.12m+、深さ0.35mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 主柱穴と考えられる柱穴は検出されなかった。床



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子・焼土粒子(φ1~3mm大)、榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)・榛名二ツ岳白色軽石(φ1~30mm大)・炭化粒子(φ1~20mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4) にぶい黄褐色砂質土中心。微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)を含む。
- 4 黒褐色砂質土(10YR3/1) 炭化物中心層。微量の焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 5 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~5mm大)を含む。
- 6 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒(φ1mm大)・榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)・礫(φ1~4mm大)を含む。
- 7 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。
- 8 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 9 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)・礫(φ30mm大)を含む。
- 10 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4) 微量の焼土粒子(φ1mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。

第130図 V区44号住居と出土遺物

面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。掘方で検出された南壁際の浅い窪みは、補助的な柱穴の痕跡になる可能性は少ないものと考えられる。

遺物 埋土から土師器の杯(1・2)、掘方から須恵器の杯(3)が出土した。出土遺物は8世紀後半～9世紀内に年代幅を有する。

時代 奈良時代8世紀後半から平安時代9世紀第1四半期。

45号住居(第131・132図、PL.59・394)

グリッド 13L18

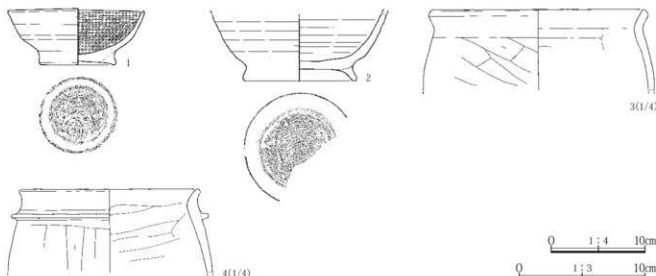
主軸方位 N87°W

重複 なし。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸方形を呈すると想定される竪穴住居で、掘乱により北部の大部分が失われている。長辺は2.95m、短辺は1.15m+、深さは0.36m、検出された最大の面積は2.84m²である。



第131図 V区45号住居



第132図 V区45号住居の出土遺物

埋土 浅間Cテフラの軽石やニツ岳の白色軽石を含む暗灰黄～灰黄褐色砂質土からなり成層している。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む暗灰黄～灰黄褐色シルト質土を0.05mほど薄く貼って床面を構築している。焚口付近から炭化物や硬化面の広がりを検出した。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。南壁際からは長径0.75～0.88m、短径0.44～0.55m、深さ0.10～0.15mの浅い壺んだ円～方形の窪み5基を検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は平坦で、奥壁は緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部の奥壁には長径0.15～0.19mの垂角礫S1・2の2点が埋め込まれており、これらはカマド構築材と考えられる。燃焼部底からは炭化物の広がりが検出された。カマド埋土は灰黄褐色砂質土が成層し、長径0.18～0.40mの円～垂円礫や土器片が多く含まれる。焚口付近の床面からも垂円礫が出土しており、これらはカマドの崩落に伴って移動したカマド構築材の可能性もある。カマドは長さ0.83m、幅0.40m+、深さ0.23mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 主柱穴と考えられる柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竅穴住居と想定される。掘方で検出された南壁際の浅い窪みは、形状から補助的な柱穴の痕跡になる可能性は極めて少ないものと考えられる。

遺物 床面から土師器の甕(3)、カマド使用面から羽釜(4)、埋土から黒色土器の椀(1)、掘方から須恵器の椀(2)が出土した。出土遺物は9世紀前半～10世紀内に年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀後半。

46号住居(第133・134図、PL.60・394)

グリッド 13K18

主軸方位 N87°W

重複 8号溝を切る。

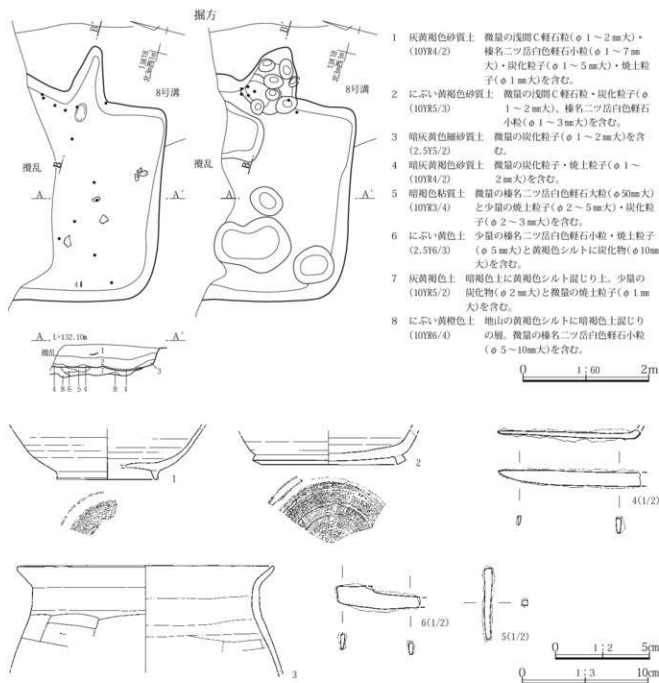
形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸方形を呈する竅穴住居で、攪乱により北部が失われている。長辺は3.40m+、短辺は2.05m+、深さは0.42m、検出された最大の面積は4.87㎡である。

埋土 浅間Cテフラの軽石やニツ岳の白色軽石を含むふい黄褐～灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色土を0.13mほど厚く貼って平坦な床面を構築している。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。南西部からは長径0.52～1.20m、短径0.40～0.61m、深さ0.10～0.20mの浅い円～壺んだ円形の窪み3基を検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置すると想定される。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は平坦で、奥壁は約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部の掘方からは長径0.24～0.38m



第133図 V区46号住居と出土遺物

の小ピットが多く検出された。カマド埋土は灰黄褐色砂質土が成層し、長径0.24mの垂円礫が含まれる。カマドは長さ1.00m、幅0.60m、深さ0.31mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 主柱穴と考えられる柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。掘方で検出された南西隅壁際の浅い窟みは、形状から補助的な柱穴の痕跡になる可能性は少ないと考えられる。

遺物 埋土から須恵器の椀(1)や壺(2)、土師器の裏

(3)、刀子(4)が出土した。出土遺物は8世紀前半~9世紀前半に年代幅を有する。

時代 平安時代9世紀。

47号住居(第135図、PL.61・394)

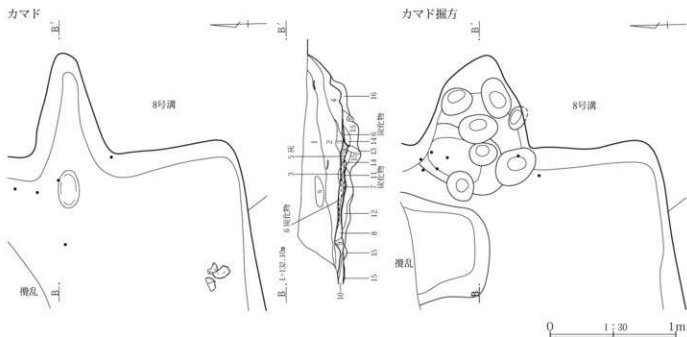
グリッド 13 I 4

主軸方位 N73°E

重複 48・74号住居を切る。

形状と規模 北西~南東方向に長軸を有し、隅丸正方形

第4章 第2面の遺構と出土遺物



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)、榛名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~5mm大)・焼土粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の炭化粒子(ϕ 1~3mm大)・焼土粒子(ϕ 1~20mm大)を含む。
- 3 灰褐色土(7.5YR5/2) 少量の焼土粒子(ϕ 1~5mm大)と微量の炭化物を含む。
- 4 灰黄褐色土(10YR6/2) 微量の榛名二ツ岳白色軽石・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。粘性やや強。=天井崩落土
- 5 青灰色土(5B6/1) 灰中心層。微量の焼土粒子(ϕ 1~3mm大)・炭化物を含む。(支脚柱に灰のみ流入)
- 6 黒色土(10YR2/1) 炭化物中心層。炭化物・灰層。少量の焼土粒子(ϕ 1~5mm大)を含む。=使用面1
- 7 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物中心層。多量の炭化物と少量の焼土粒子(ϕ 1~5mm大)を含む。=使用面1・2の間
- 8 灰黄褐色粘質土(10YR5/2) 少量の焼土粒子(ϕ 1~5mm大)と微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。=天井崩落土1・2間
- 9 褐色粘質土(10YR6/1) 微量の焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。=天井崩落土1・2間
- 10 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量の焼土粒子(ϕ 5~10mm大)・炭化粒子(ϕ 2~3mm大)を含む。=2面使用面直上
- 11 黒色土(10YR2/1) 炭化物・灰層。微量の焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。=使用面2
- 12 褐色粘質土(10YR6/1) 少量の榛名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 5~10mm大)を含む。
- 13 褐色土(10YR5/1) 多量の灰粒と少量の焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。=支脚部掘方(中心はS面より南か?)
- 14 棕色土(2.5YR7/6) 焼土。シルト質土混じり粘質土の焼成変化。
- 15 にぶい黄褐色土(10YR6/3) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 2~3mm大)・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 16 浅黄色土(2.5Y7/3) 地山のシルト中心層。微量のややくすんだ色調の榛名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 5mm大)を含む。

第134図 V区46号住居

を呈する竪穴住居である。長辺は3.30m、短辺は2.95m、深さは0.14m、面積は8.71㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 にぶい黄褐～灰黄色砂質土を0.15mほど厚く貼って床面を構築している。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。南西隅の壁際からは長径0.79m、短径0.73m、深さ0.18mの円形の窪みを検出した。

カマド 東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部下の掘方のみが検出された。カマド掘方埋土は灰褐～暗灰

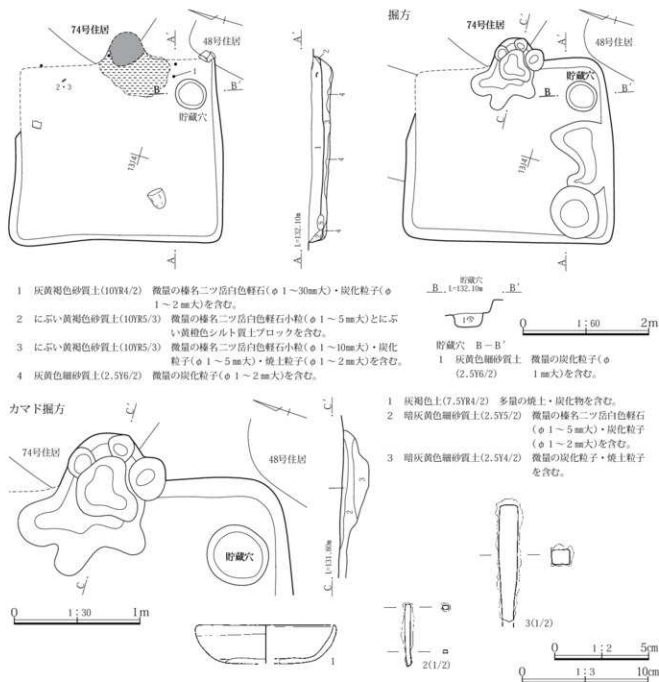
黄色砂質土からなる。カマドは長さ0.55m、幅0.85mである。

貯蔵穴 カマド右側、南東隅の壁際から土坑を検出した。土坑は直径0.51m、深さ0.23mである。土坑は位置と形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 主柱穴と考えられる柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面付近から土師器の杯(1)、埋土から鉄製品(2・3)が出土した。

時代 10世紀前半に帰属する48号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代9世紀第2四半期と想定される。



第135図 V区47号住居と出土遺物

48号住居(第136・137図, PL.61・62・394)

グリッド 1313

主軸方位 N76°W

重複 47号住居、37・101号土坑に切られる。

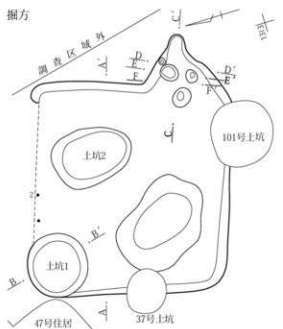
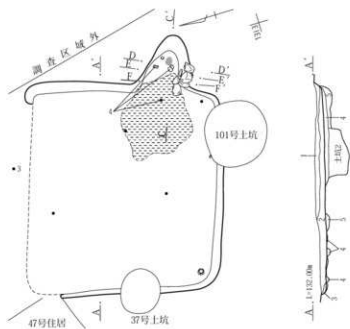
形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.37m、短辺は3.22m、深さは0.25m、面積は9.45㎡である。

埋土 ニッ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 南西部は灰黄色砂質土を0.12mほど厚く貼り、北

西部は床を削り出して平坦な床面を構築している。

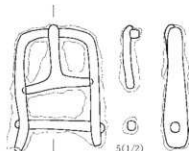
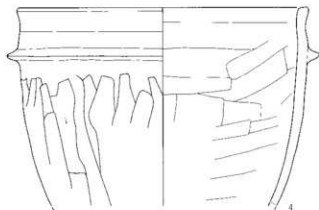
掘方 XII・XII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。北西隅の壁際からは直径1.00m、深さ0.11mの浅い円形の土坑1、中央北東寄りからは長径1.27m、短径0.91m、深さ0.36mの楕円形の土坑2、北西部からは長辺1.62m、短辺1.05m、深さ0.05mの歪んだ方形の窪みを検出した。カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は平坦で、奥壁は垂直に近い勾配で立ち



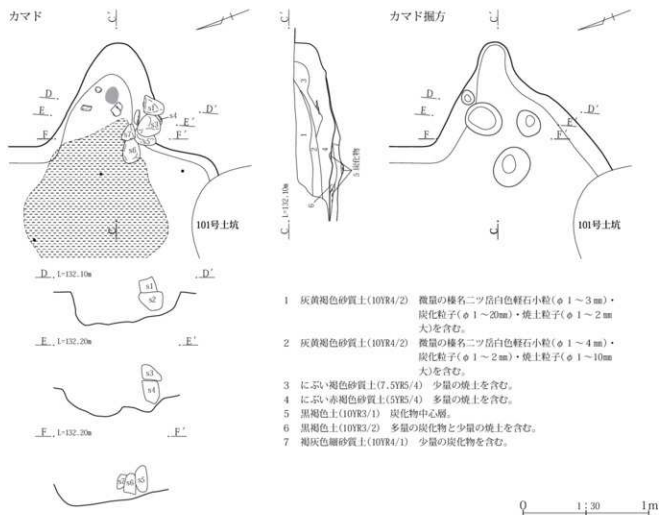
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)、炭化粒子・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒・焼土粒子(φ1~2mm大)、炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅圓C軽石粒(φ1~2mm大)・棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1mm大)・小円礫(φ20~50mm大)を含む。



- 土坑1 B-B'
- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
 - 2 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量のにぶい黄褐色シルト質土ブロックを含む。



第136図 V区48号住居と出土遺物



第137図 V区48号住居

上がる。燃焼部右壁には長径0.12~0.21mの垂円~垂角礫S1~7の7個が折り重なって埋め込まれており、右壁に沿って配列する。これらはカマド構築材と考えられる。燃焼部底からは炭や焼土ブロックの広がりが出た。カマド埋土は灰黄褐色にぶい褐色砂質土が成層する。最下位には赤褐色焼土ブロックが層状に堆積し、これは崩落したカマド天井部の焼土帯と考えられる。カマドは長さ0.98m、幅0.90m、深さ0.28mである。貯蔵穴は検出されなかった。掘方の調査で検出した101号土坑は、竪穴の南壁から位置がずれるが、48号住居の貯蔵穴であった可能性は少ない。

柱穴 主柱穴と考えられる柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の碗(3)、羽釜(4)、掘方から黒色土器の碗(2)、埋土から土師器の杯(1)や鉄製の鉋具(5)が出土した。出土遺物は8~10世紀内に年代幅を有

する。

時代 9世紀に帰属する47号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀前半と想定される。

49号住居(第138図、PL.63・394)

グリッド 1314

主軸方位 N59°E

重複 74号住居、115号土坑を切る。

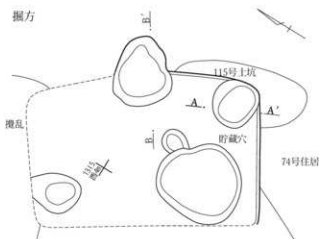
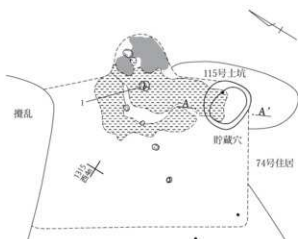
形状と規模 北西~南東方向に長軸を有し、一部の床面と掘方のみが残存する隅丸長方形を呈する竪穴住居と想定される。長辺は3.27m+、短辺は2.50m、検出された最大の面積は8.84㎡である。

床面 灰黄色砂質土を0.05mほど薄く貼り、床面を構築していたものと想定される。焚口付近からは炭化物の広がりが出た。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土や下位の住居埋土を掘り込んで構築している。北隅を除く三方の壁際からは長径0.78~1.38m、短径0.70~1.23m、深さ0.12~0.14mの浅い円形~歪んだ円形の窪み3基を検出した。

カマド 北東壁のほぼ中央に位置する。カマドの燃焼部

は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。カマド掘方埋土にはふい褐色砂質土が成層する。カマド掘方埋土は、床面付近で薄い焼土や炭で覆われている。これらは貯蔵穴の埋土も覆うことから、カマドが失われ貯蔵穴も埋没した時期にもたらされたものと考えられる。カマドは長さ0.68m+、幅1.06m+である。



貯蔵穴 A-A'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の椋名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。灰黄色細砂質土をラミナ状に混入する。
- 2 にふい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の椋名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。



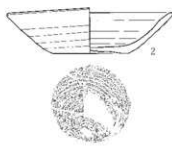
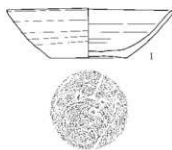
0 1:60 2m

カマド掘方



- 1 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物中心層。
- 2 にふい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子(φ1mm大)を含む。
- 3 にふい黄褐色砂質土(10YR4/3)
- 4 にふい黄褐色砂質土(10YR5/3)
- 5 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 6 にふい黄褐色土(10YR6/3) 微量の椋名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第138図 V区49号住居と出土遺物

貯蔵穴 カマド右側、南東隅の壁際から土坑を検出した。土坑は長径0.77m、短径0.70m、深さ0.22mである。土坑は位置と形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 主柱穴と考えられる柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマドから須恵器の杯(1)、埋土から須恵器の杯(2)や緑釉陶器の椀(3)が出土した。

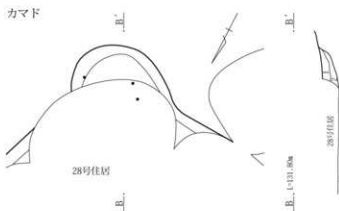
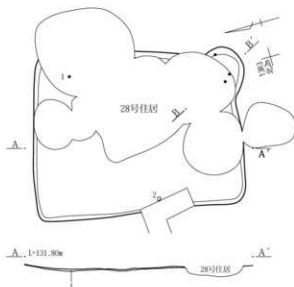
時代 10世紀に帰属する74号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代9世紀後半に想定される。

52号住居(第139図, PL.394)

グリッド 13Q3

主軸方位 N79°W

重複 28号住居に切られる。



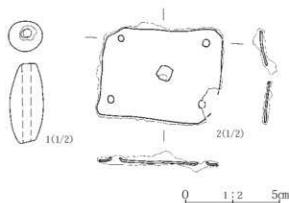
形状と規模 南北方向に長軸を有し、掘方のみが残存する隅丸長方形を呈する竪穴住居と想定される。長辺は3.33m、短辺は2.73m、深さ0.11m、面積は7.63m²である。

掘方 床面は失われており、VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。掘方埋土は灰黄褐色砂質土で厚さは0.03mである。

カマド 北東隅に位置すると想定され、燃焼部は壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。カマド掘方埋土は焼土ブロックを含む灰黄褐色砂質土である。カマドは長さ0.48m、幅0.78m、深さ0.13mである。

遺物 埋土から土鍾(1)や鉄板(2)が出土した。

時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と想定され、平安時代10世紀に帰属する28号住居よりも古いので10世紀以前である。



- 1 灰黄褐色砂質土(10TR4/2) 微量の権名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。

0 1:60 2m

- 1 灰黄褐色砂質土(10TR4/2) 微量の焼土粒子(φ1~20mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
2 灰黄褐色砂質土(10TR4/2) 微量の焼土粒子(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。

0 1:30 1m

第139図 V区52号住居と出土遺物

53号住居(第140～143図、PL.64・395・396)

グリッド 13R 4

主軸方位 N74° E

重複 43号土坑に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、柱穴と壁の位置から闊丸正方形を呈すると想定される。西部は調査区外に存在する。長辺は5.15m、短辺は4.35m+、深さは0.55m、検出された最大の面積は18.57㎡の竪穴住居である。

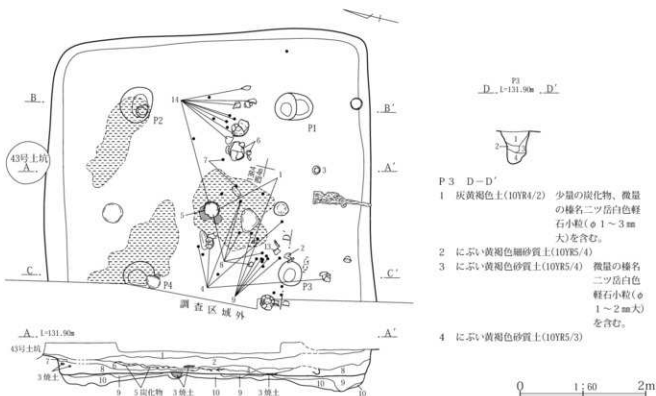
埋土 下位より浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐～にぶい黄褐色砂質土が水平に成層し、竪穴を埋積している。竪穴の基底部には、にぶい黄褐色砂質土が周縁から傾斜して堆積し、炭化材を含む炭化物が層状にこれを覆い、すり鉢状に竪穴を埋めている。床面上位の埋土は黒褐色

の炭化物を覆って橙色火山灰のブロック(Hr-FA)やニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 浅間Cテフラの軽石を含むにぶい黄褐色砂質土を0.05mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂層を掘り込んで構築している。四周の壁は幅0.65～0.80m、深さ0.10mほどの溝状の窪みが周回している。

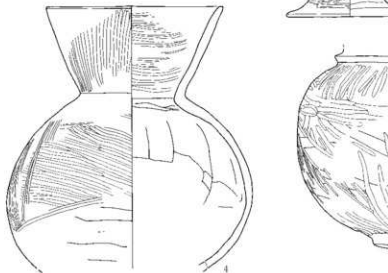
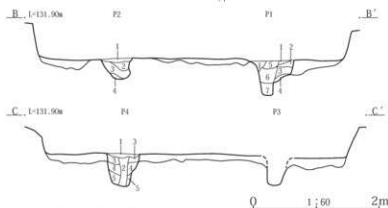
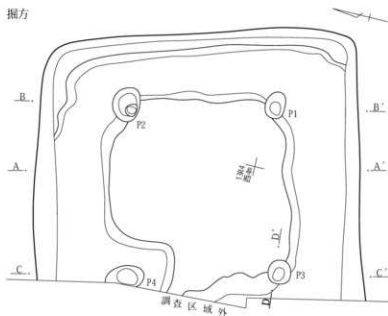
竪 中央のやや西寄りから長径0.39m、短径0.18m+の焼土帯と土器が出土した。周囲には長径0.38mの円礫が置かれ、長径1.16m、短径1.00mの範囲に灰と炭化物の広がりを検出した。焼土や灰の下位には灰黄褐色砂質土がみられ、粘土等は検出されなかった。焼土帯は位置と形状から竪と考えられ、床面に置かれた土器は器台とし



- 1 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1～5mm大)・極名ニツ岳白色軽石(φ1～30mm大)・炭化粒子(φ1～3mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1～5mm大) 1層上より多い・炭化粒子(φ1～10mm大)を含む。
- 3 橙色土(7.5YR6/6) 焼土中心層。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～4mm大)・焼土粒子(φ1～5mm大)・炭化粒子(φ1～10mm大)を含む。
- 5 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の炭化物・炭化粒子(φ1～10mm大)を含む。
- 7 黒褐色土(10YR3/2) 少量の炭化物を含む。
- 8 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1～8mm大) 2層上より多い・炭化粒子(φ1～30mm大) 1層上より多い)を含む。縄文前期の土器を含む。
- 9 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1～2mm大)・炭化物・炭化粒子(φ1～3mm大)を含む。
- 10 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。

第140図 V区53号住居

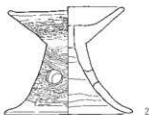
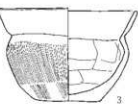
掘方



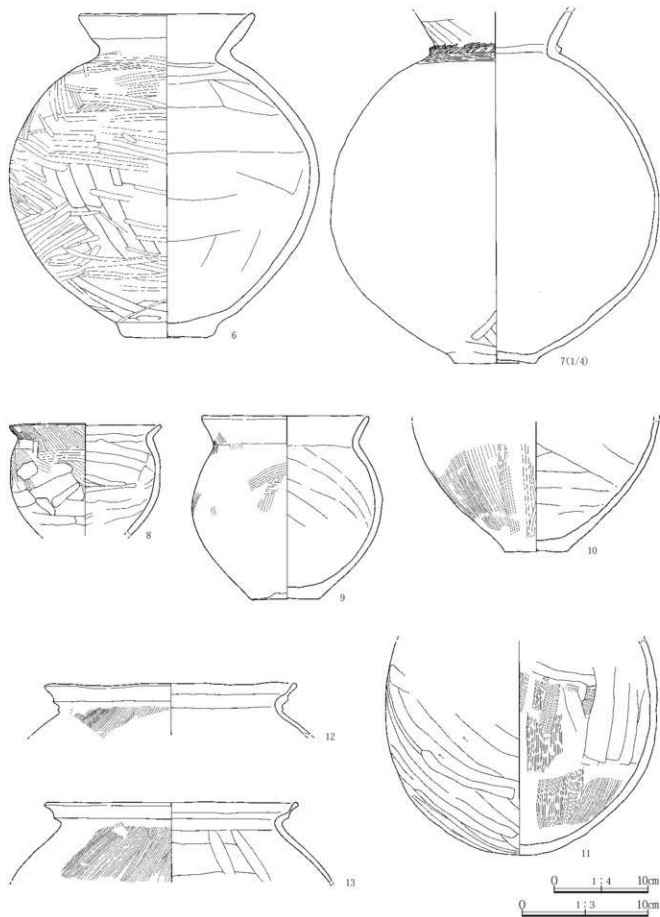
- P 1 B—B'
- 1 にぶい・黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒・炭化物を含む。
 - 2 にぶい・黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒を含む。
 - 3 にぶい・黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒を含む。
 - 4 にぶい・黄褐色細砂質土(10YR5/4) 微量の稀な二房白色軽石小粒(φ1~2mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
 - 5 にぶい・黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の稀な二房白色軽石小粒(φ1~2mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
 - 6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
 - 7 灰黄褐色細砂質土(10YR4/2)

- P 2 B—B'
- 1 にぶい・黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)を含む。
 - 2 にぶい・黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の炭化物を含む。
 - 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)を含む。
 - 4 にぶい・黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒を含む。

- P 4 C—C'
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
 - 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 柱穴痕と考えられる。
 - 3 にぶい・黄褐色土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒(φ1~4mm大)を含む。
 - 4 にぶい・黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)を含む。
 - 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)を含む。



第141図 V区53号住居と出土遺物



第142図 V区53号住居の出土遺物(1)

て転用されたものと考えられる。

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方の調査で主柱穴のピット4基を検出した。

P1は長径0.44m、短径0.34m、深さ0.52m。

P2は長径0.50m、短径0.45m、深さ0.48m。

P3は長径0.50m、短径0.40m+、深さ0.52m。

P4は長径0.39m、短径0.36m、深さ0.48m。

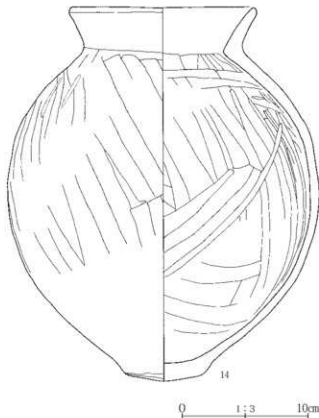
柱間は梁行のP1・P2が2.30m、P3・P4が2.40m。

桁行のP1・P3が2.68m、P2・P4が2.66mである。

なお、柱穴にはP1とP4に柱痕が認められ、掘方は浅間Cテフラの軽石を含むにぶい黄褐色土が成層している。

遺物 床面から器台(2)や土師器の小型甕(8・9)、甕(14)、壺(6・7)、埴(4)、床面付近から土師器の鉢(3)、器台(1)、壺(5)、台付甕(13)が出土した。

時代 古墳時代4世紀。



第143図 V区53号住居の出土遺物(2)

56号住居(第144・145図、Pl.65・396)

グリッド 13L3

主軸方位 N87°E

重複 82号土坑、12号溝に切られる。42号住居と至近距離にあり同時存在の可能性はない。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.57m、短辺は4.05m、深さは0.38m、面積は15.08㎡である。

埋土 下位よりにぶい黄褐色シルト～砂質土、二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が成層し、竪穴を埋積している。

床面 黒褐～灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。中央部で炭化物の広がりを検出した。

掘方 Ⅱ・Ⅲ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。西壁の北西隅と南西隅から長径1.15～1.20m+、短径0.60～1.05m+、深さ0.05～0.17mの浅い不定形の窪み、カマド前から長径1.00m、短径0.89m、深さ0.06mの浅い円形の窪みを検出した。

周溝 掘方の調査で西壁の中央にのみ検出した。最大の上幅は0.27m、最少の底幅は0.05m、深さは0.03～0.09mである。

カマド 東壁の東南隅寄りに位置する。カマドの燃焼部

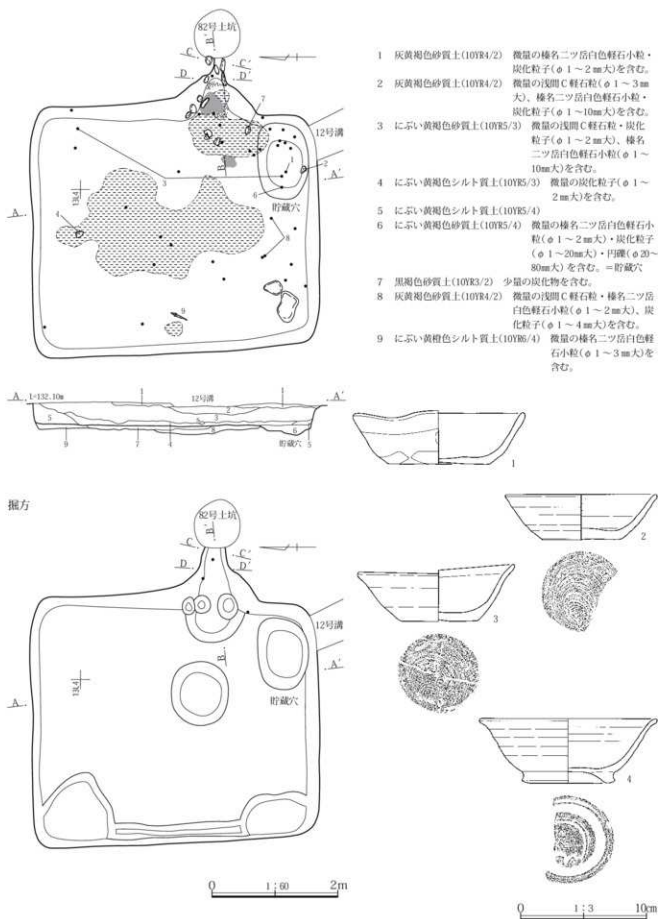
は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は緩やかに傾斜し約45°の勾配で立ち上がり、煙道に接続する。焚口に近い燃焼部左壁には長径0.10～0.15mの垂円礫4点が出土し、これらはカマド構築材の可能性がある。煙道左右の壁には長径0.14～0.18mの垂円礫S1～4の4点が据えられており、これらは煙道壁の構築材である。燃焼部底は焼土や炭化物の広がりが検出された。カマド埋土は灰黄褐色砂質土や黒褐色砂質土からなる。煙道を含むカマドは長さ0.95m、煙道長は0.42m、幅0.68m、深さ0.39mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径1.18m、短径0.79m、深さ0.21mの土坑を検出した。底から0.06～0.20mで土師器の杯(1)、須恵器の杯(2)、椀(3・6)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

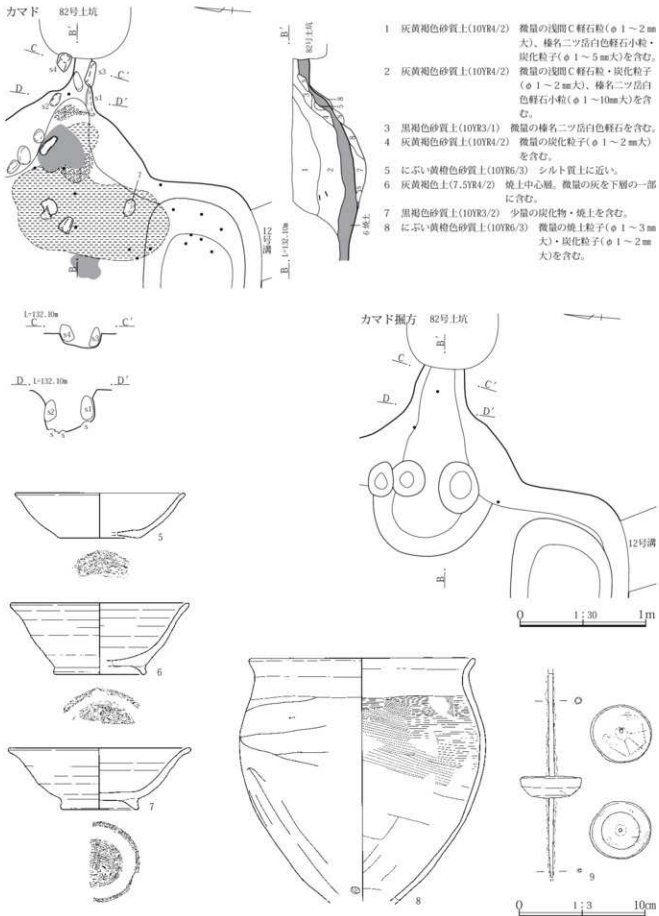
柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(7)や土師器の甕(8)、床面付近から須恵器の椀(4)が出土した。

時代 平安時代9世紀後半。



第144図 V区56号住居と出土遺物(1)



第145図 V区56号住居と出土遺物(2)

58号住居(第146~148図、PL.66・397)

グリッド 13Q2

主軸方位 N74°E

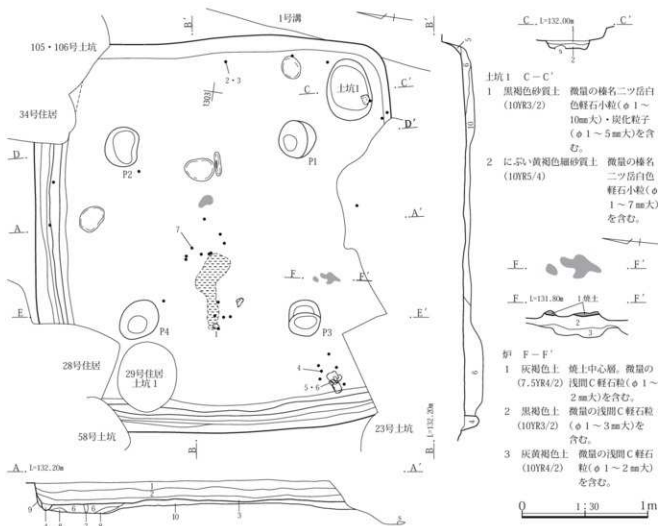
重複 28・29・34号住居、1号溝、23・58・105・106号土坑に切られる。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、柱穴と壁の位置から隅丸正方形を呈すると想定される。北東・北西・南西隅は上位の遺構群によって失われている。長辺は6.20m、短辺は5.74m、深さは0.39m、検出された最大の面積は32.04m²で規模の大きな竪穴住居である。

埋土 下位より浅間Cテフラの軽石を含むふい黄褐色砂質土が成層し、灰黄褐色土が堆積している。竪穴の基底部には、ふい黄褐色土が周縁から傾斜して堆積している

床面 浅間Cテフラの軽石を含むふい黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。南東隅の壁際から長径0.96m、短径0.68m、深さ0.11mの歪んだ楕円形を呈する土坑1を検出した。位置や形状から貯蔵穴の可能性はある。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂～砂礫層を掘り込んで構築し



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量の浅間C軽石粒(φ1~5mm大)と微量の極名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~15mm大)を含む。
- 2 にふい黄褐色土(10YR4/3) 少量の浅間C軽石粒(φ1~15mm大)を含む。粘性やや有。
- 3 にふい黄褐色土(10YR5/3) 少量の浅間C軽石粒(φ1~10mm大)と微量の炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 4 にふい黄褐色土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1~5mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 5 にふい黄褐色土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)を含む。
- 6 褐灰色砂質土(10YR6/1) 微量の浅間C軽石粒(φ1~7mm大)・炭化粒子(φ1~10mm大)を含む。
- 7 にふい黄褐色砂質土(10YR6/3)ブロックを混入する層
- 8 にふい黄褐色細砂質土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒(φ1~3mm大)を含む。
- 9 にふい黄褐色細砂質土(10YR6/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)を含む。
- 10 にふい黄褐色細砂質土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒(φ1~5mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。

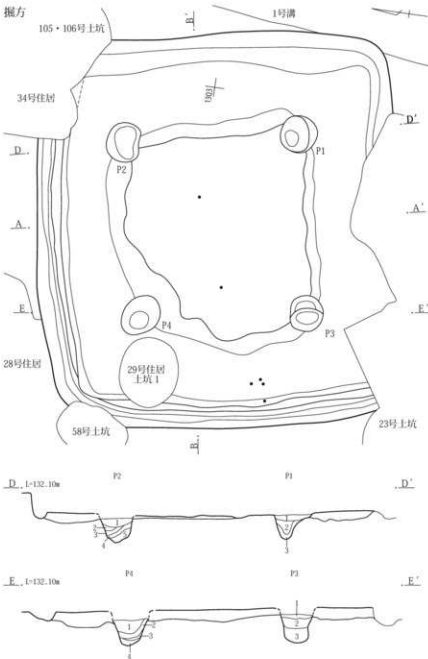
第146図 V区58号住居(1)

ている。四周の壁沿いは幅0.66~0.95m、深さ0.12mほどの溝状の窪みが周囲している。

周溝 掘方の調査で検出し、北~西壁の壁際に周囲する。また東壁と南東隅寄りの南壁にも溝状の窪みが検出され、周溝の可能性がある。周溝の最大の上幅は0.30m、

最少の底幅は0.12m、深さは0.04~0.06mである。

が P 3 の南東に長径0.34mの焼土ブロックを、中央のやや東寄りから長径0.26m、短径0.18mの焼土帯を検出した。焼土帯の周囲には長径0.46mの円礫と長径0.38mの棒状円礫が置かれ、棒状円礫の表面は長径0.15mの範



P 1 D-D'

- 1 灰黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ 10YR4/2) 1~3mm大を含む。
- 2 にぶい黄褐色細砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ 1~2mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色細砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ 1mm大)を含む。

P 2 D-D'

- 1 灰黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ 10YR4/2) 1~3mm大を含む。
- 2 灰黄褐色細砂質土 浅間C軽石粒をほとんど含まないブロックの層。
- 3 褐灰色土 微量の浅間C軽石粒(φ 1~10YR4/1) 2mm大を含む。
- 4 灰黄褐色細砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ 1mm大)・炭化粒子(φ 1~2mm大)を含む。
- 5 にぶい黄褐色細砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ 1mm大)を含む。

P 3 E-E'

- 1 灰黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(φ 1~2mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色土 微量の浅間C軽石粒(φ 1mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色細砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ 1~2mm大)を含む。

P 4 E-E'

- 1 褐灰色土(10YR4/1) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(φ 1~3mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色細砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ 1mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色細砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ 1mm大)を含む。
- 4 にぶい黄褐色細砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ 1mm大)を含む。
- 5 褐灰色砂質土(10YR4/1) 微量の浅間C軽石粒(φ 1~7mm大)・炭化粒子(φ 1~10mm大)を含む。

0 1:60 2m

第147図 V区58号住居(2)

団に炭化物が付着している。また焼土帯から0.90~0.21m離れた長径1.22m、短径0.28mの範囲に炭化物の広がりを出した。焼土の下位には黒褐色土がみられ、粘土等は検出されなかった。焼土帯と礫及び炭化物は位置と形状から埴の痕跡と考えられる。

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方の調査で主柱穴のピット4基を検出した。

P 1は長径0.55m、短径0.48m、深さ0.48m。

P 2は長径0.62m、短径0.55m、深さ0.46m。

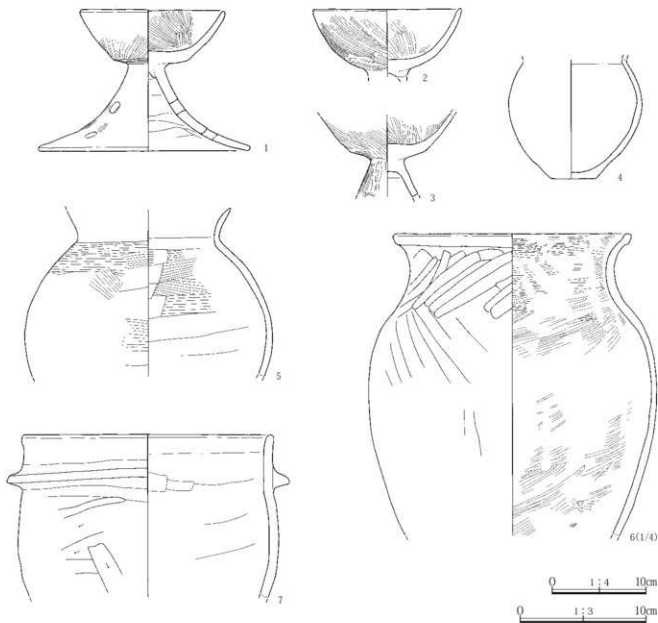
P 3は長径0.58m、短径0.49m、深さ0.60m。

P 4は長径0.70m、短径0.52m、深さ0.58m。

柱間は梁行のP 1・P 2が2.58m、P 3・P 4が2.52m。桁行のP 1・P 3が2.84m、P 2・P 4が2.80mである。なお、柱穴には柱痕が認められず、埋土は浅間Cテプラの軽石を含むにぶい黄褐~褐色土が成層している。

遺物 床面から土師器の高環(1)、甕(5・6)が出土した。床面から羽釜(7)が出土したが、混入遺物か。床面付近から土師器の小型壺(4)、高環(2・3)が出土した。

時代 古墳時代4世紀。



第148図 V区58号住居の出土遺物

59号住居(第149～151図、PL.67・397)

グリッド 3 M20

主軸方位 N82°E

重複 8号溝を切る。6号竪穴と至近距離にある。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する。長辺は3.83m、短辺は2.71m、深さは0.24m、面積は8.75㎡で極小規模の竪穴住居である。

埋土 浅間Cテフラの軽石と二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 にぶい黄褐色砂質土を0.05mほど薄く貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。カマド前と北壁の北東隅と北西隅から土坑3基を検出した。

土坑1は円形を呈し、直径は0.62m、深さは0.24mである。

土坑2は楕円形を呈し、長径は0.85m、短径は0.68m、深さは0.23mである。

土坑3は歪んだ楕円形を呈し、長径は1.17m、短径は0.88m、深さは0.34mである。

カマド 東壁の東南隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は水平で奥壁で急な勾配で立ち上る。燃焼部底は焼土や灰の広がりが検出された。カマド埋土は灰黄褐色砂質土や黒褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.68m、幅0.53m、深さ0.12mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から直径0.34m、深さ0.23mの円形土坑を検出した。底0.16mから須恵器の椀(2)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。



A-A', 1-132.30m

B-B', 貯蔵穴 1-132.12m

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)、炭化粒子(φ1~10mm大)を含む。
- 2 暗黄褐色砂質土(2.5Y4/2) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色細砂質土(10YR5/3) 微量の榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。



土坑1 C-C'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1mm大)を含む。
- 2 黒褐色砂質土(10YR3/2) 微量の浅間C軽石粒・榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)を含む。



土坑2 D-D'

- 1 灰黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)、炭化粒子・焼土粒子(φ1mm大)を含む。
- 2 黒褐色砂質土 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。

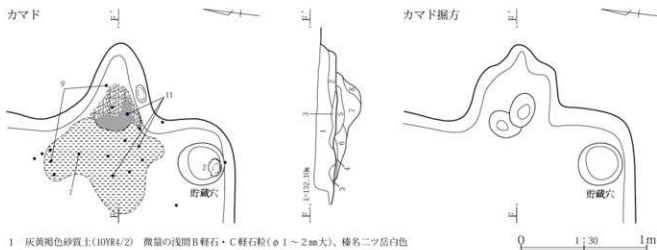
土坑3 E-E'

- 1 灰黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)、榛名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 2 暗黄褐色砂質土 (2.5Y5/2) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。

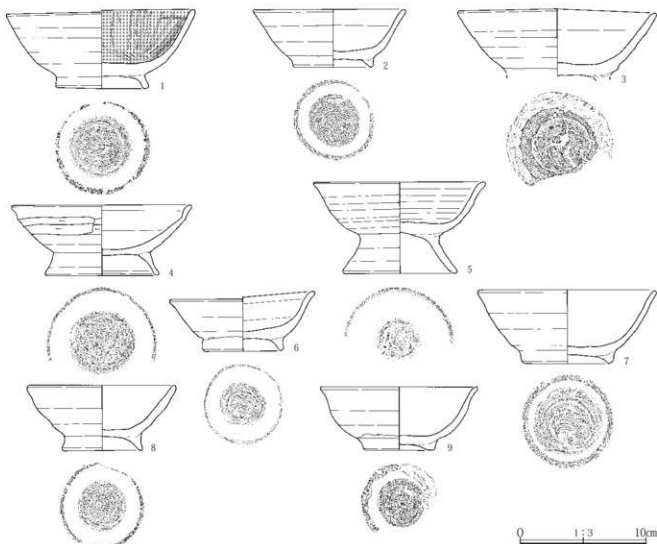
0 1:60 2m

第149図 V区59号住居

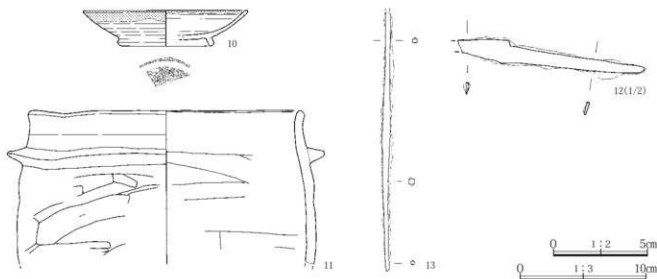
第4章 第2面の遺構と出土遺物



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間B軽石・C軽石粒(φ1~2mm大)、椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~8mm大)・炭化粒子(φ1~5mm大)を含む。
- 2 黄褐色砂質土(2.5Y5/3) 微量の炭化物を含む。
- 3 黒褐色土(10YR3/2) 多量の炭化物と微量の焼土粒子(φ1~10mm大)を含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/2) 少量の炭化物と微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。
- 5 にぶい褐色土(7.5YR5/3) 少量の焼土と微量の炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)、炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 7 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石粒・椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。
- 8 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1mm大)・椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ3mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。



第150図 V区59号住居と出土遺物



第151図 V区59号住居の出土遺物

遺物 カマド燃焼部から焚口、床面の各所から多くの遺物が出土した。床面から黒色土器の椀(1)や須恵器の椀(3～8)、カマド使用面から須恵器の椀(9)、羽釜(11)、埋土から灰軸陶器の皿(10)や刀子(12)が出土した。出土遺物は10世紀中頃に年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀第2・3四半期。

61号住居(第152・153・155図、PL.68・69・396)

グリッド 3 K 20

主軸方位 N76°E

重複 63・70・73号住居を切る。発掘調査時に切合い関係にある60・61号住居として調査したが、資料整理で61号住居に統合した。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.96m、短辺は2.60m、深さは0.21m、面積は12.89㎡である。

埋土 浅間Cテフラの軽石とニツ岳の白色軽石を含むにぶい黄褐～灰黄褐色砂質土からなる。

床面 63・70号住居埋土を削り出して平坦な床面を構築しており、掘方は存在しない。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央北寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は緩やかに傾斜しながら奥壁で立ち上がる。燃焼部左壁には長径0.15～0.28mの垂円礫S 3・4・7・9の4点が据えられており、深いもので掘方埋土に0.14mほど埋め込まれている。同様に燃焼部右壁には長径0.15～

0.34mの垂円礫S 1・2・5・8の4点が据えられており、深いもので掘方埋土に0.22mほど埋め込まれている。これらの礫は燃焼部壁に沿って配列しており、カマド構築材である。燃焼部底中央の左寄りには長径0.20mの垂円礫S 6が据えられており、0.05m埋め込まれている。これは支脚の可能性が高い。燃焼部底から焚口は炭化物の広がりが検出された。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から黒色土器の椀(2)、須恵器の羽釜(3)、土鍾(4)、刀子(5)、埋土から須恵器の椀(1)、石製の紡輪(8)が出土した。

時代 10世紀後半に帰属する63号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀前半と想定される。

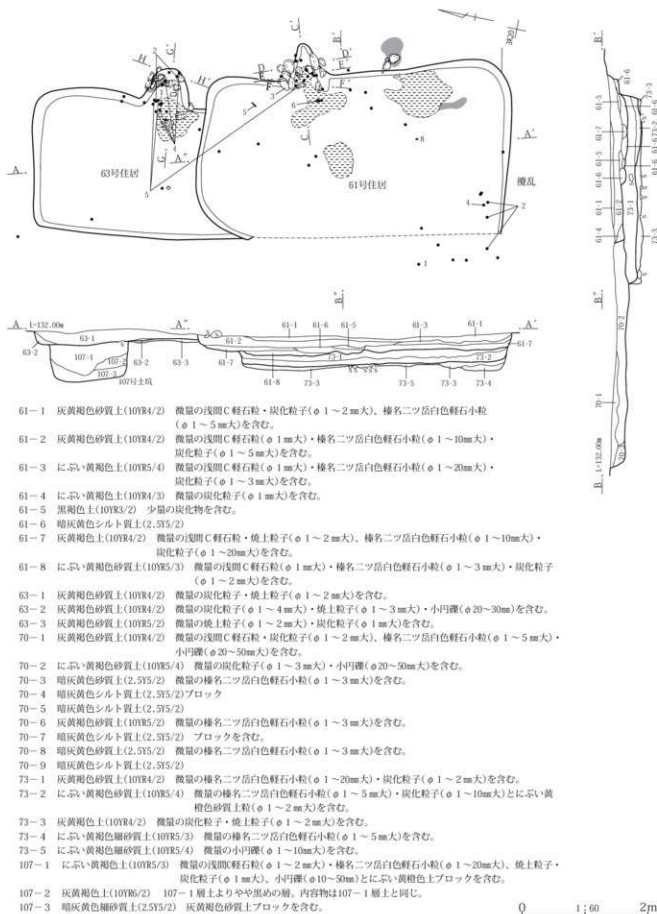
63号住居(第152～154図、PL.72)

グリッド 13 K 1

主軸方位 N81°E

重複 61号住居に切られる。107号土坑を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、南側は61号住居により失われている。長辺は3.40m+、短辺は2.30m、深さは0.27m、検出された最大の面積は6.61㎡である。



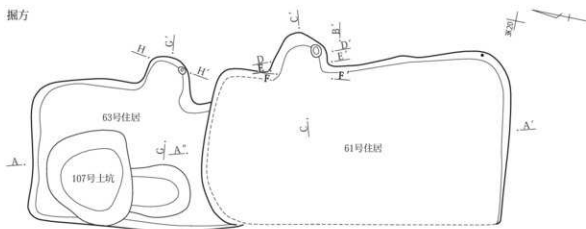
第152図 VEX1-63号住居(1)

埋土 浅間Cテフラの軽石と二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

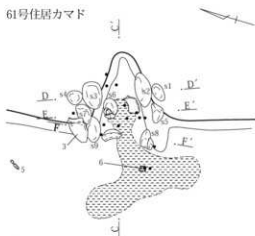
床面 にぶい灰黄褐色砂質土を0.06mほど薄く貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。焚口付近から硬化面の広がりを検出した。

掘方 XII・XII層の灰黄褐色砂礫層を掘り込んで構築し、107号土坑と南壁際で深さ0.03mの浅い窪みを検出した。カマドと貯蔵穴 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃烧部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃烧部底はほぼ水平で奥壁で緩やかな勾配で立ち上がる。

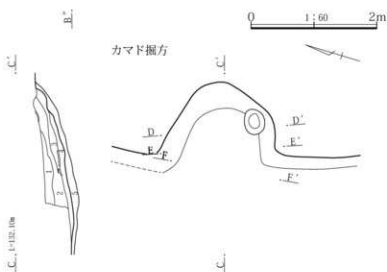
掘方



61号住居カマド



カマド掘方



D, L=132.10m



E, L=132.10m



F, L=132.10m



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の種名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~3mm大)・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の種名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~3mm大)を含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/2) 少量の炭化物を含む。
- 5 灰黄褐色細砂質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。

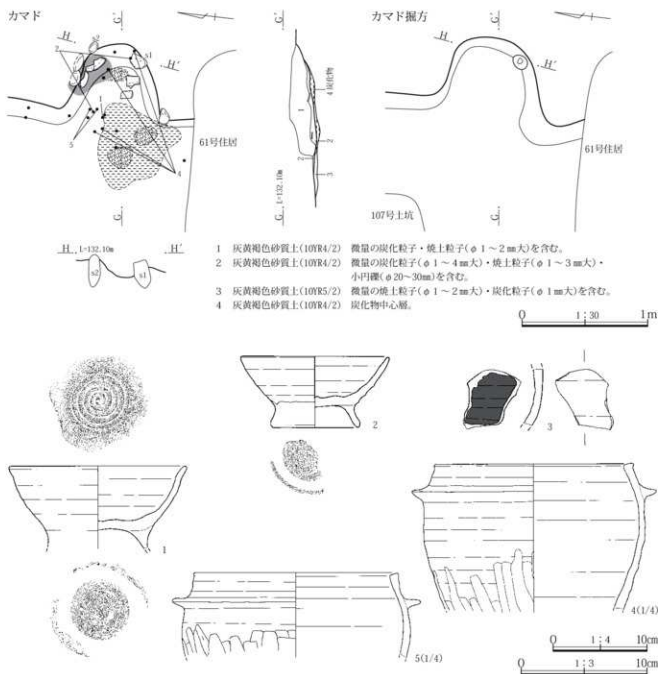
第153図 V区61・63号住居(2)

燃焼部奥壁には長径0.21～0.26mの垂円～垂角礫2点が据えられており、掘方埋土に0.14～0.22mほど埋め込まれている。これらの礫は燃焼部奥壁の左右に配列しており、カマド構築材である。燃焼部底からは焼土ブロック、焚口では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は焼土粒を含む灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.63m、幅0.88m、深さ0.20mである。貯蔵穴は検出されなかった。

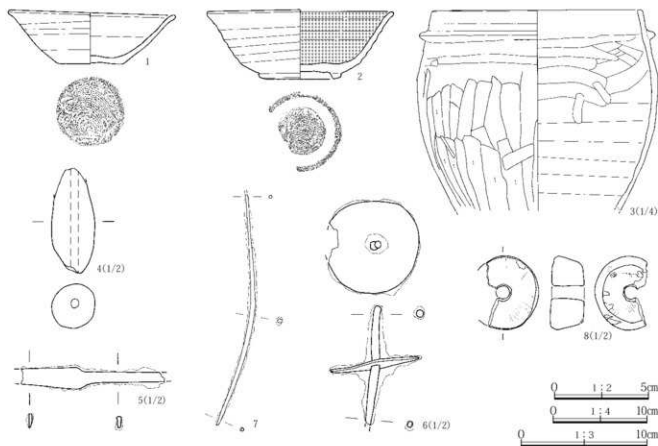
柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマドから須恵器の椀(1・2)、羽釜(4)が出土した。また、カマドの使用面直上から出土した羽釜(5)は、切合い関係にある61号住居のカマド使用面から11cm上の埋土中の遺物と接合した。これは63号住居に帰属する遺物が、61号住居の埋土が堆積する際に移動したものと考えられる。出土遺物は10世紀内に年代幅を有する。

時代 10世紀前半に帰属する61号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀第3四半期と想定される。



第154図 V区63号住居と出土遺物



第155図 V区61号住居の出土遺物

70号住居(第152・156～159図、PL.70・71・398)

グリッド 3 L20

主軸方位 N80°E

重複 61号住居に切られる。73号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.72m、短辺は3.58m、深さは0.15m、面積は16.89㎡である。発掘調査時に切合い関係にある62・70号住居として調査したが、資料整理で70号住居に統合した。

埋土 浅間Cテフラの軽石とニッ岳の白色軽石を含むにぶい黄褐～灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐～暗灰黄色砂質土を0.18mほど厚く貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。

掘方 VII層のニッ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。北西隅の壁際で長径0.79m、短径0.54m、深さ0.14mの楕円形の浅い窪みを、南東部で長径1.50m、短径0.97m、深さ0.08mの歪んだ楕円形の浅い窪みを検出した。焚口付近では直径0.56m、深さ0.14～0.22mの

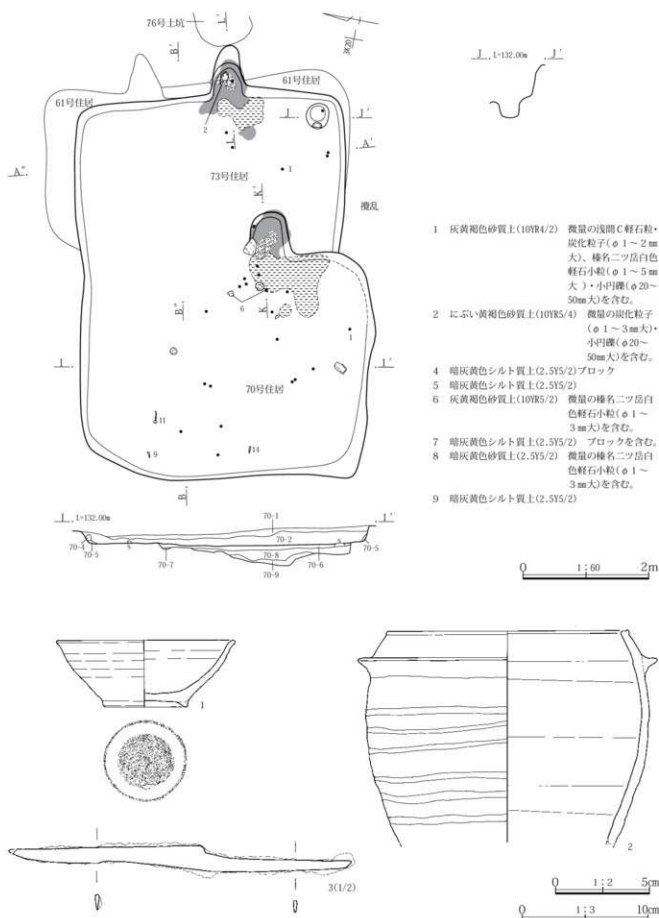
小ピット2基を検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は緩やかに傾きながら立ち上がる。燃焼部左壁には長径0.27mの垂角礫が据えられており、カマド構築材と考えられる。燃焼部底からは焼土や灰、炭化物、焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は焼土粒を含むにぶい灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.70m、幅0.75m、深さ0.20mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(1)灰釉陶器の椀(6)、刀子(9)、床面付近から鉄製紡錘車(11)、埋土から須恵器の椀(2～5)、鉄鎌(10)、掘方から土師器の甕(7)、鉄鎌(8)が出土した。出土遺物は9世紀第4四半期～10世紀前半に年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀第1四半期。



第156図 V区70・73号住居の出土遺物

73号住居(第152・156～158図、PL.80・397)

グリッド 3 K 20

主軸方位 N77° E

重複 61・70号住居、76号土坑に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.31m、短辺は3.08m、深さは0.37m、面積は11.45㎡である。

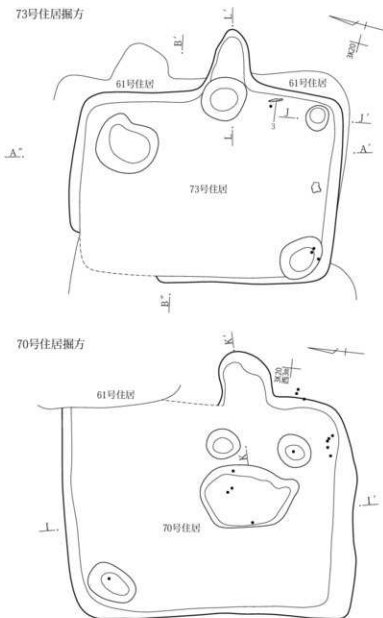
埋土 灰黄色砂質土からなる。

床面 灰黄褐～にぶい黄褐色砂質土を0.05mほど薄く貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込ん

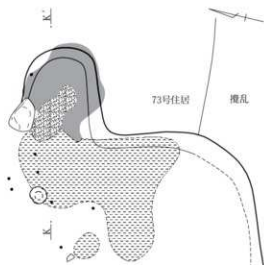
で構築している。北東隅の壁際で長径0.95m、短径0.79m、深さ0.10mの歪んだ円形の浅い窪みを、南西隅の壁際で長径0.60m、短径0.56m、深さ0.10mの歪んだ楕円形の浅い窪みを検出した。

カマド 東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は緩やかに窪み、奥壁は約45°の勾配で立ち上がって煙道に接続する。煙道は底部の一部が残存する。燃焼部底からは焼土や灰の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土が成層し、上半部に長径0.17～0.22mの垂円礫2点を含む。煙道を含まないカマドは長さ0.60m、煙道長は

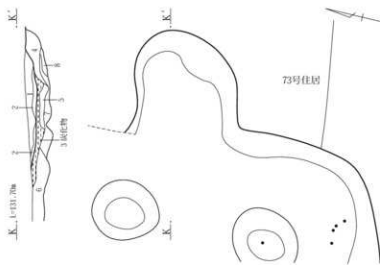


第157図 V区70・73号住居(1)

70号住居カマド

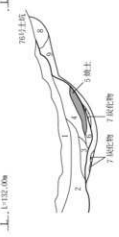
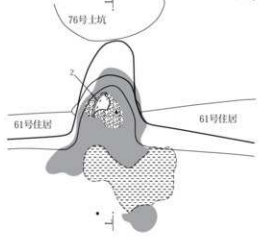


カマド掘方

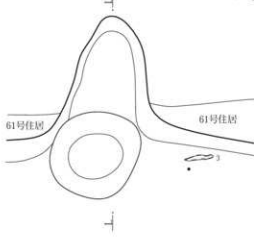


- 1 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子・焼土粒子(φ1~2mm大)、椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・焼土・炭化物を含む。
- 3 黒褐色砂質土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 5 にぶい赤褐色砂質土(10YR5/4) 焼土中心層。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の灰・炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ2mm大)を含む。
- 7 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化物と焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 8 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)を含む。

73号住居カマド



カマド掘方



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(φ1~2mm大)、椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子(φ1~3mm大)・炭化物・焼土を下層に含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ1~10mm大)を含む。
- 5 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 焼土中心層。
- 6 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(φ1~4mm)・焼土を含む。最下層に薄い灰層あり。
- 7 黒褐色質土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 8 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1mm大)を含む。
- 9 にぶい黄褐色細砂質土(10YR5/4) 微量の炭化粒子(φ1mm大)を含む。

0 1:30 1m

第158図 V区70・73号住居(2)

0.17m、幅0.57m、深さ0.50mである。

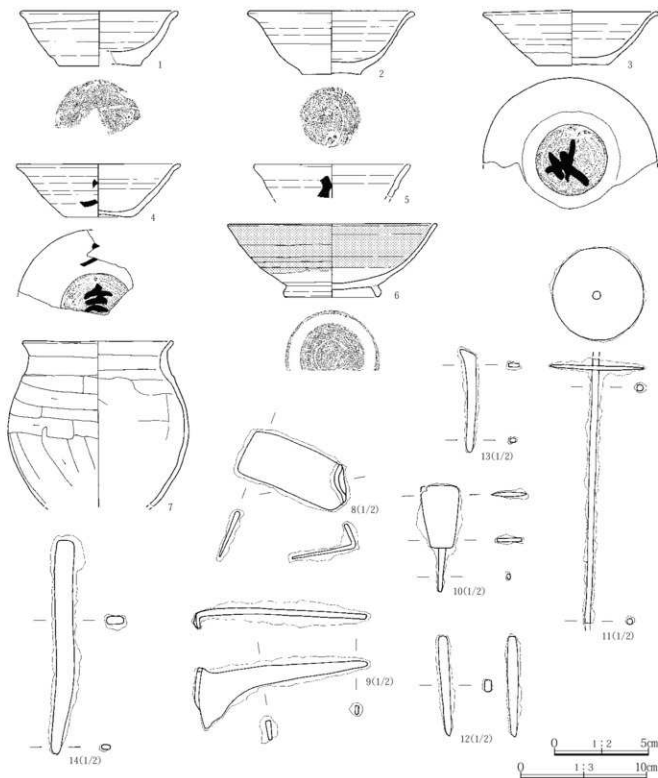
貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.40m、短径0.35m、深さ0.42mの円形の土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たな

い構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面付近から須恵器の椀(1)、カマド使用面付近から羽釜(2)、掘方から刀子(3)が出土した。

時代 平安時代10世紀第2四半期。



第159図 V区70号住居の出土遺物

64号住居(第160・161図, PL.73・398)

グリッド 13J 1

主軸方位 N80° E

重複 重複なし。65号住居と至近距離にあり同時存在の可能性はない。

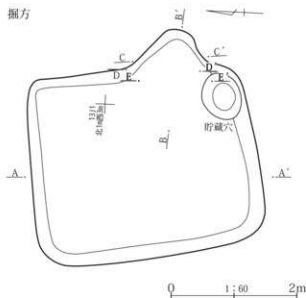
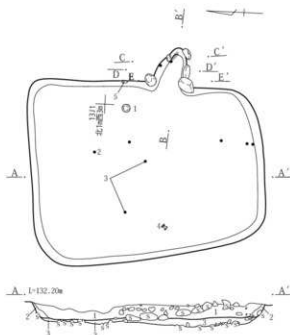
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.71m、短辺は2.88m、深さは0.26m、面積は8.64㎡である。

埋土 にぶい黄褐色土からなり、長径0.05~0.25mの礫を多く含む。

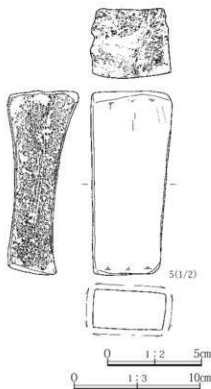
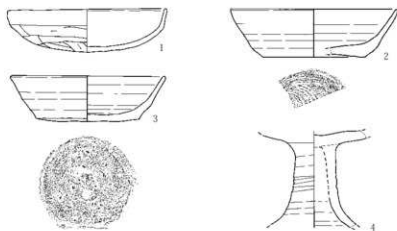
床面 にぶい黄褐色砂質土を0.13mほど貼って、ほぼ平坦な床面を構築しているが床面には掘方埋土に含まれる礫が0.10mほど露出しており凹凸が見られる。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央南寄りに位置する。カマド



- 1 にぶい黄褐色砂礫土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(φ1~2mm大)・榛名二ツ岳白色軽石大粒(φ1~50mm)・炭化粒子(φ1~4mm大)・焼土粒子(φ1mm大)と多量の円礫・小円礫(φ10~400mm)を含む。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 微量の浅間C軽石粒・榛名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1~2mm大)・小円礫(φ2~10mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 少量の小円礫(φ1~50mm大)を含む。



第160図 V区64号住居と出土遺物

の燃焼部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、奥壁は緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部壁には長径0.16~0.34mの垂円礫S 1~5の5点が据えられ、埋め込まれている。これらの礫は燃焼部右壁に沿って配列しており、カマド構築材である。燃焼部底や焚口からは焼土や炭化物の広がりは認められず、カマド埋土は灰黄褐色砂質土が成層する。燃焼部の使用面は、ほぼ失われている。カマドは長さ0.85m、幅0.77m、深さ0.20mである。

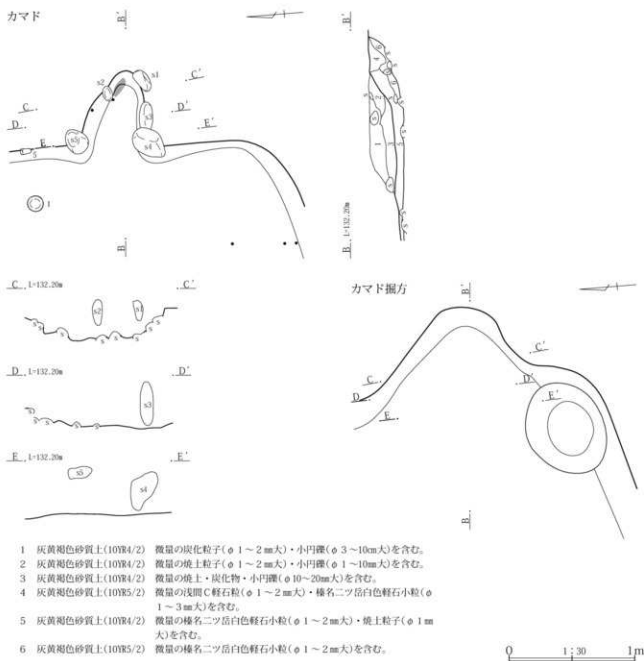
貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の南壁際から長径0.76m、

短径0.60m、深さ0.10mの楕円形の土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器や須恵器の杯(1~3)、床面付近から砥石(5)、埋土から須恵器の高坏(4)が出土した。出土遺物は8~9世紀内に年代幅を有する。

時代 奈良時代8世紀第3四半期~平安時代9世紀第1四半期。



第161図 V区64号住居

65号住居(第162・163図, PL.74・398)

グリッド 13J1

主軸方位 N82°E

重複 66号住居に切られる。64号住居と至近距離にあり同時存在の可能性はない。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.95m、短辺は2.61m、深さは0.18m、面積は9.05㎡である。

埋土 土に黄褐色土からなる。

床面 土に黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。中央南寄りで長径0.76m、短径0.68m、深さ0.09mの円形の浅い窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、奥壁は緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部壁には長径0.14～0.25mの垂円礫S1～5の5点が据えられ、埋め込まれている。これらの礫は燃焼部壁に沿って配列しており、カマド構築材である。燃焼部底からは焼土ブロックの広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.70m、幅0.70m、深さ0.17mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(1)、カマドから羽釜(3)、床面付近から土師器の裏(2)が出土した。

時代 8世紀前半に帰属する66号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀後半と想定される。

66号住居(第162・163図, PL.75)

グリッド 13J1

主軸方位 N81°E

重複 44号土坑に切られる。65号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ隅丸台形を呈する。長辺は3.22m、短辺は2.69m、深さは0.23m、面積は7.03㎡で極小規模の竪穴住居である。

埋土 浅間Cテフラの軽石や二ツ岳の白色軽石を含む。土に黄褐色砂質土のみからなる。

床面 土に黄褐色砂質土を0.12mほど貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。

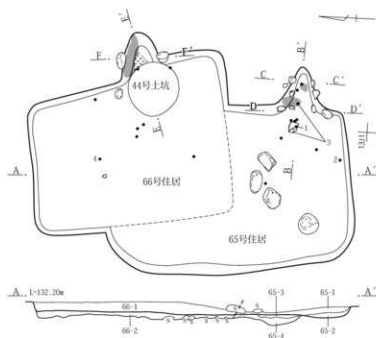
掘方 XII・XII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。北西隅南寄りで長辺1.48m、短辺0.68m、深さ0.05mの歪んだ長方形の浅い窪みを検出した。また南壁際で直径0.26m、深さ0.13mの円形の小ピットを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央南寄りに位置し、焚口～燃焼部付近の大部分が44号土坑により失われている。カマドの燃焼部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、奥壁は約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部壁の左右には長径0.24～0.31mの垂円礫S1・2の2点が据えられている。また右壁の礫の下位からは長径0.20mの小ピットが検出され、これは礫が埋め込まれた痕跡である。これらの礫はカマド構築材である。燃焼部底左側からは焼土ブロックの広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土が成層し、下底は直径0.01m大の焼土粒が多く含まれる。これらの焼土は崩落した天井の一部である可能性がある。カマドは長さ0.62m、幅0.83m、深さ0.21mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

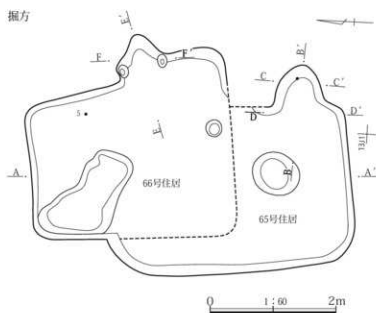
遺物 床面から土師器の杯(4)、掘方から須恵器の蓋(5)が出土した。

時代 10世紀後半に帰属する65号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から奈良時代8世紀前半と想定される。

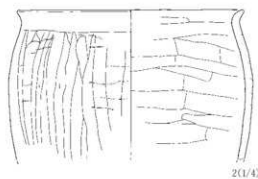


- 65-1 にぶい・黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒・椋名
(10YR5/3) ニツ房白色軽石小粒・炭化
粒子(ϕ 1~2mm大)、円礫
(ϕ 30~300mm大)を含む。
- 65-2 にぶい・黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒・炭化
(10YR5/4) 粒子(ϕ 1~2mm大)、椋名
ニツ房白色軽石小粒(ϕ 1~
5mm大)、円礫(ϕ 20~100mm
大)を含む。
- 65-3 にぶい・黄褐色砂質土 微量の小円礫(ϕ 2~5mm
(10YR5/4) 大)を含む。
- 65-4 にぶい・黄褐色砂質土 微量の小円礫(ϕ 2~30mm
(10YR5/4) 大)を含む。
- 66-1 にぶい・黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒・炭化
(10YR5/3) 粒子(ϕ 1~3mm大)、椋名
ニツ房白色軽石小粒(ϕ 1~
20mm大)を含む。
- 66-2 にぶい・黄褐色砂質土 微量の椋名ニツ房白色軽石
(10YR5/3) 小粒(ϕ 1~10mm大)、小円
礫(ϕ 1~20mm大)を含む。

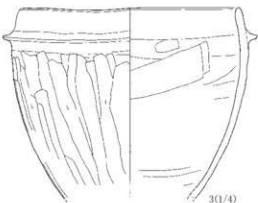
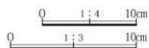
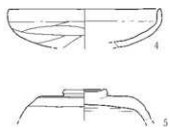
掘方



65号住居



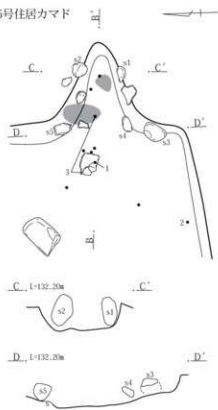
66号住居



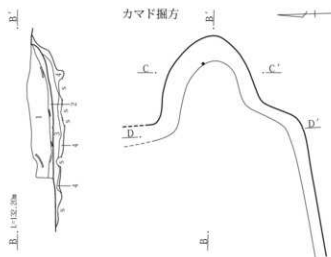
第162図 V区65・66号住居と出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物

65号住居カマド

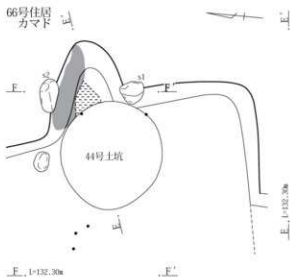


カマド掘方

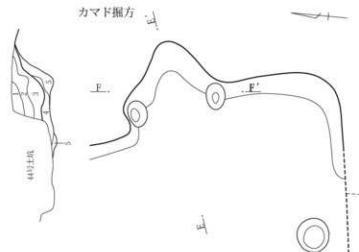


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~5mm大)・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の炭化物と微量の焼土を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~3mm大)・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)・炭化物を含む。
- 4 暗灰黄色細砂質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。

66号住居カマド



カマド掘方



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~5mm大)・炭化粒子(ϕ 1~4mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の焼土・椀名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1mm大)・炭化粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の焼土、微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 3~5mm大)を含む。
- 4 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3) 微量の焼土粒子(ϕ 1~3mm大)・炭化物を含む。
- 5 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 微量の焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。

0 1:30 1m

第163図 V区65・66号住居

67号住居(第164～166図、PL.76・398)

グリッド 131 2

主軸方位 N78° E

重複 5号竪穴、79号土坑に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する。長辺は3.07m、短辺は2.66m、深さは0.35m、面積は6.59㎡で極小規模の竪穴住居である。

埋土 浅間Cテフラの軽石やニツ岳の白色軽石を含むに、黄褐～灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.06mほど薄く貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。

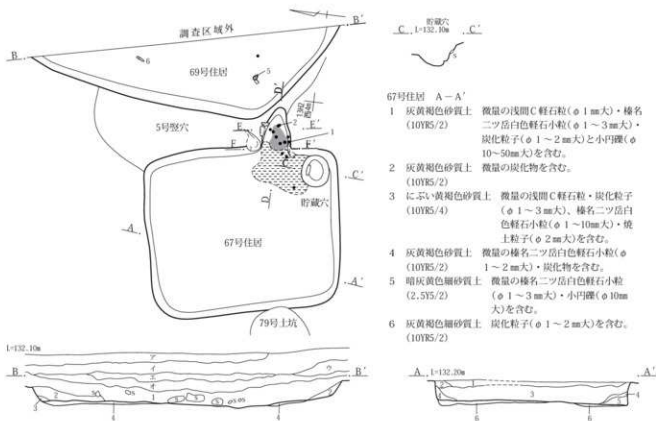
掘方 Ⅱ・Ⅲ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築し、ほぼ平坦である。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部

は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は緩く傾きながら段差を有し、奥壁は急な勾配で立ち上がる。燃焼部壁の左右には長径0.30～0.33mの垂円礫S1～3の3点が据えられ、0.17～0.28mほど埋め込まれている。また右壁の礫の下位からは長径0.28mの小ピットが検出され、これは礫が埋め込まれた痕跡である。これらの礫はカマド構築材である。燃焼部底からは焼土と炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.75m、幅0.70m、深さ0.23mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.49m、短径0.44m、深さ0.18mの円形の土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たな



69号住居 B-B'

- ア 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間B軽石・椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm)を含む。
- イ 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～3mm大)・焼土粒子(φ1～2mm大)を含む。
- ウ 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～3mm大)・小礫(φ10～100mm大)を含む。
- エ 褐灰色砂質土(10YR4/1) 微量の浅間B軽石と椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm大)を含む。
- オ 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間B軽石と椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm大)を含む。
- 1 にふい黄褐色砂質土(10YR4/3) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm大)・炭化粒子(φ1～3mm大)・円礫(φ20～300mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(φ1mm大)・炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量のふい黄褐色砂質土を含む。
- 4 にふい黄褐色砂質土(10YR4/4) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～3mm大)を含む。

第164図 V区67・69号住居(1)

い構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマド使用面から土師器の甕(2)、使用面付近から須恵器の杯(1)、埋土から灰軸陶器の瓶(3)が出土した。

時代 平安時代9世紀第2四半期。

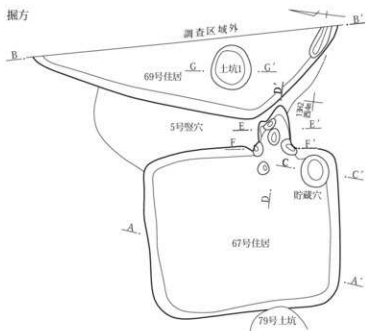
69号住居(第164~166図、PL.77・398)

グリッド 13H 2

主軸方位 N82°W

重複 5号竪穴を切る。67号住居と至近距離にあり同時存在の可能性はない。

掘方

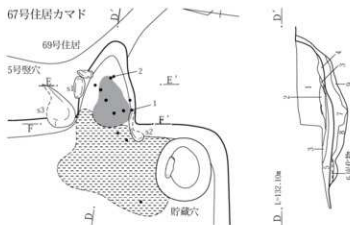


69号土坑 G-G'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の小円礫(φ50mm大)を含む。
- 2 褐灰色砂質土(10YR4/1)
- 3 褐灰色砂質土(10YR4/1) 微量の小円礫(φ1~50mm大)を含む。

0 1:60 2m

67号住居カマド



カマド掘方



E-E', 1-132.10m



F-F', 1-132.10m



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(φ1~2mm大)、極希ニツ品白色軽石小粒(φ1~5mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1~3mm大)・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土を含む。
- 4 にぶ・黄褐色土(10YR5/3) 少量の焼土粒子(φ1~3mm大)・炭化物を含む。
- 5 にぶ・褐色土(7.5YR5/4) 少量の焼土と微量の炭化物を含む。
- 6 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物中心層。
- 7 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の浅間C軽石粒(φ1mm大)・炭化粒子(φ1~4mm大)・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 8 にぶ・黄褐色細砂質土(10YR6/3) 微量の炭化粒子(φ1mm大)を含む。
- 9 にぶ・黄褐色細砂質土(10YR6/3) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。

0 1:30 1m

第165図 V区67・69号住居(2)

形状と規模 南北方向に長軸を有すると想定される竪穴住居で、東部の大部分は調査区外に存在する。長辺は3.80m+、短辺は2.05m+、深さは0.34m、検出された最大の面積は3.14㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含むにぶい黄褐～灰黄褐色砂質土からなる。

床面 にぶい黄褐色砂質土を0.05mほど薄く貼って、床面を構築している。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。西壁際に直径0.69mの円形を呈する土

坑1を検出した。南西壁際の南端には周溝と思われる溝が周回する。上幅は0.32m、底幅は0.06m、深さは0.01mである。

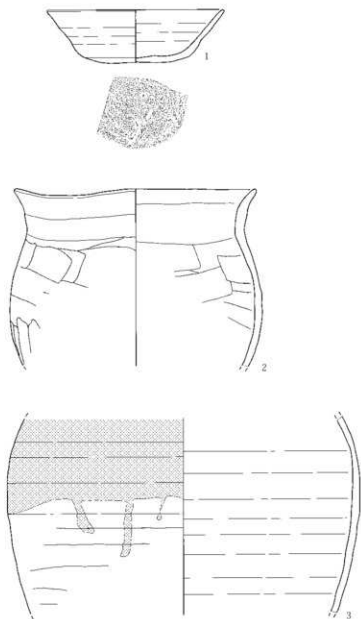
カマドと貯蔵穴 限られた調査範囲では検出されなかった。カマドは調査区外に位置すると想定される。

柱穴 柱穴は検出されなかった。

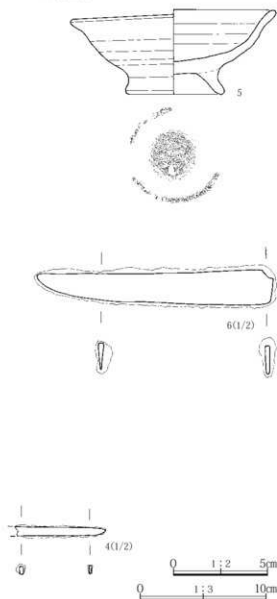
遺物 床面付近から須恵器の椀(5)、小刀(6)が出土した。

時代 平安時代10世紀第3四半期。

67号住居



69号住居



第166図 V区67・69号住居の出土遺物

68号住居(第167図、PL.77・398)

グリッド 13H 1

主軸方位 N50°E

重複 なし。69号住居と至近距離にあり同時存在の可能性はない。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有すると想定される竪穴住居で、東部の大部分は調査区外に存在する。長辺は3.65m、短辺は2.85m+、深さは0.39m、検出された最大の面積は3.65㎡である。

埋土 灰黄褐色砂質土からなる。

床面 にぶい黄褐色砂質土を0.05mほど薄く貼って、床面を構築している。

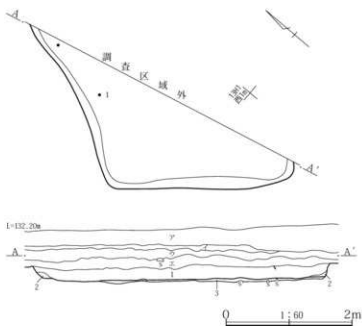
掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。

カマドと貯蔵穴 限られた調査範囲では検出されなかった。カマドは調査区外に位置すると想定される。

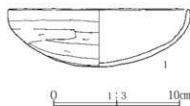
柱穴 柱穴は検出されなかった。

遺物 埋土から土師器の杯(1)が出土した。

時代 奈良時代8世紀第2四半期。



- ア にぶい黄褐色砂質土 微量の浅間B・C軽石粒(φ1~2mm大)・
(10TR5/4) 榛名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~4mm大)・
炭化粒子(φ1~5mm大)を含む。
- イ 褐色砂質土 浅間B軽石粒を含む。
(10TR4/4)
- ウ 褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ1mm大)・榛名二ツ岳白
(10TR4/1) 色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~
5mm大)を含む。
- エ 灰黄褐色砂質土 微量の浅間C軽石粒(φ1mm大)・榛名二ツ岳
(10TR5/2) 白色軽石小粒(φ1~5mm大)・炭化粒子(φ
1~3mm大)・小円礫(φ50mm大)を含む。
- 1 灰黄褐色砂質土 微量の炭化粒子(φ1~3mm大)・焼土粒子(φ
(10TR5/2) 1mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土 微量の炭化粒子(φ1~5mm大)を含む。
(10TR4/2)
- 3 にぶい黄褐色土 小円礫(φ10~50mm大)を含む。
(10TR5/3)



第167図 V区68号住居と出土遺物

71号住居(第168・169図、PL.78・398)

グリッド 13M1

主軸方位 N81°E

重複 74号土坑に切られる。111・113・114号土坑、8号溝を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.50m、短辺は2.47m、深さは0.40m、面積は7.14㎡である。

埋土 浅間Cテフラの軽石と二ツ岳の白色軽石を含むにぶい黄褐色砂質土が成層し、中央に向かって緩やかに傾いて竪穴を埋めている。

床面 にぶい黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。西部で長径0.61~0.92m、短径0.55~0.88m、深さ0.08mの円形の浅い窪み2基を検出した。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部

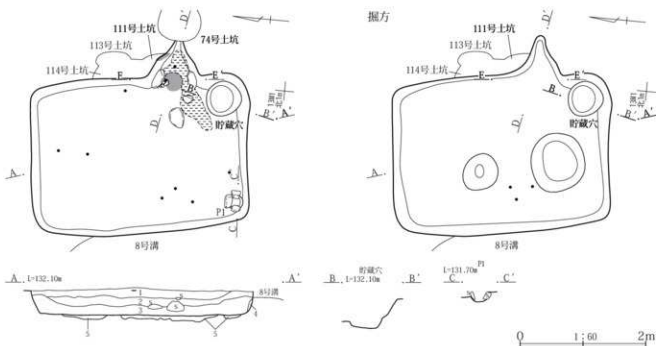
は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は緩やかに傾きながら弧を描くように立ち上がり煙道に接続する。燃焼部には長径0.32~0.37mの亜角礫S1・2の2点が「ハ」状に据えられており、袖石からなるカマド構築材と考えられる。燃焼部底からは焼土や炭化物、焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土にはぶい黄褐~灰黄褐色砂質土からなる。カマドは煙道を含む長さ0.78m、煙道長0.15m、幅0.80m、深さ0.38mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の埋戻しから直径0.55m、深さ0.14mの円形の土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から灰軸陶器の瓶(1)や土鍾(2)が出土した。

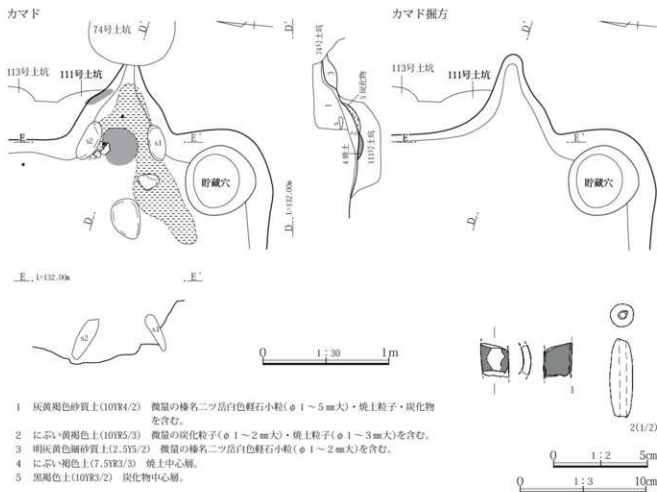
時代 平安時代9世紀後半~10世紀前半。



- 1 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)、樺名二ツ岳白色軽石(ϕ 1~30mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~2mm大)・樺名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~10mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1mm大)・樺名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~15mm大)・炭化粒子(ϕ 1~4mm大)を含む。
- 4 明黄褐色砂質土(10YR6/6) 樺名二ツ岳火山灰ブロックを含む。
- 5 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の浅間C軽石粒(ϕ 1~3mm大)・樺名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~10mm大)・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。

第168図 V区71号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第169図 V区71号住居と出土遺物

72号住居(第170・171図、PL.79・398)

グリッド 13J 3

主軸方位 N75° E

重複 59・84号土坑に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.21m、短辺は2.46m、深さは0.30m、面積は6.63㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色～にぶい黄褐色砂質土からなる。

床面 にぶい黄褐色砂質土を0.03mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層のニツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。南西隅で長径0.99m、短径0.92m、深さ0.06mの歪んだ円形の浅い窪みを検出した。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底はほぼ水平で緩やかに傾きながら約45°の勾配で立ち上が

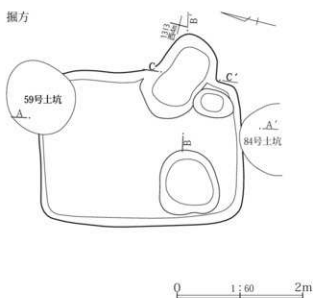
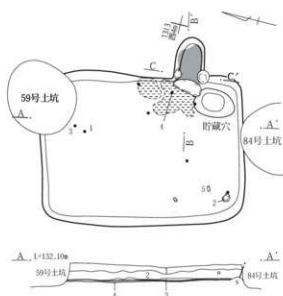
る。燃焼部壁には長径0.28～0.34mの垂円礫S1・2の2点が据えられている。また焚口の床面から長径0.47m、短径0.20m、厚さ0.17mの棒状円礫S3が出土した。これらは袖石とカマドの崩落により移動したカマドの天井高架材と考えられる。燃焼部底からは焼土や炭化物、焚口周辺でも同様の広がりを検出した。カマド埋土はにぶい黄褐色～灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.85m、幅0.57m、深さ0.21mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.65m、短径0.54m、深さ0.08mの楕円形の土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

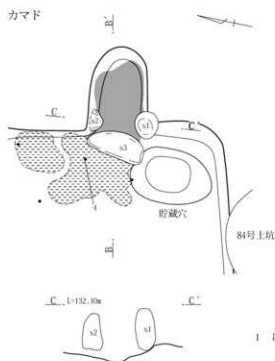
柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(2)や土師器の小型裏(4)、埋土から土師器の杯(1)、須恵器の椀(3)、砥石(5)が出土した。

時代 奈良時代8世紀第4四半期。



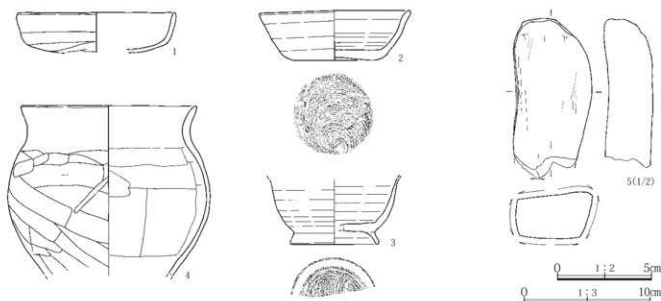
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 3$ mm大)・焼土粒子($\phi 1$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 4$ mm大)を含む。
- 2 にふい黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 15$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 10$ mm大)を含む。
- 3 にふい黄褐色細砂質土(10YR6/4) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。
- 4 にふい黄褐色細砂質土(10YR6/3)



- 1 にふい黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の炭化粒子($\phi 1 \sim 5$ mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量の炭化物を微量の焼土・灰を含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の焼土・炭化物を含む。
- 4 にふい黄褐色土(10YR4/3) 微量の焼土・炭化物を含む。
- 5 にふい黄褐色細砂質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子($\phi 1$ mm大)を含む。

第170図 V区72号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第171図 V区72号住居の出土遺物

74号住居(第172～174図、PL.81・399)

グリッド 1314

主軸方位 N71°W

重複 47・49号住居・34号土坑に切られる。76号住居カマド、115号土坑を切る。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.23m、短辺は2.40m、深さは0.18m、面積は6.60㎡である。

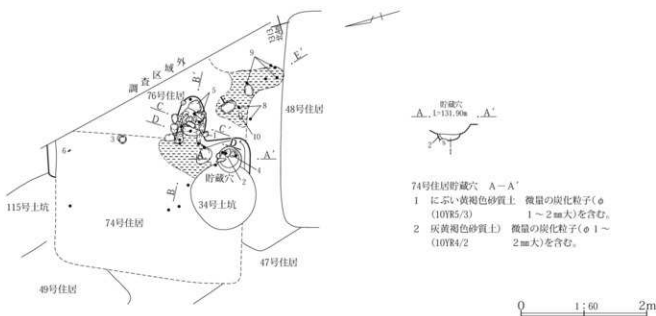
埋土 灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.08mほど薄く貼って、床面を

構築している。

掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで構築している。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃烧部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃烧部底は緩やかに窪み、奥壁は急な勾配で立ち上がる。燃烧部壁には左右に長径0.22～0.33mの垂円礫S1～7の7点が据えられ、左右の燃烧部壁に沿って配列している。燃烧部の中央には長径0.24m、短径0.08mの棒状垂円礫S8が据えられ、0.05m埋め込まれている。これらの礫は力



第172図 V区74・76号住居(1)



74号住居貯蔵穴 A-A'

- 1 にふい黄褐色砂質土 微量の炭化粒子(φ 100R5/3) 1～2mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土 微量の炭化粒子(φ 1～100R4/2) 2mm大)を含む。

マド構築材や支脚と考えられる。燃焼部底からは炭化物の広がりを検出し、底直上の埋土から長径0.28m、短径0.14m、厚さ0.12mの棒状亜円礫S 9が出土した。この礫はカマドの天井高架材と考えられる。カマド埋土は灰黄褐色砂質土が成層する。カマドは長さ0.75m、幅0.60m、深さ0.16mである。

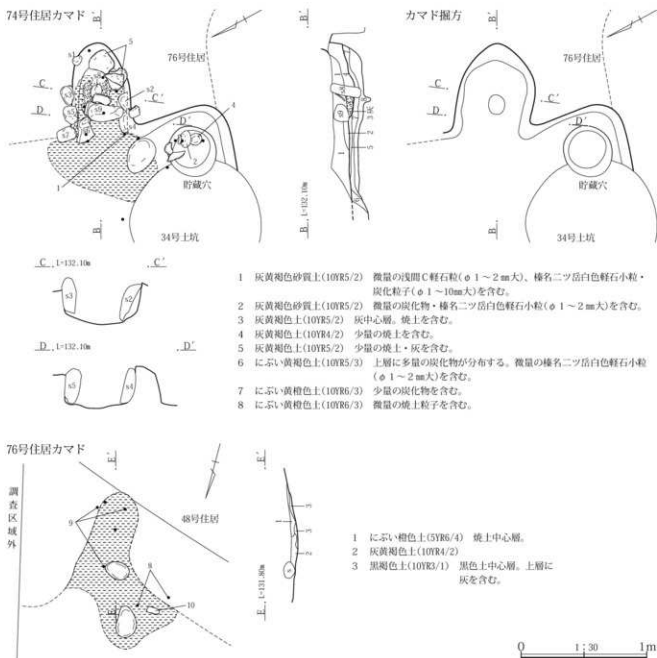
貯蔵穴 南東隅の壁際から直径0.38m、深さ0.30mの円形の土坑を検出した。底から0.22~0.26mから須恵器の杯(4)や黒色土器の椀(2)が出土した。土坑は西側の一部が34号土坑により失われているが、位置や形状から貯

蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(3)、カマドから羽釜(5)、カマド埋土から黒色土器の椀(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀第3四半期。



第173図 V区74・76号住居(2)

76号住居(第172~174図、PL.81・399)

グリッド 1314

主軸方位 N30°E

重複 74号住居に切られる。34号土坑を切る。

形状と規模 カマド周辺のみが検出された竪穴住居で北東部の大部分が調査区外にあり、西部は74号住居により失われている。深さは0.15mである。

埋土 灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を薄く貼って床面を構築している。

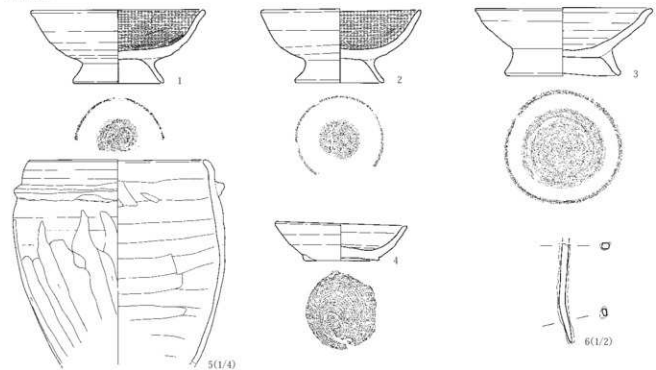
掘方 VII層の二ツ岳の白色軽石まじり砂質土を掘り込んで74号住居

で構築している。

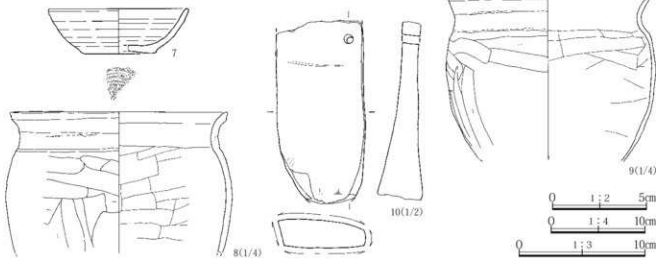
カマド 竪穴の南壁に位置すると想定される。カマドの燃焼部は南壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は緩やかに傾斜している。燃焼部底からは炭化物の広がりを検出した。カマド埋土にはふい橙色土からなる焼土や炭化物である。カマドは長さ1.21m、幅0.78m、深さ0.15mである。

遺物 カマド使用面から土師器の甕(9)、使用面付近から土師器の甕(8)が出土した。

時代 平安時代10世紀第2四半期。



76号住居



第174図 V区74・76号住居の出土遺物

2. VI区

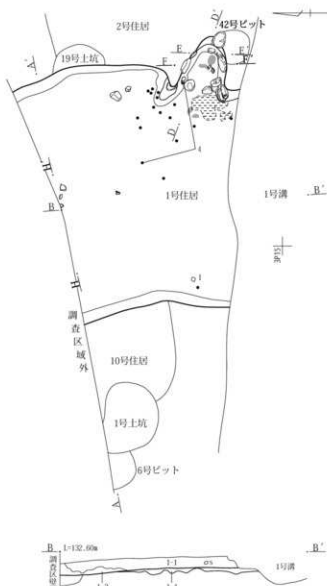
VI区では古墳時代前期から平安時代の竪穴住居が54棟検出された。時代別の遺構数では、古墳時代が2棟、飛鳥時代が2棟、奈良時代が2棟、平安時代が44棟、年代未詳の住居は3棟である。平安時代の住居は9世紀が16棟、10世紀が22棟、11世紀が3棟である。

1号住居(第175~177図, PL.82・399)

グリッド 3 O 15

主軸方位 N87°W

重複 1号溝に切られる。2・10号住居, 19号土坑・42



号ピットを切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈すると想定される竪穴住居で、北部は調査区外に存在し、南部は1号溝により失われている。長辺は3.82m、短辺は3.60m、深さは0.18m、検出された最大の面積は11.41㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む暗灰~灰黄褐色砂質土からなる。

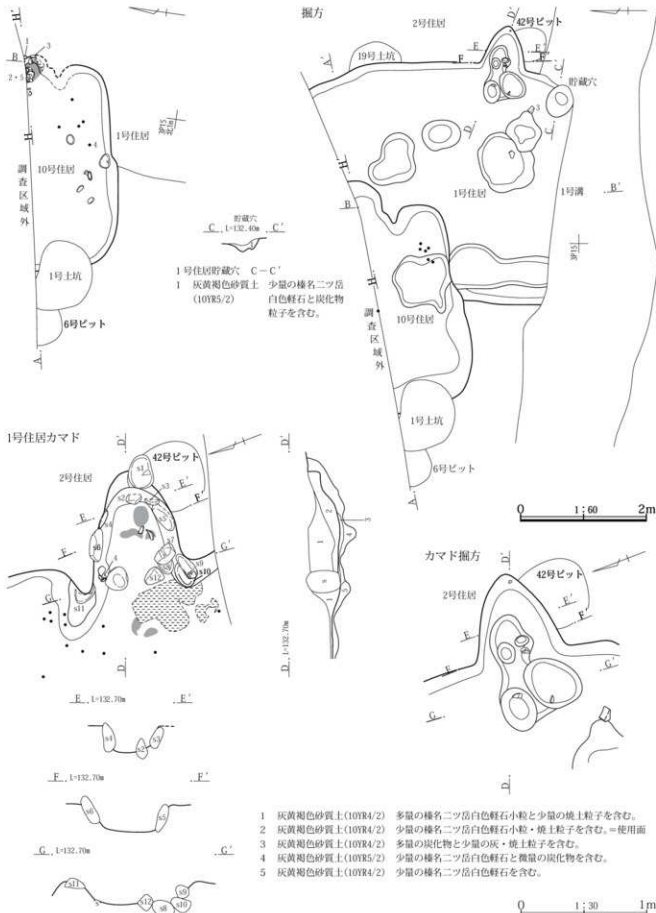
床面 ニツ岳の白色軽石を含むにぶい黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築しており、長径0.60~0.95mの楕円~歪んだ方形や不定形の窪



- 1-1 暗褐色砂質土 少量の榛名ニツ岳白色軽石を(10TR3/3)含む。
- 1-2 灰黄褐色砂質土 少量の榛名ニツ岳白色軽石(10TR4/2) 小粒・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ5~30mm大)を含む。
- 1-3 灰黄褐色砂質土 微量の榛名ニツ岳白色軽石(10TR5/2) 小粒と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10~50mm大)を含む。
- 1-4 灰黄褐色砂質土 少量の榛名ニツ岳白色軽石(10TR4/2) 小粒・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ5~30mm大)を含む。
- 1-5 にぶい黄褐色砂質土 微量の榛名ニツ岳白色(10TR5/4) 軽石小粒を含む。
- 1-6 灰黄褐色砂質土 微量の榛名ニツ岳白色軽石(10TR6/2) 小粒と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~20mm大)を含む。
- 1-7 灰黄褐色砂質土 少量の榛名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 10-1 灰黄褐色砂質土 少量の榛名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 10-2 灰黄褐色砂質土 少量の榛名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 10-3 黒褐色砂質土 少量の榛名ニツ岳白色軽石を(10TR3/2)含む。
- 10-4 灰層 少量の炭化物・焼土小ブロック(φ10~20mm大)を含む。上面より土師器残片多数出土。=カマド使用面
- 10-5 焼土層=カマド第一次使用面
- 10-6 灰黄褐色砂質土 多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~40mm大)を含む。

第175図 VI区1・10号住居(1)



第176図 VII区1・10号住居(2)

みを検出した。また、西壁際は幅0.45m、深さ0.03mの浅い溝状の窪みを検出した。

カマド 東壁に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、緩く傾きながら奥壁では急勾配で立ち上がる。燃焼部壁の左右には長径0.10～0.24mの垂円礫が12点据えられている。特に右側の焚口に近い壁には、割れた円礫を積み重ねている。これらの礫はカマドの構築材と考えられる。燃焼部底の中央左寄りからは長径0.27m、短径0.18mの円礫が出土した。これは底部が燃焼部底に接地しているが、埋土中にあり、カマドの崩落によって移動した支脚の可能性もある。燃焼部底は焼土の小ブロック、焚口付近では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土の上部には長径0.18～0.34mの垂円礫が多く出土した。これらはカマドの崩落時に埋没したものと考えられ、天井高架材として利用された石材の可能性が高い。カマドは長さ0.87m、幅0.68m、深さ0.22mである。

貯蔵穴 掘方の調査で1号溝の底から長径0.42m、短径0.39m、深さ0.38mの土坑を検出した。土坑はカマドの南側に位置し、形状から貯蔵穴と考えられる。

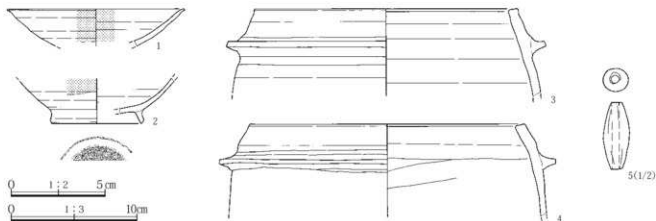
柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面付近から灰軸陶器の甕(1)、カマド使用面付近から羽釜(4)、カマド掘方埋土から土鍾(5)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

10号住居(第175・176・178図、PL.82・90・399)

グリッド 3 P15



第177図 VI区1号住居の出土遺物

主軸方位 N80°E

重複 1号住居、1号土坑に切られる。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸方形を呈する竪穴住居で、北部は調査区外にある。長辺は3.15m、短辺は1.36m+、深さは0.30m、検出された最大の面積は3.31㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐～灰黄棕色砂質土と黒褐色砂質土からなり東側から傾斜して竪穴を埋めている。

床面 灰黄棕色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築し、南壁際で長径0.84m、短径0.75m、深さ0.05mの浅い不定形の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁に位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外に構築している。カマドの北部は調査区外に存在し、燃焼部底近くまで失われている。燃焼部底はほぼ平坦で焼土ブロックと炭化物の広がりを検出した。カマドは長さ0.78m、幅0.49m、掘方の深さ0.15mである。貯蔵穴は調査範囲からは検出されなかった。

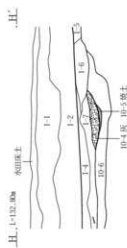
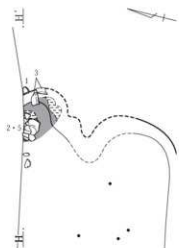
柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面付近から土師器の甕(4)、カマド使用面から土師器の甕(2・5)や小型甕(1)、使用面付近から甕(3)が出土した。出土遺物は8世紀後半から9世紀内の年代幅を有する。

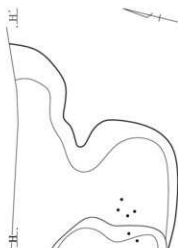
時代 平安時代9世紀。

第4章 第2面の遺構と出土遺物

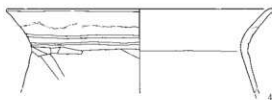
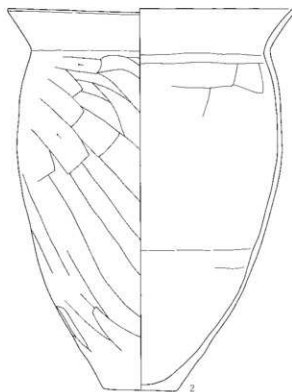
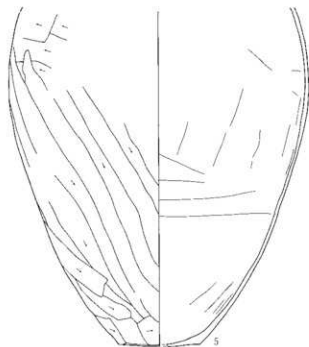
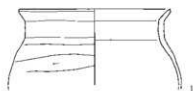
カマド



カマド掘方



0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第178図 VI区10号住居と出土遺物

2号住居(第179・180図、PL.83・399)

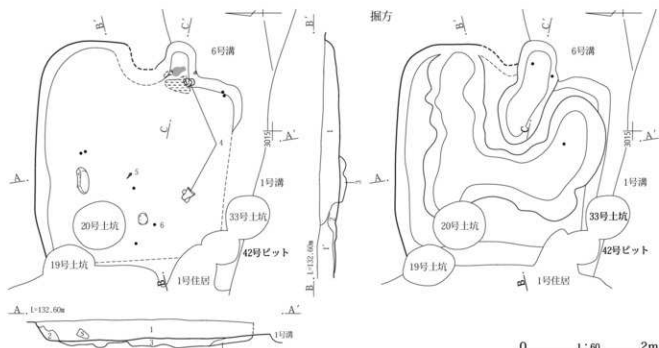
グリッド 3 O 15

主軸方位 N85°W

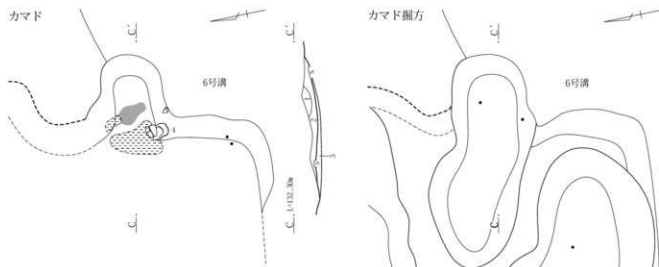
重複 1号住居、6号溝、19・20・33号土坑、42号ピット

トに切られる。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.58m、短辺は3.24m、深さは0.34m、面積は8.35㎡である。

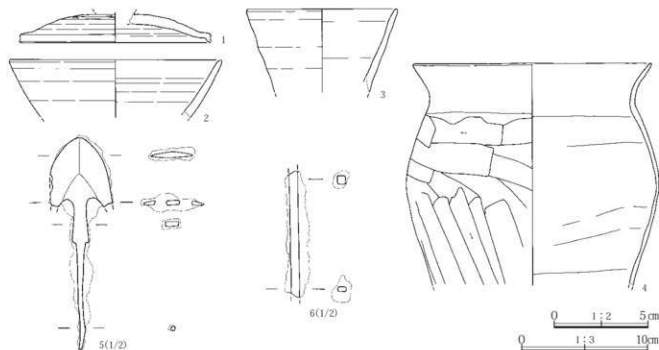


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の種名ニツ居白色軽石小粒と少量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
- 1' 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ居白色軽石小粒・ふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の種名ニツ居白色軽石小粒と多量のふい・黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10~50mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 3' 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 3層上+少量の炭化物。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の焼土小ブロック(φ5~10mm大)・ふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と少量の炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の種名ニツ居白色軽石と少量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・多量の炭化物粒子を含む。
- 3 カマド掘方埋土

第179図 W区2号住居



第180図 VI区2号住居の出土遺物

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 シルトブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.14mほど厚く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築しており、全体に幅0.78m、深さ0.11～0.15mの溝状の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置し、カマドの燃焼部は南東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築していると想定される。6号溝によってカマドはかなりの部分が失われており、燃焼部底に近い焼土や炭化物を含んだ掘方のみが検出された。カマドは長さ1.15m、幅0.71m、掘方の深さ0.11mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面直上とカマド使用面直上から出土した土師器の甕(4)が接合した。埋土から須恵器の蓋(1)や椀(2・3)、鉄鍬(5)が出土した。

時代 平安時代9世紀前半。

4号住居(第181・182図、PL.84・399)

グリッド 3 L15

主軸方位 N89° E

重複 6号溝に切られる。7号溝を切る。

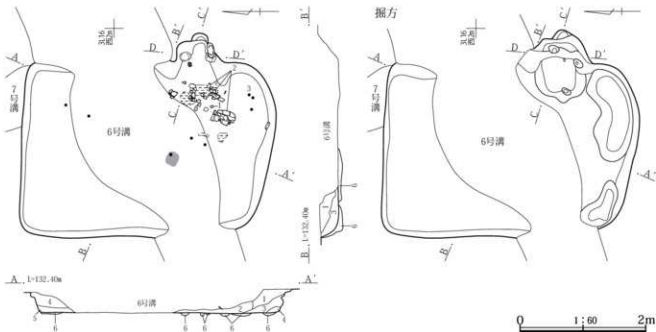
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、中央部は6号溝により失われている。長辺は4.01m、短辺は2.78m、深さは0.45m、面積は9.06㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

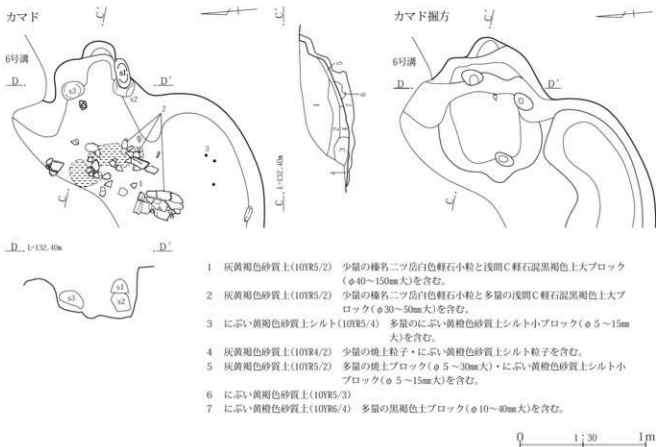
床面 ぶい黄橙色砂質土を0.06mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土～砂礫層を掘り込んで構築している。南壁際から幅0.60m、深さ0.08mの浅い溝状の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の手前から奥を削り出し、袖は黄褐色砂質土を貼って壁の内側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、緩やかに傾きながら奥壁で急な勾配で階段状に立ち上がる。燃焼部奥壁の左右には長さ0.11～0.20mの垂円礫3点が据えられており、右側の2点は垂直に重ねられている。これらはカマドの位置から考えて燃焼部と煙道部の接続部を補強するカマド構築材と考えられる。燃焼部底には炭化物や焼土の広がり認められず、焚口付近のみ炭化物の広がりを検出した。カマド埋土はニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土で、成層している。

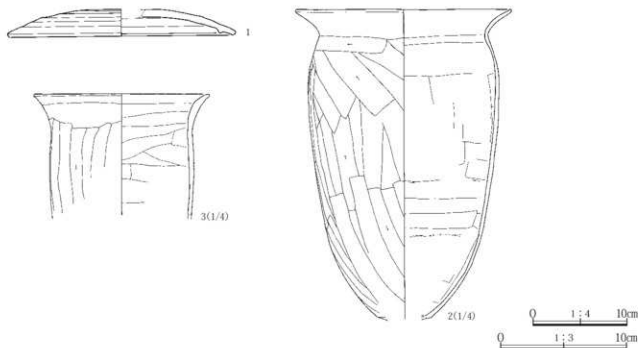


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の棒名二岳白色軽石小粒と少量のふい黄褐色砂質シルト大ブロック(φ10~50mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名二岳白色軽石小粒・にふい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名二岳白色軽石小粒と多量のふい黄褐色砂質シルト大ブロック(φ10~50mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名二岳白色軽石小粒と少量のふい黄褐~黄褐色砂質シルト大ブロック(φ10~50mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名二岳白色軽石小粒と多量のふい黄褐~黄褐色砂質シルト大ブロック(φ10~50mm大)を含む。
- 6 にふい黄褐色砂質土(10YR6/4) 多量の黒褐色土小ブロック(φ5~15mm大)を含む。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名二岳白色軽石小粒と浅間C軽石混黒褐色土大ブロック(φ40~150mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名二岳白色軽石小粒と多量の浅間C軽石混黒褐色土大ブロック(φ30~30mm大)を含む。
- 3 にふい黄褐色砂質シルト(10YR5/4) 多量のふい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の焼上粒子・にふい黄褐色砂質シルト粒子を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の焼上ブロック(φ5~30mm大)・にふい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
- 6 にふい黄褐色砂質土(10YR5/3)
- 7 にふい黄褐色砂質土(10YR6/4) 多量の黒褐色土ブロック(φ10~40mm大)を含む。

第181図 W区4号住居



第182図 M区4号住居の出土遺物

煙道を含むカマドの長さは1.07m、煙道長は0.28m、幅0.60m、深さ0.40mである。貯蔵穴は検出されなかった。
柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面やカマド使用面から土師器の甕(2)、カマド使用面付近から須恵器の蓋(1)が出土した。

時代 奈良時代8世紀第1四半期。

5号住居(第183図、PL.85)

グリッド 3 P13

主軸方位 N80° E

重複 なし。東側に6号住居がやや近接する。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、西部の大部分は調査区外にある。長辺は4.20m、短辺は1.07m+、深さは0.26m、検出された最大の面積は3.05㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 黄褐色砂質土のブロックを含む黒褐色土や灰黄褐色砂質土を0.09mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅻ・Ⅺ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。北東と南東間に楕円形の浅い窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部の左右には長径0.09～0.20mの亜円礫4点が据えられ、燃焼部底には埋土中に長径0.18mの円礫が出土した。これらはカマド構築材及びカマドの崩落により移動した構築材と考えられる。燃焼部底は炭化物の広がりを検出した。カマド埋土はニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土で、成層している。カマドは長さ0.91m、幅0.55m、深さ0.14mである。貯蔵穴は検出されなかった。掘方で検出された南東隅の窪みは、位置から考えて貯蔵穴である可能性がある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の羽釜(2)、カマド掘方埋土から須恵器の杯(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀。

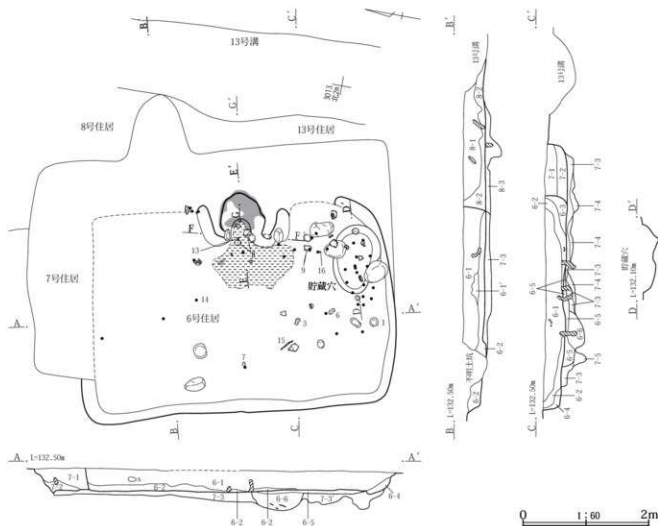
6号住居(第184～186図、PL.86・400)

グリッド 3 O13

主軸方位 N76° E

重複 7・8号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は5.03m、短辺は3.35m、深さ



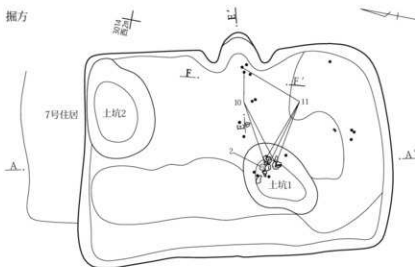
- 6-1 灰黄褐色砂質土(10R5/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石とにぶい黄橙～にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～40mm大)と微量の炭化物を含む。
- 6-1' 灰黄褐色砂質土(10R5/2) 6-1層上+少量の焼土粒子を含む。
- 6-2 灰黄褐色砂質土(10R4/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)・炭化物粒子を含む。
- 6-3 灰黄褐色砂質土(10R4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石を含む。
- 6-4 灰黄褐色砂質土(10R6/2) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10～50mm大)を含む。
- 6-5 灰黄褐色砂質土(10R4/2) 少量のにぶい黄橙～にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm大)と焼土粒子・炭化物を含み硬化する。
=貼り床
- 6-6 灰黄褐色砂質土(10R5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石と少量のにぶい黄橙～にぶい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10～50mm大)・炭化物を含む。
- 7-1 灰黄褐色砂質土(10R5/2) 多量の椀名ニツ岳白色軽石を含む。
- 7-2 灰黄褐色砂質土(10R4/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石を含む。
- 7-3 灰黄褐色砂質土(10R5/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm大)を含む。
- 7-4 灰黄褐色砂質土(10R6/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄橙～にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～40mm大)と少量の黒褐色土小ブロック(φ10～20mm大)を含む。
- 7-5 灰黄褐色砂質土(10R5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石と少量のにぶい黄橙～にぶい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10～50mm大)・炭化物を含む。
- 8-1 灰黄褐色砂質土(10R5/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石を含む。
- 8-2 灰黄褐色砂質土(10R5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10～50mm大)を含む。
- 8-3 灰黄褐色砂質土(10R4/2) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)を含む。

第184図 VI区6号住居(1)

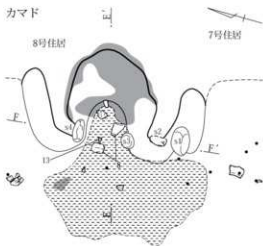
カマド 東壁のほぼ中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁から手前に7号住居埋土を削り出して構築し、袖は灰黄褐色砂質土を貼って構築している。燃焼部底はほぼ水平で、約45°の勾配で立ち上がる。焚口の左右には長径0.30~0.32m、の垂円礫2点が据えられており、右袖にも2点の垂円礫が埋め込まれている。これらは袖石と右袖のカマド構築材である。燃焼部の奥壁は焼土帯が広

がり、焚口付近は炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が成層している。カマドは長さ1.22m、幅0.70m、深さ0.32mである。
貯蔵穴 東南隅の南壁際で長径1.07m、短径0.74m、深さ0.22mの楕円形の土坑を検出した。土坑の縁にあたる床面からは長径0.36mの垂円角礫3点が出土し、坑底から0.18m上で黒曜石の剥片が出土した。土坑はカマ

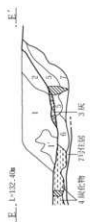
掘方



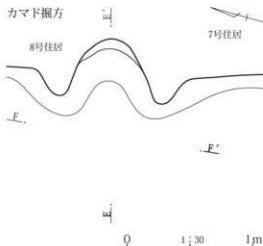
カマド



7号住居



カマド掘方



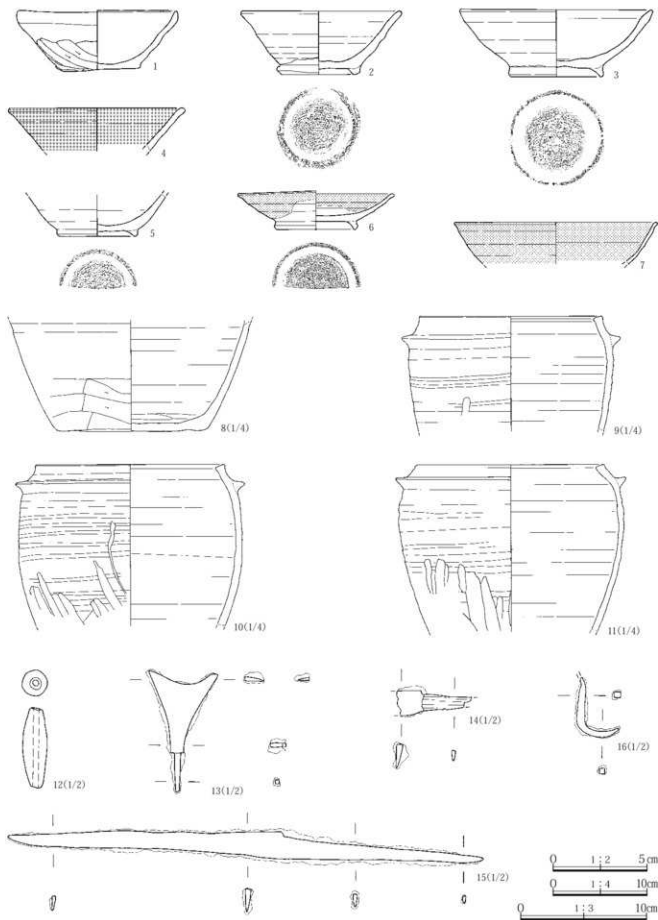
F_1-132.0m



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名二ツ岳白色軽石小粒・細灰褐色土ブロック(φ20mm大)と微量の焼土粒子を含む。
- 1' 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名二ツ岳白色軽石小粒と多量の焼土小ブロック(φ5~15mm大)、少量の炭化物粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名二ツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)と多量の焼土粒子を含む。
- 3 灰層 少量の焼土粒子(φ1~3mm大)を含む。=使用面
- 4 炭化物層 少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量の焼土小ブロック(φ5~20mm大)とにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~20mm大)を含む。=上面使用面
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量の焼土粒子と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~20mm大)を含む。
- 7 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名二ツ岳白色軽石・焼土粒子と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~30mm大)を含む。

第185図 VI区6号住居(2)

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第186図 VI区6号住居の出土遺物

ドとの位置関係から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の杯(1)、須恵器の羽釜(9)、刀子(14・15)、カマド使用面から須恵器の甕(8)、使用面付近から須恵器の椀(5)、鉄鏝(13)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

7号住居(第184・187～189図、PL.87・400)

グリッド 3 O 13

主軸方位 N88° E

重複 6号住居に切られる。8号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。大部分は6号住居により失われている。長辺は5.49m、短辺は3.78m、深さは0.33m、面積は20.75㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を多く含む灰黄褐色砂質からなる。

床面 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄色砂質土を0.12mほど厚く貼って、床面を構築している。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。南東部の西壁から南壁を幅0.85m、深さ0.05mの浅い溝状の窪みが周回する。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央北寄りに位置すると想定される。カマドの燃烧部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築していると想定されるが、掘方のみを検出した。カマドは長さ1.15m、幅は0.62m、掘方の深さは0.05mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(3・4)、床面付近から須恵器の蓋(2)が出土した。

時代 奈良時代8世紀第2・3四半期。

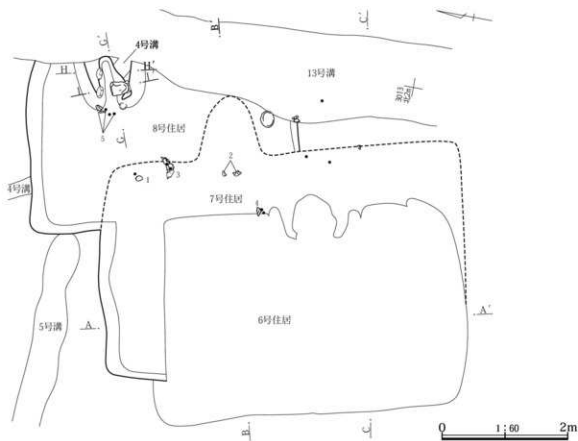
8号住居(第184・187～189図、PL.87・88・400)

グリッド 3 O 18

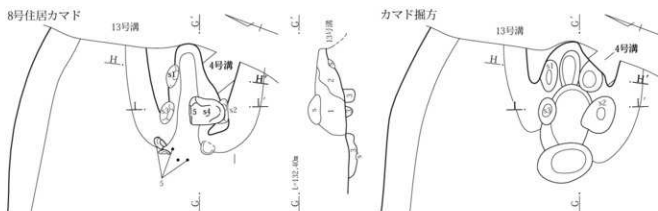
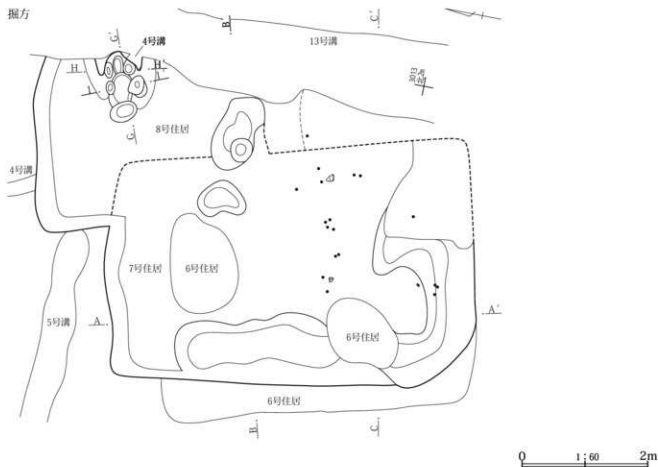
主軸方位 N78° E

重複 6・7号住居、13号溝に切られる。4・5号溝を切る。

規模と形状 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪



第187図 VII区7・8号住居(1)



H. 1-132.40m H'



L. 1-132.40m L'



1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石と少量のふい
黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm
大)を含む。

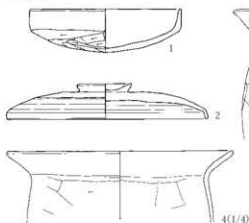
2 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石と多量のふい
黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm
大)を含む。

3 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒とふい
黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm
大)を含む。

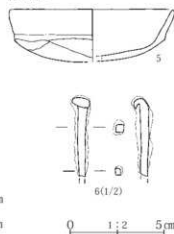
0 1:30 1m

第188図 VII区7・8号住居(2)

7号住居



8号住居



第189図 VI区7・8号住居の出土遺物

穴住居で、東部は13号溝に南西部の大部分は7号住居により失われている。長辺は4.30m、短辺は2.73m、深さは0.34m、面積は9.44㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 にぶい黄褐色シルトブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。

カマドと貯蔵穴 東壁の北東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から手前に黄褐色シルトブロックを含む灰黄褐色砂質土を貼って、壁の内側に構築している。燃焼部底はほぼ平坦で、緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部の左右には長径0.31～0.38m、短径0.06～0.10m、厚さ0.10～0.12mの棒状亜円礫3点が据えられており、上には長径0.26m、短径0.21m、厚さ0.09mの亜円礫が置かれている。これらはカマド構築材と天井高架材である。燃焼部底には炭化物や焼土帯の広がりは認められない。カマド埋土はニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土である。カマドは長さ1.07m幅0.52m、深さ0.37mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の杯(5)、埋土から鉄釘(6)が出土した。

時代 飛鳥時代7世紀後半。

9号住居(第190図、PL.89・400)

グリッド 3 O11

主軸方位 N83°W

重複 9号溝に切られる。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。北部は9号溝により失われている。長辺は3.50m、短辺は3.33m+、深さは0.23m、検出された最大の面積は8.66㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

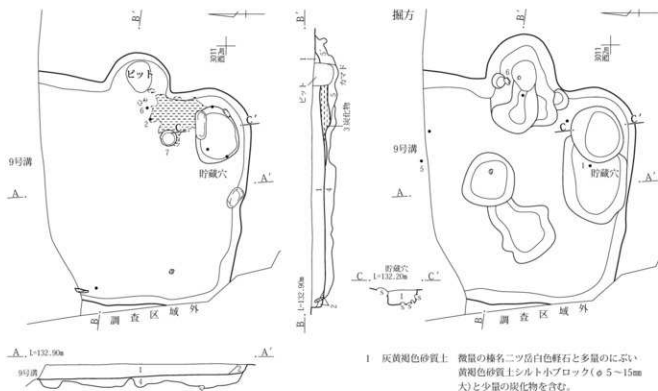
床面 にぶい黄褐色砂質土ブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.18mほど厚く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築し、中央と南壁際で長径0.88～1.20m+、短径0.82～1.03m、深さ0.04～0.07mの浅い歪んだ楕円形の窪みを検出した。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥に掘り込んで構築している。燃焼部底は緩く傾きながら立ち上がる。カマド埋土は黄褐色砂質シルトと炭化物からなる。カマドは長さ1.06m、幅0.67m、深さ0.16mである。

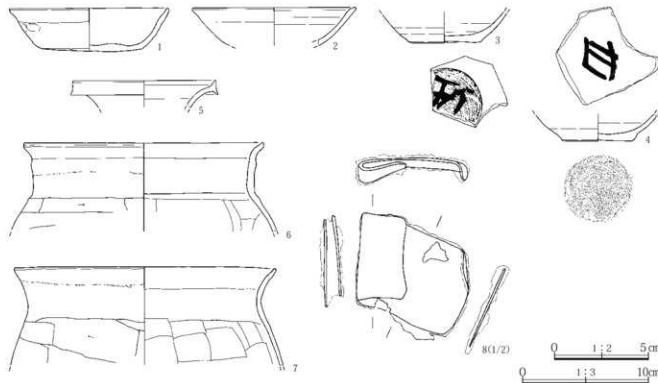
貯蔵穴 南東隅の壁際から長径0.89m、短径0.69m、深さ0.32mの土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。



1 灰黄褐色砂質土 微量の棒名二ツ岳白色軽石と多量にふい、黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)と少量の炭化物を含む。

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名二ツ岳白色軽石とふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名二ツ岳白色軽石と多量にふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 3 炭化物層 5~10mmの炭化物層と焼土粒子を含む。5mm厚程の黄褐色砂質土シルト層の互層堆積。=カマド使用面
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石と多量にふい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ5~50mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石と少量の焼土粒子を含む。
- 5' 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 5層土に類似。焼土粒子を含まず色調やや暗い。



第190図 VI区9号住居と出土遺物

遺物 床面付近から土師器の甕(7)、掘方から土師器の杯(1)、須恵器の長頸壺(5)、埋土から須恵器の椀(2~4)、鉄鎌(8)が出土した。

時代 平安時代9世紀第2・3四半期。

11号住居(第191図、PL.91・92・401)

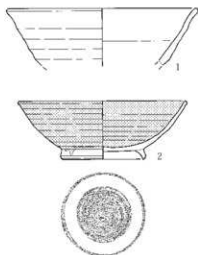
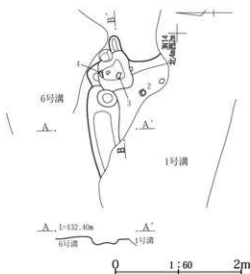
グリッド 3 N14

主軸方位 N78°E

重複 1号溝に切られる。

形状と規模 竪穴住居の隅とカマド掘方のみを検出した。竪穴住居の大部分は1号溝により失われている。長辺は1.65m+、短辺は1.22m+、深さは0.14m、検出された最大の面積は0.81㎡である。

埋土 灰黄褐色砂質土からなる。



カマド 竪穴の北東隅に位置すると想定される。カマドの燃烧部は東壁の奥を掘り込んで壁の外に構築していたと想定される。カマドは長さ0.85m、幅0.38m、深さ0.25mである。

遺物 カマド掘方埋土から須恵器の椀(1)、把手付壺(3)、灰釉陶器の椀(2)、土師器の甕(4)が出土した。カマド掘方埋土の出土遺物は、9世紀後半から10世紀前半の年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀前半以降であり、平安時代10・11世紀の住居と想定される。

14号住居(第192図、PL.92・93)

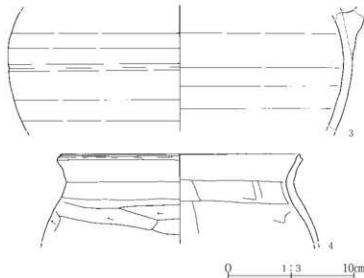
グリッド 13 S 8

主軸方位 N15°W



カマド

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石・焼土粒子・炭化物・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。=天井部構築材の崩落
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石・炭化物粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の炭化物が5~10mm程の層状に5~6層のラミナ状に堆積する。=使用面
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石・焼土ブロック(φ5~40mm大)・炭化物を含む。
- 5 褐色粘質土=カマド構築材
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石と少量の炭化物・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)を含む。



第191図 VI区11号住居と出土遺物

重複 12・14号溝に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸方形を呈する竪穴で、中央部は十文字に12・14号溝により失われている。長辺は4.20m、短辺は3.39m、深さは0.27m、面積は10.55㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.12mほど貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。

カマド 検出されなかった。14号溝により失われた可能性がある。

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方の調査で柱穴の可能性のあるピット4基を検出した。

P1は長径0.53m、短径0.45m、深さ0.12m。

P2は長径0.55m+、短径0.50m、深さ0.35m。

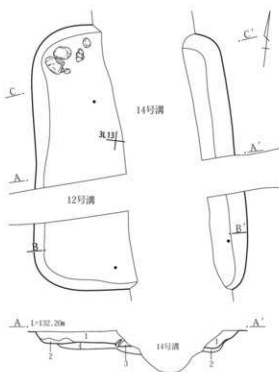
P3は長径0.70m+、短径0.70m、深さ0.10m。

P4は長径0.62m、短径0.50m、深さ0.13m。

柱間はP1・P2が2.10m、P3・P4が1.60m。P1・P4が2.74m、P2・P3が2.88mで、かなり歪みがある台形を呈する。このなかで主柱穴の可能性のあるのはP1～3である。柱穴に柱痕は認められなかった。

遺物 埋土から須恵器の壺(1)が出土した。

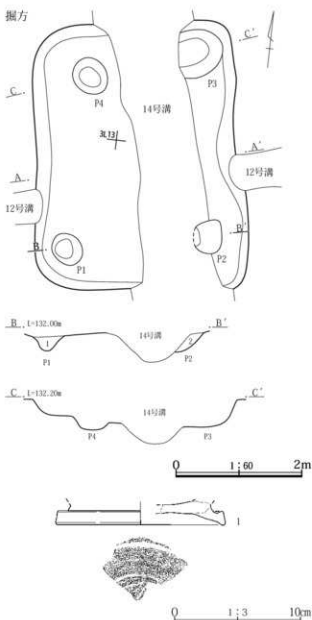
時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と想定される。



- 1 灰黄褐色砂質土 少量の椀名ニツ岳白色軽石にふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土 微量の椀名ニツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土 少量の椀名ニツ岳白色軽石を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土 微量の椀名ニツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～40mm大)を含む。

P1・2 B-B'

- 1 灰黄褐色砂質土 微量の椀名ニツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～20mm大)を含む。
= P1
- 2 灰黄褐色砂質土 微量の椀名ニツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～20mm大)を含む。
= P2



第192図 VI区14号住居と出土遺物

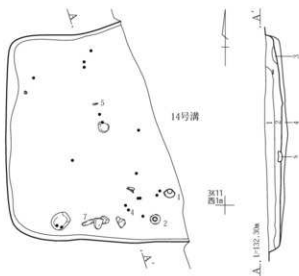
15号住居(第193・194図、PL.94・401)

グリッド 3 K11

主軸方位 N89° E

重複 14号溝に切られる。18号住居に隣接する。

形状と規模 南北方向に長軸を有する方形の竪穴住居で、東部は14号溝により失われている。長辺は3.46m、短辺は2.66m+、深さは0.13m、検出された最大の面積は7.40㎡である。



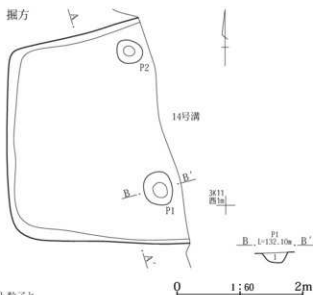
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名二ツ岳白色軽石・黄褐色砂質土シルト粒子と多量にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~20mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名二ツ岳白色軽石と多量にふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~15mm大)を含む。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 しぶい黄褐色砂質土ブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、緩やかに北に傾く床面を構築している。

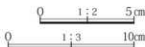
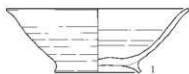
掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで、ほぼ平坦な掘方を構築している。

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。



P1 B-B'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量にふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。



第193図 VI区15号住居と出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物

14号溝により失われた可能性がある。

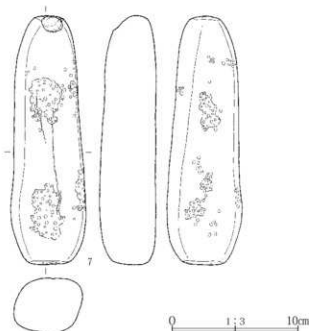
柱穴 床面の精査では見つからず、掘方の調査で柱穴の可能性のあるピット2基を検出した。竪穴との位置から考えて、主柱穴となる可能性は低い。柱穴に柱痕は認められなかった。

P 1は長径0.53m、短径0.44m、深さ0.20m。

P 2は直径0.45m、深さ0.17m。

遺物 床面から須恵器の椀(1・2)、刀子(5)、敲石(7)、床面付近から須恵器の椀(4)、埋土から椀(3)が出土した。

時代 平安時代9世紀第4四半期。



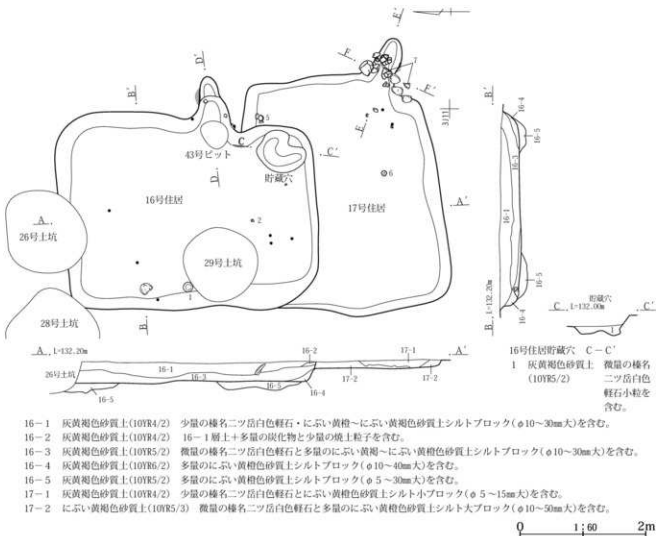
第194図 VI区15号住居の出土遺物

16号住居(第195~197図、PL.95・401)

グリッド 3 J 11

主軸方位 N87° E

重複 26・28・29号土坑、43号ピットに切られる。17号



第195図 VI区16・17号住居(1)

住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.08m、短辺は3.12m、深さは0.39m、面積は9.38㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む黄褐色砂質土が成層し、緩やかに竪穴を埋めている。

床面 灰黄褐色砂質土を0.10mほど断片的に貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅱ・Ⅲ層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。北壁の中央とカマド周辺を除いて幅0.65～1.10m、深さ0.04～0.10mの浅い溝状の窪みが壁際を周回する。**カマド** 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は

掘方

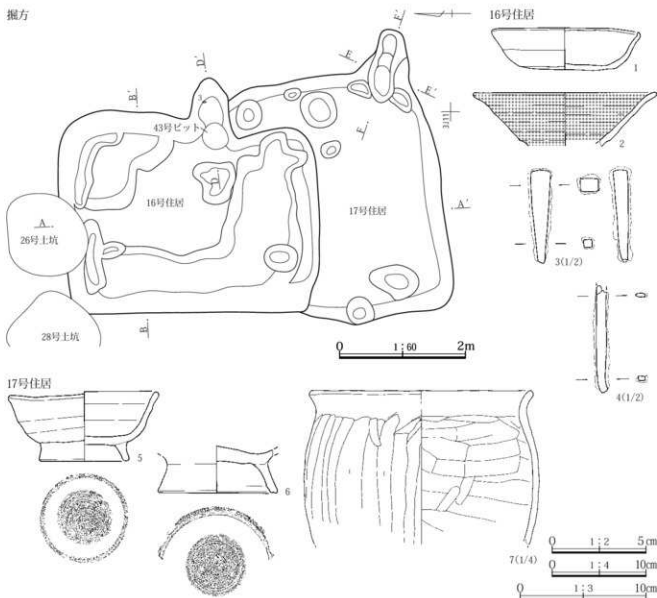
緩やかに傾いて立ち上がる。燃焼部底に焼土ブロックや炭化物の広がり認められない。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.11m、幅1.00m、深さ0.35mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.80m、短径0.66m、深さ0.15mの土坑を検出した。土坑底は歪んだ三日月形からなる。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面付近から土師器の杯(1)、黒色土器の椀(2)が出土した。

時代 10世紀に帰属する17号住居との調査での新旧関係



第196図 M区16・17号住居と出土遺物

は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代9世紀第4四半期と想定される。

17号住居(第195～197図、PL.96・401)

グリッド 3 J 11

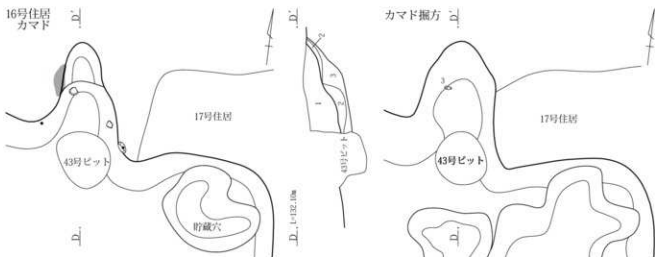
主軸方位 N87°W

重複 16号住居に切られる。

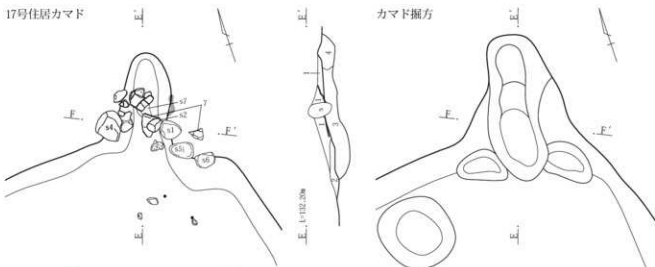
形状と規模 東西方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.85m、短辺は2.96m、深さは0.13m、面積は9.42㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む黄褐色にぶい黄褐色砂質土からなる。

床面 XII・XIII層の黄褐色砂質土を削り出して、平坦な床面を構築している。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)と微量の焼土粒子・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)・焼土粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量の焼土小ブロック・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm大)を含む。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)・焼土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)・焼土粒子・炭化物を含む。=使用面
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石・炭化物を含む。

0 1:30 1m

第197図 VI区16・17号住居(2)

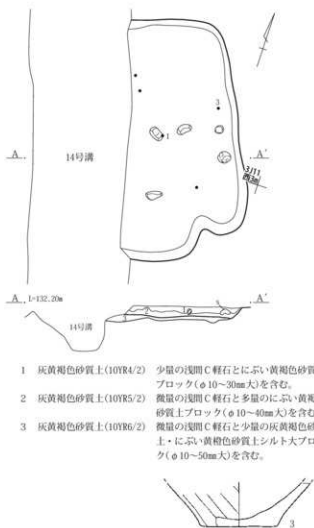
掘方 東壁と南西隅の壁際に長径0.42~0.55m、深さ0.10~0.15mの浅い円形の窪みが点在する。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃烧部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃烧部底は緩やかに傾いている。燃烧部底に焼土ブロックや炭化物の広がりは認められない。カマド埋土は長径0.10mの礫や土器片を多く含む灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.00m、幅1.00m、深さ0.22mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(5)、床面付近から椀(6)、カマド使用面から土師器の壺(7)が出土した。

時代 9世紀に帰属する16号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀第3四半期と想定される。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の浅間C軽石とに黄褐色砂質土ブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石と多量のに黄褐色砂質土ブロック(φ10~40mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の浅間C軽石と少量の灰黄褐色砂質土・に黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10~50mm大)を含む。

18号住居(第198図、PL.97)

グリッド 3 K11

主軸方位 N17°W

重複 14号溝に切られる。15・17号住居に隣接する。

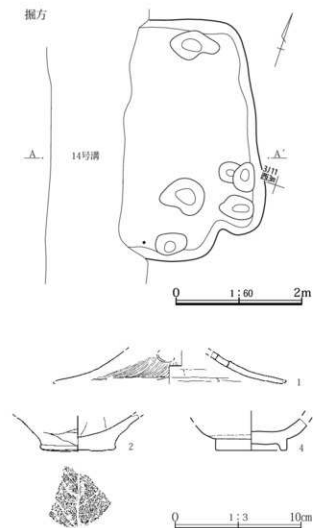
形状と規模 北西~南東方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴住居である。西側の大部分は14号溝により失われている。長辺は3.81m、短辺は1.82m、深さは0.23m、面積は5.48㎡である。

埋土 浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐色砂質土からなり、二ツ岳の白色軽石を含まない。

床面 灰黄褐色砂質土を0.07mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。全体に長径0.48~0.62m、深さ0.08~0.20mの浅い歪んだ円形の窪みが点在する。

炉と貯蔵穴 炉と貯蔵穴は検出されなかった。



第198図 VI区18号住居と出土遺物

柱穴 柱穴は検出されなかった。

遺物 床面付近から土師器の甕(3)、埋土から土師器の甕(2)や高杯(1)が出土した。埋土から出土した陶器(4)は混入遺物と考えられる。

時代 古墳時代4世紀。

19号住居(第199～201図, PL.98)

グリッド 3 K 14

主軸方位 N87°E

重複 14号溝、34・51号土坑、35号ピットに切られる。

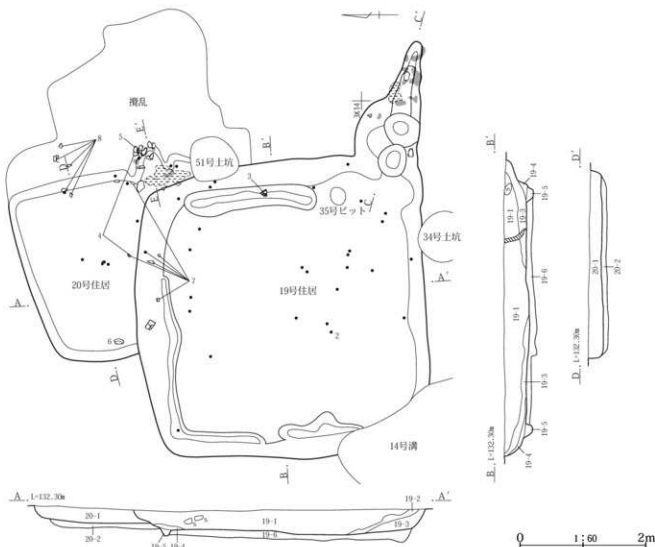
20号住居を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、正方形を呈する規模の大きな竪穴住居である。長辺は4.75m、短辺は4.61m、深さは0.41m、面積は15.07㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を多く含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.12mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築し、中央から南東部に長径0.68～1.15m、深さ0.04～0.12mの



- 19-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の様名ニツ岳白色軽石小粒と少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10～20mm大)を含む。
 19-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の様名ニツ岳白色軽石小粒・焼土粒子・焼土小ブロック(φ5～10mm大)を含む。
 19-3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の様名ニツ岳白色軽石小粒と多量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)を含む。
 19-4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の様名ニツ岳白色軽石小粒と多量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～40mm大)を含む。
 19-5 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の様名ニツ岳白色軽石小粒を含む。=住居周溝埋土
 19-6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の様名ニツ岳白色軽石小粒とふい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10～50mm大)を含む。
 20-1 暗褐色砂質土(10YR3/3) 多量の様名ニツ岳白色軽石小粒・ふい黄褐色にふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)を含む。
 20-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の様名ニツ岳白色軽石小粒・ふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)を含む。

第199図 VI区19・20号住居(1)

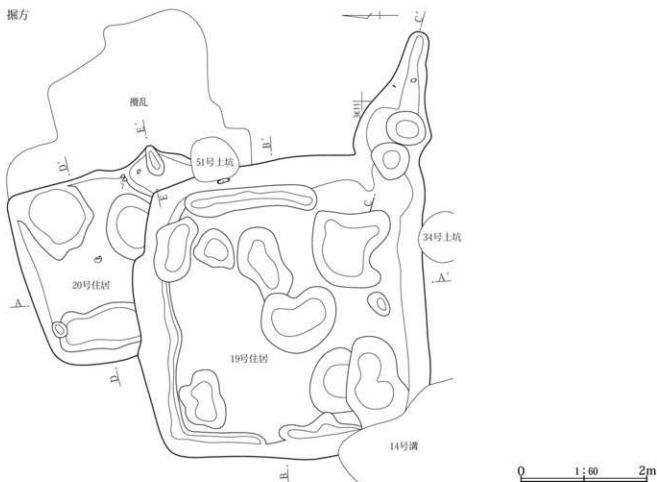
不定形～歪んだ楕円形の窪みを多く検出した。

周溝 床面の精査では確認できず、掘方の調査で検出した。カマド周辺と南壁際を除いた壁際を周回する。最大の上幅は0.43m、最少の底幅は0.08m、深さは0.10mである。

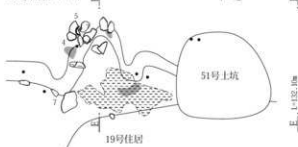
カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅に位置する。カマドの燃焼部は東壁を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部

は長径0.52～0.59mの円形の窪みによって使用面の大部分が失われている。残存する燃焼部底は緩やかに傾き、煙道に接続する。燃焼部底に焼土ブロックや炭化物の広がり認められない。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。煙道を含むカマドは長さ2.05m、煙道長1.09m、幅0.98m、深さ0.39mである。貯蔵穴は検出されなかった。

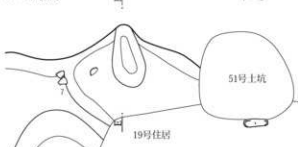
掘方



20号住居カマド



カマド掘方



1 灰黄褐色砂質土(10TR4/2) 少量の種名二ツ居白色軽石小粒と少量の濃い黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm大)と微量の炭化物を含む。

2 灰黄褐色砂質土(10TR4/2) 少量の種名二ツ居白色軽石小粒・濃い黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)を含む。

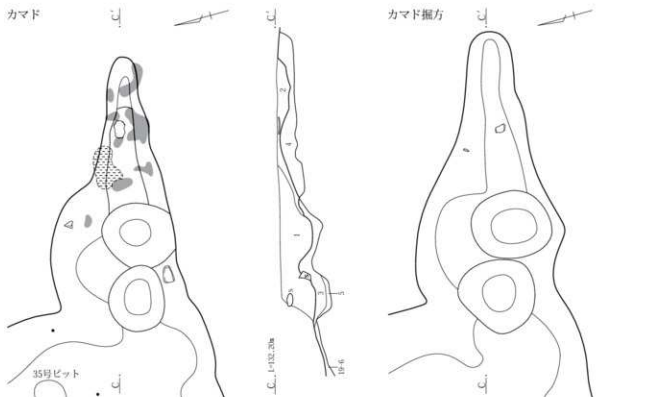
第200図 VI区19・20号住居(2)

柱穴 柱穴は検出されなかった。一辺が5m弱におよぶ
 竪穴の規模から考えて、主柱穴を有しない構造の建物と
 は考えにくい。これは主柱穴底がⅫ・ⅩⅢ層の黄褐色砂質
 土で止められたため柱穴の輪郭が不明瞭である可能性が
 想定される。こうした観点から掘方の平面形をみると、
 カマド周囲を除いて四隅の壁際に歪んだ方形の浅い窪み

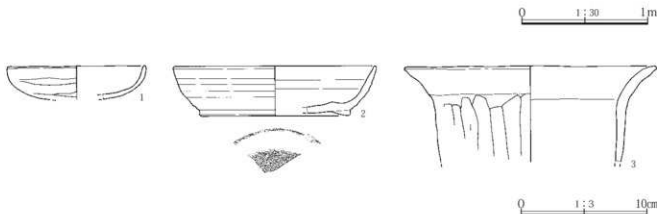
が認められ、これらは柱穴の痕跡であった可能性がある。

遺物 床面から土師器の甕(3)、埋土から土師器の杯
 (1)、須恵器の椀(2)が出土した。

時代 10世紀に帰属する20号住居との調査での新旧関係
 は矛盾する。遺構は出土遺物から飛鳥時代7世紀後半と
 想定される。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名二ツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~20mm大)と微量の炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~20mm大)と多量の焼土小ブロック(φ5~20mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~20mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~20mm大)を含む。
- 5 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4) 微量の極名二ツ岳白色軽石を含む。



第201図 VI区19号住居と出土遺物

20号住居(第199・200・202図、PL.99・401)

グリッド 3 K14

主軸方位 N76°E

重複 19号住居、51号土坑に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、南部は19号住居により失われている。長辺は2.97m+、短辺は2.92m、深さは0.31m、検出された最大の面積は4.99㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石や黄褐色砂質土ブロックを多く含む暗褐色砂質土からなる。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。長径0.89~1.28m+の歪んだ方角楕円形の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置すると想定される。カマドの燃焼部は東壁を奥に掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は緩やかに窪み奥壁で急な勾配で立ち上がる。焚口で炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.70m、幅0.70m、深さ0.18mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たな

い構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(4)、灰軸陶器の椀(6)、輪花椀(7)羽釜(8)が出土した。出土遺物は9世紀後半から10世紀前半の年代幅を有する。

時代 7世紀後半に帰属する19号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀前半と想定される。

21号住居(第203図、PL.100)

グリッド 3 I 9

主軸方位 N1°E

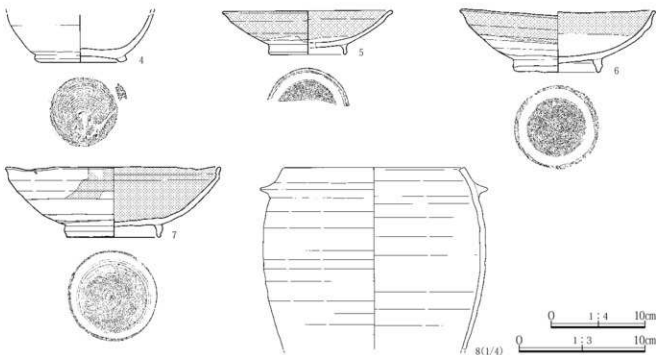
重複 1・2号竪穴、15号溝に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。北東隅は1号竪穴に、南部は2号竪穴と15号溝により失われている。長辺は4.03m+、短辺は3.42m、深さは0.21m、検出された最大の面積は7.80㎡である。

埋土 成層した灰黄褐色砂質土からなり、緩やかに傾斜して竪穴を埋めている。

床面 灰黄褐色砂質土を0.08mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。南部に長径2.50m、深さ0.11mの溝状の窪みや北西



第202図 VI区20号住居の出土遺物

部に長径0.45～0.48m、深さ0.29～0.34mの小ピットが点在する。

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。カマドは15号溝により失われた可能性がある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。掘方から検出された西と北壁際の小ピットは主柱穴ではなく、補助的な柱穴となる可能性がある。

遺物 床面から須恵器の甎(2・3)、埋土から須恵器の椀(1)が出土した。出土遺物は9世紀末から10世紀の年代幅を有する。

時代 平安時代9世紀第4四半期。

22号住居(第204・205図、PL.101・401)

グリッド 3 J 13

主軸方位 N80°E

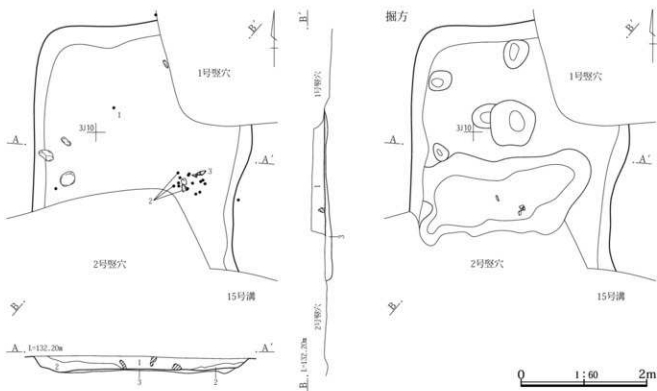
重複 なし。59号住居にやや隣接する。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.72m、短辺は3.66m、深さは0.27m、面積は12.45㎡である。

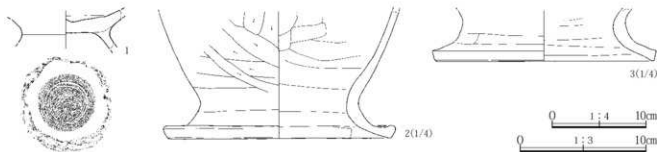
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 ニツ岳の白色軽石を含むにぶい黄褐色砂質シルトを0.07mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築してい



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極小ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の極小ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色～にぶい黄褐色砂質シルトブロック(φ5～40mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極小ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質シルト大ブロック(φ10～50mm大)を含む。やや硬化。



第203図 VI区21号住居と出土遺物

る。カマドの北には長径0.69m、短径0.64m、深さ0.20mの垂んだ円形の土坑1を検出した。

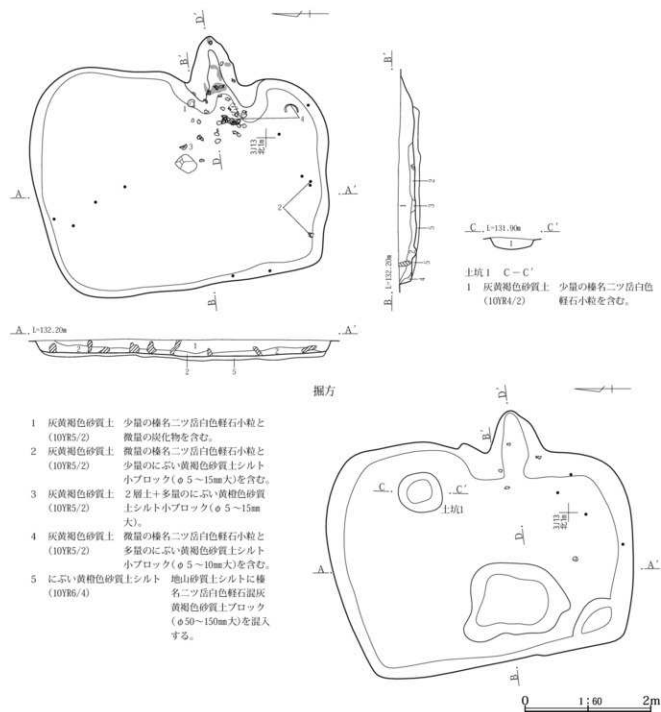
カマドと貯蔵穴 東壁中央の南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁を奥に掘り込んで壁の外に、左右の袖は灰褐色砂質土を貼って構築している。燃焼部底はほぼ平坦で、緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部底には焼土が広がり、焚口周辺では右側の床面に炭化物を検出した。カマ道理土は灰黄褐色砂質土が成層している。カマドは

長さ0.95m、幅0.74m、深さ0.20mである。貯蔵穴は検出されなかった。

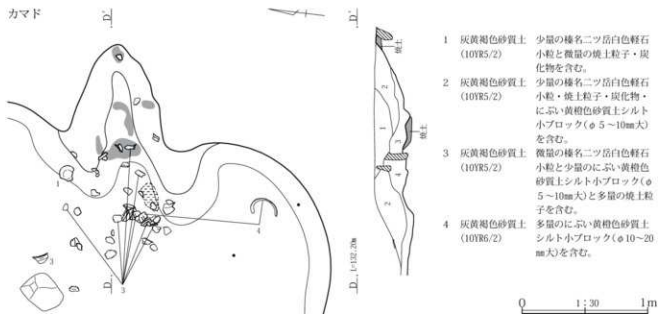
柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(4・5)、須恵器の椀(1)、床面付近から須恵器の椀(2)、カマドから土師器の甕(3)が出土した。出土遺物は9世紀後半の年代幅を有する。

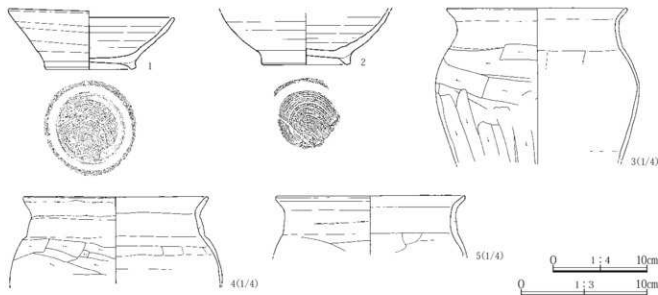
時代 平安時代9世紀第4四半期。



第204図 VI区22号住居



- 1 灰黄褐色砂質土 少量の極名ニツ岳白色軽石小粒と微量の焼土粒子・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土 少量の極名ニツ岳白色軽石小粒・焼土粒子・炭化物・ふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒と少量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)と多量の焼土粒子を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土 多量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 10~20mm大)を含む。



第205図 VI区22号住居と出土遺物

23号住居(第206図、PL.102)

グリッド 3 J 13

主軸方位 N80° E

重複 17号溝に切られる。17号溝を境に35号住居と重複するのは確かだが、埋土の切合い関係は認められない。
形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、東部の大部分は17号溝により失われている。長辺は3.10m、短辺は0.97m+、深さは0.24m、検出された最大の面積は3.00㎡である。

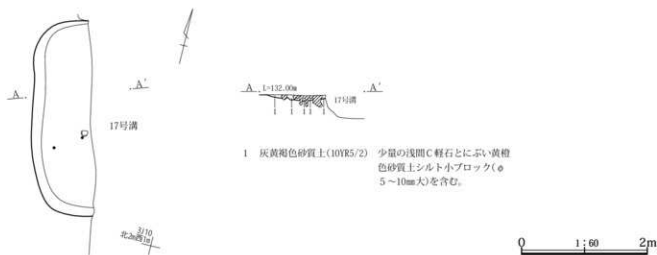
埋土 浅間Cテフラの軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 XII・XIII層の黄褐色砂質土を削り出して、平坦な床面を構築している。掘方は存在しない。

カマドと貯蔵穴 カマドは検出された範囲では認められない。17号溝により失われた可能性がある。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物 なし。

時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と想定される。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の浅間C軽石とにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)を含む。

第206図 VI区23号住居

24号住居(第207・208図、PL.102・103・401)

グリッド 3 1 11

主軸方位 N81° E

重複 17号溝、37号土坑に切られる。59号住居を切る。
形状と規模 東西方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。東部は17号溝によって失われている。長辺は2.68m+、短辺は2.51m、深さは0.20m、検出された最大の面積は5.70㎡である。

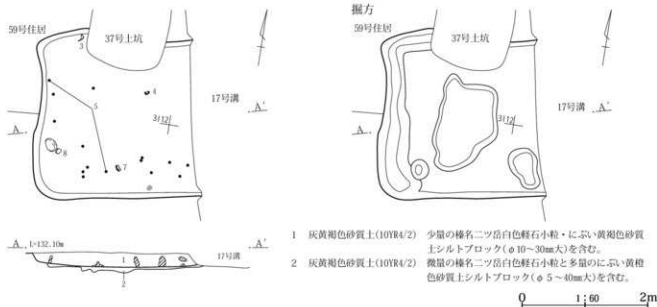
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を薄く0.05mほど貼って、床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。西壁と北西隅の北壁際を浅い溝状の窪みが周回する。最大の上幅は0.50m、最少の底幅は0.10m、深さは0.02mである。この溝状の窪みは周溝である可能性が高い。カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。カマドは17号溝により失われた可能性がある。

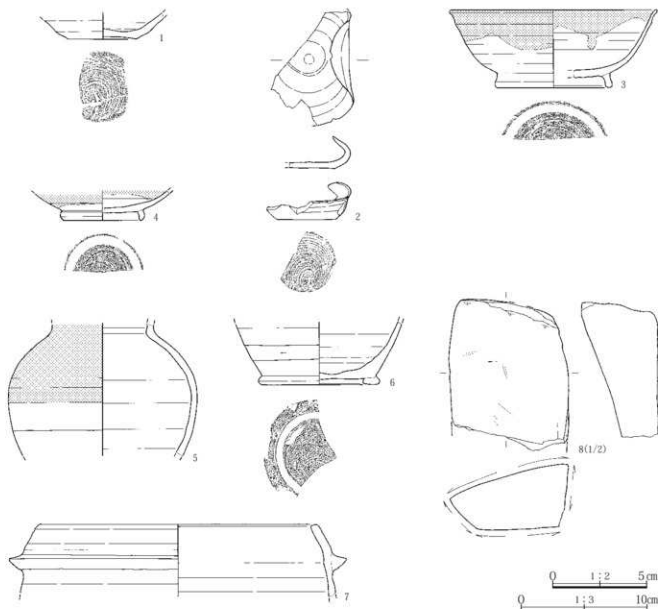
遺物 床面から灰釉陶器の長頸壺(5)、砥石(8)、床面付近から灰釉陶器の椀(3・4)、埋土から灰釉陶器の耳杯(2)、長頸壺(6)、掘方から須恵器の杯(1)が出土した。出土遺物は8世紀後半から10世紀後半の年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の椋名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ 10~30mm大)を含む。
2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒と多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ 5~40mm大)を含む。

第207図 VI区24号住居



第208図 VI区24号住居の出土遺物

25号住居(第209・210図、PL.104・402)

グリッド 3H9

主軸方位 N80°E

重複 17号溝、41・42号土坑に切られる。34号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.42m、短辺は4.02m、深さは0.37m、面積は14.26㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

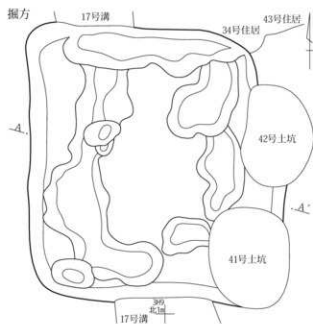
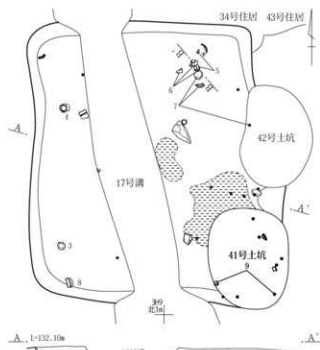
床面 ニツ岳の白色軽石を含み、にぶい黄橙色砂質土ブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.14mほど厚く貼って、平坦な床面を構築している。北西部の西壁寄りから灰軸陶器の皿(4)が出土した。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。北壁際とそれ以外の三辺の壁際から中央との間には幅0.64～0.88m、深さ0.07mの溝状の窪みが周回する。

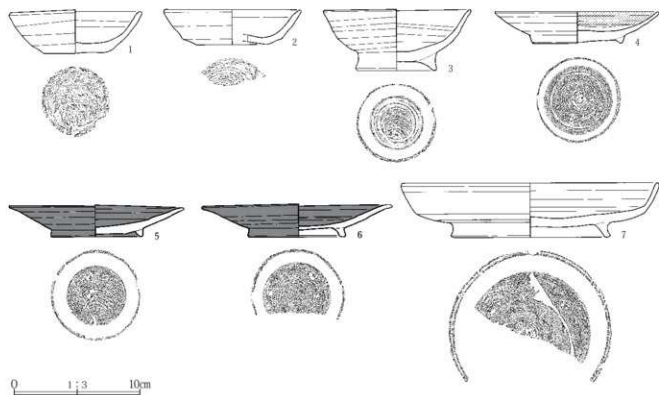
カマド 検出されなかった。南東部の床面からは炭化物の広がりを検出しており、カマドは41号土坑により失われた可能性が高い。おそらく東壁南東隅寄りに位置し、カマドの燃焼部は東壁の手前に構築されたものと想定される。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(3)、羽釜(8)、埋土から須恵器の杯(1・2)、盤(7)、緑軸陶器の段皿(5・6)が

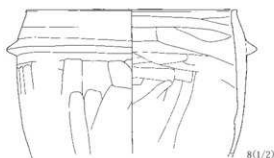


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の棒名ニッ居白色軽石小粒と赤い黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~20mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニッ居白色軽石小粒と多量の赤い黄褐色砂質土シルトブロック(φ 10~30mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニッ居白色軽石小粒と多量の赤い黄褐色砂質土シルトブロック(φ 10~40mm大)を含む。



第209図 VI区25号住居と出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第210図 VI区25号住居の出土遺物

0 1:4 10cm

出土した。出土遺物は8世紀中頃から10世紀後半の年代幅を有する。

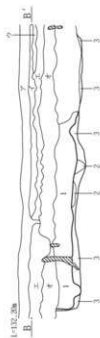
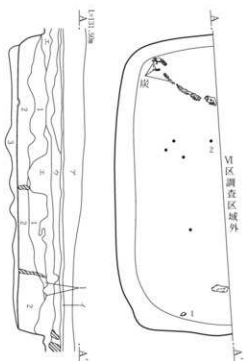
時代 平安時代10世紀後半。

26号住居(第211・212図、PL.105・402)

グリッド 3 D 6

主軸方位 N81°E

重複 VII区26号住居を統合した。



26号住居 A-A'

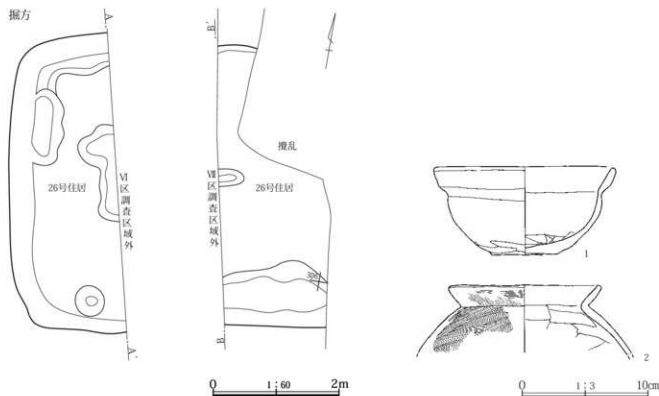
- ア 褐灰色砂質土(10YR5/1) 現代耕作土(隣接畑地耕作上)。
- イ 褐灰色砂質土(10YR5/1) 近・現代耕作土。一部上面酸化変色凝固。
- ウ 暗赤褐色土(10YR3/2) 中・近世耕作土。少量の白色軽石小粒を含む。
- エ 灰黄褐色砂質土(10YR4/2-5/2) 平安～中世堆積土。
- 1 黒褐色砂質土(10YR3/2) 多量の様名ニツ岳白色軽石小粒と少量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の様名ニツ岳白色軽石小粒とふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)と微量の炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の様名ニツ岳白色軽石小粒を含む。

VII区26号住居 B-B'

- ア 現代表土(客土) 塩ビ管片等を含む。
- イ 近現代水田耕作土
- ウ 近現代水田床土 鉄分酸化凝固。
- エ 褐灰色砂質土(10YR6/1) 中・近世耕作土。
- オ 褐灰色砂質土(10YR4/1) 中・近世耕作土。
- 1 黒褐色砂質土(10YR3/1) 少量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ30～50mm大)を含む。
- 2 褐灰色砂質土(10YR5/1) 少量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量のふい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10～50mm大)を含む。

0 1:60 2m

第211図 VII区26号住居



第212図 VI区26号住居と出土遺物

形状と規模 東西方向に長軸を有する竪穴住居でVI・VII区にまたがって存在する。竪穴の中央は調査区境のため記録は取れなかった。北東～東部は攪乱により失われている。長辺は5.10m、短辺は4.78m、深さは0.42m、検出された最大の面積は24.37㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む黒褐～灰黄褐色砂質土からなる。

床面 微量の軽石を含み、灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。北西隅寄りから炭化材が出土した。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。南壁の東寄りには幅1.08m、深さ0.12mの浅い溝状の窪みが検出された。また南西隅からは直径0.48m、深さ0.36mのピットが検出された。

カマド カマドは検出されなかった。攪乱によって失われた可能性がある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(2)、埋土から鉢(1)が出土した。

時代 出土遺物は古墳時代4世紀代を示すが、掘方埋土

にニツ岳の白色軽石を含むため6世紀以降の可能性はある。

28号住居(第213・214図, PL.106・107・402)

グリッド 3 E 9

主軸方位 N88°W

重複 3号竪穴を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.54m、短辺は3.81m、深さは0.50m、面積は14.20㎡である。

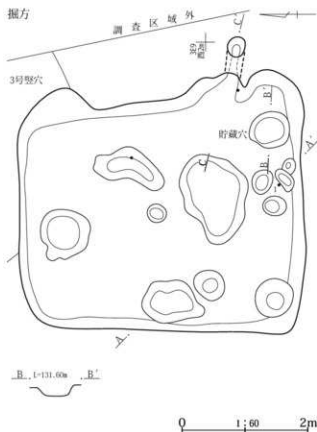
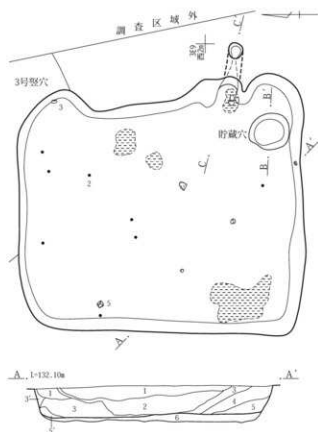
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が傾きながら成層して竪穴を埋めている。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.12mほど貼って、床面を構築している。中央の北東部寄りと南西隅から炭化物の広がりを検出した。

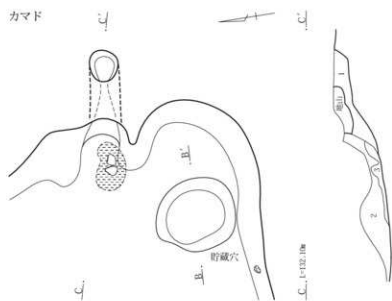
掘方 XII・XII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。北壁際を除いて全体に不定形の窪みや円形の小ピットを多く検出した。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに傾斜して、奥壁は緩やかな勾配で立ち

第4章 第2面の遺構と出土遺物

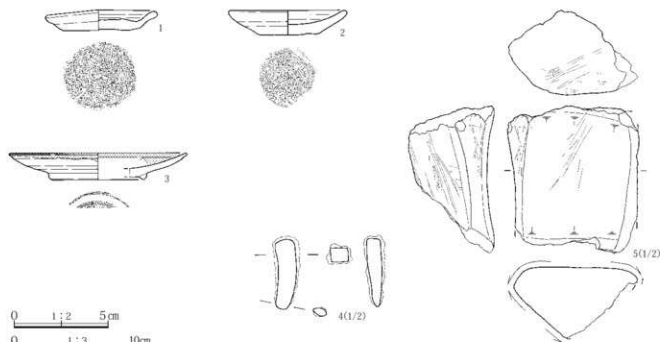


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の棒名ニツ活白色軽石小粒と少量の灰黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)、微量の炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名ニツ活白色軽石小粒と多量の灰黄褐色~灰黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)と微量の炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ活白色軽石小粒・灰黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
- 3' 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 3層上+少量の塚崩落土に灰黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名ニツ活白色軽石小粒・灰黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)と微量の炭化物を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ活白色軽石小粒・炭化物・焼土粒子を含む。
- 5' 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 5層上+少量の塚崩落土に灰黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニツ活白色軽石と多量の灰黄褐色~灰黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の灰黄褐色~灰黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)と微量の焼土粒子・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ活白色軽石小粒と微量の炭化物・焼土粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土シルト(10YR4/3) 少量の灰・焼土小ブロック(φ10~20mm大)と微量の炭化物を含む。

第213図 W区28号住居



第214図 MIK28号住居の出土遺物

上がり、煙道に接続する。燃焼部から煙道にかけて列り抜かれた天井が残されており、長さは0.80mにおよぶ。燃焼部底からは炭化物の広がりを検出した。カマド埋土にはふい黄褐～灰黄褐色砂質土である。煙道を含むカマドは長さ1.27m、煙道長は0.68m、幅0.45m、深さ0.37mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.66m、短径0.58m、深さ0.13mの土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から灰釉陶器の皿(3)、砥石(5)、埋土から須恵器の杯(2)、掘方から須恵器の杯(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

29号住居(第215～217図、PL.107・108・402)

グリッド 3 | 15

主軸方位 N78° E

重複 なし。30号住居に隣接しており同時存在の可能性はない。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居である。試掘溝によって一部が失われている。長辺は5.16m、短辺は3.86m、深さは0.40m、面積は

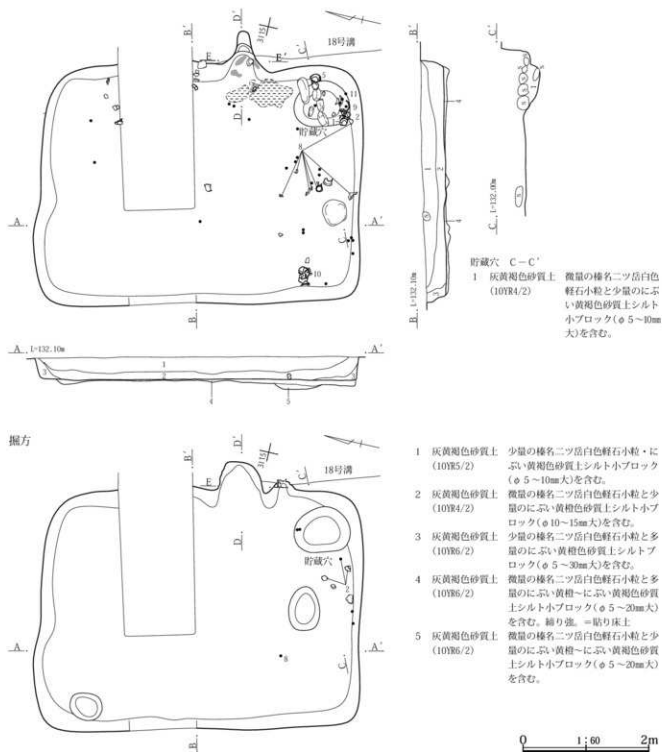
16.18㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が縁から中央に向かって緩やかに傾きながら成層し、竪穴を埋めている。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.07mほど薄く貼って、床面を構築している。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。長径0.36～0.48m、深さ0.05～0.09mの浅い円形の窪みを検出した。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに窪み、奥壁で急な勾配で立ち上がる。燃焼部底や奥壁には焼土帯が広がり、焚口周辺で炭化物の広がりを検出した。燃焼部奥壁の右側には長径0.30mの垂円礫1点が据えられており、これはカマド構築材と考えられる。カマド埋土は灰黄褐色砂質土が成層している。カマドは長さ0.71m、幅0.53m、深さ0.34mである。
貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.88m、短径0.73m、深さ0.30mの土坑を検出した。埋土からは長径0.12～0.42mの垂円礫7点が出土し、礫は床面の高さで並んで堆積している。また坑の底部からも同様に複数の礫が出土しており、土坑の埋没過程で礫が堆積したと考えられる。底から0.22～0.28m上で須恵器の杯(4)や



第215図 MIK29号住居

皿(1・2)、須恵器の椀(5)、土師器の甕(11)や台付甕(9)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

遺物 床面から土師器の甕(10)、埋土から灰軸陶器の皿(7)、掘方から須恵器の椀(6)が出土した。

時代 平安時代9世紀第3四半期。

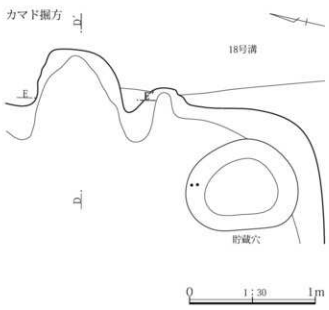
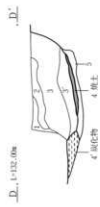
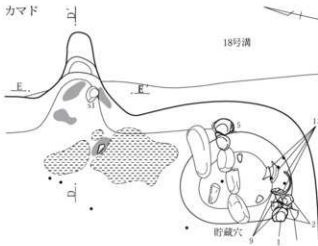
30号住居(第218~220図, PL.108・109・403)

グリッド 3H15

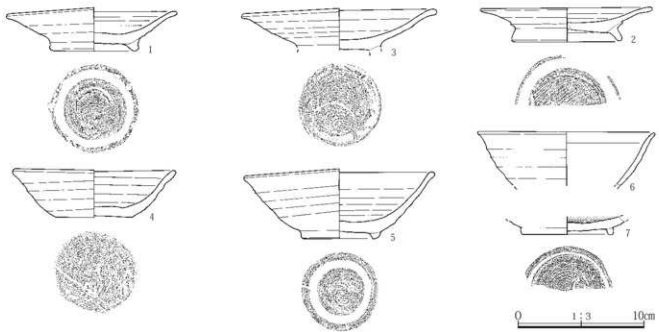
主軸方位 N78°E

重複 31号住居に切られる。18号溝を切る。29・48号住居に隣接しており、同時存在はない。

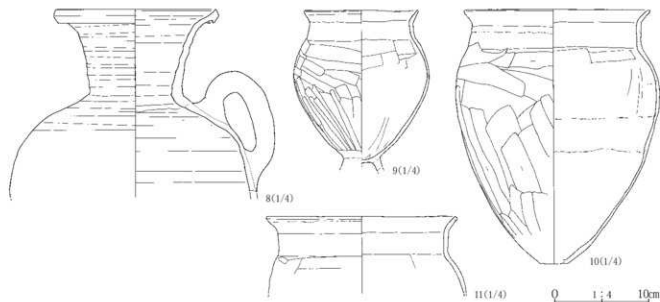
形状と規模 南北方向に長軸を有し、正方形を呈する壁



- 1 灰黄褐色砂質土 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト粒子を含む。(10YR4/2)
- 2 灰黄褐色砂質土 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト粒子・焼土粒子を含む。(10YR5/2)
- 3 灰黄褐色砂質土 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒・焼土粒子・炭化物とにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)を含む。(10YR6/2)
- 3' 灰黄褐色砂質土 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒と少量の炭化物・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5mm程)と多量の焼土粒子・焼土小ブロック(φ 5~20mm大)を含む。(10YR6/2)
- 4 灰・焼土層=使用面
- 4' 炭化物層=使用面
- 5 灰黄褐色砂質土 微量の名ニツ岳白色軽石小粒と多量の焼土粒子・焼土小ブロック(φ 5~20mm大)を含む。(10YR6/2)



第216図 VI区29号住居と出土遺物



第217図 VI区29号住居の出土遺物

穴住居である。長辺は3.96m、短辺は3.73m、深さは0.47m、面積は12.62㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。南西隅から直径0.60m、深さ0.37mの円形の土坑1を、中央から長径1.55m、深さ0.07mの歪んだ浅い方形の窪みを検出した。土坑1は貯蔵穴の可能性ある。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、奥壁は緩やかな勾配で立ち上がり煙道に接続する。煙道の直径は0.05~0.12mほど掘り抜かれ、燃焼部から0.63mの天井が残されている。燃焼部左右の壁には長径0.31~0.35mの垂円礫2点が据えられており、カマド構築材と考えられる。燃焼部の中央には長径0.15mの垂円礫が垂直に据えられており、支脚と考えられる。焚口の床面には長径0.25~0.31mの棒状垂円礫が出土した。これはカマドの崩落により移動したカマドの天井高架材と考えられる。燃焼部の壁には焼土ブロックが、底から焚口周辺では炭化物の広がりを出した。カマド埋土は炭化物まじりの灰黄褐色砂質土からなる。煙道を含めたカマドの長さは1.44m、煙道長0.77m、幅0.97m、深さ0.50mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から須恵器の椀(1)、鉄釘(2)が出土した。

時代 平安時代9世紀後半。

31号住居(第218~220図、PL.109・110・403)

グリッド 3H15

主軸方位 N68°E

重複 33号住居に切られる。住居の平面プランが30号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する。長辺は4.31m、短辺は3.27m、深さは0.34m、面積は12.07㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.15mほど厚く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。カマド前から南部の中央で長径1.79m、短径1.75m、深さ0.14mの歪んだ円形を呈する浅い窪みを検出した。

カマド 東壁の南東隅に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は平坦で緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部底の左側で焼土帯を、焚口周辺は炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.04m、

幅0.75m、深さ0.26mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.95m、短径0.61m、深さ0.23mの土坑を検出した。底直上から長径0.30mの垂円～円礫が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(3)、埋土から椀(4)、鉄製品(5)が出土した。

時代 9世紀後半に帰属する33号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代9世紀第4四半期に想定される。

33号住居(第218～220図、PL.109・110・403)

グリッド 3 F 15

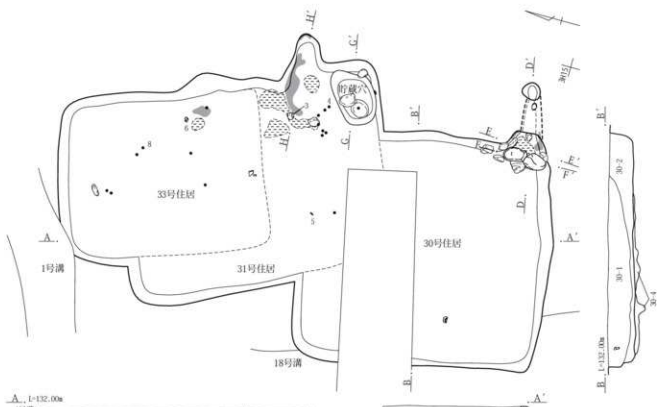
主軸方位 N71°W

重複 1号溝に切られる。31号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する。長辺は3.46m、短辺は2.74m、深さは0.37m、面積は7.52㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を多く含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 にぶい黄褐色砂質シルトブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.12mほど貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。東壁の南東隅寄りの床面からは焼土と灰のプ

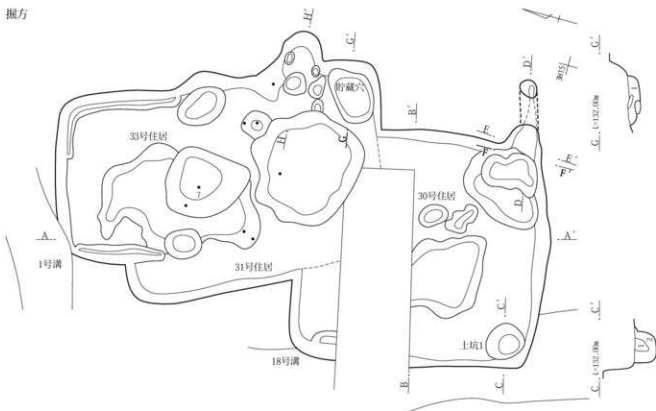


- 30-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の様名ニツ岳白色軽石小粒と少量のにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ10～20mm)を含む。
- 30-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の様名ニツ岳白色軽石小粒と少量のにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5～10mm)を含む。
- 30-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の様名ニツ岳白色軽石小粒と少量のにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5～15mm)を含む。
- 30-4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の様名ニツ岳白色軽石小粒・炭化物と多量のにぶい黄褐色～にぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5～10mm)大)を含む。締り強。
- 31-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の様名ニツ岳白色軽石小粒と少量のにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ10～20mm)大)と微量の炭化物を含む。
- 31-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の様名ニツ岳白色軽石小粒と多量のにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5～10mm)大)を含む。=貼り床土
- 31-3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の様名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5～15mm)大)を含む。
- 33-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の様名ニツ岳白色軽石(φ5～30mm)大)と少量のにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5～15mm)大)を含む。
- 33-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の様名ニツ岳白色軽石(φ5～30mm)大)とにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5～15mm)大)を含む。

0 1; 60 2m

第218図 VI区30・31・33号住居(1)

掘方



30号住居土坑1 C-C'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒とふい黄褐色砂質土シルト粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒と少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

31号住居貯蔵穴 G-G'

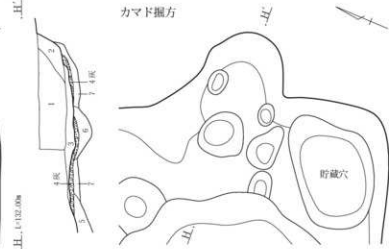
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒と少量のふい黄褐色砂質土シルト粒子・炭化物小粒を含む。

0 1:60 2m

31号住居カマド



カマド掘方

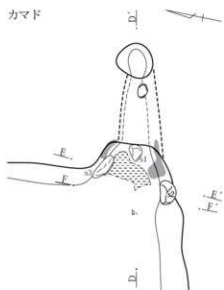


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量の極名ニツ岳白色軽石とふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒と少量の焼土粒子・焼土小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 4 灰・炭化物層
- 5 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量の極名ニツ岳白色軽石小粒と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。=住居側方埋土
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と多量の灰・焼土粒子を含む。=灰落としピット
- 7 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

0 1:30 1m

第219図 VI区30・31・33号住居(2)

カマド

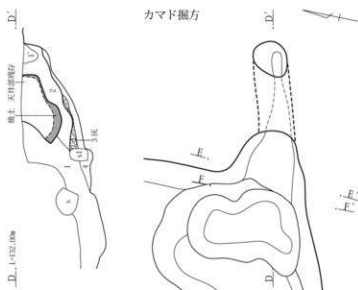


E, 1-132.00m

E, 1-132.00m



カマド掘方

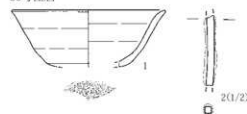


D, 1-132.00m

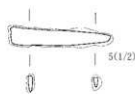
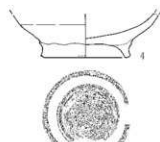
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト粒子を含む。
- 1' 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 1層上+少量の焼土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の炭化物粒子と多量の焼土粒子を含む。=使用面
- 3 炭化物・灰層=使用面
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

0 1:30 1m

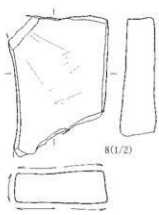
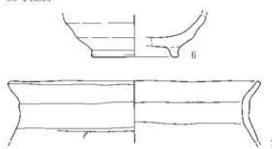
30号住居



31号住居



33号住居

0 1:2 5cm
0 1:3 10cm

第220図 VI区30号住居と30・31・33号住居の出土遺物

ロックを検出した。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。南東隅と西壁際から長径0.59～0.81m、深さ0.08～0.09mの浅い円形の窪みを検出した。また、北西隅の西壁際と北東隅から東壁際に周回する浅い溝状の窪みを検出した。溝の最大の上幅は0.32m、最少の底幅は0.12m、深さは0.03mである。これらの溝状の窪みは周溝の可能性が高い。

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。床面で検出された焼土と灰の範囲には、掘方で楕円形の浅い窪みを検出しており、これらはカマドの痕跡と考えられる。これらの状況からカマドは東壁の南東隅に位置するものと想定される。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から須恵器の椀(6)、砥石(8)、掘方から土師器の甕(7)が出土した。

時代 9世紀後半に帰属する31号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代9世紀第三四半期と想定される。

32号住居(第221・222図, PL.110・111・403)

グリッド 3 F 8

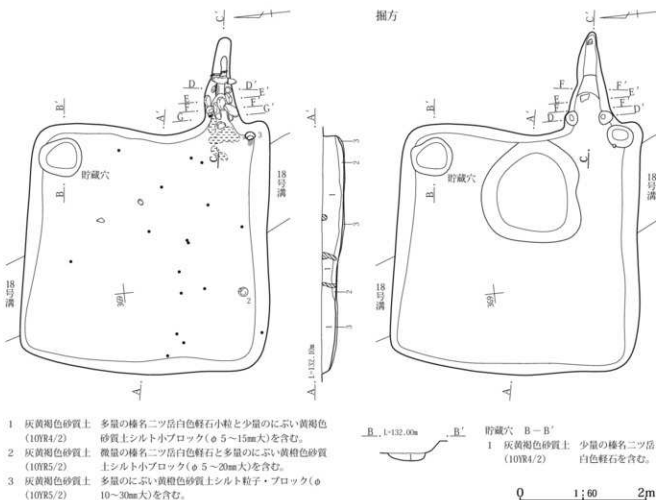
主軸方位 N81°W

重複 18号溝を切る。27・28号住居に隣接しており、同時存在はない。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、正方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.91m、短辺は3.88m、深さは0.34m、面積は12.27㎡である。

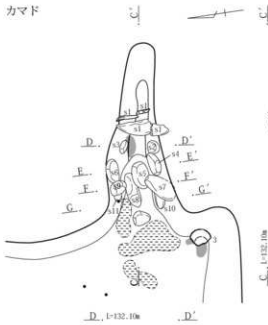
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 ぶい黄褐色砂質土ブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.04mほど薄く貼って、やや東側に傾いた床面を構築している。

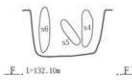
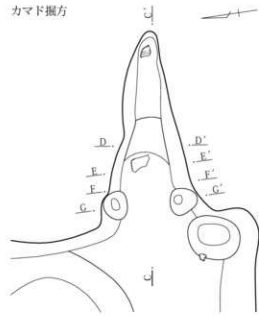


第221図 VI区32号住居

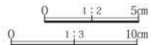
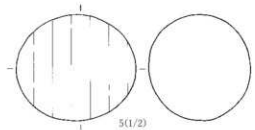
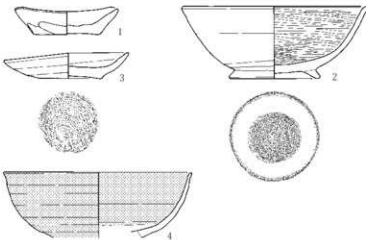
カマド



カマド掘方



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名二ツ岳白色軽石と微量の炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と微量の極名二ツ岳白色軽石・炭化物・焼土粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の炭化物を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の焼土粒子を含む。
- 5 炭化物層 少量の焼土粒子を含む。
- 6 地山砂質土シルトの焼土化。



第222図 VI区32号住居と出土遺物

掘方 XII・XII層の黄褐色砂質土を掘り込んでほぼ平坦な掘方を構築している。東壁際から直径1.58m、深さ0.04mの浅い歪んだ円形の窪みを検出した。

カマド 東壁の南東隅に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、奥壁は約45°の勾配で立ち上がり煙道に接続する。煙道底の幅は0.09～0.14mで、煙道底直上の埋土から長径0.42m、短径0.12m、厚さ0.16mの円礫が出土した。これは煙道の天井高架材と考えられる。燃焼部左右の壁には長径0.22～0.36mの垂円礫7点が据えられており、燃焼部壁のカマド構築材と考えられる。焚口に近い右壁のカマド構築材の上には長径0.28m、短径0.14m、厚さ0.07mの円礫が置かれており、燃焼部底直上の埋土中に長径0.22～0.28mの垂円礫2点が出土した。これらは燃焼部の天井高架材とカマドの前落により移動した構築材と考えられる。燃焼部の壁には焼土ブロックが、底から焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は炭化物まじりの灰黄褐色砂質土からなる。煙道を含めたカマドの長さは1.82m、煙道長0.88m、幅0.52m、深さ0.37mである。

貯蔵穴 北東隅の壁際から長径0.38m、短径0.57m、深さ0.15mの土坑を検出した。土坑はカマドが南東隅に位置することや形状などから貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマド使用面から黒色土器の椀(2)、埋土から須恵器や土師器の杯(1・3)、灰釉陶器の椀(4)、球状の石製品(5)が出土した。出土遺物は10世紀から11世紀前半の年代幅を有する。

時代 平安時代11世紀前半。

34号住居(第223～225図、PL.111・403)

グリッド 3 G 10

主軸方位 N 89° E

重複 25・37・43号住居、17号溝に切られる。23号住居に17号溝を隔てて接するが重複関係は不明である。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈すると想定される竪穴で、調査時には34・35号住居としたが、資料整理で統合した。竪穴は南東部を43号住居に、南側を25号住居に、西側は17号溝によって失われている。竪

穴の規模は掘方から推定して長辺は6.50m+、短辺は3.60m+、深さは0.35mで、検出された最大の面積は23.4㎡である。

埋土 ツツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 ツツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.25mほど厚く貼って平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂礫層を掘り込み、構築している。竪穴の中央と南東隅の壁際から不定形の窪みを検出した。

カマド 検出されなかった。掘方の調査で東壁の中央に一部が東壁から外側に突き出した窪みを検出しており、カマドの掘方の可能性がある。

遺物 埋土から須恵器の杯(3～6)、土師器の鉢(2)、甕(8)、鉄釘(10)と鉄鏝(11)、掘方から土師器の甕(9)が出土した。

時代 平安時代9世紀第1四半期。

43号住居(第223・224・226図、PL.116・403)

グリッド 3 G 10

主軸方位 N 82° E

重複 34号住居、18号溝を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居で西側は調査時により失われた。長辺は3.25m+、短辺は2.72m、深さは0.26mで、検出された最大の面積は6.64㎡である。

埋土 ツツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなり、床面は黒褐色砂質土の薄層が覆う。

床面 灰黄褐色砂質土を0.15mほど厚く貼って平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂質土を掘り込み、ほぼ平坦な掘方を構築している。北東隅に長径0.90m、短径0.45m、深さ0.09mの歪んだ長方形の浅い窪みを検出した。

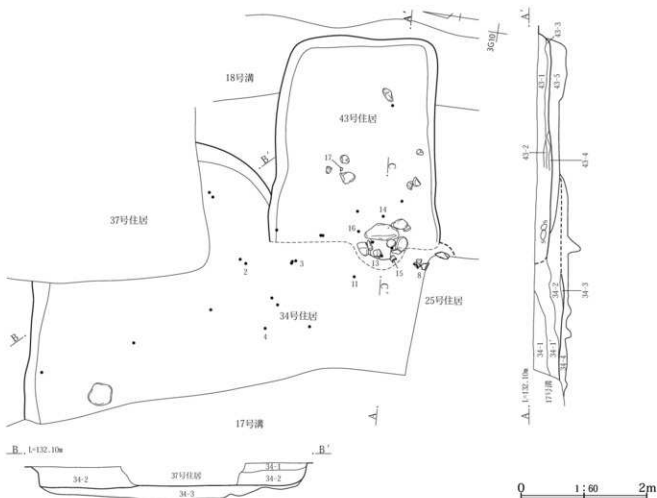
カマドと貯蔵穴 調査時に34号住居のカマドとして記録されたが資料整理で43号住居に統合した。カマドは西壁の南西隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は西壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築したものと想定される。燃焼部底は緩やかに傾斜し燃焼部底からは炭化物を検出した。燃焼部左右の壁には長径0.21～0.30mの垂円礫2点が据えられており、カマド構築材と考えられる。燃焼部

底には埋土中に長径0.55m、短径0.25m、厚さ0.14mの棒状垂角礫が出土した。これはカマドの崩落により移動したカマドの天井高架材と考えられる。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.65m、幅0.40m、深さ0.16mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から須恵器の椀(16)、灰軸陶器の椀(17・18)、カマド埋土から須恵器の椀(13~15)が出土した。

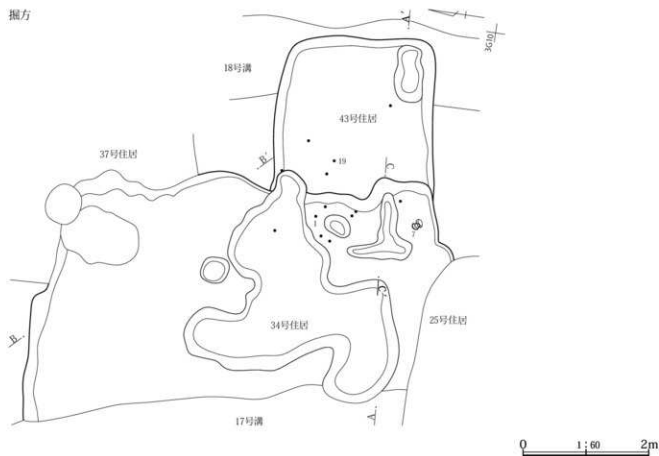
時代 平安時代10世紀第3四半期。



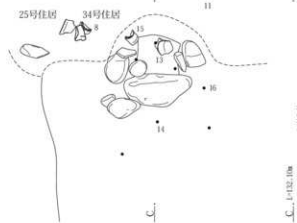
- | | |
|------------------------|--|
| 34-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) | 少量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と微量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)を含む。 |
| 34-1' 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) | 少量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と微量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)と少量の炭化物粒子を含む。 |
| 34-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) | 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒・焼土粒子・炭化物粒子と少量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~20mm大)を含む。 |
| 34-3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) | 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と少量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)・炭化物粒子を含む。 |
| 34-4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) | 少量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と多量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。 |
| 43-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) | 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と少量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)を含む。 |
| 43-2 黒褐色砂質土(10YR2/2) | 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と多量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~20mm大)を含む。 |
| 43-3 黒褐色砂質土(10YR2/2) | 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と少量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。 |
| 43-4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) | 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と多量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。 |
| 43-5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) | 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と多量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。 |

第223図 VI区34・43号住居(1)

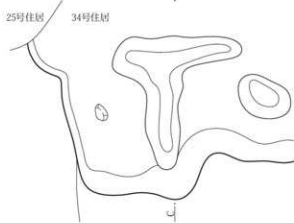
掘方



43号住居カマド

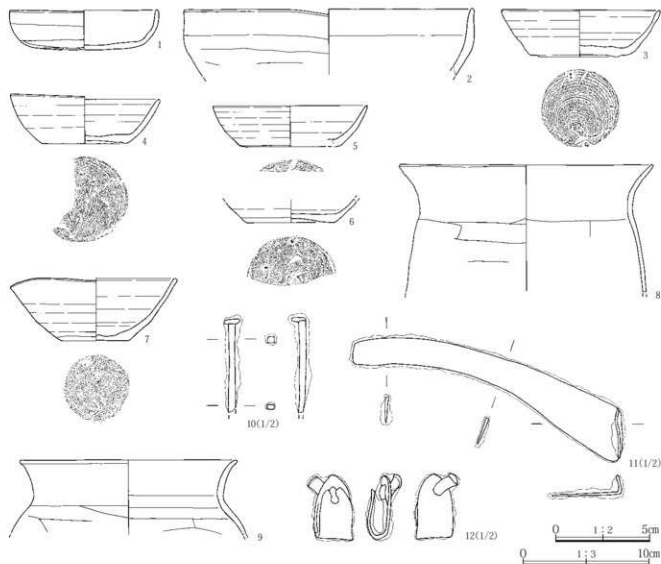


カマド掘方



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒と少量の赤い・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石小粒と炭化物粒子を含む。
- 3 炭化物層
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒と多量の赤い・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒と炭化物粒子を含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒・炭化物と多量の赤い・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~15mm大)を含む。

第224図 VI区34・43号住居(2)



第225図 VI区34号住居の出土遺物

37号住居(第227~229図, PL.112・403)

グリッド 3G11

主軸方位 N86°E

重複 38号住居に切られる。34号住居, 18号溝を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、正方形を呈する竪穴住居で、北東部は38号住居により失われている。掘方から推定した長辺は5.48m、短辺は5.00m、深さは0.33m、検出された最大の面積は27.25㎡である。

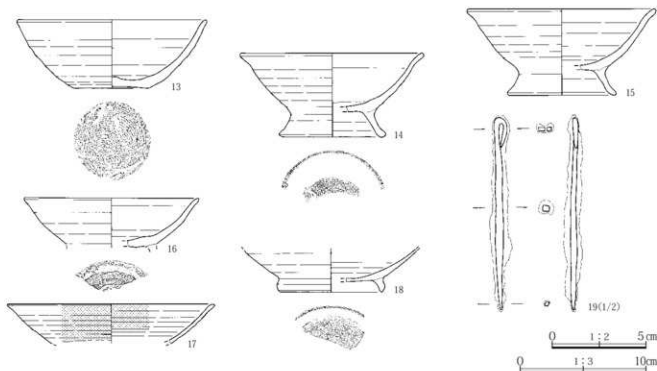
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が成層している。

床面 灰黄褐色砂質土を0.04mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。南西隅は34号住居の掘方の調査で失われている。中

央から北東隅寄りの東壁際まで段状に窪み、全体に歪んだ円形の深い窪みが点在する。これらは床面からの深さが0.30mを越えるものが多く、床下から検出された柱穴の可能性もある。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅に2基のカマドが位置し、南壁側をカマド1、東壁側をカマド2とした。両カマドの焚口付近の炭化物の状況や残存状況から、カマド1・2は住居廃絶時に同時に使用されていたものと考えられる。両方のカマド燃焼部は東南隅の壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。カマド1の燃焼部底は平坦で緩やかな勾配で立ち上がる。カマド1の燃焼部の底や壁には焼土ブロック、焚口では炭化物の広がりを検出した。カマド1の埋土は灰黄褐色砂質土からなり成層している。カマド1は長さ1.30m、幅0.52m、深さ0.29m



第226図 VI区43号住居の出土遺物

である。カマド2の燃焼部底はほぼ平坦で、緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部底には焼土帯、焚口では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は二ツ岳の白色軽石や黒褐色炭化物を含む、灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.28m、幅0.57m、深さ0.24mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 床面の精査では見つからず、掘方の調査で支柱穴の可能性が高いビット3基を検出した。これらは長径1.27m、短径0.80m、深さ0.10mのP1、長径0.55m、短径0.50m、深さ0.38mのP2、長径0.96m、短径0.74m、深さ0.24mのP3である。柱間はP1・P2が3.30m、P2・P3が2.90mである。なお柱穴には柱痕は認められない。

遺物 埋土から刀子(5)、掘方から須恵器の椀(2・3)、杯(1)、土師器の甕(4)が出土した。

時代 平安時代10世紀第4四半期。

38号住居(第227～230図、PL.112・129・403)

グリッド 3G11

主軸方位 N76°E

重複 37・57号住居、18号溝を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈す

る竪穴住居である。掘方から推定した長辺は4.13m、短辺は3.57m、深さは0.21m、面積は11.41㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.05mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。南壁側は37号住居の掘方の調査で失われている。東部は西部から段状に窪み、全体に歪んだ円形の深い窪みが点在する。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は失われており、緩やかな勾配で立ち上がる。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドの長さは0.73m、幅0.65m、深さ0.15mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面付近から須恵器の椀(7)、カマド埋土から須恵器の甕(10)、掘方から須恵器の椀(8)、土師器の甕(9)が出土した。

時代 平安時代10世紀末～11世紀以降。

57号住居(第227・228・230図、PL.129・403)

グリッド 3 G 12

主軸方位 N85°E

重複 38・47・54号住居に切られる。18号溝を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴で、南部は38号住居により失われている。長辺は3.58m、短辺は2.45m+、深さは0.14m、検出された最大の面積は6.70㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からな

る。

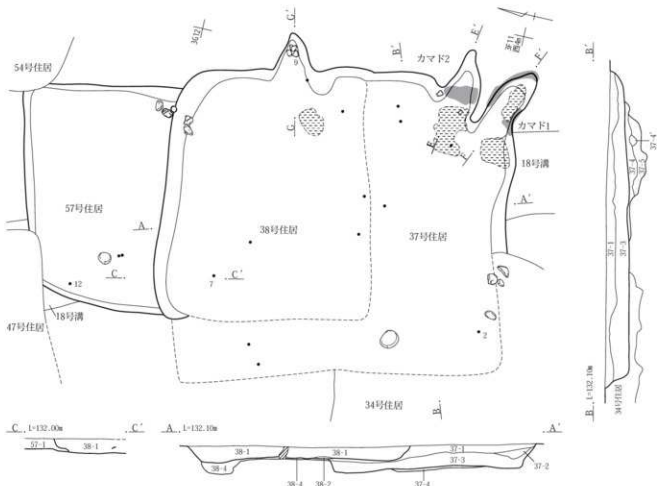
床面 灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。西壁～東壁際に溝状～不定形の浅い窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 カマドや貯蔵穴は検出されなかった。

遺物 埋土から須恵器の椀(12)、掘方から土鍾(13)が出土した。

時代 9世紀後半に帰属する54号住居との調査での新旧

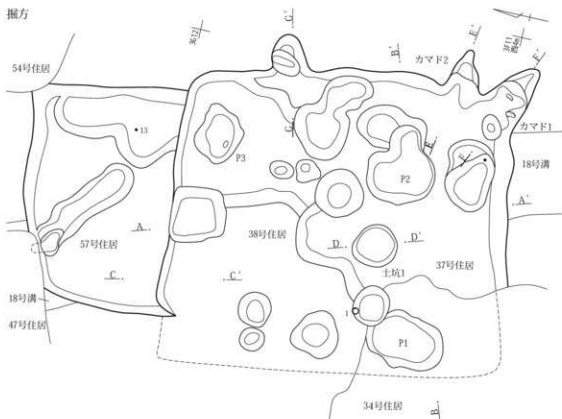


- 37-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック・黒褐色砂質土ブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 37-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石小粒・黒褐色砂質土ブロック(φ10~30mm大)と多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 37-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
- 37-4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石小粒とにぶい黄褐色にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~20mm大)を含む。
- 37-4' 37-4層上+多量の焼土粒子を含む。
- 37-5 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3) 少量の焼土小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 38-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石小粒と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~20mm大)を含む。
- 38-2 黒褐色砂質土(10YR2/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒と少量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)・焼土小ブロック(φ10~20mm大)を含む。
- 38-3 黒褐色砂質土(10YR2/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
- 38-4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
- 57-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石小粒とにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~40mm大)を含む。

第227図 VI区37・38・57号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物

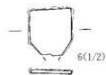
掘方



37号住居土坑1 D-D'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の灰を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の炭化物を層状に含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の炭化物を含む。

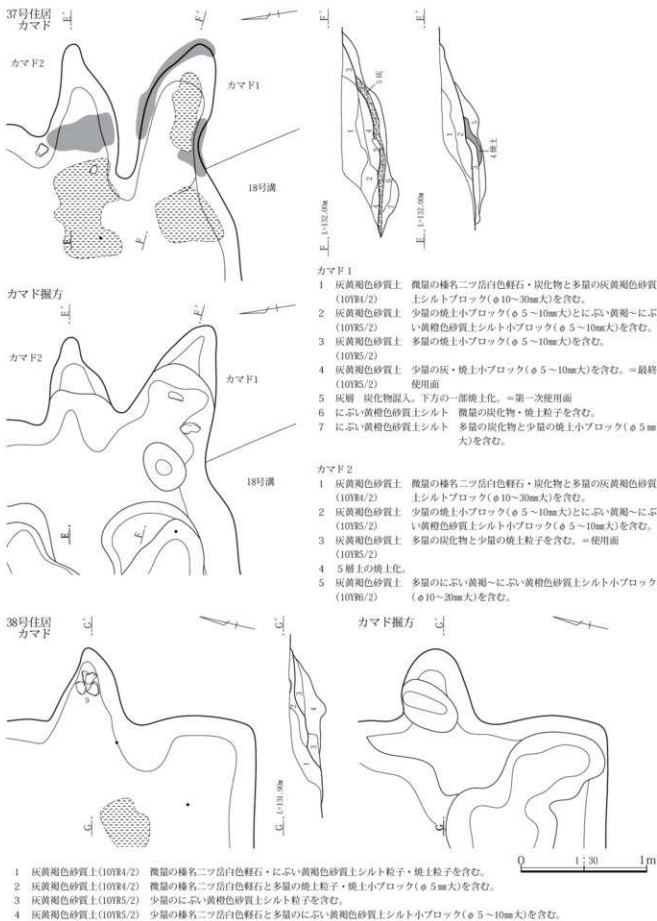
0 1:60 2m



0 1:2 5cm

0 1:3 10cm

第228図 VI区37・38・57号住居と37号住居の出土遺物

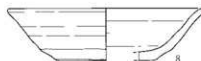


第229図 VI区37・38号住居

38号住居



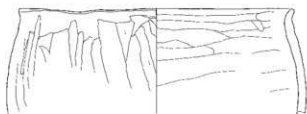
7



8



10(1/4)



9(1/4)

57号住居



12



13(1/2)



11(1/2)

0 1:2 5cm

0 1:4 10cm

0 1:3 10cm

第230図 VI区38・57号住居の出土遺物

関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀第1四半期と想定される。

39号住居(第231～233図、PL.113・404)

グリッド 3 E 6

主軸方位 N89°W

重複 40号住居に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。南西部は40号住居により失われ、南東部は調査区外に存在する。長辺は4.13m+、短辺は3.66m、深さは0.30m、検出された最大の面積は10.84㎡である。
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 XII・XII層の黄褐色砂質土を削り出して、平坦な床面を構築している。掘方は認められない。カマドの南側の東壁際から長径0.19～0.38mの垂円礫7点が出土し、礫の表面には被熱の痕跡が認められる。これらはカマドの廃絶時に抜き取られたカマド構築材と考えられる。

カマド 東壁のほぼ中央に位置すると想定される。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに窪み、緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部の奥の左右壁には長径0.33～0.35mの垂円礫2点が埋め込まれており、カマド構築材と考えられ

る。カマド埋土は焼土ブロックまじりの灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.53m、幅0.72m、深さ0.28mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.56m、短径0.53m、深さ0.14mの土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(3)、椀(4)、鉄滓(14)、床面付近から黒色土器の椀(1)、須恵器の椀(5)、埋土から羽釜(8～11)、鉄鍬(12)や鉄釘(13)が出土した。

時代 平安時代9世紀第4四半期～10世紀第1四半期。

40号住居(第231図、PL.113)

グリッド 3 E 6

主軸方位 N86°E

重複 39号住居を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴で、南西部は調査区外に存在する。長辺は3.78m+、短辺は2.00m+、深さは0.25m、検出された最大の面積は3.28㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む黒褐～灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.04mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

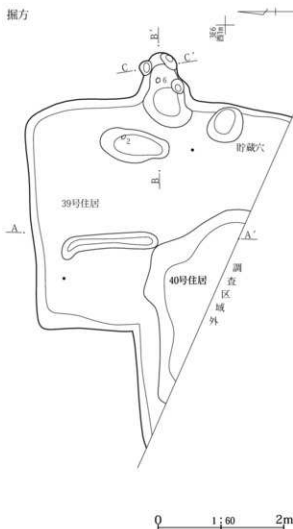
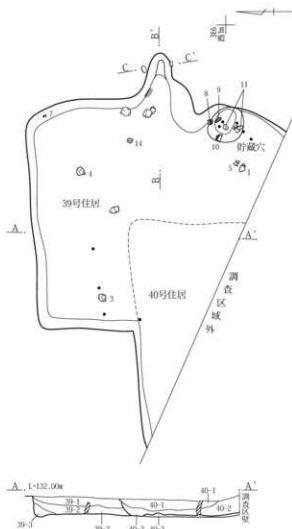
掘方 XII・XIII層の灰黄褐色砂質土を掘り込んで、南西側に緩やかに窪む掘方を構築している。

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは調査区外に存在する可能性がある。

遺物 なし。

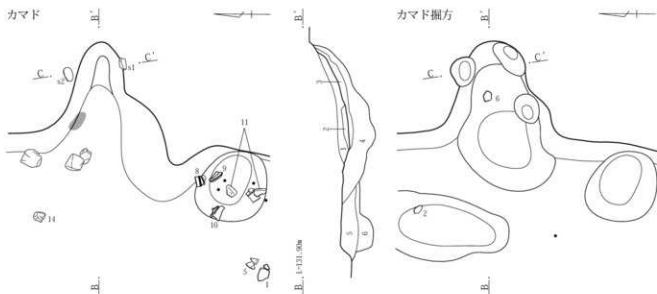
時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と想定され、平安時代10世紀初頭に帰属する39号住居より新しいことから、10・11世紀と想定される。



- | | | |
|------|------------------|--|
| 39-1 | 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) | 少量の椀名二ツ岳白色軽石小粒と多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~25mm大)を含む。 |
| 39-2 | 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) | 微量の椀名二ツ岳白色軽石小粒と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~20mm大)を含む。 |
| 39-3 | 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) | 微量の椀名二ツ岳白色軽石小粒とにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。 |
| 40-1 | 黒褐色砂質土(10YR3/2) | 少量の椀名二ツ岳白色軽石小粒とにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。 |
| 40-2 | 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) | 微量の椀名二ツ岳白色軽石小粒とにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)を含む。 |
| 40-3 | 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) | 微量の椀名二ツ岳白色軽石小粒と多量のにぶい黄褐色~にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。 |

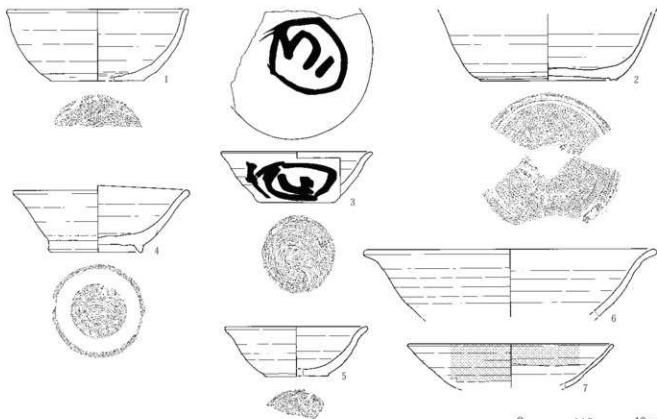
第231図 VI区39・40号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物

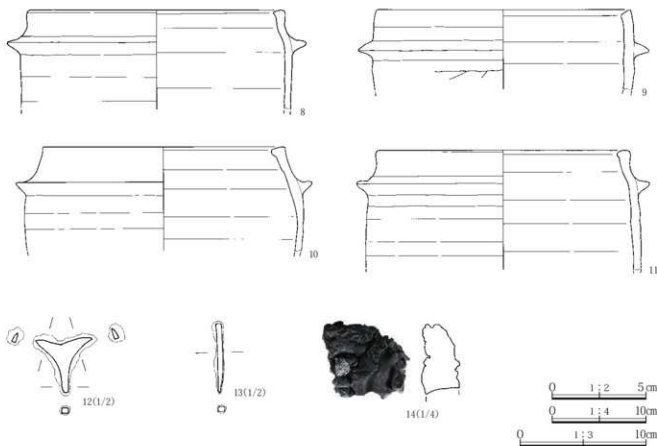


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒とふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の焼土小ブロック(φ5~10mm大)を含む。=天井部崩落土
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の灰・焼土粒子を含む。=上面使用面
- 4 黒褐色土(10YK3/2) 多量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)を含む。=住居層方理土
- 6 黒褐色土(10YK3/2) 多量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)と少量の焼土粒子・灰を含む。=住居層方理土

0 1:30 1m



第232図 VI区39号住居と出土遺物



第233図 MI区39号住居の出土遺物

41号住居(第234～237図、PL.114・115・404)

グリッド 3 E 6

主軸方位 N88°W

重複 17号溝に切られる。42号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居で西部は17号溝により失われている。長辺は3.31m、短辺は1.84m、深さは0.19m、検出された最大の面積は4.65㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.14mほど厚く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで、大小の窪みからなる掘方を構築している。北壁と南壁際の中央から長径0.49～0.52mの小ピット2基を検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は窪み、緩やかに傾斜、奥壁は約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部の左右壁には長径0.20mの垂

円礫2点が埋め込まれており、カマド構築材と考えられる。燃焼部底の埋土には大小の垂円礫が含まれ、底からは長径0.45m、短径0.18m、厚さ0.12mの棒状垂円礫が出土した。これらはカマドの天井高架材と考えられる。カマド埋土はニツ岳の白色軽石まじりの灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.66m、幅0.50m、深さ0.20mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 検出された範囲から柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から多くの遺物が出土した。床面から黒色土器の椀(1・3)須恵器の杯(4・5・7～9)や椀(11・12・14)、鉄鏝(18)、砥石(20)、カマド使用面から黒色土器の椀(2)、灰軸陶器の椀(16)カマド埋土から羽釜(17)が出土した。

時代 平安時代10世紀第4四半期～11世紀前半。

42号住居(第234・235・238図、PL.114・115・405)

グリッド 3 E 6

主軸方位 N85°W

重複 41号住居に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居で南西部は41号住居により失われている。長辺は3.96m、短辺は3.03m+、深さは0.20m、検出された最大の面積は5.45㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 Ⅻ・Ⅺ層の黄褐色砂質土を削り出して、平坦な床面を構築している。

掘方 面的な掘方は認められず、全体に大小の窪みが点在し、北壁と東壁寄りに長径0.62~0.70mの円形の窪みを検出した。

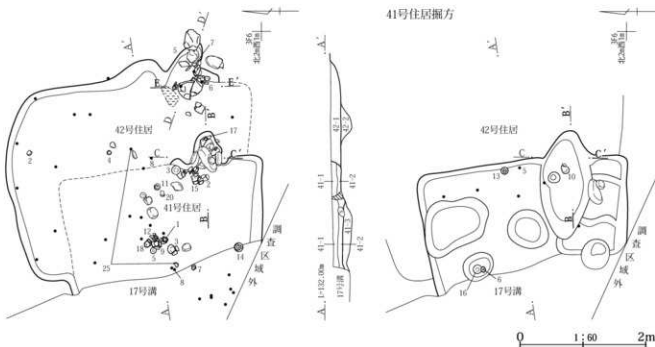
カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築して

いる。燃焼底部は埋土により失われ、窪みが認められる。急な勾配で立ち上がる。燃焼底部の埋土には大小の亜円礫や土器が多く出土した。カマド埋土はニツ岳の白色軽石まじりの灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.14m、幅0.63m、深さ0.18mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 検出された範囲から柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から出土した須恵器の杯(1)は、41号住居の床面直上から出土した破片と接合した。床面から須恵器の杯(2)、カマド使用面から土師器の甕(5)、須恵器の羽釜(6・7)が出土した。

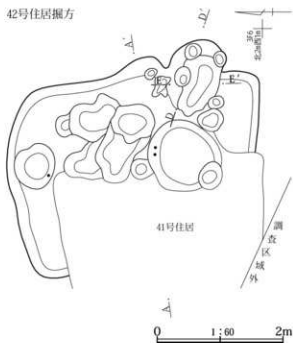
時代 平安時代10世紀後半。



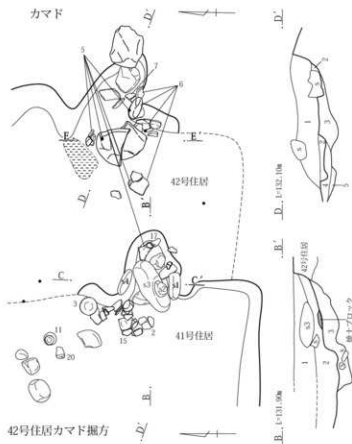
- 41-1 灰黄褐色砂質土(10/R4/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と微量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10mm程)・炭化粒子を含む。
- 41-2 灰黄褐色砂質土(10/R4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒・ふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10mm大程)を含む。
- 41-3 灰黄褐色砂質土(10/R5/2) 多量のふい黄褐色にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~20mm大)を含む。
- 42-1 灰黄褐色砂質土(10/R4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 42-2 灰黄褐色砂質土(10/R4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

第234図 VI区41・42号住居(1)

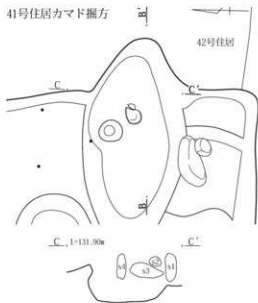
42号住居掘方



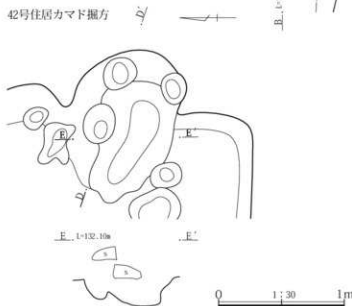
カマド



41号住居カマド掘方



42号住居カマド掘方



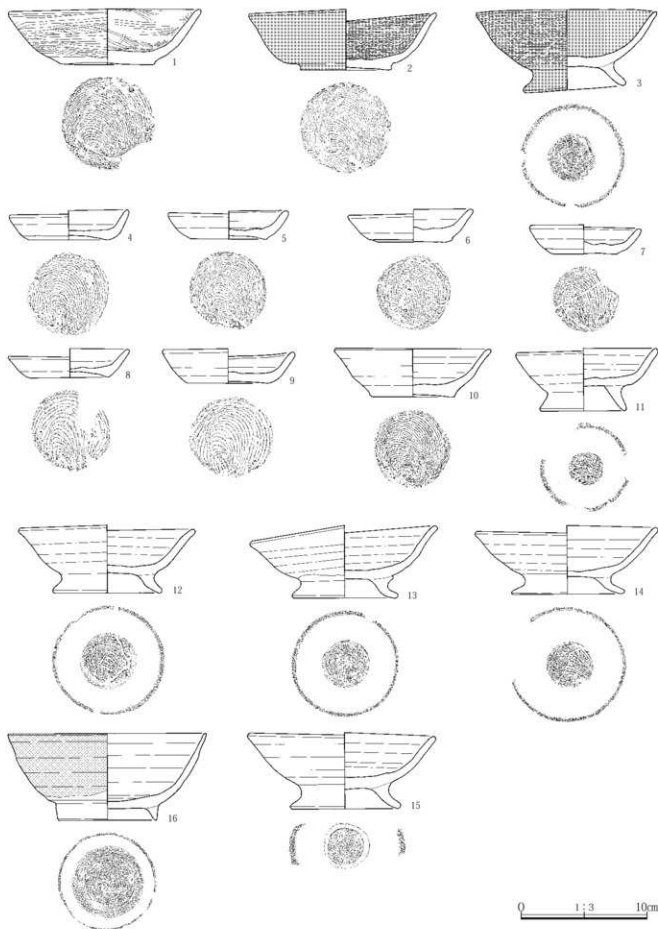
41号住居

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒・焼土粒子と少量のふい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ 5~10mm大)・炭化物粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒と少量の炭化物粒子・ふい黄褐色にふい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ 5~15mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒と多量のふい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ 5~10mm大)を含む。

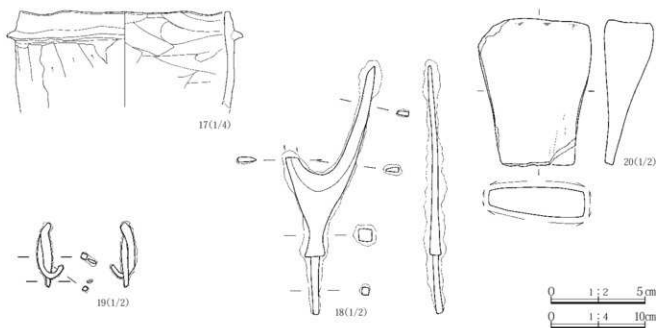
42号住居

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ 5~10mm大)と少量の焼土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名ニッ岳白色軽石・炭化物・焼土粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニッ岳白色軽石と多量の炭化物を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石と多量のふい黄褐色にふい黄褐色砂質シルト粒子・焼土粒子を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ 5mm大)を含む。

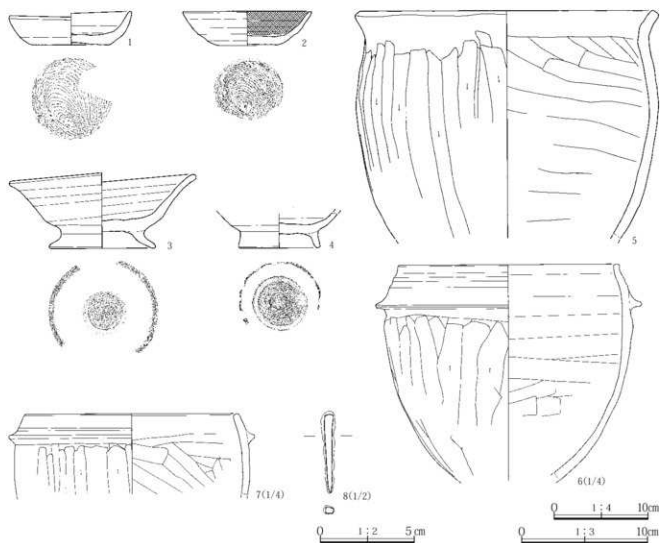
第4章 第2面の遺構と出土遺物



第236図 M区41号住居の出土遺物(1)



第237図 M区41号住居の出土遺物(2)



第238図 M区42号住居の出土遺物

44号住居(第239図, PL.117)

グリッド 3 E 7

主軸方位 N88° E

重複 46・47号土坑に切られる。

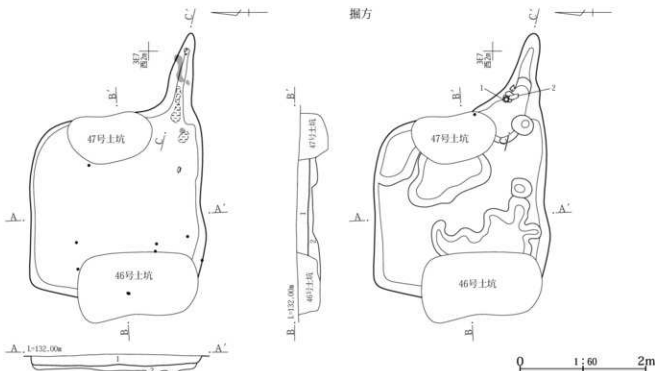
形状と規模 東西方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居で南西壁側と東壁の一部は46・47号土坑により失われている。長辺は3.20m、短辺は2.78m、深さは0.19m、

面積は7.12㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

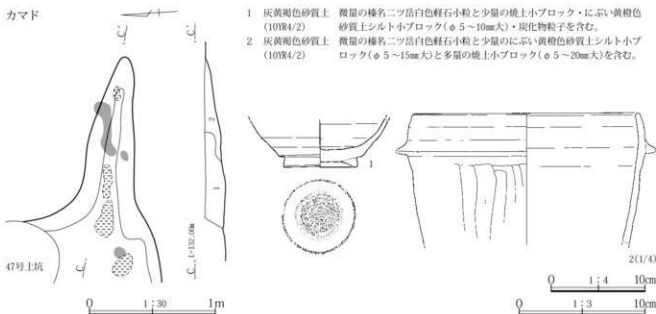
床面 灰黄褐色砂質土を0.09mほど貼って平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込み、ほぼ平坦な掘方を構築している。南西壁と東壁側に不定形の浅い窪みを検出した。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と多量のにぶい黄褐色~にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と多量のにぶい黄褐色~にぶい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10~50mm大)を含む。

カマド



- 1 灰黄褐色砂質土 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と少量の焼土小ブロック・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)と多量の焼土小ブロック(φ5~20mm大)を含む。

第239図 VI区44号住居と出土遺物

カマドと貯蔵穴 カマドは南東隅に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに傾斜し、そのまま立ち上がる。幅の細い筒状のプランは煙道と考えられるが、燃焼部との境界は不明瞭である。燃焼部底からは炭化物や焼土を抽出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。煙道を含むカマドは長さ1.61m、幅0.42m、深さ0.17mである。貯蔵穴は抽出されなかった。

柱穴 柱穴は抽出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマド掘方埋土から須恵器の椀(1)、羽釜(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

45号住居(Ⅶ区88号住居カマド)(第240図, PL.118・405)

グリッド 3 E 7

主軸方位 N85° E

重複 なし。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居で東部の大部分は調査区外にあり、Ⅶ区88号住居カマドは、45号住居に附属するので統合した。長辺は4.38m、短辺は2.45m+、深さは0.46mで、抽出された最大の面積は8.36㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。床面 灰黄褐色砂質土を0.05mほど薄く貼って平坦な床面を構築している。

掘方 XII・畑層の黄褐色砂質土を掘り込み、ほぼ平坦な掘方を構築している。西南隅に長辺1.50m、短辺0.97m、深さ0.11mの歪んだ長方形の浅い窪みを、東壁の南隅から長径0.64m、短径0.55m+、深さ0.24mの円形の窪みを抽出した。

周溝 掘方の調査で抽出し、北～西壁中央に周回する。最大の上幅は0.17m、最少の底幅は0.05m、深さは0.10mである。

カマドと貯蔵穴 Ⅶ区の88号住居カマドは、位置から考えて45号住居のカマドと想定されるため資料整理で45号住居に統合した。カマドは東壁の南東隅寄りに位置すると想定される。抽出された範囲から貯蔵穴は抽出されなかった。

柱穴 柱穴は抽出されなかった。床面に主柱穴を持たない

構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(3)、埋土から須恵器の杯(1)や椀(2)、甕(4)、土鍾(5)、鉄釘(6)が出土した。

時代 平安時代9世紀第3四半期。

46号住居(第241～243図, PL.119・405)

グリッド 3 H12

主軸方位 N85° W

重複 47・58号住居、18号溝を切る。

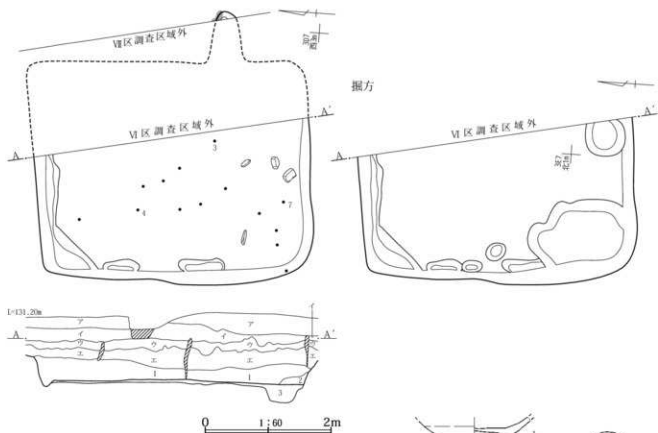
形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.32m、短辺は4.10m、深さは0.33m、面積は13.90㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなり、緩やかに竪穴の中央に向かって傾斜しながら成層している。

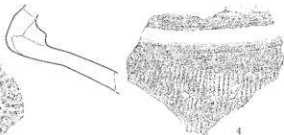
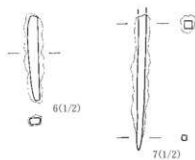
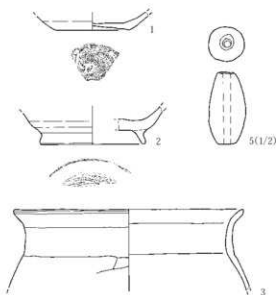
床面 炭化物まじりの灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。床面から抽出された炭化物は、掘方が47号住居埋土を掘り込んで構築されたため、掘方埋土に炭化物が多く含まれたものと考えられる。南西隅寄りから直径1.03m、深さ0.24mの円形の土坑1を抽出した。埋土は炭化物を含む床を切っており、住居の埋土に似た灰黄褐色砂質土で埋没している。土坑は床面に開口していた可能性があり、床面の構築後に作られたことは確実である。

掘方 XII・畑層の黄褐色砂質土や47号住居埋土を掘り込み、ほぼ平坦な掘方を構築している。中央や南壁際から歪んだ長方形の浅い窪みを抽出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで、主軸がやや南側に傾き、壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに傾斜し、奥壁は緩やかな勾配で立ち上がり煙道に接続する。燃焼部の左壁には長径0.27m、短径0.18m、厚さ0.05mの垂円礫が埋め込まれており、カマド構築材と考えられる。燃焼部底の中央には長径0.23m、短径0.11m、厚さ0.07mの垂円礫が埋め込まれており、支脚と考えられる。燃焼部の壁には焼土帯の広がりが抽出されたが、燃焼部底に灰や炭化物は認められない。カマド埋土はニツ岳の白色軽石まじりの灰黄褐色砂質土からなる。煙道を含むカマドは長さ1.24m、煙道長0.37m、幅0.98m、深さ0.35mである。貯蔵穴は抽出されなかった。土坑1は



- ア 褐灰色砂質土(10YR5/1) 現代耕作土(隣接畑地耕作土)。
- イ 褐灰色砂質土(10YR5/1) 近・現代耕作土。一部上面酸化変色凝固。
- ウ 暗赤褐色土(10YR3/2) 中・近世耕作土。少量の白色軽石小粒を含む。
- エ 灰黄褐色砂質土(10YR4/2~5/2) 平安~中世堆積土。
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名二岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ5~20mm大)と微量の炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名二岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名二岳白色軽石小粒を含む。



0 1:2 5cm

0 1:3 10cm

第240図 VI区45号住居と出土遺物

位置から考えて貯蔵穴に比定しにくい。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(3)、カマド使用面付近から土師器の裏(5・6)、埋土から黒色土器の碗(1)、掘方埋土から黒色土器の碗(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀第3四半期。

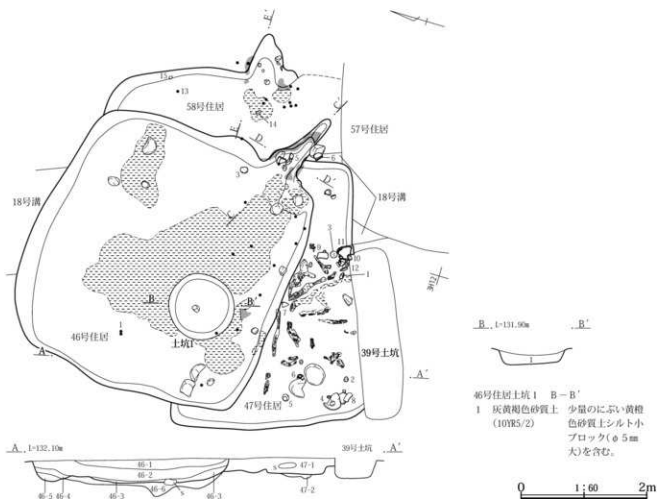
47号住居(第241・242・244図, PL.120・405)

グリッド 3 H12

主軸方位 N70°E

重複 46号住居、39号土坑に切られる。57・58号住居を切る。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、北部の大部分は46号住居により失われている。長辺は4.14m、短辺は3.20m、深さは0.30m、検出された最大の面積は4.90㎡である。



- 46-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名二ツ岳白色軽石小粒と微量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物を含む。
- 46-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名二ツ岳白色軽石小粒・炭化物と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
- 46-3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)、多量の炭化物粒子を含む。
- 46-4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・焼土小ブロック(φ10~20mm大)を含む。
- 46-5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒と多量のにぶい黄褐色～にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ5~30mm大)と少量の炭化物小粒を含む。
- 46-6 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒と多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~40mm大)と少量の炭化物を含む。
- 47-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名二ツ岳白色軽石小粒と多量のにぶい黄褐色～にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~20mm大)、炭化材・粒子を含む。
- 47-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)と少量の炭化物を含む。

第241図 VI区46・47・58号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土のみからなる。

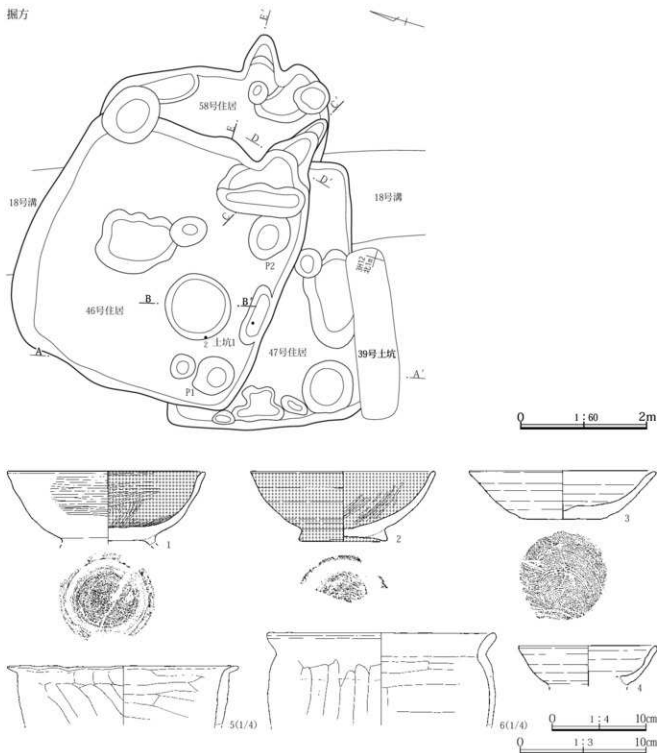
床面 一部に灰黄褐色砂質土を薄く貼り、大部分はⅫ・ⅫⅡ層の黄褐色砂質土を削り出して、ほぼ平坦な床面を構築している。床面からは炭化材が多く出土し、46号住居との境界付近にあたる壁穴の中央から放射状に分布す

る。

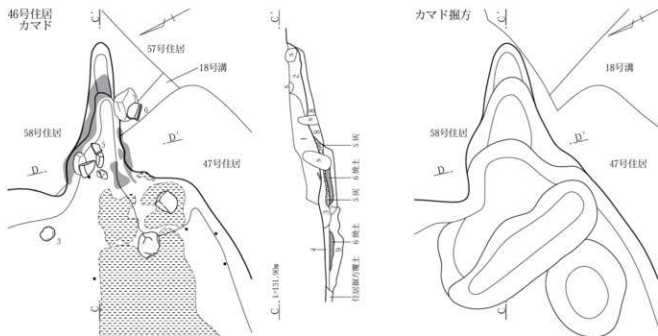
掘方 Ⅻ・ⅫⅡ層の黄褐色砂質土を掘り込み、平坦な掘方を構築している。南西壁際から歪んだ楕円形や不定形の浅い窪みを、東南壁際から円形や隅の丸い方形の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。

掘方



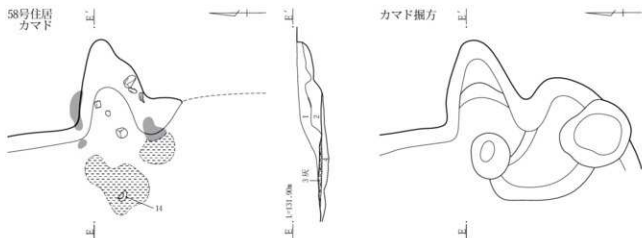
第242図 VI区46・47・58号住居と46号住居の出土遺物



D, 1:131.90m



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒・焼土粒子・炭化物と少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名ニツ岳白色軽石小粒と焼土小ブロック(φ5~20mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の極名ニツ岳白色軽石小粒・炭化物・灰と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)・焼土粒子・焼土小ブロック(φ5~10mm大)を含む。=最終使用面
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名ニツ岳白色軽石小粒を含む。
- 5 灰層 少量の焼土粒子を含む。=第一次使用面
- 6 7層上の焼土化。
- 7 ぶい黄褐色砂質土シルト 微量の極名ニツ岳白色軽石を含む。一部焼土化。
- 8 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~20mm大)を含む。
- 9 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名ニツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)を含む。

58号住居
カマド

E, 1:131.90m

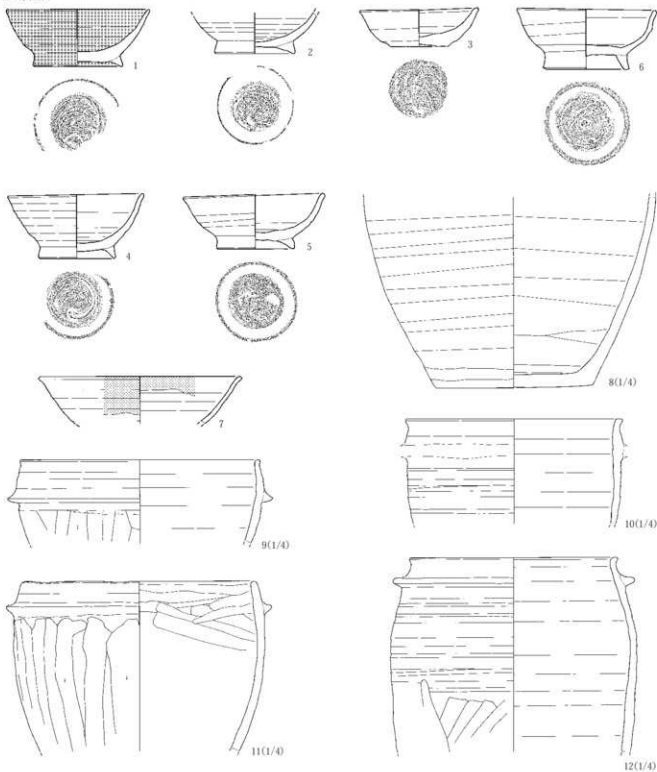
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名ニツ岳白色軽石小粒・ぶい黄褐色砂質土シルト粒子と微量の焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒と多量の焼土小ブロック(φ5~20mm大)・焼土粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 灰・炭化物層(厚さ3~5mm)がラミナ状に堆積。=使用面
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量の極名ニツ岳白色軽石小粒を含む。

0 1:30 1m

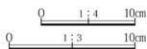
第243図 VI区46・58号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物

47号住居



58号住居



第244図 M区47・58号住居の出土遺物

遺物 床面から黒色土器の椀(1・2)、須恵器の杯(3)、椀(4～6)、甕(8)、羽釜(9)、床面付近から須恵器の羽釜(10・11)が出土した。

時代 平安時代10世紀第4四半期。

58号住居(第241～244図, PL.130・405)

グリッド 3 H12

主軸方位 N79°E

重複 46・47・57号住居に切られる。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈すると想定される竪穴住居で、西部の大部分は46号住居により失われている。長辺は3.60m＋、短辺は1.50m＋、深さは0.26m、検出された最大の面積は2.77㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.5mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。北東隅に長径0.98m、短径0.78m、深さ0.20mの円形の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部壁には焼土ブロックが、焚口付近では炭化物の広がりが出た。カマド埋土はニツ岳の白色軽石まじりの灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.08m、幅0.64m、深さ0.22mである。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物 床面付近から緑釉陶器の皿(15)、カマド使用面から灰釉陶器の皿(14)、埋土から須恵器の杯(13)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

48号住居(第245～247図, PL.121・406)

グリッド 3 H14

主軸方位 N78°E

重複 45・48号土坑に切られる。29・30号住居に隣接しており、同時存在はない。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は5.13m、短辺は4.43m、深さは0.42m、面積は17.28㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。北西～北東隅の壁際沿いに幅0.33～0.65m、深さ0.18mの不定形の浅い溝状の窪みを検出した。南部は大小の窪みを多く検出し、カマド前からは長辺1.29m、短辺0.95m、深さ0.20mの隅の丸い方形の窪みを検出した。**カマドと貯蔵穴** 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、奥壁は直角に近い勾配で立ち上がる。燃焼部壁には焼土帯が、底から焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなり、燃焼部底の直上に、にぶい黄褐色砂質シルトが堆積している。これはカマド天井構築材がカマドの崩落により移動したものと考えられる。カマドの長さは1.26m、幅0.90m、深さ0.35mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(1)、羽釜(6・8・9)、床面付近から須恵器の杯(2)、羽釜(7)、埋土から須恵器の椀(5)、砥石(12)、掘方から鉄製紡錘車(10)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

49号住居(第248・249・251図, PL.122・406)

グリッド 3 G15

主軸方位 N80°E

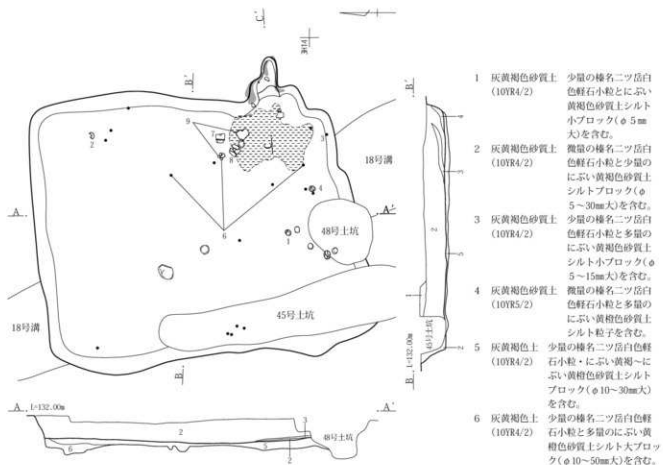
重複 55号住居に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。竪穴の東壁は55号住居により失われている。長辺は3.85m、短辺は2.75m、深さは0.43m、検出された最大の面積は2.76㎡である。

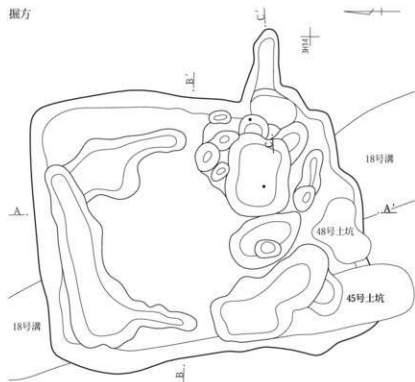
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.14mほど貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築してい

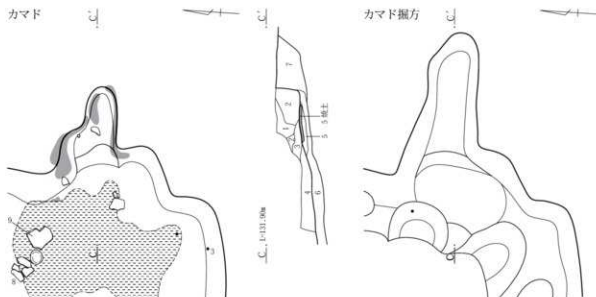


掘方



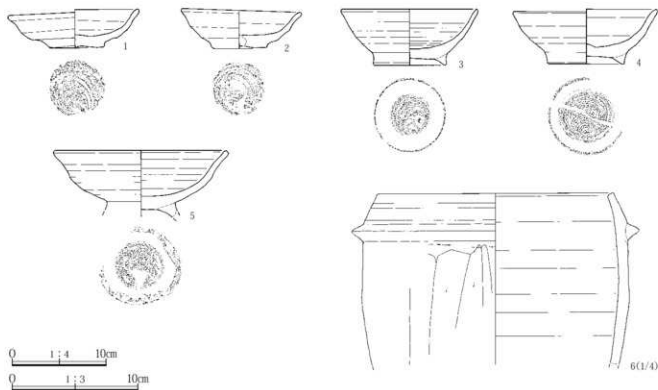
0 1:60 2m

第245図 VI区48号住居

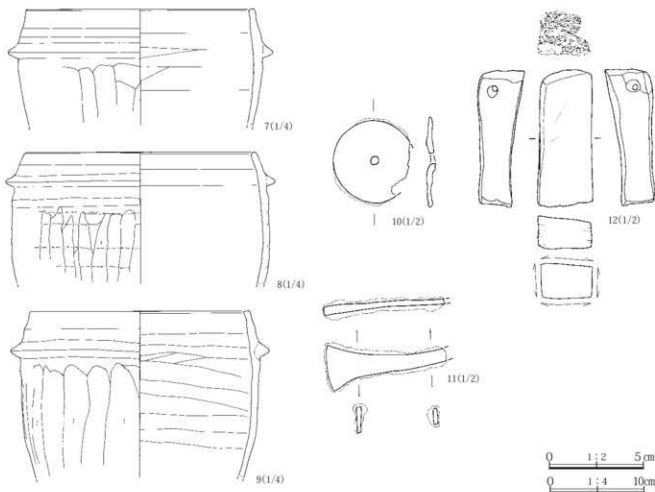


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の椋名ニツ岳白色軽石小粒・焼土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の椋名ニツ岳白色軽石と多量の焼土小ブロック(φ 5~20mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色砂質土シルト=カマド天井部構築材
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の椋名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5mm大)・焼土粒子を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の焼土小ブロック(φ 5~15mm大)を含む。上面の一部焼土化。
- 6 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4) 微量の焼土小ブロック(φ 5~15mm大)を含む。
- 7 灰黄褐色弱粘質土(10YR6/2) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ 10~30mm大)・焼土小ブロック(φ 5~20mm大)と少量の炭化物を含む。

0 1:30 1m



第246図 VI区48号住居と出土遺物



第247図 M区48号住居の出土遺物

る。南壁際沿いに歪んだ楕円形の浅い溝状の窪みを検出した。南西隅の壁際から長径0.89m、短径0.75m、深さ0.28mの歪んだ円形の窪みを検出した。これはカマドの南側に位置することや規模などから貯蔵穴の可能性が高い。

カマド 掘方の調査で東壁の中央から不定形の窪みが検出され、カマドの掘方と想定される。床面からは炭化物の広がりを検出した。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築していたものと想定される。カマド掘方埋土は灰黄褐色砂質土からなる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の瓶(4)、埋土から灰軸陶器の皿(3)、鉄製紡錘車(5)、鉄釘(6・7)、掘方から須恵器の椀(1・2)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

51号住居(第248～251図、PL.123・124・406)

グリッド 3 G14

主軸方位 N85° E

重複 ブランが55号住居を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は6.03m、短辺は4.20m、深さは0.30m、面積は25.32㎡である。発掘調査時に切合い関係にある50・51号住居として調査したが、資料整理で51号住居に統合した。

埋土 ツツ居の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

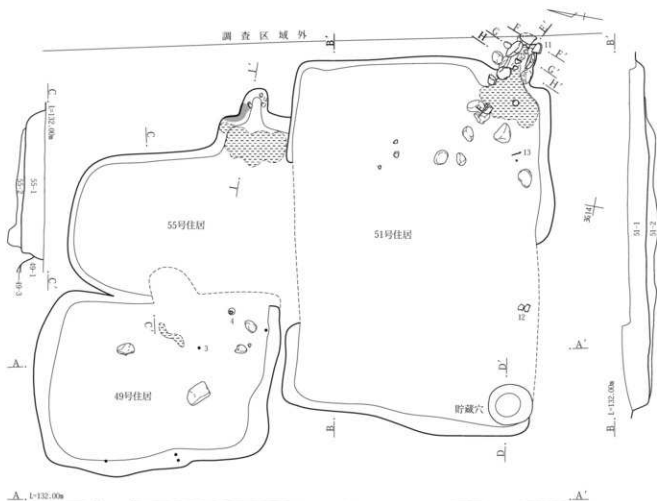
床面 灰黄褐色砂質土を0.18mほど厚く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。南西隅寄りの南壁際沿いに不定形の浅い溝状の窪みを多く検出した。北西隅の北壁際から幅0.30mの溝状の窪みを多く検出した。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、緩やかに約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部の左右壁には長径0.17～0.45m、短径0.21～0.26m、厚さ0.08～0.13mの棒状垂円礫が7点据えられ、深さ0.09m程度埋め込まれている。これらは燃焼部壁を構成するカマド構築材と考えられる。燃焼部底中央の奥には長径0.27m、短径0.13m、厚さ0.09mの棒状垂円礫が据えられ、深さ0.17mほど埋め込まれている。礫の表

面には被熱の痕跡が認められ、これが支脚であることがわかる。また、燃焼部奥のカマド構築材の上には長径0.21mの円礫が置かれており、煙道の天井高架材と考えられる。燃焼部底から焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドの長さは1.61m、幅0.42m、深さ0.17mである。

貯蔵穴 南西隅の壁際から長径0.72m、短径0.66m、深さ0.32mの土坑を検出した。土坑はカマドが南東隅に位置することや形状などから貯蔵穴と考えられる。



- 49-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名二ツ岳白色軽石大粒と微量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)・炭化物粒子を含む。
 49-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒と多量のふい黄褐色砂質土シルト粒子を含む。
 49-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒と少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。
 51-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の棒名二ツ岳白色軽石小粒と少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm大)を含む。
 51-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名二ツ岳白色軽石大粒とふい黄褐色～ふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。
 55-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・ふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10～20mm大)を含む。
 55-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名二ツ岳白色軽石小粒とふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。

第248図 VI区49・51・55号住居(1)

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の羽釜(12)、カマド使用面から土師器の甕(11)、掘方から須恵器の杯(9)や椀(10)が出土した。出土遺物は平安時代10世紀後半～11世紀前半の年代幅を有する。

時代 平安時代11世紀前半。

55号住居(第248～252図, PL.127・406)

グリッド 3 G 15

主軸方位 N82° E

重複 プランが51号住居に切られる。49号住居を切る。

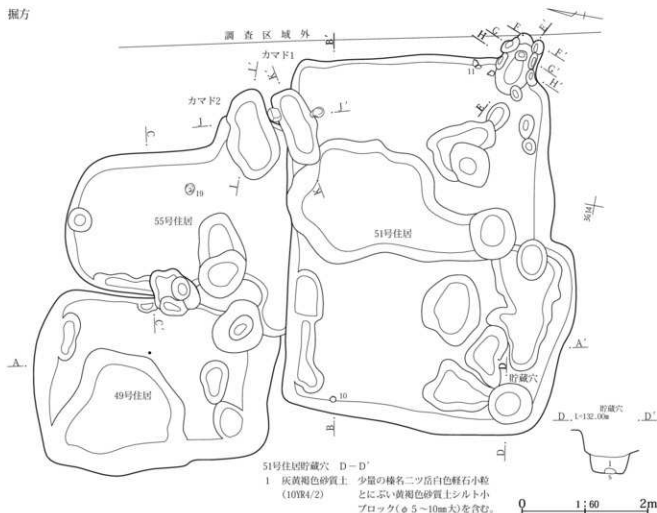
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.50m+、短辺は2.43m、深さは0.30m、検出された最大の面積は7.52㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

掘方

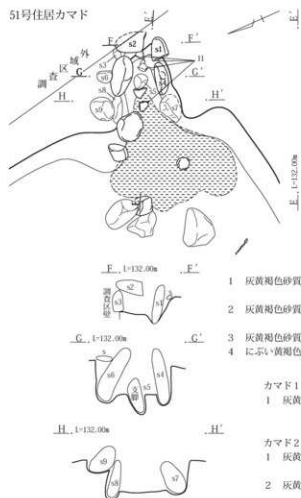
床面 灰黄褐色砂質土を0.14mほど貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。南西隅寄りの西壁際に歪んだ楕円形の浅い窪みを検出した。また北壁中央から円形の小ピットを検出した。**カマドと貯蔵穴** 東壁の南東隅寄りに位置すると想定される。掘方の調査で更に南側から古いカマドの痕跡が検出された。このことから住居廃絶時のカマドをカマド2、古いカマドをカマド1とする。カマド1・2の燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。カマド2の燃焼部底はほぼ水平で、緩やかに傾きながら立ち上がる。燃焼部左壁には焼土ブロックを焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマド2の長さは1.43m、幅0.81m、深さ0.39mである。カマド1の掘方埋土は灰黄褐色砂質土からなり、左右から長径0.24mの垂角礫2点が出土した。これらはカマドの位置からカマド構築材と考えられる。



第249図 VI区49・51・55号住居(2)

51号住居カマド



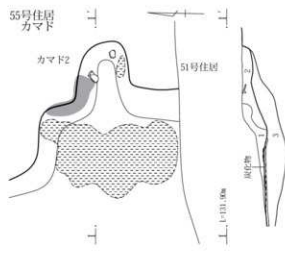
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と微量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒とふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)・炭化物粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 厚さ5~10mmの灰を含む炭化物層が2~3層ラミナ状に堆積。
- 4 ふい・黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒を含む。一部焼土化する。

カマド I

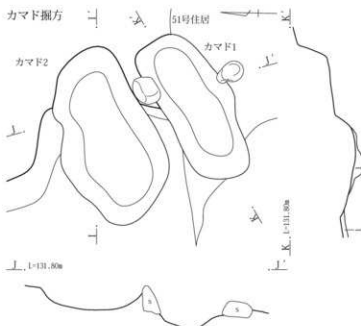
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石と焼土小ブロック(φ 5~10mm大)を含む。

カマド 2

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と少量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~15mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒と多量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック・焼土小ブロック(φ 5~15mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石小粒とふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)を含む。

55号住居
カマド

カマド掘方

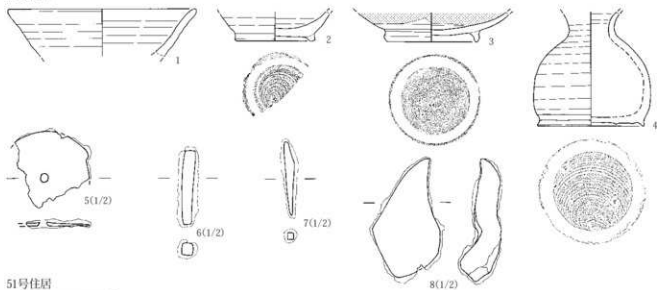


0 1:30 1m

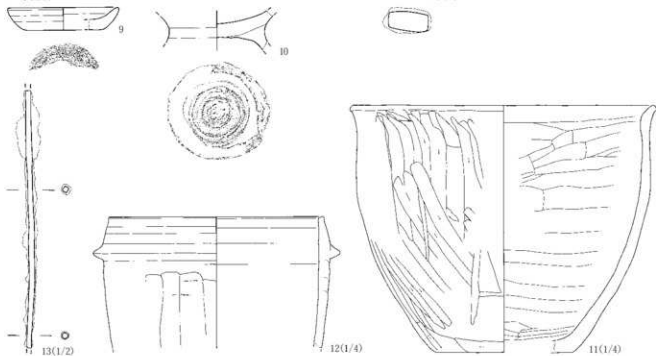
第250図 VI区51・55号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物

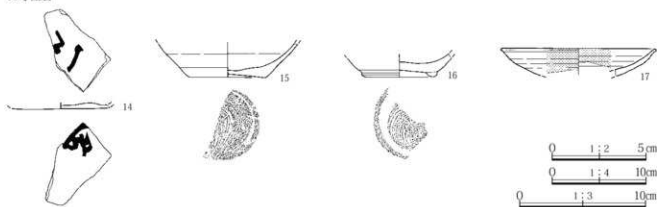
49号住居



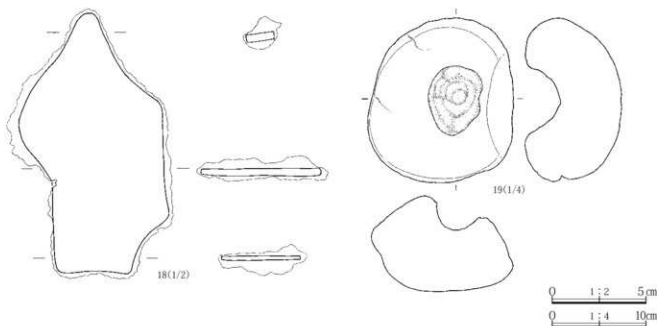
51号住居



55号住居



第251図 M区49・51・55号住居の出土遺物



第252図 MIK55号住居の出土遺物

カマド 1 の長さは1.26m、幅0.56m、深さ0.48mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から土師器の杯(14)、須恵器の杯(15)、椀(16)、灰軸陶器の皿(17)、掘方から輝石安山岩の石製品(19)が出土した。出土遺物は9世紀後半から10世紀前半の年代幅を有する。

時代 平安時代9世紀後半～10世紀前半。

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。53号住居により失われた可能性があるが、掘方の調査で痕跡も検出できなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から棒状の鉄製品(1)が出土した。

時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と推定され、平安時代9世紀後半に帰属する53号住居よりも古いことから9世紀以前である。

52号住居(第253・254図、PL.124・125・405)

グリッド 3 G 13

主軸方位 N85° E

重複 53号住居に切られる。54号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴で、南東部は53号住居により失われている。長辺は3.96m、短辺は2.88m、深さは0.26m、検出された最大の面積は9.19㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土である。

床面 ニツ岳の白色軽石を多く含む灰黄褐色土を0.12mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。西壁の南西隅寄りと北壁から北東隅寄りの東壁際に浅い溝状の窪みが周回する。最大幅は0.68mである。

53号住居(第253～256図、PL.125・126・407)

グリッド 3 G 13

主軸方位 N84° E

重複 52・54号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は5.18m、短辺は3.98m、深さは0.55m、面積は14.57㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が成層している。

床面 灰黄褐色砂質土を0.09mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。竪穴全体に不定形の浅い溝状の窪みや歪んだ方形の窪みを多く検出した。

カマド 東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、奥壁は急な勾配で立ち上がる。燃焼部の奥壁で焼土ブロックを底から焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色土～灰黄褐色砂質土からなる。カマドの長さは1.61m、幅0.80m、深さ0.43mである。

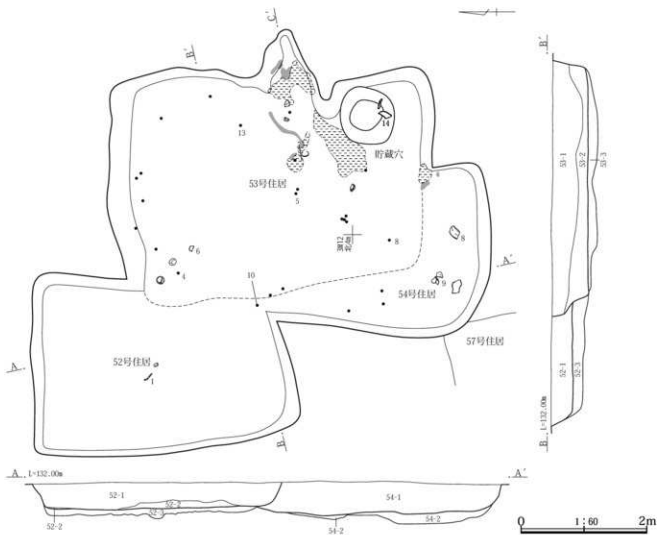
貯蔵穴 掘方の調査でカマドの南西から直径0.87m、深さ0.12mの土坑を検出し、坑の東壁側から長径0.34mの垂円礫が出土した。土坑は位置や形状などから貯蔵穴と

考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の杯(1)や須恵器の杯(6)、甕(14)、刀子(16)、掘方から須恵器の杯(3)、椀(9)、埋土から須恵器の杯蓋(2)、灰釉陶器の壺(11)、土師器の台付甕(12)、鉄製ヤリガンナ(15)、鉄釘(17)が出土した。出土遺物は8・9世紀の年代幅を有する。

時代 平安時代9世紀後半。



- 52-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニッ岳白色軽石大粒と微量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物粒子を含む。
 52-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の種名ニッ岳白色軽石小粒と少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~20mm大)を含む。
 52-3 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量の種名ニッ岳白色軽石大～小粒とふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~30mm大)を含む。
 53-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の種名ニッ岳白色軽石大粒と微量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~15mm大)を含む。
 53-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニッ岳白色軽石小粒と微量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~15mm大)を含む。
 53-3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニッ岳白色軽石大粒とふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~40mm大)を含む。
 54-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニッ岳白色軽石大粒と微量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
 54-2 灰黄褐色土 少量の種名ニッ岳白色軽石大粒と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~40mm大)を含む。

第253図 VII区52・53・54号住居

54号住居(第253・254・256・257図、PL.125・126・406)

グリッド 3 G 12

主軸方位 N87°W

重複 53号住居に切られる。57号住居を切る。52号住居との重複関係は不明。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴で、北東部の大部分は53号住居により失われている。長辺は3.30m+、短辺は2.65m、深さは0.47m、検出された最大の面積は2.92㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土である。

床面 黄橙色砂質シルトブロックを多く含む灰黄褐色土を0.15mほど厚く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅱ・Ⅲ層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。西壁の南西隅に浅い不定形の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 南東隅の53号住居境界から床面で炭化物を検出した。東壁の南東隅寄りに位置したカマドが53号住居により失われた可能性がある。南東隅の掘方埋土から垂門礫が2点出土したが貯蔵穴は検出されなかった。

掘方

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(7)、埋土から須恵器の椀(1~4)、灰釉陶器の瓶(5)、土師器の甕(6)、須恵器の甕(8)、掘方からヤリガンナ(9)が出土した。

時代 10世紀に帰属する57号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代9世紀第3~4半期と想定される。

56号住居(第258図、PL.128・406)

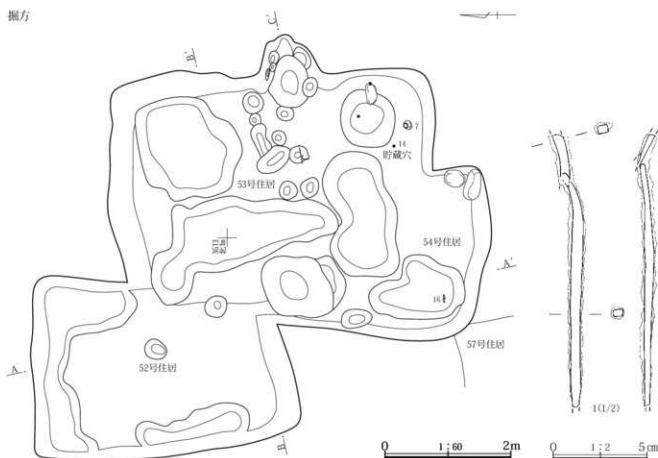
グリッド 3 J 16

主軸方位 N71°E

重複 6号溝に切られる。

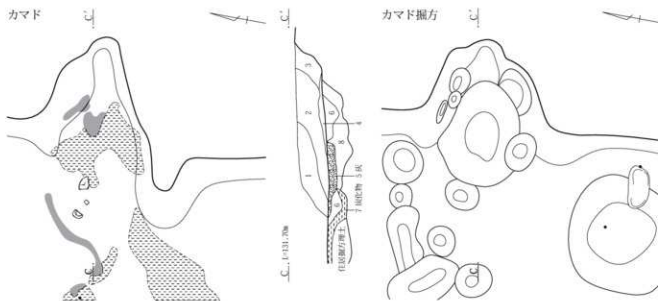
形状と規模 北東~南西方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴で、中央の大部分は6号溝により失われ、北部は調査区外に存在する。長辺は3.67m、短辺は3.35m+、深さは0.33m、検出された最大の面積は8.38㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からな



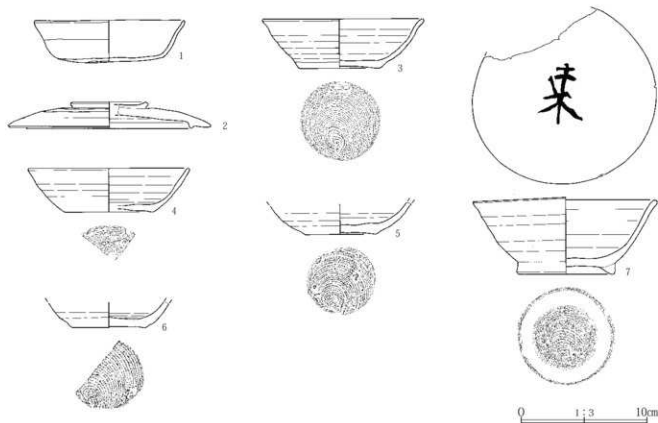
第254図 VI区52・53・54号住居と52号住居の出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名二ツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト粒子と微量の炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5mm大)、少量の焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5mm大)・焼土粒子・炭化物粒子を含む。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 多量の焼土粒子・焼土小ブロック(φ 5~10mm大)と少量の灰を含む。=天井崩落土
- 5 灰層 灰・炭化物・焼土層が厚さ3~10mm厚で互層(ラミナ状)堆積。=使用面
- 6 灰黄褐色弱粘質土(10YR6/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒と少量の灰・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)を含む。
- 7 炭化物層 炭化物・灰・焼土層が厚さ1~10mm厚で互層(ラミナ状)堆積。
- 8 灰黄褐色弱粘質土(10YR5/2) 少量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・炭化物・焼土小ブロック(φ 5~15mm大)を含む。

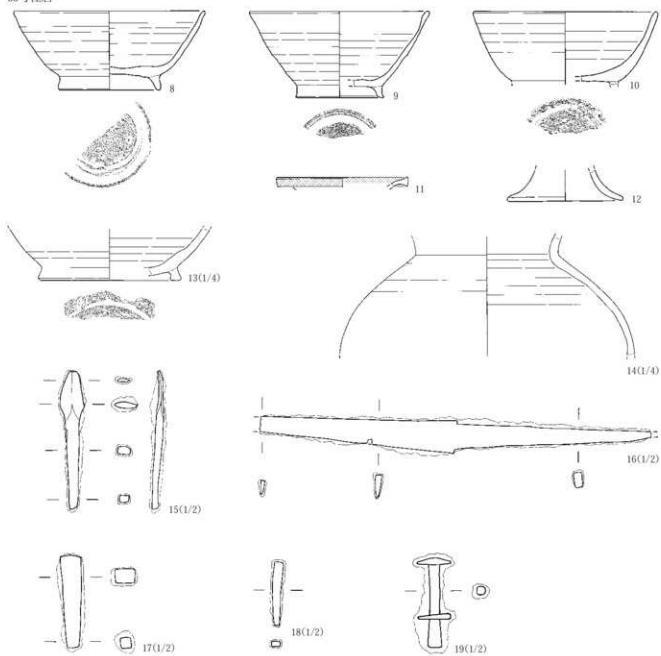
0 1:30 1m



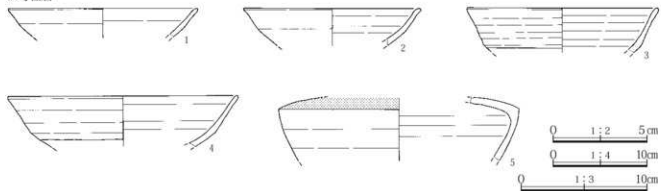
0 1:3 10cm

第255図 VI区53号住居と出土遺物

53号住居

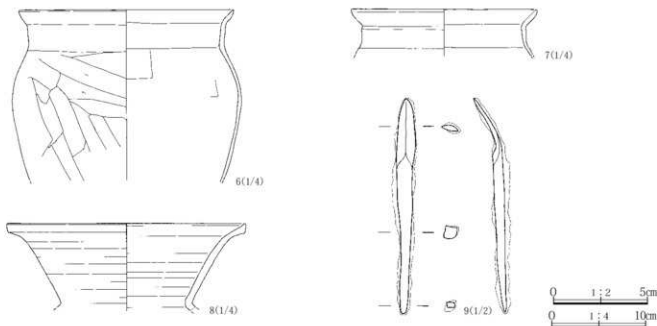


54号住居

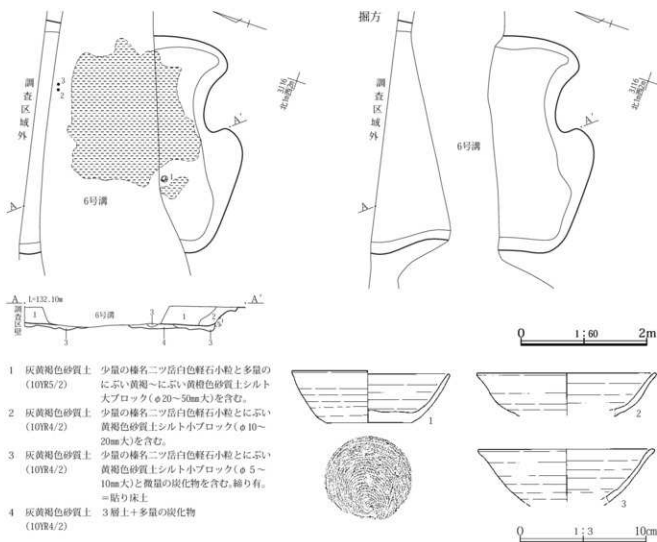


第256図 M区53・54号住居の出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第257図 VI区54号住居の出土遺物



第258図 VI区56号住居と出土遺物

り、急な勾配で北側に傾斜する。

床面 炭化物を多く含む灰黄褐色砂質土を薄く貼って、締まりのある平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。

遺物 床面から須恵器の杯(1)、床面付近から須恵器の

杯(2)、椀(3)が出土した。

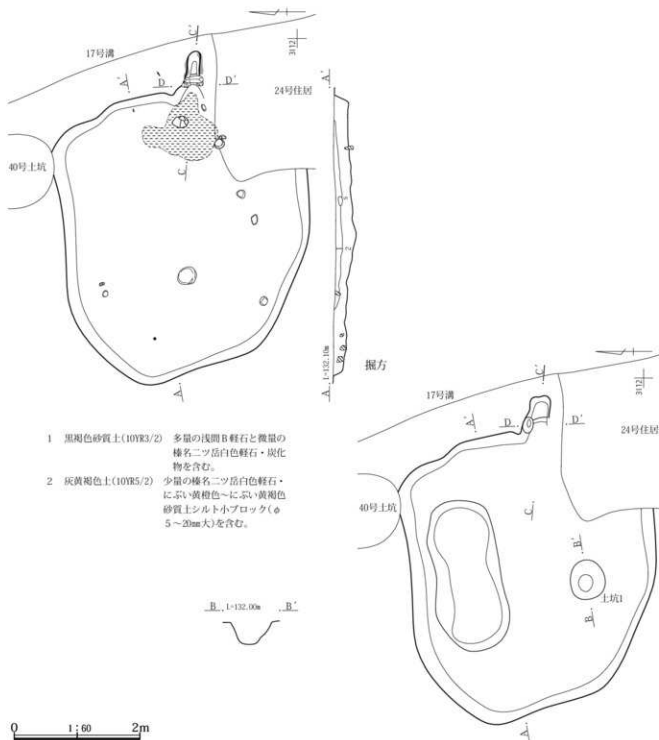
時代 平安時代9世紀後半。

59号住居(第259・260図、PL.131)

グリッド 3 1 12

主軸方位 N85°E

重複 24号住居に切られる。40号土坑を切る。



第259図 VI区59号住居(1)

形状と規模 東西方向に長軸を有し、歪んだ五角形を呈する竪穴住居である。長辺は4.50m、短辺は3.96m、深さは0.31m、面積は13.15㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色土からなり、竪穴の最上位は浅間Bテフラを多く含む黒褐色砂質土の薄層が埋めている。

床面 XII・XIII層の黄褐色砂質土を削り出して、緩やかに窪んだ床面を構築している。

掘方 北壁際の中央に長辺2.40m、短辺1.00m、深さ0.21mの浅い隅丸方形の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、急な勾配で立ち上がり、煙道に接続する。燃焼部奥壁には焼土帯が広がり、焚口周辺で炭化物

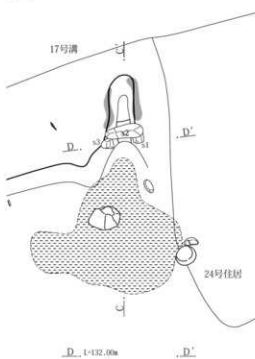
の広がりを検出した。燃焼部奥壁の左右には長径0.16～0.19mの垂円礫2点が据えられており、上位には長径0.32m、厚さ0.09mの棒状円礫が置かれている。これらはカマド構築材と煙道高架材と考えられる。カマド埋土は炭化物を多く含む灰黄褐色砂質土が成層している。煙道を含むカマドは長さ1.03m、煙道長0.47m、幅0.47m、深さ0.17mである。

貯蔵穴 掘方の調査で中央の南西から長径0.69m、短径0.52m、深さ0.38mの土坑1を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴になる可能性は低いものと思われる。

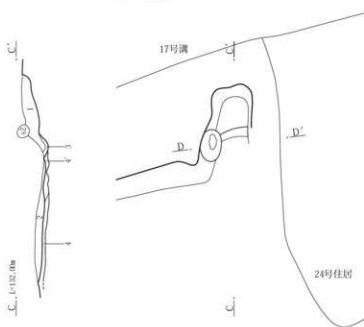
遺物 なし。

時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と推定され、10世紀に帰属する24号住居より古いことから10世紀以前である。

カマド



カマド掘方



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石小粒と微量の炭化物を含む。
 - 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の炭化物と少量の灰を含む。=使用面
 - 3 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量の焼土粒子を含む。
 - 4 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石小粒と多量のぶい・黄褐色砂質土シルト小アブロック(φ5～10mm大)を含む。
- 4' 4層上の焼土化

0 1:30 1m

第260図 VI区59号住居(2)

3. VII区

VII区では奈良時代から平安時代の竪穴住居が97棟検出された。時代別の遺構数では、奈良時代が3棟、平安時代が89棟、年代未詳の住居は5棟である。平安時代の住居は9世紀が24棟、10世紀が61棟、11世紀が4棟である。

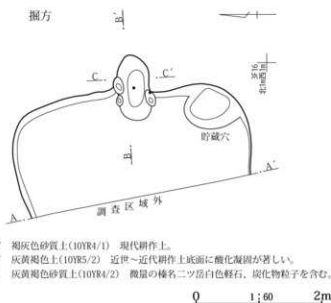
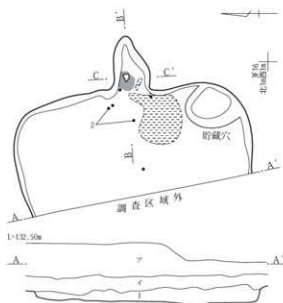
1号住居(第261・262図、PL.132・407)

グリッド 3 F 16

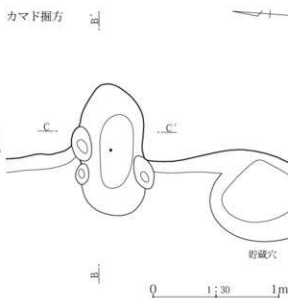
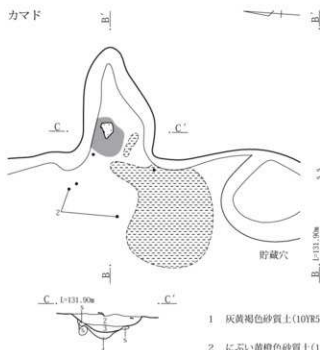
主軸方位 N81°E

重複 なし。2号住居に近接する。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居で、西部は調査区外に存在する。長辺は3.71m、短辺は1.76m+、深さは0.10m、検出された最大の面積は5.80㎡である。



- ア 褐灰色砂質土(10YR4/1) 現代耕作土。
 イ 灰黄褐色土(10YR5/2) 近世～近代耕作土底面に酸化層固が著しい。
 I 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の種名ニッ岳白色軽石、炭化物粒子を含む。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の種名ニッ岳白色軽石小粒・
 にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4) 少量の炭化物粒子、焼土粒子・種名ニッ岳白色軽石と多量の
 にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4) 多量の焼土小ブロック(φ5~20mm大)を含む。=使用面
- 4 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4) 少量の灰を含む。

第261図 VII区1号住居

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を削り出して、ほぼ平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を部分的に掘り込んで構築している。

カマド 東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、緩く傾きながら立ち上がる。掘方の調査で燃焼部の両側に長径0.16～0.28mの小ピット3基を検出した。これらはカマド構築材として使用された礫を埋めた痕跡と考えられる。燃焼部底は焼土の小ブロック、焚口付近では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土やにぶい黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.06m、幅0.57m、深さ0.11mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東壁際から長径0.86m、短径0.72m、深さ0.12mの土坑を検出した。土坑はカマドの南側に位置し、形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(2)、カマド埋土から須恵器の椀(1)が出土した。

時代 平安時代9世紀第4四半期。

2号住居(第263図、PL.133・407)

グリッド 3 E 16

主軸方位 N 5° E

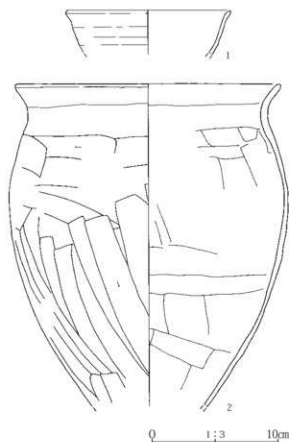
重複 なし。1・3・5号住居に近接する。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は2.73m、短辺は2.35m、深さは0.15m、面積は5.57㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 にぶい黄褐色砂質シルトのブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.06mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。カマドよりの中央から長径0.70m、短径0.47m、深



第262図 VII区1号住居の出土遺物

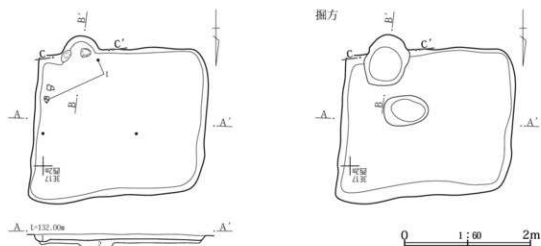
さ0.06mの浅い楕円形の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 南壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は南壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに窪み、約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部の左壁に長径0.20m、短径0.13m、厚さ0.09mの円礫が据えられており、燃焼部底の中央には長径0.29m、短径0.15m、厚さ0.11mの円礫が深さ0.08mほど埋め込まれている。これらは前者がカマド構築材、後者は支脚と考えられる。燃焼部底～焚口では焼土や炭化物の広がりは認められない。カマド埋土は灰黄褐色砂質土が成層する。カマドは長さ0.76m、幅0.63m、深さ0.15mである。貯蔵穴は検出されなかった。

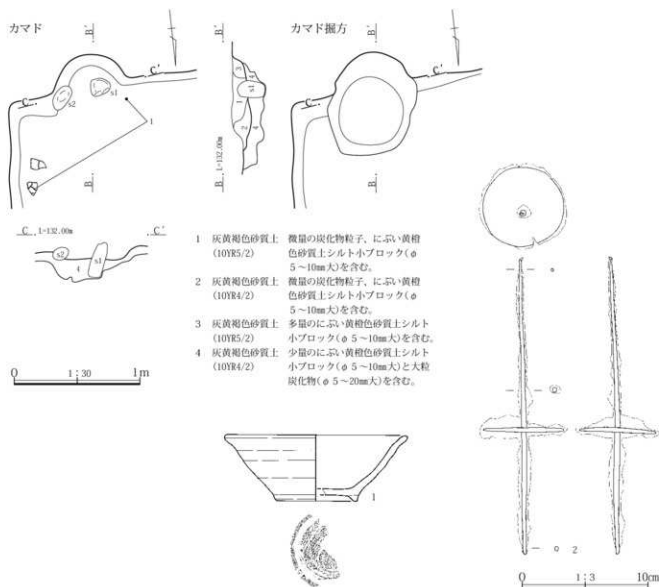
柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(1)、埋土から鉄製紡錘車(2)が出土した。

時代 平安時代9世紀第4四半期。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の地山、にぶい黄橙～黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ20～50mm大)と微量の炭化物粒子、極名ニツ岳白色軽石を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の地山、にぶい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ20～50mm大)を含む。著しい床面の硬化は見られない。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の炭化物粒子、にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化物粒子、にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)と大粒炭化物(φ5～20mm大)を含む。

第263図 VII区2号住居と出土遺物

3号住居(第264~266図、PL.134・407)

グリッド 3 D17

主軸方位 N78° E

重複 5号住居、1号溝に切られる。4号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居で、南側は5号住居により失われている。長辺は3.28m、短辺は2.82m+、深さは0.22m、検出された最大の面積は7.32㎡である。

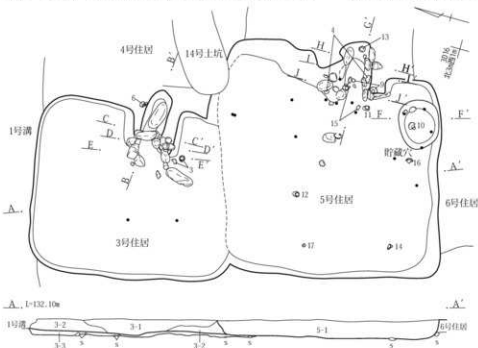
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からな

る。

床面 ぶい黄褐色砂質シルトのブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

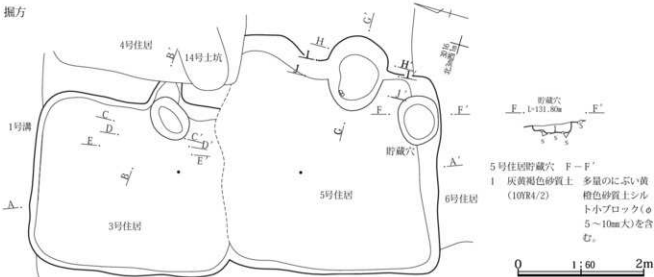
掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んでほぼ平坦な掘方を構築している。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は壁の手前から粘土を貼って両袖を構築し、奥を掘り込んで壁の前後に構築している。燃焼部底は緩やかに窪



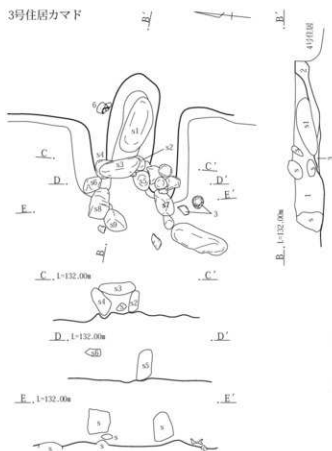
- 3-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石とぶい黄褐色砂質土シルト粒子と微量の炭化物・焼土粒子を含む。
- 3-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石と多量のぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~20mm大)を含む。
- 3-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のぶい黄橙~明黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ 20~50mm大)と少量の炭化物粒子を含む。
- 5-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石・ぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ 10~40mm大)を含む。

掘方

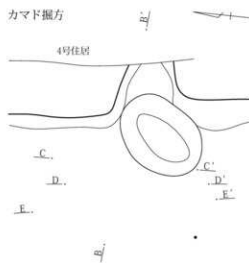


第264図 VII区3・5号住居(1)

3号住居カマド



カマド掘方

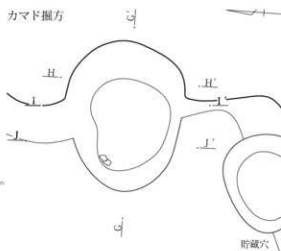


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石・炭化物・にぶい黄褐色砂質土シルト粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石・炭化物を含む。= 上面使用面上端に少量の炭層散在。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の炭化物を含む。

5号住居カマド



カマド掘方

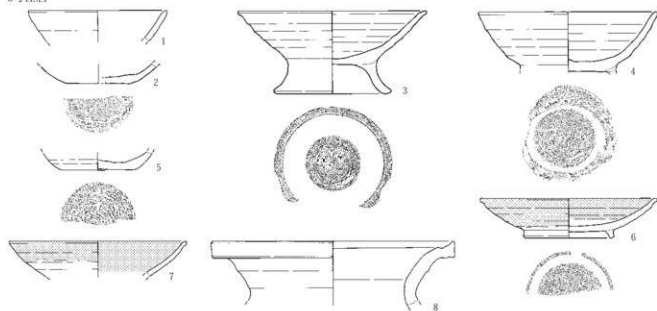


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石・炭化物・にぶい黄褐色砂質土シルト粒子を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/3) 少量の炭化物・焼土粒子・にぶい黄褐色砂質土シルト粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の炭化物・焼土粒子・にぶい黄褐色砂質土シルト粒子・灰を含む。
- 3' 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量のにぶい黄褐色砂質土シルト粒子と多量の焼土粒子を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~15mm大)と少量の灰・焼土粒子・炭化物を含む。= 使用面
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子・炭化物を含む。

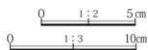
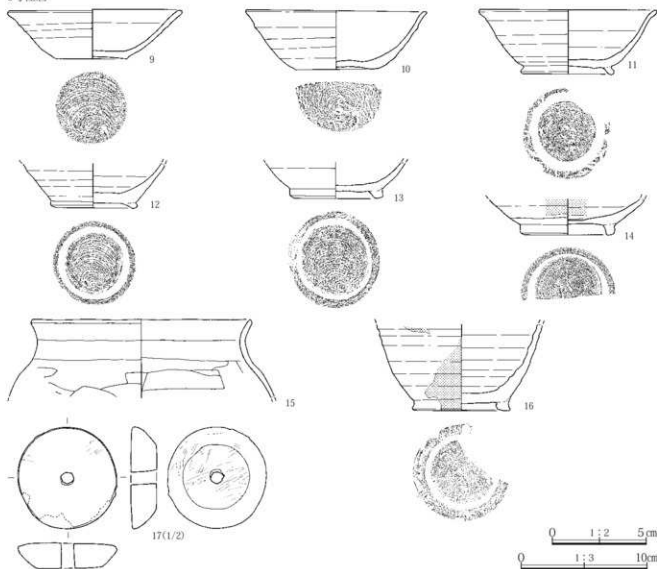
0 1:30 1m

第265図 Ⅶ区3・5号住居(2)

3号住居



5号住居



第266図 VII区3・5号住居の出土遺物

み、傾斜しながら緩やかに立ち上がる。燃焼部の左右壁には長径0.18～0.23m、短径0.07～0.10mの亜円礫が7点据えられており、礫の上位には長径0.34m、短径0.14m、厚さ0.10mの棒状円礫が置かれている。これらは前者がカマド構築材、後者は天井高架材と考えられる。燃焼部奥の底面には、埋土中に長径0.46m、短径0.20m、厚さ0.14mの棒状円礫が出土しており、これもカマドの崩落により移動した天井高架材と考えられる。燃焼部底～焚口では焼土や炭化物の広がりは認められない。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.26m、幅0.73m、深さ0.19mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(3)、カマド使用面付近から須恵器の椀(4)、灰軸陶器の皿(7)、埋土から須恵器の杯(1・2)、椀(5)、甕(8)、灰軸陶器の皿(6)が出土した。

時代 9世紀後半に帰属する5号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀後半と想定される。

5号住居(第264～266図、PL.136・137・408)

グリッド 3 D17

主軸方位 N78°E

重複 14号土坑に切られる。3・4・6号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.73m、短辺は3.57m、深さは0.30m、面積は9.92㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 ぶい黄褐色砂質シルトのブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んでほぼ平坦な掘方を構築している。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに傾斜しながら窪み、奥壁では急な勾配で立ち上がる。燃焼部の左右壁には長径0.24～0.30m、短径0.06～0.10mの亜円礫が7点据えられており、両袖には灰黄褐色砂質シルトを貼って長径0.25～0.30mの亜円

礫が複数埋め込まれている。これらはカマド構築材と考えられる。燃焼部には焼土ブロックが認められる。カマド埋土は炭化物を含む灰黄褐色にぶい黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.08m、幅0.80m、深さ0.32mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の南壁際から長径0.76m、短径0.62m、深さ0.19mの土坑を検出した。底直上から須恵器の杯(10)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(12)、床面付近から灰軸陶器の椀(14)、壺(16)、カマド使用面付近から須恵器の杯(9)、椀(11)、土師器の甕(15)、埋土から石製の紡輪(17)が出土した。

時代 10世紀後半に帰属する3・4号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代9世紀第4四半期と想定される。

4号住居(第267～269図、PL.135・136)

グリッド 3 D17

主軸方位 N84°E

重複 3・5号住居、14号土坑に切られる。28号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.10m、短辺は3.05m、深さは0.30m、面積は7.97㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

カマドと貯蔵穴 東壁の北東隅寄りに位置する。更に東壁の中央から古いカマドの痕跡が検出された。このことから住居廃絶時のカマドをカマド2、古いカマドをカマド1とする。カマド1の燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築し、カマド2の燃焼部は東壁の手前に灰黄褐色砂質シルトを貼って燃焼部を構築している。カマド2の燃焼部底はほぼ水平で、緩やかに傾きながら立ち上がる。燃焼部の左右壁には長径0.19～0.21m、短径

第4章 第2面の遺構と出土遺物

0.09~0.10mの垂円礫が4点据えられており、燃焼部底の中央には長径0.19m、短径0.10mの棒状円礫が深さ0.13mほど埋め込まれている。これらは前者がカマド構築材、後者は支脚と考えられる。燃焼部奥の埋土中に長径0.22m、短径0.16m、厚さ0.10mの棒状円礫が出土しており、これはカマドの崩落により移動した天井高架材と考えられる。燃焼部左壁には焼土ブロックが焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマド2の長さは0.55m、幅0.64m、深さ0.05mである。カマド1の燃焼部の左右壁には長径0.15mの垂円~垂角礫が2点据えられており、これらはカマド構築材と考えられる。カマド1の埋土にはぶい黄褐~灰黄褐色砂質土からなる。カマド1の長さは1.68m、幅0.70m、深さ0.30mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の甕(5)、カマド使用面から土師器の甕(3)、須恵器の羽釜(4)、鉢(2)、埋土から耳杯(1)が出土した

時代 9世紀後半に帰属する5号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀第3四半期と想定される。

28号住居(第267~269図, PL.155・408)

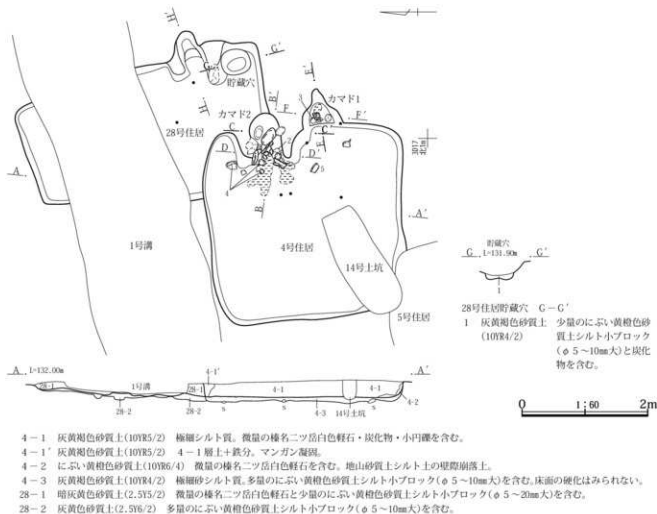
グリッド 3 D 18

主軸方位 N79°E

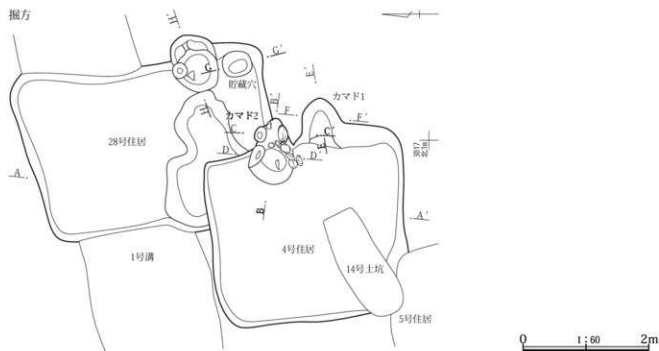
重複 4号住居、1号溝に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ長方形を呈する竪穴住居である。北部の一部は1号溝により失われている。長辺は3.97m、短辺は2.23m、深さは0.23m、検出された最大の面積は6.90㎡である。

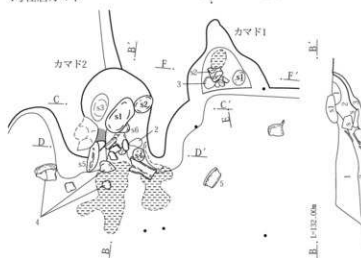
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む暗灰黄色砂質土からなる。



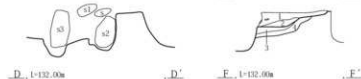
第267図 Ⅷ区4・28号住居(1)



4号住居カマド



C., 1:132.00m C', E., 1:132.00m E'



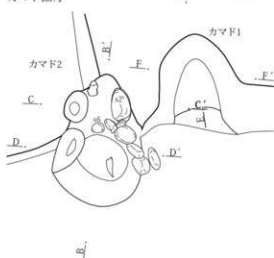
D., 1:132.00m D', F., 1:132.00m F'



カマド2

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量のふい、黄褐色砂質土シルト粒子と微量の炭化物・極名ニツ岳白色軽石と少量の炭土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量のふい、黄褐色砂質土シルト粒子・炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量のふい、黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)と少量の大粒炭化物を含む。上面に灰層散在。

カマド掘方



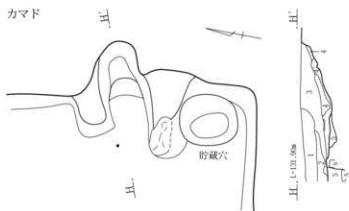
カマド1

- 1 におい、黄褐色砂質土(10YR4/3) 微量の極名ニツ岳白色軽石と少量の炭土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の炭化物を含む。=使用面
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 上面に灰層を有し、少量の炭化物を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の炭化物を含む。

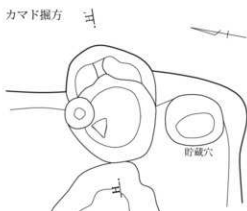
0 1:30 1m

第4章 第2面の遺構と出土遺物

カマド



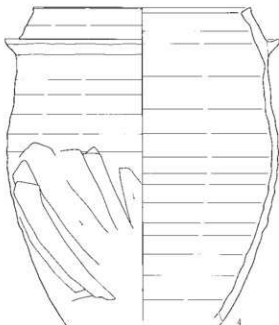
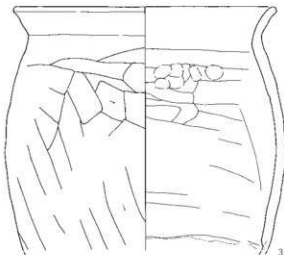
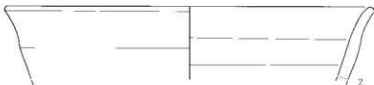
カマド掘方



- 1 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2) 微量の極名ニツ島白色軽石と少量のにぶい黄褐色砂質上シルト小ブロック(φ5~20mm大)を含む。
- 2 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2) 微量の極名ニツ島白色軽石・炭化物と少量のにぶい黄褐色砂質上シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 3 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2) 微量の極名ニツ島白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質上シルト小ブロック(φ5~20mm大)と炭化物を含む。
- 4 にぶい黄褐色砂質土(10YR7/4) 地山砂質上シルト質上に暗灰黄色砂質小ブロック(φ10~20mm大)を含む。
- 4' にぶい黄褐色砂質土(10YR7/4) 4層土+炭化物。
- 5 灰黄色砂質土(2.5Y6/2) 多量のにぶい黄褐色砂質上シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。=住居掘方土

0 1:30 1m

4号住居



28号住居



0 1:2 5cm
0 1:3 10cm

第269図 VII区28号住居と4・28号住居の出土遺物

床面 ぶい黄褐色砂質シルトのブロックを多く含む灰黄色砂質土を0.12mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。南西部は長径1.85m、深さ0.09mの不定形の浅い窪みが検出された。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で緩やかに傾斜しながら立ち上がる。燃焼部の右袖には長径0.32m、短径0.17mの垂円礫が埋め込まれている。これはカマド構築材と考えられる。カマド埋土は炭化物を含む暗灰黄色砂質土が成層する。カマドは長さ1.02m、幅0.40m、深さ0.14mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の南壁際から長径0.46m、短径0.40m、深さ0.17mの土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から鉄製品(6)が出土した。

時代 埋土から古墳時代後期～平安時代と想定され、10世紀後半に帰属する4号住居よりも古いので、10世紀以前である。

6号住居(第270・271・273図、PL.137・138・408)

グリッド 3 D16

主軸方位 N73° E

重複 5・7号住居、15号土坑に切られる。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。北壁の西側は5号住居に、南壁の大部分は7号住居により失われている。長辺は4.50m、短辺は3.60m、深さは0.25m、面積は15.11㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.06mほど貼り、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩く窪み、奥壁は約45°の勾配で立ち上がる。

燃焼部の奥壁に焼土ブロックが、焚口付近は少量の炭化物の広がりを検出した。カマド埋土はニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が成層している。カマドは長さ0.93m、幅0.93m、深さ0.29mである。

貯蔵穴 東南隅の壁際で長径0.53m、短径0.46m、深さ0.19mの土坑を検出し、底直上から土師器の杯(1)が出土した。土坑は規模や位置から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から須恵器の杯(2)が出土した。

時代 平安時代9世紀第3四半期。

7号住居(第270～273図、PL.138・139・408)

グリッド 3 D15

主軸方位 N67° E

重複 6号住居を切る。8号住居に切られる。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。南壁の大部分は8号住居により失われている。長辺は4.23m、短辺は3.56m、深さは0.31m、面積は12.74㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を多く含む灰黄褐色～褐色砂質土からなる。

床面 黄褐色砂質シルトブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.07mほど貼って、床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。

カマド 東壁の南東隅に位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外側に構築し、燃焼部の主軸は東壁からの直交方向に対して、やや南側に傾いている。燃焼部底は水平で、奥壁では緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部の左右壁には長径0.16～0.24m、短径0.05～0.14mの垂円礫が2点据えられている。これらはカマド構築材と考えられる。焚口に近い燃焼部底には、埋土中に長径0.40m、短径0.24m、厚さ0.20mの円礫が出土した。また埋土中からは大小の垂円～垂角礫が多く出土した。これらは天井高梁材やカマドの構築材と考えられる。燃焼部からは焼土や炭化物が認められない。カマド埋土は炭化物を含む灰黄褐色～ぶい黄褐色砂質土が成層している。カマドは長さ1.50m、幅0.63m、深さ0.21mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南西部の壁際から直径0.48m、深

さ0.25mの円形の土坑を検出した。土坑はカマダが竪穴の南東隅に位置することから貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(4)、カマダ使用面付近から甕(3)が出土した。

時代 9世紀に帰属する8号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀後半と想定される。

8号住居(第270~274図、PL.140・408)

グリッド 3 D15

主軸方位 N75° E

重複 7号住居を切る。

形状と規模 北西~南東方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.46m、短辺は3.41m、深さは0.31m、面積は9.54㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石と炭化物を含む灰黄褐色砂質土からなり、炭化物は下位ほど多い。



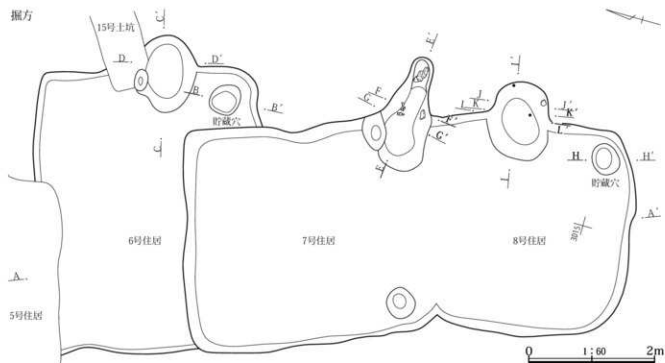
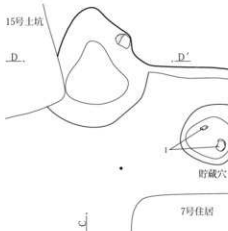
第270図 Ⅶ区6~8号住居(1)

床面 灰黄褐色砂質土のブロックを多く含むぶい黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、床面を構築している。床面の上位には厚さ0.05mの炭化材を含む灰黄褐色砂質土が覆う。炭化材は竪穴の中央から北西部で壁に並行する東北東～西南西方向に揃って出土した。住居は廃絶後に竪穴の一部に埋土が堆積している過程で焼失した竪穴住居である。

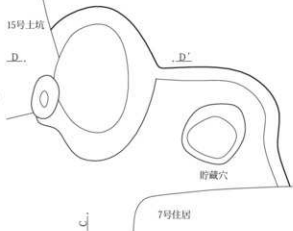
掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。

カマド 東壁中央のやや北寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、奥壁で急な勾配で立ち上がる。燃焼部の左右壁には長径0.29～0.34m、短径0.12～0.15mの棒状歪円礫2点が据えられており、燃焼部左側奥壁には

掘方

6号住居
カマド

カマド掘方

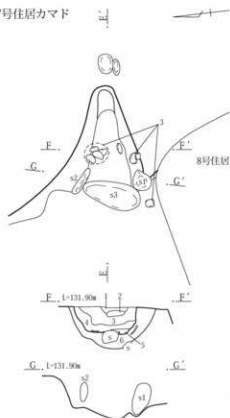


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石・小円礫・ぶい黄褐色砂質土シルト粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 1層上+少量の炭化材・焼土粒子を含む。
- 2* 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 1層上+多量の炭化材・焼土粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量のぶい黄褐色砂質土ローム小ブロック(φ5～15mm大)と少量の炭化物を含む。

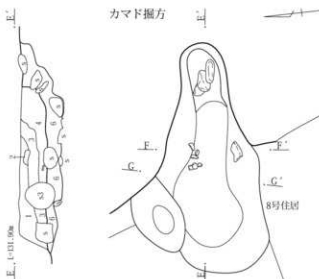
0 1:30 1m

第271図 VII区6～8号住居(2)

7号住居カマド

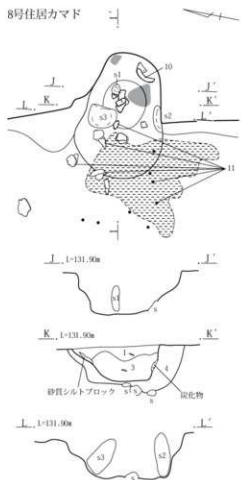


カマド掘方

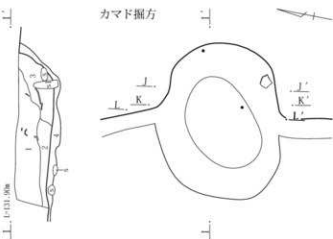


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の炭化物・種名ニツ岳白色軽石と微量の焼土粒子を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(10YR5/4)
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の炭化物・焼土粒子・種名ニツ岳白色軽石を含む。
- 4 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量の炭化物・焼土小ブロック(φ5mm大)を含む。
- 5 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 4層上+少量の灰を含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の焼土粒子・炭化物を含む。上面の一部に灰層散在。

8号住居カマド



カマド掘方

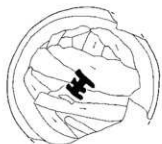


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石・炭化物・焼土粒子・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石・焼土粒子・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と多量の大粒炭化物を含む。
- 3 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 2層上+多量の焼土小ブロック(φ5~10mm大)。
- 4 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 微量の焼土粒子・炭化物を含む。燃焼部の一部に灰層散在。

0 1:30 1m

第272図 VII区7・8号住居

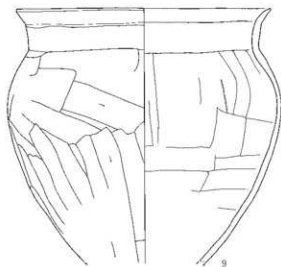
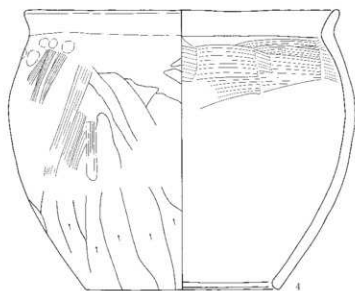
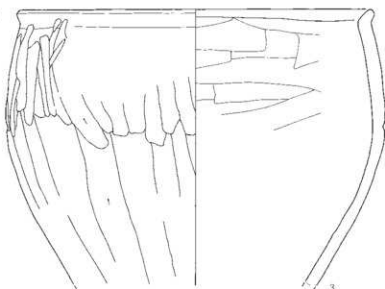
6号住居



8号住居

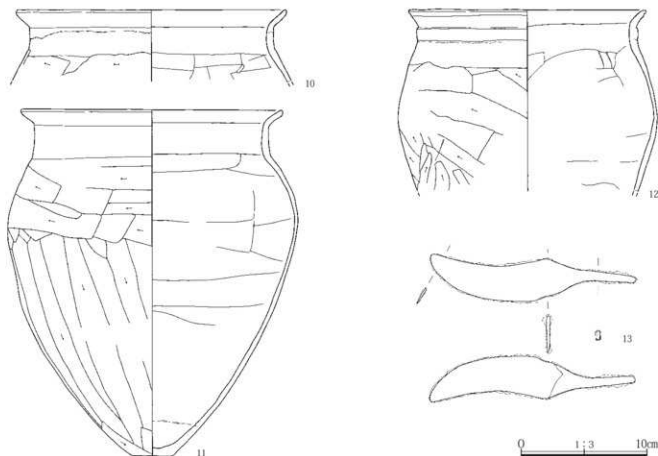


7号住居



0 1:3 10cm

第273図 VII区6～8号住居の出土遺物



第274図 VII区8号住居の出土遺物

長径0.40m、短径0.10mの棒状円礫が深さ0.08mほど埋め込まれている。これらは前者がカマド構築材、後者は支脚と考えられる。燃焼部右壁には焼土ブロックが焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐〜にぶい黄褐色砂質土が成層する。カマドの長さは0.98m、幅0.70m、深さ0.27mである。

貯蔵穴 南東隅の壁際から長径0.70m、短径0.43m、深さ0.27mの円形の土坑を検出し、底から0.20m上から鉄製品(13)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(5・6・8)、土師器の甕(9)、カマド使用面から土師器の甕(11)が出土した。

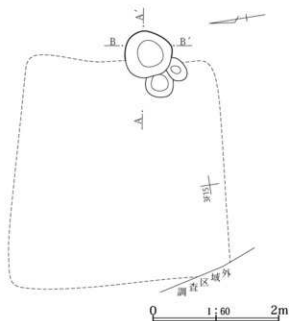
時代 10世紀後半に帰属する7号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代9世紀第2～4四半期に想定される。

9号住居(第275・276図、PL.140)

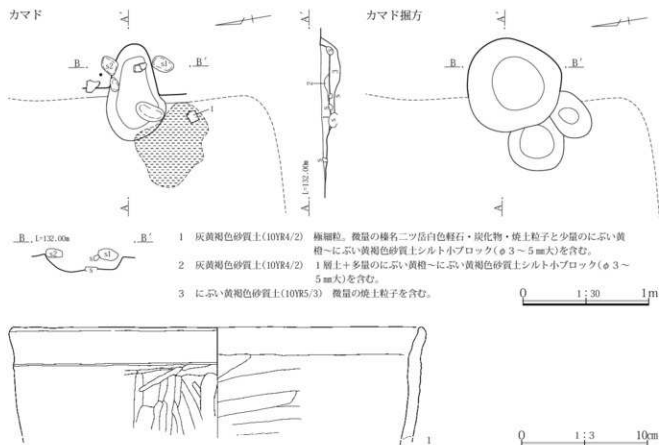
グリッド 3 E 15

主軸方位 N85°W

重複 なし。



第275図 VII区9号住居



第276図 VII区9号住居と出土遺物

形状と規模 東西方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居と想定される。カマドの一部が残存し、掘方の調査で竪穴の規模を想定した。長辺は3.75m、短辺は3.35m、面積は11.68㎡である。

掘方埋土 二ツ岳の白色軽石や炭化物を含む灰黄褐色砂質土からなる。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥に掘り込んで構築している。燃焼部底は大部分が失われ、焼土ブロックや炭化物が残存する。カマドは長さ0.76m、幅0.58m、深さ0.05mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の裏(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

10号住居(第277・278図、PL.141・409)

グリッド 3 E 14

主軸方位 N82° E

重複 なし。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.32m、短辺は3.07m、深さは0.25m、面積は8.17㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.06mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。

カマド 東壁中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は水平で奥壁は急な勾配で立ち上がる。燃焼部底に焼土ブロックと炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色土が成層し、右袖の埋土からは長径0.37mの扁平礫が出土した。カマドは長さ0.89m、幅0.34m、深さ0.23m

である。

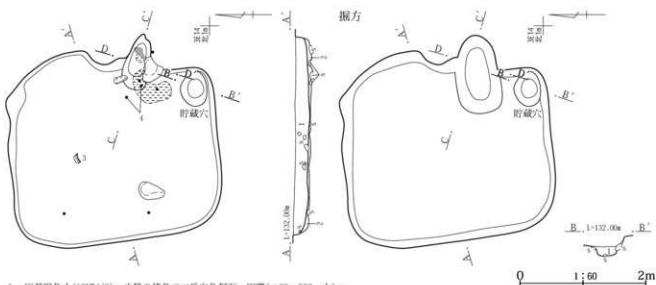
貯蔵穴 南東隅の壁際から長径0.56m、短径0.43m、深さ0.10mの円形の土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たな

い構造の竪穴住居と想定される。

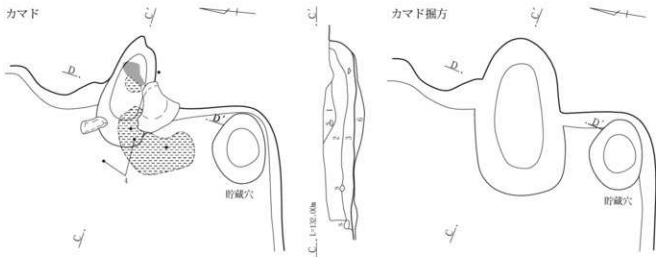
遺物 床面から土師器の甕(3)、カマド使用面付近から甕(4)、埋土から灰軸陶器の皿(1・2)、鉄製紡錘車(5・6)が出土した。

時代 平安時代9世紀第3四半期。



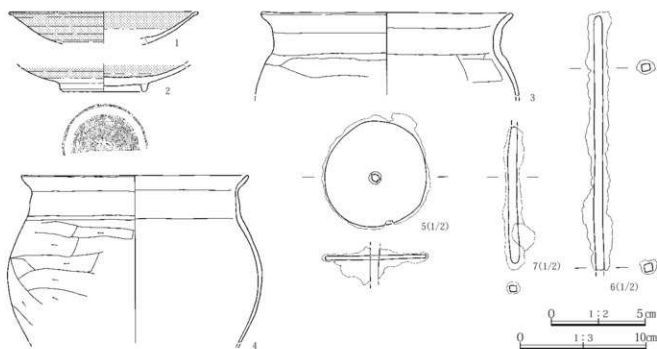
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量の棒名ニッ岳白色軽石・円礫(φ20~300mm大)・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)と微量の焼土粒子・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10~50mm大)を含む。

- 貯蔵穴 B-B'
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10~50mm大)を含む。



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量の棒名ニッ岳白色軽石・小円礫・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量の棒名ニッ岳白色軽石・小円礫・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)・炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量の棒名ニッ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト粒子・炭化物と微量の焼土粒子を含む。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト粒子・炭化物・焼土粒子を含む。
- 5 にぶい黄褐色砂質土シルト土 左袖部の崩落土。
- 6 灰黄褐色土(10YR4/2) 多量の炭化物を含む。

第277図 VII区10号住居



第278図 VII区10号住居の出土遺物

12号住居(第279・280図、PL.142)

グリッド 3 E 13

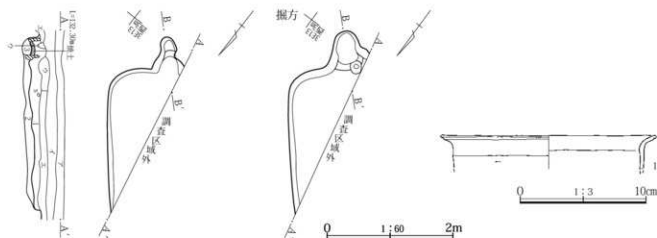
主軸方位 N42°W

重複 なし。14号住居に隣接する。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸方形を

呈する竪穴住居で、西部の大部分は調査区外に存在する。長辺は2.25m+、短辺は1.05m+、深さは0.20m、検出された最大の面積は1.28㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。床面 ぶい黄褐色土を0.12mほど貼って、平坦な床面



ア 褐灰色砂質土(10YR5/1) 現代耕作土。

イ 暗褐色土(10YR3/3) 多量の浅間A軽石と少量の榛名ニツ岳白色軽石を含む。上面は酸化凝固。

ウ 暗褐色土(10YR3/3) 少量の浅間A軽石と微量の榛名ニツ岳白色軽石を含む。

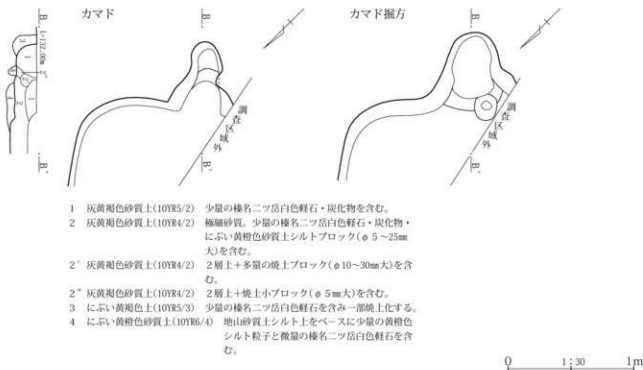
エ 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量の榛名ニツ岳白色軽石・ぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm大)を含む。

1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の榛名ニツ岳白色軽石と多量のぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm大)と微量の焼土粒子・炭化物を含む。

2 ぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の榛名ニツ岳白色軽石と多量のぶい黄褐色・明黄褐色砂質土シルトブロック(φ5～30mm大)を含む。

3 暗褐色土(10YR3/4) 少量の焼土小ブロック・ぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。=カマド掘方埋土

第279図 VII区12号住居と出土遺物



第280図 VII区12号住居

を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。

カマドと貯蔵穴 南壁に位置する。カマドの燃焼部は南壁の奥を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は水平で奥壁は急な勾配で立ち上がる。燃焼部壁にしっかりと焼土帯と底に炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色土からなる。カマドは長さ0.94m、幅0.52m、深さ0.22mである。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物 埋土から土師器の甕(1)が出土した。

時代 平安時代9世紀第3四半期。

13号住居(第281図、PL.143)

グリッド 3 E 13

主軸方位 N71° E

重複 14号住居を切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.86m、短辺は3.17m、深さは0.20m、面積は10.27㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石や円礫を多く含む灰黄褐色砂質

土からなる。

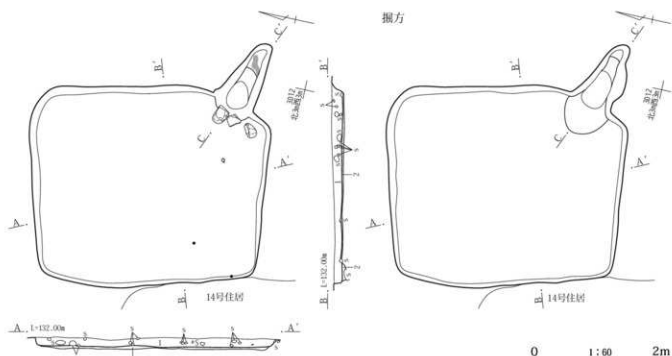
床面 灰黄褐色砂質土を0.06mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

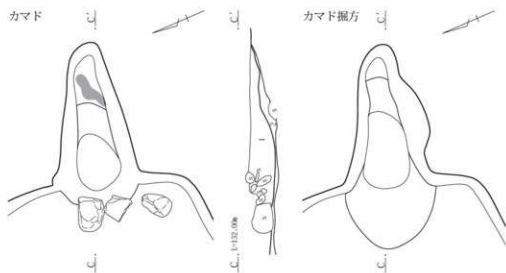
カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅に位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は水平で、緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部底に焼土ブロックの広がりを検出した。焚口付近の埋土には長径0.07~0.25mの垂円~角礫が多く出土した。カマド埋土は灰黄褐色土である。カマドは長さ1.50m、幅0.70m、深さ0.24mである。貯蔵穴は検出されなかった。
柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から須恵器の椀(1)や灰陶器の椀(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の円礫(φ10~300mm大)と少量の極名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~20mm大)・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~20mm大)を含む。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の極名ニツ岳白色軽石・炭化物・にぶい黄褐色砂質土シルト粒子と微量の焼土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石と炭化物を含む。



第281図 VII区13号住居と出土遺物

14号住居(第282～284図、PL.144・409)

グリッド 3 E 12

主軸方位 N80° E

重複 13号住居に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居で、西部は調査区外に存在する。長辺は4.83m、短辺は2.48m+、深さは0.56m、検出された最大の面積は10.81㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が成層する。

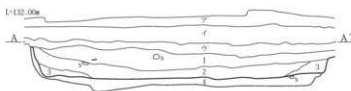
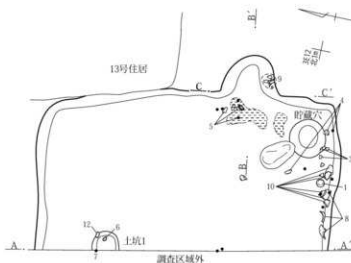
床面 灰黄褐色砂質土を0.14mほど厚く貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。西壁際の北寄りから長径0.29m、

深さ0.22mの土坑1を検出した。

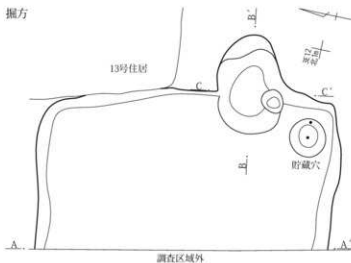
掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、奥壁は垂直に立ち上がる。掘方の調査で燃焼部右壁の下から直径0.35m、深さ0.04mの小ピットを検出した。これは位置からカマド構築材の痕跡と考えられる。焚口付近で炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土が成層する。カマドは長さ1.13m、幅0.93m、深さ0.45mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東壁際から直径0.59m、深さ



掘方

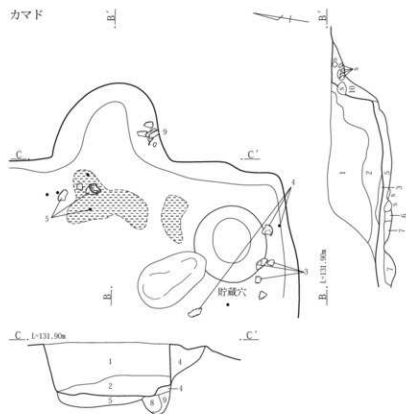


- ア 褐灰色砂質土(10YR4/1) 現代耕作土。
- イ 暗褐色砂質土(10YR3/3) 多量の浅間A軽石と少量の榛名ニツ岳白色軽石を含む。上面は酸化風化。
- ウ 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の榛名ニツ岳白色軽石を含む。
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の榛名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の榛名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の榛名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の榛名ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~30mm大)部分的に小円礫を含む。

0 1:60 2m

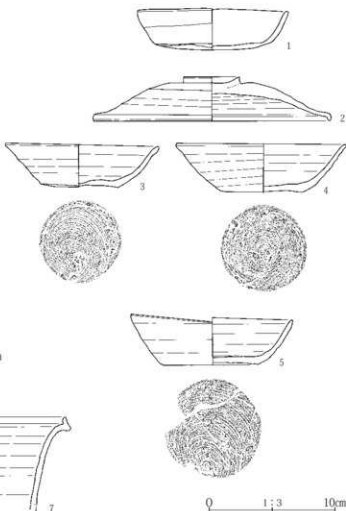
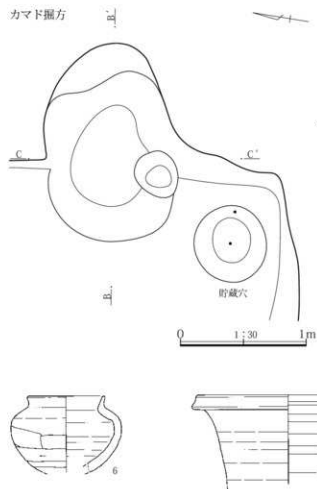
第282図 VII区14号住居

カマド

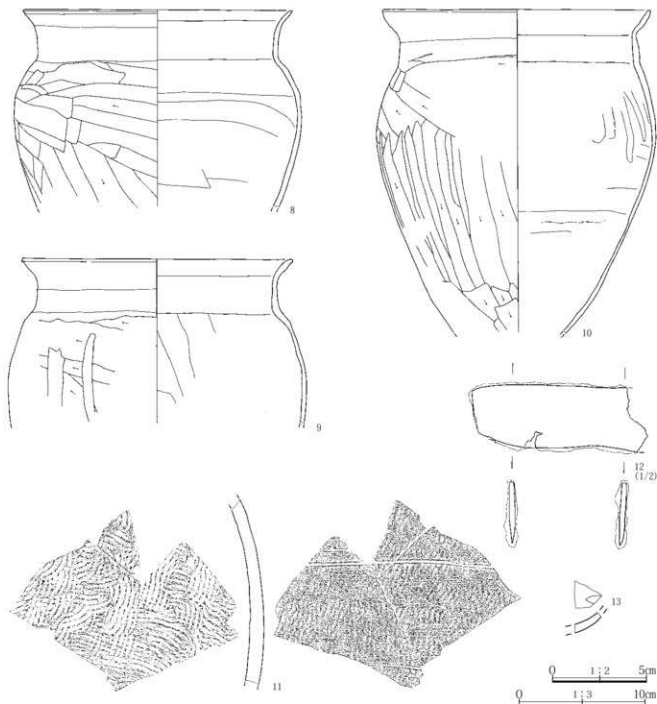


- 1 灰黄褐色砂質土 少量の棒名二ツ岳白色軽石と微量の炭化物を含む。(10YR4/2)
- 2 灰黄褐色砂質土 少量の棒名二ツ岳白色軽石・焼土(10YR5/2) 粒子(φ5mm大)と微量の炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土 多量の炭化物と少量の灰を含む。(10YR5/2) =使用面
- 4 にぶい黄褐色砂質土 少量の焼土粒子を含む。(10YR5/3)
- 5 黒褐色土(10YR3/1)と灰黄褐色土(10YR4/2)の互層少量の砂質土・焼土粒子(φ2~3mm大)を含む。締り良好。貼床状
- 6 灰黄褐色砂質土 微量の小円礫(φ5~30mm大)を含む。締りやや弱。
- 7 灰黄褐色砂質土 円礫(φ2~50mm大)・にぶい黄褐色シルト質土ブロックを含む。締りやや弱。
- 8 灰黄褐色砂質土 微量の焼土粒子(φ2~4mm)・小円礫(φ5~20mm大)を含む。締りやや弱。
- 9 にぶい黄褐色砂質土 微量の焼土粒子(φ2~3mm大)を含む。締りやや弱。
- 10 灰黄褐色砂質土 少量の小円礫(φ2~70mm大)を含む。締りやや弱。

カマド掘方



第283図 VII区14号住居と出土遺物



第284図 VII区14号住居の出土遺物

0.09mの土坑を検出した。土坑は位置と形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の杯(1)、須恵器の杯(3・4)、土師器の甕(8・10)カマド使用面から須恵器の杯(5)が出土した。出土遺物は9世紀後半内に幅を有する。

時代 平安時代9世紀第3・4四半期。

18号住居(第285～289図、PL.145・410)

グリッド 3 D10

主軸方位 N80°E

重複 なし。

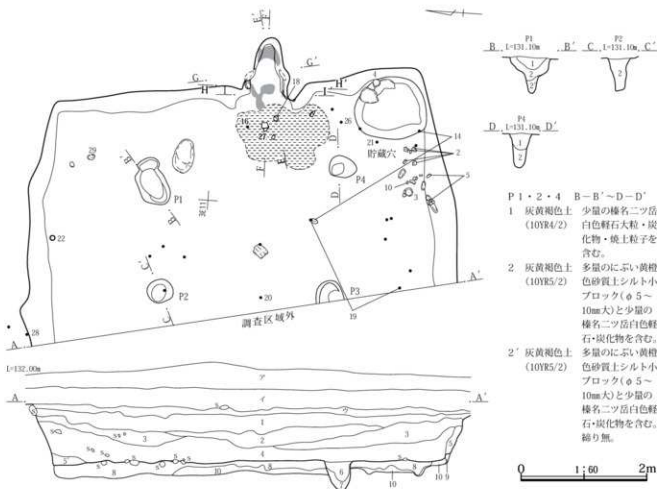
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈し、西部は調査区外に存在する。長辺は6.85m、短辺は3.75m+、深さは0.67m、検出された最大の面積は20.32㎡で、規模の大きな竪穴住居である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む砂質土からなり、下位より暗褐色砂質土、にぶい黄褐色砂質土、灰黄褐色砂質土の順で成層している。暗褐色にぶい黄褐色土は中央に向かって傾きながら竪穴を埋め、上位の灰黄褐色土はレンズ状に堆積して竪穴中央を埋積している。

床面 灰黄褐色砂質土を0.20mほど厚く貼って、平坦な床面を構築している。一部の床面は掘方埋土に礫を含んでいる。

掘方 XII・XIII期の黄褐色砂礫～砂層を掘り込んで構築している。カマド前から竪穴中央にかけてやや高く、壁際を幅1.50mほどの浅い溝状の窪みが周回する。

カマド 東壁の中央に位置する。カマド燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに窪んで、奥壁は緩やかな傾斜から約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部壁の左右には長径0.17～0.42m、短径0.10～0.15m、厚さ0.15mの垂円礫5点が据えられ、



- P1・2・4 B-B'～D-D'
- 1 灰黄褐色土 少量の樺名ニツ岳白色軽石・炭化物・焼土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色土 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)と少量の樺名ニツ岳白色軽石・炭化物を含む。
- 2' 灰黄褐色土 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)と少量の樺名ニツ岳白色軽石・炭化物を含む。締り無。

ア 褐灰色砂質土(10YR4/1) 現代耕作土。

イ 暗褐色～黒褐色砂質土(10YR3/3～2/3) 近世堆積土。上端は現代耕作(水稲)により酸化赤褐色化し凝固。少量の樺名ニツ岳白色軽石と多量の浅間A軽石を含む。

ウ 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の樺名ニツ岳白色軽石と多量の浅間B軽石を含む。

1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の樺名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10～30mm大)を含む。

2 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3) 少量の樺名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10～30mm大)を含む。

3 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3) 5層上に類似。少量の樺名ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10～30mm大)を含む。

4 暗褐色砂質土(10YR3/3) 少量の樺名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10～30mm大)と一部北寄りには小円礫を含む。＝下面床面

5 暗褐色砂質土(10YR3/3) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10～50mm大)を含む。＝壁崩落土

5' 暗褐色砂質土(10YR3/3) 8層上と少量の小円礫を含む。

6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の大粒樺名ニツ岳白色軽石・炭化物・焼土粒子を含む。＝P3

7 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)と少量の樺名ニツ岳白色軽石・炭化物を含む。＝P3

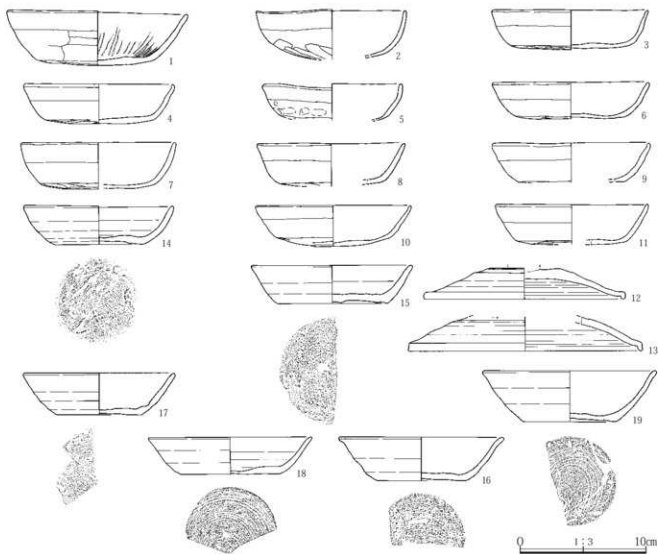
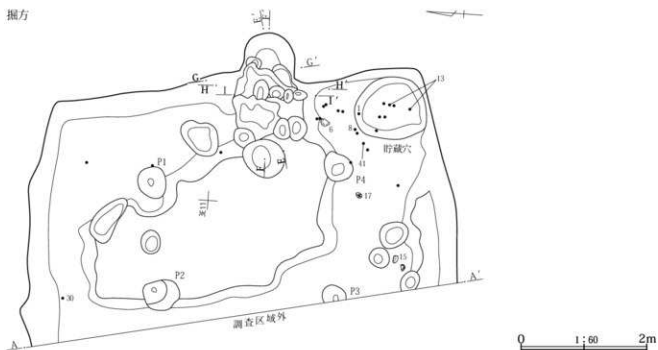
8 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにぶい黄褐色～浅黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10～30mm大)と微量の樺名ニツ岳白色軽石を含む。締り有。

9 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm大)を含む。

10 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにぶい黄褐色～浅黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10～30mm大)と微量の樺名ニツ岳白色軽石を含む。締り有。

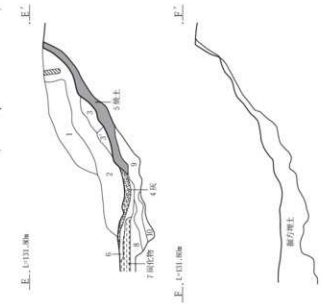
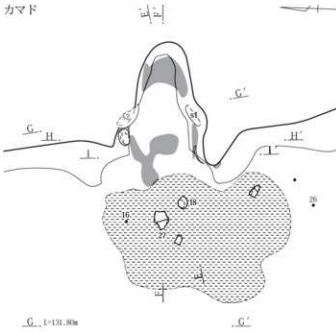
第285図 VII区18号住居(1)

掘方

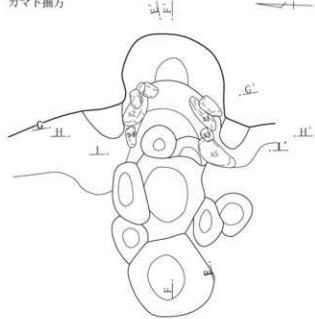
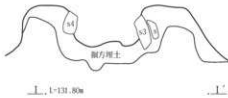
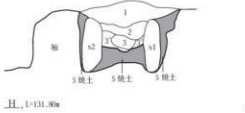


第286図 VII区18号住居と出土遺物

カマド



カマド掘方

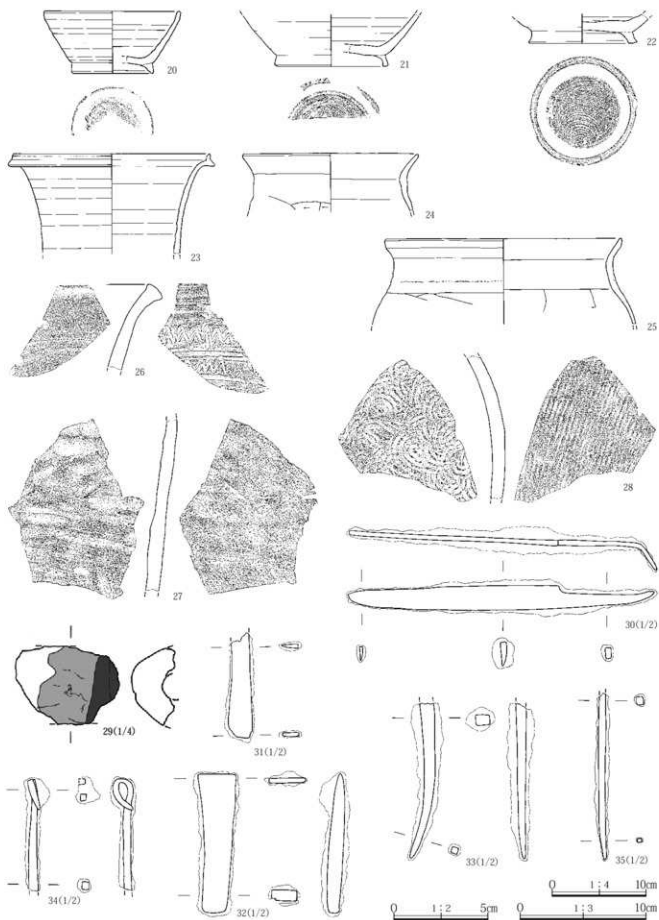


- 1 にふい黄褐色砂質土(10YR6/3) 少量の種名ニツ島白色軽石と微量の炭化物・焼土粒子を含む。
- 2 にふい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量の種名ニツ島白色軽石と大粒炭化物・焼土小ブロック(φ 5~10mm大)を含む。
- 3 にふい黄褐色砂質土(10YR5/3) 多量の焼土ブロック(φ 5~20mm大)と下方に少量の炭化物を含む。=崩落天井部材
- 3' にふい黄褐色砂質土(10YR5/3) 3層上に類似。少量の焼土ブロックを混入する。=崩落天井部材
- 4 灰層 少量の焼土粒子・炭化物を含む。
- 5 焼土中心層 締りやや弱。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の炭化物を含む。締りやや弱。
- 7 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物層。にふい黄褐色砂質土層をサンドイッチ状に混入する。下部は炭化層中心。微量の焼土粒子(φ 2~3mm大)を含む。締りやや弱。
- 8 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量の炭化物粒子(φ 2~5mm大)を含む。締りやや弱。
- 9 灰黄色砂質土(2.5Y6/2) 微量の焼土粒子(φ 2~4mm大)・炭化物を含む。締りやや弱。
- 10 灰黄色土(2.5Y6/2) 微量の焼土粒子・炭化物粒子(φ 1~2mm大)を含む。締りやや弱。

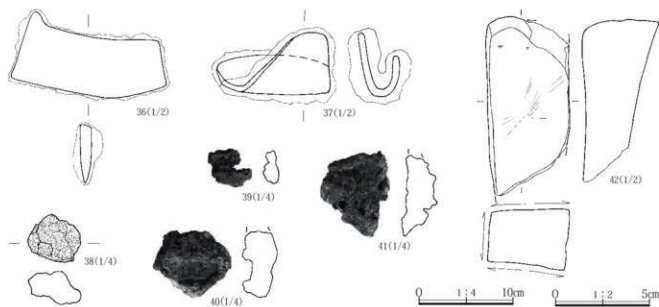
0 1:30 1m

第287図 VII区18号住居(2)

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第288図 VII区18号住居の出土遺物(1)



第289図 VII区18号住居の出土遺物(2)

深さ0.10～0.20mほど埋め込まれている。これらはカマド構築材と考えられる。燃焼部の底や奥壁には焼土帯、焚口では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は二ツ岳の白色軽石や炭化物を含むにふい黄褐色砂質土が成層する。カマドは長さ1.47m、幅0.65m、深さ0.67mである。貯蔵穴 南東壁際から長径1.14m、短径0.99m、深さ0.11mの土坑を検出した。底直上から須恵器の杯蓋(13)、底から0.12m上で土師器の杯(1・8)、甕(25)が出土した。土坑は位置と形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 主柱穴と思われるピット4基を検出した。これらは長径0.78m、短径0.44m、深さ0.67mのP1、直径0.42m、深さ0.67mのP2、長径0.33m、短径0.51m、深さ0.51mのP3、長径0.44m、短径0.34m、深さ0.51mのP4である。柱間は桁行のP1・P2が1.73m、P3・P4が2.05m、梁行のP1・P4が3.00m、P2・P3が2.90mである。桁行に比べ梁行の方の柱間が大きいため、桁行は6本柱の可能性がある。なお柱穴はP1以外、掘方と柱痕が認められない。

遺物 床面から多くの遺物が出土し、42点の遺物を抽出して掲載した。床面から土師器の杯(2・4)、須恵器の杯(14)、椀(19・22)、甕(26)、土製の羽巾(29)、椀形鍛冶滓(41)、床面付近から土師器の杯(5・10)、カマド使用面から須恵器の杯(16・18)、甕(27)、埋土から刀子(31)や鉄釘(33)、カマド埋土から砥石(42)が出土した。出土遺物は9世紀内に幅を有する。

時代 平安時代9世紀第1～3四半期。

19号住居(第290・291図、PL.146・409)

グリッド 3 C11

主軸方位 N9°W

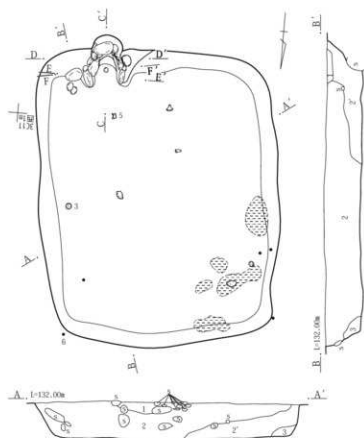
重複 なし。20号住居に近接する。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.72m、短辺は3.80m、深さは0.56m、面積は13.09㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を多く含むにふい黄褐色砂質土からなる。

床面 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を削り出して、平坦な床面を構築している。北西隅の壁際周辺からブロック状の炭化物の広がりを検出した。

カマドと貯蔵穴 南壁の南東隅寄りに位置する。カマド燃焼部は南壁から手前に灰黄褐色砂質シルトを貼って袖を構築し、壁の内側～壁際に構築している。燃焼部底は緩やかに窪んで、奥壁は急な勾配で0.60mの落差を立ち上がる。燃焼部壁の左右には長径0.17～0.28m、短径0.15～0.25m、厚さ0.05～0.07mの垂円礫8点が据えられ、深さ0.10～0.18mほど埋め込まれている。これらはカマド構築材と考えられる。また、奥壁付近の埋土中には長径0.33m、短径0.25m、厚さ0.10mの円礫が出土した。これはカマドの崩落により移動した天井高架材と考えられる。燃焼部底は薄い焼土帯や少量の炭化物の広



- 1 ぶい黄褐色砂質土(10/R4/3) 少量の種名ニツ岳白色軽石と多量の浅間B軽石を含む。
- 2 ぶい黄褐色砂質土(10/R4/3) 少量の種名ニツ岳白色軽石・ぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~20mm大)と多量の円礫を含む。
- 2' ぶい黄褐色砂質土(10/R5/3) 少量の種名ニツ岳白色軽石・円礫と多量のぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~20mm大)を含む。
- 3 ぶい黄褐色砂質土(10/R5/3) 多量のぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~20mm大)を含む。

0 1:60 2m

第290図 VII区19号住居

がりを検出した。カマド埋土はニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土である。カマドは長さ1.09m、幅1.07m、深さ0.55mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。一辺が5m弱におよぶ竪穴の規模から考えて、主柱穴を有しない構造の建物とは考えにくい。これは主柱穴底がⅫ・ⅩⅢ層の黄褐色砂礫層で止められたため、柱穴の輪郭が不明瞭である可能性が想定される。

遺物 床面から灰軸陶器の壺(5)、床面付近から須恵器の椀(3)、埋土から須恵器の杯(1・2)、灰軸陶器の皿(4)が出土した。また床面の0.51m上の埋土中から石製の丸轆(6)が完形で出土したことが特筆される。出土遺物は9・10世紀内に幅を有する。

時代 平安時代9世紀前半。

20号住居(第292図、PL.147)

グリッド 3 B 11

主軸方位 N79°W

重複 なし。19号住居に近接する。

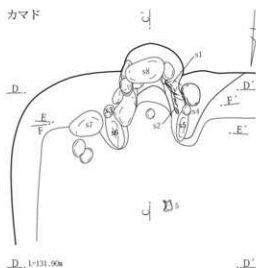
形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ長方形を呈する竪穴住居で、中央は試掘溝により失われている。長辺は3.24m、短辺は2.90m、深さは0.21m、面積は6.55㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 Ⅻ・ⅩⅢ層の黄褐色砂礫層を削り出して、平坦な床面を構築している。

カマド 南東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は南東壁を奥に掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は緩やかに窪み、奥壁は緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部壁の左右には長径0.19~0.22m、短径0.08~0.14m、厚さ0.07~0.12mの亜円礫2点が据えられ、深さ0.10~0.12mほど埋め込まれている。これらはカマド構築材と考えられる。また、燃焼部左壁際の埋土中に長径0.13m、短径0.11m、厚さ0.09mの角礫が出土した。燃焼部底は淡い焼土ブロックや少量の炭化物を検出した。カマド埋土はニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が成層する。カマドは長さ0.92m、幅0.54m、深さ0.21mである。

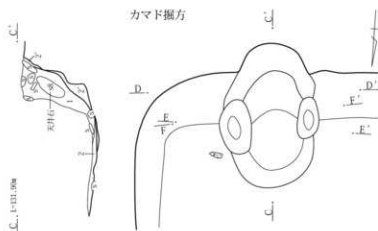
カマド



E, L=131.70m

E, L=131.70m

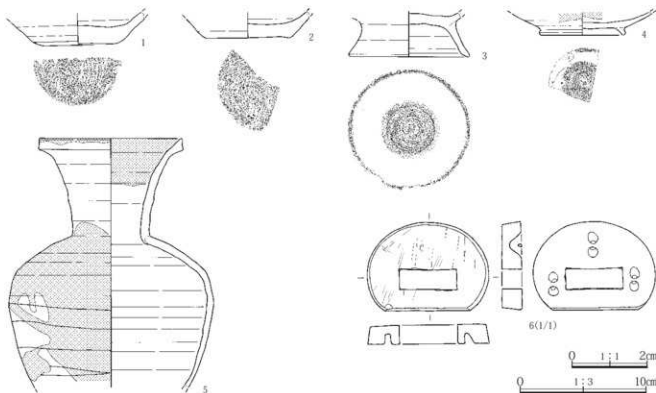
カマド掘方



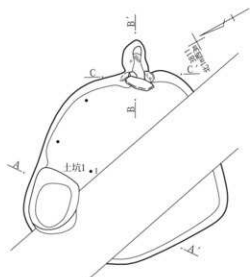
C, L=131.00m

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の緑名二ツ岳白色軽石と
焼土粒子を含む。
- 2 潮灰色砂質土(10YR4/1) 多量の炭化物と少量の灰・
焼土粒子・焼土ブロック(φ
10~30mm大)を含む。
=使用面
- 2' 潮灰色砂質土(10YR4/1) 上面が弱く焼土化。=一次
使用面

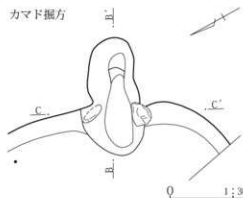
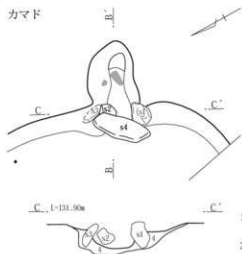
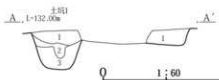
0 1:30 1m



第291図 VII区19号住居と出土遺物



- 1 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) 少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 10~20mm大)と榛名二ツ岳白色軽石を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) 多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 10~20mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) 少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 10~20mm大)と微量の榛名二ツ岳白色軽石を含む。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の榛名二ツ岳白色軽石・ふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)・焼土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の榛名二ツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)と少量の焼土粒子・炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の炭化物小粒と少量の焼土粒子を含む。=使用面
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の炭化物小粒を含む。

第292図 VII区20号住居と出土遺物

貯蔵穴 北側の壁際から長辺0.98m、短辺0.75m、深さ0.29mの歪んだ隅丸長方形の土坑1を検出した。土坑1は規模と形状から貯蔵穴の可能性がある。
柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。
遺物 埋土から須恵器の杯(1)が出土した。
時代 平安時代9世紀第2四半期。

る竪穴住居である。長辺は4.88m、短辺は3.77m、深さは0.38m、面積は15.37㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。中央からP1・2を検出した。

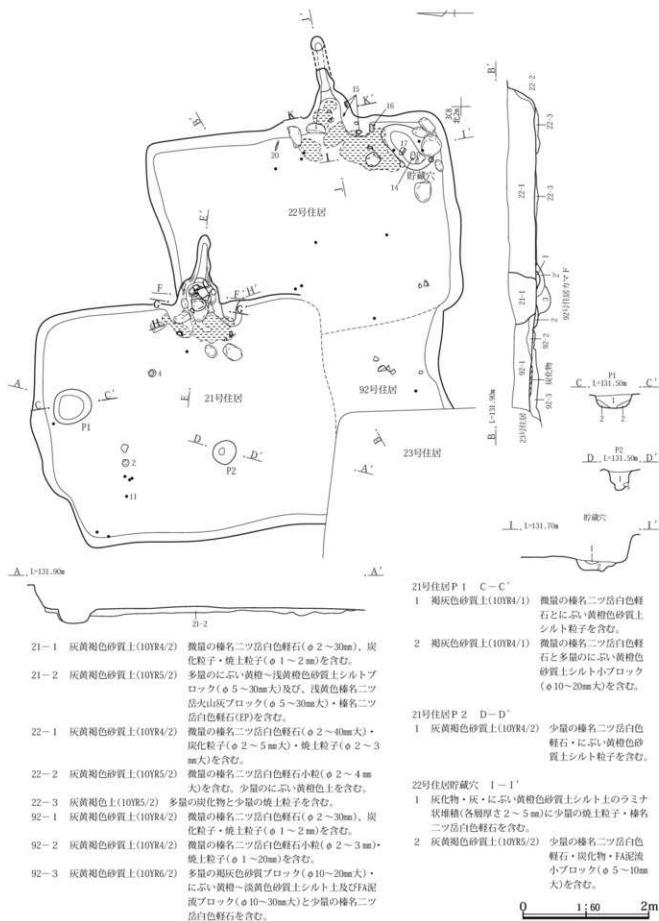
P1は円形を呈し、長径は0.60m、短径は0.54m、深さは0.24mである。

P2は円形を呈し、直径は0.38m、深さは0.45mである。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。壁際からP3を検出した。

P3は円形を呈し、直径は0.43m、深さは0.60mである。
カマドと貯蔵穴 東壁の中央に位置する。カマドは燃焼

21号住居(第293~296図、PL.148・149・151・410)
グリッド 3 D 9
主軸方位 N83°E
重複 23号住居に切られる。22・92号住居を切る。
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈す



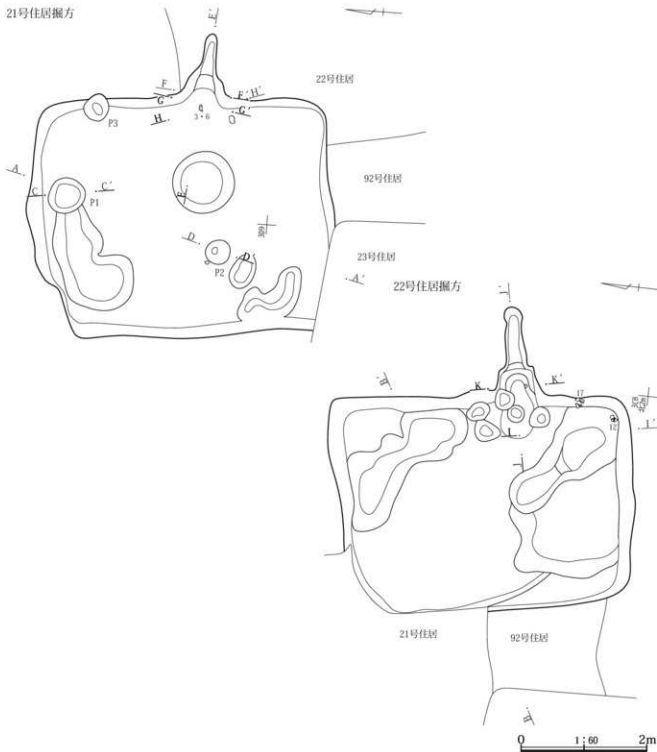
第293遺 Ⅶ区21・22号住居(1)

第4章 第2面の遺構と出土遺物

部と煙道及び煙出しの接続部が残存し、燃焼部から長煙道に接続し、煙出しに至る。カマド燃焼部は東壁から奥を掘り込み、壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で煙道へ接続する。燃焼部から煙道にかけて列り抜かれた天井が残されており、長さは0.40mに及ぶ。また煙道と煙出しの接続部は0.10mである。燃焼部壁の左右

には長径0.23~0.28m、短径0.11~0.15m、厚さ0.12~0.15mの垂円礫3点が据えられ、深さ0.04~0.23mほど埋め込まれている。これらはカマド構築材と考えられる。また、燃焼部底中央付近の埋土中には長径0.23~0.30m、短径0.18~0.24m、厚さ0.13~0.18mの円礫2点が出土した。これはカマドの崩落により移動した天井高架材と

21号住居掘方



第294図 VII区21・22号住居(2)

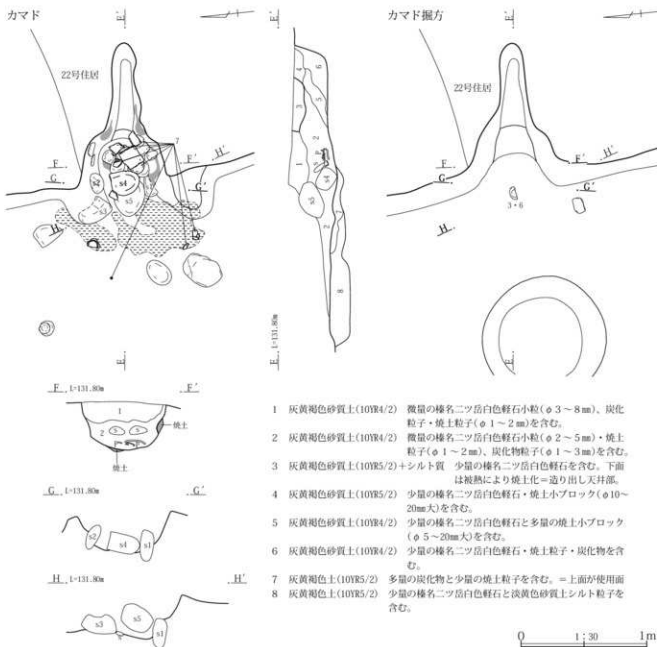
考えられる。燃焼部底や壁には焼土帯、底には土師器の裏の破片(7)や炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土が成層している。煙道を含むカマドの長さは1.61m、煙道長0.79m、煙道幅0.25m、煙出しの直径0.25m、カマドの幅0.77m、深さ0.33mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面や掘方から検出されたP1～3は位置から考えて主柱穴とは思えない。しかし長辺が5m弱におよぶ竪穴の規模から考えて、主柱穴を有しない構造の建物とは考えにくい。これは主柱穴底

がⅫ・ⅩⅢ層の黄褐色砂礫層で止められたため、柱穴の輪郭が不明瞭である可能性が想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(4)、床面付近から須恵器の杯(2)、カマド掘方から須恵器の杯(3)、灰釉陶器の椀(6)、埋土から須恵器の杯(1)、灰釉陶器の椀(5)が出土した。また、床面の0.10m上の埋土から石製の丸軋(11)が出土したことが特筆される。出土遺物は10世紀内に年代の幅を有する。

時代 平安時代10世紀第4四半期。



第295図 VII区21号住居

22号住居(第293・294・296・297図、PL.149・150・411)

グリッド 3C8

主軸方位 N80°E

重複 21号住居に切られる。92号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.82m、短辺は3.50m、深さは0.52m、面積は13.89㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 焼土粒と炭化物を多く含む灰黄褐色土を0.06mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。北東隅や南壁際から溝状の浅い窪みを検出した。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドは燃焼部と煙道及び煙出しの接続部が残存し、燃焼部底から緩やかな勾配で立ち上がり、長煙道で垂直の煙出しに接続する。カマド燃焼部は東壁から奥を掘り込み、壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、緩やかな勾配で立ち上がりながら煙道へ接続する。燃焼部から煙道にかけて黄褐色火山灰質砂・シルトを貼った天井が残されており、長さは0.35mに及ぶ。また煙道と煙出しの接続部は0.10mである。燃焼部の左壁付近の埋土からは長径0.17～0.24mの角礫2点が出土した。これらはカマドの崩落により移動したカマド構築材と考えられる。燃焼部底や焚口付近からは炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土が成層している。燃焼部下位は長方形の掘方を構築している。また煙道と煙出しの接続部は深さ0.08mほどの掘方を構築し、煙出しの垂直方向からの掘削の痕跡と想定され、特筆される。煙道を含むカマドの長さは1.91m、煙道長1.00m、煙道幅0.23m、煙出しの直径0.10m、カマドの幅1.06m、深さ0.44mである。

貯蔵穴 南東隅の壁際から長径0.92m、短径0.59m、深さ0.16mの歪んだ楕円形の土坑を検出した。底直上から須恵器の椀(12)、底から0.15～0.19mから灰軸陶器の皿(14)や須恵器の羽釜(17)が出土した。土坑は位置と形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。しかし長辺が5m弱におよぶ竪穴の規模から考えて、主柱穴を有しない構造の建物とは考えにくい。これは主柱穴底がXII・XIII層の黄褐色砂礫層で止められたため、柱穴の輪郭が不明瞭である可能性が想定される。

遺物 床面から土師器の甕(16)や刀子(20)、床面付近から灰軸陶器の皿(13)、カマド使用面から須恵器の壺(15)、埋土から鉄鍬(18)、鉄釘(19)が出土した。出土遺物は9世紀後半から10世紀前半に年代の幅を有する。

時代 平安時代9世紀第4～10世紀第1四半期。

92号住居(第293・298図、PL.150・151・411)

グリッド 3C8

主軸方位 N85°E

重複 21・22・23号住居に切られる。

形状と規模 南壁の一部を除き21～23号住居により大部分が失われた竪穴住居である。長辺は1.85m+、短辺は1.55m+、深さは0.30m、検出された最大の面積は2.80㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 褐色砂質土のブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。後述のカマド周辺から炭化物や灰、焼土ブロックを含む薄層を検出した。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで溝状の掘方を構築している。

カマド 掘方の調査で21・22住居の境界付近からカマド掘方を検出した。カマド掘方埋土はニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色にぶい黄褐色砂質土である。カマドは長さ1.15m、幅1.06m、深さ0.26mである。

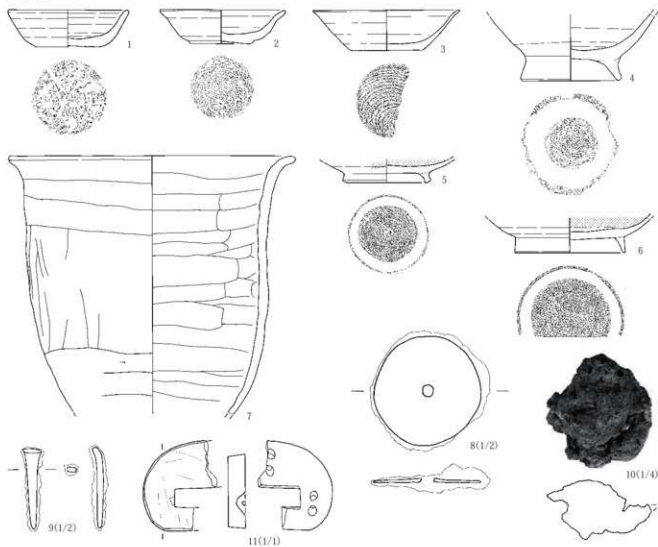
貯蔵穴 カマドの南側から長径0.73m、短径0.59m、深さ0.26mの歪んだ円形の土坑を検出した。土坑埋土からは、須恵器の椀(2)が出土した。土坑は位置と形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

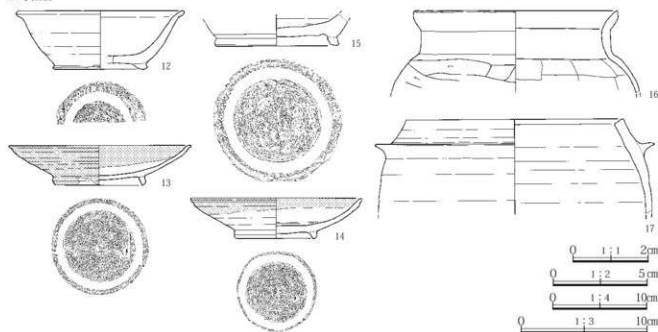
遺物 埋土から須恵器の皿(1)、椀(3・4)が出土した。

時代 平安時代9世紀第3四半期。

21号住居



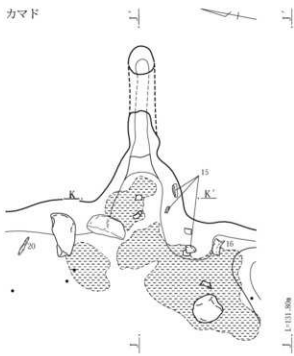
22号住居



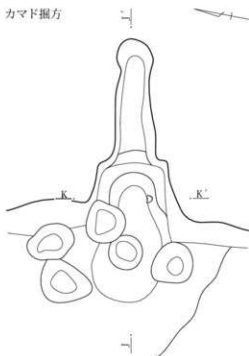
第296図 VII区21・22号住居の出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物

カマド



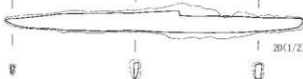
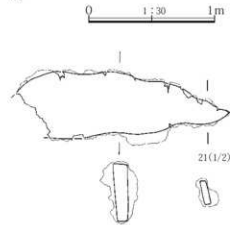
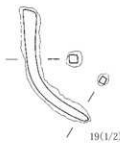
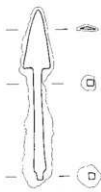
カマド掘方



K, 1:131.80m

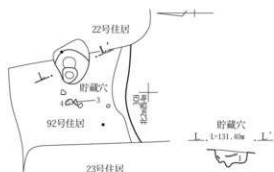


- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石大粒(φ3~50mm)・炭化粒子(φ2~3mm)・焼土粒子(φ1~2mm)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石(φ2~30mm)・炭化粒子(φ1~3mm)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石と少量のにぶい黄褐色砂質シルトブロック(φ5~30mm大)を含む。
- 3* 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石と少量のにぶい黄褐色砂質シルトブロック(φ5~30mm大)と多量の焼土粒子を含む。
- 4 黒褐色砂質土(10YR3/2) 多量のにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量のにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。=天井部等崩落上
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の炭化物・灰と少量の焼土粒子を含む。=上面は使用面
- 7 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石を含む。
- 8 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量の褐灰色砂質小ブロック(φ10~20mm大)・にぶい黄褐色~淡黄色砂質シルト及びFFP泥流ブロック(φ10~30mm大)と少量の棒名ニツ岳白色軽石を含む。=住居掘方埋土
- 9 淡黄~浅黄色シルト質土(FF泥流)(2.5YR/4~7/4) 地山掘り残し。カマド天井部下面煙道部は焼土化。



0 1:2 5cm

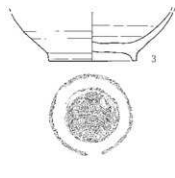
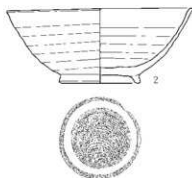
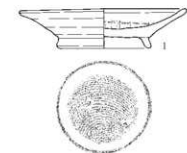
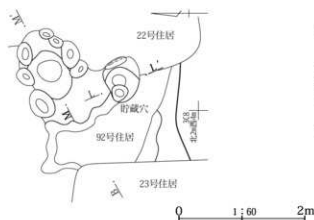
第297図 VII区22号住居と出土遺物



貯蔵穴 L-L'

1 暗褐色土(10YR3/3) 少量の棒名ニッ岳白色軽石と多量の焼土粒子、炭化物粒子を含む。

掘方



0 1:3 10cm

第298図 VII区92号住居と出土遺物

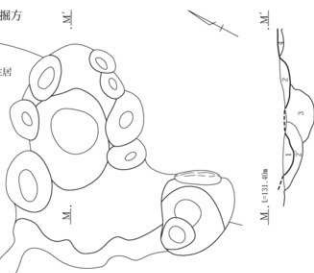
23号住居(第299~301図, PL.151・152・411)

グリッド 3D8

主軸方位 N87°W

重複 21・24・92号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.97m、短辺は3.23m、深さ



1 にふい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量の棒名ニッ岳白色軽石・焼土粒子、炭化物粒子を含む。=92号住居または22号住居掘方埋土。

2 灰・炭化物・焼土のラミナ状堆積、各層厚さ3~5mm程。=上下面使用面

2' 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の炭化物と少量の焼土粒子・灰を含む。

3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名ニッ岳白色軽石・炭化物・焼土粒子を含む。

4 にふい黄褐色砂質土(10YR6/3) 上端に5mm程炭化物+灰が堆積し、下端は少量の棒名ニッ岳白色軽石と多量の淡黄色砂質土シルト+FA泥流小ブロック(φ5mm大)を含む。=住居掘方埋土。

0 1:30 1m

は0.44m、面積は13.52㎡である。

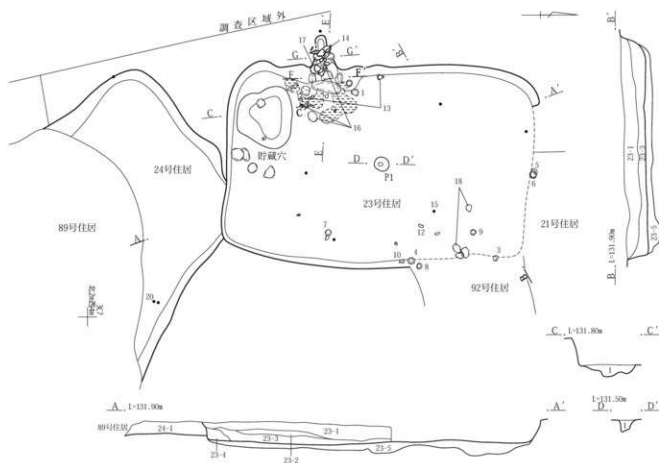
埋土 ニッ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 にふい黄褐色砂質土のブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.12mほど貼って、平坦な床面を構築している。中央から小ピットのP1を検出した。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。北西隅の西～北壁と東壁際に溝状の浅い窪みが周回する。またカマド前周辺も不定形の浅い窪みを呈する。東壁際の北東隅と中央、南東隅から長径0.65～0.90m、深さ0.10～0.12mの浅い楕円形の窪みを検出した。

カマド 西壁の南西隅寄りに位置する。カマド燃焼部は西壁から奥を掘り込み、壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、垂直に近い勾配で立ち上がり煙道へ接続する。燃焼部と煙道の接続部は底が緩やかである。

焚口付近の燃焼部左右壁には長径0.19～0.22m、短径0.14～0.18m、厚さ0.07～0.11mの垂円礫2点が据えられている。これらはカマド構築材と考えられる。燃焼部奥壁には長径0.20～0.24m、短径0.06～0.15mの垂円礫2点が据えられており、上位には長径0.36m、短径0.15m、厚さ0.11mの棒状垂円礫が置かれている。これらは燃焼部と煙道の接続部を構成するカマド構築材と天井高架材と考えられる。また、焚口の燃焼部底中央の埋土には長径0.47m、短径0.17m、厚さ0.13mの棒状円礫が出土した。これはカマドの崩落により移動した天井高架材と考



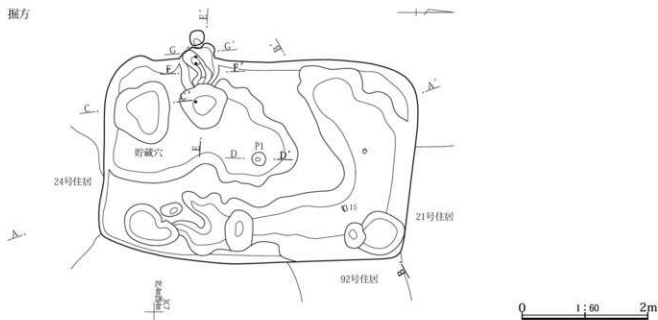
- 23-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の極名二ツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)と少量の炭化粒子を含む。
- 23-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の極名二ツ岳白色軽石とにぶい黄褐色砂質土シルト土を5～10mm幅のラミナ状に含む。
- 23-3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名二ツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)と微量の炭化粒子・炭化粒子を含む。
- 23-4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名二ツ岳白色軽石・にぶい黄褐色～浅黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)を含む。
- 23-5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量のにぶい黄褐色～浅黄色砂質土シルトブロック(φ5～30mm大)を含む。
- 24-1 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒(φ2～20mm)と少量のにぶい黄褐色シルト質土を含む。

- 23号住居貯蔵穴 C-C'
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm)、炭化物粒子を含む。
- 23号住居P I D-D'
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量のにぶい黄褐色砂質土シルト粒を含む。

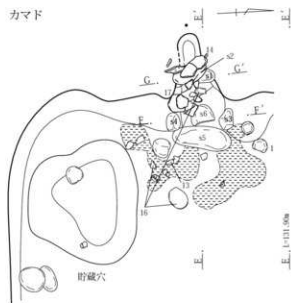
0 1:60 2m

第299図 VII区23・24号住居

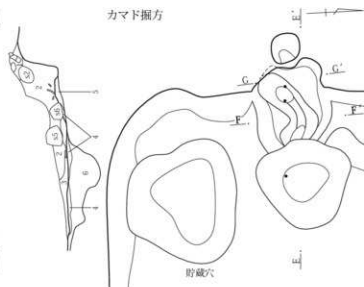
掘方



カマド



カマド掘方



G, 1:131.90m G'



F, 1:131.90m F'



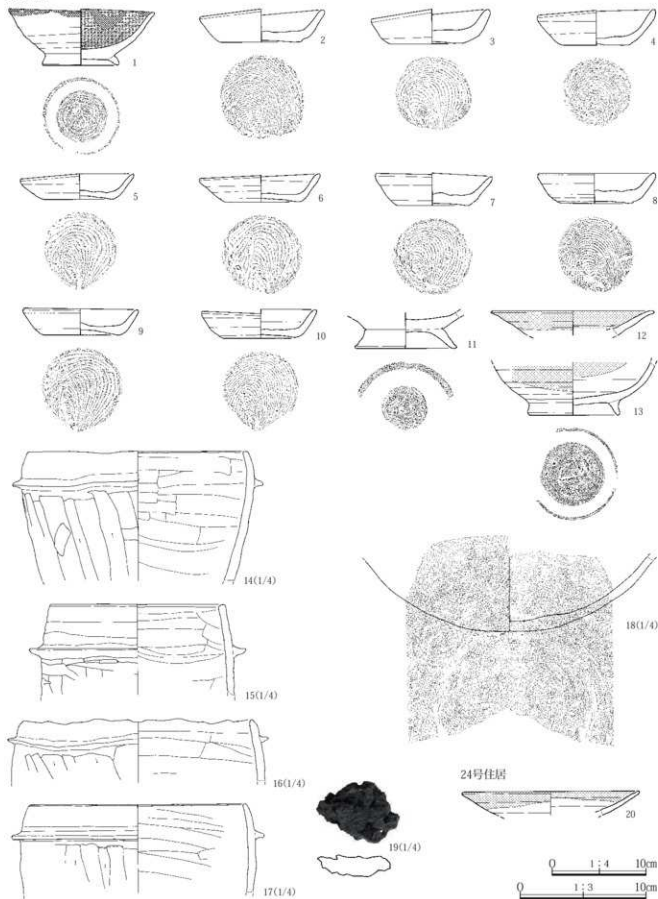
- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の小礫(φ50mm)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ2~5mm)・焼土粒子(φ2~3mm)を含む。天井からの崩落石等・凹縁を含む。締りやや弱。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 一部灰層を含む。少量の焼土粒子(φ1~2mm)を含む。締りやや弱。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の炭化物を含む。=使用面
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の焼土粒子を含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の濃い黄褐色砂質土シルトブロック(φ5~30mm大)と微量の大粒炭化物・炭化物粒子を含む。

0 1:30 1m

第300図 VII区23号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物

23号住居



第301図 VII区23・24号住居の出土遺物

えられる。燃焼部底や壁には焼土ブロック、底から焚口周辺で炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰や焼土粒を含む灰黄褐色砂質土が成層している。煙道を含むカマドの長さは1.36m、煙道長0.18m、煙道幅0.18m、カマドの幅0.52m、深さ0.33mである。

貯蔵穴 南西隅の壁際から長辺0.98m、深さ0.22mの歪んだ方形の土坑を検出した。土坑は位置と形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。しかし長辺が5m弱におよぶ竪穴の規模から考えて、主柱穴を有しない構造の建物とは考えにくい。東壁際で検出された3基の浅い窪みは壁際に残された主柱穴もしくは補助的な柱穴の可能性がある。

遺物 床面から多くの遺物が出土した。床面から須恵器の杯(4~7)、甕(18)、床面付近から須恵器の杯(9・10)、カマド使用面から黒色土器の椀(1)、土師器の羽釜(16・17)、灰釉陶器の椀(13)、カマド使用面付近から須恵器の杯(2)が出土した。

時代 平安時代11世紀前半。

24号住居(第299・301図、PL.152)

グリッド 3 D 7

主軸方位 N52° E

重複 23・89号住居に切られる。

形状と規模 北西~南東方向に長軸を有し、歪んだ長方形を呈する竪穴である。南部は大部分が89号住居により失われている。長辺は3.50m+、短辺は3.20m、深さは0.32m、検出された最大の面積は4.45㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色土からなる。

床面 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を削り出して、平坦な床面を構築している。

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。

遺物 埋土から灰釉陶器の皿(20)が出土した。

時代 9世紀後半に帰属する89号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀後半と想定される。

25号住居(第302・303図、PL.153・411)

グリッド 3 B 7

主軸方位 N78° E

重複 90号住居を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴である。南部は調査区外に存在する。長辺は3.13m、短辺は2.90m+、深さは0.41m、検出された最大の面積は8.05㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が縁から中央に向かって傾きながら成層し、竪穴を埋めている。

床面 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土を0.14mほど厚く貼って、90号住居と同じ高さの平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。西壁と北東隅の北~東壁際には浅い溝状の窪みが周回する。

カマド カマドは検出されなかった。調査区外に存在する可能性がある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から灰釉陶器の皿(3)、壺(4)、須恵器の羽釜(5)、埋土から刀子(6)や砥石(7)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

90号住居(第302図、PL.153)

グリッド 3 B 7

主軸方位 N82° E

重複 25号住居に切られる。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴である。西部は25号住居により失われ、南部は大部分が調査区外に存在する。長辺は4.00m+、短辺は1.71m+、深さは0.41m、検出された最大の面積は5.41㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が東から西に向かって傾きながら成層し、竪穴を埋めている。

床面 灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、25号住居と同じ高さの平坦な床面を構築している。

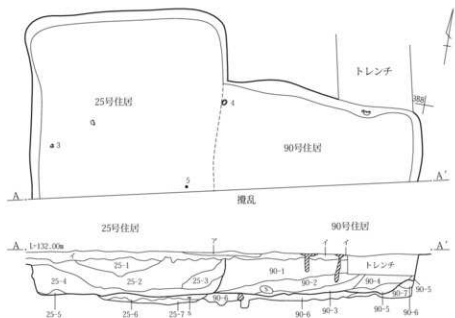
掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

カマド カマドは検出されなかった。調査区外に存在する可能性がある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 なし。

第4章 第2面の遺構と出土遺物

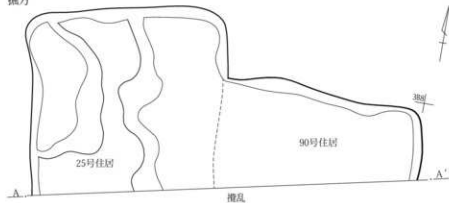


ア 現代客土

イ 黒褐色砂質土 多量の浅間山B軽石を含む。

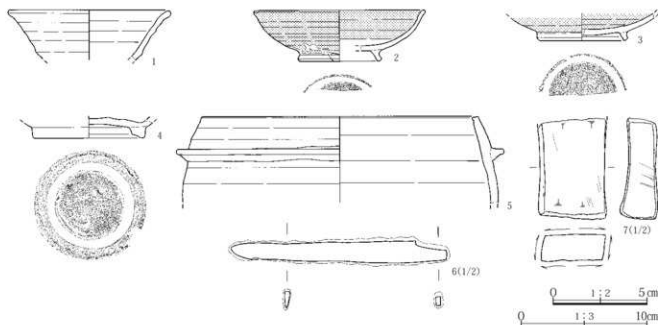
- 25-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の大粒様名二ツ岳白色軽石とふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
 25-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の大粒様名二ツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
 25-3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の大粒様名二ツ岳白色軽石とふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
 25-4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の大粒様名二ツ岳白色軽石とふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
 25-5 へい黄褐色砂質土(10YR5/3) 多量の様名二ツ岳白色軽石・火山灰小ブロック(φ5~15mm大)を含む。=埋堆積地山上の崩落
 25-6 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含み、一部様名二ツ岳白色軽石・炭化物がラミナ状を呈す。
 25-7 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
 90-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の様名二ツ岳白色軽石とふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
 90-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の様名二ツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~30mm大)を含む。
 90-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の様名二ツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~30mm大)を含む。
 90-4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の様名二ツ岳白色軽石小粒・ふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
 90-5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~20mm大)・粗粒砂を含む。
 90-6 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のふい黄褐色砂質土シルト粒子・小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
 90-7 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の粗粒砂を含む。

掘方



第302図 VII区25・90号住居

時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と想定され、10世紀前半に帰属する25号住居よりも旧いので、10世紀以前である。



第303図 VII区25号住居の出土遺物

27号住居(第304図, PL.154)

グリッド 3 D 5

主軸方位 N75°W

重複 なし。

形状と規模 東西方向に長軸を有する堅穴の北東隅のみを検出した。南西部の大部分は調査区外に存在する。長辺は1.50m+、短辺は0.70m+、深さは0.16m、検出された最大の面積は0.72㎡である。

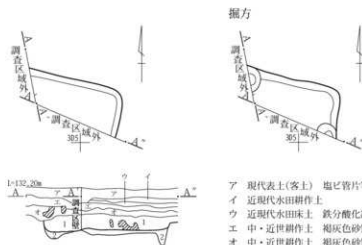
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む褐灰色砂質土からなる。

床面 黄褐色砂質土のブロックを多く含む褐灰色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

遺物 なし。

時代 埋土から古墳時代後期～平安時代と推定される。



掘方

ア 現代表土(客土) 塩ビ管片等を含む。

イ 近現代水田耕作土

ウ 近現代水田床土 鉄分酸化腐蝕。

エ 中・近世耕作土 褐灰色砂質土(10YR6/1)

オ 中・近世耕作土 褐灰色砂質土(10YR4/1)

1 褐灰色砂質土(10YR5/1) 少量の稀名ニツ岳白色軽石とにふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

2 褐灰色砂質土(10YR4/1) 多量のにふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。

第304図 VII区27号住居

29号住居(第305～307図、PL.156・412)

グリッド 3 C 17

主軸方位 N66° E

重複 48号土坑に切られる。94・100・101号住居を切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。床面から推定した長辺は3.39m、短辺は2.37m、深さは0.20m、面積は6.65㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が成層している。

床面 灰黄褐色砂質土を0.07mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。東壁際から長径0.25～0.33m、深さ0.08mの浅い円形の窪み3基を検出した。

カマドと貯蔵穴 南壁の南西隅に位置する。カマドの燃焼部は南西隅の壁から手前に灰黄褐色砂質シルトを貼って袖を構築し、壁の内側に構築している。燃焼部底は水平で緩やかな勾配で立ち上がる。焚口に近い燃焼部左右の壁には長径0.24～0.27m、短径0.19～0.22m、厚さ0.09～0.13mの垂円礫2点が据えられており、カマド構築材と考えられる。燃焼部の中央には長径0.15m、短径0.13mの垂円礫が0.06m埋め込まれており、支脚と考えられる。焚口の床面や燃焼部と煙道の接続部の埋土から長径0.38～0.44mの棒状垂円礫が2点出土した。これはカマドの崩落により移動したカマドの天井高架材と考えられる。燃焼部底から焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドの長さは0.92m、幅0.63m、深さ0.12mである。カマドの右側から長径0.28m、深さ0.23mの歪んだ楕円形の小ピットが検出されたが、貯蔵穴は検出されなかった。

遺物 床面から刀子(5)や鉄鏝(7)、カマド使用面から須恵器の杯(2・3)、使用面付近から須恵器の杯(1)、埋土から須恵器の椀(4)が出土した。

時代 平安時代11世紀前半。

94号住居(第305～308図、PL.210・412)

グリッド 3 C 17

主軸方位 N71° E

重複 29号住居、48号土坑に切られる。86号土坑を切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形

を呈する竪穴住居である。北東部は29号住居により失われている。長辺は3.56m、短辺は2.65m、深さは0.18m、検出された最大の面積は8.12㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が成層している。

床面 灰黄褐色砂質土を0.10mほど部分的に厚く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。カマド周辺は床面から0.21mほど掘り込まれ、西壁際から長辺0.80mの隅丸方形の窪みや直径0.28m前後の小ピットを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。燃焼部は東壁から奥を掘り込み、壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに傾き、そのままの勾配で立ち上がる。燃焼部の右壁の埋土からは長径0.28mの円礫が出土し、礫はカマドの崩落により移動したカマド構築材と考えられる。燃焼部底からは炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は炭化物を含む灰黄褐色砂質土が成層している。カマドの長さは0.81m、幅0.36m、深さ0.21mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 掘方から須恵器の椀(16・17)が出土した。

時代 平安時代10世紀。

100号住居(第305・306・308図、PL.216・412)

グリッド 3 C 17

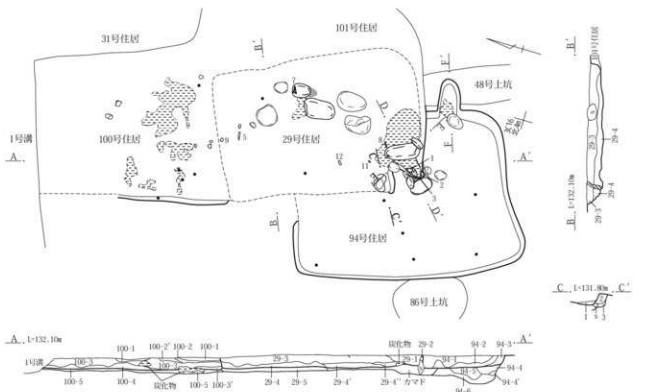
主軸方位 N74° E

重複 29・31号住居、1号溝に切られる。101号住居を切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、長方形を呈すると想定される竪穴である。北部は1号溝、東部は31号住居、南部は29号住居により失われている。長辺は2.85m+、短辺は2.15m+、深さは0.12m、検出された最大の面積は5.40㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石や炭化物を含む灰黄褐色砂質土が成層している。

床面 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を削り出して、平坦な床面を構築している。床面には長径1.75m、短径0.88mの範囲に炭化物の広がりを検出した。



- 29-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の礫名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)、炭化物・焼土粒子を含む。
- 29-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の礫名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)、炭化物と多量の焼土小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 29-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の礫名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)、炭化物を含む。
- 29-4 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量のにぶい黄褐~浅黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)と少量の炭化物と微量の礫名ニツ岳白色軽石を含む。
- 29-4' 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量のにぶい黄褐~浅黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)と微量の礫名ニツ岳白色軽石を含む。
- 29-4'' 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量のにぶい黄褐~浅黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)と多量の炭化物を含む。
- 29-5 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量のにぶい黄褐~浅黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)と少量の炭化物と微量の礫名ニツ岳白色軽石を含む。
- 94-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の礫名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と微量の炭化物を含む。
- 94-2 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の礫名ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ5~30mm大)を含む。
- 94-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量のにぶい黄褐色砂質土シルト粒子を含む。
- 94-4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック・礫名ニツ岳白色軽石を含む。
- 94-4' 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量のにぶい黄褐色砂質土シルト粒子・礫名ニツ岳白色軽石を含む。
- 94-5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~20mm大)・炭化物を含む。
- 94-6 掘方埋土
- 100-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の礫名ニツ岳白色軽石と微量の炭化物粒子を含む。
- 100-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の礫名ニツ岳白色軽石と多量の大型炭化物片を含む。
- 100-2' 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の礫名ニツ岳白色軽石と少量の炭化物粒子を含む。
- 100-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の礫名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐~浅黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)、炭化物粒子を含む。
- 100-3' 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の礫名ニツ岳白色軽石と少量のにぶい黄褐~浅黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)と多量の炭化物粒子を含む。
- 100-4 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量のにぶい黄褐~浅黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)と微量の炭化物粒子を含む。
- 100-5 掘方埋土
- 29号住居土坑1 C-C'
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の炭化物粒子を含む。=29号住居埋土
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量のにぶい黄褐色土小ブロック(φ5~20mm大)を含む。=29号住居埋土

第305図 VII区29・94・100号住居(1)

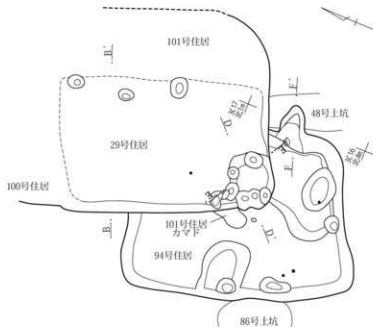
掘方 カマド部分のみ掘方を検出した。

カマド 壁穴の南壁に位置すると想定される。長径0.83m、幅0.95mの範囲がやや窪み、掘方埋土から焼土ブロックや炭化物の広がりを検出した。カマド掘方埋土は炭化物を含む灰黄褐色砂質土である。

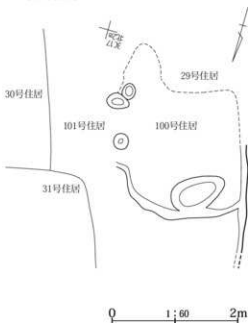
遺物 床面から須恵器の椀(18)、土師器の甕(20)、鉄製品(22)と銅鏡(21)が破片で出土したことが特筆される。掘方から灰釉陶器の小瓶(19)が出土した。

時代 平安時代9世紀第4四半期。

29・94号住居掘方



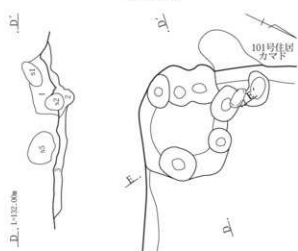
100号住居掘方



29号住居カマド



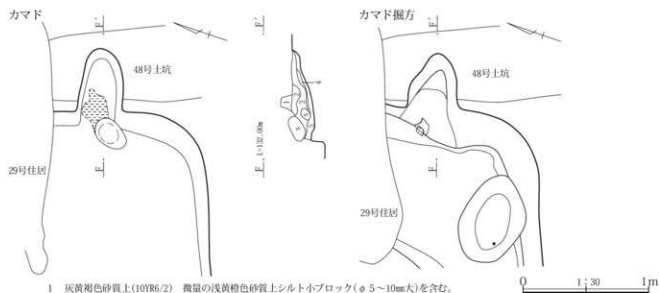
カマド掘方



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名二ツ岳白色群石と少量の焼土粒子、炭化物粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の濃い黄褐色砂質土シルトブロック(φ5~10mm大)、炭化物粒子を含む。
= 上面使用面
- 3 濃い黄褐色砂質土(10YR7/4) 厚さ10~20mm程の炭化物層と互層堆積。
= 上面使用面

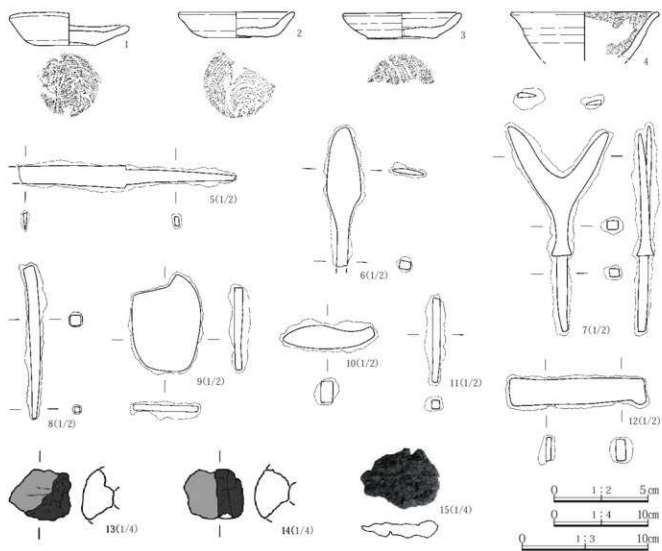


第306図 VII区29・94・100号住居(2)



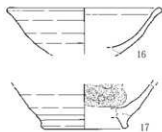
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の浅黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量の炭化物と少量の焼上粒子を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の炭化物を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量の炭化物と少量の焼上粒子・灰を含む。

0 1:30 1m

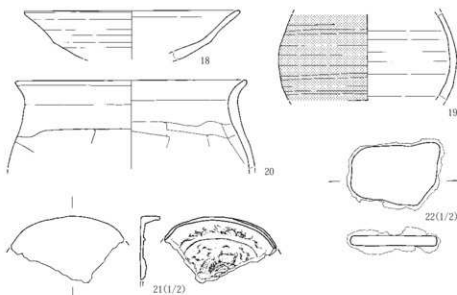


第307図 VII区94号住居と29号住居の出土遺物

94号住居



100号住居



第308図 VII区94・100号住居の出土遺物

30号住居(第309・310図、PL.157・411)

グリッド 3 B17

主軸方位 N72° E

重複 31号住居に切られる。101号住居を切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.62m、短辺は3.13m、深さは0.12m、面積は9.52㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が成層する。

床面 灰黄褐色砂質土を0.07mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。中央や西壁際から円形や不定形の浅い方形の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、緩やかな勾配で立ち上がる。焚口の床面には長径0.19～0.29mの垂円礫が出土した。これはカマドの崩落により移動したカマド構築材と考えられる。燃焼部底から焚口周辺では炭化物の広がりを見出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドの長さは1.08m、幅0.61m、深さ0.13mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たな

い構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から灰軸陶器の壺(3)、須恵器の椀(2)、床面付近から須恵器の椀(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

101号住居(第309・310図、PL.217・412)

グリッド 3 C17

主軸方位 N72° E

重複 29・30・31・100号住居、48号土坑に切られる。

形状と規模 南東隅が検出された方形を呈する竪穴で、長辺は4.21m、短辺は3.20m+、深さは0.18m、検出された最大の面積は12.23㎡である。

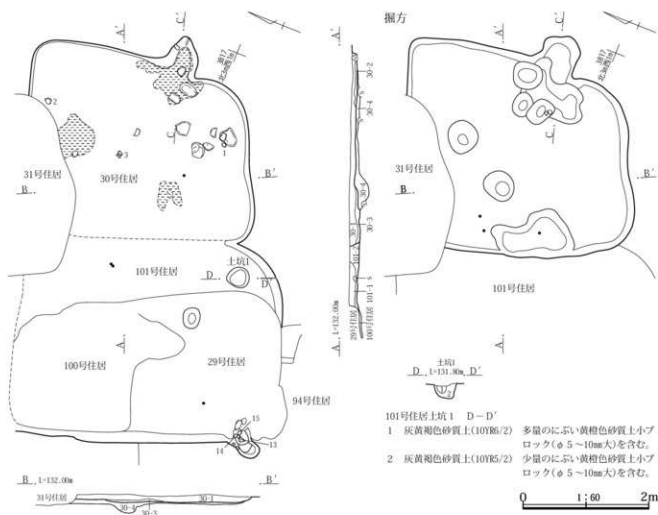
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 部分的に灰黄褐色砂質土を薄く貼って、平坦な床面を構築している。

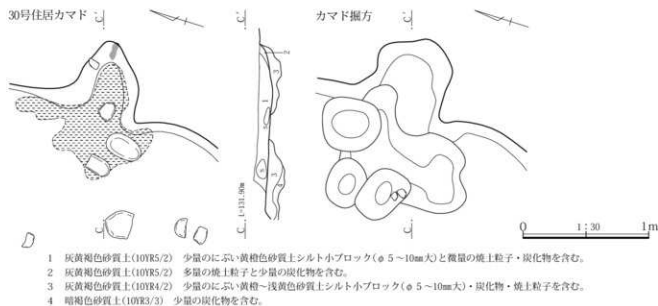
掘方 XII・XII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。

カマドと貯蔵穴 29号住居のカマドの西側からカマドの掘方を検出した。101号住居は南～西壁が29・100号住居に一致する。101号住居のカマドは西壁の南西隅寄りに位置すると想定される。カマドの長さは0.65m、幅0.40m、深さ0.17mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たな

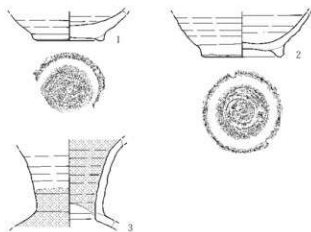


- 30-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石・ふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)、炭化物を含む。
- 30-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 30-3 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石と多量の炭化物を含む。
- 30-4 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色~浅黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 101-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石とふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
- 101-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石とふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。

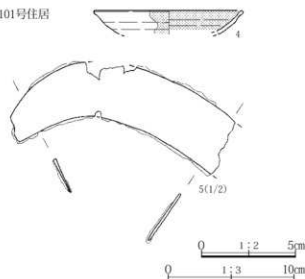


第300図 VII区30・101号住居

30号住居



101号住居



第310図 VII区30・101号住居の出土遺物

い構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から灰軸陶器の椀(4)、掘方から鉄鎌(5)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

31号住居(第311～313図、PL.158・412)

グリッド 3 C 18

主軸方位 N68° E

重複 1号溝に切られる。30・101号住居、182号土坑を切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。北壁は1号溝により失われている。長辺は3.68m+、短辺は2.98m、深さは0.25m、検出された最大の面積は9.51㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.07mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。北西隅の壁際が浅く窪み、南西隅の壁際から長辺0.59m、深さ0.28mの隅丸正方形の土坑1を検出した。**カマド** 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部左右の壁にはS2～S9の垂円・垂角礫8点が据えられており、S2～S7は礫の長軸が垂直に据えられ、焚口を

構成するS8とS9は「ハ」の字形に内側に傾いて据えられ、S8は18°、S9は36°内斜している。これらはカマド構築材である。右壁を構成する礫は奥からS2・S4・S6・S8である。

S2は長径0.26m、短径0.25m、厚さ0.13mの硬砂岩の垂円礫である。

S4は長径0.23m、短径0.18m、厚さ0.10mの閃緑岩の垂円礫である。

S6は長径0.27m、短径0.15m、厚さ0.12mの閃緑岩の垂円礫である。

S8は長径0.27m、短径0.17m、厚さ0.14mの安山岩の垂円礫で表面に被熱痕を呈する。

左壁を構成する礫は奥からS3・S5・S7・S9である。

S3は長径0.26m、短径0.20m、厚さ0.14mの安山岩の垂角礫である。

S5は長径0.22m、短径0.17m、厚さ0.15mの安山岩の垂角礫である。

S7は長径0.28m、短径0.21m、厚さ0.11mのヒン岩の垂円礫である。

S9は長径0.32m、短径0.18m、厚さ0.14mの安山岩の垂円礫である。これらの礫が埋め込まれた痕跡はカマド掘方で検出された小ピットにそれぞれが対応する。

燃焼部の中央には長径0.20m、短径0.12m、厚さ0.08mの安山岩の棒状円礫が0.16m埋め込まれており、使用面から露出した礫の表面には炭化物が付着している。礫はS4とS7及びS5とS6の対角線上に位置しており、こ

れは支脚である。燃焼部と煙道の接続部にあたるS2とS3の直上には長径0.31m、短径0.20m、厚さ0.09mの石英斑岩の円礫が置かれている。これはカマド燃焼部と煙道の接続部を構成する天井高架材と考えられる。これらのカマド構築材は、比較的火力の強い焚口などで多孔質の安山岩を選択的に利用し、その他は緻密で硬い深成岩の礫を利用している。これらの礫はいずれも遺跡周辺の利根川の河床に分布する河川礫と同様の礫種を構成し、遺跡の基盤をなす黄褐色砂礫層に含まれる礫を使用しているものと考えられる。

燃焼部底の支脚周囲は炭化物と焼土ブロック、焚口周囲では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は暗灰黄色砂質土が成層し、掘方埋土は炭化物を多く含む灰黄褐色砂質土を貼って構築している。カマドの長さは1.22m、煙道長0.12m、煙道幅0.30m、カマド幅0.65m、深さ0.19mである。

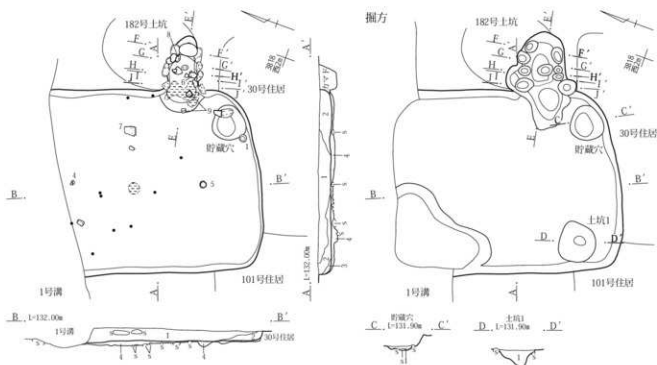
貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の南壁際から長径0.55m、

短径0.53m、深さ0.12mの垂んだ円形の土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の堅穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(1)、床面付近から灰陶器の壺(5)、カマド使用面から須恵器の羽釜(6・8・9)、埋土から鉄鏝(10)、掘方から須恵器の椀(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。



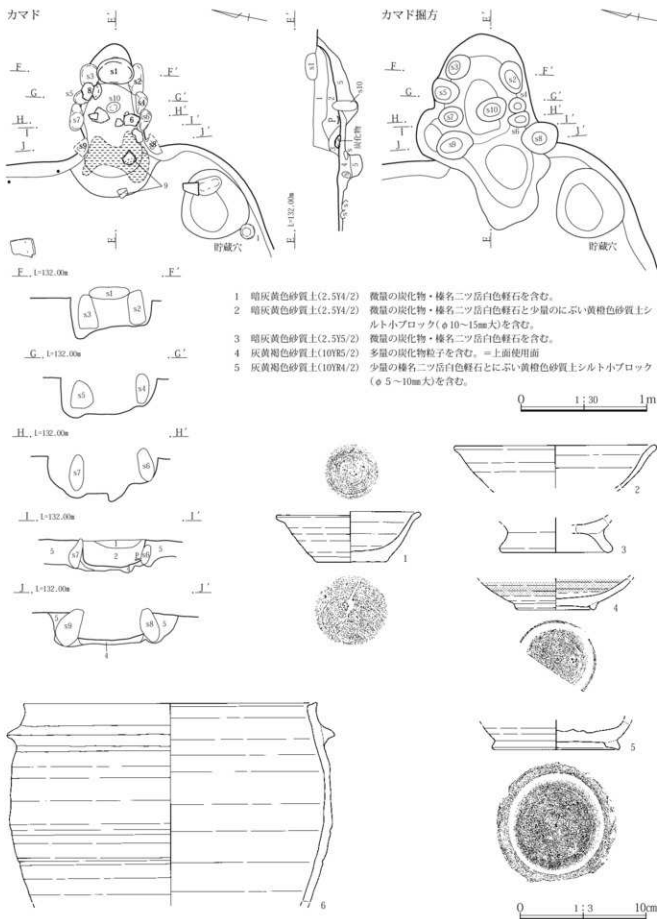
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の榛名二ツ居白色軽石・焼土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の榛名二ツ居白色軽石と少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と多量の炭化物を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の榛名二ツ居白色軽石小粒・ふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と微量の炭化物を含む。

- 貯蔵穴・土坑1 C-C'・D-D'
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の榛名二ツ居白色軽石とふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と微量の炭化物を含む。

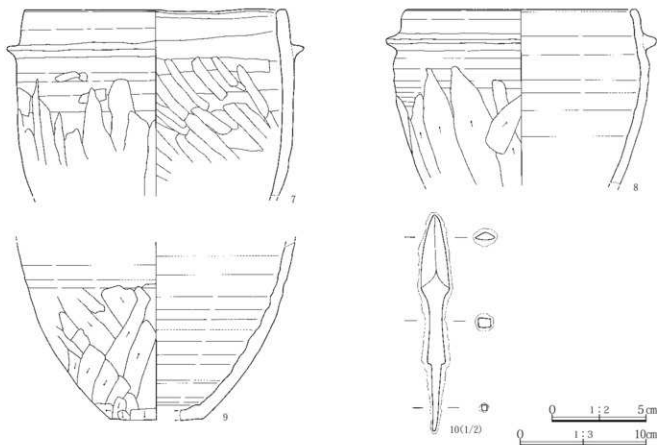
0 1:60 2m

第311図 VII区31号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第312図 VII区31号住居と出土遺物



第313図 VII区31号住居の出土遺物

32号住居(第314図, PL.159・411)

グリッド 3 A 18

主軸方位 N40° E

重複 1号溝に切られる。42号ピットを切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴で、北部は1号溝により失われ、調査区外に存在する。長辺は3.92m、短辺は3.56m、深さは0.23m、検出された最大の面積は10.36㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が縁から中央に向かって傾き、竪穴を埋めている。

床面 灰黄褐色砂質土を0.09mほど薄く貼って床面を構築している。南東隅の壁際から炭化物の広がりを検出した。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで掘方を構築している。南東隅の壁際と南西隅の壁際に不定形の浅い溝状の窪みを検出し、南西壁際や中央に直径0.26～0.32mの浅い円形の窪みを検出した。また南西隅の壁際から長径0.69m、短径0.50m、深さ0.12mの浅い円形の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(1)、掘方から灰軸陶器の皿(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

33号住居(第315～317図, PL.160)

グリッド 3 B 14

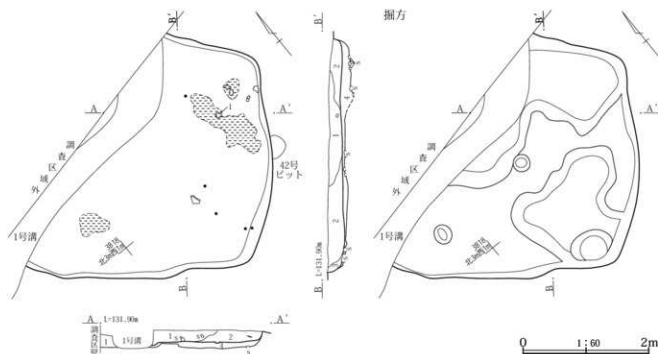
主軸方位 N68° E

重複 36号住居に切られる。35号住居を切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居で、中央部の大部分は36号住居により失われている。長辺は5.18m、短辺は3.04m、深さは0.23m、検出された最大の面積は12.41㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.08mほど薄く貼って床面を構築している。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名二岳白色軽石小粒・にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~20mm大)と多量の小円礫を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名二岳白色軽石小粒・にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)、炭化物と微量の焼土粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~20mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量のにふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~30mm大)・炭化物・焼土粒子を含む。



第314図 VII区32号住居と出土遺物

掘方 XII・XII層の黄褐色砂質土を掘り込んで掘方を構築している。

カマドと貯蔵穴 カマドの掘方のみが検出された。カマドは東壁の中央北東隅寄りに位置し、カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築しているものと想定される。カマド掘方埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドの長さは0.91m、幅0.59m、深さ0.42mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 36号住居の掘方から柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマド埋土から灰釉陶器の椀(1)、埋土から土師器の甕(2)、須恵器の羽釜(3)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

36号住居(第315~318図, PL.163・412)

グリッド 3 B14

主軸方位 N76°E

重複 カマド掘方が5号土坑に切られる。33・35・109号住居を切る。

形状と規模 北西~南東方向に長軸を有し、歪んだ隅丸

長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.26m、短辺は3.68m、深さは0.25m、面積は13.52㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

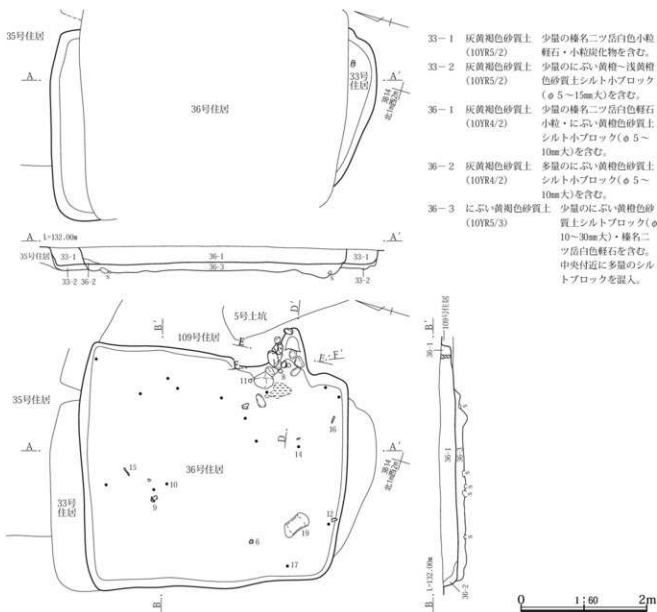
床面 にぶい黄褐色砂質土を0.14mほど厚く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅻ・Ⅺ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。竪穴の壁に沿って北壁と南壁際と中央が段状に平坦な窪みを呈する。南西隅の壁際から長辺0.69m、短辺0.64m、深さ0.27mの歪んだ隅丸正方形の土坑1を、カマドの南側にあたる南壁際から長辺1.50m、短辺0.54m、深さ0.11mの歪んだ隅丸長方形の土坑2を検出した。こ

れらの土坑は、埋土から土器片が出土し、位置や形状から貯蔵穴の可能性がある。土坑2の底から須恵器の椀(8)、羽釜(13)が出土した。

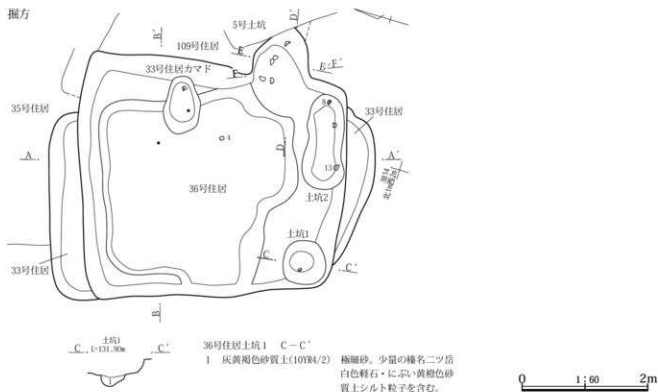
カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部の左右壁には長径0.17～0.32m、短径0.10～0.13mの垂円礫が6点据えられており、これらはカマド構築材と考えられる。燃焼部底から焚口には炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色土からなる。カマドは長さ1.28m、幅0.90m、深さ0.22mである。

貯蔵穴 掘方の調査で検出された壁際の土坑が貯蔵穴に



第315図 Ⅷ区33・36号住居(1)

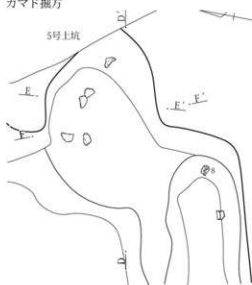
第4章 第2面の遺構と出土遺物



36号住居カマド



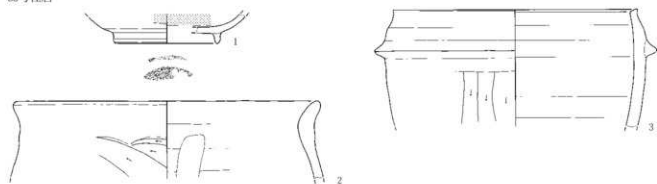
カマド掘方



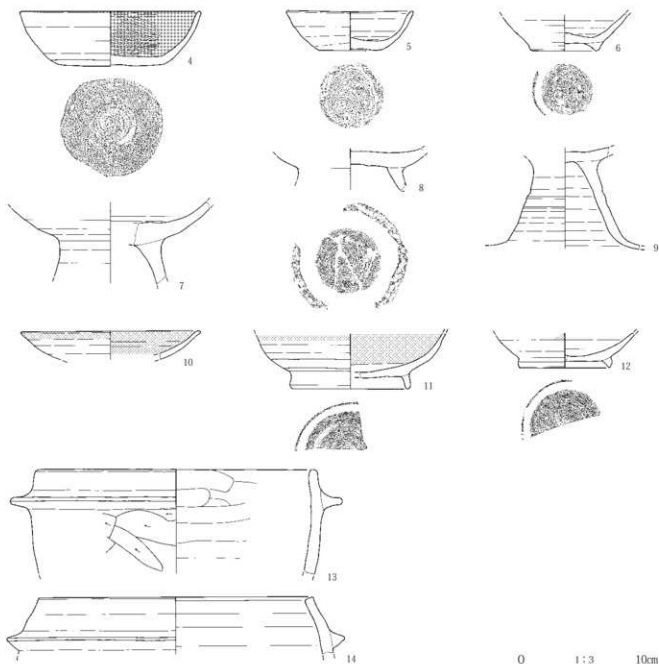
- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量の椶名ニツ岳白色軽石と微量の炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2) 多量の炭化物を含む。=使用面
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含み硬化する。=住居掘方埋土
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と椶名ニツ岳白色軽石を含む。

第316図 Ⅷ区33・36号住居(2)

33号住居

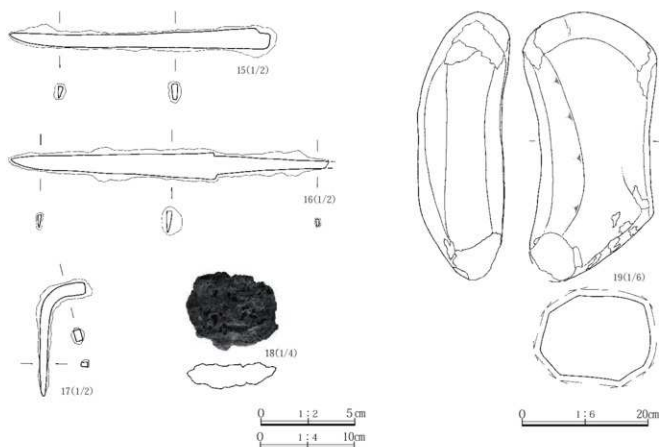


36号住居



第317図 VII区33・36号住居の出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第318図 VII区36号住居の出土遺物

なる可能性が高い。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から灰軸陶器の椀(11)、須恵器の羽釜(14)、砥石(19)、床面付近から須恵器の椀(6)、高杯(9)、灰軸陶器の椀(12)、埋土から刀子(15・16)、鉄釘(17)、鉄滓(18)が出土した。出土遺物は9世紀後半から10世紀代に年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀。

34号住居(第319・320図、PL.161・413)

グリッド 3 B 15

主軸方位 N77° E

重複 48号土坑に切られる。35・39号住居を切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.46m、短辺は3.28m、深さは0.26m、面積は11.90㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

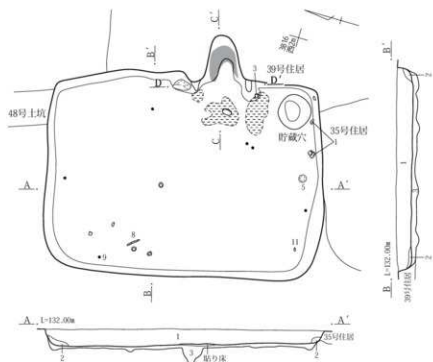
床面 ぶい黄褐色砂質土のブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。中央から長径0.46m、短径0.37m、深さ0.30mのピットを検出した。

カマド 東壁の中央南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、緩やかな勾配で立ち上がる。カマドの袖は灰黄褐色砂質土を貼って構築し、左袖の外側からは長径0.30m、短径0.16mの垂角礫が埋め込まれている。これはカマド構築材と考えられる。燃焼部奥壁から焼土帯を燃焼部底から焚口には炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は褐灰～ぶい黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.13m、幅0.98m、深さ0.19mである。

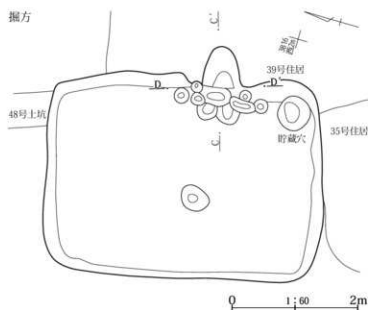
貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の南壁際から直径0.52m、深さ0.32mの円形の土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかつ



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の極名ニツ岳白色軽石小粒・にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)、炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量のにふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにふい黄褐色砂質土シルトブロック・黒褐色土ブロック(φ 5~30mm大)を含む。

掘方



第319図 Ⅷ区34号住居

た。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から刀子(8)、床面付近から灰軸陶器の皿(5)、須恵器の椀(3)、杯(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

35号住居(第321図、PL.162)

グリッド 3 B 15

主軸方位 N74° E

重複 33・34・36・39号住居に切られる。

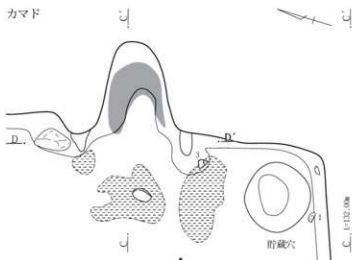
形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。北部を34・39号住居に、南部は33・36号住居により失われている。長辺は3.29m+、短辺は3.09m、深さは0.16m、検出された最大の面積は9.44㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

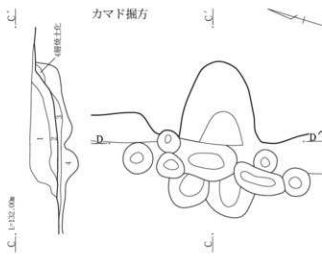
床面 にふい黄褐色砂質土のブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.05mほど薄く貼って、平坦な床面を構築し

第4章 第2面の遺構と出土遺物

カマド

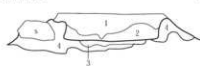


カマド掘方



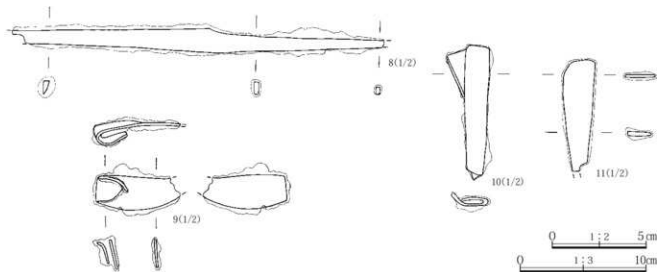
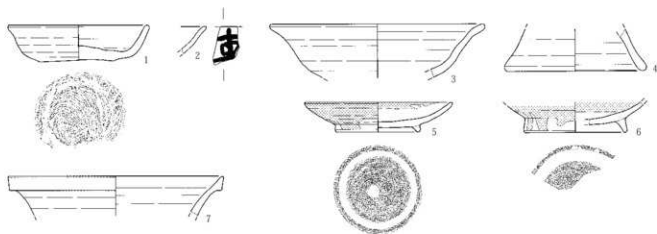
D., 1-132.00m

D'



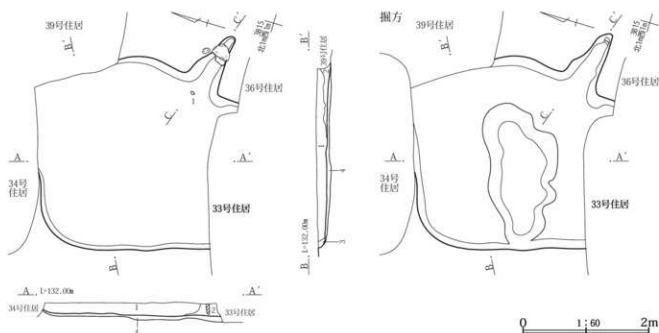
- 1 褐灰色砂質土(10YR5/1) 少量の極名二ツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質小ブロック(φ10~20mm大)と微量の炭化物を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 多量のにぶい黄褐色砂質シルトブロック(φ10~40mm大)と少量の炭土粒子・炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の炭化物と少量の炭土粒子を含む。=使用面
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~15mm大)と微量の炭化物粒子を含む。=袖部構築土

0 1:30 1m

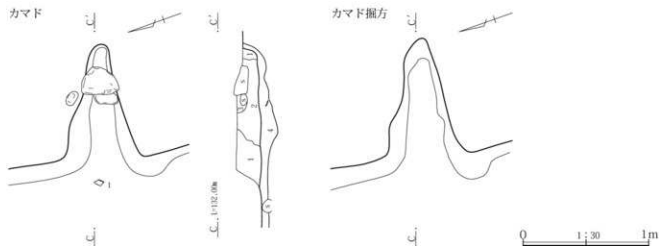


0 1:2 5cm
0 1:3 10cm

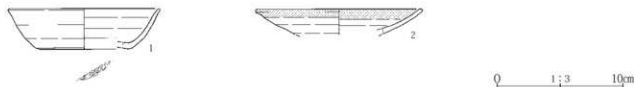
第320図 VII区34号住居と出土遺物



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニッ岳白色軽石・にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)と微量の炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名ニッ岳白色軽石・にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)と微量の炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石と多量のにふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ5~30mm大)を含む。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名ニッ岳白色軽石小粒と多量のにふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量のにふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニッ岳白色軽石小粒を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名ニッ岳白色軽石小粒・にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。



第321図 VII区35号住居と出土遺物

ている。

掘方 XII・XIII層の灰黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。中央から長径2.20m、短径1.05m、深さ0.05mの浅い不定形の溝状の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部の主軸は東壁からの直交方向に対して、南側に傾いている。燃焼部底は水平で、奥壁で急な勾配で立ち上がるが煙道と燃焼部の接続部は不明瞭である。奥壁に近い天井からは長径0.30m、短径0.21m、厚さ0.09mの角礫が出土し、これは天井高架材と考えられる。燃焼部底や焚口には炭化物が認められない。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.28m、幅0.65m、深さ0.21mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマド使用面から須恵器の杯(1)、埋土から灰軸

陶器の皿(2)が出土した。

時代 平安時代9世紀前半。

37号住居(第322図、PL.164・413)

グリッド 3 A 17

主軸方位 N76°E

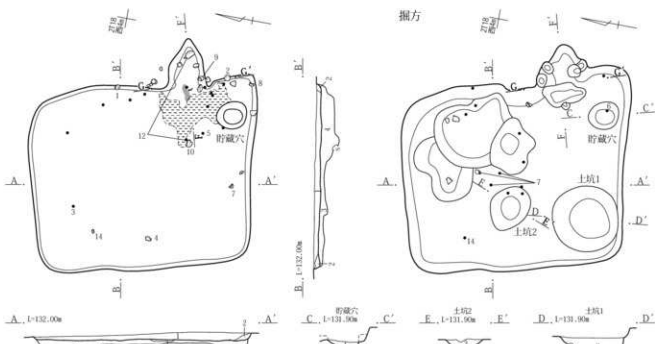
重複 なし。38号住居に近接し、同時存在はない。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.61m、短辺は2.96m、深さは0.15m、面積は9.41㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の灰褐色砂～砂礫層を掘り込んで構築している。北東隅の壁際から不定形の窪みを検出した。また、南西隅の壁際から直径1.08m、深さ0.22mの円形の



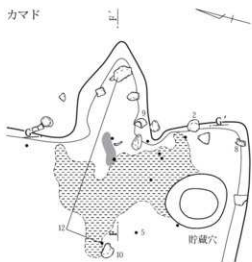
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト粒・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の炭化物と少量のにぶい黄褐色～浅黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色～浅黄褐色砂質土シルトブロック(φ5～30mm大)・暗褐色砂質土ブロック(φ10～30mm大)を含む。

- 土坑1～3 C-C'～E-E'
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石と炭化物を含む。
 - 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石と炭化物を含む。
 - 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石と多量の炭化物を含む。

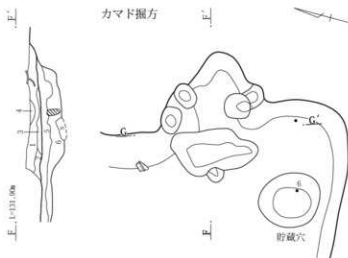
0 1:60 2m

第322図 VII区37号住居

カマド



カマド掘方

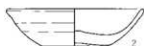


G. 1:131.90m



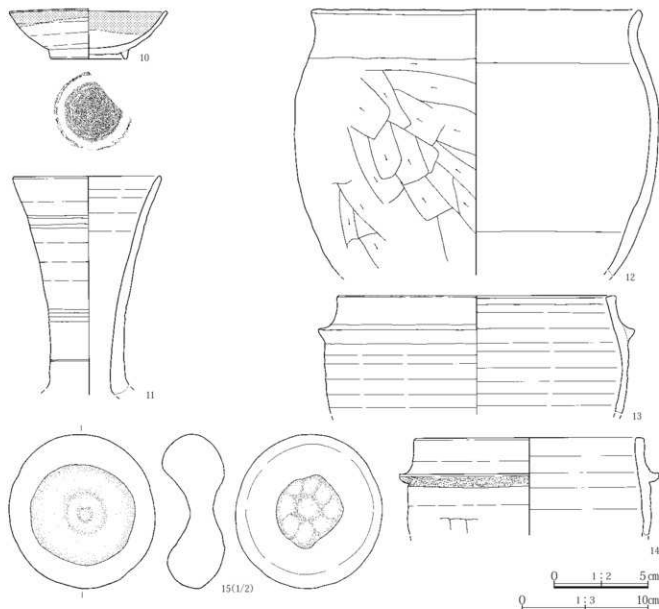
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の焼土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量の炭化粒子を含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の焼土粒子・炭化粒子(φ2~3mm)を含む。稀りやや弱。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極小ニッ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト粒子を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の炭化物及び、部分的に多量の焼土粒子を含む。
- 6 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4) 少量の炭化物を含む。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第323図 VII区37号住居と出土遺物



第324図 VIII区37号住居の出土遺物

土坑1を、中央西寄りから長径0.74m、短径0.59m、深さ0.16mの垂んだ円形の土坑2を検出した。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部底からは焼土ブロックを、焚口からは炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色土からなる。カマドは長さ1.14m、幅0.58m、深さ0.10mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南西隅の壁際から長径0.48m、短径0.44m、深さ0.16mの円形の土坑を検出した。底から0.12m上から須恵器の杯(6)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から多くの遺物が出土した。床面から須恵器の杯(1~4)、床面付近から灰軸陶器の椀(10)、須恵器の甕(11)、杯(5)、椀(8)、羽釜(13)、カマド使用面から灰軸陶器の皿(9)、土師器の甕(12)、埋土から輝石安山岩製の石製品(15)が出土した。

時代 平安時代10世紀第4四半期。

38号住居(第325~327図、PL.165・413)

グリッド 2 T17

主軸方位 N87° E

重複 7号土坑に切られる。37・45号住居に近接し、37・45号住居との同時存在はない。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、歪んだ隅丸平行四辺形を呈する竈穴住居である。長辺は4.26m、短辺は3.42m、深さは0.19m、面積は12.07㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

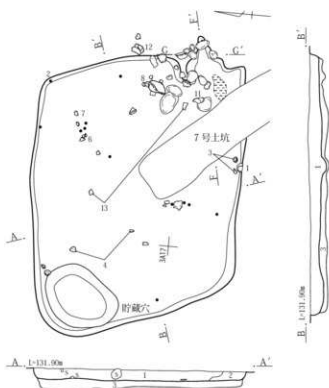
床面 灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅻ・Ⅺ層の黄褐色砂～砂礫層を掘り込んで構築している。北東隅の東壁際から長径0.39m、短径0.34m、深さ0.22mの浅い円形の土坑1、中央北寄りから直径0.36m、深さ0.20mの円形の土坑2、同じく直径0.36m、深さ0.19mの円形の土坑3を検出した。

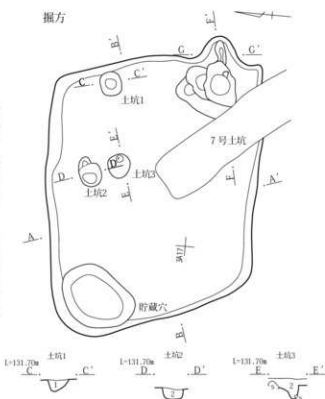
カマド 東壁の南東隅に位置する。カマドの燃焼部は東

壁の手前に灰黄褐色砂質シルトを貼って壁の内側に構築している。燃焼部底は水平で緩やかな勾配で立ち上がり、燃焼部と煙道の接続部は不明瞭である。燃焼部の左右壁には長径0.14～0.26m、短径0.07～0.13mの垂円礫が3点据えられており、これらはカマド構築材と考えられる。煙道の奥には長径0.24m、短径0.14m、厚さ0.08mの垂円礫が置かれており、これは煙道高架材と考えられる。燃焼部底にも長径0.17～0.22mの垂円礫2点が埋め込まれており、カマド構築材の可能性ある。焚口の右側から炭化物の広がりを検出した。カマド埋土にはぶい黄褐～灰黄褐色砂質土からなる。カマドは煙道を含む長さ0.92m、煙道長0.36m、幅0.58m、深さ0.19mである。

貯蔵穴 掘方の調査で北西隅の壁際から長径1.18m、短径0.89m、深さ0.07mの浅い歪んだ楕円形の土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴の可能性が高い。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の榛名ニツ岳白色軽石・ぶい黄褐色砂質シルトブロック(φ5～30mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の榛名ニツ岳白色軽石と少量のぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5～20mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量の榛名ニツ岳白色軽石と多量のぶい黄褐～浅黄褐色砂質シルト大ブロック(φ10～50mm大)を含む。



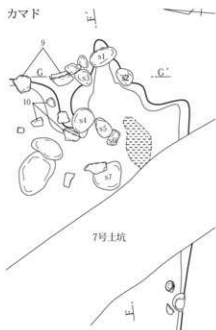
- 土坑1～3 C-C'～E-E'
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量の榛名ニツ岳白色軽石・炭化物と多量のぶい黄褐～浅黄褐色砂質シルト大ブロック(φ10～50mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量の榛名ニツ岳白色軽石と多量のぶい黄褐～浅黄褐色砂質シルト大ブロック(φ10～50mm大)を含む。

0 1:60 2m

第325図 Ⅷ区38号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物

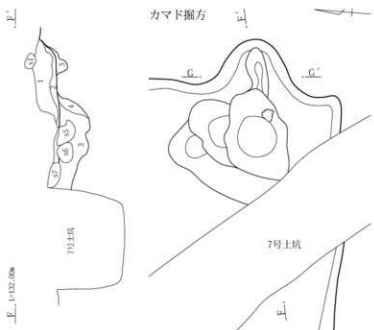
カマド



G_1-132.0m



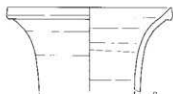
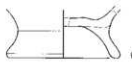
カマド掘方



E_1-132.0m

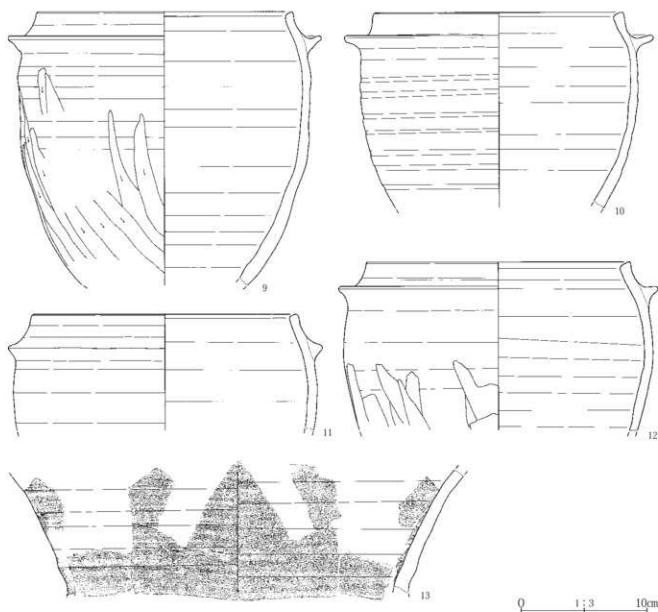
- 1 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の種名ニツ岳白色軽石・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石と少量の炭化物と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石と炭化物を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石とにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第326図 VII区38号住居と出土遺物



第327図 VII区38号住居の出土遺物

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から多くの遺物が出土した。床面から須恵器の椀(4・5)、甕(13)、羽釜(10~12)、床面付近から須恵器の杯(1)、椀(2・3)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

39号住居(第328・329図、PL.166・414)

グリッド 3 B 16

主軸方位 N78°E

重複 34号住居に切られる。35号住居、165号土坑を切る。

形状と規模 北西~南東方向に長軸を有し、隅丸長方形

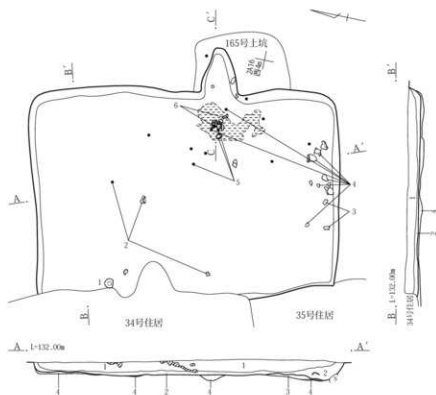
を呈する竪穴住居である。長辺は4.91m、短辺は3.40m、深さは0.21m、面積は14.65㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 にぶい黄褐色砂質土のブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.06mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

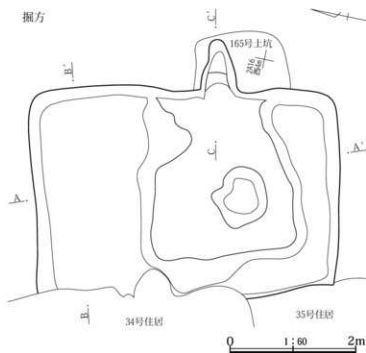
掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。カマドと中央を除く壁際に幅0.40~1.48mの浅い溝状の窪みが周回する。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外側に構築し



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石小粒・にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石と少量のにふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量のにふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物・焼土小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ5~30mm大)・炭化物と少量の焼土粒子を含む。

掘方



第328図 VII区39号住居

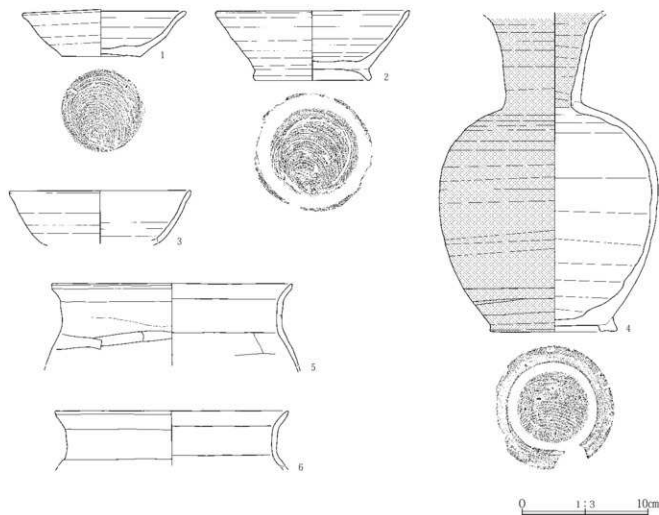
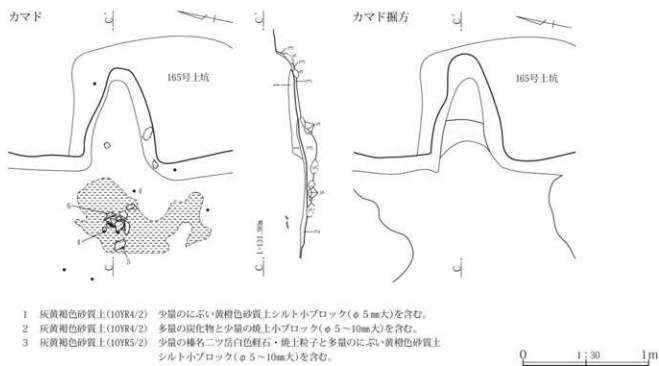
ている。燃烧部底は水平で、緩やかな勾配で立ち上がる。焚口には炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.40m、幅0.87m、深さ0.22mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかつ

た。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(1)、椀(2・3)、カマド使用面から灰釉陶器の壺(4)、土師器の甕(5・6)が出土した。

時代 平安時代9世紀第3四半期。



第329図 VII区39号住居と出土遺物

40号住居(第330~332図, PL.167・414)

グリッド 3 A 15

主軸方位 N52° E

重複 44・166号土坑に切られる。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.04m、短辺は3.42m、深さは0.22m、面積は11.64m²である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 にぶい黄褐色砂質土を0.09mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅱ・Ⅲ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

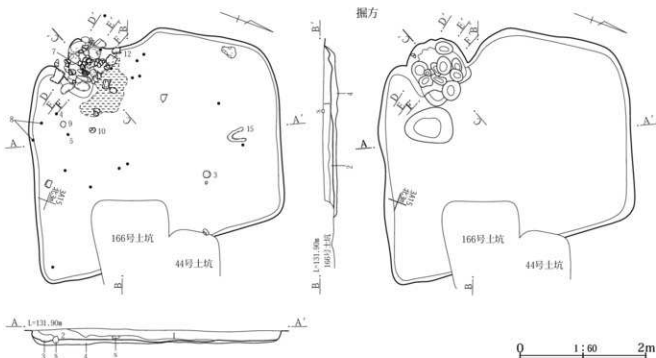
カマドと貯蔵穴 西壁の南西隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は西壁の手前から壁の外側を掘り込んで壁付近に構築している。燃焼部底は水平で、緩やかに立ち上がる。燃焼部底を覆う埋土には長径0.12～0.30mの垂円～

垂角礫や土器片が多く含まれ、袖や燃焼部底は失われている。これらの礫はカマドの崩落により移動したカマド構築材と考えられる。焚口には炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.04m、幅1.03m、深さ0.07mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマドから多くの遺物が出土した。床面から灰陶器の椀(8・9)、須恵器の椀(4・5)、床面付近から須恵器の甗(12)、鉄製鋤(15)、カマド使用面から須恵器の鉢(10)、カマド使用面付近から須恵器の椀(7)、埋土から砥石(16)が出土した。出土遺物は10世紀内に年代幅を有する。

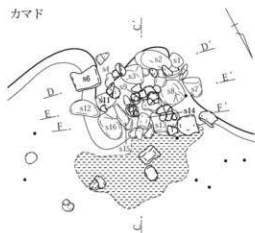
時代 平安時代10世紀。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)、炭化物粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石、炭化物粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)を含む。
- 4 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ5～30mm大)を含む。

第330図 VII区40号住居

カマド



D, 1=132.20m

D'



E, 1=132.20m

E'

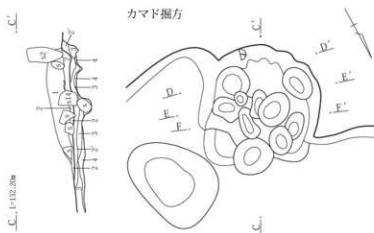


E, 1=132.20m

E'



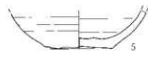
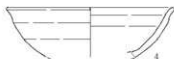
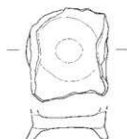
カマド掘方



C, 1=132.20m

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の炭化物を含む。=使用面
- 2' 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の炭化物を含む。
- 3 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4) 少量の浅黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と微量の炭化物・棒名ニッ岳白色軽石を含む。
- 4 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ5~30mm大)を含む。

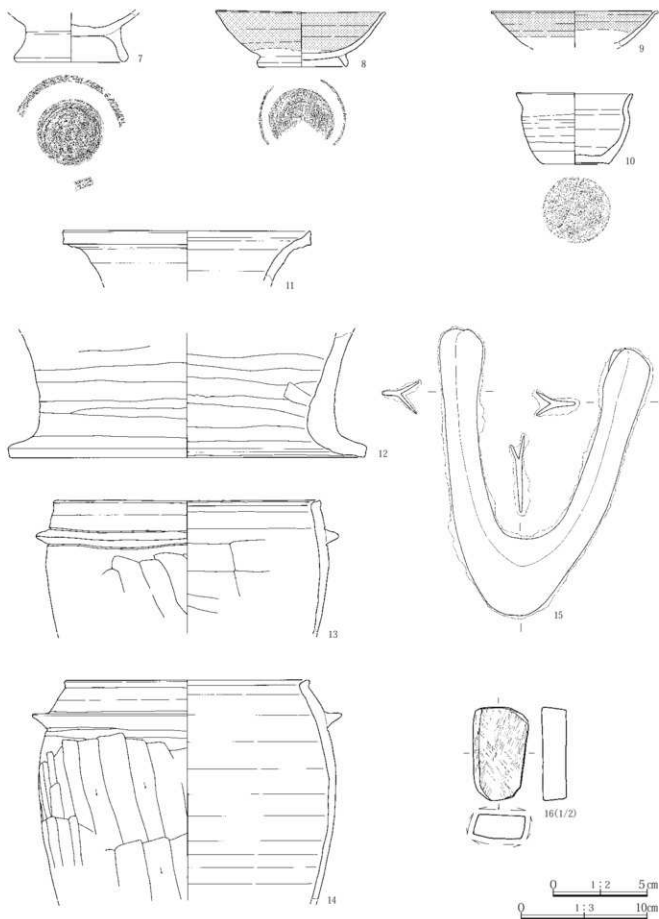
0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第331図 VII区40号住居と出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第332図 VII区40号住居の出土遺物

42号住居(第333・334図、PL.168・414)

グリッド 3A15

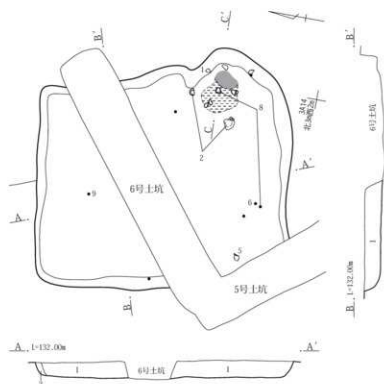
主軸方位 N79°E

重複 5・6号土坑に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.05m、短辺は3.53m、深さは0.29m、面積は11.41㎡である。

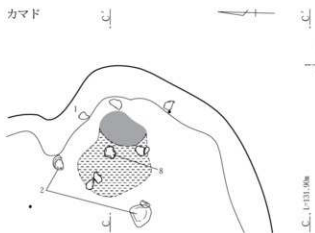
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を削りだし、一部で薄く灰黄褐色砂質土を貼って、平坦な床面を構築している。カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅に位置する。カマドの燃烧部は東壁の手前から壁を掘り込み、壁の前後に構築している。燃烧部底は水平で約45°の勾配で立ち上がる。燃烧部底から焚口では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は炭化物を含む褐灰色砂質土の薄層からなる。カマドは煙道を含む長さ1.06m、幅0.99m、深さ0.32mである。貯蔵穴は検出されなかった。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の榛名ニツ岳白色軽石と少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

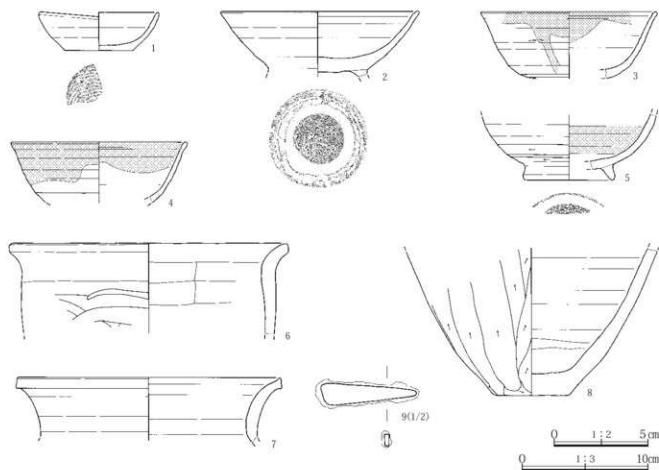
0 1:60 2m



- 1 褐灰色砂質土(10YR4/1) 微量の炭化物を含む。
- 2 褐灰色砂質土(10YR4/1) 多量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。

0 1:30 1m

第333図 VII区42号住居



第334図 VII区42号住居の出土遺物

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(6)、床面付近から灰軸陶器の碗(4)、カマドの使用面から須恵器の碗(2)、使用面付近から須恵器の杯(1)、羽釜(8)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

43号住居(第335～337図、PL.169・414・415)

グリッド 2 T14

主軸方位 N76° E

重複 なし。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.36m、短辺は3.86m、深さは0.40m、面積は12.76㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が緑から中央に傾きながら成層する。緑の最下底にはにぶい黄褐色砂質土が堆積し、床面を広く覆う灰黄褐色砂質土は長径0.05～0.18mの亜円礫を多く含む。竪穴の最上位には

暗褐色砂質土が中央を埋めている。

床面 灰黄褐色砂質土を0.08mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの北側にあたる東壁は段になった棚状の平場を呈する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに傾き、奥壁は緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部左の壁にはS4・S5・S7の亜円礫3点が据えられており、焚口を構成するS7は「ハ」の字形の左片側のように内側に傾いて据えられ、S7は28°内斜している。これらはカマド構築材である。S4は長径0.21m、短径0.14mの亜円礫である。

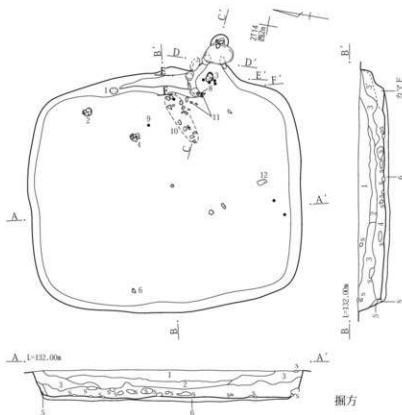
S6は長径0.25m、短径0.14m、厚さ0.11mの砂岩の亜円礫である。

S7は長径0.36m、短径0.14m、厚さ0.12mの閃緑岩の亜円礫である。これらの礫が埋め込まれた痕跡はカマド

掘方で検出された小ピットにそれぞれが対応する。燃焼部の中央には長径0.17m、短径0.15m、厚さ0.09mの安山岩の棒状円礫が埋め込まれている。礫の頂部は被熱の痕跡を呈し、これは支脚である。燃焼部と煙道の接続部には礫が埋め込まれており、これは長径0.29m、短径0.19m、厚さ0.11mの安山岩の垂円礫であるS2と長径

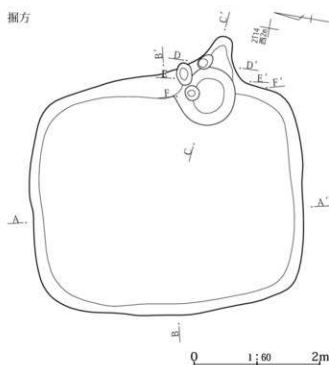
0.33m、短径0.15m、厚さ0.14mの安山岩の垂円礫であるS3である。これらの直上には長径0.34m、短径0.33m、厚さ0.07mの安山岩の薄い扁平円礫が置かれている。これはカマド燃焼部と煙道の接続部を構成する天井高梁材と考えられる。

カマド埋土は暗灰黄色砂質土が成層し、使用面には炭化



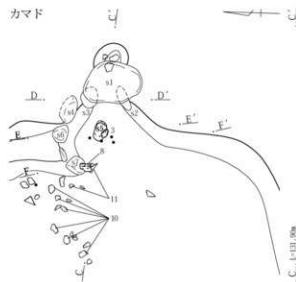
掘方

- 1 暗褐色砂質土 少量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土 少量の棒名二ツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ 5~30mm大)と微量の焼土粒子・炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土 少量の棒名二ツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ 5~30mm大)と微量の焼土粒子・炭化物を含む。
- 3' 灰黄褐色砂質土 3層土+少量の明黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 10~20mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土 少量の棒名二ツ岳白色軽石と多量の大小円礫、微量の炭化物を含む。
- 5 にぶい黄褐色砂質土 少量の棒名二ツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト土を含む。=住居埋前崩土
- 6 灰黄褐色砂質土 微量の棒名二ツ岳白色軽石を含む。(10YR6/2)

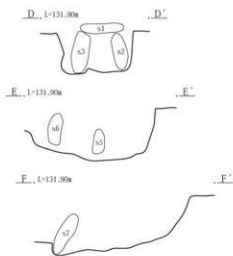
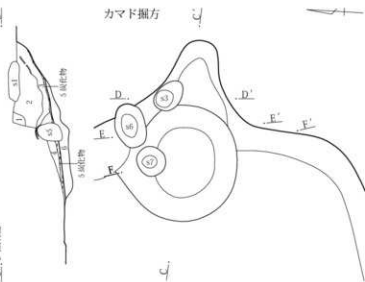


第4章 第2面の遺構と出土遺物

カマド

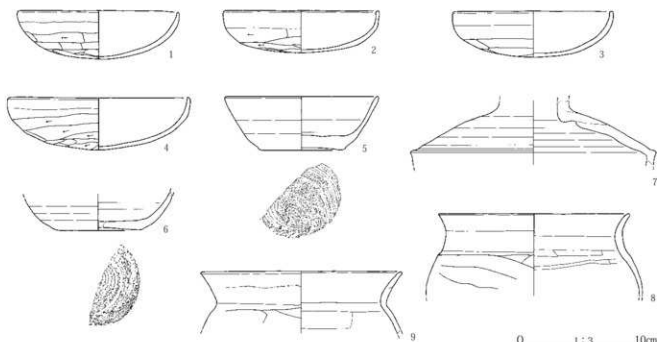


カマド掘方

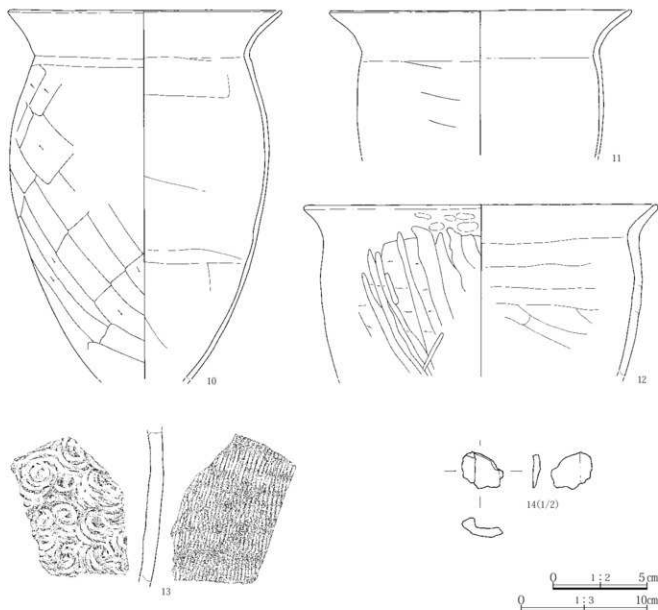


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石と少量のにい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)・焼土粒子・炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石と少量のにい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)・焼土小ブロック(φ 5~15mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石・炭化物を含む。
- 5 炭化物層 微量の焼土粒子を含む。=使用面
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石を含む。

0 1:30 1m



第336図 VII区43号住居と出土遺物



第337図 VII区43号住居の出土遺物

物の薄層が検出された。据方埋土は灰黄褐色砂質土を貼って構築している。煙道を含むカマドの長さは1.27m、煙道長0.43m、煙道幅0.27m、カマド幅0.92m、深さ0.39mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面やカマドから多くの遺物が出土した。床面から土師器の杯(2・4)、甕(9・10・12)、カマド使用面から土師器の杯(3)、埋土から須恵器の杯(5)、壺(7)、銅製品(14)が出土した。

時代 奈良時代8世紀第3四半期。

44号住居(第338~340図、PL.170・415)

グリッド 3 A13

主軸方位 N85°W

重複 80土坑を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.62m、短辺は3.64m、深さは0.48m、面積は10.78㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が縁から中央に傾きながら成層する。竪穴の最上位は黒褐色砂質土が中央を埋めている。

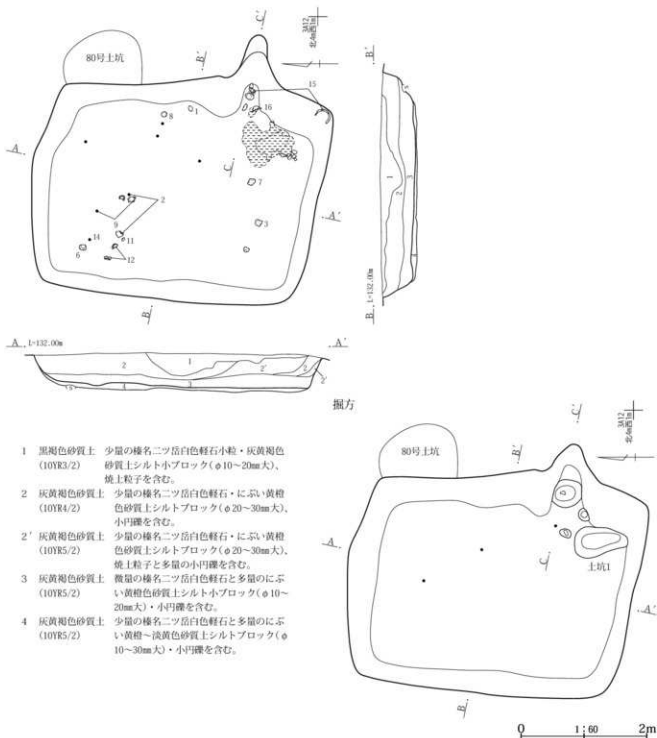
床面 灰黄褐色砂質土を0.08mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。掘方の調査でカマドの南側の南壁際から長径0.85m、短径0.45m、深さ0.17mの歪んだ楕円形の土坑1を検出した。土坑は、床面でカマド焚口からの炭化物に覆われており、カマドの最終使用時には埋没していたと考えられる。土坑は位置や形状から貯蔵穴の可能性が高い。

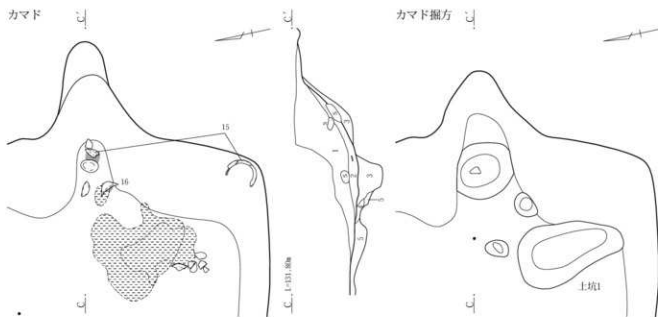
カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマド周辺の東

壁は段を有する棚状の平場を呈する。カマドの燃焼部は東壁の手前から壁を掘り込み、壁の前後に構築している。燃焼部底は水平で、奥壁は約45°の勾配で緩やかに立ち上がる。燃焼部底から焚口の右側では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.50m、幅0.80m、深さ0.53mである。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかつ

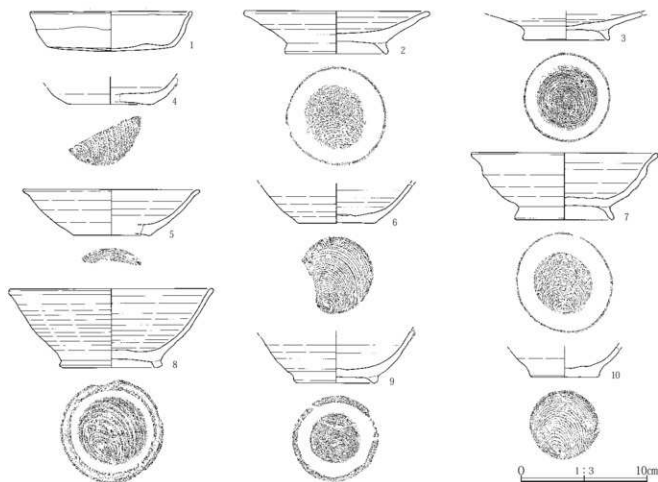


第338図 VII区44号住居

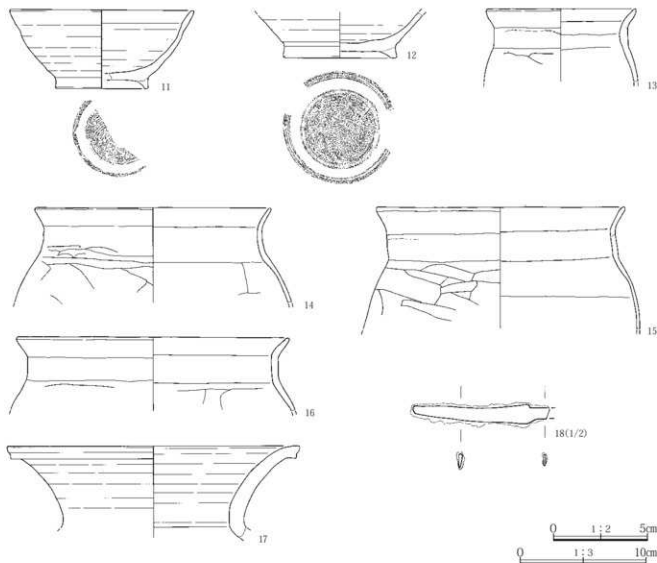


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~15mm大)と微量の炭化物を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)と微量の焼土粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~15mm大)と微量の炭化物粒子を含む。
- 4 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4) 多量の焼土小ブロック(φ 10~20mm大)・焼土粒子と炭化物を含む。
- 5 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4) 少量の種名ニツ岳白色軽石・小円礫を含む。厚さ10~20mm程の炭化物層が2枚互層堆積。= 上面使用面

0 1:30 1m



第339図 VII区44号住居と出土遺物



第340図 VII区44号住居の出土遺物

た。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から多くの遺物が出土した。床面から須恵器の碗(7)、床面付近から須恵器の皿(2・3)、土師器の杯(1)、須恵器の碗(11)、カマド使用面から土師器の甕(15・16)、埋土から刀子(18)が出土した。

時代 平安時代9世紀第3・4四半期。

45号住居(第341～343図、PL.171・415)

グリッド 2 T 17

主軸方位 N72° E

重複 なし。38号住居に近接し、同時存在はない。

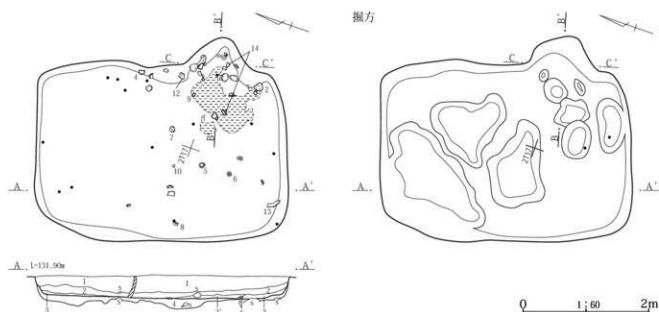
形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.07m、短辺は2.88m、深さは0.42m、面積は9.38㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含むにぶい黄褐～灰黄褐色砂質土からなる。

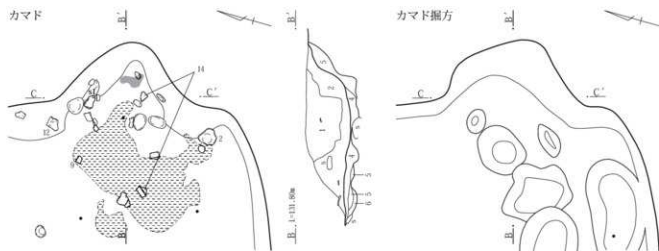
床面 灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。北部に長径1.34～2.04mの不定形の浅い窪みを、カマド前から南壁際で長径0.62～0.88mの歪んだ楕円形の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに窪み、奥壁は約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部左の壁には長径0.23m、短径0.20m、厚さ0.07mの垂円礫が据えられており、これはカマド構築材である。燃焼部底から焚口及び焚口の右側から炭化

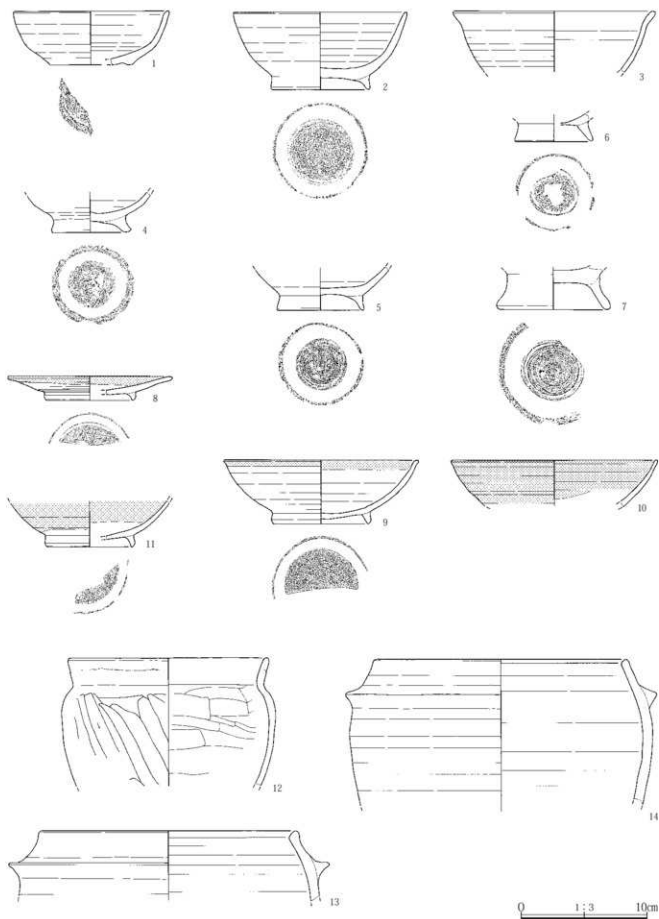


- 1 におい黄褐色砂質土(10YR5/3) 多量の極名二ツ岳白色軽石と少量のにおい淡黄色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)、炭化物粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名二ツ岳白色軽石・におい淡黄色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)、炭化物粒子を含む。
- 3 褐色砂質土(10YR4/1) 微量の極名二ツ岳白色軽石と多量のにおい淡黄色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と少量の炭化物を含む。
- 3' 褐色砂質土(10YR4/1) 微量の極名二ツ岳白色軽石と多量のにおい淡黄色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の極名二ツ岳白色軽石と多量のにおい黄橙~淡黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10~50mm大)と微量の焼土粒子・炭化物を含む。

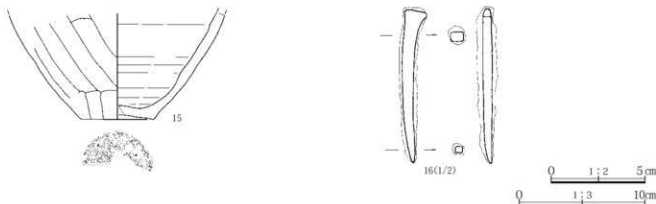


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名二ツ岳白色軽石、炭化物粒子と多量のにおい黄褐色砂質土ローム小ブロック(φ10~20mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石と少量の炭化物粒子、におい黄褐色砂質土ローム小ブロック(φ10~20mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の灰・焼土小ブロック(φ5~15mm大)を含む。=使用面
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の炭化物を含む。(ラミナ状炭化物層有り)、炭化物層中より、羽釜口縁部出土。=使用面
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにおい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)と少量の炭化物粒子と微量の極名二ツ岳白色軽石を含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量のにおい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)を含む。

第341図 VII区45号住居



第342図 VII区45号住居の出土遺物(1)



第343図 VII区45号住居の出土遺物(2)

物の広がりを出した。カマド埋土は炭化物を含む灰黄褐色砂質土が成層している。カマドの長さは1.09m、幅0.80m、深さ0.37mである。貯蔵穴は検出されなかった。
柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。
遺物 床面やカマドから多くの遺物が出土した。床面から須恵器の椀(2・4・5)、床面付近から土師器の甕(12)、カマド使用面から灰軸陶器の椀(9)、羽釜(14・15)、埋土から鉄釘(16)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

47号住居(第344～346図、PL.172・415)

グリッド 2 S 15

主軸方位 N82° E

重複 48号住居に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.35m、短辺は3.41m、深さは0.22m、面積は13.10㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。北東隅に長径1.28mの不定形の浅い窪みを検出した。
カマド 東壁の中央南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部の左奥壁には焼土ブロックを、焚口の右側から炭化物の広がりを出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土が成層

している。カマドの長さは1.11m、幅0.50m、深さ0.14mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.56m、短径0.53m、深さ0.17mの円形の土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から黒色土器の椀(1・2)、カマド使用面付近から須恵器の椀(4)、掘方から灰軸陶器の小椀(5)が出土した。

時代 平安時代9世紀。

48号住居(第344～347図、PL.173・416)

グリッド 2 S 14

主軸方位 N89° E

重複 47号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.372m、短辺は2.74m、深さは0.21m、面積は8.59㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.04mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。中央に長径0.48m、短径0.38m、深さ0.19mのピットを検出した。

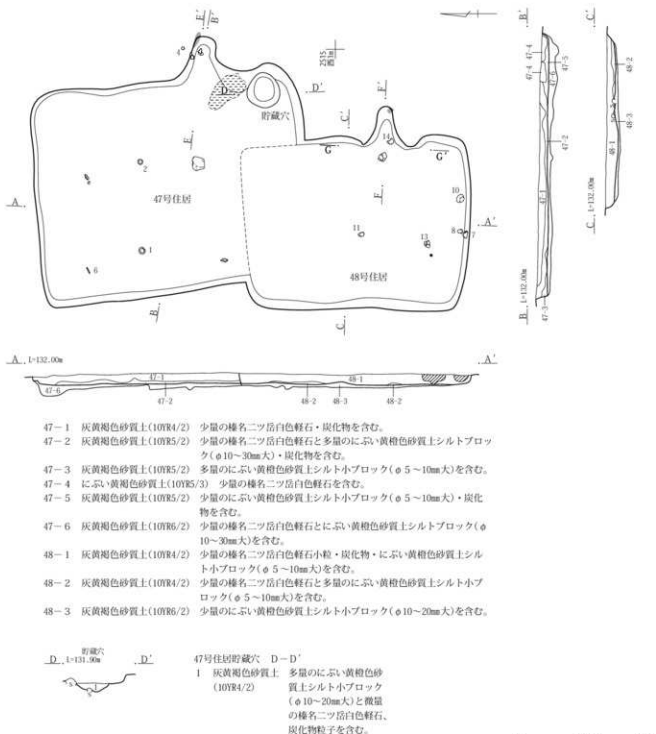
カマドと貯蔵穴 東壁の中央南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で緩やかに傾斜して立ち上が

る。燃焼部底から土器片が出土した。カマド埋土は灰黄褐色シルト質土が成層している。カマドの長さは0.97m、幅0.52m、深さ0.16mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 床面で支柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(10・11)、床面付近から須恵器の杯(13)や土師器の杯(7・8)、カマド使用面付近から須恵器の杯(14)が出土した。

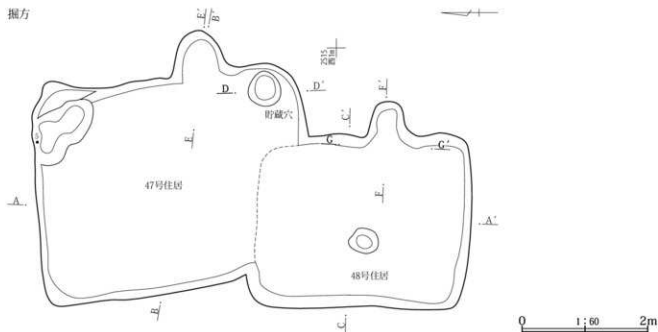
時代 奈良時代8世紀第4四半期～平安時代9世紀第1四半期。



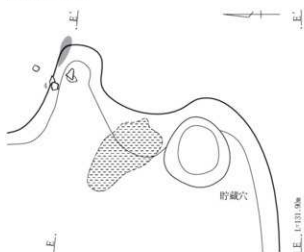
0 1:60 2m

第344図 Ⅶ区47・48号住居(1)

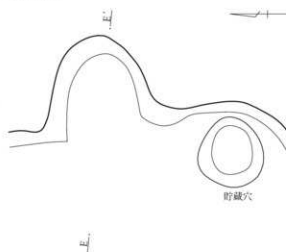
掘方



47号住居カマド



カマド掘方

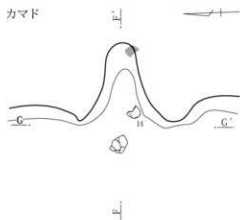


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の礫名ニツ岳白色軽石を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の礫名ニツ岳白色軽石と少量のふい黄色色砂質土シルト小ブロック(φ 3~5mm大)・焼土粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量のふい黄橙~淡黄色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)、炭化物粒子を含む。= 上面使用面
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の礫名ニツ岳白色軽石、炭化物粒子、焼土粒子を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のふい黄色色砂質土小ブロック(φ 5~15mm大)を含む。

第345図 VII区47・48号住居(2)

第4章 第2面の遺構と出土遺物

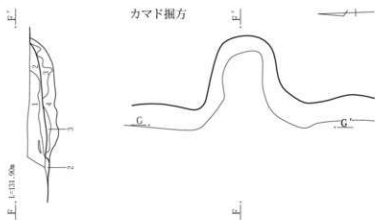
カマド



G. 1:131.90m



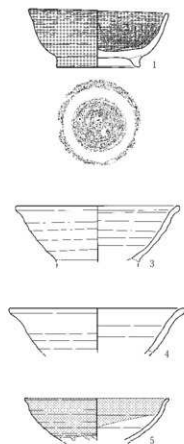
カマド掘方



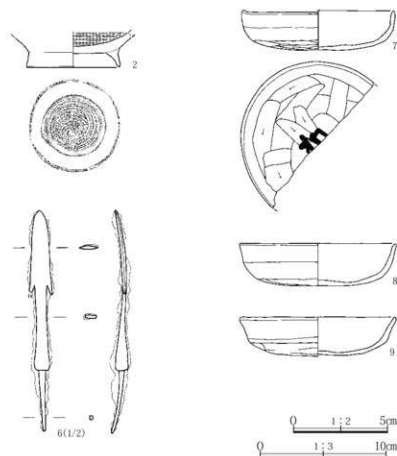
- 1 灰黄褐色シルト質土(10/R4/2) 種名二ツ岳白色軽石小粒(φ2~20mm大)、炭化物粒子(φ2~3mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10/R4/2) 微量の炭化物粒子(φ2~5mm大)・焼土粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10/R4/2) 多量の炭化物と少量の淡黄色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。=上面使用面
- 4 灰黄褐色砂質土(10/R5/2) 少量の種名二ツ岳白色軽石・淡黄色砂質土シルト粒子と多量の小円礫を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10/R4/2) 多量のふい黄相~淡黄色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。=カマド袖

0 1:30 1m

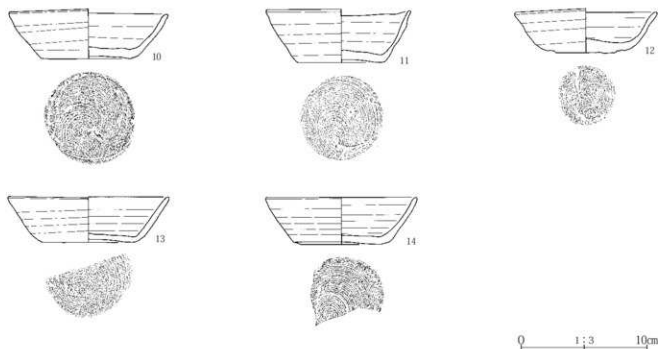
47号住居



48号住居



第346図 VII区48号住居と47・48号住居の出土遺物



第347図 VII区48号住居の出土遺物

49号住居(第348～350図、PL.174・416)

グリッド 2 R 14

主軸方位 N77° E

重複 39・188号土坑に切られる。51号住居に近接し、同時存在はない。発掘調査時に切合い関係にある49・50・93号住居として調査したが、資料整理で49号住居に統合した。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する規模の大きな竪穴住居である。長辺は6.04m、短辺は3.46m、深さは0.17m、面積は20.89㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

床面 灰黄褐色シルト質土を0.08mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。北西隅の壁際に幅0.50～0.96mの極浅い溝状の窪みが周回する。カマド周辺からは長辺0.92～0.98mの歪んだ隅丸方形の浅い窪みを検出した。

カマド 東壁の中央から南東隅寄りに3基のカマドが存在する。カマドは東壁の中央から南東隅の順にカマド1～3とする。床面の炭化物の広がりから住居廃絶時のカマドはカマド2と想定され、旧いカマドはカマド1・3である。カマド1・2の燃焼部は東壁から奥を掘り込

んで壁の外側に構築している。カマド3の燃焼部は東壁から手前に灰黄褐色シルト質土を貼って壁の内側に構築している。

カマド1の燃焼部底はほぼ水平で、緩やかに傾いて立ち上がる。燃焼部では炭化物の広がりを検出したが、焚口付近には炭化物が認められない。カマド埋土は炭化物を含む灰黄褐色砂質土が成層している。カマド1の長さは0.72m、幅0.72m、深さ0.12mである。

カマド2の燃焼部底はほぼ水平で、緩やかに傾いて立ち上がり、カマド1に形状が類似する。燃焼部の右壁には長径0.24～0.26m、短径0.20～0.25m、厚さ0.11～0.13mの垂円礫2点が据えられており、これらはカマド構築材と考えられる。また、奥壁に近い燃焼部底からは長径0.20mの角礫が埋土中から出土した。燃焼部底から焚口及び焚口の左側では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土である。カマド2の長さは0.93m、幅0.79m、深さ0.10mである。

カマド3の燃焼部底はほぼ水平で緩く窪み、奥壁では緩やかな勾配で立ち上がる。カマドの形状はカマド1・2と異なっている。燃焼部底の中央には長径0.19m、短径0.17m、厚さ0.12mの垂円礫が0.06m埋め込まれており、これは支脚と考えられる。燃焼部の焼土や炭化物の広がり断片的で、焚口付近には炭化物が認められない。カ

第4章 第2面の遺構と出土遺物

マド理土は灰黄褐色砂質土である。カマド3の長さは1.25m、幅0.95m、深さ0.28mである。

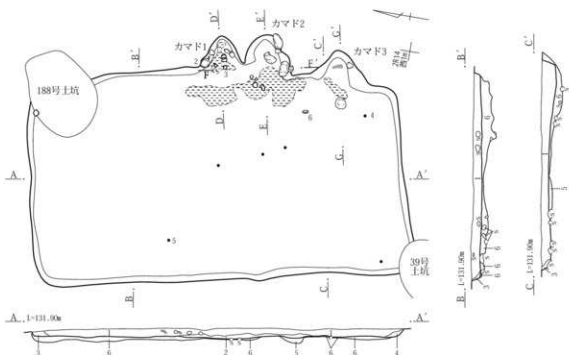
貯蔵穴 貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。一边が6mにおよぶ竪穴の規模から考えて、主柱穴を有しない構造の建物とは考えにくい。これは主柱穴底がⅫ・Ⅺ層の灰黄褐色砂礫層

で止められたため、柱穴の輪郭が不明瞭である可能性が想定される。

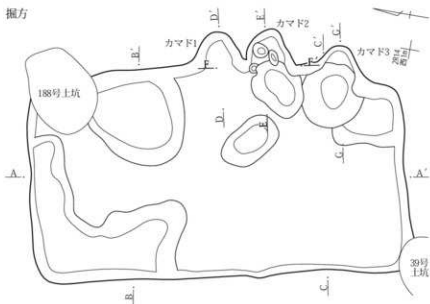
遺物 床面から須恵器の羽釜(6)、カマド使用面付近から須恵器の椀(3)、黒色土器の椀(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。



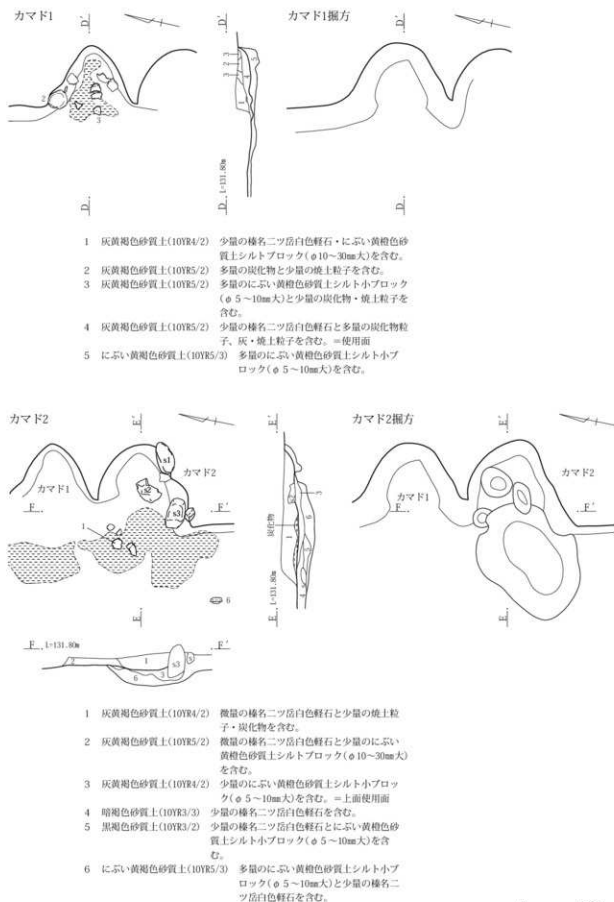
- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒状二ツ岳白色軽石小粒(φ2~20mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 2 黒褐色シルト質土(10YR3/1) 微量の棒状二ツ岳白色軽石小粒(φ2~8mm大)・炭化粒子(φ2~4mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) にふい黄褐色シルト質土ブロックを含む。
- 4 にふい黄褐色土(10YR5/3) にふい黄褐色土ブロックを含む。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2) 微量の小円礫(φ10~40mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2) 小円礫(φ10~30mm大)を含む。

掘方



0 1:60 2m

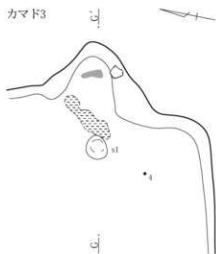
第348図 VII区49号住居(1)



第349図 VII区49号住居(2)

第4章 第2面の遺構と出土遺物

カマド3

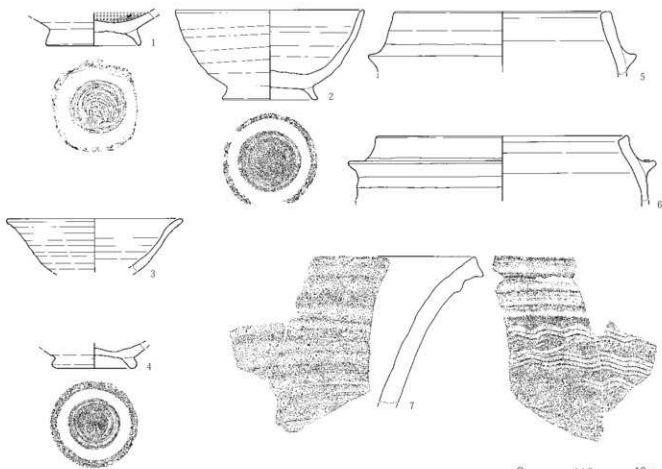


カマド3掘方



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の極名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量のにぶい黄褐色~浅黄色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の灰と少量の焼土粒子・炭化物・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
=上面使用面
- 4 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量の極名ニツ岳白色軽石を含む。

0 1:30 1m



第350図 VII区49号住居と出土遺物

51号住居(第351・352図, PL.175・416)

グリッド 2 R13

主軸方位 N78° E

重複 なし。49号住居に隣接し、同時存在はない。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.41m、短辺は3.44m、深さは0.18m、面積は13.34m²である。

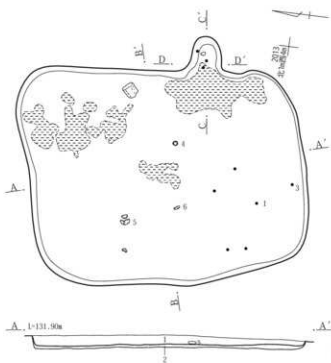
埋土 ニツ盾の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなり炭化物を含む。

床面 にぶい黄褐色砂質土を0.04mほど薄く貼て、床面を構築している。中央から北東部の床面の上位には厚

さ0.06mの炭化材を含む灰黄褐色砂質土が覆う。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。カマド周辺を除き壁際に幅0.75～1.10m、深さ0.03～0.05mの極浅い溝状の窪みが周囲する。

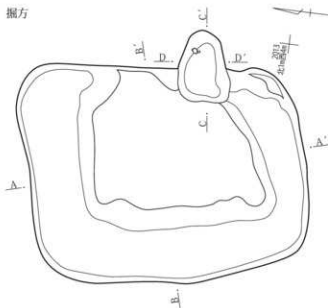
カマドと貯蔵穴 東壁の中央南東隅寄りに位置する。カマドの燃烧部は東壁の奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃烧部底は水平で、緩やかに立ち上がる。燃烧部底から焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色シルト～砂質土が成層する。カマドの長さは0.93m、幅0.48m、深さ0.10mである。貯蔵穴は検出されなかった。



掘方

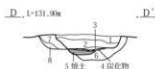
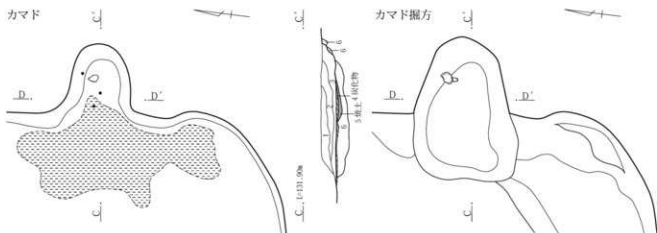
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の椀名ニツ盾白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)、炭化物を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 地山砂質土シルトをベースに、灰黄褐～暗褐色砂質土大ブロック(φ30～100mm大)を含む。

0 1;60 2m



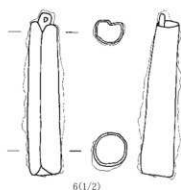
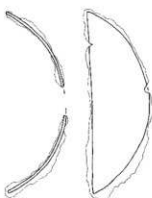
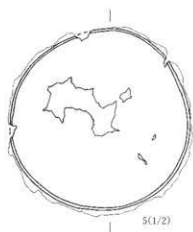
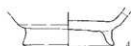
第351図 VII区51号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物



- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒状白色軽石小粒・炭化粒子(ϕ 2~4mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 少量の炭化物粒子(ϕ 2~10mm大)と微量の焼土粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。締りやや弱。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(ϕ 5mm大)を含む。=3層上下使用面
- 4 炭化物+少量の灰層=使用面
- 5 6層上の焼土化
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにぶい黄褐色~淡黄色砂質土シルト小ブロック(ϕ 5~15mm大)を含む。
- 7 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(ϕ 2~3mm大)を含む。
- 8 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) にぶい黄褐色土ブロックを含む。

0 1:30 1m



0 1:2 5cm

0 1:3 10cm

第352図 VII区51号住居と出土遺物

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から鉄椀(5)と完形の鉄鐙(6)が出土したことが特筆される。床面付近からは須恵器の杯(1)、椀(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。住居の廃絶後、竪穴の一部に埋土が堆積している過程で焼失した竪穴住居である。鉄椀や鉄鐙など通常の住居からは出土しにくい鉄製品が存在することは、これらが祭祀に関わる遺物であった可能性があげられる。

52号住居(第353図, PL.176)

グリッド 2 R 13

主軸方位 N78°E

重複 53号住居、40・121・195・196号土坑に切られる。
形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴住居である。南西部の西壁は53号住居により失われている。長辺は3.66m、短辺は2.34m、深さ

は0.16m、検出された最大の面積は7.07㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

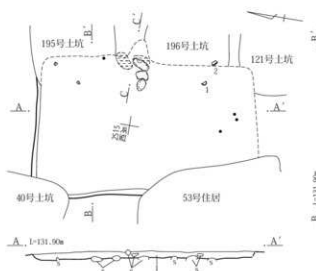
床面 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を削り出して、平坦な床面を構築している。

カマドと貯蔵穴 カマドの痕跡のみを検出した。カマドは東壁の中央に位置すると想定される。カマドの燃烧部は東壁の奥を掘り込んで壁の外側に構築しているものと想定され、燃烧部底から炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土である。カマドの長さは0.86m、幅0.45mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

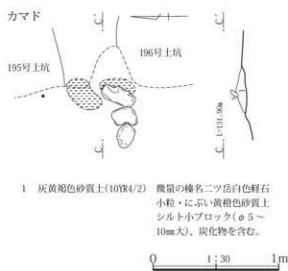
遺物 床面から灰釉陶器の皿(1)、須恵器の羽釜(2)が出土した。

時代 平安時代9世紀末から10世紀初頭。



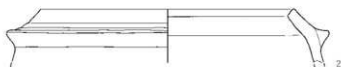
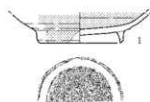
1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石と微量の焼土粒子・炭化物を含む。

0 1:60 2m



1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)、炭化物を含む。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第353図 VII区52号住居と出土遺物

53号住居(第354図、PL.176)

グリッド 2 S 13

主軸方位 N71°E

重複 52号住居を切る。120・198号土坑に切られる。

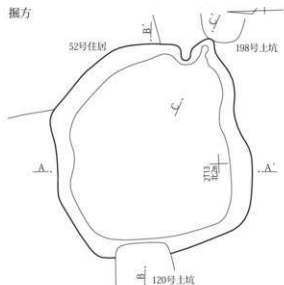
形状と規模 東西方向に長軸を有し、歪んだ隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.10m、短辺は3.06m、

深さは0.21m、面積は7.21m²である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

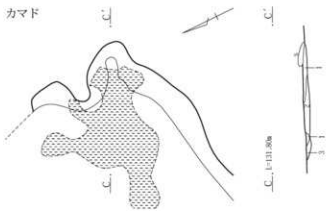
床面 灰黄褐色砂質土を0.04mほど薄く貼って、床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。



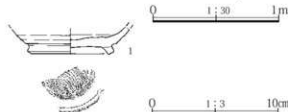
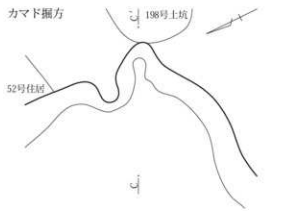
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の種名ニツ岳白色軽石と少量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と少量の炭化物粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の種名ニツ岳白色軽石小粒・ふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

0 1:60 2m



カマド

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の淡黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)、炭化物粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の淡黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。



第354図 VII区53号住居と出土遺物

カマドと貯蔵穴 カマドの痕跡のみを検出した。カマドは南壁の南東隅に位置する。カマドの燃焼部は東壁の手前に灰黄褐色砂質シルトを貼って壁の内側に構築している。燃焼部底はほぼ水平である。燃焼部底から焚口とその周辺で炭化物の広がりを検出した。カマド掘方埋土は炭化物を含む灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ0.93m、幅0.53m、深さ0.18mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から須恵器の椀(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

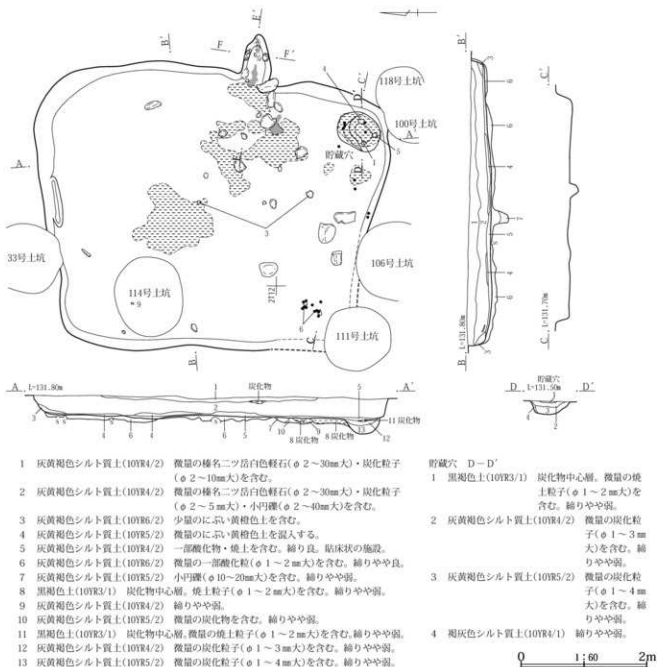
54号住居(第355～357図, PL.177・416)

グリッド 2 S 12

主軸方位 N85°W

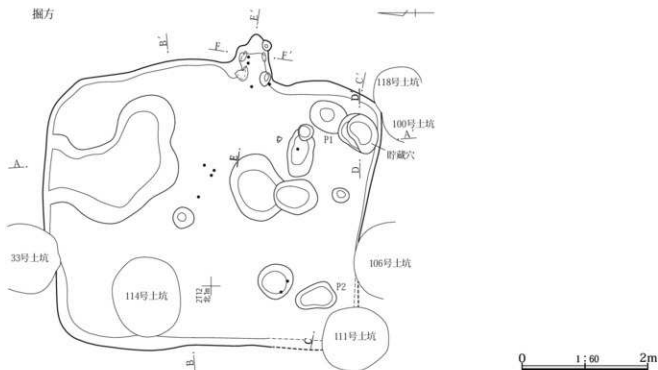
重複 33・100・106・111・114・118号土坑に切られる。

95号住居に近接し、同時存在はない。発掘調査時に切合い関係にある54・58号住居として調査したが、資料整理で54号住居に統合した。

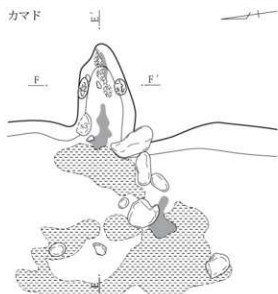


第355図 VII区54号住居(1)

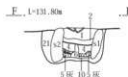
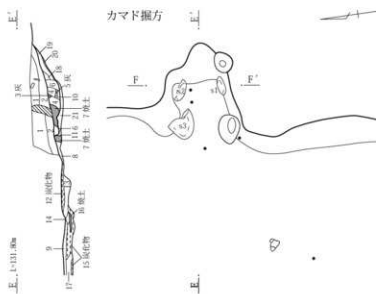
掘方



カマド



カマド掘方



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ2~5mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ2~10mm大)・焼土を含む。灰層が層下層にある。
- 3 褐灰色シルト質土(10YR4/1) 灰層。少量の焼土を含む。
- 4 灰黄褐灰色シルト質土(10YR6/2)
- 5 褐灰色土(10YR4/1) 灰層。締りやや弱。
- 6 にぶい黄色シルト質土(2.5YR6/4)
- 7 焼土中心層 多量の焼土を含む。締りやや弱。
- 8 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量の焼土を含む。締りやや弱。
- 9 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量のにぶい黄褐色土と棒名ニッ岳火山灰を含む。
- 10 黒褐色シルト質土(10YR3/2) 灰・炭化物の混土層。
- 11 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 灰の混土層。
- 12 黒褐色シルト質土(10YR3/1) 炭化物中心層。
- 13 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子を含む。
- 14 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2)
- 15 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物中心層。
- 16 赤褐色土 焼土中心層。
- 17 黒褐色土(10YR3/2) 灰層・炭の混土層。
- 18 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 19 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 20 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 21 灰黄褐色土(10YR5/2) 裏込め土。



第356図 VII区54号住居(2)

形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する規模の大きな竪穴住居である。長辺は5.60m、短辺は4.58m、深さは0.33m、面積は25.64㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

床面 灰黄褐色シルト質土を0.06mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。中央から南東部は炭化物や硬化面の広がりを検出した。

掘方 Ⅻ・Ⅺ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。南壁際から小ピットを複数検出した。

カマド 東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに傾斜しながら立ち上がる。燃焼部奥壁には長径0.24～0.27m、短径0.13～0.15m、厚さ0.07～0.09mの垂円礫2点が据えられており、焚口の左側からも長径0.24mの垂円礫が出土した。これらはカマド構築材である。焚口及び焚口付近から炭化物の広がりを検出した。

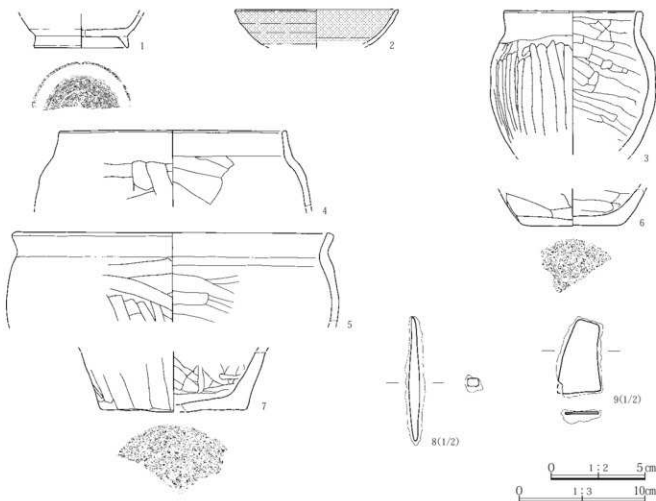
カマド埋土は灰黄褐色砂質土が成層している。カマドの長さは0.84m、幅0.46m、深さ0.17mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.72m、短径0.54m、深さ0.15mの円形の土坑を検出した。底から0.03～0.38m上から須恵器の椀(1)、土師器の甕(4・5)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。掘方の調査で北東隅の壁際に長径0.53m+、短径0.48m、深さ0.15mのP1、南西隅の壁際から直径0.58m、深さ0.23mのP2を検出した。P1・2の柱間は2.90mである。これらのピットは南壁際から等間隔に配列することから主柱穴の可能性が高い。

遺物 床面から土師器の小型甕(3)や鉄製品(9)、埋土から土師器の甕(7)が出土した。出土遺物は8世紀後半から11世紀前半の年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀前半。



第357図 VII区54号住居の出土遺物

55号住居(第358～360図、PL.178・416)

グリッド 2 R 12

主軸方位 N86°E

重複 56号住居、4・129・141・142・155・163・164号土坑に切られる。2号竪穴を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.50m、短辺は2.70m、深さは0.15m、面積は8.19㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

床面 灰黄褐色シルト質土を0.06mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅱ・Ⅲ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

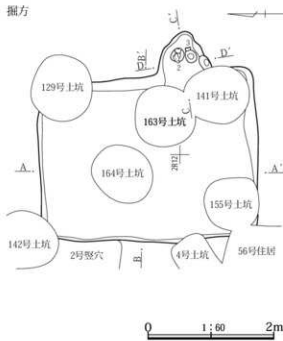
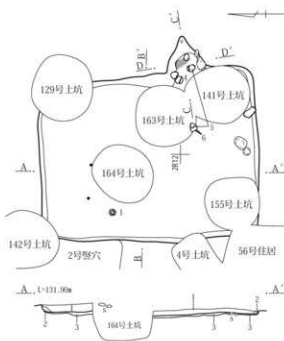
カマドと貯蔵穴 東壁の中央南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で奥壁で急な勾配で立ち上がる。燃焼部右壁には長径0.32m、短径0.20m、厚さ0.14m

の垂円礫が据えられており、0.18m埋め込まれている。これはカマド構築材である。焚口付近から南東部の床面に炭化物の広がりを検出した。カマド埋土にはふい黄褐色～灰黄褐色砂質土が成層している。カマドの長さは0.72m、幅0.75m、深さ0.12mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

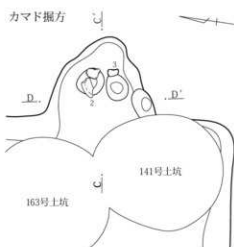
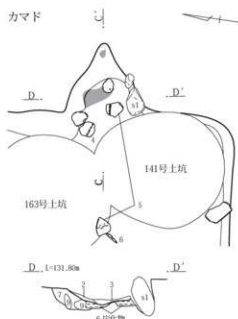
遺物 床面から須恵器の羽釜(3)、床面付近から黒色土器の椀(1)、カマド使用面から須恵器の羽釜(4・5)、埋土から鉄鏝(6)が出土した。

時代 10世紀後半に帰属する56号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀前半と想定される。



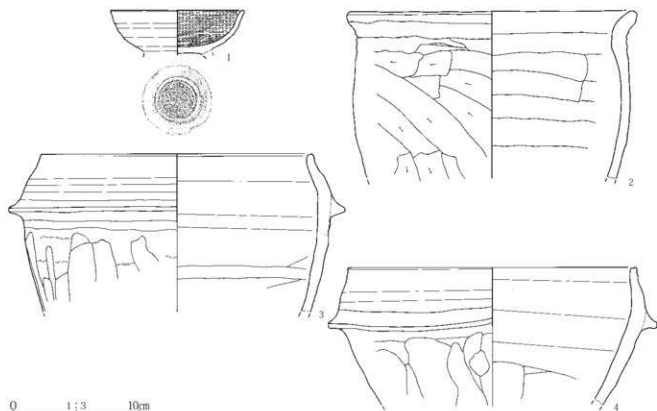
- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ2～20mm)・炭化粒子(φ1～2mm大)・小円礫(φ1～10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～5mm大)・にふい黄褐色土を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒・炭化粒子・焼土粒子(φ1～2mm大)・小円礫(φ30～50mm)を含む。

第358図 Ⅶ区55号住居

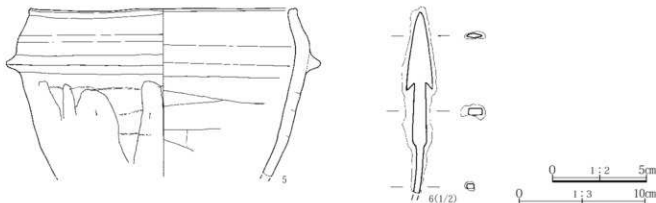


- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ居白色軽石小粒(φ1~5mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ居白色軽石小粒(φ1~2mm大)・炭化粒子(φ1mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色シルト質土(10YR4/3) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ居白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 少量の焼土粒子(φ2~3mm大)を含む。締りやや弱。
- 6 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。少量の炭化物・炭・焼土を含む。締りやや弱。
- 7 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2)
- 8 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の炭化物を含む。
- 9 灰黄色シルト質ブロック(2.5YR6/2)
- 10 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の炭化物を含む。
- 11 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2) 微量の炭化物を含む。

0 1:30 1m



第359図 VII区55号住居と出土遺物



第360図 VII区55号住居の出土遺物

56号住居(第361・362図、PL.179・417)

グリッド 2 R 11

主軸方位 N 8° E

重複 4・76号土坑に切られる。55号住居、93・155号土坑を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.44m、辺は3.00m、深さは0.27m、面積は8.15㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなり、床面は炭化物を含む灰黄褐色シルト質土の薄層が覆う。

床面 灰黄褐色砂質土を0.09mほど貼って、平坦な床面を構築している。中央には長辺2.35m、短辺1.46mの歪んだ隅丸方形を呈する硬化面や炭化物、焼土ブロックの広がりを検出した。

掘方 Ⅻ・Ⅺ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

カマド 南壁の南東隅に位置する。カマドの燃焼部は南壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに傾き、緩やかな勾配で立ち上がり煙道に接続するが、接続部の底面の傾斜変化は不明瞭である。燃焼部左右の壁にはS1・S2・S4～S7の垂円礫6点が据えられており、焚口を構成するS5は「ハ」の字形の左片側のように内側に傾いて据えられ、S5は26°内斜している。これらはカマド構築材である。

S1は長径0.16m、短径0.05m+、厚さ0.08mの垂円礫である。

S2は長径0.18m、短径0.05m+、厚さ0.07mの垂円礫である。

S4は長径0.25m、短径0.15m、厚さ0.10mの垂円礫である。

S5は長径0.25m、短径0.20m、厚さ0.08mの垂円礫である。

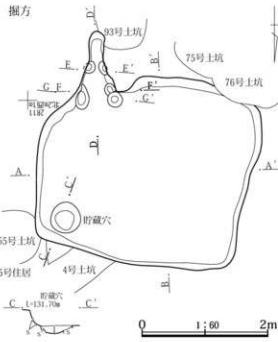
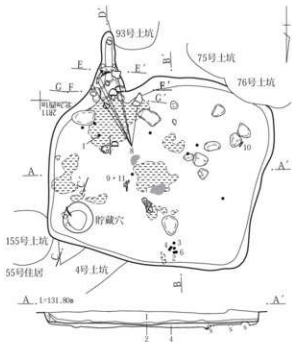
S6は長径0.18m、短径0.09m、厚さ0.05mの垂円礫である。

S7は長径0.26m、短径0.16m、厚さ0.15mの垂円礫である。これらの礫が埋め込まれた痕跡はカマド掘方で検出された小ピットS1・S2・S4・S5・S7にそれぞれが対応する。

燃焼部の中央には長径0.16m、短径0.09m、厚さ0.07mの安山岩の棒状円礫S9が0.09m埋め込まれている。礫の表面は被熱の痕跡を呈し、これは支脚である。燃焼部と煙道の接続部にはS1とS2の頂部に扁平礫が置かれており、これは長径0.27m、短径0.12m、厚さ0.08mの垂円礫であるS3である。また、焚口付近の埋土中には長径0.35m、短径0.19m、厚さ0.14mの安山岩の垂円礫であるS8が出土した。前者は燃焼部と煙道の接続部を構成する天井高架材、後者はカマドの崩落により移動した焚口の天井高架材と考えられる。

カマド埋土は灰黄褐色シルト質土が成層し、使用面や焚口からは炭化物の広がりが検出された。掘方埋土は炭化物を含む灰褐～灰黄褐色土を貼って構築している。煙道を含むカマドの長さは1.10m、煙道長0.63m、煙道幅0.21m、カマド幅0.56m、深さ0.21mである。

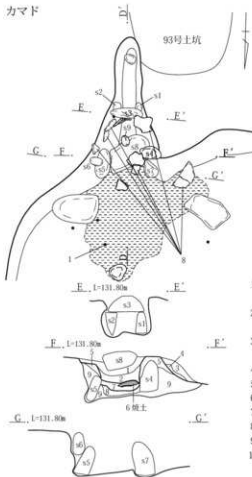
貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から直径0.48m、深さ0.16mの円形の土坑を検出した。土坑はカマドが南東隅に位置することから、位置や形状から貯蔵穴と考えられる。



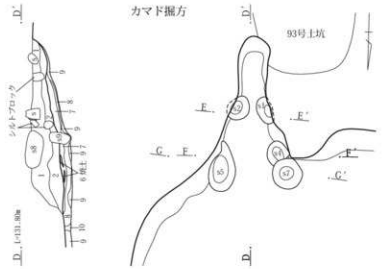
- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石(ϕ 2~30mm大)・小円礫(ϕ 2~20mm大)を含む。締りやや良。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石(ϕ 2~25mm大)・炭化物を含む。微量のにぶい黄褐色シルト質土を混入する。締りやや良。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2) 微量のにぶい黄褐色シルト質土を混入する。締りやや良。
- 4 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2) 微量の炭化粒子(ϕ 2~4mm大)・小礫(ϕ 2~5mm大)を含む。締りやや良。

- 貯蔵穴 C-C'
- 1 灰黄褐色土 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 2~10mm大)と少量の小礫(ϕ 5~50mm大)を含む。

カマド

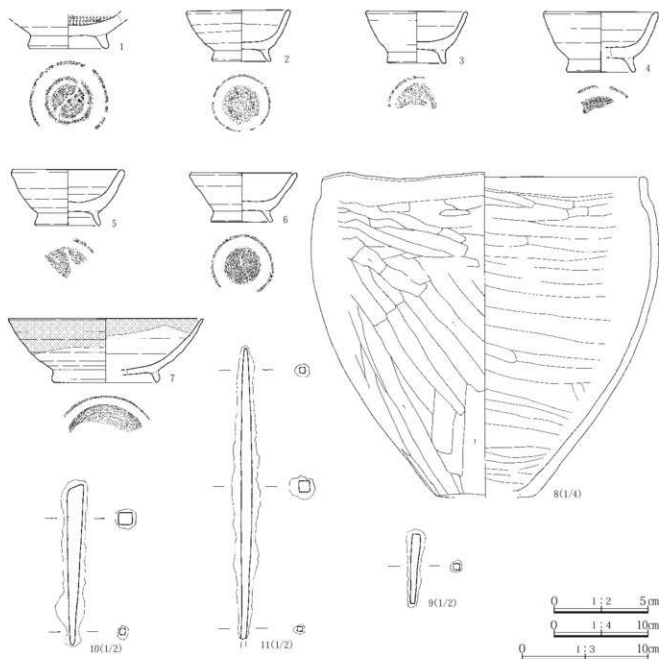


カマド掘方



- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 2~4mm大)・小礫(ϕ 5~20mm大)・焼土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の灰黄褐色シルト質土ブロックを混入する。微量の炭化粒子(ϕ 2~6mm大)・焼土粒子(ϕ 2~3mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 2~8mm)を含む。締りやや弱。
- 4 にぶい黄褐色土(10YR7/4) 灰黄色シルト質土ブロックを含む。締りやや弱。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 締りやや良。
- 6 焼土ブロック(5YR5/4)
- 7 褐灰色土(10YR4/1) 多量の灰屑土を含む層。締りやや弱。
- 8 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の焼土粒子・炭化粒子を含む。
- 9 灰黄褐色土(10YR4/2) 灰黄色土ブロックを含む。
- 10 灰黄色シルト質土(2.5Y6/2) シルト質土ブロックを混入する。

第361図 VII区56号住居



第362図 VIII区56号住居の出土遺物

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から鉄釘(9・10)、床面付近から須恵器の小型碗(4)、黒色土器の碗(1)、カマド使用面から土師器の甕(8)が出土した。出土遺物は10世紀後半から11世紀の年代幅を有する。

時代 10世紀前半に帰属する55号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀後半と想定される。

57号住居(第363～366図、PL.180・417・418)

グリッド 2 S 11

主軸方位 N 8° E

重複 60号住居、117号土坑を切る。76・78・101号土坑に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.95m、短辺は3.90m、深さは0.35m、面積は14.07㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土が水平に成層している。

床面 灰黄褐色砂質土を0.15mほど厚く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅹ・ⅩⅡ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。中央と南壁際に長径1.06～1.30mの歪んだ円～不定形の窪みを検出した。

カマド 東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部左右の壁にはS1・S2・S4～S7の垂円礫6点が据えられている。これらはカマド構築材である。

S1は長径0.25m、短径0.07m+、厚さ0.11mの垂円礫

である。

S2は長径0.16m、短径0.15m、厚さ0.10mの垂円礫である。

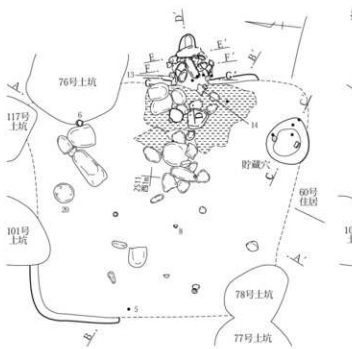
S4は直径0.15m、厚さ0.12mの垂円礫である。

S5は長径0.15m、短径0.14m、厚さ0.11mの垂円礫である。

S6は長径0.17m、短径0.10m、厚さ0.08mの垂円礫である。

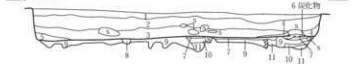
S7は長径0.22m、短径0.20m、厚さ0.07mの垂円礫である。

燃焼部と煙道の接続部付近にはS1とS2の頂部に扁平



A, I-131.90m

B, I-131.90m



- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ3～15mm大)・炭化粒子(φ1～2mm大)・焼上粒子(φ1mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石(φ2～30mm大)・炭化粒子(φ1～4mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ2～15mm大)・炭化粒子(φ2～4mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 少量の炭化物を含む。締りやや弱。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量のふい黄褐色シルト質土を含む。
- 6 黒褐色シルト質土(10YR3/2) 炭化物・炭化材集中層。
- 7 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 締り良。=床面の硬化面
- 8 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2)
- 9 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石(φ2～30mm大)・炭化粒子・焼上粒子(φ1～2mm大)を含む。
- 10 ふい黄褐色土(10YR5/4) 微量のふい黄褐色土を含む。
- 11 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石(φ2～30mm大)を含む。



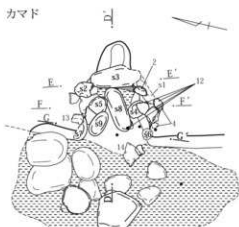
貯蔵穴 C-C'

- 1 黒褐色土(10YR2/2) 炭化物中心層。締りやや弱。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2)と砂質土

0 1:60 2m

第4章 第2面の遺構と出土遺物

カマド



カマド掘方



E, 1:131.80m

E'



1 灰黄褐色シルト質土(10TR4/2) 微量の種名ニッ岳白色軽石小粒(φ2~20mm大)を含む。

2 灰黄褐色シルト質土(10TR4/2) 微量の炭化粒子(φ2~4mm大)を含む。

3 黒褐色シルト質土(10YR3/2) 少量の炭化物粒子を含む。締りやや弱。

4 灰黄褐色シルト質土(10TR4/2) 微量の焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。

5 黒褐色土(10YR3/1) 炭・灰中心層。少量の焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。

6 灰黄褐色シルト質土(10TR4/2) 微量の焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。

7 黒褐色土(10YR3/1) 炭・灰中心層。締りやや弱。

8 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の種名ニッ岳白色軽石小粒(φ2~10mm大)を含む。締りやや弱。

9 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の種名ニッ岳白色軽石(φ5~30mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。

F, 1:131.80m

E'



10 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。

11 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の種名ニッ岳白色軽石(φ3~30mm大)を含む。締りやや弱。

12 灰黄褐色シルト質土(10TR4/2) 微量の焼土粒子(φ1~2mm大)・にぶい黄褐色土を含む。締りやや弱。FP泥流上。

13 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ1mm大)を含む。締りやや弱。

14 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の焼土粒子(φ1mm大)を含む。締りやや弱。

15 褐灰色シルト質土(10YR4/1)

16 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量のにぶい黄褐色シルト質土を含む。

17 灰黄褐色シルト質土(10TR4/2) 微量の焼土粒子・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。

18 灰黄褐色シルト質土(10TR4/2) 種名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~7mm大)・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。

19 褐灰色シルト質土(10YR4/1)

20 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量のにぶい黄褐色シルト質土を含む。

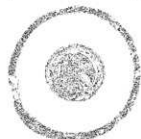
21 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量のふい黄褐色シルト質土を含む。

G, 1:131.80m

G'

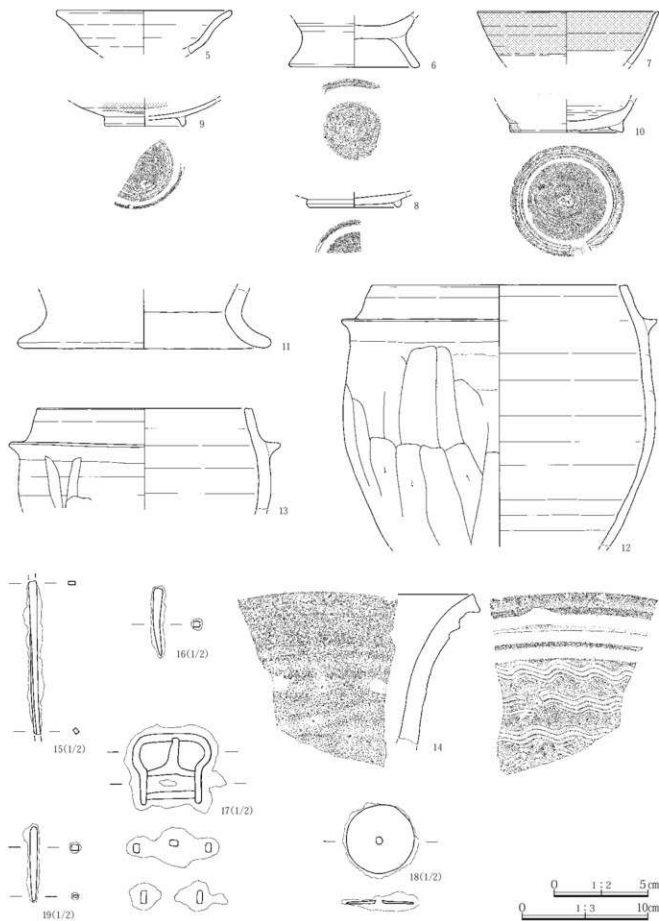


0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第364図 VII区57号住居と出土遺物



第365図 VII区57号住居の出土遺物(1)

礫が置かれており、これは長径0.40m、短径0.16m、厚さ0.11mの垂円礫であるS3である。また、焚口付近の埋土中にはS4とS5の間から長径0.38m、短径0.15m、厚さ0.08mの棒状垂円礫であるS8が出土した。前者は燃焼部と煙道の接続部を構成する天井高架材、後者はカマドの崩落により移動した焚口の天井高架材と考えられる。

カマド埋土は炭化物を含む灰黄褐～黒褐色シルト質土が成層し、焚口付近からは炭化物の広がりが見出された。掘方埋土は灰黄褐色土や灰黄褐色シルト質土を貼って構築している。カマドの長さは0.79m、幅0.51m、深さ0.31mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅寄りの南壁際から長径0.74m、短径0.67m、深さ0.09mの浅い円形の土坑を検出した。底から0.09m上から灰軸陶器の壺(10)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は見出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(5)、床面付近から灰軸陶器の椀(8)、カマド使用面から須恵器の甕(14)、使用面付近から須恵器の羽釜(12)、埋土から鉄製鉋(17)、紡輪(18)が出土した。出土遺物は9世紀後半から10世紀後半の年代幅を有する。

時代 11世紀に帰属する60号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀後半と想定される。

59号住居(第367図、PL.181・418)

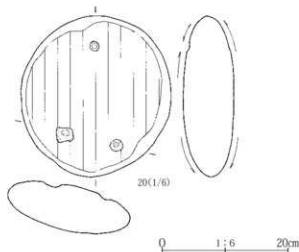
グリッド 2 T 9

主軸方位 N84°W

重複 72・85・112・116号土坑に切られる。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.15m、短辺は3.63m、深さは0.41m、面積は11.80㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む砂質土からなり、下位より灰褐色シルト質土、褐灰色シルト質土、暗灰黄色砂質土、褐灰色砂質土の順で成層している。最下位の灰褐色土は竪穴の縁を傾斜して埋め、上位の褐灰～暗灰黄色土は、緩やかに中央に向かって傾きながら竪穴を埋めている。



第366図 VII区57号住居の出土遺物(2)

床面 灰黄褐色シルト質土を0.06mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XI・XII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。北壁際から幅1.33mの溝状の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央南東隅寄りに位置すると想定されるが、カマドの大部分は112号土坑により失われている。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築していると想定され、南壁際から炭化物の広がりを見出した。カマドの長さは0.55m、幅0.75mである。貯蔵穴は見出されなかった。

柱穴 柱穴は見出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から輸入陶磁器である白磁椀の破片(5)が出土している。また、埋土から土師器の杯(1)、灰軸陶器の椀(4)、皿(2)、段皿(3)、須恵器の羽釜(6)、鉄釘(7・8)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

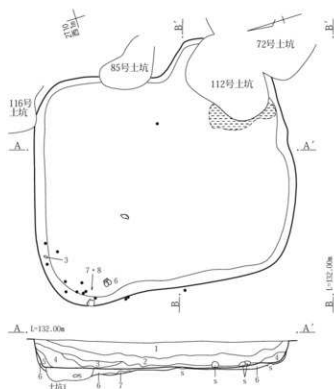
60号住居(第368～370図、PL.182・418)

グリッド 2 R 10

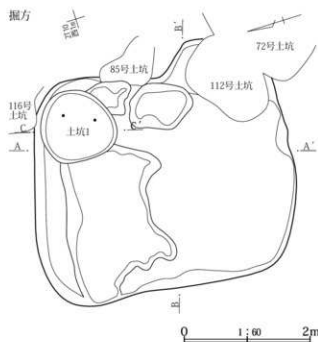
主軸方位 N70°W

重複 57・96・97号住居に切られる。123・133～135・144～147・156・158・171号土坑を切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴住居で、北西隅を57号住居に、南西部は97号住居により失われている。長辺は4.41m、短

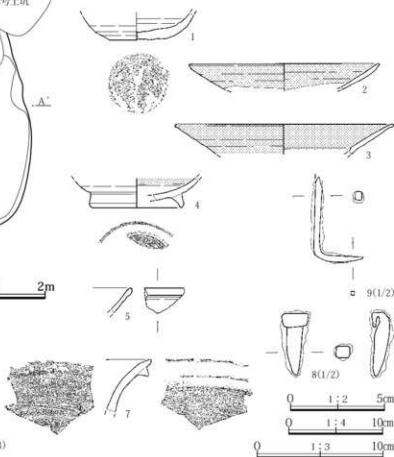
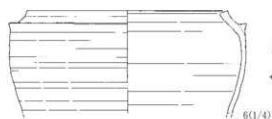


- 1 褐灰色砂質土 少量の浅間B軽石混。微量の椀名二ツ房白色軽石小粒(φ2~20mm大)・小円礫(φ3~10mm大)を含む。埴りややぬ。
- 2 暗灰黄色砂質土 少量の浅間B軽石混。微量の円礫(φ2.5/4/2) 5~170mm大)を含む。埴りややぬ。
- 3 褐灰色シルト質土 少量の浅間B軽石混。微量の小円礫(φ5~20mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色シルト質土 微量の椀名二ツ房白色軽石小粒(φ2~5mm大)・炭化粒子(φ2~3mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色シルト質土 におい黄褐色シルト質土ブロックを含む。
- 6 灰黄褐色シルト質土 微量の椀名二ツ房白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 7 灰黄褐色シルト質土 微量の椀名二ツ房白色軽石小粒(φ2~10mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。

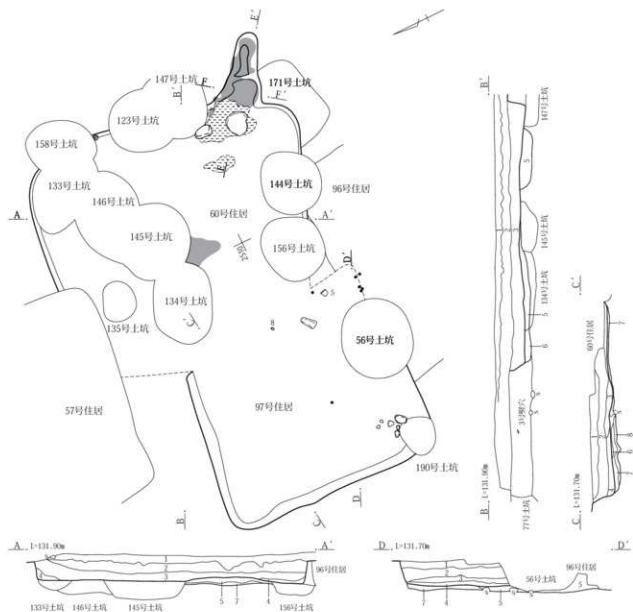


土坑1 C-C'

- 1 灰黄褐色シルト質土 微量の椀名二ツ房白色軽石(φ2~30mm大)・炭化粒子(φ2~3mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土 微量のにおい黄褐色土を含む。



第367図 VII区59号住居と出土遺物



60号住居 A-A'・B-B'

- 1 褐灰色シルト質土(10YR4/1) 多量の浅間B軽石を含む。サラサラしている。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石(φ4~40mm)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 3 黒褐色シルト質土(10YR3/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石(φ1~30mm)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 4 黒褐色シルト質土(10YR3/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ2~15mm)を含む。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 椋名ニツ岳白色軽石大粒(φ10~50mm)・炭化粒子(φ1~2mm大)・円礫(φ10~30mm)を含む。締り良。
- 6 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 椋名ニツ岳白色軽石(φ20~30mm)・炭化粒子(φ10~30mm)を含む。
- 7 にぶい黄褐色シルト質土(10YR7/2) 微量の炭化粒子・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。締り良。

97号住居 C-C'・D-D'

- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ3~10mm)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 1層上よりやや黒味あり。微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)・焼土粒子(φ1mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~5mm大)・にぶい黄褐色シルト質土(印2次堆積土)を含む。
- 4 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・明黄褐色シルト質土を含む。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)・小円礫(φ20~50mm)を含む。締りやや良。
- 6 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 7 灰黄褐色土(10YR5/2) 椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。
- 8 褐灰色土(10YR4/1) 灰中層。微量の焼土粒子(φ1~2mm大)・炭化粒子(φ1~4mm大)を含む。締りやや弱。



第368地区 Ⅵ区60・97号住居(1)

辺は4.21m、深さは0.31m、検出された最大の面積は15.76㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含むシルト質土からなり、下位より黒褐色シルト質土、灰黄褐色シルト質土、褐灰色シルト質土の順で水平に成層している。

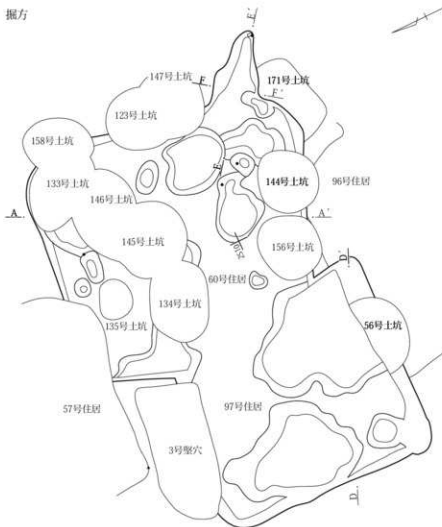
床面 灰黄褐色シルト質土を0.13mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅻ・ⅩⅢ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。カマド周辺から不定形の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底から焼土帯を、焚口付近では炭化物の広がりを検出した。カマドの長さは1.54m、幅1.78m、深さ0.26mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たな

掘方



第369図 VII区60・97号住居(2)

い構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から須恵器の杯(1)、灰軸陶器の椀(2)、掘方から灰軸陶器の段皿(3)が出土した。

時代 10世紀に帰属する57・96・97号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代11世紀と想定される。

97号住居(第368～370図、PL.214・418)

グリッド 2 S 10

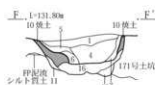
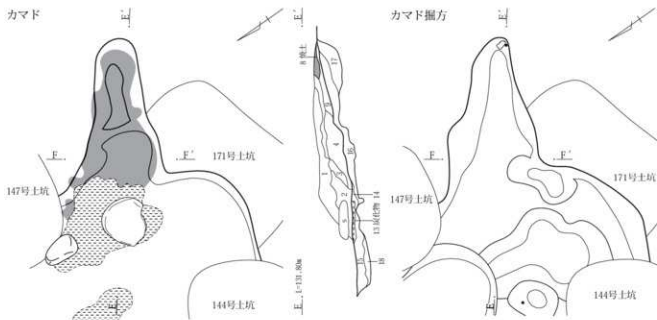
主軸方位 N 2° W

重複 56・134・190号土坑に切られる。60・96号住居を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.55m、短辺は3.21m、深さは0.40m、面積は8.97㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含むシルト質土からなる。

第4章 第2面の遺構と出土遺物



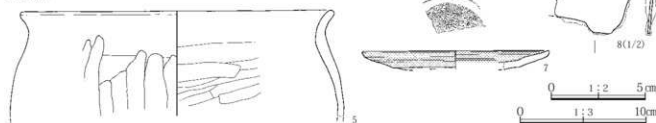
- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ2~5mm大)、炭化粒子・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや良。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや良。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 少量の焼土粒子(φ2~5mm大)を含む。締りやや良。
- 4 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ1~3mm大)を含む。締りやや良。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の焼土粒子(φ1~5mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。締りやや良。
- 6 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2) 微量の微細な焼土粒子・炭化粒子を含む。締りやや良。
- 7 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2) 微量の焼土粒子(φ1~4mm大)を含む。締りやや良。
- 8 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 焼土中心層。締りやや良。
- 9 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ2~4mm大)・焼土粒子(φ2~6mm大)を含む。
- 10 明赤褐色シルト質土(5YR5/6) 焼土中心層。多量の焼土を含む。
- 11 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/3) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 12 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ2~10mm大)、炭化粒子・焼土粒子(φ1mm大)を含む。
- 13 黒褐色土(10YR3/1) 炭土中心層。締りやや良。
- 14 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1~4mm大)・焼土粒子(φ1~3mm大)を含む。締りやや良。
- 15 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。締りやや良。
- 16 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 17 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ2~5mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 18 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ2~20mm大)を含む。



60号住居



97号住居



第370図 VII区60号住居と60・97号住居の出土遺物

床面 灰黄褐色シルト質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。南東隅と西壁際から中央で不定形の浅い窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

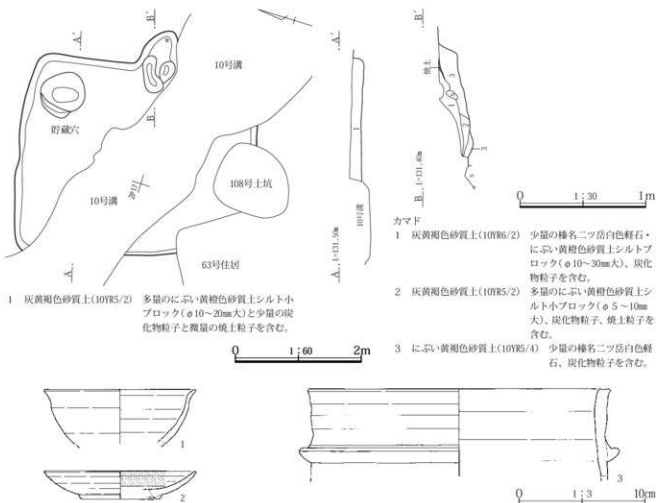
遺物 床面から土師器の甕(5)、埋土から灰陶器の皿(6)、段皿(7)が出土した。

時代 11世紀に帰属する60号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀後半と想定される。

62号住居(第371図、PL.183)

グリッド 2 O 17

主軸方位 N77° E



第371図 VII区62号住居と出土遺物

重複 63号住居、10号溝、108号土坑に切られる。

形状と規模 北西~南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で掘方のみを検出した。竪穴は中央を北西~南東方向に10号溝で、南西隅は63号住居により失われている。長辺は3.75m、短辺3.09m、深さは0.21m、検出された最大の面積は10.34㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。床面は大部分が失われている。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

カマド 東壁の中央に位置するものと想定される。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。カマドは掘方のみを検出した。カマドの掘方埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドの長さは0.75m、幅0.75m、深さ0.26mである。

貯蔵穴 北東隅の北壁際から直径0.72m、深さ0.19mの歪んだ円形の土坑を検出した。土坑は位置と形状から貯

蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から灰陶器の椀(2)、須臾器の羽釜(3)、カマド掘方から須臾器の椀(1)が出土した。

時代 平安時代11世紀前半。

63号住居(第372~374図, PL.183・418)

グリッド 2 P 16

主軸方位 N67°E

重複 108号土坑に切られる。62・64号住居を切る。発掘調査時に切合い関係にある63・64・108号住居として調査したが、資料整理で63・64号住居に統合した。

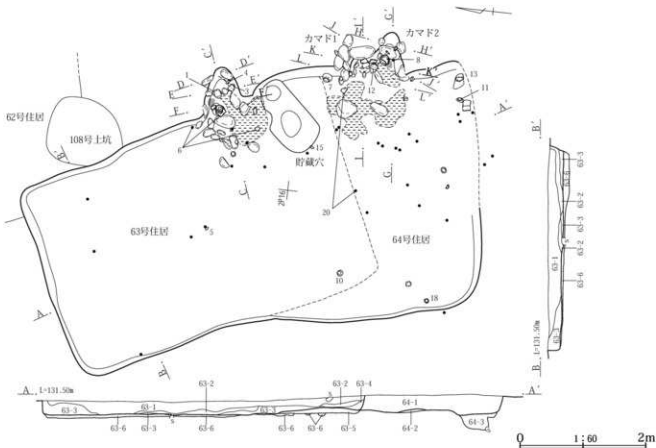
形状と規模 北西~南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。掘方から推定した長辺は5.20m、短辺は3.27m、深さは0.26m、面積は17.00㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.05mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。東壁際に長辺2.25m、短辺0.95m、深さ0.08mの歪んだ方形の浅い窪みを検出した。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、奥壁は約45°の勾配で立ち上がる。燃



63-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)

63-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)

63-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)

63-4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)

63-5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)

63-6 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)

64-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)

64-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)

64-3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)

少量の種名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)と多量の炭化物・材を含む。

多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。

少量の種名ニツ岳白色軽石・褐灰色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

少量の種名ニツ岳白色軽石と厚さ10mm程のラミナ状のにぶい黄褐色砂質土シルトを含む。=貼り床状

少量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。

少量の種名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)、炭化物粒子を含む。

少量の種名ニツ岳白色軽石と厚さ10mm程のラミナ状のにぶい黄褐色砂質土シルトを含む。=貼り床状

少量の種名ニツ岳白色軽石とにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。

第372図 VII区63・64号住居(1)

焼部左右の壁にはS1～S5の安山岩の垂円礫5点が据えられている。焚口を構成するS4とS5は「ハ」の字形に内側に傾いて据えられ、S4は28°、S5は32°内斜している。これらはカマド構築材である。

S1は長径0.21m、短径0.20m、厚さ0.10mの垂円礫である。

S2は長径0.27m、短径0.20m、厚さ0.17mの垂円礫である。

S3は長径0.27m、短径0.11m、厚さ0.07mの垂円礫で、表面の被熱痕跡が著しく、熱による表面の剥離が認められる。

S4は長径0.35m、短径0.27m、厚さ0.12mの垂円礫である。

S5は長径0.37m、短径0.20m、厚さ0.11mの垂円礫である。これらの礫が埋め込まれた痕跡はカマド掘方で検出された小ピットS3～S5にそれぞれが対応する。

燃焼部底の中央には長径0.19m、短径0.10m、厚さ0.09mの円礫が埋め込まれている。これは支脚と考えられる。また、焚口付近の埋土中には長径0.33m、短径0.17m、厚さ0.14mの扁平垂円礫であるS6や長径0.24m、短径0.22m、厚さ0.10mの垂円礫であるS7が出土した。これらはカマドの崩落により移動した天井高架材と考えられる。

カマド埋土は炭化物を含む灰黄褐色砂質土が成層し、燃焼部や焚口付近からは炭化物の広がりが出された。掘方埋土にはふい黄褐色砂質土を貼って構築している。カマドの長さは1.25m、幅1.00m、深さ0.17mである。

貯蔵穴 掘方の調査で東南隅の壁際から長径1.23m、深さ0.65mの歪んだ楕円形の土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。一辺が5m弱におよぶ竪穴の規模から考えて、主柱穴を有しない構造の建物とは考えにくい。これは主柱穴底がⅫ・Ⅻ層の黄褐色砂礫層で止められたため、柱穴の輪郭が不明瞭である可能性が想定される。

遺物 床面から灰軸陶器の皿(5)、床面付近から黒色土器の椀(2)、カマド使用面から土師器の甕(6)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

64号住居(第372～375図、PL.184・418)

グリッド 2 O15

主軸方位 N76°E

重複 63号住居に切られる。発掘調査時に切合い関係にある63・64・108号住居として調査したが、資料整理で63・64号住居に統合した。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。掘方から推定した長辺は4.08m、短辺は3.46m、深さは0.26m、面積は14.11㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.05mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅻ・Ⅻ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。東壁際の南東隅寄りに長径0.95m、短径0.56m、深さ0.25mの楕円形の土坑1、南西隅に長径1.09m、短径0.73m、深さ0.27mの楕円形の土坑2を検出した。

カマド 東壁のほぼ中央に2基のカマドが位置する。床面での炭化物の分布や燃焼部底の状況から北側に位置する住居廃絶時のカマドをカマド1、南側の古いカマドをカマド2とする。カマド1の燃焼部は東壁の手前に灰黄褐色砂質シルトを貼って壁の内側に燃焼部を構築している。カマド2の燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。

カマド1の燃焼部底は水平で、奥壁は急な勾配で立ち上がる。燃焼部左右の壁にはS4・S6・S8・S9・S11・S12の垂円礫6点が据えられている。焚口を構成するS4とS9は「ハ」の字形の様に内側に傾いて据えられ、S9は27°内斜している。これらはカマド構築材である。

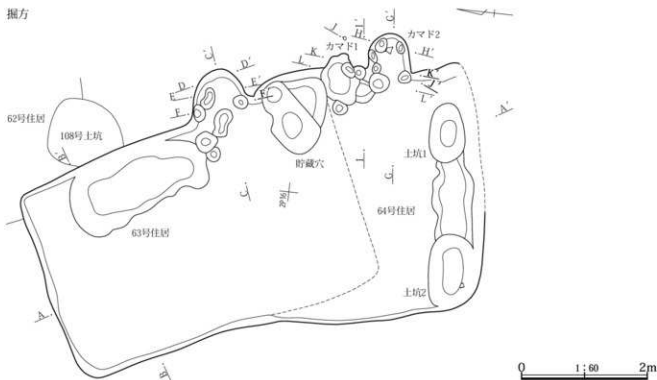
S4は長径0.23m、短径0.12m、厚さ0.09mの安山岩の垂円礫である。

S6は長径0.18m、短径0.13m、厚さ0.12mの安山岩の垂円礫である。

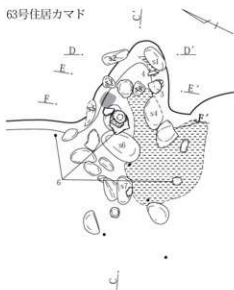
S8は長径0.31m、短径0.22m+、厚さ0.14mの安山岩の垂円礫で打割された面を頂部にして、埋められている。

S9は長径0.39m、短径0.22m、厚さ0.14mの安山岩の垂円礫で燃焼部に接した表面は被熱の痕跡が認められる。

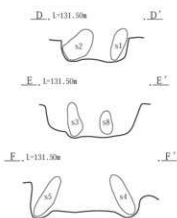
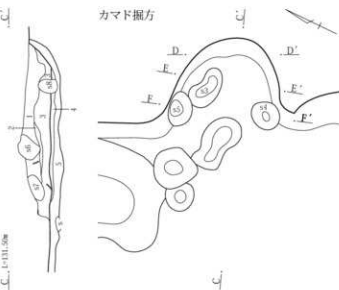
掘方



63号住居カマド



カマド掘方

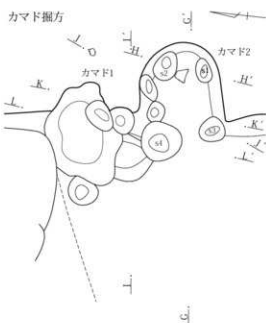
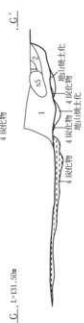
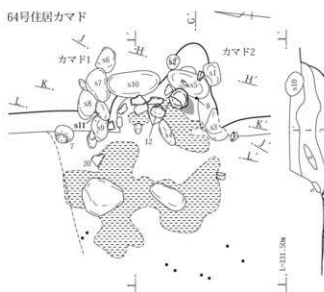


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量のふい黄橙～淡黄色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm大)・椀名ニツ岳白色軽石と微量の炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の褐灰色砂質土シルト土をラミナ状に含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石・焼土粒子・炭化物と多量のふい黄橙～淡黄色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm大)を含む。
- 4 炭化物・灰に少量の焼土粒子を含む。＝使用面
- 5 ぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 多量の淡黄色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)と椀名ニツ岳白色軽石を含む。

0 1:30 1m

第373図 VII区63・64号住居(2)

64号住居カマド



H, L=131.50m

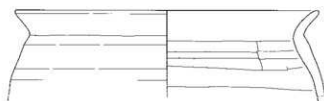
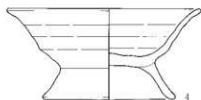
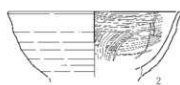
L, L=131.50m

K, L=131.50m

L, L=131.50m

カマド1・2

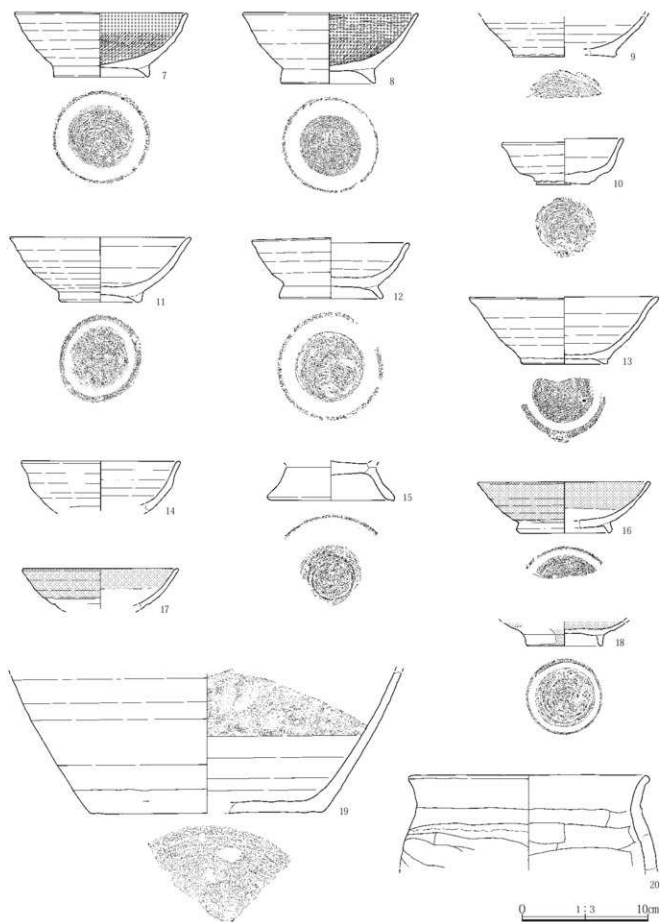
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)、炭化物を含む。
- 1' 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 1層上より軽石混入量多く、酸化し赤褐色化する。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 1層上+少量の焼上小ブロック(φ10~15mm大)を含む。
- 3 褐灰色砂質土(10YR5/1) 微量の種名ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)と少量の炭化物粒子を含む。
- 4 炭化物別 少量の灰・焼上粒子とにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。=使用面



0 1:3 10cm

第374図 VII区64号住居と63号住居の出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第375図 VII区64号住居の出土遺物

S11は長径0.39m、厚さ0.09mの垂円礫である。

S12は長径0.29m、厚さ0.08mの垂円礫である。

燃焼部奥壁のS7とS12の上には長径0.44m、短径0.20m、厚さ0.13mの扁平垂円礫であるS10が置かれている。これはカマド燃焼部と煙道の接続部の天井高架材と考えられる。

カマド2の燃焼部底は水平で、緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部左右の壁にはS1～S3の垂円礫3点が据えられている。焚口を構成するS3は「ハ」の字形の右片側の様に内側に傾いて据えられ、16°内斜している。これらはカマド構築材である。

S1は長径0.23m、短径0.18m、厚さ0.14mの垂円礫である。

S2は長径0.28m、短径0.13m、厚さ0.12mの垂円礫で、0.11m埋め込まれている。

S3は長径0.26m、短径0.25m、厚さ0.11mの垂円礫で、打割された面を頂部にして、埋められている。これらの礫が埋め込まれた痕跡はカマド掘方で検出された小ピットS1～S3にそれぞれが対応する。

燃焼部奥壁のS1・S2付近の埋土中には長径0.36m、短径0.22m、厚さ0.11mの安山岩の扁平垂円礫であるS5が出土した。これはカマドの崩落により移動した天井高

架材と考えられる。

カマド1・2の埋土は炭化物を含む灰黄褐色砂質土が成層し、カマド1の燃焼部や焚口付近からは炭化物の広がりが出された。カマドの長さは0.82m、幅0.85m、深さ0.22mである。カマド2の長さは1.33m、幅0.73m、深さ0.19mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南壁際から検出した土坑1・2は、位置や形状から貯蔵穴の可能性はある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から多くの遺物が出土した。床面から黒色土器の椀(7)、須恵器の椀(11)、杯(9)、甕(19)、カマド使用面から須恵器の椀(12)が出土した。

時代 平安時代10世紀第1四半期。

65号住居(第376・377図、PL.185・418)

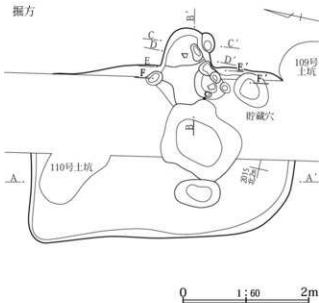
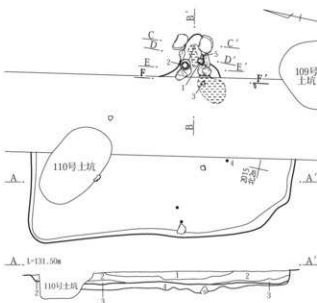
グリッド 2 O15

主軸方位 N79°E

重複 110号土坑に切られる。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.23m、短辺は2.67m、深さは0.24m、面積は9.52㎡である。

掘方

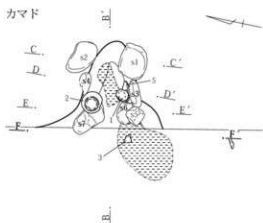


- 1 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量の榛名二ツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の榛名二ツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)と微量の炭化物粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の榛名二ツ岳火山灰泥流土(周辺地山の一部に堆積)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm大)と少量の榛名二ツ岳白色軽石、炭化物粒子を含む。

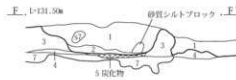
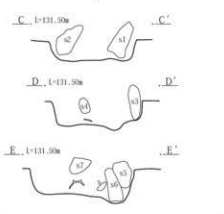
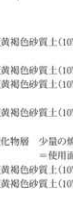
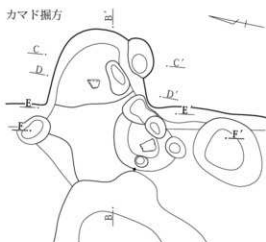
第376図 VII区65号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物

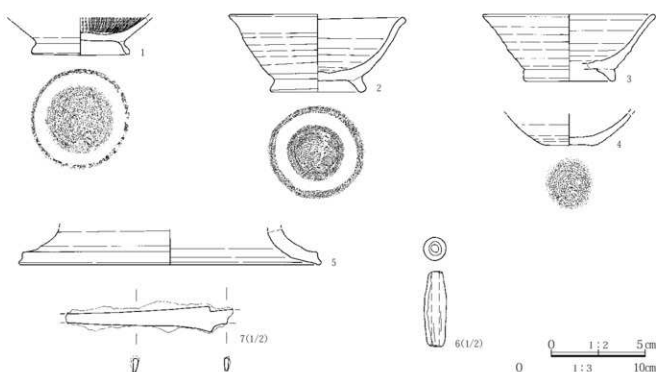
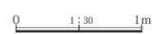
カマド



カマド掘方



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量の極小二ツ岳白色軽石小粒・にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量の炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量のにふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)と微量の炭化物を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の炭化物と少量のにふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)を含む。
- 5 炭化物層 少量の焼土粒子・にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)を含む。
=使用面
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量の灰と少量の炭化物・焼土粒子を含む。
- 7 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量のにふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。



第377図 VII区65号住居と出土遺物

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が縁から傾きながら成層して竪穴を埋めている。竪穴の縁に堆積した、下底を埋める堆積物は、白色軽石を多く含む火山灰質砂からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。中央から長辺1.23m、短辺1.00m、深さ0.12mの歪んだ方形の浅い窪みを検出した。

カマド 東壁の中央やや南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに傾斜し、奥壁は約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部左右の壁にはS1～S7の垂円礫7点が据えられている。焚口を構成するS6とS7は「ハ」の字形に内側に傾いて据えられ、S6は15°内斜している。これらはカマド構築材である。

S1は長径0.27m、短径0.25m、厚さ0.12mの垂円礫で、頂部は被熱の痕跡を呈する。

S2は長径0.30m、短径0.29m、厚さ0.12mの垂円礫である。

S3は長径0.28m、短径0.21m、厚さ0.09mの垂円礫である。

S4は長径0.20m、短径0.13m、厚さ0.07mの垂円礫である。

S5は長径0.21m、短径0.14m、厚さ0.14mの垂角礫である。

S6は長径0.27m、短径0.16m、厚さ0.11mの垂円礫である。

S7は長径0.33m、短径0.14m、厚さ0.13mの垂円礫で、打割された面を頂部に据えられており、被熱による剥離痕が認められる。

カマド埋土は灰黄褐色砂質土が成層し、カマドの袖はにぶい黄褐色砂質シルトを貼って構築している。燃焼部や焚口付近からは炭化物の広がりが検出された。掘方埋土はにぶい黄褐色砂質土を貼って構築している。カマドの長さは1.17m、幅0.68m、深さ0.18mである。

貯蔵穴 掘方の調査で東南隅の東壁際から長径0.59m、短径0.47m、深さ0.12mの歪んだ浅い円形の土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない

構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から刀子(7)、カマド使用面から須恵器の椀(2・3)、使用面付近から黒色土器の椀(1)、埋土から土鍾(6)が出土した。

時代 平安時代10世紀第1四半期。

66号住居(第378・379図、PL.186・419)

グリッド 2 N15

主軸方位 N70°W

重複 10号溝、207号土坑に切られる。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、北部は10号溝により失われている。長辺は4.36m、短辺3.38m、深さは0.12m、検出された最大の面積は16.82㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む黒褐～灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色土を薄く貼って平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。中央から直径0.54m、深さ0.04mの円形の浅い窪みを検出した。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドは一部に使用面を残して掘方を検出した。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、緩やかに立ち上がる。燃焼部底や焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマド掘方埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドの長さは0.53m、幅0.60m、深さ0.03mである。

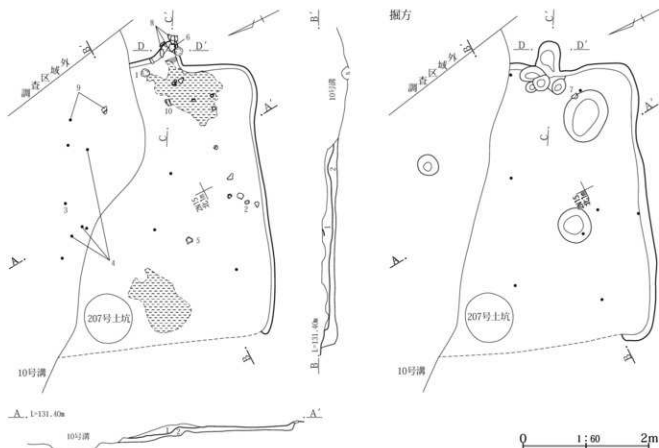
貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.84m、短径0.68m、深さ0.14mの歪んだ円形の窪みを検出した。これは位置と形状から貯蔵穴の可能性がある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

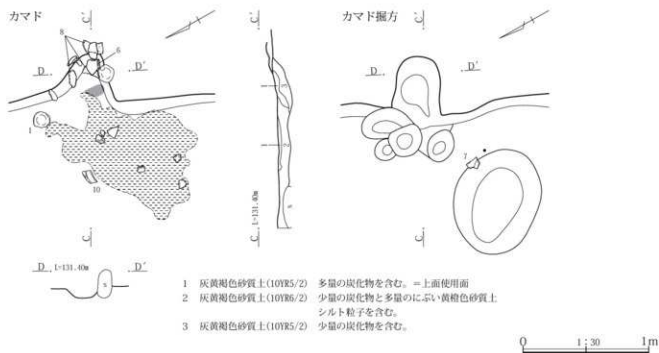
遺物 床面から須恵器の椀(1・2)、灰釉陶器の椀(4)、羽釜(9・10)、カマド使用面から須恵器の羽釜(8)、土師器の甕(6)が出土した。出土遺物は10世紀内に年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀前半。

第4章 第2面の遺構と出土遺物

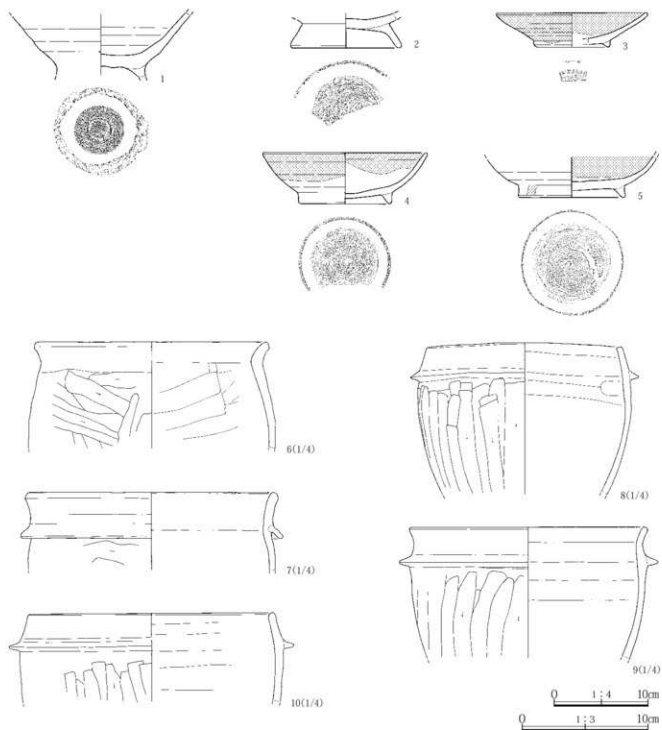


- 1 黒褐色砂質土(10YR3/2) 少量の棒名ニッ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量の棒名ニッ岳白色軽石・炭化物と多量の浅黄褐色砂質(FA肥液起源地(山堆積土)小ブロックを含む。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の炭化物を含む。= 上面使用面
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量の炭化物と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の炭化物を含む。

第378図 VII区66号住居



第379図 VII区66号住居の出土遺物

67号住居(第380・381図、PL.187・188・418)

グリッド 2 N14

主軸方位 N60° E

重複 68号住居に近接し同時存在はない。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.10m、短辺3.02m、深さは0.13m、面積は9.79㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色土を0.05mほど薄く貼って平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで掘方を構築している。北東隅の壁際から長径0.95～1.05m、短径0.51～0.62m、深さ0.04～0.09mの歪んだ楕円形の浅い

窪みを検出した。

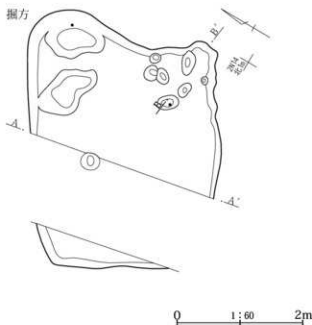
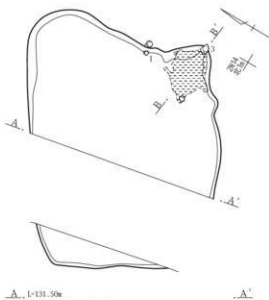
カマド 南東隅に位置すると想定される。カマドは一部に使用面を残して掘方を検出した。カマドの燃焼部は壁から手前に構築しているものと想定される。南東隅の床面では長径0.75m、短径0.55mの範囲に炭化物の広がりを出した。カマド掘方埋土は灰黄褐色砂質土からなる。
貯蔵穴 掘方の調査で北東隅の東壁際から浅い窪みを検

出した。これは位置と形状から貯蔵穴の可能性はある。

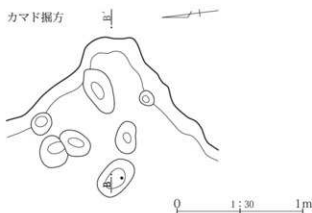
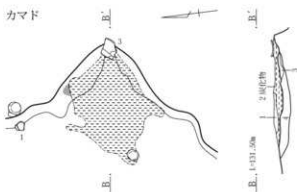
柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマド使用面から土師器の羽釜(3)、埋土から須恵器の杯(1)、椀(2)が出土した。

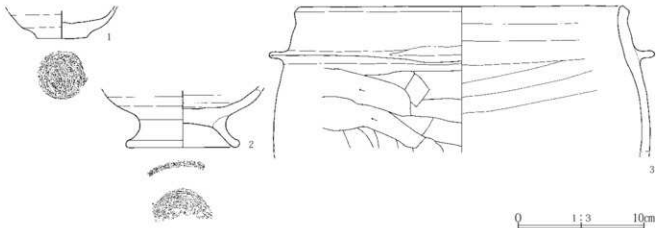
時代 平安時代10世紀前半。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の榛名二ツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ10~50mm大)と微量の焼土粒子・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の榛名二ツ岳白色軽石・焼土粒子・炭化物と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)を含む。
- 2 炭化物層
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の炭化物を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量の榛名二ツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。



第381図 VII区67号住居の出土遺物

68号住居(第382・383図、PL.187・188・419)

グリッド 2 M14

主軸方位 N85° E

重複 なし。67号住居に近接し同時存在はない。

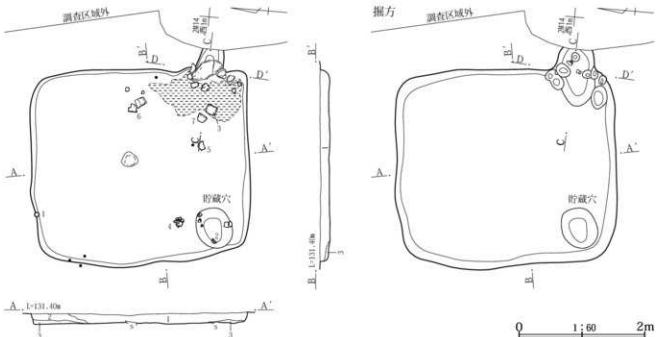
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.45m、短辺は3.14m、深さは0.21m、面積は9.48㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が緑から傾きながら成層して竪穴を埋めている。床面を覆う堆積

物は、泥流堆積物を起源とする白色軽石まじり火山灰質砂のブロックを多く含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を削り出して、平坦な床面を構築している。

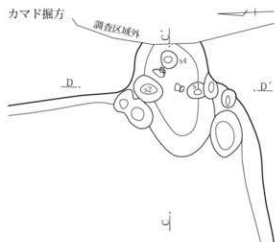
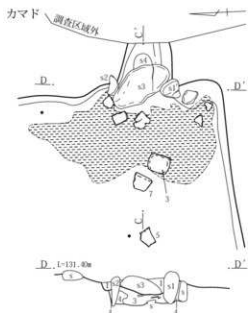
カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部左右の壁にはS1・S2の垂円礫2点が据えられている。S1は長径0.26m、短径0.15m、厚さ0.12mの閃緑岩の



- 1 灰黄褐色砂質土(10TR6/2) 多量の榛名二ツ岳白色軽石と少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10TR6/2) 少量の榛名二ツ岳白色軽石と多量の浅黄褐色砂質土シルト(FP泥流に伴う火山灰起源)ブロック(φ30~100mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10TR6/2) 少量の榛名二ツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

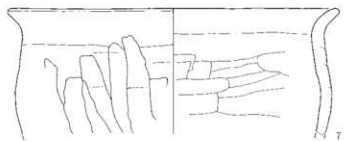
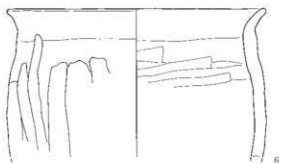
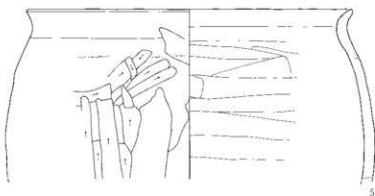
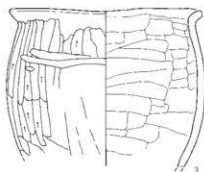
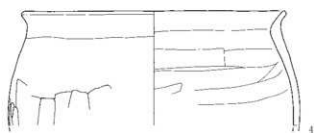
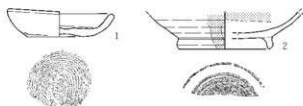
第382図 VII区68号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の極小ニッ層白色輝石・炭化物と微量の焼土粒子を含む。
- 2 炭化物層 少量の灰を含む。=最終使用面
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の焼土粒子と多量の炭化物を含む。
- 4 にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(10YR7/3) 天井部の崩落上。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第383図 VII区68号住居と出土遺物

垂円礫で複数の打割した面を頂部に据えられている。S2は長径0.23m、短径0.15m、厚さ0.07mの安山岩の垂円礫で、大きな礫の表面を剥離し、打割した面を頂部に据えられている。燃烧部の中央には長径0.20m、幅0.10mの垂円礫が0.06m埋め込まれており、支脚と考えられる。焚口のS1とS2間の埋土中から長径0.33m、短径0.26m、厚さ0.12mの扁平円礫が出土した。これは焚口の天井高架材と考えられる。

カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。燃烧部や焚口付近からは厚さ0.05mにおよぶ炭化物の広がりが見出された。掘方埋土は炭化物を含む灰黄褐色砂質土を貼って構築している。カマドの長さは0.78m、幅0.63m、深さ0.12mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南西隅の壁際から長径0.65m、短径0.55m、深さ0.08mの浅い円形の土坑を検出した。土坑はカマドが南東隅に位置することから、貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から灰軸陶器の椀(2)、土師器の甕(4)、小型甕(3)、床面付近から須恵器の杯(1)、土師器の甕(5・

7)が出土した。出土遺物は10世紀内に年代幅を有する。
時代 平安時代10世紀後半。

70号住居(第384・385図, PL.189・419)

グリッド 2 N13

主軸方位 N75°E

重複 なし。72・91号住居に近接する。

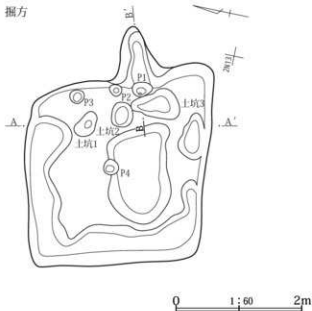
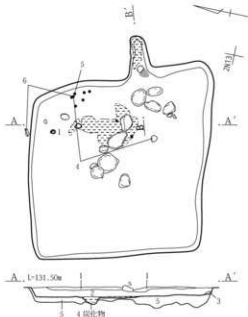
形状と規模 東西方向に長軸を有し、歪んだ隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は2.96m、短辺は2.88m、深さは0.21m、面積は7.20㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.14mほど厚く貼って平坦な床面を構築している。カマド前の左、中央寄りから炭化物の広がりを検出した。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで掘方を構築している。北～西及び南西隅寄りの南壁際から幅0.40～0.63m、深さ0.05～0.07mの浅い溝状の窪みが周回する。中央からは長辺1.52m、短辺0.93m、深さ0.15mの歪んだ隅丸方形の窪みを検出した。

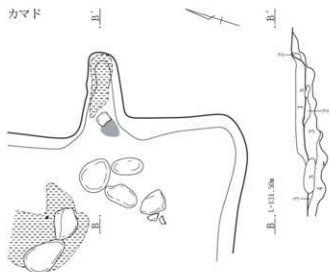
カマド 東壁の中央に位置する。カマドの燃烧部は東壁掘方



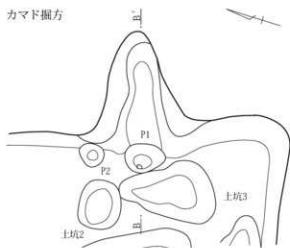
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の稀なニツ岳白色軽石と微量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の稀なニツ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)と微量の炭化物・焼上粒を含む。
- 3 ふい黄褐色砂質土(10YR6/4) 灰黄褐色土小ブロック(φ5～10mm大)を含む。
- 4 炭化物層 少量の焼上粒を含む。=灰落としピット
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10～30mm大)と少量の炭化物を含む。

第4章 第2面の遺構と出土遺物

カマド

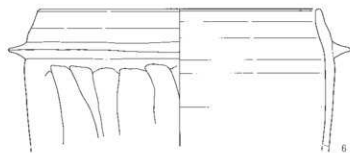
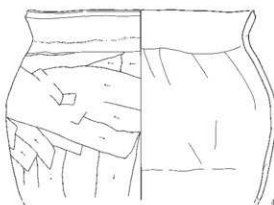
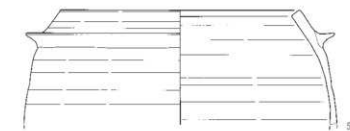
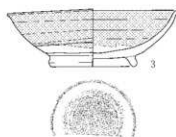
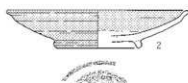
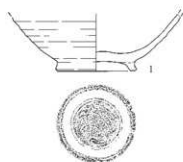


カマド掘方



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量のふい・黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と微量の焼土粒子・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の炭化物と少量の焼土粒子・灰を含む。=使用面
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量のふい・黄褐色～浅黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量のふい・黄褐色～浅黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と多量の炭化物を含む。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第385図 VII区70号住居と出土遺物

から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、奥壁は急な勾配で立ち上がる。燃焼部底からは焼土ブロックや炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドの長さは0.76m、幅0.66m、深さ0.12mである。カマド焚口からは掘方埋土中に土坑3を検出した。土坑3は歪んだ楕円形を呈し、長径0.75m、短径0.40m、深さ0.08mである。土坑の上部には長径0.22～0.28m、短径0.14～0.23mの垂円礫4点が埋められている。礫は扁平な面を頂部に揃え、床面の高さに並べて埋められている。これらの礫はカマドの構築材と考えられ、カマドの廃絶に伴って焚口に埋められたと考えられる。

貯蔵穴 貯蔵穴は検出されなかった。

土坑 掘方の調査で、掘方埋土を切って炭化物を多く含む灰黄褐色土で埋められた土坑を2基検出した。

土坑1は歪んだ楕円形を呈し、長径0.44m、短径0.27m、深さ0.19mである。

土坑2は楕円形を呈し、長径0.39m、短径0.34m、深さ0.11mである。

土坑1と東壁の間からは、埋土中に長径0.40m、短径0.35mほどの範囲から炭化物や土器片、長径0.20mほどの垂円礫6点が出土している。これらはカマドの廃棄後に新たに構築された新カマドの痕跡と考えられる。また、竪穴中央の床面からは長径0.14～0.35mの垂円～垂角礫7点が出土しており、これらも新カマドの構築材であった可能性が高い。

柱穴 掘方の調査で東壁際と中央にP1～P4の小ピットを検出した。これらは長径0.33m、短径0.24m、深さ0.07mのP1、直径0.18m、深さ0.03mのP2、直径0.21m、深さ0.10mのP3、直径0.24m、深さ0.15mのP4である。これらのピットはP1がカマドの焚口に位置することから、カマドの廃絶後に構築された可能性がある。

遺物 床面から灰釉陶器の椀(3)、土師器の甕(4)、須恵器の椀(1)、床面付近から羽釜(5)が出土した。

時代 平安時代9世紀第4四半期～10世紀第1四半期。

71号住居(第386～389図、PL.190・420)

グリッド 2 O14

主軸方位 N63°E

重複 91号住居に切られる。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居で、南東部は91号住居により失われている。長辺は3.76m、短辺は3.20m、深さは0.17m、面積は10.49㎡である。

埋土 ツツ岳の白色軽石と炭化物を多く含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.09mほど貼って平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで掘方を構築している。南東壁際には長径1.55m、幅0.95m、深さ0.10mの浅い不定形の窪みを検出した。また、北西隅の壁際から直径0.60m、深さ0.20mの円形の土坑1、北東隅の壁際から長径0.78m、短径0.70m、深さ0.19mの隅丸方形の土坑2を検出した。土坑2の底から0.14m上から須恵器の羽釜(8)が出土し、床面からの破片と接合した。このことから土坑2は床面に存在していたことが明らかである。

カマド 西壁の南西隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は西壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、奥壁は緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部左右の壁にはS1～S5の垂円～垂角礫5点が掘えられており、これらはカマド構築材である。

S1は長径0.16m、短径0.13m、厚さ0.09mの風化した石英斑岩の垂角礫である。

S2は長径0.21m、短径0.13m、厚さ0.10mの安山岩の角礫である。

S3は直径0.10mの安山岩の垂円礫である。

S4は長径0.28m、短径0.18m、厚さ0.11mの安山岩の垂円礫で0.15mほど埋め込まれている。S4は焚口の右側に位置し、礫は燃焼部側に22°内斜する。

S5は長径0.24m、短径0.21m、厚さ0.19mの閃緑岩の垂角礫で、表面は熱による剥離が著しい。

燃焼部の中央には長径0.12m、幅0.10mの安山岩の垂円礫が0.08m埋め込まれており、支脚と考えられる。これらの礫が埋め込まれた痕跡はカマド掘方で検出された小ピットS1・S2・S4～S6にそれぞれが対応する。燃焼部底や焚口付近からは炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドの長さは0.97m、幅0.60m、深さ0.19mである。

貯蔵穴 掘方の調査でカマド左側の壁際から長径0.70m、

短径0.55m、深さ0.04mの浅い円形の土坑を検出した。底から0.06m上から須恵器の羽釜(6)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(1)、甕(9)、壺(5)、羽釜(8)、砥石(10)、床面付近から須恵器の杯(2・3)、壺(4)が出土した。

時代 10世紀前半に帰属する91号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀第3四半期と想定される。

91号住居(第386～389図、PL.209・419)

グリッド 2 O 13

主軸方位 N70°E

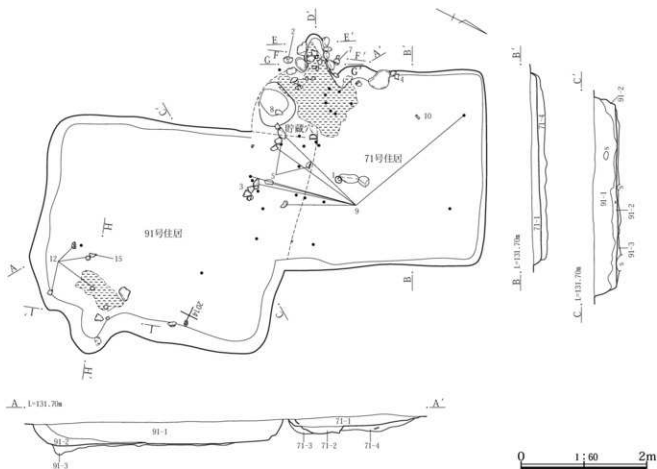
重複 71号住居を切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.01m、短辺は3.48m、深さは0.38m、面積は10.17㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含むにふい黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.05mほど貼って平坦な床面を構築している。

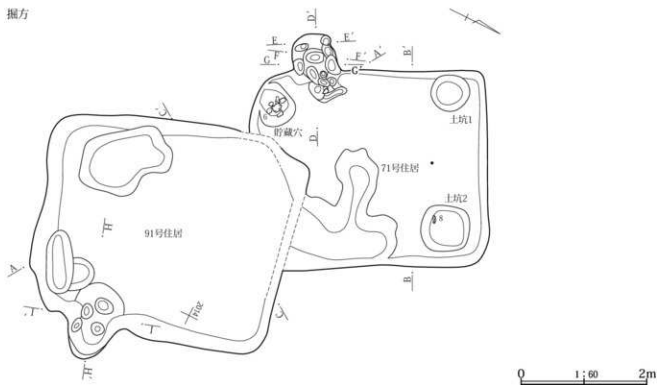
掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで掘方を構築



- 71-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石と多量の炭化物を含む。
- 71-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)・炭化物と少量の焼土粒子を含む。
=カマ下埋土
- 71-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒、炭化物粒子を含む。
- 71-4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石と多量のにふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。
- 91-1 にふい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量の椀名ニツ岳白色軽石・炭化物を含む。
- 91-2 にふい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の椀名ニツ岳白色軽石と多量のにふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm大)を含む。
- 91-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにふい黄褐色～淡黄色砂質土シルト大ブロック(φ5～50mm大)と少量の炭化物を含む。

第386図 VII区71・91号住居(1)

掘方



71号住居カマド



E., 1-131.70m



F., 1-131.70m



G., 1-131.70m



カマド掘方



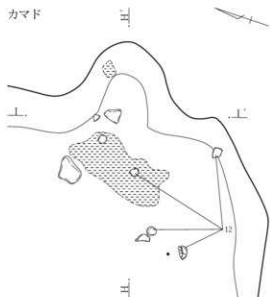
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ倍白色軽石と少量のふい
黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm
大)・炭化物と微量の焼土粒子を含む。
- 2 炭化物層 少量の焼土粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の炭化物を含む。
- 3' 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の炭化物を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の炭化物・ふい黄褐色砂質土シルト
小ブロック(φ 5~10mm大)と少量の焼土粒
子を含む。= 上面使用面

0 1:30 1m

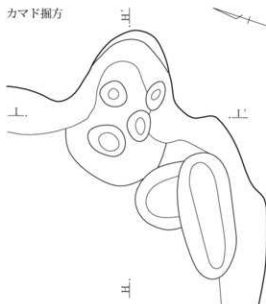
第387図 Ⅶ区71・91号住居(2)

第4章 第2面の遺構と出土遺物

カマド



カマド掘方



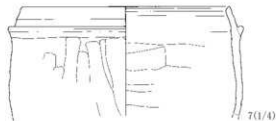
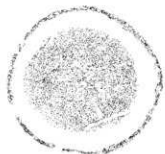
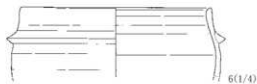
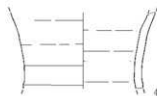
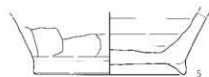
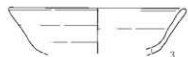
上. I-131.50m



上. I'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ品白色軽石・炭化物粒子・焼土粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の浅黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の浅黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5mm大)・炭化物・焼土粒子を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ品白色軽石・焼土粒子を含む。
- 5 炭化物層
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の炭化物を含む。

0 1:30 1m



0 1:4 10cm

0 1:3 10cm

第388図 VII区91号住居と71号住居の出土遺物

している。南東隅の南壁際には長径1.00m、幅0.42m、深さ0.15mの楕円形の窪みを検出した。また、北西隅の壁際から長辺1.53m、短辺1.03m、深さ0.18mの歪んだ方形の窪みを検出した。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、奥壁は急な勾配で立ち上がる。焚口付近からは炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は炭化

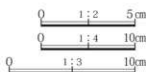
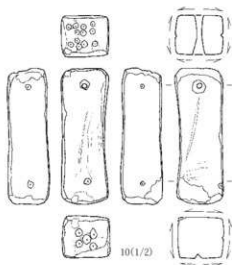
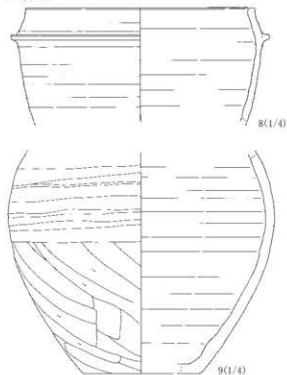
物や黄橙色砂質シルトのブロックを含む灰黄褐色砂質土が傾きながら成層している。カマドの長さは1.12m、幅0.73m、深さ0.31mである。

貯蔵穴 貯蔵穴は検出されなかった。

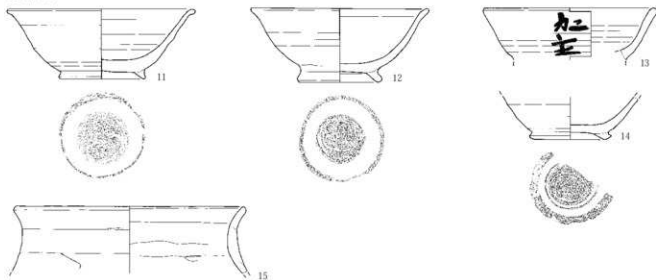
柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(15)、カマド使用面から須恵器の椀(12)、埋土から須恵器の椀(11・13・14)が出土した。

71号住居



91号住居



第389図 VII区71・91号住居の出土遺物

時代 10世紀後半に帰属する70号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀第1四半期と想定される。

72号住居(第390・391図, PL.191・420)

グリッド 2 N12

主軸方位 N81°E

重複 なし。70・119号住居に近接する。

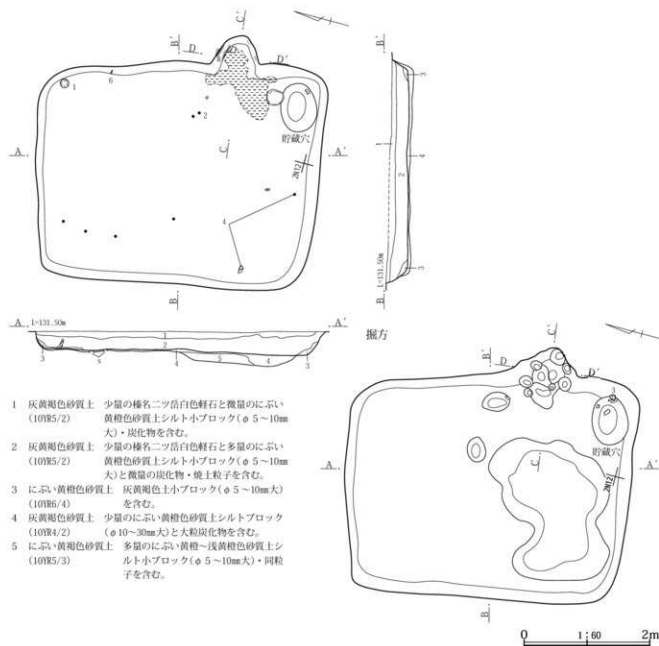
形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.63m、短辺は3.64m、深さは0.41m、面積は13.48㎡である。

土 ニツ島の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が水平に成層する。

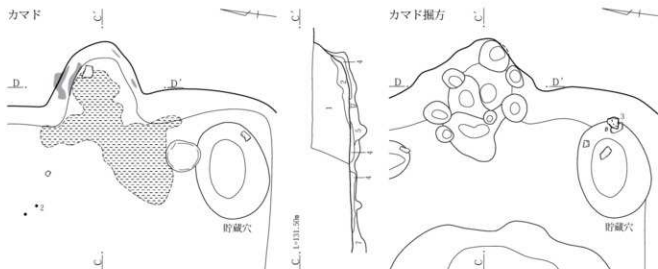
床面 灰黄褐色砂質土を0.05mほど薄く貼って平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫～砂層を掘り込んで掘方を構築している。南壁際から長径2.18m、短径1.56m、深さ0.20mの不定形の窪みを検出した。

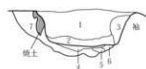
カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、奥壁は急な勾配で立ち上がる。カマドの袖はにぶい黄褐色砂質土を貼って構築している。燃焼



第390図 VII区72号住居

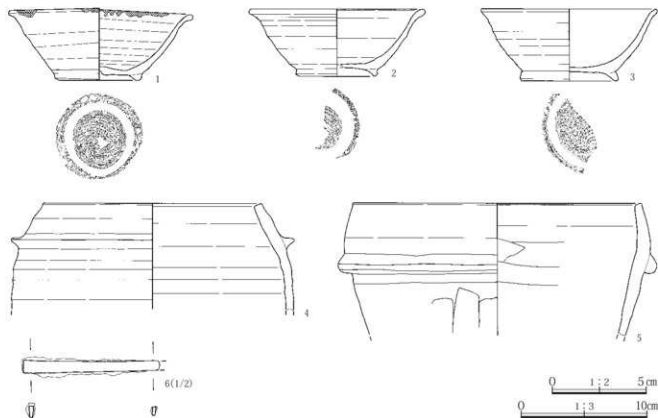


D. 1:131.50m



- 1 灰黄褐色砂質土(10/R4/2) 少量の種名ニツ島白色軽石と微量の焼土粒子・炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10/R4/2) 多量の焼土粒子と少量の炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10/R4/2) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)と少量の焼土粒子を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10/R4/2) 多量の炭化物と少量の焼土粒子・灰を含む。=使用面・一部層状に炭化物堆積
- 5 灰黄褐色砂質土(10/R4/2) 多量の炭化物粒子と少量の浅黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・焼土粒子を含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10/R5/2) 少量の焼土粒子を含む。
- 7 にぶい黄褐色砂質土(10/R5/3) 多量のにぶい黄褐色~浅黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・同粒子を含む。

0 1:30 1m



第391図 VII区72号住居と出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物

部底からは焼土ブロックや炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなり、燃焼部底は焼土を多く含む灰黄褐色砂質土に覆われる。カマドの長さは0.91m、幅0.80m、深さ0.32mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.77m、短径0.58m、深さ0.19mの楕円形の土坑を検出した。底から0.16m上から須恵器の椀(3)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。一辺が5m弱におよぶ竪穴の規模から考えて、主柱穴を有しない構造の建物とは考えにくい。これは主柱穴底がⅡ・Ⅲ層の黄褐色砂礫層で止められたため、柱穴の輪郭が不明瞭である可能性が想定される。

遺物 床面付近から須恵器の椀(1)、羽釜(4)が出土した。

時代 平安時代10世紀第1四半期。

73号住居(第392・393図, PL.192・420)

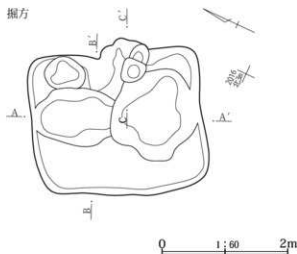
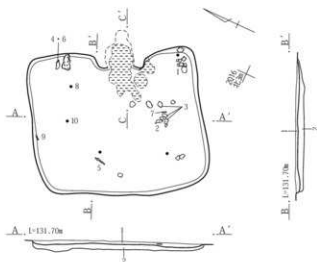
グリッド 2 Q16

主軸方位 N58°E

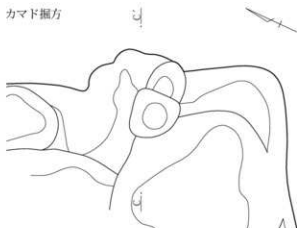
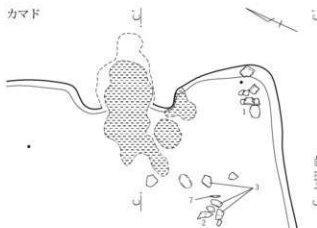
重複 なし。10号溝にやや近接する。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する規模の小さな竪穴住居である。長辺は2.73m、短辺は2.25m、深さは0.10m、面積は4.45㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石とにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~10mm大)と微量の炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄橙～淡黄色砂質シルトブロック(φ5~30mm大)を含む。



- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ2~3mm大)・焼土粒子、炭化物粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄橙～淡黄色砂質シルトブロック(φ5~30mm大)を含む。

第392図 Ⅷ区73号住居

床面 灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂層を掘り込んで掘方を構築している。中央から長径1.20~1.38m、深さ0.06~0.13mの浅い歪んだ楕円~円形の窪みを検出した。

カマド 東壁の中央に位置する。カマドの燃烧部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築しており、燃烧部底の一部と掘方のみを検出した。燃烧部底はほぼ水平で、焚口周辺にかけて炭化物の広がりを検出した。カマド掘

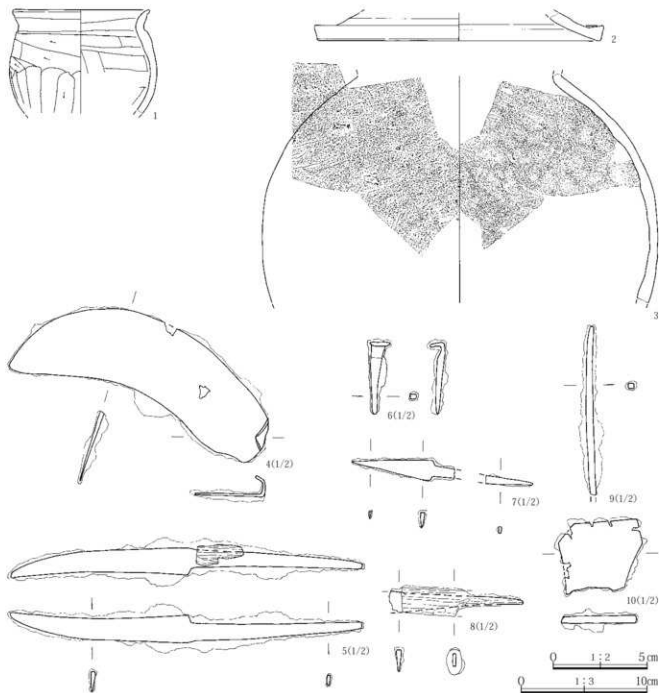
方埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドの長さは1.05m、幅0.47mである。

貯蔵穴 貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の小型甕(1)、須恵器の瓶(2)、甕(3)、鉄鎌(4)、鉄釘(6)、刀子(5・7・8)が出土した。

時代 平安時代10世紀第2四半期。



第393図 VII区73号住居の出土遺物

74号住居(第394~396・398図, PL.193・420・421)

グリッド 2 N10

主軸方位 N87° E

重複 103号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.46m、短辺は3.25m、深さは0.44m、面積は12.48m²である。

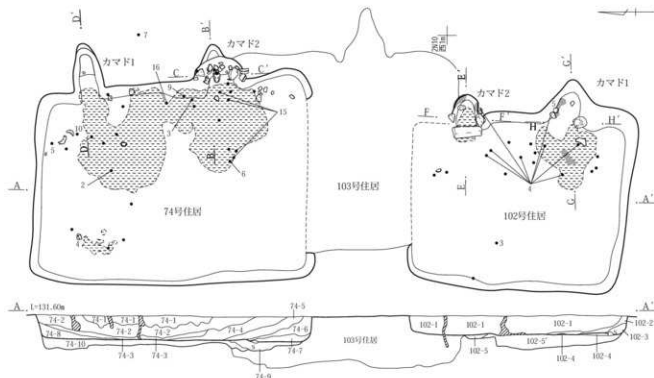
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が縁から中央に傾き、成層して竪穴を埋めている。埋土の中位には、にぶい黄褐色砂質シルトのブロックを多く含む灰黄褐色土が南から北側に傾斜して堆積している。床面を覆

う下底には、にぶい黄褐色砂質土が堆積している。

床面 にぶい黄褐色砂質土を0.10mほど括って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。北壁際の中央に長径1.14m、短径0.56m、深さ0.15~0.26mの垂んだ楕円~円形の窪みや、西壁際の中央に長径0.95m、短径0.55m、深さ0.06mの浅い垂んだ楕円形の窪みを検出した。

カマド 東壁の北東隅よりと南東隅寄りに2基のカマドを検出し、北寄りをカマド1、南寄りをカマド2とした。カマド2は掘方の調査で検出した。調査担当者は床面で



- 74-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量のにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~10mm大)・棒名ニツ岳白色軽石を含む。
- 74-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~10mm大)と少量の褐灰色土小ブロック(φ20~40mm大)・棒名ニツ岳白色軽石を含む。
- 74-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の褐色土小ブロック(φ10~40mm大)少量の棒名ニツ岳白色軽石を含む。
- 74-4 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量のにぶい黄褐色~浅黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~20mm大)・棒名ニツ岳白色軽石を含む。
- 74-5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石を含む。
- 74-6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石とにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 74-7 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~10mm大)・焼土粒子を含む。
- 74-8 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の棒名ニツ岳白色軽石を含む。
- 74-9 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量のにぶい黄褐色~浅黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~10mm大)・白色軽石・炭化物を含む。
- 74-10 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 多量の焼土粒子・炭化物・浅黄色砂質シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 102-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の棒名ニツ岳白色軽石と少量のにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。103-1層上に近いがやや色調暗い。
- 102-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石を含む。
- 102-3 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 少量の棒名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 102-4 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量のにぶい黄褐色~浅黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。硬化する。=貼り床土
- 102-5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量のにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~30mm大)を含む。
- 102-5' 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量のにぶい黄褐色砂質シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

0 1:60 2m

第394図 VII区74・102号住居(1)

の炭化物の分布や燃焼部底の状況からカマド2を新カマド、カマド1を旧カマドと調査後に想定した。カマド1・2の燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外側に燃焼部を構築している。

カマド1の燃焼部底は水平で、急な勾配で立ち上がり煙道に接続する。焚口付近には炭化物の広がりを検出したが、燃焼部底には顕著な焼土や炭化物の広がりを認めることはできない。

カマド2の燃焼部底は水平で、奥壁は急な勾配で立ち上がり煙道に接続する。燃焼部右の奥壁には長径0.24m、短径0.15m、厚さ0.11mの垂角礫が据えられており、これはカマド構築材である。燃焼部奥壁の中央には、長径0.27m、短径0.15m、厚さ0.10mの垂円礫が据えられており、これは位置から考えて支脚と考えられる。カマド1と同様にカマド2の燃焼部からも炭化物の広がりは認められない。しかし、カマド1・2とも焚口周辺の床面には広範囲で炭化物の広がりを検出した。

カマド1・2の埋土は炭化物を含む灰黄褐色砂質土である。カマド1の煙道を含む長さは1.13m、煙道長0.51m、幅0.48m、深さ0.32mである。カマド2の煙道を含む長さは1.23m、煙道長0.32m、幅0.60m、深さ0.42mである。
貯蔵穴 貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。一边が5m弱におよぶ竪穴の規模から考えて、主柱穴を有しない構造の建物とは考えにくい。これは主柱穴底がⅫ・Ⅺ層の黄褐色砂礫

層で止められたため、柱穴の輪郭が不明瞭である可能性が想定される。

遺物 カマドから多くの遺物が出土した。カマド2の使用面から須恵器の甕(17)、羽釜(16)、カマド2の埋土から土師器の甕(14)、床面付近から須恵器の椀(2~6)、灰釉陶器の椀(9・10)、掘方から鉄鍬(18)が出土した。

時代 平安時代10世紀第1四半期。

102号住居(第394・395・397・399図、PL.217・218・421)

グリッド 2N9

主軸方位 N87°W

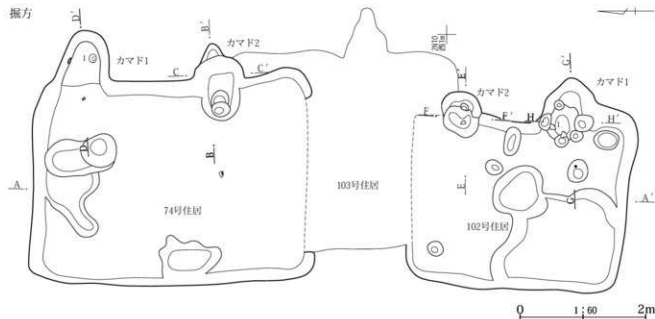
重複 103号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.61m、短辺は2.83m、深さは0.31m、面積は8.30㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

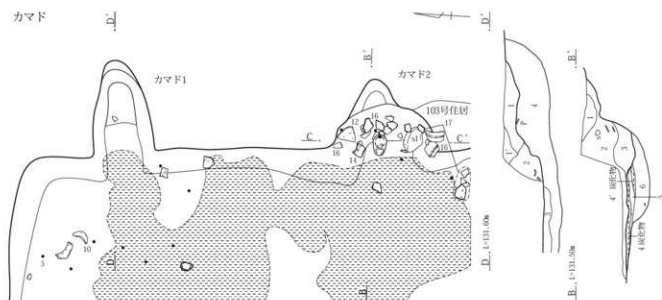
床面 ぶい黄褐色砂質シルトのブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.07mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅻ・Ⅺ層の黄褐色砂質土を掘り込んで掘方を構築している。南西隅の壁際に長辺1.80m、短辺1.36m、深さ0.10mの歪んだ方形の窪み、中央に長径0.90m、短径0.85m、深さ0.16mの歪んだ円形の窪み、南東隅の壁際に長径0.40m、短径0.29m、深さ0.02mの極めて浅い楕

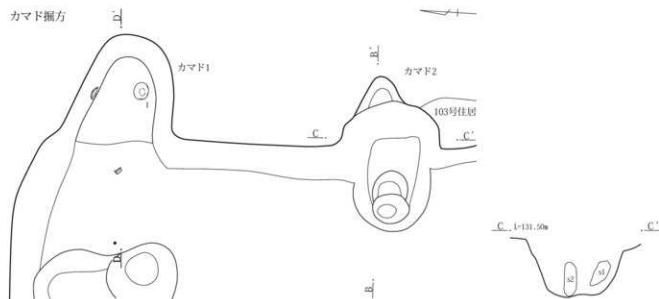


第395図 VII区74・102号住居(2)

カマド



カマド掘方



カマド1 C-C'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の灰ブロック(φ5~10mm大)と炭化物を含む。
- 1' 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の灰ブロック(φ5~30mm大)と少量の炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の炭化物を含む。=上面使用面
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のふい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ20~50mm大)と少量の炭化物を含む。

カマド2 B-B'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量のふい黄橙~浅黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~20mm大)・極名ニツ岳白色軽石を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒・ふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・焼土粒子を含む。
- 3 ふい黄褐色土(10YR5/3) 多量のふい黄橙~淡黄色シルト小ブロック(φ5~20mm大)・極名ニツ岳白色軽石と少量の炭化物を含む。
- 4 炭化物層 少量の焼土小ブロック・淡黄色シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。=上面二次(最終使用面)
- 4' 炭化物層 少量の淡黄色シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。=上面1次使用面
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の焼土小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10~20mm大)と少量の炭化物を含む。

0 1:30 1m

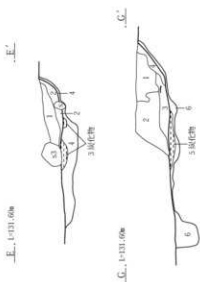
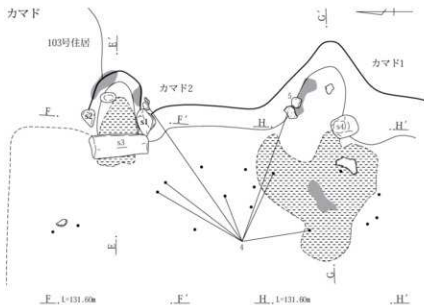
第396図 VII区74号住居

円形の窪みを検出した。

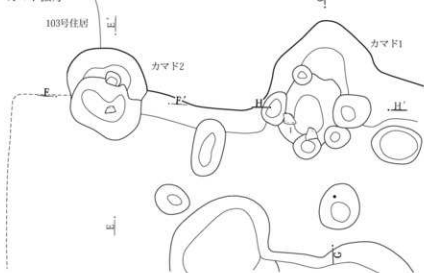
カマド 東壁の北東隅寄りと南東隅寄りに2基のカマドが位置する。床面での炭化物の分布や燃焼部底の状況から北側に位置する住居廃絶時のカマドをカマド1、南側の旧いカマドをカマド2とする。カマド1・2の燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。

カマド1の燃焼部底は水平で、奥壁は急な勾配で立ち上がる。燃焼部左右の壁には長径0.20~0.32m、短径0.14~0.20m、厚さ0.14m垂平~垂角礫が据えられており、これはカマド構築材である。焚口の床面には、埋土中に長径0.46m、短径0.18m、厚さ0.16mの棒状垂円礫が出土した。これは焚口付近の天井高架材がカマドの崩落に

カマド



カマド掘方

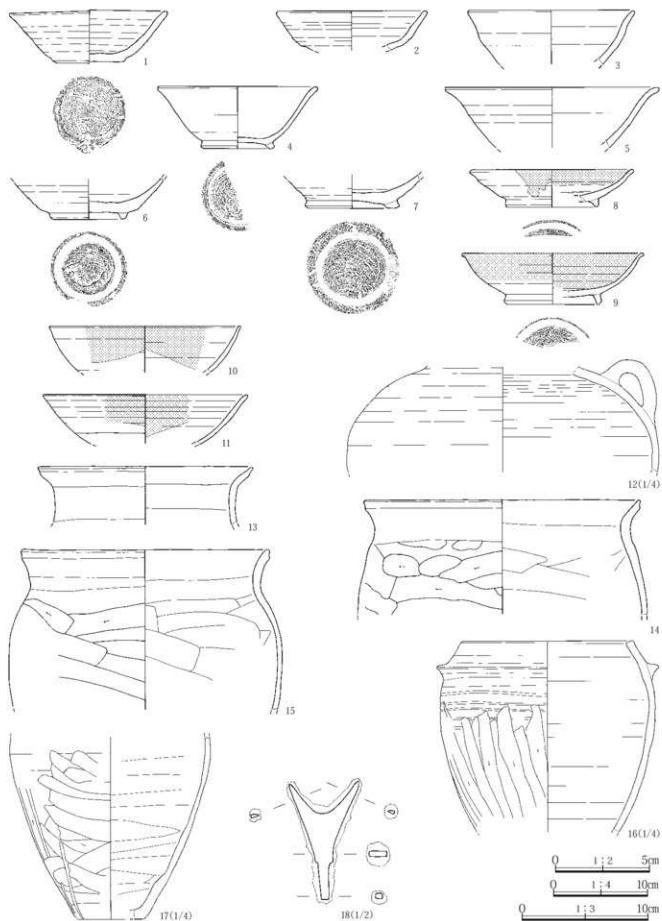


カマド1 G-G'

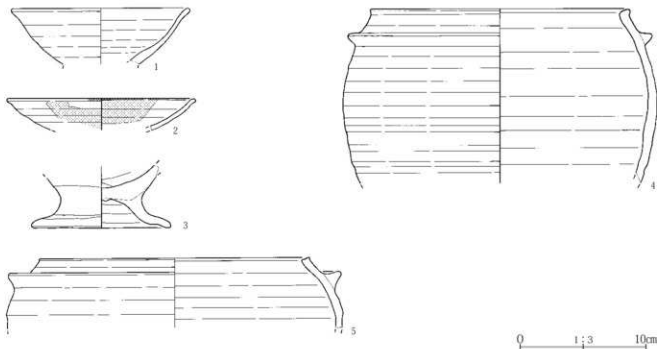
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名二ツ房白色軽石と微量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名二ツ房白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の炭化物・焼土粒子を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と少量の炭化物を含む。
- 5 炭化物層 少量の焼土粒子を含む。=使用面
- 6 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)、炭化物粒子を含む。

第397図 VII区102号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第398図 VII区74号住居の出土遺物



第399図 VII区102号住居の出土遺物

伴って移動したものと考えられる。燃烧部壁には焼土、焚口からは炭化物の広がりを検出した。

カマド2の燃烧部底は水平で、奥壁は約45°の勾配で立ち上がる。燃烧部の右壁には長径0.23m、短径0.18m、厚さ0.11m垂円礫が据えられており、これはカマド構築材である。焚口周辺で炭化物の広がりを検出した。

カマド1・2の埋土は灰黄褐色砂質土である。カマド1の長さは0.82m、幅0.58m、深さ0.12mである。カマド2の長さは1.11m、幅0.65m、深さ0.20mである。

貯蔵穴 貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の羽釜(4)、カマド1の使用面から須恵器の羽釜(5)、埋土から灰軸陶器の椀(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

103号住居(第400・401図、PL.219・421)

グリッド 2 N10

主軸方位 N86°E

重複 74・102号住居に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.76m、短辺は3.20m、深さ

は0.63m、面積は9.35㎡である。

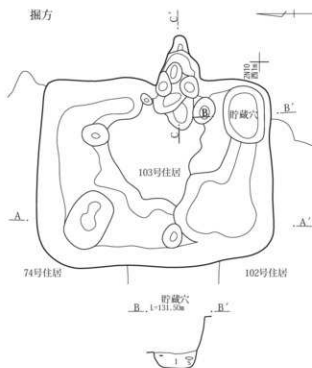
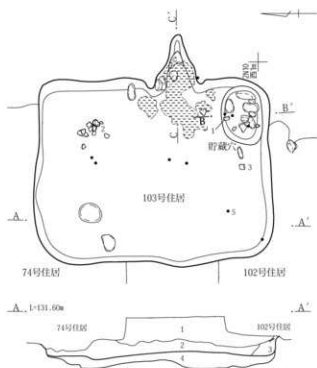
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が成層する。

床面 ぶい黄褐色砂質シルトのブロックを多く含むにぶい黄褐色砂質土を0.13mほど厚く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで掘方を構築している。カマドと中央を除く壁際に幅0.44～0.88m、深さ0.04～0.06mの浅い溝状の窪みが周回する。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。燃烧部は東壁から奥を掘り込み、壁の外側に構築している。燃烧部底は緩やかに傾き、緩やかな勾配で立ち上がる。奥壁付近の燃烧部底には長径0.20m、短径0.13m、厚さ0.12mの垂円礫が0.16mほど埋め込まれており、礫は支脚と考えられる。燃烧部底～焚口周辺からは炭化物の広がりを検出した。カマド埋土はにぶい黄褐～灰黄褐色砂質土が成層している。カマドの長さは1.35m、幅0.65m、深さ0.45mである。

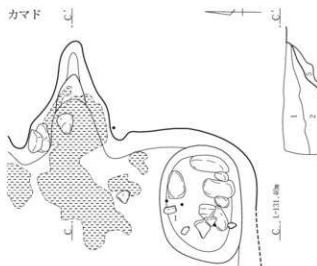
貯蔵穴 カマドの南側から長径0.92m、短径0.65m、深さ0.30mの楕円形の土坑を検出した。底から0.18m上で須恵器の杯(1)、底から0.01m前後で長径0.12～0.33mの垂円礫8点が出土した。土坑は位置と形状から貯蔵穴と考えられる。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の棒名ニッ居白色軽石と少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・同粒子を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名ニッ居白色軽石・にふい黄褐色砂質土シルト(φ10~30mm大)、炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量のふい黄褐色砂質土を含む。
- 4 にふい黄褐色土(10YR5/4) 多量のふい黄橙~淡黄色砂質シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。

- 貯蔵穴 B-B'
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)と炭化物を含む。

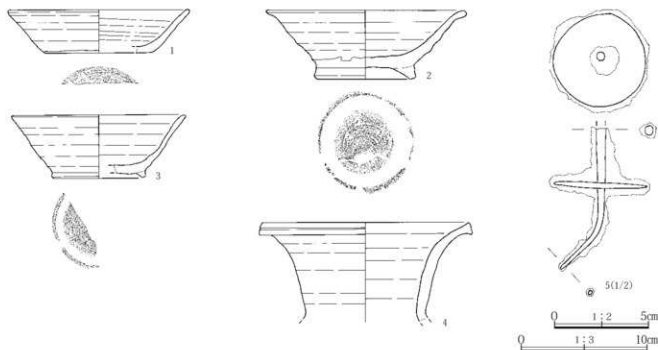
0 1:60 2m



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の棒名ニッ居白色軽石とにふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 2 にふい黄褐色砂質土(10YR5/4) 少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ20mm大)を含む。
- 3 にふい黄褐色砂質土(10YR5/4) 少量の灰と少量の焼土粒子、炭化物粒子を含む。=使用面
- 4 炭化物層 少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
- 5 にふい黄褐色土(10YR5/4) 多量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 6 にふい黄褐色砂質土(10YR5/4) 少量のふい黄褐色砂質土シルト極小ブロック(φ5mm大)と炭化物を含む。
- 7 にふい黄褐色砂質土(10YR5/4) 多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。

0 1:30 1m

第400図 VII区103号住居



第401図 VII区103号住居の出土遺物

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(2・3)、鉄製紡錘車(5)が出土した。

時代 平安時代9世紀第4～10世紀第1四半期。

75号住居(第402～404図、PL.194・422)

グリッド 2 M11

主軸方位 N89° E

重複 79号住居、52号ピットに切られる。111・115号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.40m、短辺は3.52m、深さは0.20m、面積は11.83㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を多く含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 南部は灰黄褐色砂質土を0.05mほど貼り、北部は115号住居の掘方埋土を削り出して、平坦な床面を構築している。

掘方 南部はⅫ・ⅩⅢ層の黄褐色砂質土を掘り込んで掘方を構築している。南東隅の南壁際から長径1.42m、短径1.08m、深さ0.16mの歪んだ楕円形の土坑1、長径0.77m、短径0.72m、深さ0.05mの浅い歪んだ円形の土坑2を検

出した。土坑1の埋土は床面でカマドからの炭化物に覆われており、竪穴住居廃絶時には埋没していたものと考えられる。

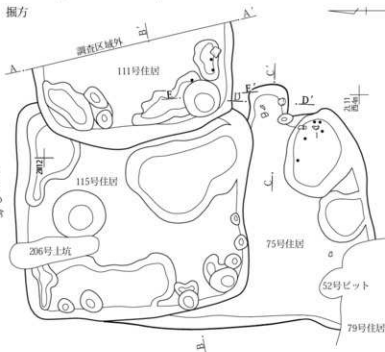
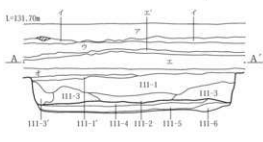
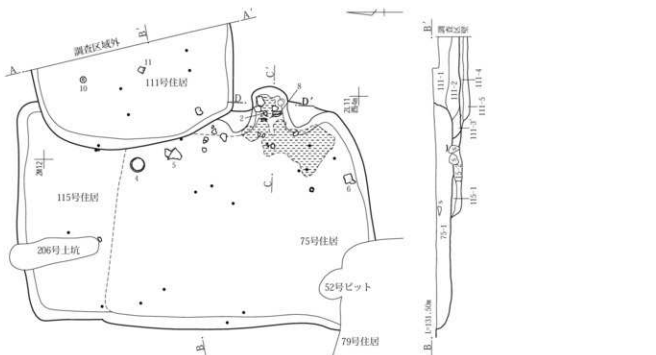
カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から手前を掘り込んで壁の内側に構築している。燃焼部底は水平で、奥壁は約45°の勾配で立ち上がる。燃焼部奥壁の右側には長径0.21m、短径0.06m、厚さ0.05mの棒状亜円礫が据えられており、これはカマド構築材と考えられる。燃焼部底～焚口付近では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は炭化物を含む灰黄褐色砂質土からなる。カマドの長さは0.87m、幅0.85m、深さ0.18mである。

貯蔵穴 貯蔵穴は検出されなかった。掘方で検出した土坑1は、位置や形状から古い貯蔵穴の可能性はある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の羽釜(4～6)、床面付近から須恵器の羽釜(7)、カマド使用面から須恵器の椀(2)、羽釜(8)が出土した。出土遺物は10世紀内に年代幅を有する。

時代 10世紀後半に帰属する111号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀前半と想定される。



- ア 褐灰色砂質土(10R5/1) 現代客土。=農業用ビニール等混入
- イ 黄灰色土(2.5Y5/1) 現代水田耕作土。
- ウ 暗黄灰色土(2.5Y4/2) 近代水田耕作土・上半部鉄分凝固により赤褐色化。
- エ 灰色土(5Y5/1) 近代水田耕作土。
- エ' 鉄分凝固により赤褐色化。
- オ 黄灰色土(2.5Y5/1) 現代水田耕作土。上半部鉄分凝固により赤褐色化。=上面第一面確認面
- 75-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の種名ニッ岳白色軽石と少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物を含む。
- 115-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニッ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物を含む。
- 115-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の種名ニッ岳白色軽石・にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 111-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の種名ニッ岳白色軽石と少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物を含む。
- 111-1' にふい赤褐色砂質土(5YR4/4) 111-1層土の鉄分酸化凝固=上面水田化の影響か。
- 111-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニッ岳白色軽石小粒・にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物を含む。
- 111-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 111-2層土+多量の浅黄褐色砂質土シルトブロック(φ20~40mm大)。
- 111-3' 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 111-2層土+多量のFA泥面に伴う浅黄色火山灰ブロック(φ40~100mm大)=壁崩落土
- 111-4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニッ岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルトブロック及びFA泥流火山灰ブロック(φ10~30mm大)=貼り床
- 111-5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニッ岳白色軽石小粒・にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 111-6 にふい黄褐色土(10YR6/4) 地山砂質土シルト土主体。少量の黄褐色土・種名ニッ岳白色軽石を含む。

第402図 VII区75・111・115号住居

111号住居(第402・404図、PL.194・195・421)

グリッド 2 L11

主軸方位 N87° E

重複 115号住居を切る。75号住居に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ隅丸方形を呈する竪穴で東部は調査区外に存在する。長辺は3.22m、短辺は1.55m+、深さは0.42m、検出された最大の面積は3.98㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を多く含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 泥流堆積物起源の火山灰質シルトのブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.13mほど貼り、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。北東隅から北西隅の西壁際から歪んだ方形や溝状の浅い窪みを多く検出した。

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は確認した範囲では検出されなかった。

遺物 床面から須恵器の椀(10)、土師器の甕(11)、掘方から須恵器の杯(9)、羽釜(12)、埋土から砥石(13)が出土した。

時代 10世紀前半に帰属する75号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀後半と想定される。

115号住居(第402図、PL.194)

グリッド 2 M11

主軸方位 N87° E

重複 75・111号住居、206号土坑に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ隅丸正方形を呈する竪穴で東部を115号住居に、南部の大部分は75号住居により失われている。掘方から推定した長辺は3.62m、短辺は3.47m、深さは0.18m、面積は10.14㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を多く含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.13mほど貼り平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築し、南側の75号住居との境界では、75号住居の掘方より0.10mほどの段差で接している。南東隅、北東隅、北西隅の壁際から歪んだ方形や溝状の浅い窪みを検出した。

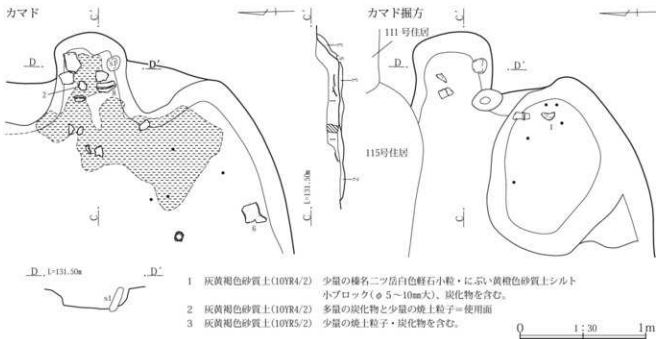
カマド カマドは検出されなかった。東壁に存在したカマドが111号住居により失われた可能性がある。

貯蔵穴 貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 なし。

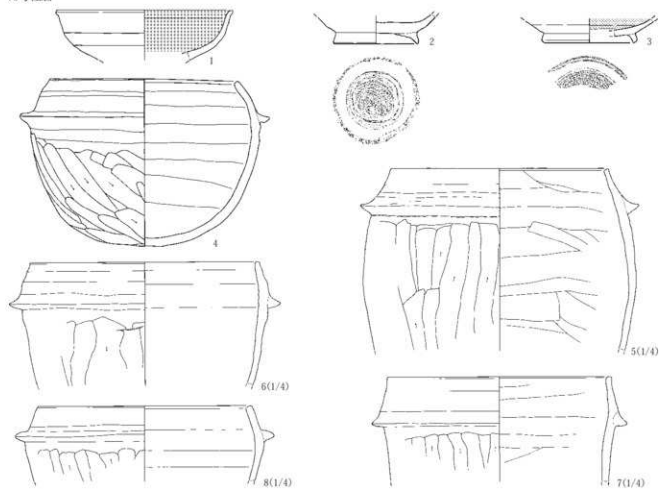
時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と想定され



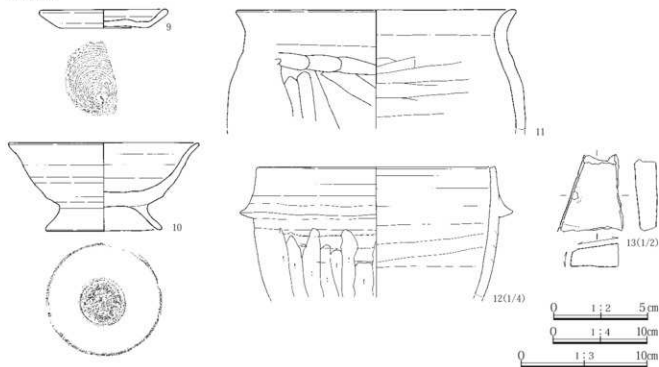
第403図 VII区75号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物

75号住居



111号住居



第404図 VII区75・111号住居の出土遺物

る。本遺構は、東・西壁が隣接する75号住居の東・西壁と一致し、床面の高さも同一なことから、115号住居の床を張り替えて75号住居として拡張した可能性を指摘する。しかし、発掘調査の段階でそのような観察所見は得られなかったため、報告書の所見ではその可能性について言及することに留める。

76号住居(第405・406図, PL.195・196・422)

グリッド 2 L 10

主軸方位 N88°W

重複 110号住居に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈す

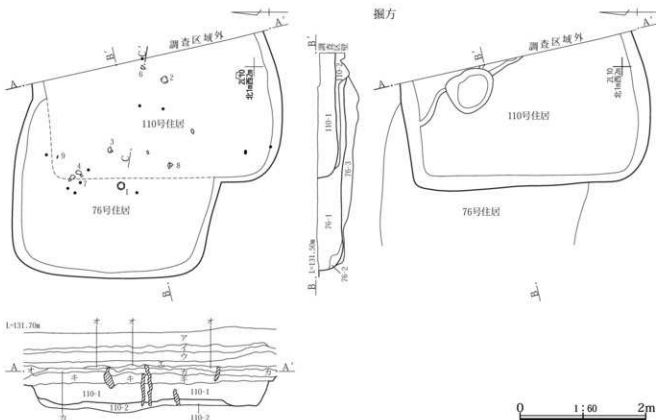
る竪穴住居で東部は110号住居により失われている。長辺は3.29m、短辺は3.00m、深さは0.43m、面積は7.94m²である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を多く含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 ぶい黄褐色砂質シルトのブロックを多く含む灰黄褐色砂質土を0.17mほど厚く貼り、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで掘方を構築している。中央に長辺1.65m、短辺1.50m、深さ0.16mの歪んだ方形の窪みを検出した。

カマド 東壁の中央に位置し、掘方のみを検出した。カ



ア 褐色砂質土(10YR5/1) 現代客土。=農業用ビニール等混入

イ 黄灰色土(2.5Y5/1) 現代水田耕作土。

ウ 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 近代水田耕作土、上半部鉄分凝固により赤褐色化。

エ 灰色土(5Y5/1) 近代水田耕作土。

オ 褐色土(10YR4/1) 多量の浅間A軽石と少量の椋名ニツ岳白色軽石大粒を含む。天明三年泥流土、所々鉄分凝固により赤褐色化。

カ 褐色土(10YR4/1) 少量の椋名ニツ岳白色軽石を含む。近世耕作土。(少量の浅間A軽石を含む)

キ 褐色土(10YR4/1) 少量の椋名ニツ岳白色軽石を含む。近世耕作土。(少量の浅間A軽石を含まない)

76-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の椋名ニツ岳白色軽石小粒・ぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)と少量の炭化物を含む。

76-2 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 多量の椋名ニツ岳白色軽石小粒・ぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

76-3 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のぶい黄褐色~淡黄色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)と少量の椋名ニツ岳白色軽石、炭化物粒子を含む。

110-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の椋名ニツ岳白色軽石と少量のぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)と炭化物を含む。

110-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の椋名ニツ岳白色軽石と少量の浅黄色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)・炭化物を含む。=貼り床

第405図 VII区76・110号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物

掘方

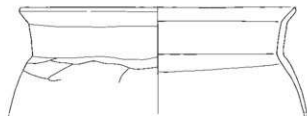
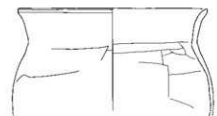
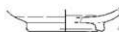


カマド

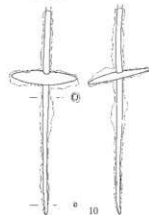
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニッ坊白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。
- 3 しぶい黄褐色弱粘質土(10YR6/4) 多量の焼土小ブロック(φ5~10mm大)・炭化物を含む。上面に灰を含む。
- 4 しぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 多量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。=住居掘方埋土

0 1:30 1m

76号住居



110号住居



0 1:2 5cm

0 1:3 10cm

第406図 Ⅷ区76号住居と76・110号住居の出土遺物

マドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。カマド掘方埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマドの長さは0.42m、幅0.90m、深さ0.50mである。

貯蔵穴 貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 掘方の調査で主柱穴の可能性のある浅い小ピット3基を検出した。これらは直径0.26m、深さ0.09mのP1、長径0.57m、短径0.43m、深さ0.10mのP2、直径0.30m、深さ0.10mのP3である。柱間は桁行のP1・P2が1.18m、梁行のP2・P3が0.84mである。

遺物 床面付近から灰軸陶器の椀(4)、土師器の小型甕(7)、土師器の甕(8)、埋土から刀子(9)、鉄製紡錘車(10)が出土した。

時代 平安時代9世紀第3・4四半期。

110号住居(第405・406図、PL.195・196)

グリッド 2 L 10

主軸方位 N87° E

重複 76号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴で東部は調査区外に存在する。長辺は3.92m、短辺は2.24m+、深さは0.28m、検出された最大の面積は6.68㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を多く含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.03mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで掘方を構築している。調査区東壁際から長径0.76m、短径0.72m、深さ0.17mの歪んだ円形の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から土師器の小型甕(12)、須恵器の椀(11)が出土した。

時代 平安時代9世紀後半。

77号住居(第407～409図、PL.197・198・422)

グリッド 2 L 9

主軸方位 N89° E

重複 112号住居、210号土坑に切られる。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で西部は112号住居により失われ、東部は調査区外に存在する。長辺は3.51m、短辺は3.36m+、深さは0.53m、検出された最大の面積は8.66㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を多く含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 にぶい黄褐色砂質シルトのブロックを多く含む黄褐色土を0.24mほど厚く貼り、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで掘方を構築している。北壁際は幅1.10m、深さ0.15mの溝状の窪みが周回する。

カマド 東壁の中央に位置するが大部分は調査区外に存在する。カマドの燃焼部は東壁から手前に構築している可能性が高い。焚口付近の燃焼部壁の左右には長径0.31～0.38m、短径0.16～0.23m+、厚さ0.14mの亜円礫2点が据えられている。右壁の礫は内側に42°傾斜し深さ0.10mほど埋め込まれている。これらはカマド構築材と考えられる。これらの礫の上には長径0.52m、短径0.27mの扁平亜円礫が置かれている。これは焚口の天井高架材と考えられる。焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色土からなり、カマドの袖はにぶい黄褐色砂質土を貼って構築している。カマドは長さ0.55m+、幅0.85m、深さ0.48mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.39m、短径0.34m、深さ0.12mの土坑を検出した。底から0.12m上で須恵器の杯(4)が出土した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(7・9・12)、土師器の小型甕(14)、鉄釘(18)、床面付近から須恵器の杯(5)、椀(6)、土師器の甕(17)、掘方から須恵器の椀(8)、土師器の甕(16)が出土した。

時代 平安時代9世紀第4四半期。

112号住居(第407・408・410図、PL.197・198・422)

グリッド 2 L 9

主軸方位 N88° E

重複 77号住居を切る。

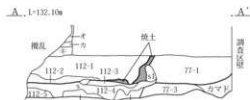
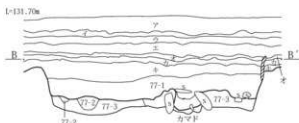
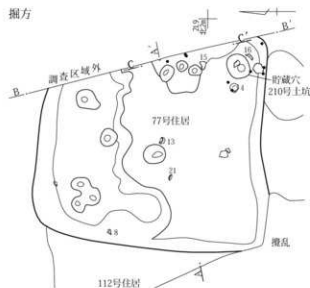
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、南西部は調査区外に存在する。長辺は3.56m、短辺は2.18m、深さは0.51m、検出された最

大の面積は5.43㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を多く含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 にぶい黄褐色砂質シルトのブロックを多く含むにぶい黄褐～灰黄褐色土を0.21mほど厚く貼り、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方



0 1:60 2m

ア 褐灰色砂質土(10YR5/1) 現代客土。=農業用ビニール等混入

イ 黄灰色土(2.5Y5/1) 現代水田耕作土。

ウ 暗黄灰色土(2.5Y4/2) 近代水田耕作土。上半部鉄分凝固により赤褐色化。

エ 灰色土(5Y5/1) 近代水田耕作土。

オ 褐灰色土(10YR4/1) 多量の浅間A軽石と少量の榛名ニツ岳白色軽石を含む。天明三年泥流上。所々鉄分凝固により赤褐色化。

カ 褐灰色土(10YR4/1) 少量の榛名ニツ岳白色軽石を含む。近世耕作土。(少量の浅間A軽石を含む)

キ 褐灰色土(10YR4/1) 少量の榛名ニツ岳白色軽石を含む。近世耕作土。(少量の浅間A軽石を含まない)

77-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の榛名ニツ岳白色軽石と少量の浅黄褐～にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm大)を含む。

77-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の榛名ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)を含む。

77-3 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 多量のにぶい黄褐～浅黄色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)と少量の榛名ニツ岳白色軽石を含む。

112-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の榛名ニツ岳白色軽石と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm大)を含む。

112-2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量の榛名ニツ岳白色軽石とにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。

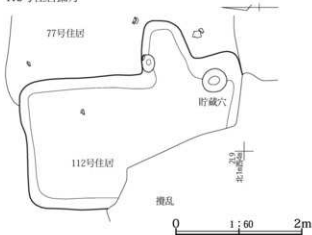
112-3 灰黄褐色土(10YR4/2) 多量の炭化物と少量の灰・黄土小ブロック(φ10～15mm大)を含む。

112-4 灰黄褐色土(10YR5/2) 多量の榛名ニツ岳白色軽石と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10～20mm大)・炭化物を含む。

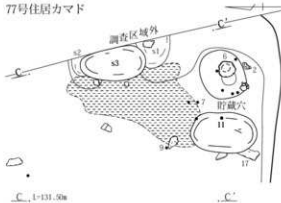
112-5 にぶい黄褐色土(10YR4/3) 少量の榛名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ10～20mm大)を含む。

第407図 VII区77・112号住居

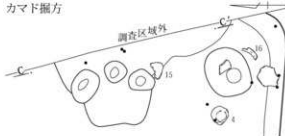
112号住居掘方



77号住居カマド



カマド掘方



- 1 灰黄褐色土 多量にふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 10YR5/2) 5~10mm大)を含む。
- 2 にふい黄褐色砂質土 少量の淡黄褐色砂質土シルト(FP泥流に伴うアッシュ起源)小ブロック(φ 5~15mm大)を含む。=カマド袖部構築土
- 2' にふい黄褐色砂質土 少量の炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土 少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)と多量の炭化物粒子を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土 少量のふい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ 5~10mm大)、炭化物粒子を含む。



第408図 VII区77・112号住居

を構築している。

カマド 東壁の中央南寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで、壁の外側に構築している。燃焼部奥壁には長径0.26m、短径0.22mの垂円礫が据えられており、これはカマド構築材と考えられる。燃焼部から焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマド掘方埋土は灰黄褐色土からなる。カマドは長さ0.95m、幅0.85m、深さ0.18mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.39m、短径0.37m、深さ0.09mの土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマド使用面付近から須恵器の椀(19・20)、掘方から須恵器の椀(21)が出土した。

時代 平安時代9世紀第4四半期。

78号住居(第411・412図、PL.199・422)

グリッド 2M10

主軸方位 N84°W

重複 211号土坑に切られる。79号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.10m、短辺は2.25m、深さは0.26m、面積は5.70㎡である。

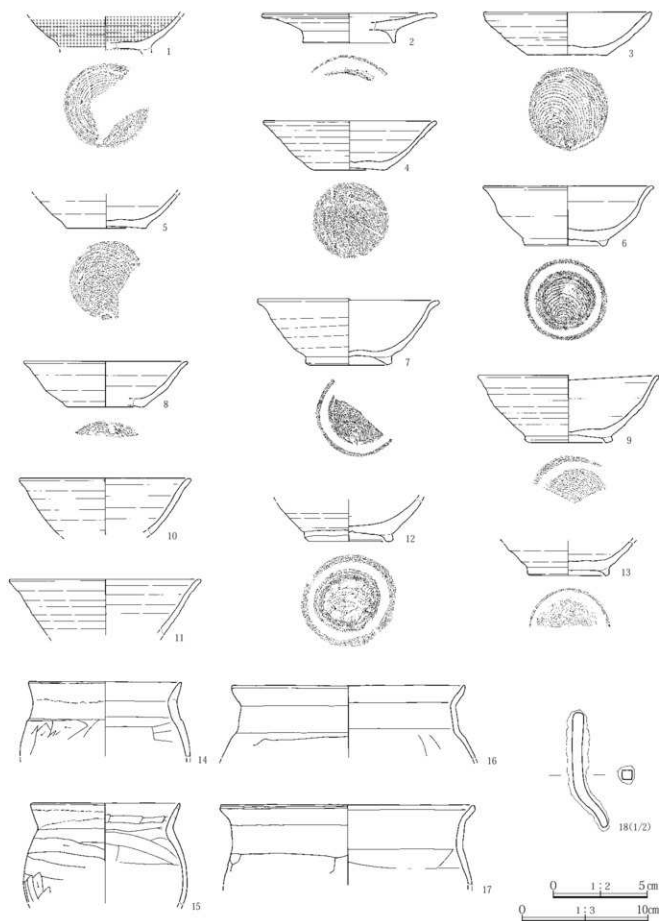
埋土 ニツ岳の白色軽石を多く含む灰黄褐色砂質土が水平に成層する。

床面 灰黄褐色砂質土を0.06mほど貼り、平坦な床面を構築している。

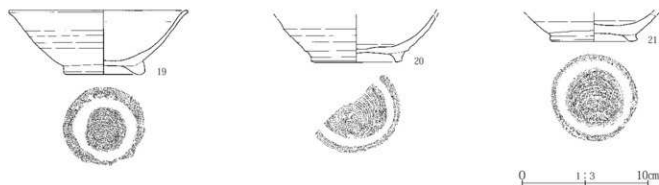
掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。焚口付近の燃焼部壁の左右には長径0.18~0.20mの垂円・角礫6点が据えられている。これらはカマド構築材と考えられる。燃焼部底を埋める埋土中には、長径0.30~0.34m、短径0.14~0.24mの垂円礫5点が出土した。これはカマドの崩落に伴って移動した天井高架材と考えられる。燃焼部底から焚口及び焚口の右側から炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は礫を多く含む灰黄褐色砂質土からなる。カマドは長さ1.22m、幅0.66m、深さ0.30m

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第409図 VII区77号住居の出土遺物



第410図 VII区112号住居の出土遺物

である。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の椀(3)、カマド使用面から須恵器の椀(1・2)、使用面付近から灰軸陶器の椀(5)が出土した。

時代 10世紀後半に帰属する79号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀第1四半期と想定される。

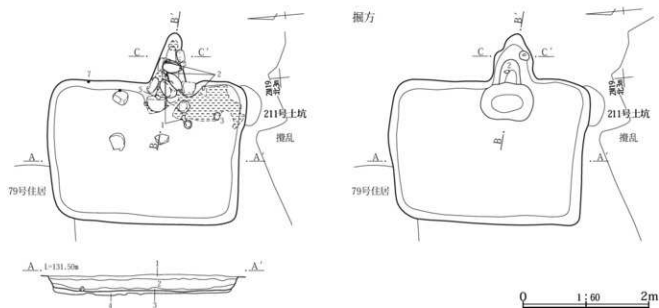
79号住居(第413・414図, PL.200・423)

グリッド 2 M10

主軸方位 N87°W

重複 78号住居、52号ピットに切られる。75号住居を切る。発掘調査時に切合い関係にある79・113号住居として調査したが、資料整理で79号住居に統合した。

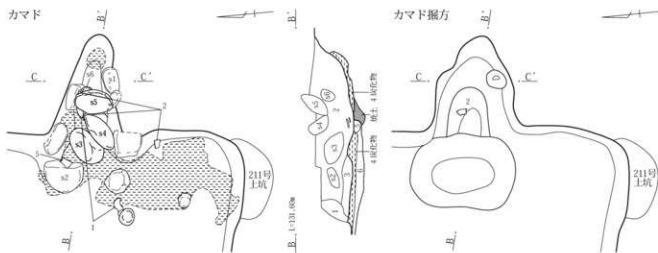
形状と規模 東西方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴である。長辺は4.62m、短辺は3.86m、深さは0.40m、面積は12.77㎡である。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の棒名二岳白色軽石と少量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ5~40mm大)、微量の炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の棒名二岳白色軽石と多量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ5~40mm大)、微量の炭化物を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名二岳白色軽石と少量のふい黄褐色砂質土シルトブロック(φ5~20mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の棒名二岳白色軽石と多量のふい黄褐色~浅黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。

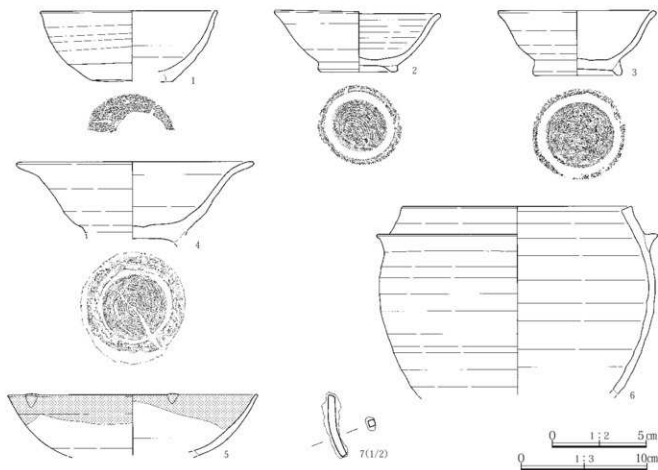
第411図 VII区79号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の極名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ5~30mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の極名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)、炭化物粒子を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と炭化物を含む。
- 4 炭化物層
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 多量の浅黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)と焼土小ブロック(φ5~10mm大)を含む。
- 6 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/4) 多量の浅黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~10mm大)を含む。

0 1:30 1m



第412図 VII区78号住居と出土遺物

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土が縁から中央に傾きながら成層して堅穴を埋めている。

床面 灰黄褐色砂質土を0.12mほど厚く貼り、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。西壁際から長径0.60～1.25mの歪んだ円～不定形の浅い窪みを検出した。

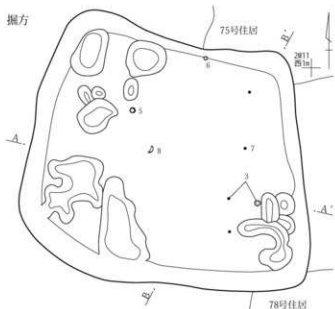
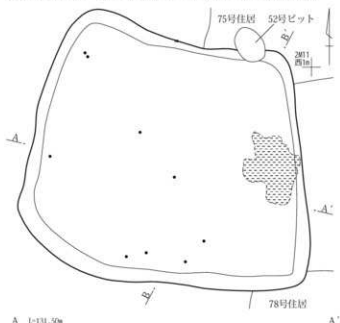
カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。東壁の中央の床面から長径1.29m、短径0.90mの範囲に炭化物の広がりを検出したが、壁面にカマドの痕跡は認

められない。カマドは東壁の中央に位置し、燃焼部は壁の内側に構築された可能性がある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の堅穴住居と想定される。

遺物 埋土から鉄釘(9)、掘方から須臾器の椀(3・5～7)、灰釉陶器の椀(8)が出土した。

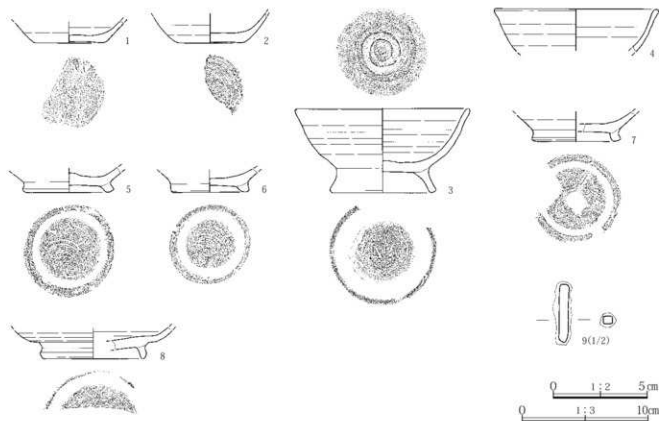
時代 10世紀前半に帰属する78号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀後半と想定される。



- | | |
|----------------------|---|
| 1 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) | 少量の椋名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～15mm大)と微量の炭化物を含む。 |
| 2 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) | 3層土より少量のシルトブロックを混入する。 |
| 3 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) | 多量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～20mm大)と少量の椋名ニツ岳白色軽石を含む。 |
| 4 黒褐色砂質土 (10YR3/2) | 少量の椋名ニツ岳白色軽石小粒・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。 |
| 5 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) | 少量の椋名ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ5～30mm大)を含む。 |
| 6 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) | 少量の椋名ニツ岳白色軽石・にぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。 |
| 7 黒褐色砂質土 (10YR3/2) | 少量の椋名ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。 |
| 8 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2) | 微量の椋名ニツ岳白色軽石と多量のにぶい黄褐色シルト小ブロック(φ5～10mm大)を含む。 |
| 9 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) | 多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)と少量の椋名ニツ岳白色軽石を含む。 |
| 10 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2) | 少量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10～30mm大)・椋名ニツ岳白色軽石を含む。 |
| 11 にぶい黄褐色土 (10YR6/3) | 少量の淡黄色砂質土(椋名ニツ岳FF泥流に伴うアッシュ)小ブロック(φ10～20mm大)を含む。 |

0 1:60 2m

第413図 VII区79号住居



第414図 VII区79号住居の出土遺物

82号住居(第415・416図、PL.201・423)

グリッド 2 R 8

主軸方位 N86°E

重複 119号土坑に切られる。85・96号住居、95・143号土坑を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴住居で、南部は攪乱により失われている。長辺は4.10m+、短辺は3.90m、深さは0.45m、検出された最大の面積は13.09㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

床面 北部で灰黄褐色砂質土を0.12mほど厚く貼り、南部はⅫ・Ⅺ層の黄褐色砂礫層を削り出して平坦な床面を構築している。中央から東部のカマド前で硬化面の広がりを検出した。

掘方 北部はⅫ・Ⅺ層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。北東隅の東壁際から長径0.31～0.52mの歪んだ円形の浅い窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築して

いる。燃焼部底は水平で緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部底から焚口周辺で炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色シルト質土からなる。カマドは長さ0.66m、幅0.50m、深さ0.12mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面付近から須恵器の椀(4)、カマド使用面から須恵器の羽釜(6)が出土した。

時代 平安時代10世紀中頃。

85号住居(第415～417図、PL.201・423)

グリッド 2 R 8

主軸方位 N83°E

重複 82号住居に切られる。104号住居を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴で西部は82号住居により失われ、南部は調査区外に存在する。長辺は2.80m+、短辺は2.40m+、深さは0.36m、検出された最大の面積は4.89㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土から

なる。

床面 灰黄褐色土を0.08mほど貼り、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。中央から長径0.33～0.49mの円～不定形の浅い窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。

カマドは調査区外に存在する可能性がある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

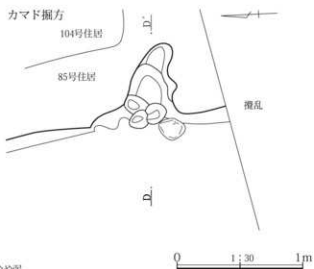
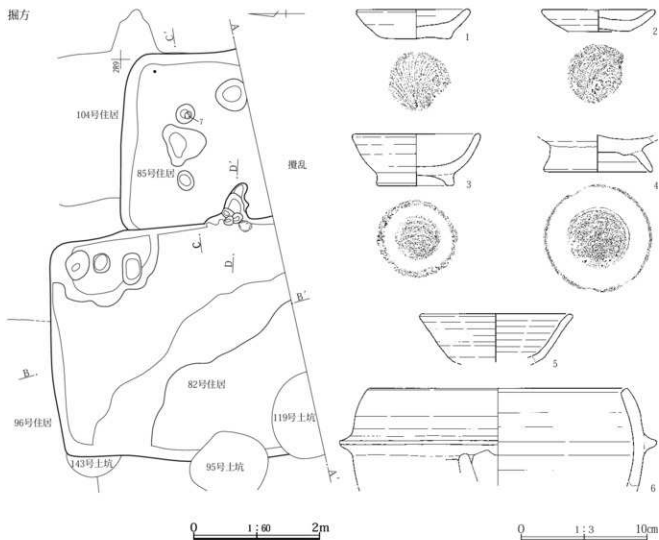
遺物 掘方から土師器の杯(7)が出土した。

時代 奈良時代8世紀第3四半期。



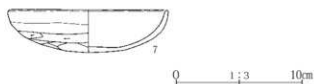
第415図 VII区82・85号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物



- 1 灰黄褐色シルト質土(10TR4/2) 少量の焼土・炭化物・灰を含む。締りやや弱。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10TR4/2) 微量の炭化物混じりを含む。締りやや弱。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10TR4/2) 少量のふい・黄褐色シルト質土と微量の焼土粒子(φ 1~2mm大)を含む。締りやや弱。

第416図 VII区82・85号住居の出土遺物



第417図 VII区85号住居の出土遺物

84号住居(第418図、PL.202・423)

グリッド 2 T 11

主軸方位 N69°W

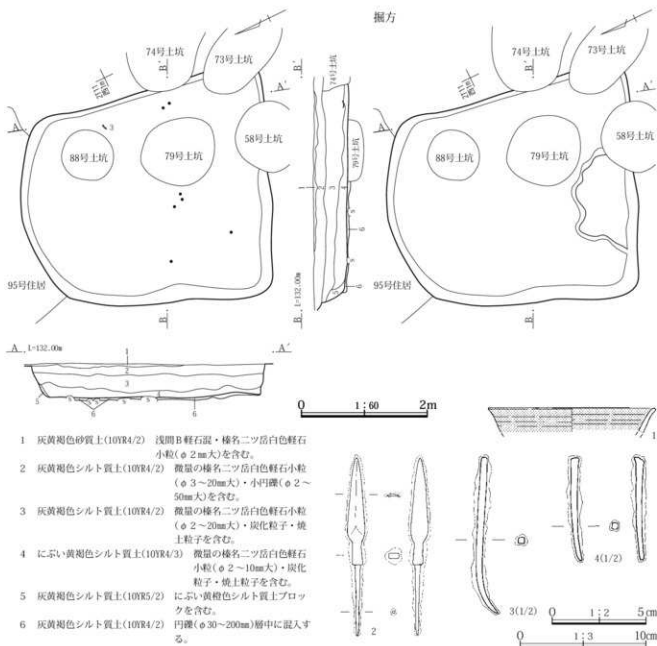
重複 58・73・74・79・88号土坑に切られる。95号住居を切る。

形状と規模 北東～南西方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴である。長辺は3.98m、短辺は3.40m、深さは0.42m、面積は8.65㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土が水平に成層し、竪穴の最上部は浅間Bテフラを含む灰黄褐色砂質土の薄層が覆う。

床面 灰黄褐色シルト質土を0.04mほど薄く貼り、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。南壁際の中央に段状の平坦面を検出した。



第418図 VII区84号住居と出土遺物

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。
柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から灰軸陶器の椀(1)、鉄鏝(2)、鉄釘(3・4)が出土した。

時代 平安時代9世紀第1四半期に帰属する95号住居よりも新しいので、9世紀前半～10世紀。

86号住居(第419～424図, PL.203～205・423)

グリッド 2 Q10

主軸方位 N82°W

重複 87・98・105号住居、154号土坑を切る。発掘調査時に切合い関係にある86・99号住居として調査したが、資料整理で86号住居に統合した。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する規模の大きな竪穴住居である。長辺は5.89m、短辺は5.36m、深さは0.45m、面積は26.32m²である。

埋土 ツツ岳の白色軽石を含むシルト～砂質土からなる。下位より褐灰～灰黄褐～黒褐色シルト質土からなるカマド周辺の下層、竪穴全体を埋める灰黄褐～黒褐色シルト質土、褐灰色土の上層からなる。これらは竪穴の縁から中央に向かって緩やかに傾きながら成層している。

床面 灰黄褐色砂質土を0.05mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。床面から土坑1～4を検出した。

土坑1は長径1.69m、短径0.28m、深さ0.57m。

土坑2は直径0.66m、深さ0.39m。

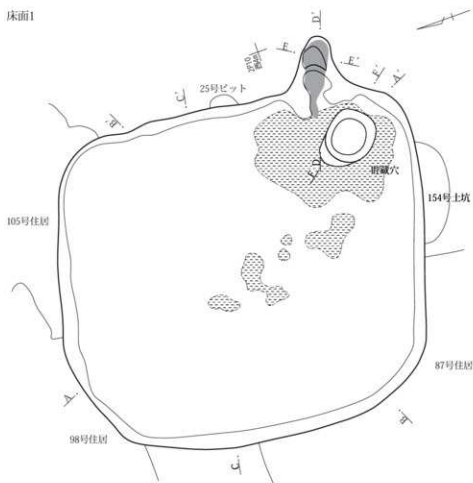
土坑3は長径1.48m、短径1.16m、深さ0.49m。

土坑4は長径0.80m、短径0.64m、深さ0.30m。

中央からは溝を検出し、竪穴の壁に沿って周回する。溝の最大の幅は0.26m、最少の底幅は0.10m、深さは0.20mである。土坑や溝は掘方埋土を切って構築し、埋土に覆われている。これらの遺構は竪穴住居の廃絶後に竪穴の床面を利用して構築された遺構群と考えられる。

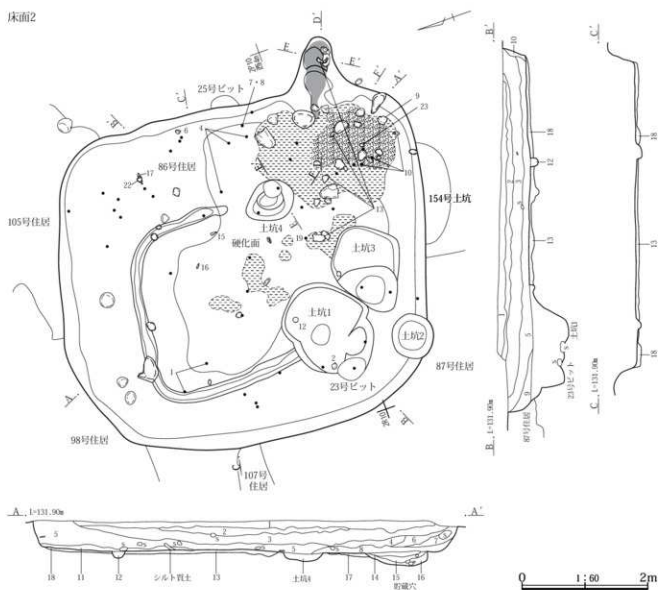
掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土～砂礫層を掘り込んで構

床面1



第419図 VII区86号住居(1)

床面2



- 1 褐色土(10YR5/1) 浅間B軽石混土層。多量の浅間B軽石と微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 5~20mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 浅間B軽石混土層。少量の浅間B軽石と微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 2~20mm大)を含む。
- 3 黒褐色シルト質土(10YR3/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石(ϕ 2~30mm大)・炭化粒子(ϕ 1~3mm大)・小礫(ϕ 5~30mm)を含む。
- 4 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子・焼土粒子(ϕ 1~3mm大)とにぶい黄褐色シルト質土ブロックを含む。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石(ϕ 2~40mm大)・炭化粒子(ϕ 2~4mm大)・小礫(ϕ 2~5mm大)を含む。
- 6 黒褐色シルト質土(10YR3/2) 灰層が下層に多く出土するが全体に灰を含む。微量の焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 7 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 2~5mm大)・小礫(ϕ 5~7mm大)を含む。
- 8 褐色シルト質土(10YR4/1) 少量の灰を含む層。
- 9 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 2~7mm大)・炭化粒子(ϕ 2~5mm大)を含む。
- 10 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/4) 泥の崩落土。
- 11 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の小礫(ϕ 2~5mm大)を含む。
- 12 灰黄褐色土(10YR4/2) 炭化粒子(ϕ 1~3mm大)・小円礫(ϕ 5~20mm大)を含む。
- 13 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 3~10mm大)・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。埴りやや良。
- 14 黒褐色土(10YR3/1) にぶい黄褐色土・灰・シルト質土の互層(7回までの互層)。
- 15 灰黄褐色土(10YR4/2) 椋名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~7mm大)・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)・小円礫(ϕ 20~70mm)を含む。
- 16 灰黄褐色土(10YR5/2) 炭化物・にぶい黄褐色シルト質土互層に堆積する。微量の小円礫(ϕ 10~100mm)を下層中心に含む。
- 17 黒褐色土(10YR3/1) 炭化層・にぶい黄褐色シルト質土の互層(6~7回までの互層)。
- 18 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(ϕ 2~20mm大)と少量の焼土粒子(ϕ 1~2mm大)・炭化粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。埴りやや良。

第420図 VII区86号住居(2)

築し、カマドの周辺では小ピットを検出した。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で奥壁は急な勾配で立ち上がる。燃焼部の右壁には長径0.24m、短径0.22m、厚さ0.10mの垂円礫が据えられており、これはカマド構築材と考えられる。燃焼部底は焼土帯が顕著で焚口周辺からは炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土が成層している。カマドは長さ1.47m、幅0.70m、深さ0.38mである。

貯蔵穴 掘方の調査で南東隅の壁際から長径0.85m、短径0.82m、深さ0.14mの土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。また、貯蔵穴の埋土はカマド前右側の範囲に広がる炭化物に覆われている。炭化物の分布は焚口周辺に広がる床面の炭化物を覆っていることから、貯蔵穴上の炭化物は竪穴住居廃絶後にカマド

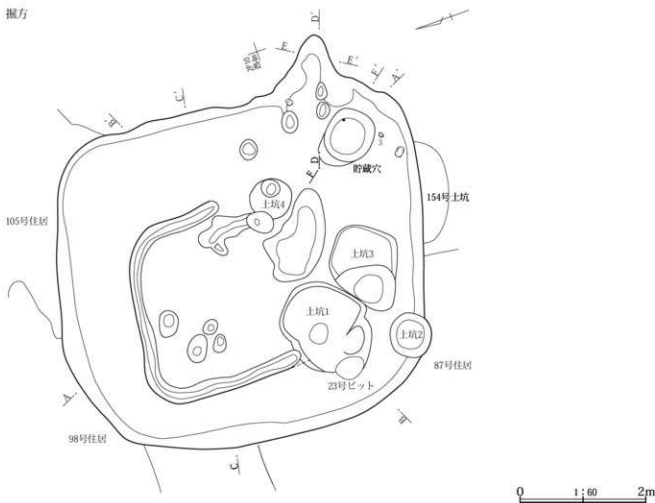
の崩落によってもたらされた可能性が高い。

柱穴 柱穴は検出されなかった。一边が5mを越える竪穴の規模から考えて、支柱穴を有しない構造の建物とは考えにくい。これは支柱穴底がⅫ・ⅩⅢ層の黄褐色砂礫層で止められたため、柱穴の輪郭が不明瞭である可能性が想定される。

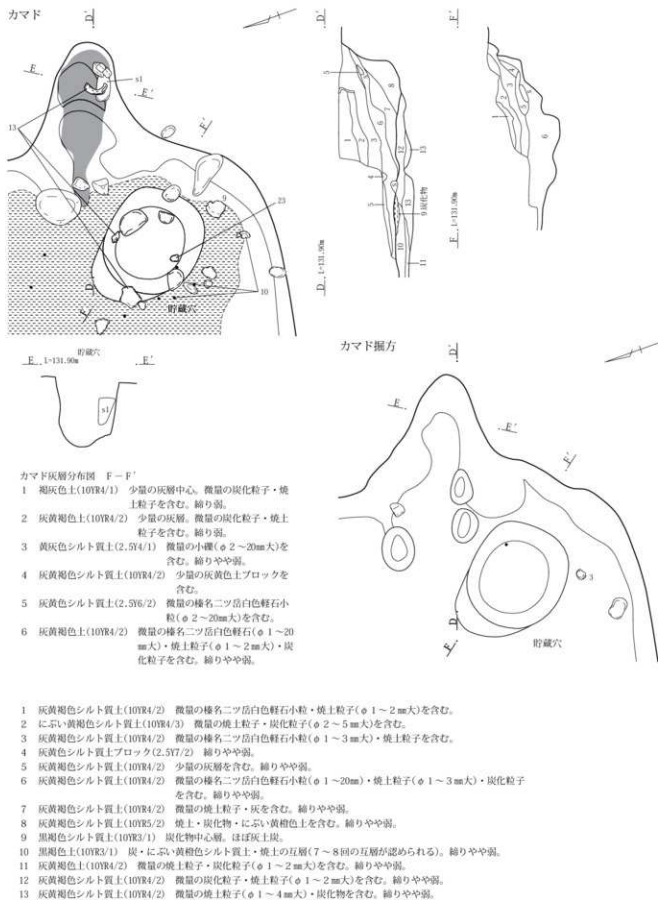
遺物 床面から多くの遺物が出土した。床面から須恵器の杯(2・4)、椀(9)、灰釉陶器の椀(12)、土師器の甕(14)、鉄釘(16)、刀子(17)、床面付近から須恵器の杯(1・6)、甕(13)、椀(8・10)が出土した。また、床面から砥沢石製の権衡(23)が出土したことが特筆される。出土遺物は10・11世紀内に年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀第4四半期。床面で検出された溝や土坑は86号住居の廃絶後に竪穴を利用して構築した際に構築されたものと想定される遺構群で、その性格は不明ながら隣接する観治遺構などとの関連が窺える。

掘方

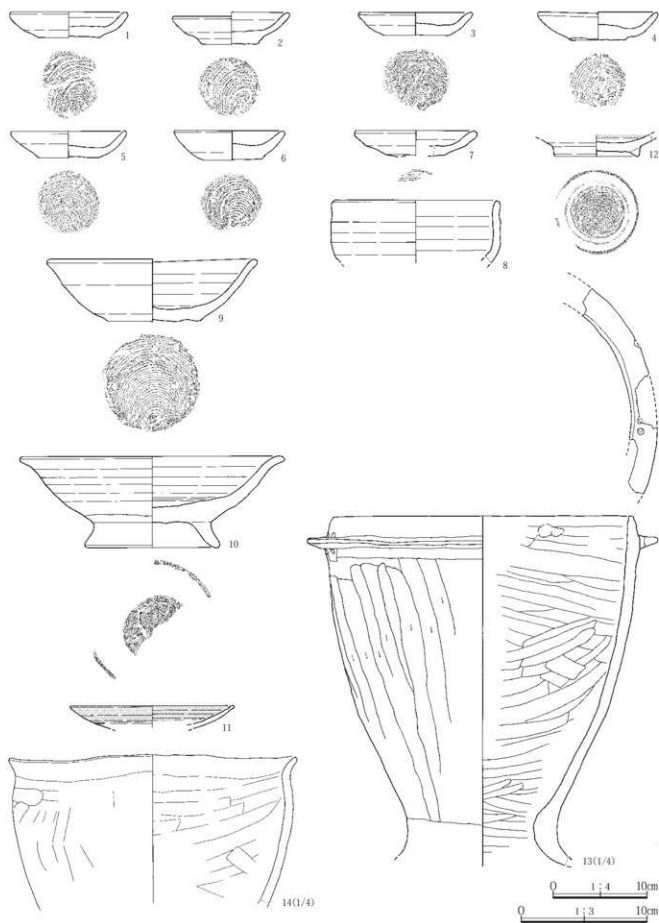


第421図 VII区86号住居(3)

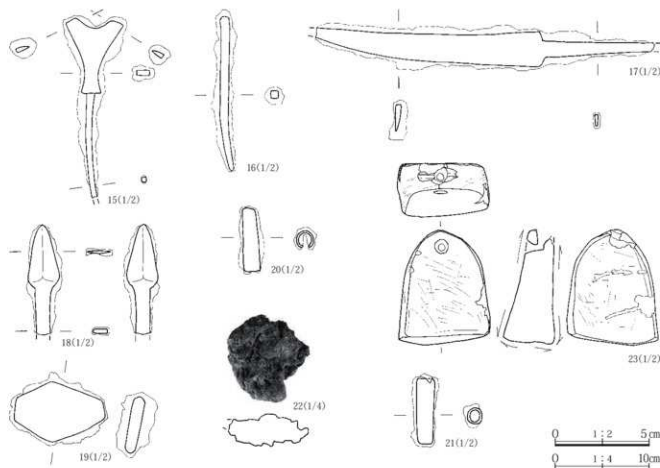


第422図 VII区86号住居(4)

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第423図 VII区86号住居の出土遺物(1)



第424図 VII区86号住居の出土遺物(2)

87号住居(第425～427図, PL.206・207・424)

グリッド 2 Q10

主軸方位 N7°E

重複 86号住居、167・169号土坑に切られる。153号土坑を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。北東部は86号住居により失われている。長辺は4.76m、短辺は3.90m、深さは0.41m、面積は16.62㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

床面 にぶい黄褐色砂質シルト質土や灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。南東隅の壁際から長径0.70m、短径0.62m、深さ0.32mの土坑1、南西隅の壁際から長径0.79m、短径0.74m、深さ0.29mの土坑2を検出した。また、中央から長辺2.28m、短辺1.20m、深さ0.10mの

浅い傘んだ方形の窪みを、南壁際のカマド周辺からは長径0.30～0.60mの円形の小ピットを多く検出した。

カマド 南壁の南東隅と南西隅に2基のカマドが位置する。床面での炭化物の分布や燃焼部底の状況から南東隅に位置する住居廃絶時のカマドをカマド1、南西隅の古いカマドをカマド2とする。カマド1・2の燃焼部は南壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。

カマド1の燃焼部底は緩やかに傾斜し、そのままの勾配で立ち上がり煙道に接続するが、燃焼部と煙道の接続部は不明瞭である。燃焼部左右の壁には長径0.27～0.28m、短径0.10～0.14m、厚さ0.07～0.10mの垂円礫2点が据えられており、これらはカマド構築材である。焚口の床面には、埋土中に長径0.35m、短径0.19m、厚さ0.09mの垂円礫が出土した。これは天井高架材がカマドの崩落に伴って移動したものと考えられる。焚口周辺からは炭化物の広がりを検出した。カマド1は煙道を含む長さ1.14m、煙道長0.50m、燃焼部と煙道の幅0.35～0.32m、深さ0.28mである。

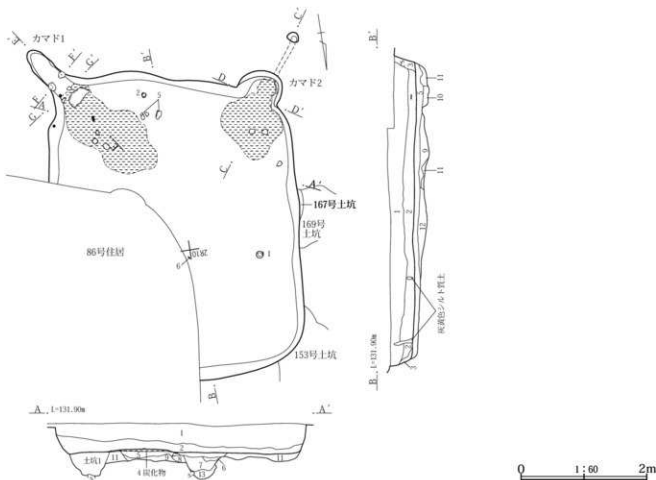
カマド2の燃焼部底は水平で、そのまま煙道に接続する。燃焼部から煙道にかけて割り抜かれた天井が残されており、長さは1.06mにおよぶ。煙道は約45°の勾配で立ち上がり煙出しに接続する。燃焼部底や焚口からは焼土ブロックや炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は炭化物や焼土を含む褐灰〜灰黄褐色砂質土である。カマド2は煙道を含む長さ1.27m、煙道長1.10m、燃焼部の幅0.70m、煙道の幅0.23m、煙出しの長さ0.54m、煙出しの幅0.28m、深さ0.31mである。カマド2の構造は、燃焼部と煙道底が水平に連続し、煙出しへ接続する

特異な構造を呈している。これは長煙道カマドに分類される古代の東北地方で一般的な竪穴住居のカマドの構造に類似しており、特筆される。

貯蔵穴 貯蔵穴は検出されなかった。

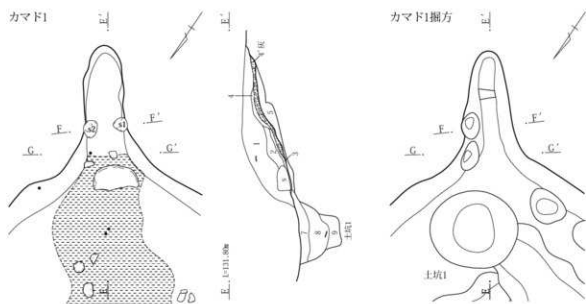
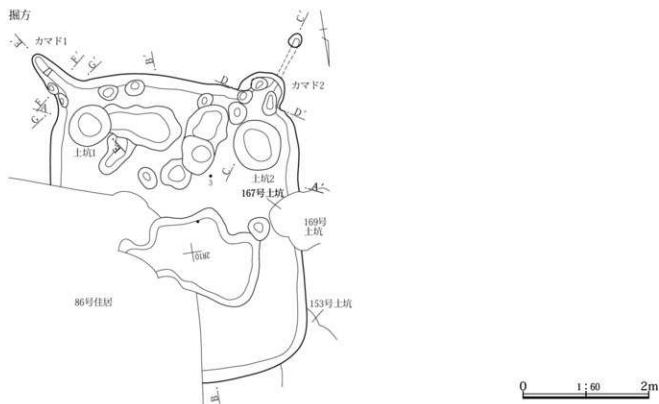
柱穴 柱穴は検出されなかった。一辺が5m弱におよぶ竪穴の規模から考えて、主柱穴を有しない構造の建物とは考えにくい。これは主柱穴底がⅫ・Ⅻ層の黄褐色砂礫層で止められたため、柱穴の輪郭が不明瞭である可能性が想定される。

遺物 床面から黒色土器の椀(1)、鉄釘(6)、床面付近



- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の椀名二ツ岳白色軽石(φ2~40mm大)・炭化粒子(φ2~30mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の椀名二ツ岳白色軽石(φ2~40mm大)・炭化粒子・炭化材(φ2~30mm大)・焼土粒子(φ2~3mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の小礫(φ20~40mm大)を含む。=使用面
- 4 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物層。床面の可能性あり。締りやや弱。
- 5 褐灰色土(10YR4/1) 炭化物が互層に入り、微量のブロックを混入する。微量の椀名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。締りやや良。
- 6 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の椀名二ツ岳白色軽石(φ1~40mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 7 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の椀名二ツ岳白色軽石(φ1~40mm大)・炭化粒子(φ1~10mm大)を含む。
- 8 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(φ1~2mm大)・炭化粒子(φ1~10mm大)を含む。
- 9 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椀名二ツ岳白色軽石(φ1~25mm)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 10 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 少量の椀名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 11 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3)+砂質土 微量の椀名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む
- 12 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 13 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)・小円礫(φ20~40mm大)を含む。

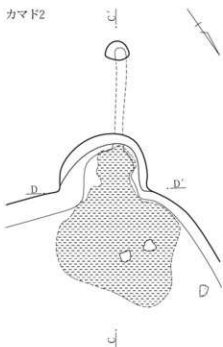
第425図 VII区87号住居(1)



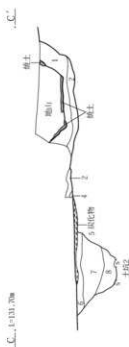
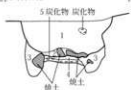
- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石大粒(φ 5~70mm大)・炭化粒子(φ 2~4mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ 2~3mm大)・焼土粒子・炭化粒子を含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の焼土粒子を含む。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の灰層と焼土粒子を含む。締りやや弱。
- 4' 褐灰色土(10YR4/1) 灰中心の層。締りやや弱。
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ 2~20mm大)と灰黄色シルト質上ブロックを含む。
- 6 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ 3~10mm大)・焼土粒子(φ 1~2mm大)・炭化粒子を含む。締りやや弱。
- 7 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒(φ 2~8mm大)・焼土粒子・炭化粒子を含む。
=上坑1
- 8 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ 2~3mm大)を含む。締りやや弱。=上坑1
- 9 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ 2~8mm大)を混入する。締りやや弱。=上坑1

第426図 VII区87号住居(2)

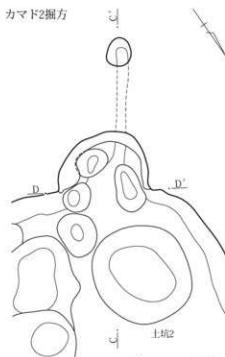
カマド2



D., 1:131.70m

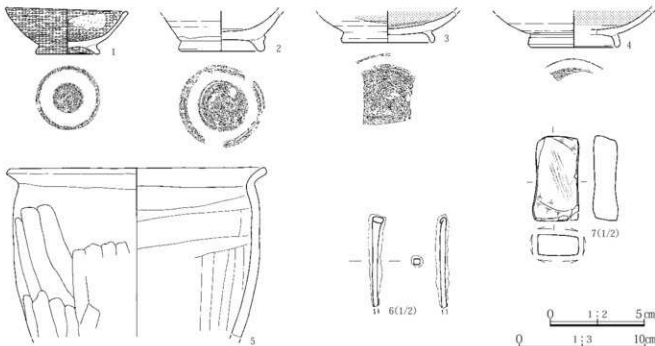


カマド2掘方



0 1:30 1m

- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ盾白色軽石(φ1~7mm)を含む。
- 2 褐色土(10YR4/1) 少量の灰を含む。微量の焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。=使用面
- 3 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の焼土粒子(φ1~3mm大)とFP二次堆積土を含む。
- 4 褐色土(10YR4/1) 灰+焼土粒子+炭化物。締りやや弱。
- 5 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物中心層。締りやや弱。
- 6 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量のFP二次堆積土混じりの層。微量の炭化粒子(φ1~3mm大)・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。=土坑2
- 7 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ盾白色軽石小粒(φ2~3mm大)・炭化粒子(φ2~5mm大)を含む。=土坑2
- 8 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2)+砂質土 微量の炭化粒子(φ1~3mm大)・小円礫(φ30~70mm)を含む。締りやや弱。=土坑2



第427図 VII区87号住居と出土遺物

から須恵器の椀(2)、埋土から砥石(7)、掘方から灰釉陶器の椀(3)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

89号住居(第428・429図、Pl.208・424)

グリッド 3C7

主軸方位 N86°W

重複 24号住居を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する規模の大きな竪穴である。南東部の大部分は攪乱により失われている。長辺は6.22m、短辺は5.80m+、深さは0.64m、検出された最大の面積は12.71㎡、想定される最大の面積は36.0㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土が成層し、層厚0.69mの灰黄褐色シルト質土の単層が水平に堆積して竪穴を埋めている。

床面 灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。北壁際の中央から炭化物のブロック状の広がりを検出した。

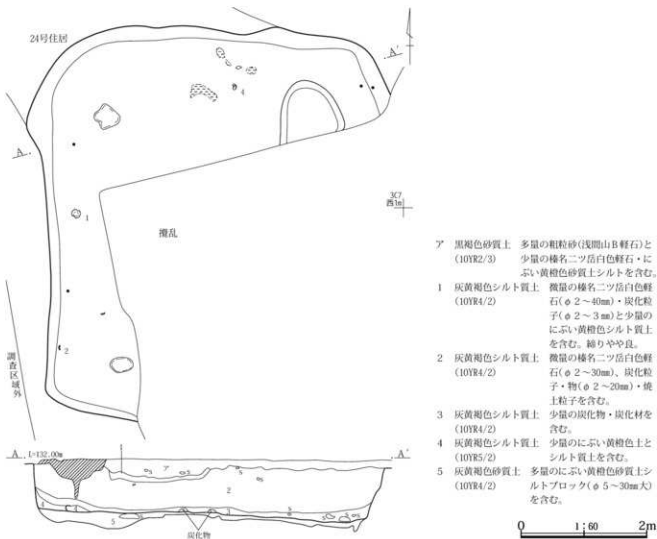
掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。西壁際から円形のごく浅い窪みを検出した。北壁～北西隅の壁際は幅0.93～1.50mの浅い溝状の窪みが周回する。

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。調査区外に存在する可能性がある。

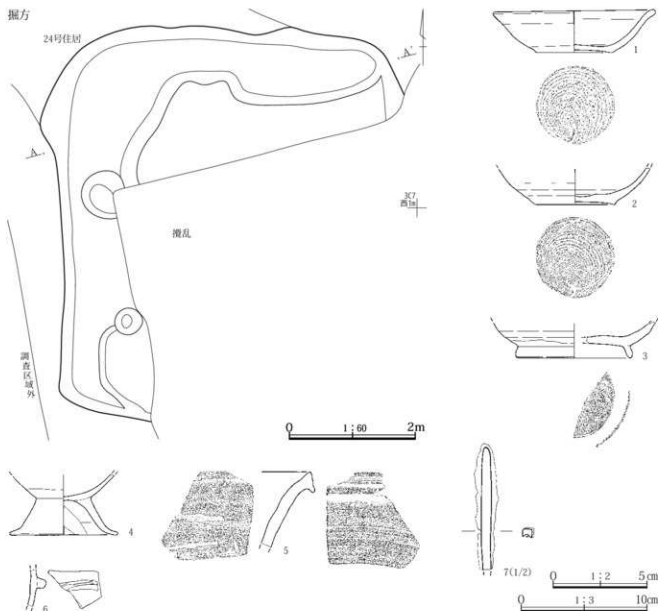
柱穴 柱穴は検出されなかった。一边が6mにおよぶ竪穴の規模から考えて、主柱穴を有しない構造の建物とは考えにくい。

遺物 床面付近から須恵器の杯(1・2)、土師器の台付甕(4)、埋土から須恵器の椀(3)、甕(5)、灰釉陶器の瓶(6)が出土した。

時代 10世紀後半に帰属する24号住居との調査での新旧



第428図 VII区89号住居



第429図 VII区89号住居と出土遺物

関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代9世紀第3・4四半期と想定される。

95号住居(第430・431図, PL.211・424)

グリッド 2 T 11

主軸方位 N81° E

重複 84号住居、102・103・106・111号土坑に切られる。
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。南部は84号住居により失われている。長辺は4.58m、短辺は3.27m、深さは0.37m、検出された最大の面積は13.20㎡である。

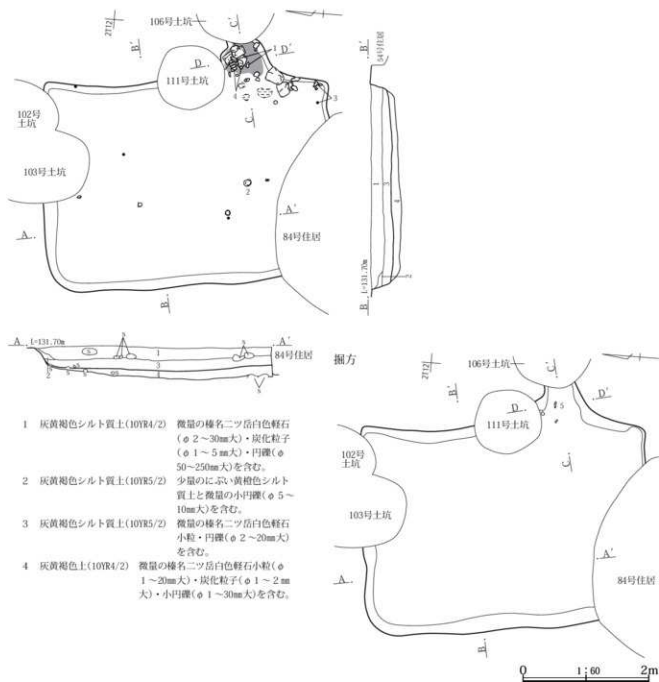
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土が成

層している。

床面 灰黄褐色土を0.16mほど厚く貼って、平坦な床面を構築している。カマド周辺の広範囲で硬化面を検出した。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。燃烧部は東壁から奥を掘り込み、壁の外側に構築している。燃烧部底は水平で、煙道との接続部は106号土坑により失われている。燃烧部の左壁の埋土からは長径0.20~0.37mの垂円~角礫2点が出土し、これらはカマドの崩落により移動したカマド構築材と考えられる。燃烧部底からは



第430図 VII区95号住居

焼土や炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色シルト質土からなる。カマドの長さは0.90m、幅0.80m、深さ0.40mである。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(3)、床面付近から須恵器の椀(2)、カマド使用面から須恵器の杯(1)、土師器の甕(4)が出土した。

時代 平安時代9世紀第1四半期。

96号住居(第432・433図、PL.212・213・424)

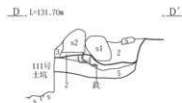
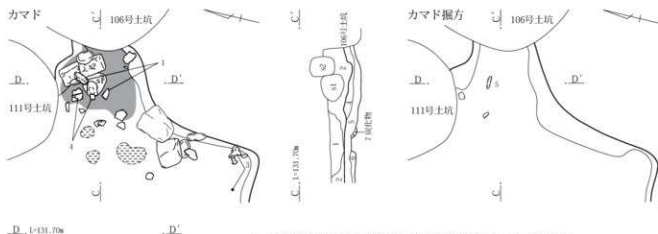
グリッド 2 S 9

主軸方位 N 85° E

重複 82・97号住居、56・144・156号土坑、13号ピットに切られる。60号住居、143号土坑を切る。

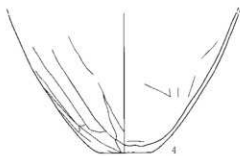
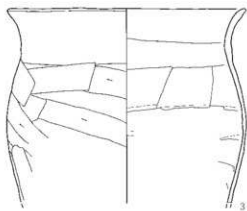
形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。南東部は82号住居により失われている。長辺は3.60m、短辺は3.40m、深さは0.42m、検出された最大の面積は10.60㎡である。

第4章 第2面の遺構と出土遺物



- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~4mm大)・焼土粒子(ϕ 1mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(ϕ 1mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量のにぶい黄褐色シルト質土と微量の炭化粒子(ϕ 2~4mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(ϕ 1~4mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(ϕ 1~30mm)・炭化物を含む。
- 6 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の炭化物粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。
- 7 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物ブロック。

0 1:30 1m



0 1:2 5cm
0 1:3 10cm

第431図 VII区95号住居と出土遺物

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土が成層する。

床面 灰黄色シルト質土を0.09mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。カマド周辺と北部に硬化面を検出した。

掘方 Ⅻ・Ⅺ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。カマド周辺と南西隅の壁際から長辺1.45～1.80m、深さ0.03～0.06mの浅い歪んだ方形の窪みを検出した。**カマド** 東壁の中央北東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から手前を掘り込んで壁の内側に構築している。燃焼部底は水平で緩やかな勾配で煙道に接続して立ち上がる。燃焼部左右の壁にはS1～S7の安山岩の垂円礫7点が据えられており、礫は全て燃焼部側に内斜して据えられ、整った「ハ」の字形を呈している。これらはカマド構築材である。

S1は長径31m、短径0.30m、厚さ0.10mで34°内斜する。

S2はS1と対になり長径0.36m、短径0.29m、厚さ0.11mで46°内斜する。

S3はS1とS4の間に位置し、長径0.25m、短径0.12mである。

S4は長径0.47m、短径0.27m、厚さ0.14mで36°内斜する。

S5はS4と対になり長径0.45m、短径0.23m、厚さ0.13mで34°内斜する。

S6は長径0.50m、短径0.26m、厚さ0.13mで35°内斜する。

S7はS6と対になり長径0.49m、短径0.18m、厚さ0.15mで34°内斜する。

これらの礫が埋め込まれた痕跡はカマド掘方で検出された小ピットのS2S4～S7にそれぞれが対応する。

燃焼部奥のS4・S5の上には長径0.45m、短径0.15m、厚さ0.11mの安山岩の棒状円礫が置かれており、これはカマド燃焼部と煙道の接続部を構成する天井高架材と考えられる。また焚口には燃焼部底にめり込んで長径0.48m、短径0.25m、厚さ0.13mの安山岩の扁平円礫が埋土中から出土した。これはカマド焚口を構成するS6・S7の上位に置かれた天井高架材と考えられる。燃焼部はS4とS7及びS5とS6の対角線上に位置しており、袖の壁のみで構成される。この空間に甕などの土器が置かれていたものと考えられる。燃焼室の空間は礫の構造から

概算して、約40リッターと考えられる。燃焼部底と焚口からは炭化物和焼土の広がりを検出した。カマド埋土は炭化物を含む黄灰褐色シルト質土が成層し、掘方埋土は灰黄色シルト質土を貼って構築している。煙道を含むカマドの長さは1.21m、燃焼部長0.50m、燃焼部底幅0.34m、煙道長0.68m、煙道幅0.30m、カマド幅0.65m、深さ0.41mである。

貯蔵穴 貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から黒色土器の椀(3)、須恵器の杯蓋(4)、掘方から土師器の杯(1)が出土した。出土遺物は8～10世紀内に年代幅を有する。

時代 11世紀に帰属する60号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀と想定される。

98号住居(第434～436図、PL.215・424)

グリッド 2 Q11

主軸方位 N87°W

重複 86号住居、17・94・127・132・157号土坑に切られる。105号住居、162号土坑、26号ピットを切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は4.58m、短辺は4.36m、深さは0.23m、面積は16.50㎡である。

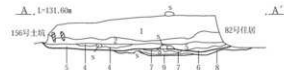
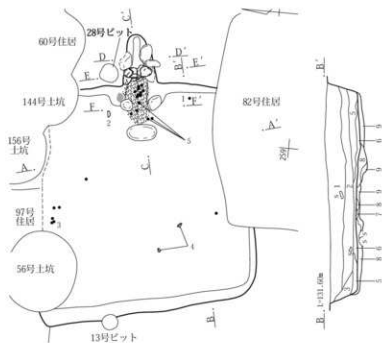
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

床面 灰黄褐色土を0.08mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。カマド周辺と中央に硬化面を検出した。

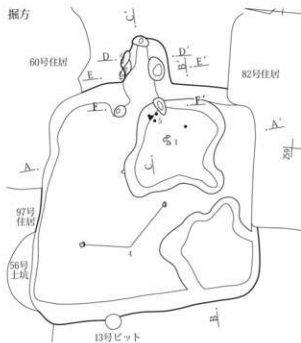
掘方 Ⅻ・Ⅺ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。カマド周辺と南東部は深さ0.02～0.07mほど段状に窪んでいる。北東隅の北壁際で直径0.29m、深さ0.24mのP1、南西隅で長径0.50m、短径0.44m、深さ0.21mのP2のピットを検出した。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で奥壁は急な勾配で立ち上がる。焚口と燃焼部境界の左右の壁にはS1・S2の垂円礫2点が据えられており、礫は燃焼部側に内斜して据えられ、「ハ」の字形を呈している。これらはカマド構築材である。S1

第4章 第2面の遺構と出土遺物



- 1 灰黄褐色シルト質土 (10YR4/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)・小円礫(φ10~100mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土 (10YR5/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)・小円礫(φ10~50mm大)・炭化粒子(φ1mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土 (10YR4/2) 棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・少量の灰褐色シルト質土を含む。
- 4 灰黄褐色シルト質土 (10YR5/2) 微量の焼土粒子(φ1mm大)・灰を含む。締り良。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 小円礫(φ10~50mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色シルト質土 5層上よりやや黒味がかかる。微量の炭化物粒子(φ10~20mm大)を含む。=使用面
- 7 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量の灰白色土・FP二次堆積シルトを含む。
- 8 灰黄褐色シルト質土 (10YR4/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)・焼土粒子(φ1mm大)を含む。締り良。一部硬化。
- 9 灰黄色シルト質土 微量の小円礫(φ10~30mm)を含む。締りやや良。(2.57/2)



0 1:60 2m

第432図 VII区96号住居

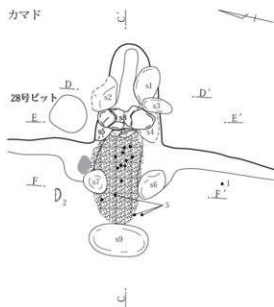
は長径0.24m、短径0.15m、厚さ0.08mで43°内斜する。S2はS1と対になり長径0.23m、短径0.22m、厚さ0.08mで37°内斜する。燃焼部の中央には、S3の垂円礫が据えられている。礫は直径0.18m、厚さ0.16mで、これは支脚と考えられる。燃焼部の奥には長径0.42m、短径0.20m、厚さ0.15mの安山岩の棒状垂角礫が煙道上に置かれており、これはカマド燃焼部と煙道の接続部を

構成する天井高架材と考えられる。燃焼部底と焚口からは炭化物と焼土の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色シルト質土が成層する。煙道を含むカマドの長さは1.07m、煙道長0.30m、煙道幅0.33m、カマド幅0.75m、深さ0.23mである。

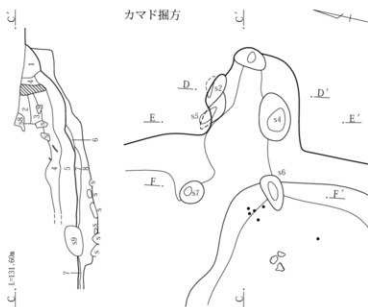
貯蔵穴 貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たな

カマド



カマド掘方



D, 1:131.60m



E, 1:131.60m

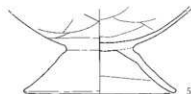
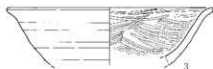


E, 1:131.60m



- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・シルト粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)・焼土粒子($\phi 1$ mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の焼土粒子($\phi 1$ mm大)・灰を含む。締り良。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 3$ mm大)・焼土粒子($\phi 1 \sim 4$ mm大)を含む。締り良。=使用面
- 6 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 少量の灰と微量の炭化粒子・焼土粒子を含む。締り良。
- 7 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 多量の灰と焼土粒子・炭化物と微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。締り良。
- 8 灰黄色シルト質土(2.5Y6/2) 微量の焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)を含む。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第433図 VII区96号住居と出土遺物

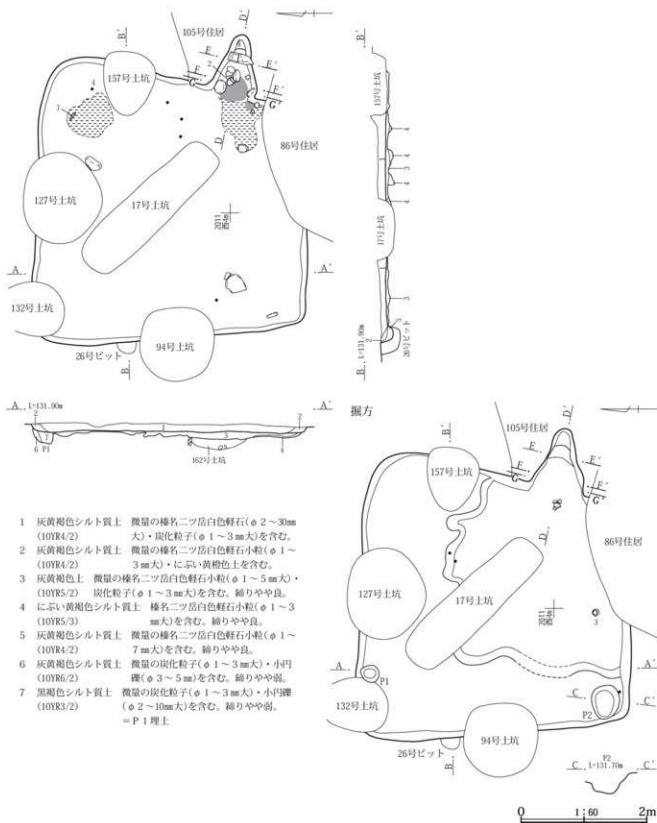
第4章 第2面の遺構と出土遺物

い構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から刀子(7)、カマド使用面から土師器の甕(2)、掘方から須恵器の椀(1)、埋土から須恵器の甕

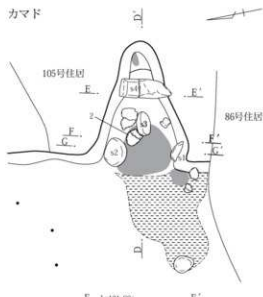
(4)、土師器の羽釜(3)が出土した。

時代 平安時代10世紀。

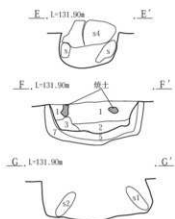
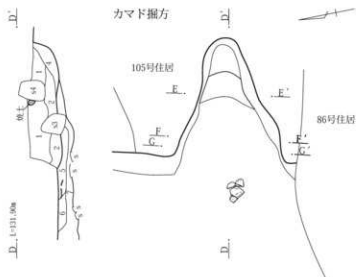


第434図 VII区98号住居

カマド

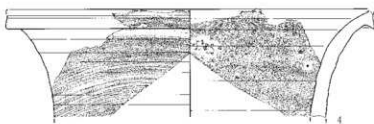
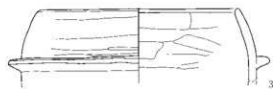
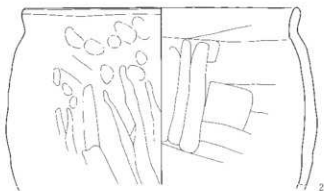
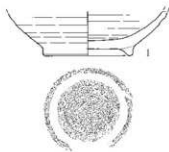


カマド掘方



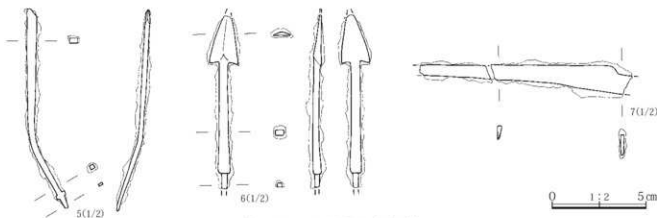
- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石(ϕ 1~30mm大)・焼土・ブロックを含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~3mm大)・焼土粒子(ϕ 1~5mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 少量の焼土粒子・ブロック(ϕ 3~30mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~3mm大)、炭化粒子・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。締りやや弱。
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 6 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物層と灰黄褐色シルト質土の互層(7回までの互層)。締りやや弱。
- 7 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子・焼土粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。締りやや弱。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第435図 VII区98号住居と出土遺物



第436図 VII区98号住居の出土遺物

104号住居(第437・438図、PL.220・221・424・425)

グリッド 2 R 8

主軸方位 N83° E

重複 85号住居に切られる。

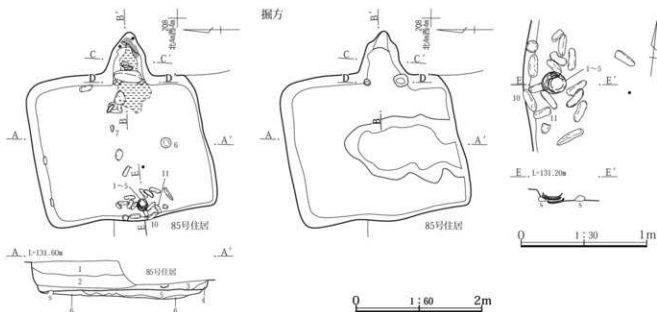
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は2.78m、短辺は2.34m、深さは0.49m、面積は5.47㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土が水平に成層する。

床面 灰黄褐色シルト質土を0.14mほど貼って、平坦な床面を構築している。カマド前と竪穴の西南部を除く前面に硬化面を検出した。

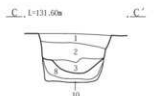
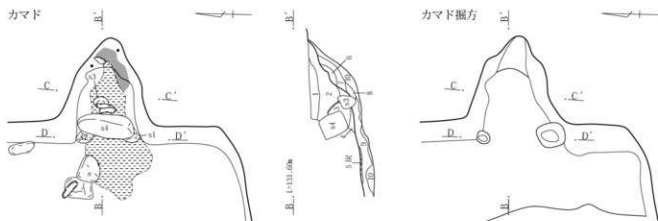
掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。中央から南壁には溝状に深さ0.04~0.07mの窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央やや南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに傾き、奥壁は急な



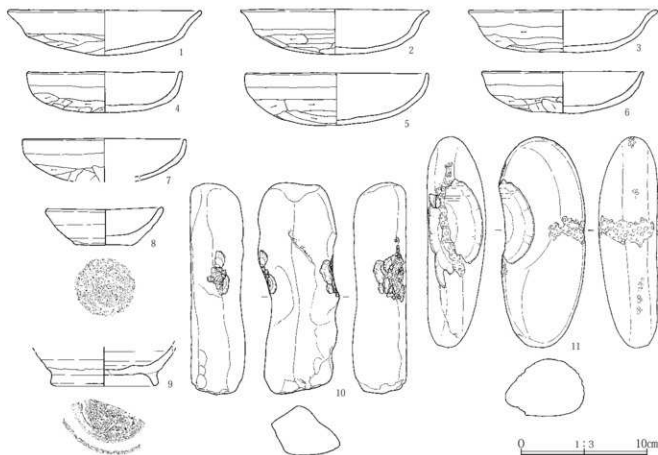
- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ2~18mm)・炭化粒子(φ1~2mm大)・小円礫(φ10~40mm大)・にふい黄褐色PP二次堆積土を含む。締りやや良。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ2~10mm大)と微量の炭化粒子(φ1~2mm大)・小円礫(φ10~30mm大)を含む。締りやや良。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・にふい黄褐色シルト質土を含む。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)を含む。

第437図 VII区104号住居



- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)を含む。締りやや弱。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm)・炭化粒子(φ1mm大)を含む。締りやや弱。
- 4 黒褐色土(10YR3/2) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。
- 5 黒褐色土(10YR3/1) 炭中心層。微量の焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。
- 6 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の焼土粒子(φ1mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。
- 7 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1~7mm)を含む。締りやや弱。
- 8 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の極名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)を含む。締りやや良。
- 9 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ1~7mm大)を含む。締りやや弱。
- 10 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 極名ニツ岳白色軽石(φ10~30mm)・焼土粒子(φ1mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。

0 1:30 1m



第438図 VII区104号住居と出土遺物

勾配で立ち上がる。焚口と燃焼部境界の左右の壁には S1・S2の安山岩の垂円礫2点が据えられており、礫はほぼ垂直に据えられている。これらはカマド構築材である。S1は長径0.33m、短径0.18m、厚さ0.07mである。S2はS1と対になり長径0.39m、短径0.15m、厚さ0.10mである。燃焼部の中央には、S3の垂円礫が据えられている。礫は長径0.16m、短径0.10m厚さ0.10mで、これは支脚と考えられる。燃焼部のS1・S2の奥には長径0.45m、短径0.20m、厚さ0.18mの四面を加工した角四石安山岩質軽石が埋土中から出土した。これはカマド燃焼部の天井高架材と考えられる。燃焼部底と焚口からは炭化物和焼土の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色シルト質土が成層する。カマドの長さは0.80m、幅0.73m、深さ0.28mである。貯蔵穴は検出されなかった。柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 西壁中央の壁際の床面からこも編み石と思われる棒状礫16点(10・11)、と完形の土師器の杯(1～5)の5点が出土した。これらは何らかの祭祀行為によって住居に残されたものと考えられる。

時代 奈良時代8世紀第2・3四半期。

105号住居(第439・440図、PL.222・425)

グリッド 2 Q10

主軸方位 N81°E

重複 86・98号住居、27号ピットに切られる。

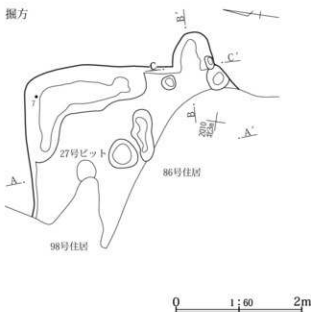
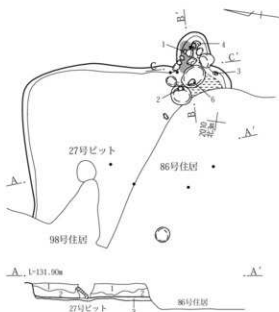
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居で、西部と南部は86・98号住居により失われている。長辺は3.33m、短辺は2.96m+、深さは0.23m、検出された最大の面積は9.49㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含むふい黄褐～灰黄褐色土が成層する。

床面 ぶい黄褐色シルト質土を0.04mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。カマドから中央に硬化面を検出した。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。北東隅の壁際に幅0.64m、深さ0.07mの浅い溝状の窪みが周回する。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに傾き、そのまま立ち上がる。焚口と燃焼部境界の左右の壁にはS1・S2の安山岩の垂円礫2点が据えられている。礫は北側に斜めに傾いており、これらはカマド構築材である。S1は長径0.38m、



- 1 灰黄褐色土(10TR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～5mm大)・炭化粒子(φ1～3mm大)を含む。綿りやや弱。
- 2 ぶい黄褐色土(10TR5/3) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ2～10mm大)・炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。綿りやや弱。
- 3 ぶい黄褐色シルト質土(10TR5/3) 微量の炭化粒子(φ1mm大)を含む。

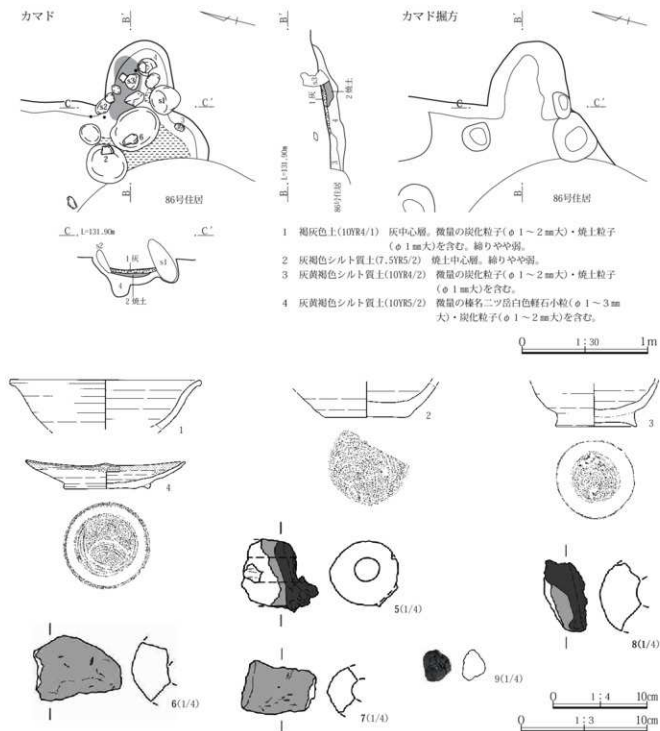
第439図 VII区105号住居

短径0.24m、厚さ0.15mである。S 2はS 1と対になり長径0.21m、短径0.10m、厚さ0.06mである。燃烧部の中央には、S 3の垂角礫が据えられている。礫は長径0.20m、短径0.12m、厚さ0.09mで、0.08m埋め込まれている。これは支脚と考えられる。燃烧部底と焚口からは炭化物和焼土の広がりを出した。カマド埋土は灰黄褐色シルト質土からなる。カマドの長さは0.63m、幅

0.54m、深さ0.12mである。貯蔵穴は検出されなかった。柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマド使用面付近から須恵器の杯(1)、椀(3)、灰釉陶器の輪花皿(4)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。



第440図 VII区105号住居と出土遺物

106号住居(第441・442図、PL.223・425)

グリッド 3 B 10

主軸方位 N81° E

重複 183号土坑を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.07m、短辺は2.75m、深さは0.30m、面積は7.08㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含むにぶい灰黄褐色土からなり、床面は黒褐色砂質土の薄層が水平に覆う。

床面 灰黄褐色土を0.05mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。カマドから東部および西南部の床に硬化面を検出した。

掘方 Ⅻ・Ⅺ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。東壁中央の壁際に長径0.30m、短径0.28m、深さ0.10mのビットであるP1を検出した。

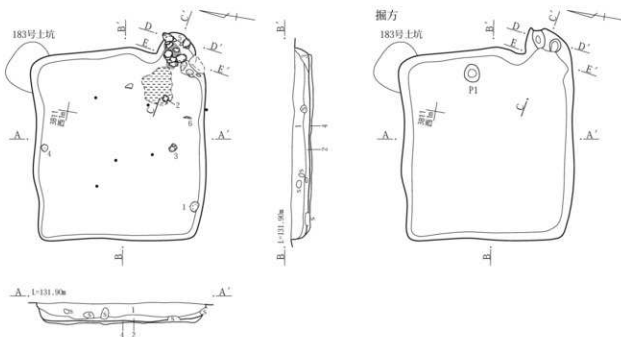
カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅に位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、緩やかに傾きながら立ち上がる。

燃焼部奥壁には長径0.20～0.22mの安山岩の垂円礫2点が据えられている。また右壁の袖部には長径0.33mの垂円礫が埋め込まれている。これらはカマド構築材である。燃焼部の中央には、垂円礫が垂直に据えられている。礫は長径0.13m、短径0.12m、厚さ0.06mで、0.05m埋め込まれており、これは支脚と考えられる。燃焼部底からは焼土帯、焚口周辺は炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色シルト質土からなる。カマドの長さは0.78m、幅0.80m、深さ0.25mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(3)、黒色土器の椀(1)、灰軸陶器の椀(4)、刀子(6)、床面付近から須恵器の杯(2)、カマド使用面から須恵器の羽釜(5)が出土した。出土遺物は10世紀内に幅を有する。

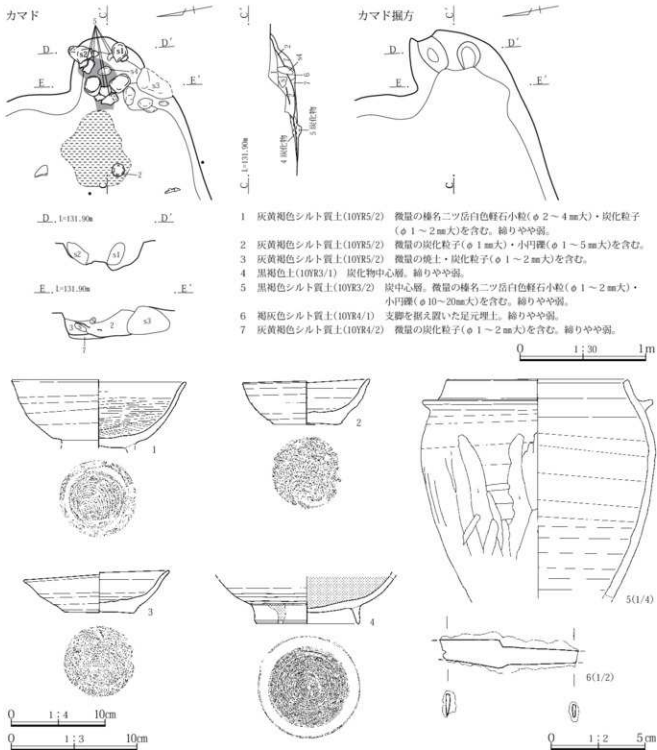
時代 平安時代10世紀後半。



- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm大)・炭化粒子(φ1～5mm大)・焼土粒子(φ1～2mm大)・小円礫(φ10～100mm)を含む。
- 2 黒褐色砂質土(10YR3/1) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～5mm大)・炭化粒子(φ1～3mm大)・小円礫(φ10～100mm)を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2) 壁の崩落土。
- 4 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の小円礫(φ10～50mm)を含む。稀り良。

0 1:60 2m

第441図 Ⅷ区106号住居



第442図 VII区106号住居と出土遺物

116号住居(第443・444図、PL.224)

グリッド 2 L 8

主軸方位 N84°W

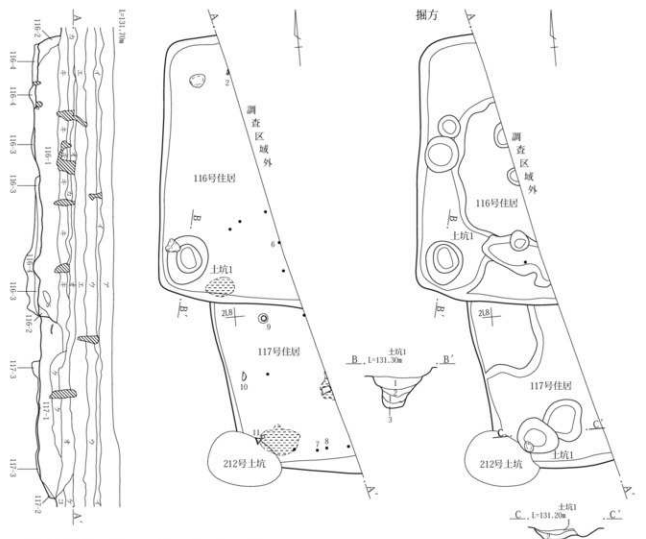
重複 117号住居を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴で、南部の大部分は調査区外に存在する。長辺は

4.25m、短辺は2.22m+、深さは0.35m、検出された最大の面積は5.47㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼り、やや凹凸のある床面を構築している。南西隅の壁際に長径0.79m、短



ア 褐灰色砂質土(10YR5/1) 現代客土=農業用ビニール等混入

イ 黄灰色土(2.5Y/1) 現代水田耕作上。

ウ 暗黄灰色土(2.5Y4/2) 近代水田耕作上。上半部鉄分凝固により赤褐色化。

エ 灰色土(5Y5/1) 近代水田耕作上。

オ 褐灰色土(10YR4/1) 多量の浅間A軽石と少量の種名ニツ岳白色軽石大粒を含む。天明3年泥流上、所々鉄分凝固により赤褐色化。

カ 褐灰色土(10YR4/1) 少量の種名ニツ岳白色軽石を含む。近世耕作上。(少量の浅間A軽石を含む)

キ 褐灰色土(10YR4/1) 少量の種名ニツ岳白色軽石を含む。近世耕作上。(少量の浅間A軽石を含まない)

ク 灰黄褐色弱粘質土(10YR6/2) 多量の浅黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)と少量の種名ニツ岳白色軽石を含む。=浅い土坑跡又は溝跡埋上

ケ 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の粗粒砂と少量の種名ニツ岳白色軽石を含む。

コ 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 多量の種名ニツ岳白色軽石大粒と少量の小円礫を含む。

116-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石を含む。接する117-1層上に近似するが色調やや明るい。

116-2 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石大粒・にぶい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ30~50mm大)を含む。

116-3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石と少量のにぶい黄褐色砂質土シルト大ブロック(φ30~50mm大)と多量の炭化物を含む。=貼り床土

116-4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石と少量の炭化物・にぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ10~30mm大)を含む。

117-1 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石・炭化物粒子を含む。

117-2 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)を含む。

117-3 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石を含む。中ほどに巾10~20mmの炭化物層が堆積。全体に硬化。=貼り床土

116号住居土坑1 B-B'

1 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量の種名ニツ岳白色軽石小粒・炭化物を含む。

2 灰黄褐色土(10YR5/2) 多量のにぶい黄褐色砂質土シルトブロック(φ20~40mm大)と少量の炭化物を含む。

3 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量のにぶい黄褐色砂質土シルト小ブロック(φ5~15mm大)・炭化物を含む。

117号住居土坑1 C-C'

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 多量の炭化物と微量の種名ニツ岳白色軽石を含む。

2 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量の炭化物と微量の種名ニツ岳白色軽石を含む。

0 1:60 2m

第44図 VII区116・117号住居

径0.65m、深さ0.50mの土坑1を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴の可能性がある。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。長径0.35～0.55mの円形の窪みが多く検出された。

カマド カマドは検出されなかった。調査区外に存在する可能性がある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(6)、床面付近から灰軸陶器の椀(2)、埋土から灰軸陶器の椀(3・4)、瓶(5)、段皿(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半と想定される。

117号住居(第443・444図、PL.225・425)

グリッド 2 K 7

主軸方位 N84°E

重複 116号住居に切られる。212号土坑を切る。

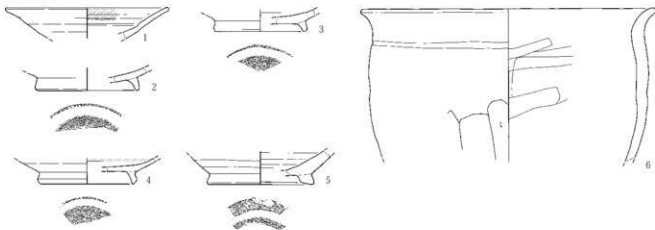
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴で、東部は116号住居により失われ、南部の大部分は調査区外に存在する。長辺は2.65m+、短辺は1.64m+、深さは0.26m、検出された最大の面積は3.91m²である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色土からなる。

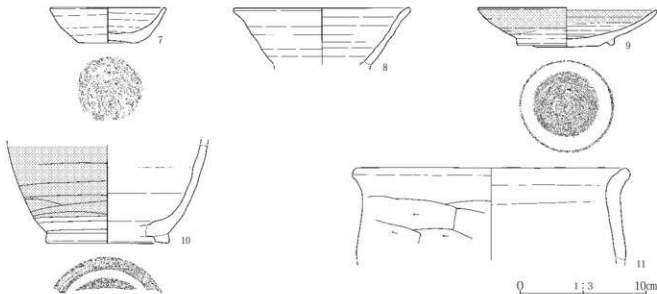
床面 灰黄褐色砂質土を0.04mほど薄く貼り、ほぼ平坦な床面を構築している。南西隅の壁際に炭化物の広がりを検出した。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方

116号住居



117号住居



第444図 VII区116・117号住居の出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物

を構築している。南西隅の壁際に長径0.67m、短径0.53m、深さ0.22mの土坑1を検出した。

カマド カマドは検出されなかった。調査区外に存在する可能性がある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(11)、床面付近から灰軸陶器の皿(9)、須恵器の椀(8)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

119号住居(第445図、PL.226)

グリッド 2 K 6

主軸方位 N84°E

重複 213号土坑に切られる。117号住居にやや近接する。

形状と規模 調査区の南東隅に位置する隅丸方形を呈す

る竪穴で、東～南部の大部分は調査区外に存在する。長辺は2.20m+、短辺は2.16m+、深さは0.37m、検出された最大の面積は3.43㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石と浅間Cテフラの軽石を多く含む灰黄褐～黒褐色土からなる。

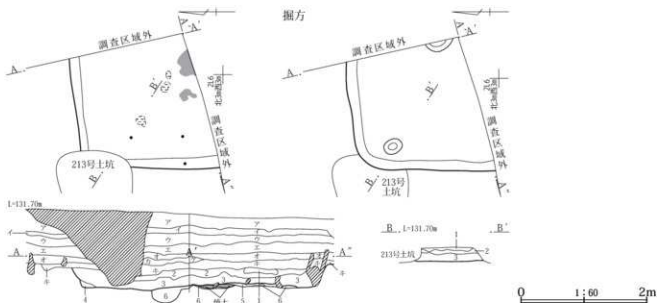
床面 炭化物を多く含む灰黄褐色土を0.02mほど薄く貼り、ほぼ平坦な床面を構築している。床面からブロック状の炭化物や焼土の広がりを検出した。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

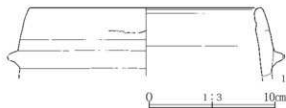
カマドや貯蔵穴 カマドや貯蔵穴は検出されなかった。カマドは調査区外に存在する可能性がある。

遺物 埋土から須恵器の羽釜(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀。



- ア 褐灰色砂質土(10YR5/1) 現代客土=農業用ビニール等混入
- イ 黄灰色土(2.5Y5/1) 現代水田耕作上。
- ウ 暗灰黄色土(2.5Y4/2) 近代水田耕作上。上半部鉄分凝固により赤褐色化。
- エ 灰色土(5Y5/1) 近代水田耕作上。
- オ 褐灰色土(10YR4/1) 多量の浅間A軽石と少量の椋名ニツ岳白色軽石大粒を含む。天明三年泥流土、所々鉄分凝固により赤褐色化。
- カ 褐灰色土(10YR4/1) 少量の椋名ニツ岳白色軽石を含む。近世耕作上。(少量の浅間A軽石を含む)
- キ 褐灰色土(10YR4/1) 少量の椋名ニツ岳白色軽石を含む。近世耕作上。(少量の浅間A軽石を含まない)
- 1 黒褐色土(10YR3/2) 多量の焼土ブロック(φ10～30mm大)・炭化物を含む。
- 2 黒褐色土(10YR3/2) 少量の椋名ニツ岳白色軽石を含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量の椋名ニツ岳白色軽石と黒褐色土ブロック(φ10～30mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色土(10YR5/2) 多量の浅間C軽石混黒色土ブロック(φ30～40mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色土(10YR5/2) 多量の炭化物を含む。=床面
- 6 灰黄褐色土(10YR6/2) 少量の椋名ニツ岳白色軽石を含む。



第445図 VII区119号住居と出土遺物

4. VIII区

VIII区では奈良時代から平安時代の竪穴住居が22棟検出された。時代別の遺構数では、奈良時代が1棟、平安時代が16棟、年代未詳の住居は5棟である。平安時代の住居は10世紀が16棟のみである。

1号住居(第446図, PL.227)

グリッド 2 K 14

主軸方位 N67° E

重複 8号土坑に切られる。

形状と規模 竪穴住居のカマド周辺のみを検出した。遺構の大部分は調査区外に存在する。竪穴住居の長辺は1.63m+、短辺は0.52m+、深さは0.20m、検出された最大の面積は0.38㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色土からなる。

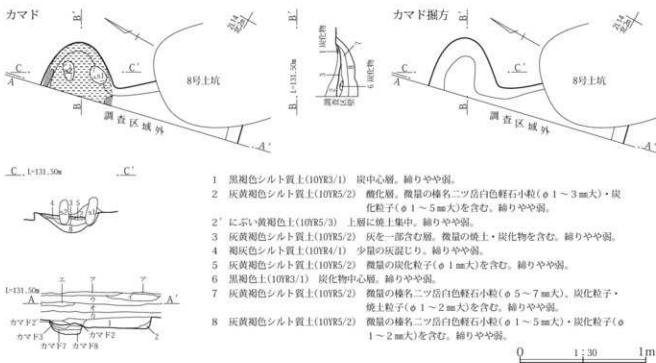
床面 VII層の黄褐色砂質土を削り出して、ほぼ平坦な床

面を構築している。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、凹凸を呈する。燃焼部の右壁に長径0.22m、短径0.10m、厚さ0.10mの安山岩の垂円礫が0.08m埋め込まれている。また、燃焼部中央の奥壁寄りには長径0.20m、短径0.15m、厚さ0.07mの安山岩の垂円礫が0.07m埋め込まれており、これらは前者がカマド構築材、後者は支脚と考えられる。燃焼部壁の一部は焼土の小ブロック、燃焼部底では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は黒褐～灰黄褐色シルト質土からなる。カマドは長さ0.42m、幅0.58m、深さ0.05mである。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物 なし。

時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と想定される。



- 1 黒褐色シルト質土(10YR3/1) 灰中心層。締りやや弱。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 酸化層。微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~5mm大)を含む。締りやや弱。
- 2' にぶい黄褐色土(10YR5/3) 上層に焼土集中。締りやや弱。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 灰を一部含む層。微量の焼土・炭化物を含む。締りやや弱。
- 4 褐灰色シルト質土(10YR4/1) 少量の灰混じり。締りやや弱。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子(φ1mm大)を含む。締りやや弱。
- 6 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物中心層。締りやや弱。
- 7 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ5~7mm大)。炭化粒子・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。
- 8 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。

ア にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/4) 酸化層。椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)を含む。

イ 黒褐色シルト質土(10YR3/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石(φ1~30mm大)・小円礫(φ10~30mm大)を含む。
=浅間泥流復旧層

エ にぶい黄褐色シルト質土(10YR4/3) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ10~20mm大)を含む。

ウ にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/4) 微量の椋名ニツ岳白色軽石(φ10~30mm大)を含む。

オ 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石(φ1~30mm大)を含む。

カ 黄褐色シルト質土(10YR5/6) 椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・小円礫(φ10~30mm大)を含む。

1 灰黄褐色土(10YR4/2) 椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~15mm大)・炭化粒子(φ1~20mm大)を含む。

2 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3)

第446図 VIII区1号住居

2号住居(第447・448図、PL.228・426)

グリッド 2 K 12

主軸方位 N77° E

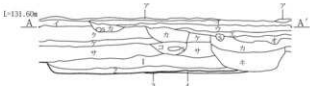
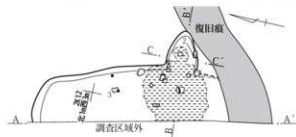
重複 2号復旧痕に切られる。6・7・8号住居に近接する。

形状と規模 竪穴住居のカマド周辺のみを検出した。遺構の大部分は調査区外に存在する。竪穴住居の長辺は3.08m+、短辺は0.87m+、深さは0.25m、検出された最大の面積は2.32㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

床面 VII層の黄褐色砂質土を削り出し、一部で灰黄褐～浅黄色土を貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。カマド周辺では硬化面を検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、緩やかに傾きながら立ち上がる。燃焼部の左右壁には長径0.18～0.24m、短径0.10～0.17m、深さ0.01～0.11mの小ピット4基が検出



- ア にぶい黄褐色土(10YR5/4) 酸化層。
- イ にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ2～10mm大)を含む。
- ウ 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ2～5mm大)を含む。やや酸化している層。
- エ にぶい黄褐色土(10YR5/4) 酸化層。微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ2～5mm大)を含む。
- オ にぶい黄褐色土(10YR5/3) やや酸化している層。棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～15mm大)を含む。
- カ 褐灰色シルト土(10YR4/1)+砂質土(浅間泥流) 微量の棒名ニツ岳白色軽石大粒(φ30～100mm大)・浅間石(φ10～50mm大)と少量の小円礫(φ10～50mm大)を含む。
- キ 灰黄褐色シルト土(10YR4/2)+砂質土(浅間泥流) 微量の棒名ニツ岳白色軽石(φ10～30mm大)と少量の円礫(φ10～50mm大)を含む。
- ク にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～2mm大)を含む。
- ケ にぶい黄褐色土(10YR5/4) 黄褐色シルト質土(10YR5/6)
- コ 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)・円礫(φ10～200mm大)を含む。
- サ にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm大)を含む。
- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)・炭化粒子(φ1～10mm大)を含む。締りやや弱。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm大)・炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。締りやや弱。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～3mm大)・炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。
- 4 浅黄色土(2.3Y7/3) 微量の炭化粒子(φ1mm大)を含む。黒味やや有り。締りやや弱。

第447図 VIII区2号住居

された。また、燃焼部中央には長径0.17m、短径0.12m、深さ0.11mの小ピットが検出された。これらは前者がカマド構築後、後者は支脚の礎を埋め込んだ痕跡と考えられる。燃焼部底から焚口付近は炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐～にぶい黄褐色土からなる。カマドは長さ0.95m、幅0.51m、深さ0.20mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 検出された範囲に柱穴は認められない。

遺物 床面から須恵器の羽釜(3)、カマド使用面から土師器の甕(2)、埋土から灰釉陶器の椀(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

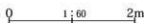
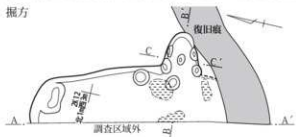
3号住居(第449～451図、PL.229・426)

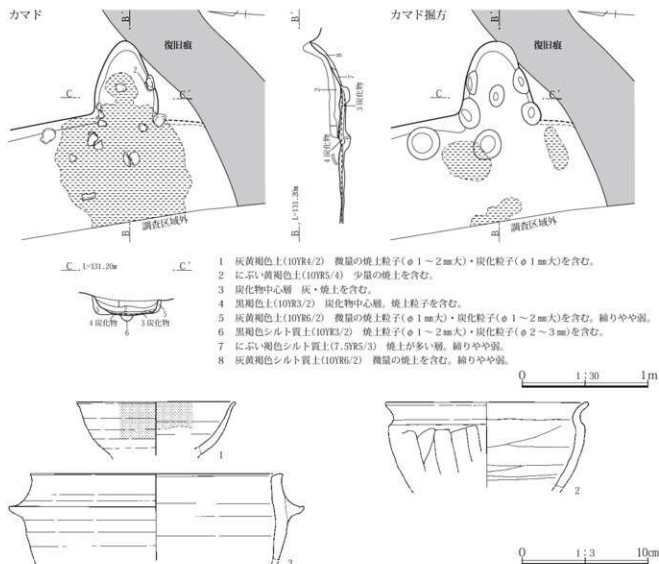
グリッド 2 K 10

主軸方位 N73° E

重複 3号復旧痕に切られる。8号住居、57・58号土坑を切る。発掘調査時に切合い関係にある3・11号住居として調査したが、資料整理で3号住居に統合した。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形掘方





第448図 VIII区2号住居と出土遺物

を呈する竪穴住居で、西部は調査区域外に存在する。長辺は5.08m、短辺は2.48m+、深さは0.45m、検出された最大の面積は12.59㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む黒褐～灰黄褐色シルト質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 VII層の黄褐色砂質土を掘り込んでほぼ平坦な掘方を構築している。中央の南北から土坑1・2を検出した。土坑1は隅の丸い正方形を呈し、長辺1.18m、短辺1.14m、深さ0.21mである。土坑2は歪んだ円形を呈し、複合した土坑からなり長径1.20m、短径0.95m、深さ0.15mである。

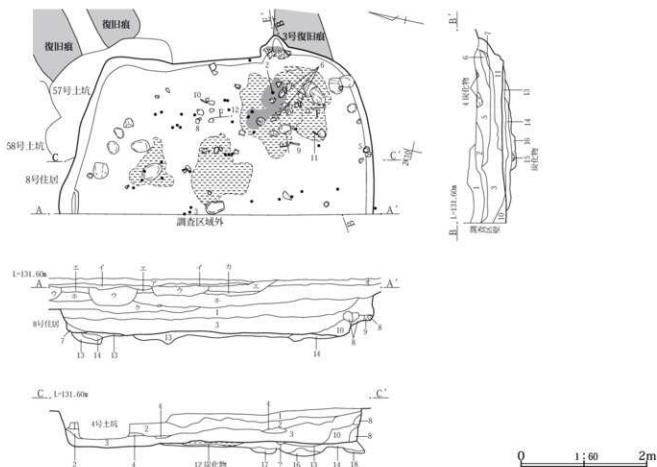
カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマド

の燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で45°の勾配で立ち上がる。燃焼部の左右壁や袖はほとんどが失われており、燃焼部から焚口付近は、長辺1.45mの歪んだ正方形の範囲に炭化物や焼土ブロックの広がりが見出され、礫の出土が認められる。これらはカマドの崩落により移動した堆積物とも考えられるが、焼土が面的に広がることから、竪穴住居廃絶後に構築された竪穴の可能性がある。カマド埋土は灰黄褐～灰褐色シルト質土からなる。カマドは長さ0.48m、幅0.45m、深さ0.26mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(4・5)、須恵器の椀(6)、

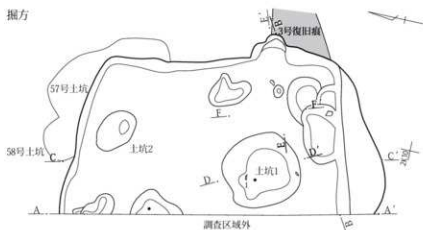
第4章 第2面の遺構と出土遺物



- ア 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 5$ mm大)を含む。
- イ ぶい黄褐色シルト質土(10YR5/4) 酸化層。微量の極名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 3$ mm大)を含む。
- ウ 黒褐色シルト質土(10YR3/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 5$ mm大)、浅間石・礫($\phi 10\sim 100$ mm大)を含む。
- エ 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) やや酸化。
- オ 暗褐色シルト質土(10YR3/3) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 7$ mm大)・焼土粒子($\phi 1\sim 2$ mm大)・炭化粒子($\phi 1\sim 5$ mm大)を含む。
- カ ぶい黄褐色シルト質土(10YR4/3) 酸化層。微量の極名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 3$ mm大)を含む。
- キ 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石($\phi 1\sim 30$ mm大)・炭化粒子($\phi 1\sim 2$ mm大)を含む。
- ク ぶい黄褐色シルト質土(10YR6/4) 微量の極名二ツ岳白色軽石($\phi 1\sim 30$ mm大)と炭化粒子($\phi 1\sim 5$ mm大)を含む。
- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 20$ mm大)・炭化粒子($\phi 1\sim 3$ mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 3-1層上よりさらに黒味の強い層。微量の極名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 10$ mm大)・炭化粒子($\phi 1\sim 3$ mm大)を含む。
- 3 黒褐色土(10YR3/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 10$ mm大)を含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/2) 多量の炭化物を含む。
- 5 褐色シルト質土(10YR4/1) 炭化物中心層。一部灰を含む。締りやや弱。
- 6 ぶい黄褐色シルト質土(10YR5/4) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 10$ mm大)・炭化粒子($\phi 1\sim 5$ mm大)を含む。
- 7 ぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 3$ mm大)を含む。
- 8 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 5$ mm大)・炭化物を含む。
- 9 明黄褐色土(10YR6/6) FP泥流壁の崩落上。微量の極名二ツ岳軽石小粒($\phi 1\sim 20$ mm大)を含む。
- 10 浅黄褐色シルト質土(10YR8/3) FP泥流シルト質上。
- 11 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 3$ mm大)・炭化粒子($\phi 1\sim 2$ mm大)を含む。
- 12 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物中心層。微量の焼土粒子小粒($\phi 1\sim 3$ mm大)を含む。
- 13 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石($\phi 1\sim 30$ mm大)・炭化粒子($\phi 1\sim 5$ mm大)を含む。
- 14 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 3$ mm大)・炭化粒子($\phi 1\sim 2$ mm大)を含む。
- 15 黒褐色シルト質土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 16 ぶい黄褐色シルト質土(10YR6/4) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 3$ mm大)・炭化粒子($\phi 2$ mm大)を含む。
- 17 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 3$ mm大)・炭化粒子($\phi 1\sim 2$ mm大)を含む。
- 18 黒褐色シルト質土(10YR3/2) 少量の炭化物を含む。締りやや弱。

第449図 VIII区3号住居(1)

掘方



D, 1-131.00m 1炭化物 , D'

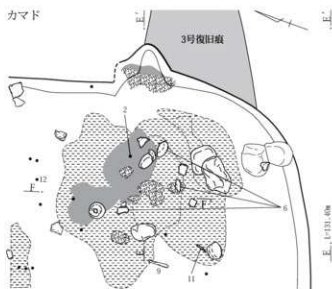


土坑1 D-D'

- 1 黒褐色土 炭化物中心層。微量の焼土粒子 (10YR3/1) ($\phi 1 \sim 3$ mm大) を含む。
- 2 にぶい黄褐色シルト質土 (10YR6/4) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒 ($\phi 1 \sim 2$ mm大) を含む。
- 3 にぶい黄褐色シルト質土 (10YR5/3) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒 ($\phi 1 \sim 5$ mm大) を含む。

0 1:60 2m

カマド

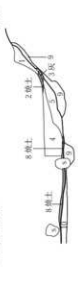


E, 1-131.40m

E'

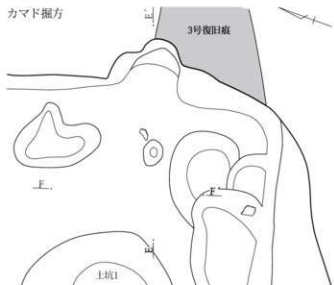


- 6 灰黄褐色土 椀名ニツ岳白色軽石小粒 ($\phi 1 \sim 2$ mm大)・炭化粒子 ($\phi 1 \sim 5$ mm大)・焼土粒子 ($\phi 1 \sim 20$ mm大) を含む。
- 7 灰黄褐色土 (10YR5/2) を含む。
- 8 灰黄褐色土 焼土中心層。少量の炭化物を含む。(10YR4/2)
- 9 灰黄褐色土 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒 ($\phi 1 \sim 5$ mm大)・炭化粒子 ($\phi 1 \sim 2$ mm大) を含む。
- 10 にぶい黄褐色シルト質土 (10YR5/4)



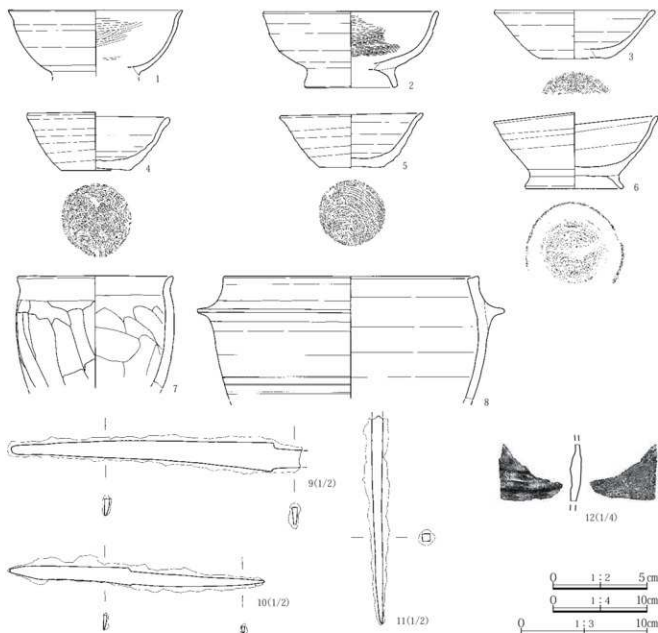
- 1 灰黄褐色シルト質土 微量の椀名ニツ岳白色軽石 (10YR5/2) 小粒 ($\phi 1 \sim 5$ mm大) を含む。
- 2 にぶい赤褐色土 (5YR5/4) 焼土中心層。
- 3 褐灰色シルト質土 (10YR4/1) 灰中心層。
- 4 灰褐色シルト質土 微量の炭化粒子・焼土粒子 ($\phi 7.5$ YR4/2) $1 \sim 3$ mm大) を含む。締りやや弱。
- 5 灰黄褐色シルト質土 微量の椀名ニツ岳白色軽石 (10YR4/2) 小粒 ($\phi 1 \sim 10$ mm大) を含む。上層に炭層がのる。
- 8 灰黄褐色土 焼土中心層。少量の炭化物を含む。(10YR4/2)
- 9 灰黄褐色土 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒 ($\phi 10$ YR4/2) $1 \sim 5$ mm大)・炭化粒子 ($\phi 1 \sim 2$ mm大) を含む。
- 10 にぶい黄褐色シルト質土 (10YR5/4)

カマド掘方



0 1:30 1m

第450図 VIII区3号住居(2)



第451図 VIII区3号住居の出土遺物

黒色土器の椀(2)、床面付近から土師器の甕(7)、掘方から黒色土器の椀(1)が出土した。

時代 10世紀後半に帰属する8号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀第2四半期と想定される。

4号住居(第452・453図、PL.230・426)

グリッド 2 K 13

主軸方位 N71°E

重複 5号住居、3・24・25号土坑に切られる。7号住居を切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する竪穴住居で、南西隅は5号住居により失われている。竪穴住居の長辺は3.42m、短辺は3.23m、深さは0.10m、面積は9.68㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含むにぶい黄褐色シルト質土からなる。

床面 灰黄褐色シルト質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。北西壁際から長径1.38mの不定形の浅い窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、大部分の燃焼部の左右壁や袖が失われており、焚口付近の燃焼部壁際から長径0.22mの扁平礫が出土した。カマドの燃焼部底は炭化物や灰、にぶい橙色土からなる。カマド燃焼部から焚口周辺の広範囲から炭化物の広がりを検出した。カマドは長さ0.72m、幅0.70m、深さ0.08mである。貯蔵穴は検出されなかった。**柱穴** 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面付近から須恵器の椀(1)、羽釜(2)が出土した。

時代 10世紀後半に帰属する7号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀第1四半期と想定される。

5号住居(第452～454図、Pl.231・426)

グリッド 2 K 13

主軸方位 N88°W

重複 6号住居に切られる。4・7号住居を切る。

形状と規模 竪穴住居と想定される竪穴の北東隅のみを検出した。遺構の大部分は調査区外に存在する。竪穴の長辺は1.27m+、短辺は1.05m+、深さは0.13m、検出された最大の面積は0.92㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

床面 にぶい黄褐色シルト質土を0.10mほど貼って床面を構築している。

遺物 床面から須恵器の杯(4)が出土した。

時代 10世紀前半に帰属する6号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀後半と想定される。4号住居に重複し、狭い範囲に分布する竪穴で、4号住居以外の5～7号住居は、竪穴住居でない可能性もある。

6号住居(第452～454図、Pl.232・233・426)

グリッド 2 K 12

主軸方位 N80°W

重複 1・21～23号土坑に切られる。5・7号住居、29号土坑を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴である。南東部は22・23・29号土坑により失われ、西部の大部分は調査区外に存在する。長辺は3.58m、短辺は2.45m+、深さは0.09m、検出された最大の面積は5.75㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

床面 にぶい黄褐色シルト質土を0.10mほど貼り、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。西側の調査区境付近から不定形の窪みを検出した。

カマド 検出されなかった。竪穴の南東隅に重なる22・23・29号土坑により失われた可能性がある。

遺物 床面付近から須恵器の羽釜(5)が出土した。

時代 10世紀後半に帰属する5・7号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀前半と想定される。4号住居に重複し、狭い範囲に分布する竪穴で、4号住居以外の5～7号住居は、竪穴住居でない可能性もある。

7号住居(第452～454図、Pl.232・233・426)

グリッド 2 K 12

主軸方位 N77°E

重複 4～6号住居、1・20・21・26号土坑、2号ピットに切られる。22・23号土坑を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴である。北部は4号住居、西部は6号住居、東部は攪乱により失われている。長辺は4.18m、短辺は2.53m、深さは0.15m、面積は10.20㎡である。

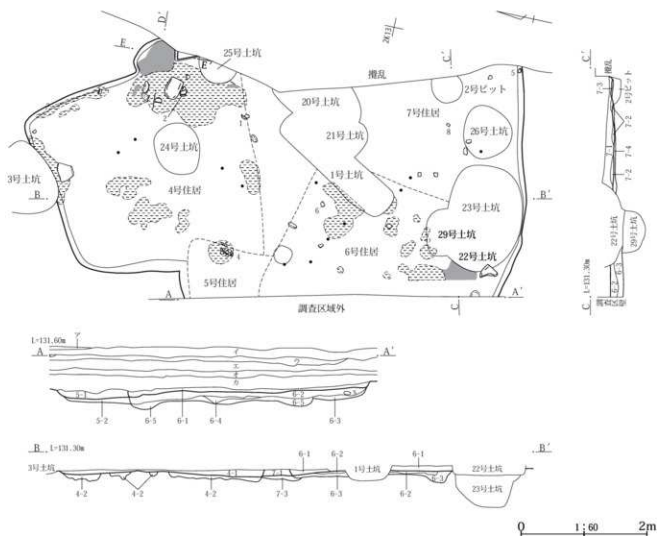
埋土 ニツ岳の白色軽石を多く含む灰黄褐色シルト質土からなる。

床面 灰黄褐色シルト質土を薄く貼って、床面を構築している。

カマドと貯蔵穴・柱穴 検出されなかった。

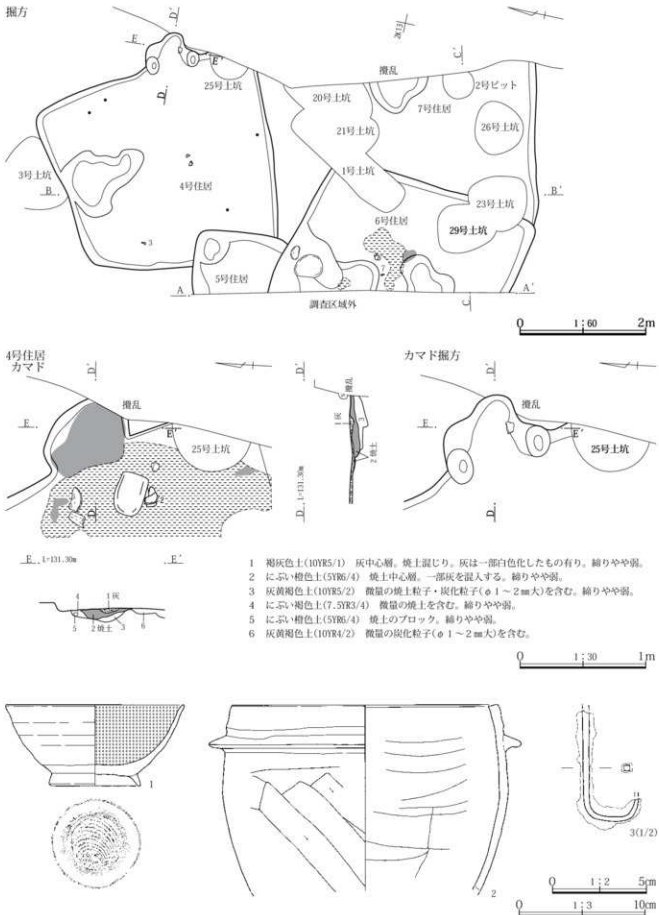
遺物 床面付近から須恵器の椀(7)、埋土から砥石(8)が出土した。

時代 10世紀前半に帰属する4・6号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀後半と想定される。4号住居に重複し、狭い範囲に分



- ア ぶい黄褐色シルト質土(10YR5/4) 酸化層。微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- イ 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石(φ1~30mm大)を含む。
- ウ ぶい黄褐色シルト質土(10YR5/4) 酸化層。微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- エ 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- オ 明黄褐色シルト質土(10YR6/6) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)を含む。
- カ 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石(φ1~30mm大)を含む。
- 4-1 ぶい黄褐色シルト質土(10YR6/3) 微量の炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 4-2 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1~5mm大)を含む。
- 5-1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)・炭土粒子(φ1~5mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 5-2 ぶい黄褐色シルト質土(10YR5/4) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)・炭化粒子(φ1mm大)を含む。
- 6-1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 6-2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子・炭土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 6-3 ぶい黄褐色シルト質土(10YR6/4) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 6-4 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 6-5 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 炭化物が一部層状に混入する。
- 7-1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~5mm大)を含む。
- 7-2 ぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)・小円礫(φ1~5mm大)を含む。
- 7-3 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物層が上層にある。
- 7-4 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。

第452図 VIII区 4~7号住居

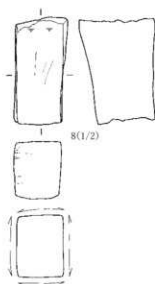
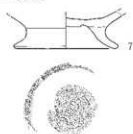


第453図 VIII区4~7号住居と4号住居の出土遺物

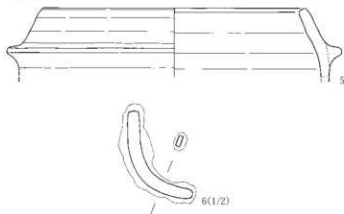
5号住居



7号住居



6号住居



第454図 VIII区5～7号住居の出土遺物

布する竪穴で、4号住居以外の5～7号住居は、竪穴住居でない可能性がある。

8号住居(第455図、PL.233・427)

グリッド 2 K 11

主軸方位 N50° E

重複 3号住居、3号復旧痕に切られる。57号土坑を切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、方形を呈する竪穴で、南西部は3号住居、58号土坑により失われ、南西部は調査区外に存在する。長辺は3.22m+、短辺は2.35m+、深さは0.10m、検出された最大の面積は5.22㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石と炭化物を含む灰黄褐色シルト質土からなり、炭化物は下位ほど多い。

床面 Ⅻ・ⅩⅢ層の黄褐色砂礫層を削り出して、床面を構築している。床面は薄い炭化物層が広く覆う。

カマド 検出されなかった。復旧痕により失われた可能性がある。

遺物 床面から黒色土器の椀(1)、須恵器の椀(2)、灰釉陶器の瓶(3)、土師器の羽釜(4)が出土した。

時代 10世紀前半に帰属する3号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀後半と想定される。遺構は炭化物を多く含む平坦な底から遺物が出土した状態を呈し、住居ではない可能性もある。

10号住居(第456図、PL.234・427)

グリッド 2 I 2

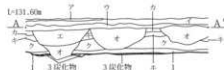
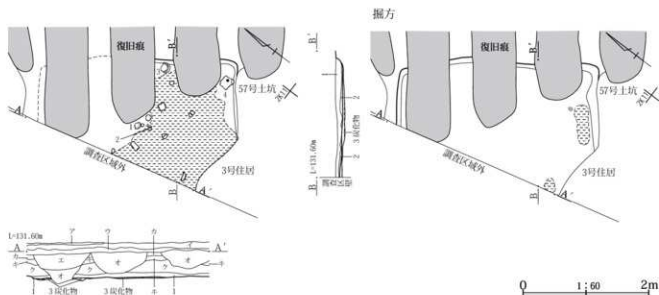
主軸方位 N85° W

重複 37・38号土坑に切られる。14号住居に近接する。

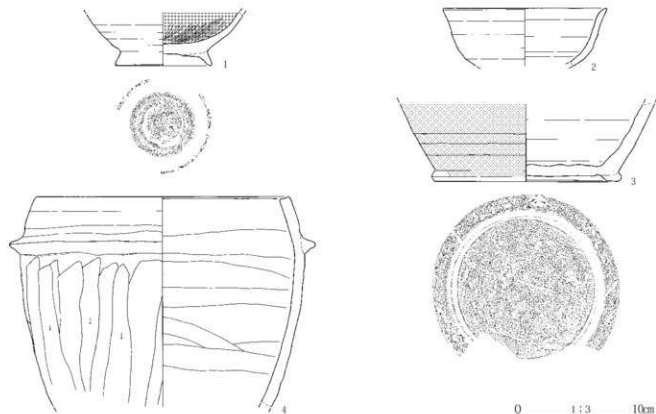
形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、南部の大部分は調査区外に存在する。長辺は2.73m、短辺は1.60m+、深さは0.27m、面積は2.39㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土が成層する。

床面 灰黄褐色シルト質土を0.12mほど貼って、やや凹凸のある床面を構築している。



- ア にぶい橙色土(7.5YR6/4) 酸化層。微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(ϕ 1~5mm大)を含む。
 イ にぶい黄橙色土(10YR6/3) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(ϕ 1~20mm大)・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
 ウ にぶい橙色土(7.5YR6/4) 酸化層。微量の棒名ニッ岳白色軽石(ϕ 2~30mm大)を含む。
 エ 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(ϕ 2~20mm大)を含む。=浅間A泥流災害復旧痕埋土
 オ 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石(ϕ 2~40mm大)・円礫(ϕ 20~100mm大)を含む。=浅間A泥流災害復旧痕埋土
 カ 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(ϕ 1~2mm大)を含む。
 キ にぶい黄褐色土(10YR5/4) 酸化層。微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(ϕ 1~10mm大)を含む。
 ク にぶい黄褐色土(10YR5/4) 酸化層。微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(ϕ 2~5mm大)を含む。
 1 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石(ϕ 1~30mm大)・炭化粒子(ϕ 1mm大)を含む。
 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(ϕ 1~10mm大)を含む。
 3 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物中心層。掃りややぶ。

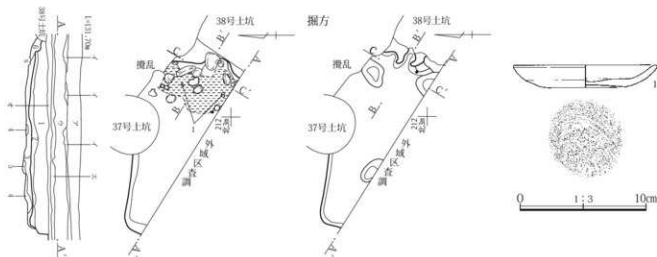


第455図 VIII区8号住居と出土遺物

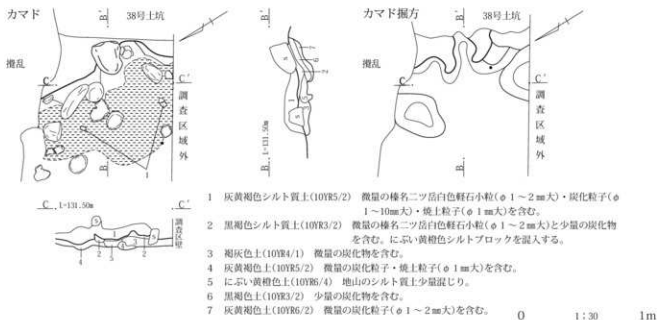
掘方 XII・XII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。東壁際と調査区域の壁際から長径0.88～0.90mの歪んだ楕円形の窪みを検出した。

カマド 東壁に位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は水平で緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部壁や両袖は著しく失われており、周辺から0.40m大の垂円礫が多く出土した。燃焼部底から焚口に炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色シルト質土である。カマドは長さ0.85m、幅1.11m、深さ0.19mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たな



- ア 灰黄褐色砂質土(10YR6/2) 現耕土。下層やや酸化(床上)。微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒を含む。棒りやや洞。
 イ にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/4) 酸化・床上。
 ウ 褐灰色砂層(10YR5/1) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm大)を含む。
 エ にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 酸化層。床上。微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)を含む。
 オ 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2)
 1 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ2～10mm大)を含む。
 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～2mm大)、炭化物・小円礫(φ1～5mm大)を含む。
 3 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～2mm大)・炭化粒子(φ2～5mm大)と少量のにぶい黄褐色砂質土を下層に含む。
 4 にぶい黄褐色土(10YR6/4) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～2mm大)を含む。
 5 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量のにぶい黄褐色シルト質土を含む。
 6 黒褐色土(10YR3/1) 少量の炭化物を含む。



- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～2mm大)・炭化粒子(φ1～10mm大)・焼土粒子(φ1mm大)を含む。
 2 黒褐色シルト質土(10YR3/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～2mm大)と少量の炭化物を含む。にぶい黄褐色シルトブロックを混入する。
 3 褐灰色土(10YR4/1) 微量の炭化物を含む。
 4 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の炭化粒子・焼土粒子(φ1mm大)を含む。
 5 にぶい黄褐色土(10YR6/4) 地山のシルト質土少量混じり。
 6 黒褐色土(10YR3/2) 少量の炭化物を含む。
 7 灰黄褐色土(10YR6/2) 微量の炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。

第456図 VIII区10号住居と出土遺物

い構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の皿(1)が出土した。出土遺物は10世紀内に年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀第4四半期。

12号住居(第457～459図、PL.235～237・427)

グリッド 214

主軸方位 N83°E

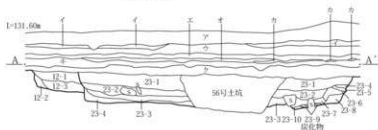
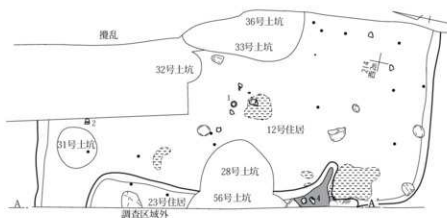
重複 23号住居、28・31～33・36号土坑に切られる。発掘調査時に切合い関係にある12・13号住居として調査したが、資料整理で12号住居に統合した。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する規模の大きな竪穴で、西部と東部の大部分は調査区外に存在する。長辺は6.29m、短辺は2.92m+、深さは0.27m、検出された最大の面積は18.36㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含むふい黄褐～灰黄褐色シルト質土からなる。

床面 灰褐色土を0.08mほど貼って、床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。南壁際に沿って浅い埋没した周溝が検出された。溝は南壁に沿って周回し、西端はP7で失われている。最



ア 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 現耕土。

イ にふい黄褐色シルト質土(10YR5/4) 酸化層、ビニールなどを混入する。耕上層。

ウ 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 目網土。ビニールなどを混入する。

エ にふい黄褐色シルト質土(10YR5/4) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)を含む。

オ にふい黄褐色シルト質土(10YR4/3) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm大)を含む。

カ 褐色土(10YR4/1) 浅間B軽石中心層。一部酸化。

キ にふい褐色シルト質土(10YR4/3) 微量の椋名ニツ岳白色軽石(φ1～40mm大)を含む。

ク 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)を含む。

12-1 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm大)・炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。締り弱。

12-2 にふい黄褐色シルト質土(10YR6/4) FP二次堆積。シルト質土も一部含む。締り弱。

12-3 にふい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～2mm大)を含む。締り弱。

23-1 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm大)を含む。

23-2 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の焼土粒子(φ1～3mm大)を含む。

23-3 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 少量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ2～15mm大)を含む。

23-4 浅黄褐色(10YR8/3) FP泥流シルト質土。

23-5 にふい黄褐色シルト質土(10YR7/2) 微量の焼土を含む。

23-6 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 少量の焼土粒子を含む。

23-7 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm大)・焼土粒子(φ2～10mm大)を含む。

23-8 にふい黄褐色シルト質土(10YR7/2) 微量の炭化粒子を含む。

23-9 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。

23-10 にふい黄褐色土(10YR5/3) 微量の焼土粒子(φ1～3mm大)を含む。

第457図 Ⅷ区12・23号住居(1)

大の上幅は0.26m、最少の底幅は0.06m、深さは0.10mである。また大小のピットであるP1～P12を検出した。P1は楕円形を呈し、長径0.34m+、短径0.40m、深さ0.30mである。

P2は楕円形を呈し、直径0.25m、深さ0.08mである。

P3は楕円形を呈し、直径0.25m、深さ0.07mである。

P4は楕円形を呈し、長径0.27m+、短径0.35m、深さ0.32mである。

P5は楕円形を呈し、長径0.85m、短径0.75m、深さ0.27mで、遺物が多く出土した。

P6は楕円形を呈し、長径0.73m、短径0.50m、深さ0.15mである。

P7は歪んだ楕円形を呈し、長径0.78m、短径0.70m、深さ0.10mで、周溝に接続する。

P8は楕円形を呈し、長径0.75m、短径0.64m、深さ0.36mである。

P9は楕円形を呈し、長径0.45m、短径0.32m、深さ0.25mである。

P10は楕円形を呈し、長径0.74m、短径0.65m、深さ

0.26mである。

P11は楕円形を呈し、長径0.50m、短径0.41m、深さ0.04mである。

P12は楕円形を呈し、長径0.40m、短径0.25m、深さ0.11mである。

カマドと貯蔵穴 検出されなかった。カマドは調査区外に存在する可能性がある。

遺物 床面から須恵器の羽釜(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

23号住居(第457～459図, PL.246)

グリッド 2 1 4

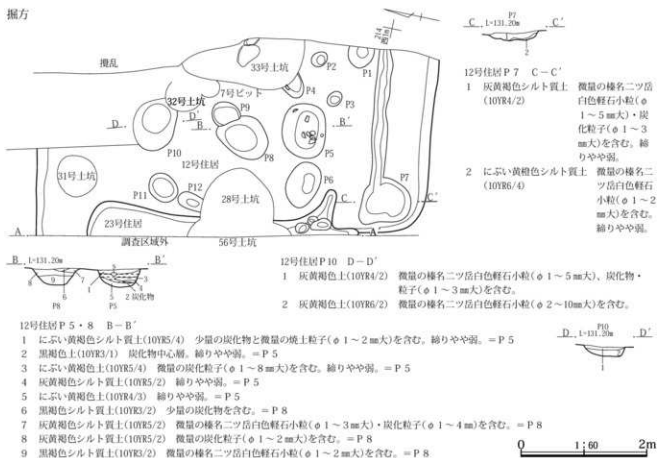
主軸方位 N80°W

重複 28・56号土坑に切られる。12号住居を切る。

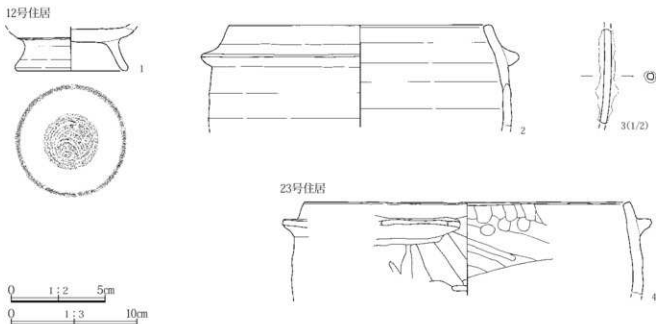
形状と規模 竪穴住居のカマド周辺のみを検出した。遺構の大部分は調査区外に存在する。竪穴住居の長辺は4.17m、短辺は0.58m+、深さは0.51m、検出された最大の面積は1.01㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土が水

掘方



第458図 Ⅷ区12・23号住居(2)



第459図 VII区12・23号住居の出土遺物

平に成層している。

床面 VII層の黄褐色砂質土を削り出し、平坦な床面を構築している。カマド周辺では硬化面を検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、緩やかに立ち上がる。燃焼部右壁に焼土ブロックの広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐～にぶい黄橙色シルト質土からなる。カマドは長さ0.65m、幅0.60m、深さ0.22mである。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物 カマド使用面付近から土師器の把手付鍋(4)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半と想定される。

14号住居(第460図、PL.238・427)

グリッド 2 1 3

主軸方位 N83° E

重複 18号土坑に切られる。10・12号住居に近接する。
形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居で、東部は調査区外に存在する。長辺は3.80m、短辺は1.53m+、深さは0.25m、検出された最大の面積は4.59㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含むにぶい黄橙～灰黄褐色シルト質土が成層する。

床面 にぶい黄橙色土を0.07mほど貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。炭化物や硬化面の広がりを検出した。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。北壁際に沿って浅い埋没した周溝が検出された。溝は北壁に沿って周回している。最大の上幅は0.30m、最少の底幅は0.08m、深さは0.10mである。また浅い窪み状のピットであるP1・2を検出した。

P1は楕円形を呈し、長径0.49m、短径0.44m、深さ0.06mである。

P2は楕円形を呈し、長径0.86m、短径0.67m、深さ0.15mである。

カマドと貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 埋土から灰軸陶器の椀(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

15号住居(第461・462図、PL.239・427)

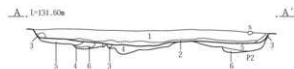
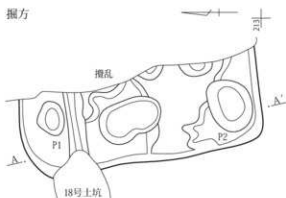
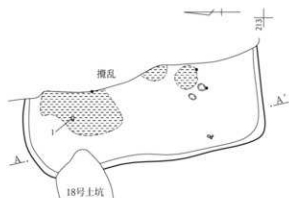
グリッド 2 G 1

主軸方位 N60° E

重複 55号土坑に切られる。16号住居に近接する。

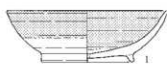
形状と規模 北東部は攪乱で失われ、南西部は調査区外に存在する短冊形に検出された竪穴である。長辺は4.05m、短辺は1.06m+、深さは0.30m、検出された最大の面積は2.92㎡である。

第4章 第2面の遺構と出土遺物



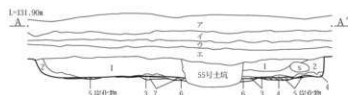
- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 2\text{mm}$ 大)・小円礫($\phi 80\text{mm}$ 大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 棒名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 5\text{mm}$ 大)にふい黄褐色シルト質土を含む。
- 3 にふい黄褐色シルト質土(10YR6/3)＝堅固崩土
- 4 にふい黄褐色土(10YR6/4) 微量の炭化粒子($\phi 1\text{mm}$ 大)を含む。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 4\text{mm}$ 大)を含む。
- 6 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 2\text{mm}$ 大)を含む。

0 1:60 2m



0 1:3 10cm

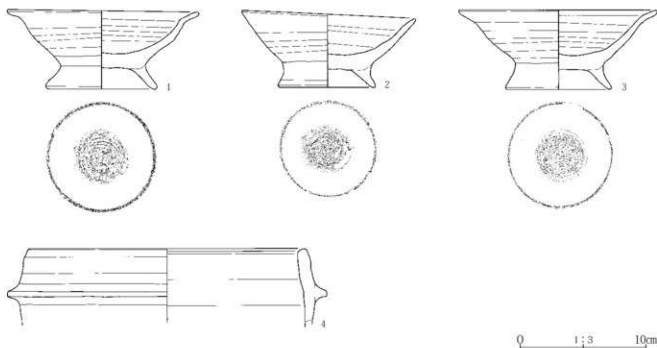
第460図 Ⅷ区14号住居と出土遺物



- ア 灰黄褐色砂質土 現研上。下層やや酸化(床上)。微量の棒名二ツ岳白色軽石を含む。
- イ 褐色砂質土 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 10\text{mm}$ 大)を含む。
- ウ にふい黄褐色砂質土 酸化層、床上。微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 20\text{mm}$ 大)を含む。
- エ 灰黄褐色砂質土 微量の棒名二ツ岳白色軽石($\phi 1 \sim 40\text{mm}$ 大)を含む。
- 1 灰黄褐色砂質土 微量の棒名二ツ岳白色軽石大粒($\phi 1 \sim 50\text{mm}$ 大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 3\text{mm}$ 大)を含む。
- 2 にふい黄褐色砂質土 少量のにふい黄褐色シルト質土を含む。
- 3 にふい黄褐色砂質土 微量のにふい黄褐色土を含む。
- 4 灰黄褐色砂質土 にふい黄褐色崩落土と思われる。微量のFP泥流土を含む。
- 5 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物中心層。締りやや弱。
- 6 灰黄褐色砂質土 微量のにふい黄褐色FP泥流土を含む。
- 7 灰黄褐色砂質土 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 20\text{mm}$ 大)を含む。

0 1:60 2m

第461図 Ⅷ区15号住居



第462図 VIII区15号住居の出土遺物

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐～にぶい黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.05mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。断片的に炭化物や硬化面の広がりを検出した。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。不定形の浅い窪みを複数検出した。

遺物 床面から須恵器の碗(1・2)、羽釜(4)、床面付近から須恵器の碗(3)が出土した。

時代 平安時代10世紀第4四半期。狭い調査範囲から検出した竪穴で、規模の割に調査区外のIX区に延長部が認められないことから、竪穴住居でない可能性もある。

16号住居(第463図、PL.240・427)

グリッド 2 F 1

主軸方位 N60°W

重複 41号土坑にカマド掘方が切られる。

形状と規模 北東部は攪乱で失われ、南西部は調査区外に存在する短冊形に検出された竪穴である。長辺は2.72m、短辺は0.88m+、深さは0.45m、検出された最大の面積は2.17㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐～にぶい黄褐色シルト質土からなる。

床面 にぶい黄褐色砂質土を薄く貼って、床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。不定形の浅い窪みを複数検出した。

カマド 南東壁に位置する。カマドの燃焼部は壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、緩やかに立ち上がる。燃焼部右壁に焼土ブロックの広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐～にぶい黄褐色シルト質土からなる。カマドは長さ0.65m、幅0.60m、深さ0.22mである。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物 床面から灰軸陶器の碗(1)、床面付近から鉄鍬(3)、カマド使用面から須恵器の羽釜(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

17号住居(第464図、PL.241・427)

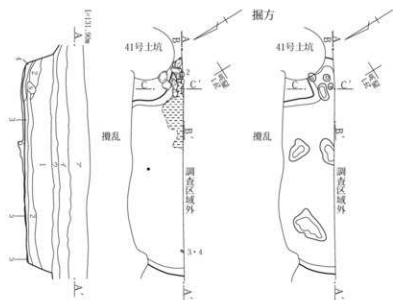
グリッド 92 E 20

主軸方位 N84°W

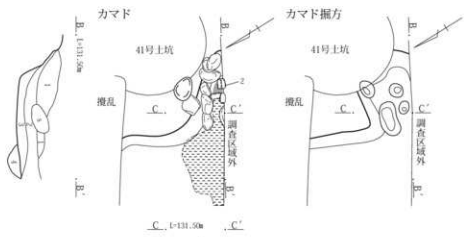
重複 なし。

形状と規模 北東部は攪乱で失われ、南西部は調査区外に存在する短冊形に検出された竪穴である。長辺は1.92m+、短辺は1.46m+、深さは0.34m、検出された最大の面積は2.36㎡である。

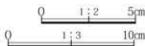
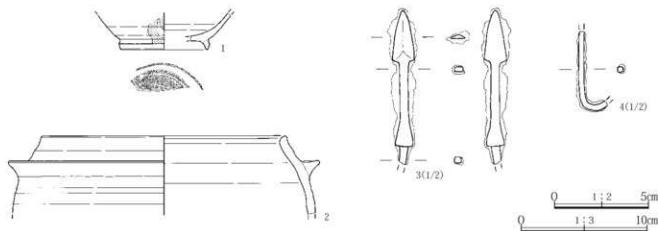
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐～にぶい黄褐色シ



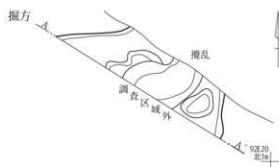
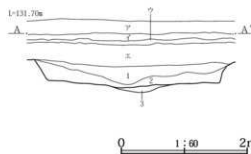
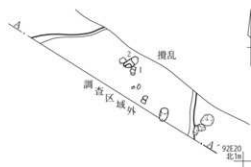
- ア 灰黄褐色土+にぶい黄褐色土 2つの色のシルトが含まれる層。にぶい黄褐色土シルトは著上か。
- イ 褐色灰砂質土 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~10YR5/1) 3mm大)を含む。
- ウ にぶい黄褐色砂質土 酸化層。床上。微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- 1 灰黄褐色砂質土 微量の棒名ニッ岳白色軽石(φ1~10YR4/2) 40mm大・炭化粒子(φ2~5mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ10YR6/2) 1~20mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色砂質土 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ10YR5/3) (φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。
- 4 にぶい黄褐色土 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ10YR5/3) 1~2mm大)を含む。
- 5 にぶい黄褐色シルト質土 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)を含む。締りやや良。



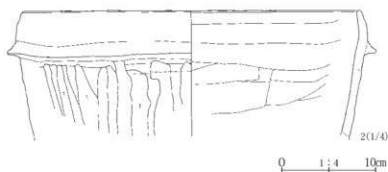
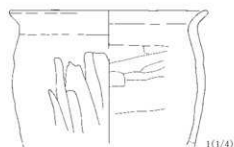
- 1 灰黄褐色土 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色土 棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・礫(100mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色土 炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ1~3mm大)を含む。下部に少量の焼土・灰層が混入する。
- 4 灰黄褐色土 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)・FPシルト質土+にぶい黄褐色シルトを含む。



第463図 Ⅷ区16号住居と出土遺物



- ア 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~5mm大)を含む。下層はやや酸化して床土か。
- イ 褐灰色シルト質土(10YR5/1) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~5mm大)を含む。
- ウ にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 酸化。床土層。
- エ 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石(ϕ 1~40mm大)を含む。
- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~20mm大)・炭化粒子(ϕ 1~7mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色シルト質土(10YR4/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~5mm大)・にぶい黄褐色シルト質土を含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~10mm大)・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。



第464図 VIII区17号住居と出土遺物

ルト質土が緩く傾斜して竪穴を埋めている。

床面 灰黄褐色土を薄く貼って、一部で床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。不定形の浅い窪みを検出した。

遺物 埋土から土師器の甕(1)、羽釜(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。狭い調査範囲から検出した竪穴で、規模の割に調査区外のIX区に延長部が認められないことから、竪穴住居でない可能性もある。

18号住居(第465図、PL.242)

グリッド 91T17

主軸方位 N81°E

重複 なし。

形状と規模 北東部は攪乱で失われ、竪穴の南西側のみ

を検出した。長辺は2.07m+、短辺は1.69m+、深さは0.33m、検出された最大の面積は1.36㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む灰黄褐~にぶい黄褐色シルト質土からなる。

床面 灰黄褐色土を0.14mほど貼って、床面を構築している。ブロック状を呈する炭化物の広がりを検出した。

遺物 埋土から須恵器の台付甕(1)が出土した。

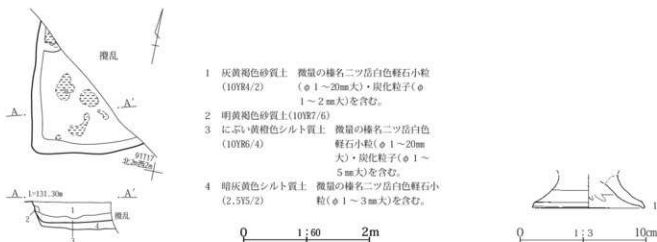
時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と想定される。狭い調査範囲から検出した竪穴で、規模の割に調査区外のIX区に延長部が認められないことから、竪穴住居でない可能性もある。

19号住居(第466図、PL.243・264・427)

グリッド 91Q15

主軸方位 N79°E

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第465図 VIII区18号住居と出土遺物

重複 なし。

形状と規模 北東部は攪乱で失われ、南西部は調査区外に存在する短冊形に検出された竪穴である。対角線上にあるIX区16号住居と同一の竪穴住居である。統合し復元した竪穴住居の長辺は3.97m、短辺は3.38m、深さは0.48m、推定面積は11.28㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐～にぶい黄褐色シルト質土が緩く傾斜して竪穴を埋めている。

床面 灰黄褐色シルト質土を0.05mほど薄く貼って、床面を構築している。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。不定形の浅い窪みを検出した。

カマド 東壁のほぼ中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁を奥に掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は水平で、奥壁は緩やかな勾配で立ち上がる。

遺物 床面から黒色土器の椀(2)、カマド使用面付近から土師器の杯(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。狭い調査範囲から検出した竪穴で、調査区外のIX区に延長部が認められることから、竪穴住居と認定される。

20号住居(第467図、PL.244)

グリッド 91 P 14

主軸方位 N73° E

重複 68号土坑に切られる。

形状と規模 北東部は攪乱で失われ、南西部は調査区外に存在する短冊形に検出された竪穴である。対角線上に

あるIX区19号住居と同一の竪穴住居である。統合し復元した竪穴住居の長辺は3.50m、短辺は2.92m、深さは0.40m、推定面積は10.22㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂～シルト質土が成層している。

床面 灰黄褐色シルト質土を薄く貼って、床面を構築している。

カマド 東壁のほぼ中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁を奥に掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は水平で、大部分は68号土坑により失われている。

遺物 なし。

時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と想定される。狭い調査範囲から検出した竪穴で、調査区外のIX区に延長部が認められることから、竪穴住居と認定される。

21号住居(第468・469図、PL.244・245・427)

グリッド 91 J 10

主軸方位 N48° E

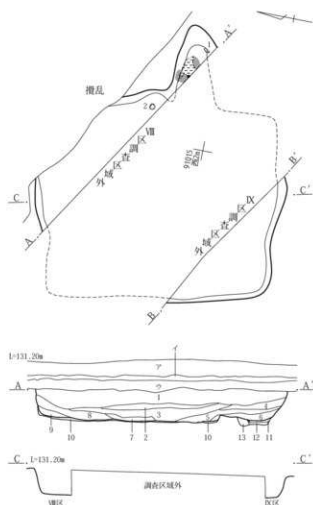
重複 22号住居を切る。

形状と規模 南東部は調査区外に存在し、竪穴の北西部床面のみを検出した。長辺は2.04m、短辺は0.94m+、深さは0.20m、検出された最大の面積は1.32㎡である。

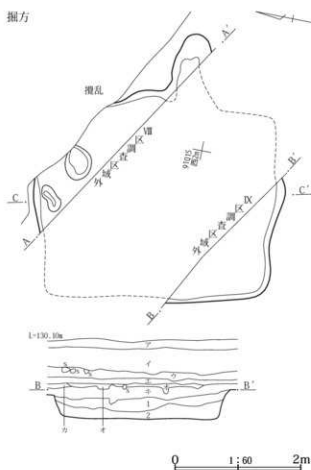
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色土からなる。

床面 灰黄褐色土を薄く貼って、床面を構築している。

遺物 床面から土師器の杯(1・2・3)、須恵器の杯(5)、砥石(7)、床面付近から須恵器の杯(4)、土師器の甕(6)が出土した。



掘方



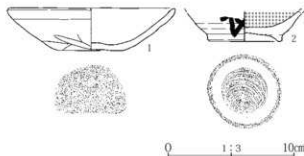
A-A'

- ア 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 現耕土。
 イ 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) ア層上よりやや酸化している。微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 5$ mm大)を含む。
 ウ 黄褐色シルト質土(10YR5/3) 床上。微量の椀名ニツ岳白色軽石($\phi 1 \sim 30$ mm大)を含む。
 1 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石($\phi 1 \sim 40$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 5$ mm大)を含む。
 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石($\phi 1 \sim 30$ mm大)を含む。
 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石($\phi 1 \sim 40$ mm大)を含む。
 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 5$ mm大)を含む。
 5 黄褐色シルト質土(10YR5/4) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 3$ mm大)を含む。
 6 褐色砂質土(10YR4/1) 微量の椀名ニツ岳白色軽石大粒($\phi 1 \sim 50$ mm大)を含む。
 7 黄褐色シルト質土(10YR6/3) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 2 \sim 5$ mm大)を含む。
 8 褐色砂質土(10YR4/1) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 20$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 5$ mm大)を含む。
 9 黄褐色シルト質土(10YR5/4) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 5$ mm大)を含む。
 10 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 5$ mm大)を含む。締りやや弱。
 11 黒褐色シルト質土(10YR3/2) 炭化物・机上が上層に混入する。締りやや弱。
 12 黒褐色シルト質土(10YR3/2) 炭化物が上層に混入する。締りやや弱。
 13 黄褐色土(10YR6/3) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 3$ mm大)を含む。

B-B'

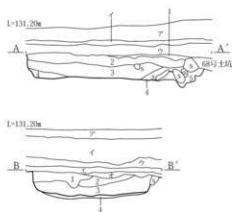
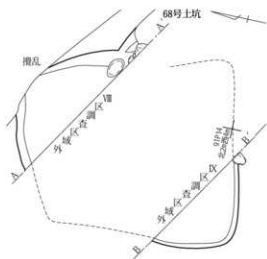
ア〜ウはA-A'と同じ

- エ 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石($\phi 1 \sim 40$ mm大)・炭化粒子($\phi 1 \sim 5$ mm大)を含む。
 オ 黄灰色砂質土(2.5Y5/1) 浅間B軽石を含む層。
 カ 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 20$ mm大)を含む。
 キ 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の椀名ニツ岳白色軽石大粒($\phi 1 \sim 50$ mm大)を含む。
 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 20$ mm大)を含む。
 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 5$ mm大)を含む。



第466図 VIII区19号住居と出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物



A-A'

- ア 灰黄褐色シルト質土 現耕土。(10YR5/2)
- イ 灰黄褐色シルト質土 1層土より酸化している。微量の椀名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)を含む。(10YR5/2)
- ウ にぶい黄褐色シルト質土 床上。微量の椀名ニッ岳白色軽石(10YR5/3) (φ1~30mm大)を含む。
- 1 にぶい黄褐色砂質土 微量の椀名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~(10YR4/3) 20mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土 微量の椀名ニッ岳白色軽石(φ1~30mm大)(10YR4/2)を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土 微量の椀名ニッ岳白色軽石(φ1~30mm(10YR5/2) 大)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 4 褐灰色シルト質土 微量の椀名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~(10YR4/1) 20mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 5 灰褐色土 微量の椀名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~5mm大)・(7.5YR4/2) 炭化粒子(φ1~2mm大)と少量の焼土粒子(φ1~8mm大)を含む。締りやや弱。=カマド内側の理上

B-B'

- ア 褐灰色砂質土 盛土。微量の角礫+円礫(φ1~20mm大)(10YR5/1)を含む。
- イ 灰黄褐色砂質土 盛土。微量の椀名ニッ岳白色軽石大粒(10YR5/2) (φ1~200mm)・円礫(φ30~50mm)を含む。
- ウ 灰黄褐色砂質土 耕土。微量の椀名ニッ岳白色軽石(φ(10YR4/2) 1~30mm大)を含む。
- エ にぶい黄褐色砂質土 床上。微量の椀名ニッ岳白色軽石(10YR4/3) (φ2~30mm大)を含む。
- オ 褐色砂質土 微量の椀名ニッ岳白色軽石(φ1~30mm大)(10YR4/6)を含む。
- 1 灰黄褐色砂質土 微量の椀名ニッ岳白色軽石(φ1~40mm(10YR5/2) 大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土 微量の椀名ニッ岳白色軽石小粒(φ(10YR4/3) 1~2mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色砂質土 微量の椀名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~(10YR4/2) 20mm大)を含む。
- 4 明黄褐色シルト質土 微量の椀名ニッ岳白色軽石小粒(φ(10YR6/6) 1~3mm大)を含む。

第467図 Ⅶ区20号住居

時代 奈良時代8世紀第4四半期。狭い調査範囲から検出した竪穴で、規模の割に調査区外のⅦ区に延長部が認められないことから、竪穴住居でない可能性もある。

22号住居(第468図、PL.245)

グリッド 91 J 10

主軸方位 N74°W

重複 21号住居に切られる。

形状と規模 南西隅は21号住居により失われ、北東部は調査区外に存在し、竪穴の床面のみを検出した。長辺は2.90m、短辺は1.11m+、深さは0.06m、検出された最大の面積は2.80㎡である。

埋土 ニッ岳の白色軽石を含む灰黄褐色土からなる。

床面 灰黄褐色土を薄く貼って、床面を構築している。

遺物 なし。

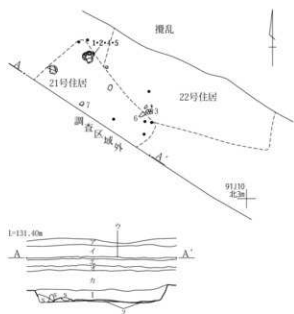
時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と想定され、8世紀後半に帰属する21号住居よりも古いので8世紀以前である。本遺構は、狭い調査範囲から検出した竪穴で、住居でない可能性もある。

24号住居(第470~472図、PL.246・247・428)

グリッド 2 L 16

主軸方位 N58°E

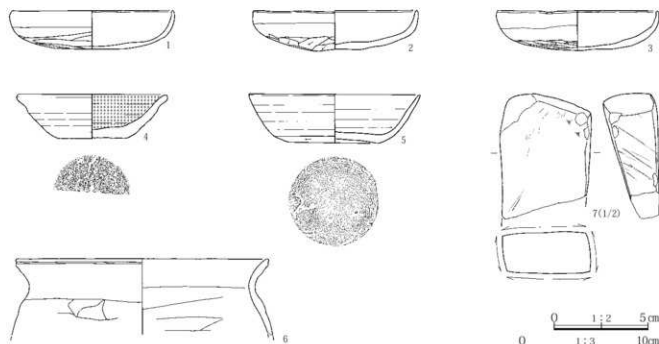
重複 なし。



- ア 期灰色砂質土(10YR4/1) 盛上。
 イ 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 耕土。微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)を含む。
 ウ にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 床上。微量の炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
 エ 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 耕土。微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
 オ 黄褐色砂質土(10YR5/6) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
 カ にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の棒名ニッ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)を含む。
 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名ニッ岳白色軽石(φ2~30mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)・明黄褐色土を含む。
 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の明黄褐色土を含む。

第468図 VIII区21・22号住居

0 1:60 2m



第469図 VIII区21号住居の出土遺物

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で、大部分は床面のみを検出した。長辺は2.45m、短辺は2.04m、深さは0.27m、面積は4.22㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含むにぶい黄褐色シルト質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を0.08mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。大小のピットであるP1～P6を検出した。

P1は楕円形を呈し、長径0.32m、短径0.28m、深さ0.13mである。

P2は楕円形を呈し、長径0.46m、短径0.38m、深さ0.26mである。

P3は楕円形を呈し、長径0.44m、短径0.35m、深さ0.11mである。

P4は楕円形を呈し、長径0.45m、短径0.28m、深さ0.11mである。

P5は歪んだ楕円形を呈し、長径0.62m、短径0.40m、深さ0.10mである。

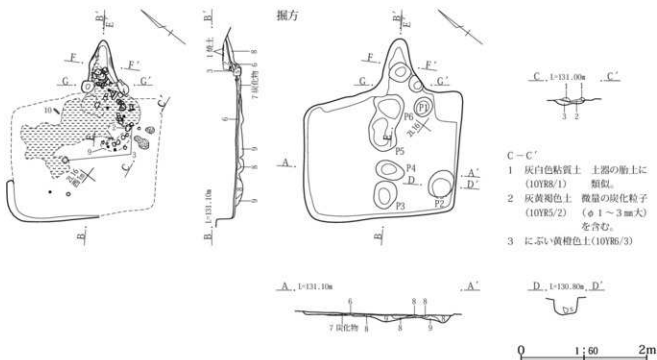
P6は歪んだ楕円形を呈し、長径0.50m、短径0.36m、深さ0.01mである。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマド燃焼部は東壁から奥を掘り込み、壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部と焚口付近の右壁には長径0.29m、短径0.26m、厚さ0.15mの垂門礫が据えられている。これらはカマド構築材と考えられる。燃焼部底や壁には焼土ブロック、底から焚口周辺で炭化物の広がりを検出した。カマド埋土はにぶい黄褐色シルト質土からなる。カマドの長さは0.82m、幅0.73m、深さ0.06mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

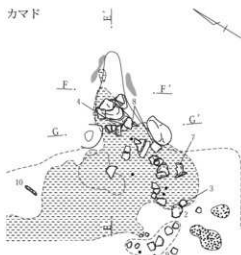
遺物 床面から須恵器の杯(2)、椀(3・6)、羽釜(9)、刀子(10)、カマド掘方埋土から黒色土器の椀(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀第3・4四半期。



第470図 VIII区24号住居

カマド



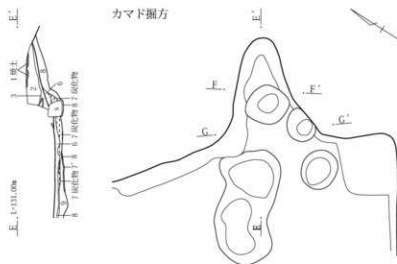
F., 1:131.00m



G., 1:131.00m

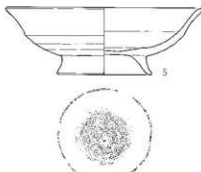
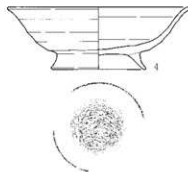
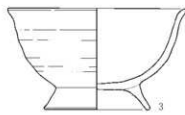
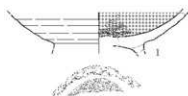


カマド四方



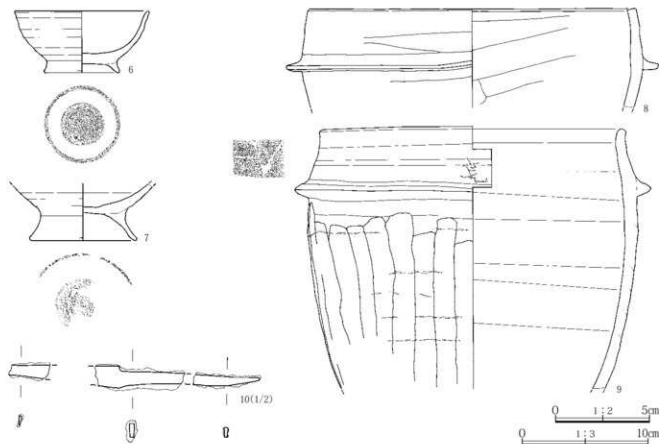
- 1 に深い褐色シルト質土(7.5YR7/4) 焼土中心層。
- 2 に深い黄褐色シルト質土(10YR5/3) 炭化粒子(φ1~3mm大)・焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 3 に深い黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の焼土粒子(φ1~2mm大)、炭化粒子を含む。
- 4 に深い黄褐色シルト質土(10YR5/3)
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2)
- 6 に深い黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。一部炭化物を混入する。
- 7 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 7' 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物・灰層。
- 8 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 9 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 8層上に比べやや色調暗い。微量の炭化粒子(φ1mm大)を含む。

0 1:30 1m



0 1:3 10cm

第471図 VIII区24号住居と出土遺物



第472図 VIII区24号住居の出土遺物

25号住居(第473図)

グリッド 91 S 16

主軸方位 N65° E

重複 なし。

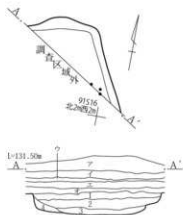
形状と規模 竪穴の北東隅のみを検出した。南西部は大部分が調査区外に存在する。長辺は1.43m+, 短辺は1.05m+, 深さは0.35m、検出された最大の面積は0.52㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土が成層する。

床面 灰黄褐色土を薄く貼って、床面を構築している。

遺物 なし。

時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と想定される。狭い調査範囲から検出した竪穴で、規模の割に調査区外のⅨ区に延長部が認められないことから、竪穴住居でない可能性もある。



- ア 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 現耕上。
- イ 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) ア層上よりやや酸化している。微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ 1~5mm大)を含む。
- ウ にふい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 床土。微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ 1~20mm大)を含む。
- エ 褐灰色シルト質土(10YR5/1) 微量の棒名ニツ岳白色軽石(φ 1~30mm大)を含む。
- オ にふい黄褐色土(10YR5/3) 床土。微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ 1~30mm大)を含む。
- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石(φ 1~30mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ 1~20mm大)・炭化粒子(φ 1~3mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石(φ 1~30mm大)・炭化粒子(φ 1~10mm大)を含む。
- 4 黒褐色土(10YR3/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石(φ 1~40mm大)・炭化物を含む。

第473図 VIII区25号住居

5. IX区

IX区では平安時代他の竪穴住居が20棟検出された。時代別の遺構数では、平安時代が18棟、年代未詳の住居は2棟である。平安時代の住居は10世紀が15棟、11世紀が3棟である。

1号住居(第474・475・477図, PL.248・428)

グリッド 2H1

主軸方位 N87°W

重複 2号住居を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居で、北部と西部は調査区外に存在する。長辺は



第474図 IX区1・2号住居

4.07m+、短辺は2.73m+、深さは0.38m、検出された最大の面積は9.60㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。
床面 灰黄褐色砂質土を0.13mほど貼って、平坦な床面を構築している。カマド周辺の東部と西壁際周辺に硬化面を検出した。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。南壁際と北側の調査区境から長径0.85～0.90mの歪んだ円形の窪みを南壁の西寄りから長径0.68m、短径0.64m、深さ0.38mの土坑1を検出した。カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築して

いる。燃焼部底は緩やかに傾き、奥壁で急な勾配で立ち上がる。燃焼部左右の壁にはS1～S5の垂円礫5点が据えられている。これらはカマド構築材である。

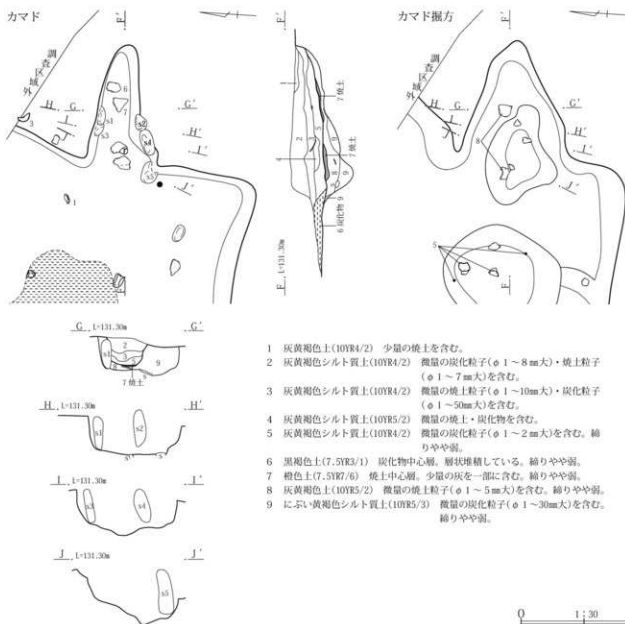
S1は長径0.26m、短径0.16m+、厚さ0.08mの垂円礫である。

S2は長径0.29m、短径0.14m、厚さ0.10mの垂円礫である。

S3は長径0.27m、短径0.10m、厚さ0.07mの垂円礫である。

S4は長径0.27m、短径0.20m、厚さ0.12mの垂円礫である。

S5は長径0.35m、短径0.19m、厚さ0.10mの垂円礫で



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量の焼土を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1～8mm大)・焼土粒子(φ1～7mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(φ1～10mm大)・炭化粒子(φ1～50mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の焼土・炭化物を含む。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。締りやや弱。
- 6 黒褐色土(7.5YR3/1) 炭化物中心層。層状堆積している。締りやや弱。
- 7 褐色土(7.5YR/6) 焼土中心層。少量の灰の一部を含む。締りやや弱。
- 8 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の焼土粒子(φ1～5mm大)を含む。締りやや弱。
- 9 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の炭化粒子(φ1～30mm大)を含む。締りやや弱。

0 1:30 1m

第475図 IX区1号住居

ある。

カマド埋土は炭化物を含む灰黄褐色シルト質土が成層し、焚口の埋土からは厚さ0.07mの炭化物の薄層を検出した。カマドの長さは0.93m、幅0.56m、深さ0.22mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマド使用面から土師器の甕(6・7)、床面付近から須恵器の杯(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

2号住居(第474・476・477図、Pl.249)

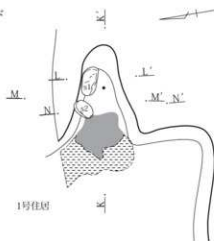
グリッド 2 1 1

主軸方位 N86°W

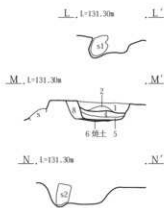
重複 1号住居に切られる。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸方形を呈する竪穴住居で北部は1号住居により失われ、西部は調査区外に存在する。長辺は2.24m+、短辺は1.05m+、深さは0.43m、検出された最大の面積は2.62㎡である。

カマド



1号住居



埋土 ニツ島の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土の上層と黒褐色砂質土の下層からなる。

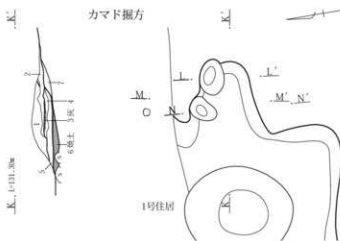
床面 暗灰黄色土を0.07mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。西部で硬化面の広がりを検出した。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。カマド前から直径0.85m、深さ0.36mの歪んだ円形の土坑1を検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部の左壁には長径0.24m、短径0.20m、厚さ0.13mの垂円礫S1と長径0.17m、短径0.10m、厚さ0.10mの垂円礫S2が掘えられている。これらはカマド構築材と考えら、礫が埋め込まれた痕跡はカマド掘方で検出された小ピットにそれぞれが対応する。燃焼部底～焚口で焼土や炭化物の広がりが検出された。カマド埋土は灰黄褐色砂質土が成層する。カマドは長さ0.77m、幅0.75m、深さ0.07mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかつ

カマド掘方



1号住居

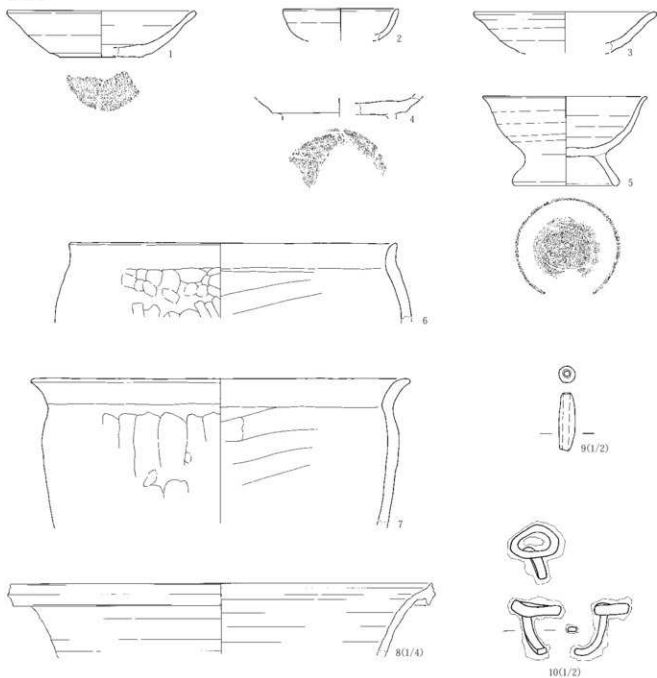
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の権名ニツ島白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~10mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR6/2) 微量の焼土粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 3 褐灰色砂質土(10YR6/1) 灰中心層。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の焼土粒子(φ1~5mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の焼土塊を含む。
- 6 にぶい赤褐色土(5YR5/4) 焼土中心層。少量の炭化物を含む。
- 7 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3)
- 8 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の権名ニツ島白色軽石小粒(φ1~5mm大)を含む。

0 1:30 1m

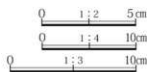
第476図 IX区2号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物

1号住居



2号住居



第477図 IX区1・2号住居の出土遺物

た。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 掘方から土師器の甕(12)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

3号住居(第478図、PL.250)

グリッド 2 H 1

主軸方位 N78°W

重複 25号土坑を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は2.07m、短辺は1.90m、深さは0.11m、面積は4.20㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐〜にぶい黄橙色砂質土からなる。

床面 Ⅻ・Ⅺ層の黄褐色砂礫層を削り出して、やや凹凸のある床面を構築している。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は壁の手前から灰褐色シルト質土を貼って両袖を構築

し、奥を掘り込んで壁の前後に構築している。燃焼部底は水平で緩やかに立ち上がる。燃焼部底〜焚口では焼土や炭化物の広がりは認められない。カマド埋土は灰黄褐色質土からなる。カマドは長さ0.88m、幅0.50m、深さ0.12mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から灰釉陶器の椀(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

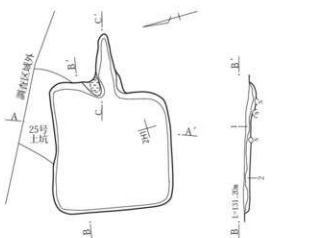
4号住居(第479・480・482図、PL.250・251・428)

グリッド 92 F 19

主軸方位 N88°W

重複 5・18号住居を切る。40・42号土坑に切られる。

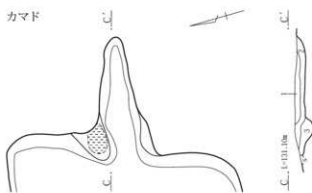
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.02m、短辺は2.50m、深さは0.32m、面積は7.30㎡である。



- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)と明黄褐色FP 泥流シルト質土を含む。
- 2 にぶい黄橙色シルト質土(10YR7/4) 微量の棒名ニツ岳白色軽石大粒(φ1~80mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 3 黒褐色シルト質土(10YR3/1)

0 1:60 2m

第478図 IX区3号住居と出土遺物



- 1 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)と小円礫(φ30mm大)を含む。
- 2 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)を含む。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~4mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)・小円礫(φ20mm大)を含む。締りやや弱。

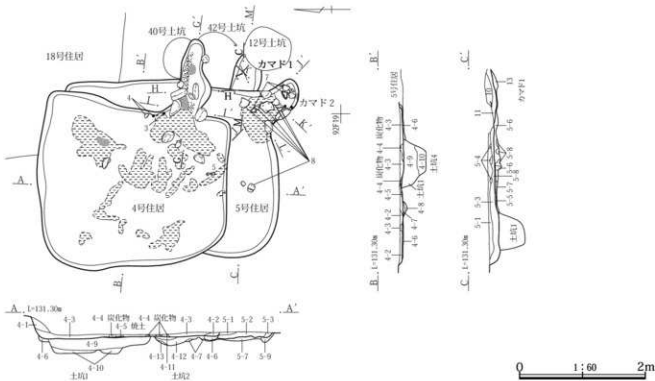
0 1:30 1m



0 1:3 10m

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色土からなる。
床面 灰黄褐色土を0.05mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。ほぼ全面に炭化材の広がりを検出し、材は東西や北西～南東方向のものが多くみられる。
掘方 Ⅻ・Ⅺ層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。中央北寄りから歪んだ円形の土坑1とそれを切る円形の土坑4、南西隅寄りから円形の土坑2・3を検出した。

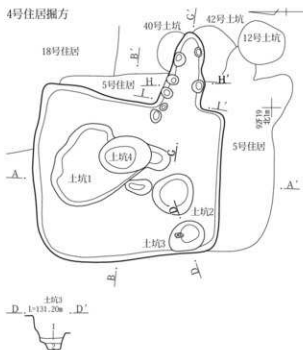
土坑1は長径1.23m、短径1.14m、深さ0.23mである。
 土坑2は直径0.64m、深さ0.14mである。
 土坑3は長径0.59m、短径0.54m、深さ0.30mである。
 土坑4は長径0.83m、短径0.59m、深さ0.36mである。
カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底はほぼ水平で、緩やかに傾きながら立ち上がる。燃焼部の左右壁にはS1～S4の垂土礫4点が



- 4-1 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)と小円礫($\phi 1\sim 5\text{mm}$)を含む。
- 4-2 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)・炭化物を含む。
- 4-3 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)・炭化粒子($\phi 1\sim 3\text{mm}$)を含む。
- 4-4 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 4-5 にぶい、褐色土(7.5YR7/4) 黄土中心層。
- 4-6 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量のにぶい黄色シルト質土を含む。
- 4-7 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の炭化物を含む。
- 4-8 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の炭化粒子($\phi 1\text{mm}$)を含む。
- 4-9 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 20\text{mm}$)を含む。=土坑1
- 4-10 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2)=土坑1・4
- 4-11 灰黄褐色シルト質土(10YR6/2)=土坑2
- 4-12 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)を含む。=土坑2
- 4-13 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 3\text{mm}$)を含む。=土坑2
- 5-1 にぶい、黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の棒名ニツ岳白色軽石大粒($\phi 1\sim 50\text{mm}$)を含む。
- 5-2 にぶい、黄褐色シルト質土(10YR7/4) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 3\text{mm}$)を含む。
- 5-3 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)を含む。
- 5-4 にぶい、黄褐色シルト質土(10YR7/4) ブロック状を含む。
- 5-5 にぶい、黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)を含む。
- 5-6 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)を含む。
- 5-7 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 2\text{mm}$)を含む。
- 5-8 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 2\text{mm}$)を含む。
- 5-9 にぶい、黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の棒名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 2\text{mm}$)を含む。

第479図 IX区4・5号住居(1)

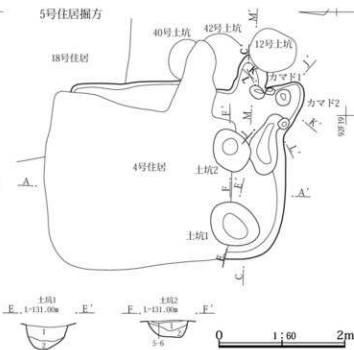
4号住居掘方



4号住居土坑3 D-D'

- 1 黒褐色シルト土(10YR3/2) 微量の浅間C軽石小粒($\phi 1 \sim 3$ mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の浅間C軽石混黒褐色土を含む。

5号住居掘方



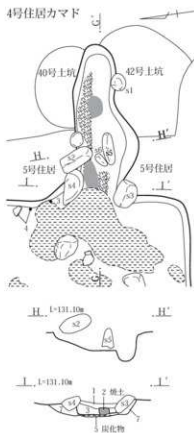
5号住居土坑1 E-E'

- 1 灰黄色砂質土(2.5Y6/2) 微量の極名ニッ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 10$ mm大)を含む。締りやや弱。
- 2 暗灰黄色砂質土(2.5Y5/2) 微量の極名ニッ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 5$ mm大)を含む。

5号住居土坑2 F-F'

- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニッ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 5$ mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の極名ニッ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 10$ mm大)を含む。

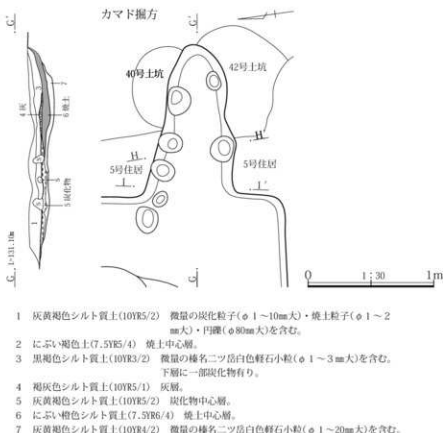
4号住居カマド



I-I', 1:131.100

H-H', 1:131.100

カマド掘方



- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の炭化粒子($\phi 1 \sim 10$ mm大)・焼土粒子($\phi 1 \sim 2$ mm大)・円礫($\phi 80$ mm大)を含む。
- 2 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 焼土中心層。
- 3 黒褐色シルト質土(10YR3/2) 微量の極名ニッ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 3$ mm大)を含む。下層に一部炭化物有り。
- 4 褐灰色シルト質土(10YR5/1) 炭層。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 炭化物中心層。
- 6 にぶい褐色シルト質土(7.5YR6/4) 焼土中心層。
- 7 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の極名ニッ岳白色軽石小粒($\phi 1 \sim 20$ mm大)を含む。

第480図 D区4・5号住居(2)

据えられている。

S 1は直径0.14mである。

S 2は長径0.27m、短径0.12m、厚さ0.12mである。

S 3は長径0.20m、短径0.17m、厚さ0.08mである。

S 4は長径0.26m、短径0.14m、厚さ0.10mである。

燃焼部底の中央には長径0.10m、短径0.09m、厚さ0.05mのS 5と長径0.25m、短径0.14m、厚さ0.07mのS 6からなる棒状円礫が埋め込まれている。これらは前者がカマド構築材、後者は支脚と考えられる。燃焼部底の左壁寄りには焼土ブロックや灰の広がりを検出した。また焚口周辺では炭化物や硬化面の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐～黒褐色シルト質土からなる。カマドの長さは1.30m、幅0.50m、深さ0.13mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たな

い構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(4)や鉄製品(5)、床面付近から土師器の甕(3)、埋土から須恵器の杯(1・2)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

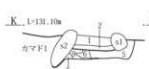
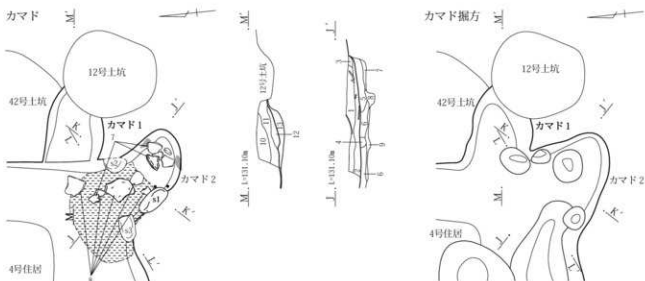
5号住居(第479～482図、PL.252・428)

グリッド 92F19

主軸方位 N87°W

重複 4号住居、12・40・42号土坑に切られる。18号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で北西部の大部分は4号住居により失われている。長辺は3.50m、短辺は2.65m、深さは0.15m、面積は8.18㎡である。



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳軽石小粒(φ1～5mm大)・炭化粒子(φ1mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 1層上よりやや暗め。微量の棒名二ツ岳軽石小粒(φ1～10mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色シルト質土(10YR7/4) 微量の炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。
- 4 浅褐色シルト質土(2.5Y7/3) FF泥面の一つ、ブロック状に混入する。締りやや弱。
- 5 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～3mm大)・焼土粒子・炭化物を含む。
- 6 黒褐色シルト質土(10R3/2) 少量の炭化物と微量の焼土を含む。締りやや弱。
- 7 黄褐色シルト質土(2.5Y5/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～3mm大)を含む。
- 8 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の焼土・炭化物を含む。
- 9 黄褐色シルト質土(2.5Y5/3) 微量の炭化物・焼土を含む。
- 10 黄褐色土(2.5Y5/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石(φ1～30mm大)・明黄褐色シルト粒子(φ1～2mm大)を含む。=カマド1
- 11 暗黄褐色土(2.5Y5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)を含む。=カマド1
- 12 暗黄褐色土(2.5Y5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)・炭化粒子(φ1～2mm大)・焼土を含む。=カマド1
- 13 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の炭化粒子(φ1～2mm大)・焼土粒子(φ2mm大)を含む。締りやや弱。=カマド1



第481図 IX区5号住居

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色～ぶい黄褐色シルト質土からなる。

床面 灰黄褐色土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅻ・Ⅻ層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。南壁際から円形の土坑1・2を検出した。

土坑1は長径0.81m、短径0.65m、深さ0.43mである。土坑2は長径0.69m、短径0.58m、深さ0.42mである。

カマド 東壁の南東隅に位置する。更に東壁の南東隅寄りから古いカマドの痕跡が検出された。このことから住居廃絶時のカマドをカマド2、古いカマドをカマド1とする。カマド1・2の燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。カマド2の燃焼部底はほぼ水平で、緩やかに傾きながら立ち上がる。燃焼部の左右壁にはS1～S3の長径0.15～0.28m、短径0.10～0.13m

の垂円礫が3点据えられている。これらはカマド構築材と考えられる。焚口周辺では炭化物や硬化面の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色砂質土からなる。カマド2の長さは0.68m、幅0.80m、深さ0.12mである。カマド1の燃焼部底は緩く傾きながら立ち上がる。カマド埋土は黄褐色～暗黄褐色土からなる。カマド1の長さは0.66m、幅0.43m、深さ0.11mである。

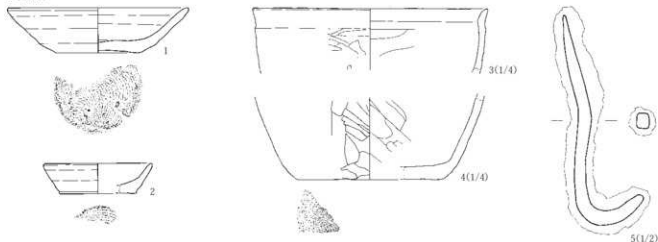
貯蔵穴 貯蔵穴は検出されなかった。掘方で検出した土坑1・2は調査で床下土坑と認定されたが、竪穴の位置や規模から土坑1は5号住居の貯蔵穴、土坑2は4号住居の貯蔵穴に相当する可能性がある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

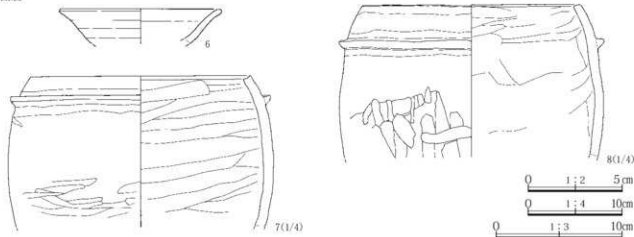
遺物 カマド使用面から土師器の羽釜(8)、カマド埋土から須恵器の椀(6)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

4号住居



5号住居



第482図 Ⅸ区4・5号住居の出土遺物

6号住居(第483~486図、PL.253・429)

グリッド 92 E 18

主軸方位 N83°W

重複 19・53号土坑に切られる。7・11号住居、46・47号土坑を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.55m、短辺は3.38m、深さは0.25m、面積は10.64㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

床面 にぶい黄橙色砂質土を0.08mほど貼り、平坦な床面を構築している。カマド周辺と北東隅の壁際で硬化面

の広がりを出した。

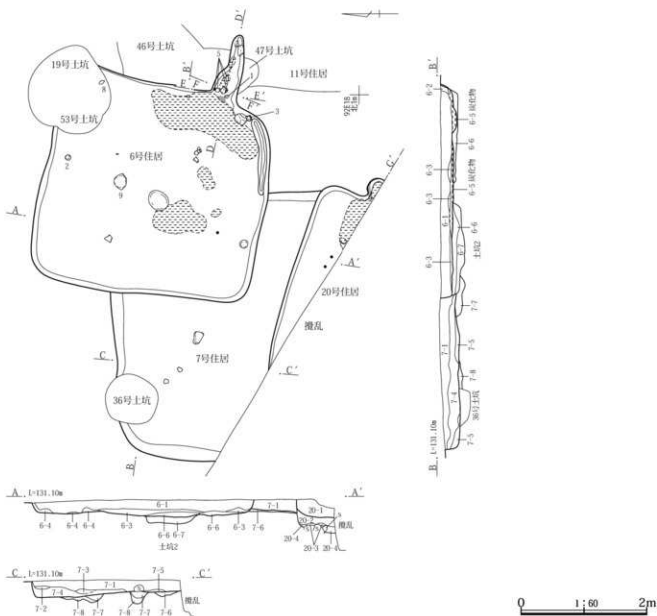
掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。南西隅の壁際から円形の土坑1と歪んだ方形の土坑2を検出した。

土坑1は長径0.78m、短径0.78m、深さ0.27mである。

土坑2は長辺1.46m、短辺0.96m、深さ0.15mである。

周溝 南東隅寄りの南壁際の一部を周回する。最大の上幅は0.14m、最少の底幅は0.04m、深さは0.04mである。

カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、緩やかな勾配で立ち上がる。煙道と燃焼部の境界は極めて不明瞭である。燃焼部底や



第483図 D区6・7・20号住居

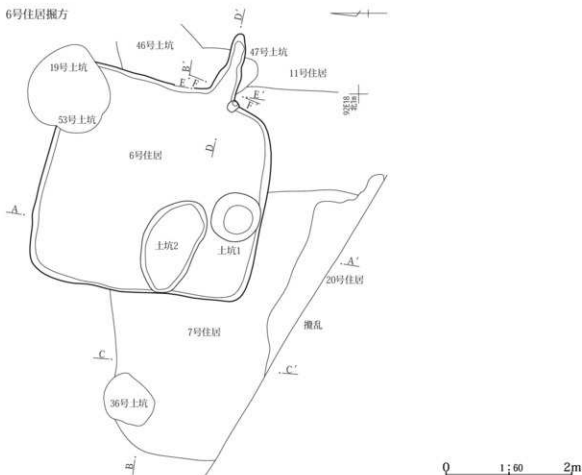
焚口付近は焼土ブロックや炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色シルト質土が焚口に向かって緩く傾斜しながら成層している。カマドは長さ1.05m、幅0.47m、深さ0.15mである。貯蔵穴は検出されなかった。掘方で検出した土坑1は位置や規模から想定して貯蔵穴に相当する可能性がある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(3)、灰軸陶器の壺(8)、砥石(9)、カマド使用面から須恵器の杯(1・5)が出土した。

時代 平安時代11世紀前半。

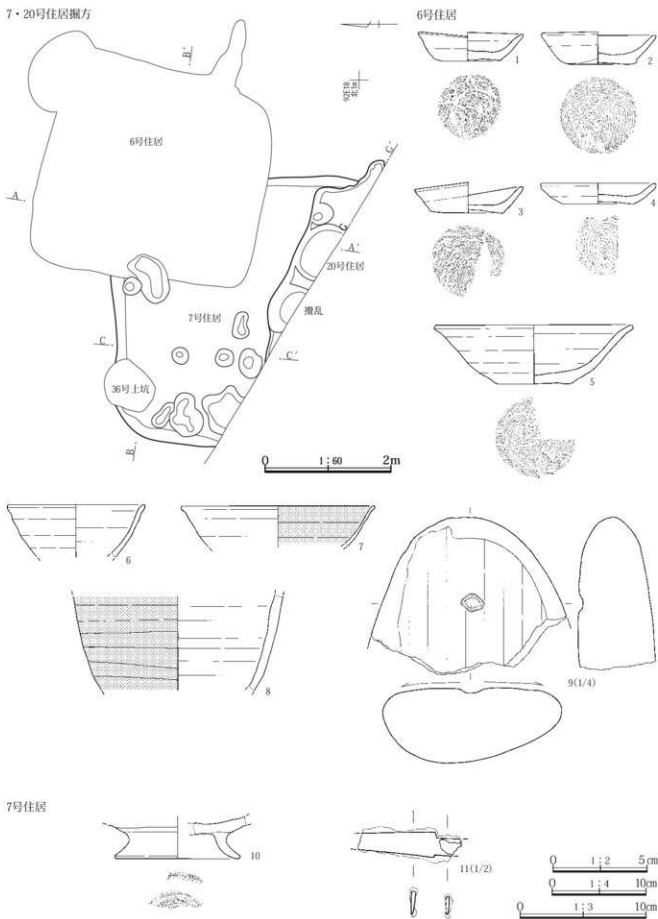
6号住居掘方



- 6-1 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石($\phi 1\sim 30\text{mm}$)・炭化粒子($\phi 2\sim 10\text{mm}$)を含む。
- 6-2 にぶい黄褐色シルト質土(10YR7/3) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)を含む。
- 6-3 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/3) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)を含む。
- 6-4 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/4) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 2\sim 15\text{mm}$)を含む。
- 6-5 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。締り弱。
- 6-6 にぶい黄褐色土(10YR6/4) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 3\text{mm}$)を含む。=土坑1・2
- 6-7 にぶい黄褐色砂質土(10YR7/3)+シルト質土 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 3\text{mm}$)を含む。=土坑2
- 7-1 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 2\sim 20\text{mm}$)・炭化粒子($\phi 1\sim 3\text{mm}$)を含む。
- 7-2 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 3\text{mm}$)を含む。
- 7-3 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 2\sim 3\text{mm}$)・FP泥流土(にぶい黄褐色)を含む。
- 7-4 にぶい黄褐色シルト質土(10YR7/4) FP泥流土に近い。微量の種名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 2\sim 10\text{mm}$)を含む。
- 7-5 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/3) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)を含む。
- 7-6 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/4) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)・炭化粒子・焼土粒子($\phi 1\text{mm}$)を含む。
- 7-7 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 5\text{mm}$)を含む。
- 7-8 にぶい黄褐色砂質土(10YR7/2)+シルト質土 微量の種名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 3\text{mm}$)を含む。
- 20-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石大粒($\phi 1\sim 80\text{mm}$)を含む。締りやや強。
- 20-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石($\phi 2\sim 30\text{mm}$)・炭化粒子($\phi 1\sim 4\text{mm}$)を含む。
- 20-3 にぶい黄褐色土(10YR6/4) 少量のFP泥流シルト質土を含む。
- 20-4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の種名ニツ岳白色軽石大粒($\phi 3\sim 100\text{mm}$)・円礫($\phi 200\text{mm}$)を含む。

第484図 IX区6号住居

7・20号住居掘方



第485図 IX区7・20号住居と6・7号住居の出土遺物

7号住居(第483・485図、PL.254・429)

グリッド 92 E 18

主軸方位 N88° E

重複 6・20号住居に切られる。36号土坑は床を切って埋土に覆われるので住居廃絶後の時期に相当する。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。北東隅は6号住居により、南東部は20号住居により失われ、南西部は調査区外に存在する。長辺は4.20m+、短辺は2.72m+、深さは0.25m、検出

された最大の面積は10.69㎡である。

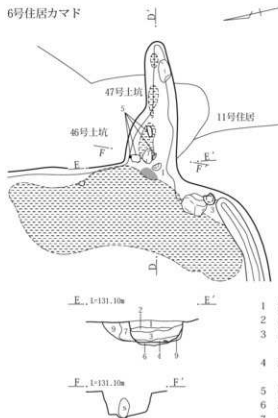
埋土 ニツ岳の白色軽石を多く含む灰黄褐色～にぶい黄褐色シルト質土からなる。

床面 にぶい黄褐色砂質土を0.07mほど貼って、床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。西壁際から不定形の浅い窪みを多く検出した。

カマドと貯蔵穴 検出されなかった。カマドは調査区外に存在する可能性がある。

6号住居カマド

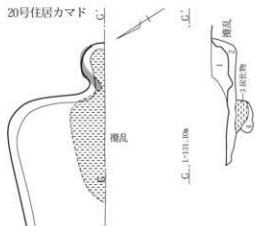


カマド掘方

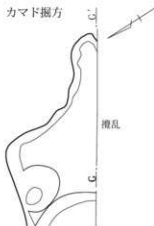


- 1 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ2~10mm)を含む。
- 2 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量のにぶい黄褐色砂質土を含む。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~5mm大)を含む。締りやや弱。
- 4 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)を含む。下に炭化物・灰を含む。
- 5 にぶい黄褐色シルト質土(10YR7/2) 微量の焼土粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 6 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~2mm大)・焼土を含む。
- 7 黒褐色土(10YR3/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)を含む。
- 8 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。
- 9 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の椋名ニツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。

20号住居カマド



カマド掘方



- 1 灰黄褐色土 少量の焼土と微量の(10YR5/2) 炭化物を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土 少量の炭化物と(10YR4/2) 微量の焼土を含む。
- 3 黒褐色土 炭化物中心層。(10YR3/1)
- 4 灰黄褐色砂質土 少量の炭化物を含む。(10YR4/2)

0 1:30 1m

第486図 IX区6・20号住居

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から須恵器の椀(10)、刀子(11)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

20号住居(第483・485・486図)

グリッド 92 E 18

主軸方位 N72° E

重複 7号住居を切る。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。南西部の大部分は調査区外に存在する。長辺は3.13m+、短辺は0.77m+、深さは0.25m、検出された最大の面積は1.26㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色砂質土を薄く貼って、床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。北壁際から円形の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の北東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、奥壁は急な勾配で立ち上がる。燃焼部左壁や焚口付近から焼土ブロックや炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色土である。カマドは長さ0.50m、幅0.40m、深さ0.11mである。貯蔵穴は検出されなかった。

遺物 なし。

時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と想定され、平安時代10世紀後半に帰属する7号住居よりも新しいこ

とから、平安時代10世紀後半から11世紀と想定される。

8号住居(第487図、PL.255)

グリッド 92 F 20

主軸方位 N78° W

重複 11号土坑を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は2.47m+、短辺は0.90m+、深さは0.23m、検出された最大の面積は1.26㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含むふい黄褐色土からなる。

床面 XII・XIII層の黄褐色砂質土を削り出して平坦な床面を構築している。

カマドと貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 なし。

時代 埋土から古墳時代後期から平安時代と想定される。

9号住居(第488～490図、PL.255・256・429)

グリッド 92 D 18

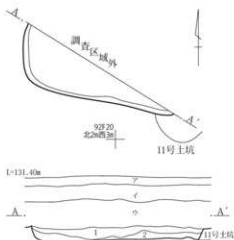
主軸方位 N88° E

重複 10・11・26号住居、45号土坑を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居で北東部は試掘溝により失われている。長辺は3.04m、短辺は2.16m+、深さは0.12m、検出された最大の面積は5.68㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 XII・XIII層の黄褐色砂質土や10号住居埋土を削り出して、平坦な床面を構築している。中央部からは硬化面の広がりを検出した。



ア 灰黄褐色土(10YR6/2) 置土。

イ 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 現掘土。微量の椀名ニツ岳白色軽石(φ1～40mm)を含む。

ウ 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～5mm大)・炭化粒子(φ1～3mm大)を含む。

1 にふい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の椀名ニツ岳白色軽石(φ1～30mm大)・炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。

2 にふい黄褐色土(10YR5/3) シルト・砂質土混じり。微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒(φ1～5mm大)・炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。

第487図 IX区8号住居

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに傾いて、やや急な勾配で立ち上がる。燃焼部右壁には長径0.15～0.23m、短径0.13～0.19mの垂円礫2点が据えられており、これらはカマド構築材と考えられる。燃焼部底の中央の埋土中から長径0.25～0.27mの垂円礫2点が出土し、これらはカマドの崩落に伴って移動したカマド構築材と考えられる。燃焼部底から焚口周辺の大範囲で炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は暗灰黄色土からなる。カマドは長さ0.50m、幅0.35m、深さ0.23mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たな

い構造の竪穴住居と想定される。

遺物 カマドから多くの遺物が出土した。カマド使用面から黒色土器の椀(1)、須恵器の杯(3～5・7)、皿(2)、土師器の甕(10)、埋土から須恵器の杯(6・8)が出土した。

時代 平安時代11世紀前半。

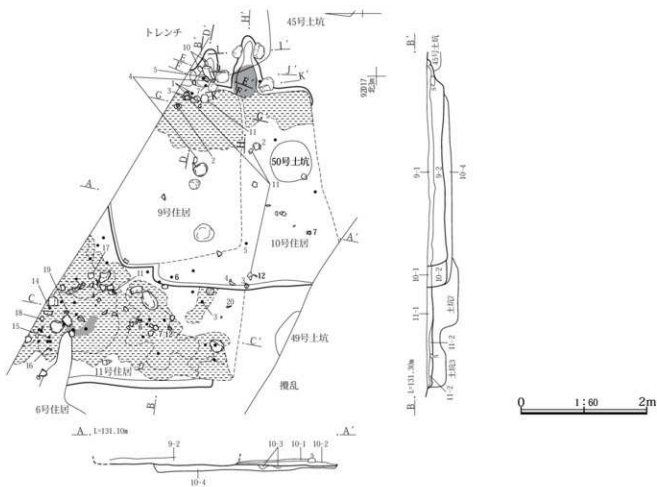
10号住居(第488・489・491図, PL.257・429)

グリッド 9D18

主軸方位 N87°E

重複 9号住居に切られる。11・26号住居、45・50号土坑を切る。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形



- 9-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名ニツ房白色軽石小粒(φ1～3mm大)・炭化粒子(φ1～5mm大)を含む。締り良。
- 9-2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名ニツ房白色軽石小粒(φ1～10mm大)・円礫(φ30～50mm大)を含む。締り良。
- 10-1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ房白色軽石小粒(φ1～2mm大)を含む。
- 10-2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ房白色軽石小粒(φ1～3mm大)を含む。
- 10-3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 少量の炭化物を含む。微量の極名ニツ房白色軽石小粒(φ1～20mm大)を含む。
- 10-4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の極名ニツ房白色軽石小粒(φ1～20mm大)を含む。締りやや強。
- 11-1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名ニツ房白色軽石小粒(φ1～4mm大)を含む。締りやや良。
- 11-2 黒褐色砂質土(10YR3/1) 微量の炭化物を含む。締りやや良。

第488図 Ⅸ区9～11号住居

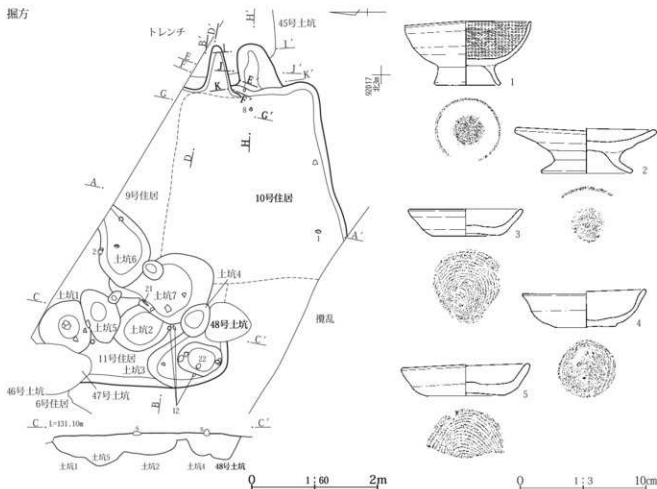
を呈する竪穴住居で北部は9号住居により失われている。長辺は3.14m、短辺は3.07m、深さは0.11m、面積は7.58㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。床面 黒褐色砂質土を0.15mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の灰黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

カマド 東壁の中央に位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は水平で極めて緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部壁の左右には長径0.20～0.28m、短径0.13～0.15mの垂角礫3点が据えられており、これらはカマド構築材と考えられる。燃焼部底には焼土、焚口付近から炭化物と硬化面の広がりを検出した。カマド埋土にはぶい灰黄褐色砂質土である。カマドは長さ0.97m、幅0.53m、深さ0.13mである。貯蔵穴は検出されなかった。

掘方



第489図 IX区9～11号住居と9号住居の出土遺物

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(2・4～6)、椀(7)、黒色土器の広口壺(11)、床面付近から須恵器の杯(3)、埋土から灰釉陶器の椀(9・10)、掘方から灰釉陶器の皿(8)が出土した。床面から出土した黒色土器の広口壺(11)は切合い関係にある9号住居のカマド使用面から出土した破片と接合した。これは9・10号住居が新旧のカマドを有する同一の竪穴住居である可能性を示唆する。

時代 11世紀前半に帰属する26号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代10世紀第4四半期と想定される。

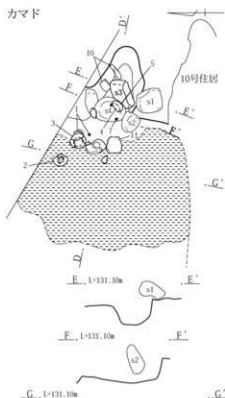
11号住居(第488・489・492・493図、PL.257・258・429・430)

グリッド 92D18

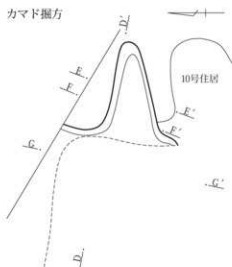
主軸方位 N89°W

重複 6・9・10・26号住居、46～48号土坑に切られる。

カマド

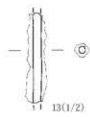
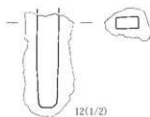
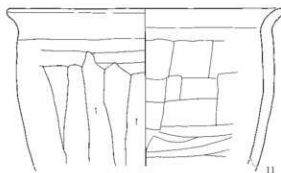
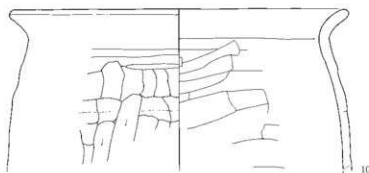
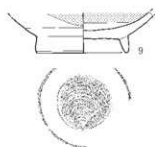
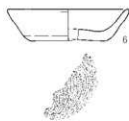


カマド掘方



- 1 にぶい粗色砂質土(7.5YR6/4) 少量の焼土を含む。
- 2 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)を含む。
- 3 暗灰黄色土(2.5Y5/2) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)・焼土粒子($\phi 1\sim 2\text{mm}$)と少量の炭化物を含む。
- 4 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量のにぶい黄褐色シルト質土(FP泥流シルト質土)・焼土粒子($\phi 1\sim 2\text{mm}$)と少量の炭化物を含む。
- 5 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量の灰と微量の炭化粒子・焼土粒子($\phi 1\sim 2\text{mm}$)を含む。
- 6 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の椀名ニツ岳白色軽石小粒($\phi 1\sim 10\text{mm}$)を含む。

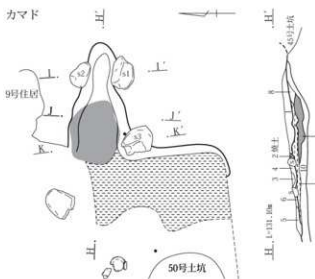
0 1:30 1m

0 1:2 5cm
0 1:3 10cm

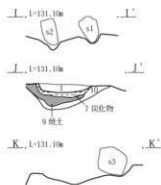
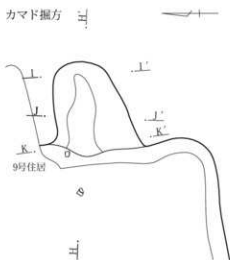
第490図 K区9号住居と出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物

カマド

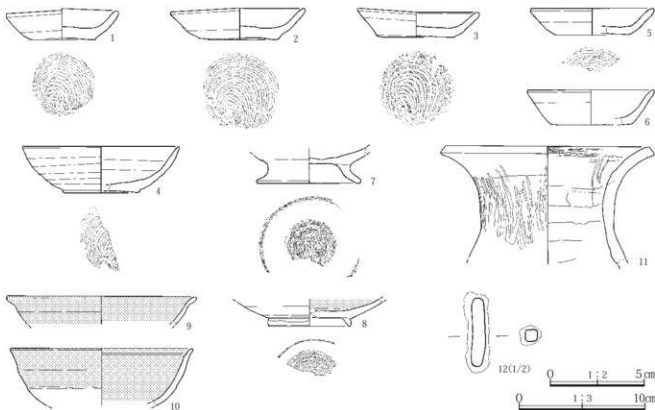


カマド掘方

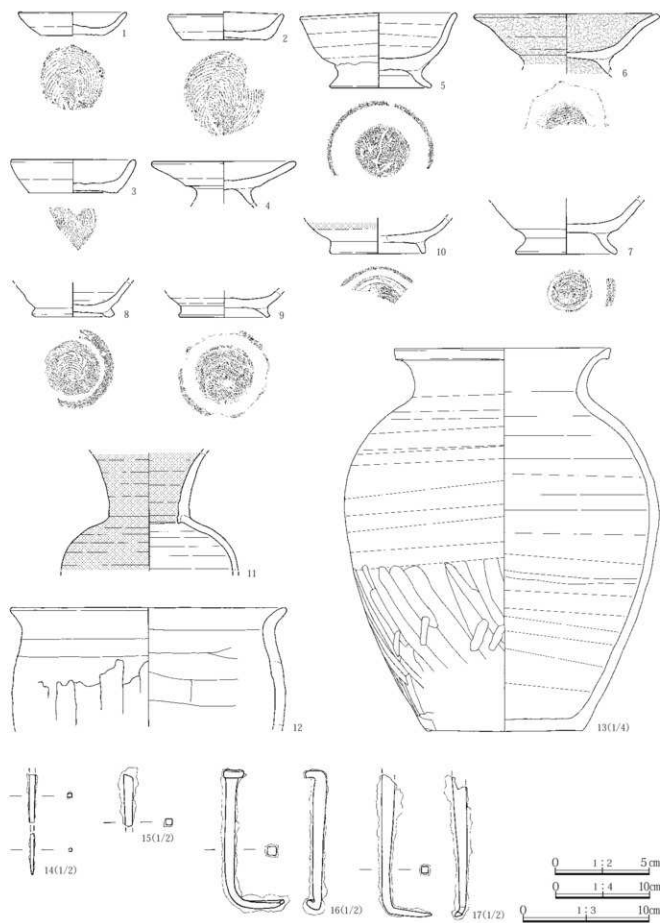


- 1 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の極名二ツ層白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ1~3mm大)を含む。締り強。
- 2 にぶい赤褐色土(5YR5/4) 焼土ブロック。
- 3 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の極名二ツ層白色軽石小粒・焼土粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 4 にぶい黄色シルト質土(2.5Y6/3) 微量の焼土粒子・炭化粒子(φ1mm大)を含む。
- 5 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の極名二ツ層白色軽石小粒(φ1~10mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)・焼土粒子(φ1mm大)を含む。
- 6 褐色土(10YR4/1) 微量の炭化物を含む。
- 7 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。微量の焼土を含む。締りやや弱。
- 8 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極名二ツ層白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- 9 にぶい赤褐色土(5YR6/4) 焼土中心層。締りやや弱。
- 10 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の極名二ツ層白色軽石小粒(φ1~10mm大)・焼土を含む。

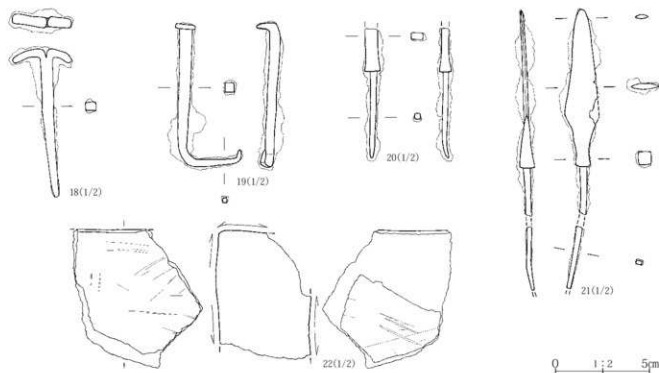
0 1:30 1m



第491図 K区10号住居と出土遺物



第492図 D区11号住居の出土遺物(1)



第493図 IX区11号住居の出土遺物(2)

形状と規模 南北方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴で、東部は9・10号住居に、北東部は試掘溝により失われている。長辺は3.55m+、短辺は2.82m+、深さは0.06m、検出された最大の面積は5.71㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐～黒褐色砂質土からなる。

床面 灰黄褐色土を0.14mほど厚く貼って、平坦な床面を構築している。床面の前面から複数の炭化物の薄層と土器などの遺物が多く出土した。

掘方 Ⅻ・Ⅺ層の黄褐色砂質土を掘り込んで、土坑1～7を構築している。掘方から多くの土坑が検出され、周辺の竪穴住居とは異なる特徴を有する。

土坑1は円形を呈し、長径0.86m、短径0.75m、深さ0.29mである。

土坑2は円形を呈し、長径0.80m、短径0.68m、深さ0.21mである。

土坑3は歪んだ楕円形を呈し、長径0.70m、短径0.48m、深さ0.16mである。

土坑4は楕円形を呈し、長径0.57m、短径0.49m、深さ0.12mである。

土坑5は楕円形を呈し、長径0.90m、短径0.55m、深さ0.20mである。

土坑6は歪んだ楕円形を呈し、長径1.21m、短径0.75m、深さ0.16mである。

土坑7は歪んだ円形を呈し、長径1.62m、短径1.10m、深さ0.19mである。

カマドと貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 床面から須恵器の杯(3)、椀(5～7)、甕(13)、鉄釘(14～19)、鉄鎌(20)、床面付近から灰釉陶器の長頸壺(11)、掘方から須恵器の杯(2)、皿(4)、土師器の甕(12)、砥石(22)が出土した。

時代 平安時代10世紀第4四半期。

12号住居(第494・495図、PL.259・430)

グリッド 92A17

主軸方位 N72°E

重複 39号土坑に切られる。14号住居に近接する。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居である。長辺は3.92m、短辺は3.27m、深さは0.21m、面積は9.22㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む、にぶい黄褐～灰黄褐色シルト質土からなる。

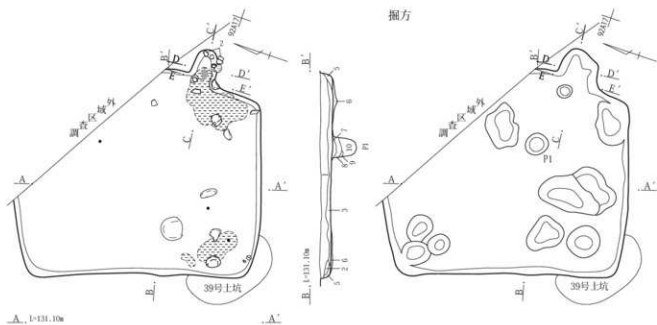
床面 灰黄褐色土を0.12mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅻ・ⅩⅢ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで平坦な掘方を構築している。西壁の北西及び南西隅際に長径0.45～0.50mの円形の浅い窪みを検出した。またカマド前からは円形のピットである直径0.35m、深さ0.38mのP1を検出した。

カマド 東壁の南東隅寄りに位置する。カマドの燃焼部は東壁の奥を掘り込んで壁の外に構築している。燃焼部底は水平で、緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部壁の左右から長径0.14～0.17m、短径0.10～0.12mの垂角礫3

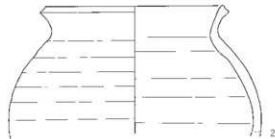
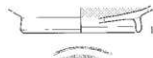
点が据えられており、これらはカマド構築材と考えられる。燃焼部底に焼土ブロック、焚口付近から炭化物や硬化面の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色シルト質土である。カマドは長さ0.60m、幅0.60m、深さ0.14mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 明瞭な柱穴は検出されなかった。掘方で検出された円形の窪みは西壁隅に位置するが、浅い窪み状の穴でありピットとしては認定できない。12号住居は床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。



- 1 にぶい黄褐色シルト質土(10YR5/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)・炭化粒子(φ1～2mm大)を含む。
- 2 黄褐色砂質土(10YR4/1) 砂粒を含む層。細かい小礫を混入する。
- 3 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)・炭化粒子(φ1～5mm大)を含む。締りやや弱。
- 4 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/4) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm大)を含む。
- 5 にぶい黄褐色シルト質土(10YR6/4) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～3mm大)を含む。
- 6 にぶい黄褐色土(10YR7/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)を含む。
- 7 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～8mm大)・炭化粒子(φ1～5mm大)を含む。= P1
- 8 灰黄褐色土(10YR4/2) = P1
- 9 にぶい黄褐色シルト質土(10YR7/4) = P1
- 10 灰黄褐色シルト質土(10YR5/2) 微量の円礫(φ30～50mm)を含む。= P1
- 11 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)・炭化粒子(φ2～10mm大)を含む。

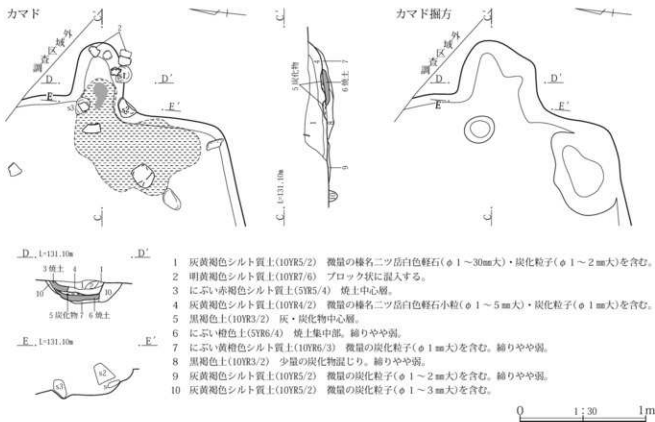
0 1:60 2m



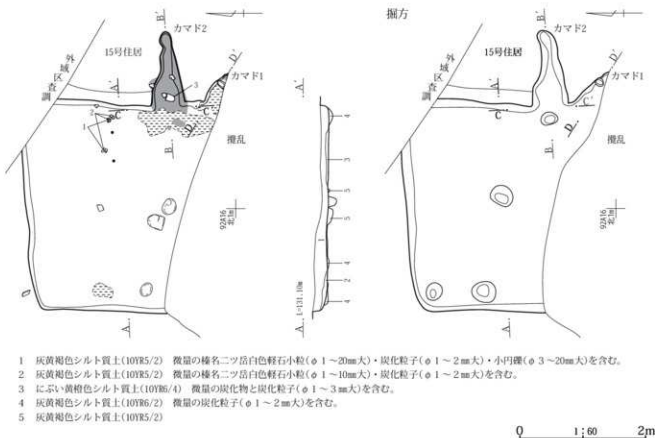
0 1:3 10cm

第494図 IX区12号住居と出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物



第495図 IX区12号住居



第496図 IX区14号住居

遺物 カマド埋土から須恵器の裏(2)、埋土から灰釉陶器の皿(1)が出土した。

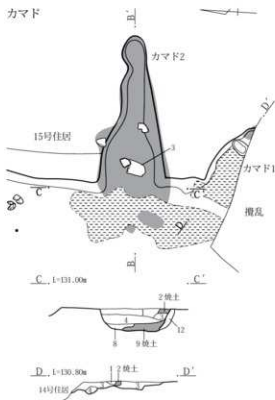
時代 平安時代10世紀前半。

14号住居(第496・497図、PL.260・430)

グリッド 91T16

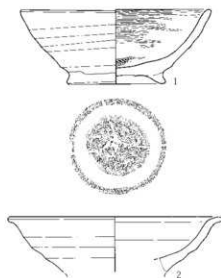
主軸方位 N87°W

カマド

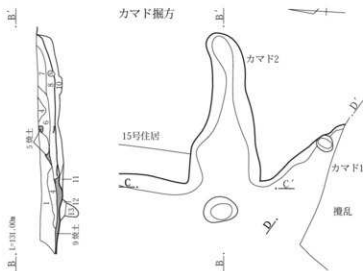


カマド1 D-D'

- 1 にふい黄褐色シルト質土(10YR5/4) 微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。締りやや弱。
- 2 にふい褐色土(5YR5/4) 焼土中心層。締りやや弱。
- 3 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の焼土と少量の炭化物粒子(ϕ 1~5mm大)を含む。締りやや弱。
- 4 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量の焼土と微量の炭化物粒子(ϕ 1~30mm大)を含む。締りやや弱。



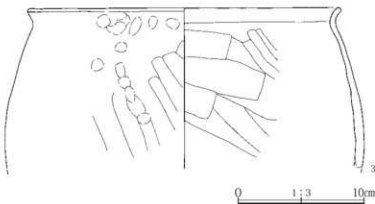
カマド掘方



カマド2 B-B'

- 1 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~10mm大)・焼土粒子(ϕ 1mm大)・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 2 にふい赤褐色土(5YR5/4) 焼土中心層。
- 3 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~5mm大)・炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 4 灰黄褐色土(10YR5/2) 少量の焼土・焼土粒子(ϕ 1~5mm大)を含む。
- 5 焼土ブロック。
- 6 にふい黄褐色土(10YR5/3) 微量の焼土粒子(ϕ 1~5mm大)を含む。
- 7 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の極名二ツ岳白色軽石小粒(ϕ 1~2mm大)・焼土を含む。
- 8 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の焼土を含む。締りやや弱。
- 9 にふい褐色土(7.5YR5/3) 焼土中心層。微量の炭化物を含む。
- 10 にふい黄褐色土(10YR7/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)を含む。
- 11 灰黄色シルト質土(2.5Y7/2)
- 12 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~2mm大)・焼土を含む。
- 13 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の炭化粒子(ϕ 1~3mm大)を含む。

0 1:30 1m



第497図 IX区14号住居と出土遺物

重複 15号住居を切る。12号住居に近接し、同時存在はない。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、長方形を呈する竪穴住居で、南部は調査区外に存在する。長辺は3.33m、短辺は3.17m+、深さは0.20m、検出された最大の面積は9.21㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色シルト質土からなる。

床面 灰黄褐色シルト質土を0.04mほど薄く貼って、ほぼ平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅻ・Ⅺ層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。中央と西壁際から直径0.28～0.37mの円形の浅い窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁の中央から南東寄りに位置する。更に南東寄りから古いカマドの痕跡が検出された。このことから住居廃絶時のカマドをカマド2、古いカマドをカマド1とする。カマド1・2の燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。カマド2の燃焼部

底はほぼ水平で、緩やかに傾きながら立ち上がり、燃焼部と煙道の境界は不明瞭である。燃焼部から煙道は焼土帯が顕著で、焚口周辺では炭化物や硬化面の広がりを検出した。カマド埋土は灰黄褐色土からなる。カマド2の長さは1.20m、幅0.55m、深さ0.05mである。カマド1の燃焼部底は凹凸がある。カマド埋土は焼土や炭化物を含む灰黄褐色土からなる。カマド1の長さは0.60m、幅0.50m、深さ0.07mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から黒色土器の椀(1)、須恵器の椀(2)、カマド使用面から土師器の甕(3)が出土した。

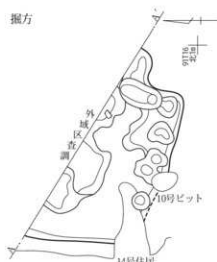
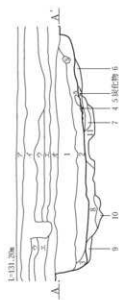
時代 平安時代10世紀後半。

15号住居(第498・499図、PL.261・430)

グリッド 91T16

主軸方位 N84°W

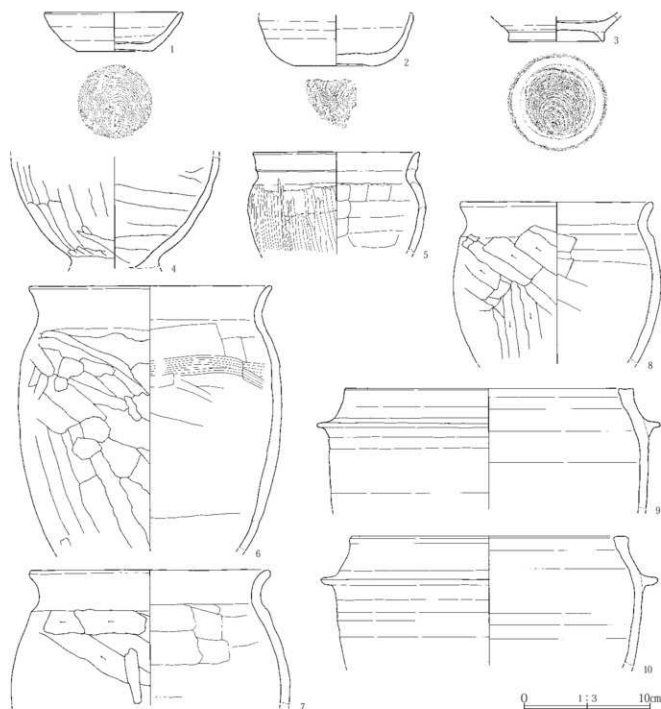
重複 14号住居、10号ピットに切られる。



- ア 灰黄褐色砂礫土(10YR5/2) 盛土。微量の角礫(φ20～30mm大)を含む。
- イ 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 耕土。微量の極小ニツ岳白色軽石(φ1～40mm大)を含む。
- ウ にぶい黄褐色土(10YR5/3) 床土。微量の極小ニツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)を含む。
- エ 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 耕土。微量の極小ニツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)を含む。
- オ にぶい黄褐色土(10YR5/4) 床土。微量の極小ニツ岳白色軽石小粒(φ1～20mm大)を含む。
- 1 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極小ニツ岳白色軽石大粒(φ1～70mm大)を含む。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の極小ニツ岳白色軽石(φ1～30mm大)を含む。

- 3 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4)
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR5/2)
- 5 黒褐色土(10YR3/1) 炭化物・灰中心部。
- 6 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 少量の焼土を含む。
- 7 灰黄褐色土(10YR4/2) 少量の炭化物を含む。
- 8 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)
- 9 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/4) 少量の明黄褐色シルトを含む。
- 10 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の明黄褐色シルトを含む。
- 11 にぶい黄褐色土(10YR5/4) 少量の明黄褐色砂質土・シルトを含む。

第498図 Ⅸ区15号住居



第499図 IX区15号住居の出土遺物

形状と規模 東西方向に長軸を有し、歪んだ隅丸長方形を呈する。北部は調査区外に存在する。長辺は2.60m+、短辺は1.60m+、深さは0.52m、検出された最大の面積は3.62㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 にぶい黄褐色砂質土を0.08mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築してい

る。南壁際には長径0.30~0.39mの浅い歪んだ円形の窪みを多く検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁に位置するが北側の大部分は調査区外に存在する。カマド燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は緩やかに傾斜して、立ち上がる。燃焼部底や焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマドは長さ0.45m、幅0.25m、深さ0.28mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(1)、床面付近から須恵器の椀(3)、カマド使用面から土師器の甕(5・7・8)、須恵器の羽釜(9)、カマド使用面付近から須恵器の杯(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。

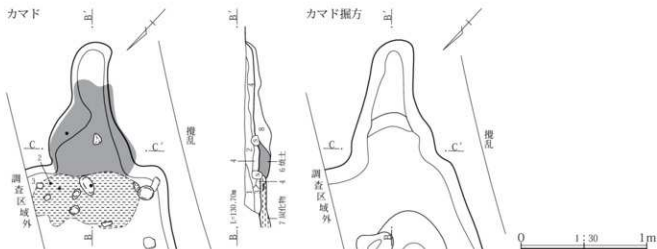
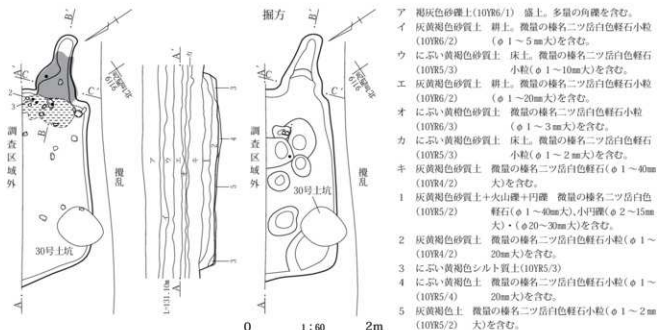
17号住居(第500・501図、PL.262)

グリッド 9119

主軸方位 N54°W

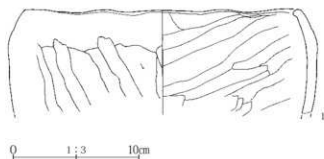
重複 30号土坑に切られる。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で北東部の大部分は調査区外に存在する。長辺は3.18m、短辺は1.08m+、深さは0.25m、検



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名ニツ岳白化粧石小粒(φ1~3mm大)を含む。締りやや弱。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(φ1~5mm大)を含む。締りやや弱。
- 3 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)・円礫(φ50mm大)を含む。締りやや弱。
- 4 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の焼土粒子(φ1~3mm大)・小円礫(φ10~30mm)を含む。締りやや弱。
- 5 褐色土(10YR4/1) 炭中心層。締りやや弱。
- 6 にぶい赤褐色土(5YR5/4) 炭土中心層。締りやや弱。
- 7 黒褐色土(10YR3/2) 炭化物中心層。締りやや弱。
- 8 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 微量の棒名ニツ岳白化粧石小粒(φ1~2mm大)を含む。

第500図 Ⅹ区17号住居



第501図 X区17号住居の出土遺物

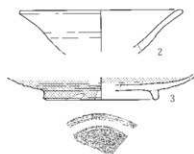
出された最大の面積は2.91㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。

床面 にぶい黄褐～灰黄褐色土を0.05mほど薄く貼って、平坦な床面を構築している。南東部で硬化面の広がりを検出した。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。南西壁際から0.30～0.59mの浅い歪んだ円形の窪みを多く検出した。

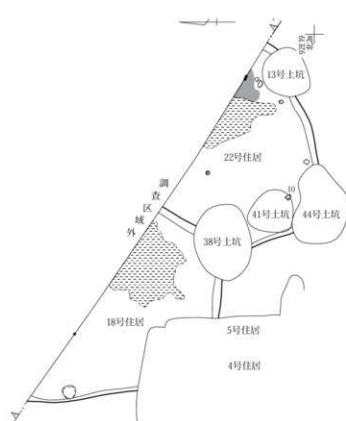
カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅に位置する。カマド燃焼



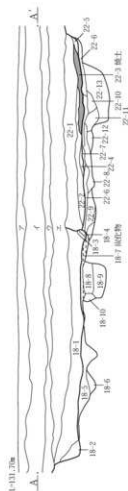
部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で緩やかに傾斜して、立ち上がる。燃焼部底では焼土帯、焚口周辺では炭化物の広がりを検出した。カマドは長さ1.05m、幅0.60m、深さ0.14mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の鉢(1)、カマド使用面から灰釉陶器の皿(3)、須恵器の椀(2)が出土した。出土遺物は



第502図 X区18・22号住居(1)



10世紀内に年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀。

18号住居(第502~504図、PL.263・430)

グリッド 92 E 19

主軸方位 N85°E

重複 4・5号住居、38号土坑に切られる。22号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、歪んだ長方形を呈する竪穴で、西部は4・5号住居により失われ、北部は調査区外に存在する。長辺は2.85m+、短辺は2.05m+、深さは0.26m、検出された最大の面積は4.29㎡である。

- ア 褐色砂質土(10YR4/1) 盛土。
- イ 灰黄褐色砂質土 礫土。微量の棒名二ツ岳白色軽石(φ1~10YR6/2) 10mm大を含む。
- ウ にぶい黄褐色砂質土 微量の炭屑B軽石・棒名二ツ岳白色軽石(10YR5/4) (φ1~30mm大)を含む。
- エ 灰黄褐色砂質土 微量の棒名二ツ岳白色軽石(φ1~40mm大)を含む。
- 18-1 灰黄褐色砂質土 微量の棒名二ツ岳白色軽石(φ1~30mm大)を含む。
- 18-2 灰黄褐色土 微量のにぶい黄褐色シルトを含む。(10YR5/2)
- 18-3 にぶい黄褐色シルト質土 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(10YR6/4) (φ1~2mm大)を含む。
- 18-4 灰黄褐色砂質土 微量の棒名二ツ岳白色軽石(φ1~30mm大)を含む。
- 18-5 にぶい黄褐色土 微量の棒名二ツ岳白色軽石(φ1~30mm大)・炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 18-6 にぶい黄褐色土 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10YR5/4) 3mm大・炭化粒子(φ1mm大)を含む。
- 18-7 褐色土 炭化物中心層。(10YR4/1)
- 18-8 黄褐色砂質土 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~20(2.5Y5/4) mm大)を含む。締りやや弱。
- 18-9 灰黄褐色砂質土 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~5(10YR4/2) mm大)・黒褐色土を含む。締りやや弱。
- 18-10 にぶい黄褐色シルト質土 微量の炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。締りやや弱。

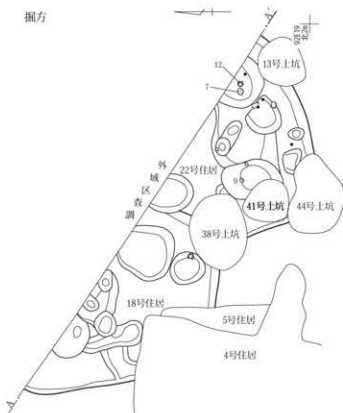
- 22-1 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石(φ1~30mm大)・炭化粒子(φ2~4mm大)を含む。
- 22-2 黒褐色土(10YR3/2) 微量の炭化粒子(φ1~8mm大)を含む。
- 22-3 にぶい褐色土(7.5YR5/4) 境上中心層。微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- 22-4 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の炭化粒子(φ1~3mm大)を含む。
- 22-5 灰黄褐色土(10YR5/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒・炭化粒子(φ1~3mm大)とにぶい黄褐色シルトを含む。
- 22-6 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 少量の境上と微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~10mm大)を含む。
- 22-7 灰黄褐色砂質土(10YR5/2) 少量の炭化物と微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)を含む。
- 22-8 灰褐色シルト質土(2.5Y6/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)を含む。
- 22-9 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~3mm大)・炭化粒子(φ1~2mm大)を含む。
- 22-10 灰黄褐色土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)を含む。
- 22-11 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の棒名二ツ岳白色軽石(φ1~40mm大)を含む。
- 22-12 にぶい黄褐色土(10YR5/3) 微量の棒名二ツ岳白色軽石小粒(φ1~20mm大)を含む。
- 22-13 暗灰褐色砂質土(2.5Y5/2) 少量の棒名二ツ岳白色軽石大粒(φ1~70mm)を含む。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐色砂質土からなる。床面 にぶい黄褐色土を0.08mほど貼って、南東に緩く傾いた床面を構築している。南東部の調査区境付近から炭化物の広がりを検出した。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。南西壁際から0.30~0.59mの浅い歪んだ円形の窪みを多く検出した。南東部の調査区境付近から直径0.88m、深さ0.34mの歪んだ円形の窪みや直径0.55m、深さ0.11mの円形の浅い窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 検出されなかった。東壁寄りから炭化物の広がりが検出されており、カマドは調査区外の東壁に存在する可能性がある。

掘方



第503図 D区18・22号住居(2)

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から須恵器の杯(2・3)、灰釉陶器の輪花碗(4)、掘方から須恵器の杯(1)が出土した。

時代 平安時代10世紀第4四半期。

22号住居(第502～504図、PL.265～268・430)

グリッド 92 E 19

主軸方位 N69° E

重複 18号住居、13・38・41・49号土坑に切られる。調

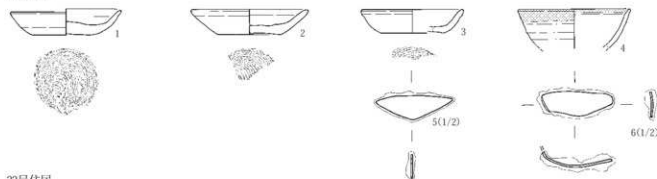
査時には切合い関係のある22・24号住居として調査したが、資料整理で22号住居に統合した。

形状と規模 東西方向に長軸を有し、歪んだ長方形を呈する竪穴で、北西部は18号住居により失われ、北東部の大部分は調査区外に存在する。長辺は2.08m+、短辺は1.98m+、深さは0.32m、検出された最大の面積は4.44m²である。

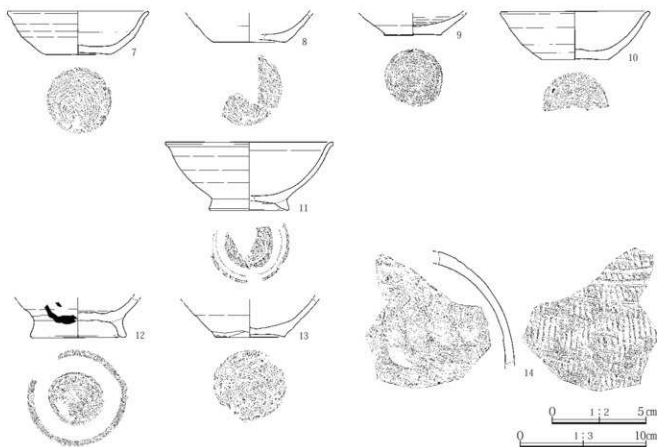
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む灰黄褐～黒褐色土が成層し、床面付近を覆うにふい褐色土は焼土や炭化物を含む。

床面 黄褐色砂質土や灰黄色シルト質土を0.15mほど厚

18号住居



22号住居



第504図 D区18・22号住居の出土遺物

く貼って、平坦な床面を構築している。南東部の調査区境付近から焼土や炭化物の広がりを検出した。

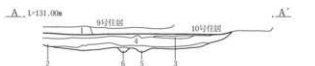
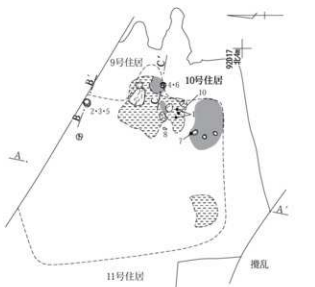
掘方 XII・XIII層の黄褐色砂質土を掘り込んで構築している。長径0.55～1.00m、深さ0.16～0.23mの歪んだ円形の窪みを多く検出した。

カマドと貯蔵穴 検出されなかった。南東部から焼土や炭化物の広がりが検出されており、カマドは調査区外の東壁に存在する可能性がある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から須恵器の杯(8)、碗(11・13)、甕(14)が出土した。掘方から須恵器の杯(7・9)、碗(10・12)が出土した。

時代 平安時代10世紀第3四半期。



第505図 IX区26号住居

26号住居(第505・506図、PL.268・269・431)

グリッド 9D18

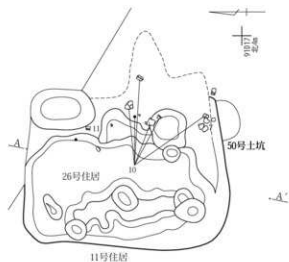
主軸方位 N89°E

重複 9・10号住居に切られる。11号住居、50号土坑を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸長方形を呈する竪穴住居で北東部は試掘溝により失われている。長辺は3.30m、短辺は2.27m、深さは0.25m、検出された最大の面積は7.14㎡である。

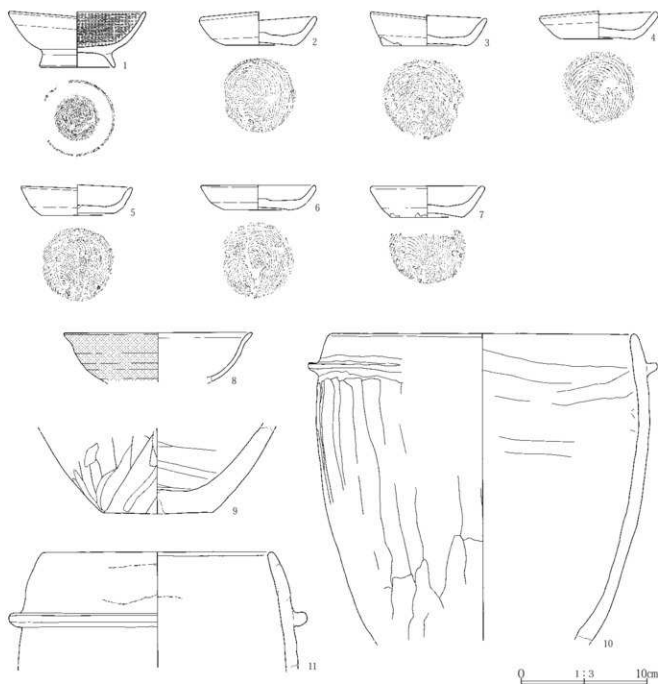
床面 9・10・11号住居の掘方埋土下から床面を検出した。床面は灰黄褐色砂質土を0.25mほど厚く貼って、構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで構築している。壁際や中央から直径0.30～0.48mのビット状の窪みを複数検出した。北東隅の壁際から長径1.00m、短径



- 1 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名二ツ岳白色軽石(φ1～30mm大)・炭化粒子(φ1～5mm大)・焼土粒子(φ1～2mm大)を含む。締りやや良。
- 2 灰黄褐色砂質土(10YR4/2) 微量の椀名二ツ岳白色軽石(φ1～40mm大)を含む。
- 3 にぶい黄褐色砂質土(10YR6/3) 微量の椀名二ツ岳白色軽石小粒(φ1～10mm大)を含む。
- 4 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の椀名二ツ岳白色軽石(φ1～40mm大)を含む。
- 5 にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3) 微量の椀名二ツ岳白色軽石(φ2～40mm大)を含む。
- 6 にぶい黄褐色砂質土(10YR4/3) 微量の椀名二ツ岳白色軽石大粒(φ1～70mm大)を含む。





第506図 IX区26号住居の出土遺物

0.64m、深さ0.15mの楕円形の窪みを検出した。

カマドと貯蔵穴 東壁中央の南東隅寄りに位置する。カマド燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で緩やかに傾斜しており、大部分は失われている。燃焼部底から焚口周辺では焼土や炭化物の広がりを検出した。カマドは長さ0.60m、幅0.75m、深さ0.12mである。貯蔵穴は検出されなかった。掘方で竪穴の北東隅から検出された楕円形の土坑状の窪みは貯蔵穴の可能性がある。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から黒色土器の椀(1)、カマド使用面から須恵器の杯(4・6)、土師器の甕(9)、床面付近から須恵器の杯(2・3・5)、掘方から灰釉陶器の椀(8)、土師器の羽釜(10・11)が出土した。

時代 10世紀後半に帰属する10号住居との調査での新旧関係は矛盾する。遺構は出土遺物から平安時代11世紀前半と想定される。

6. X区

X区では飛鳥時代から平安時代の竪穴住居が28棟検出された。時代別の遺構数では、飛鳥時代が1棟、奈良時代が1棟、平安時代が24棟、年代未詳の住居は2棟である。平安時代の住居は9世紀が5棟、10世紀が18棟である。

1号住居(第507～511図・第4表、PL.270・271・431)

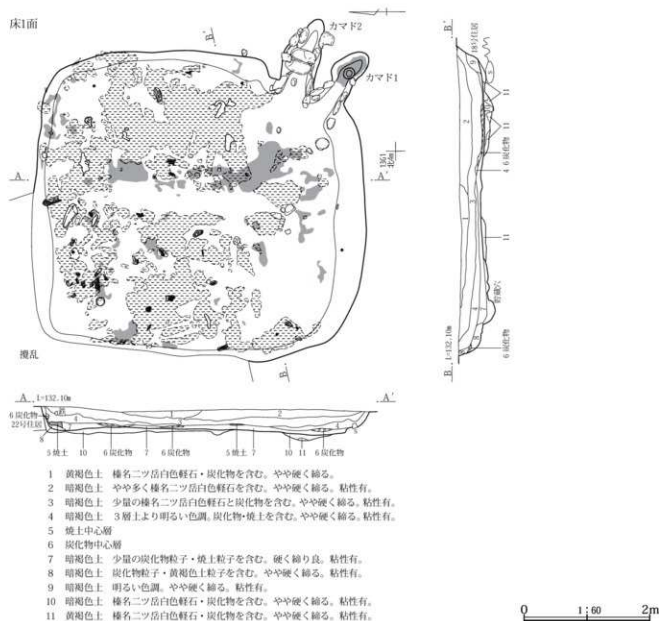
グリッド 13G 2

主軸方位 N84°W

重複 18・21・22・23・27・30号住居を切る。

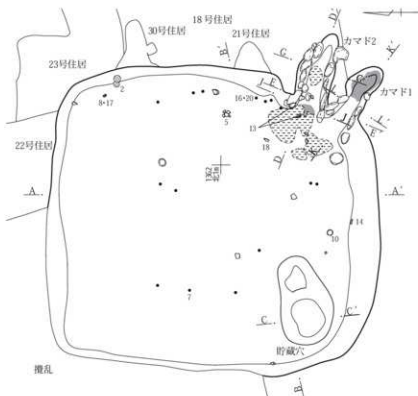
形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸正方形を呈する竪穴住居で、北西部は掘削により失われている。長辺は5.28m、短辺は4.85m、深さは0.44m、面積は18.75㎡であり、調査区で検出された竪穴住居の中で規模の大きなものに相当する。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む黄褐～暗褐色土が竪穴の中央に向かって緩く傾きながら成層している。床面付近は炭化物を含む暗褐色土からなり、床上0.03～0.05mに暗褐色土を挟んで層厚0.02～0.05mの炭化材が覆っている。炭化材は一定の方向性を有して分布しており垂木や部材などが炭化したものと想定される。炭化材は樹種同定を行った(第5章第3節参照)。



第507図 X区1号住居(1)

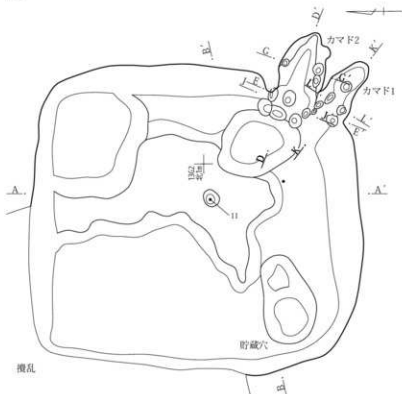
床2面



貯蔵穴 C-C'

- 1 暗褐色土 炭化物・焼上ブロックを含む。柔らかい。粘性非常に有。
- 2 暗褐色土 1層上より明るい色調。柔らかい。粘性非常に有。
- 3 暗褐色土 炭化物を含む。硬く締り良。粘性非常に有。
- 4 焼上中心層
- 5 炭化物中心層
- 6 暗褐色土 柔らかい。粘性非常に有。

掘方



カマド1

- 1 暗褐色土 極名二ツ岳白色軽石を含む。やや硬く締る。
- 2 暗褐色土 1層上より暗い色調。少量の極名二ツ岳白色軽石を含む。やや硬く締る。粘性有。
- 3 暗褐色土 少量の極名二ツ岳白色軽石・焼上粒子を含む。やや硬く締る。粘性有。
- 4 暗褐色土 少量の炭化物粒子・焼上粒子を含む。硬く締り良。粘性有。
- 5 黒褐色土 多量の炭化物を含む。硬く締り良。粘性有。
- 6 褐色土 やや多く焼上ブロックを含む。硬く締り良。粘性有。
- 7 灰中心層
- 8 焼上中心層
- 9 黒褐色土 焼上ブロックを含む。硬く締り良。粘性有。
- 10 赤褐色土 焼上主体の層。硬く締り良。粘性有。
- 11 暗褐色土 炭化物・焼上ブロックを含む。硬く締り良。粘性非常に有。
- 12 黄褐色土 硬く締り良。
- 13 赤褐色土 少量の極名二ツ岳白色軽石を含む。やや硬く締る。
- 14 暗褐色土 極名二ツ岳白色軽石を含む。やや硬く締る。
- 15 焼上中心層
- 16 褐色土 焼上を含む。柔らかい。粘性有。
- 17 赤褐色土 多量の焼上を含む。柔らかい。粘性有。
- 18 暗褐色土 焼上を含む。硬く締り良。粘性有。
- 19 暗褐色土 焼上粒子を含む。硬く締り良。粘性有。

0 1:60 2m

第508図 X区1号住居(2)

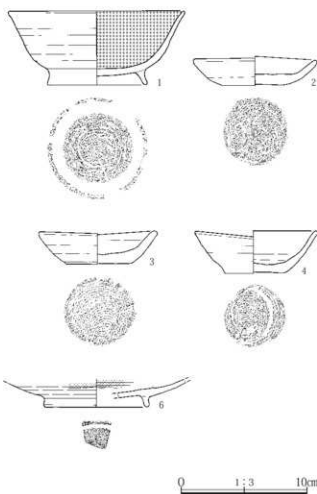
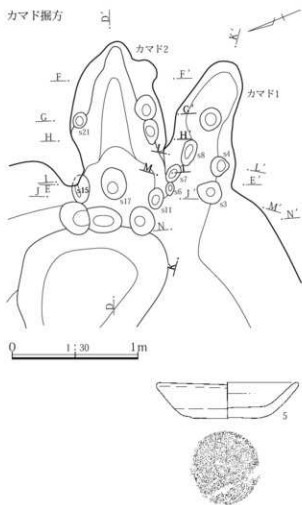
床面 暗褐色～黄褐色土を0.10mほど貼って、平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで掘方を構築している。北東隅の壁際から長辺1.16m、短辺1.39m、深さ0.18mの歪んだ方形の窪みを検出した。東壁から南及び西壁際には幅0.69～2.25m、深さ0.06～0.19mの溝状の窪みが周回する。

カマド 東壁の南東隅に位置する。更に東壁の南東隅寄りから古いカマドの痕跡が検出された。このことから住居廃絶時のカマドをカマド2、古いカマドをカマド1とする。カマド1・2の燃焼部は東壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。カマド2の燃焼部底はほぼ水平で、燃焼部から煙道にかけては緩やかに傾きながら立ち上がる。燃焼部から煙道の左右壁にはS4～11、S14・15、S17～21の円～垂角礫14点が据えられている(第4表)。これらは燃焼部壁と煙道を構成するカマド構築材である。これらの礫が埋め込まれた痕跡はカマド

掘方で検出された小ピットにそれぞれが対応する。燃焼部底の中央にはS17の垂円礫が据えられており、これは支脚である。S8・9とS14・18・20・21の上には扁平な棒状垂円礫のS1・2と垂角礫のS3が置かれている。また、S14・15の上には垂角礫のS13が置かれている。これらは天井高架材である。焚口付近の埋土中からは割れた棒状垂円礫のS12・16が出土した。これらはカマドの崩落によって移動した焚口付近の天井高架材と考えられる。燃焼部底から焚口では焼土と炭化物の広がりを検出した。カマドの埋土は暗褐色土が成層し、カマド2の煙道を含む長さは1.78m、煙道長0.93m、幅0.67m、深さ0.46mである。カマド1の燃焼部底は緩やかに傾斜し、そのまま傾きながら立ち上がる。燃焼部から煙道の左右壁にはS2～8の円～垂円礫7点が据えられている。これらはカマド構築材である。これらの礫が埋め込まれた痕跡はカマド掘方で検出された小ピットにそれぞれが対応する。煙道底の中央には直径0.19m、深さ0.01mの

カマド掘方



第509図 X区1号住居と出土遺物

第4章 第2面の遺構と出土遺物

小ピットを検出した。ピットは壁面が焼土化しており、カマドの使用時に構築されていた。これは煙出しを垂直方向から掘削した際に先端に残された痕跡の可能性がある。カマドの埋土は褐色土が成層し、掘方からは焼土や炭化物を含む褐色土が成層することからカマド1は再構築されて使用された可能性がある。カマド1の長さは1.75m、幅0.63m、深さ0.49mで、カマド2と規模が等しい。

貯蔵穴 床面の南西隅の壁際から長径0.55～0.89m、短径0.62～0.78m、深さ0.32～0.43mの歪んだ楕円形の土坑を検出した。土坑はカマドの位置関係や形状から貯蔵穴と考えられ、土坑底が東西で切合うことから新旧カマドの構築に伴って貯蔵穴も再構築された可能性を示唆する。

第4表 X区1号住居カマドの礎一覽

カマド1

礎	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)
S 1	22	20	
S 2	18	13	
S 3	26	10	25
S 4	34	12	18
S 5	12	9	
S 6	12	9	
S 7	29	12	24
S 8	28	10	20

カマド2

礎	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)
S 1	42	20	11
S 2	40	20	11
S 3	20	13	5
S 4	22	13	
S 5	12	7	3
S 6	27	11	16
S 7	28	22	15
S 8	24	10	11
S 9	27	11	12
S 10	31	7	29
S 11	18	16	24
S 12	21	19	
S 13	30	14	8
S 14	9	7	
S 15	27	13	12
S 16	30	18	12
S 17	13	9	13
S 18	13	10	
S 19	22	10	19
S 20	13	7	
S 21	21	8	5

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。一辺が5mにおよぶ竪穴の規模から考えて、主柱穴を有しない構造の建物とは考えにくい。規模の大きな竪穴であるが主柱穴を持たない構造の竪穴住居である可能性や、主柱穴底がⅫ・ⅩⅢ層の黄褐色砂礫層で止められたため、柱穴の輪郭が不明瞭である可能性などが想定される。

遺物 床面から須恵器の杯(4・5)、壺(10)、灰軸陶器の皿(7)、鉄製鋸(16)、床面付近から須恵器の杯(2・3)、カマド使用面から土師器の櫃(12)、須恵器の羽釜(13)が出土した。出土遺物は10世紀内に年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀第4四半期。

2号住居(第512・513図、PL.272・432)

グリッド 13F 1

主軸方位 N88°E

重複 17・26・27号住居を切る。

形状と規模 東西-南北方向の辺を有する隅丸正方形の竪穴住居である。一辺は3.80m、深さは0.27m、面積は12.14㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む暗褐色土からなる。

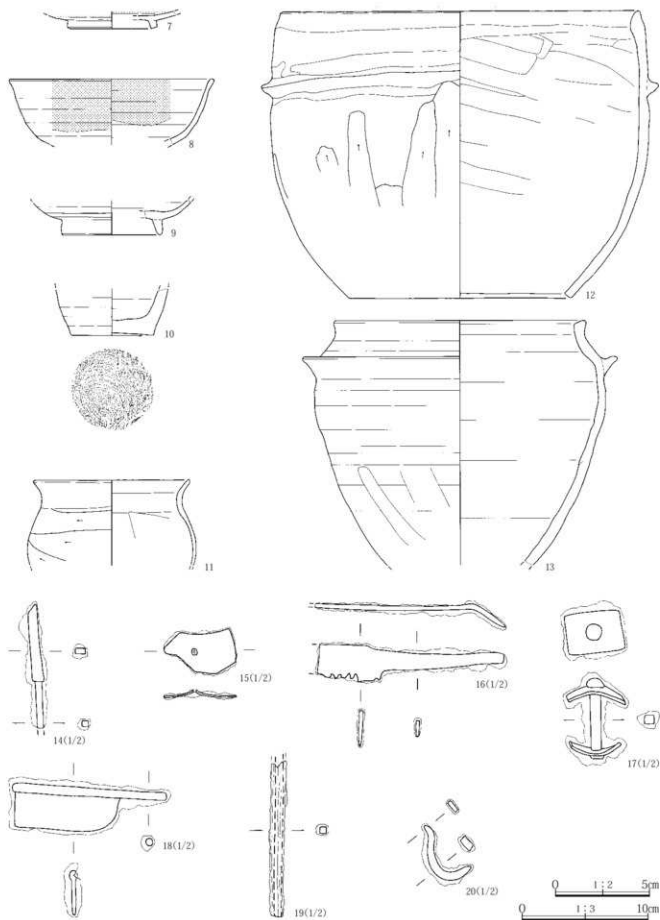
床面 暗褐色土を0.06mほど貼って平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅻ・ⅫⅢ層の黄褐色砂礫層を掘り込んで、掘方を構築している。カマド前と北東隅の壁際から不定形の浅い窪みを多く検出した。

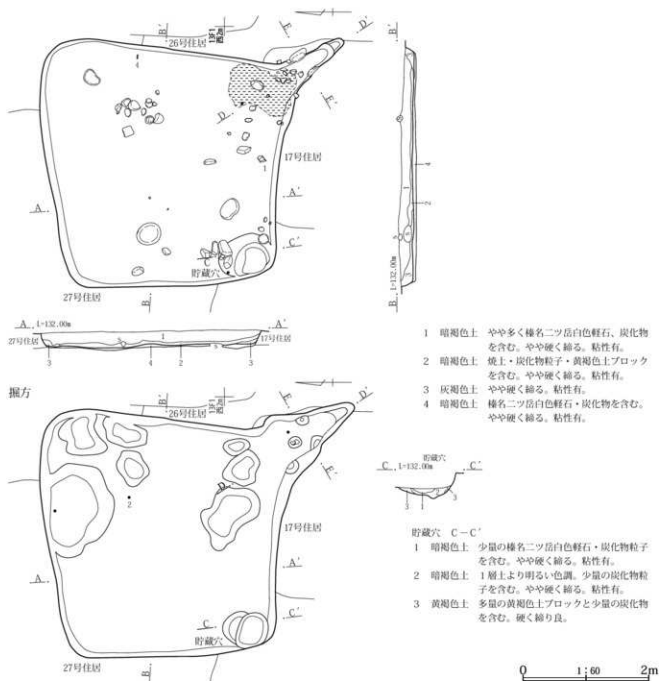
カマド 東壁の南東隅に位置する。カマドの燃焼部は壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底から煙道は水平で、緩やかに立ち上がり煙出しに接続する。煙道の左右壁には長径0.27～0.35m、短径0.09～0.11m、厚さ0.21～0.30mの垂門礎2点が掘えられており、これらはカマド構築材である。燃焼部底～焚口では炭化物の広がりが検出された。カマド埋土は暗褐色土が成層する。煙道を含むカマドの長さは1.43m、煙出し幅0.18m、カマドの幅0.58m、深さ0.34mである。

貯蔵穴 南西隅の壁際から長径0.88m、短径0.60m、深さ0.27mの隅丸長方形の土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。



第511図 X区1号住居の出土遺物



第512図 X区2号住居

遺物 床面から鉄釘(3)、埋土から土師器の甕(1)、掘方から鉄製釜(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀第4四半期。

3号住居(第514~516図、PL.273・432)

グリッド 3 F 19

主軸方位 N87°W

重複 11・12号住居を切る。

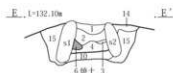
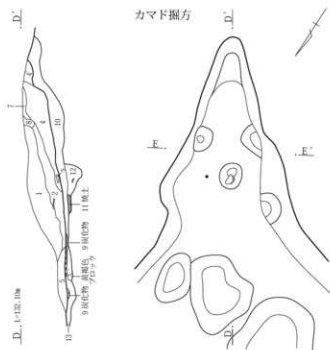
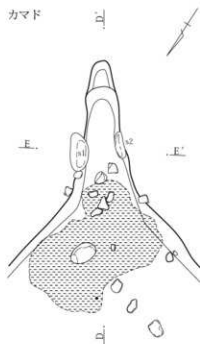
形状と規模 東西方向に長軸を有し、正方形を呈する竪

穴住居である。長辺は4.07m、短辺3.98m、深さは0.24m、面積は13.68㎡である。

埋土 二ツ岳の白色軽石を含む暗褐色土からなる。

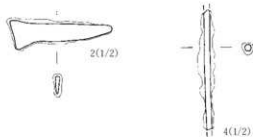
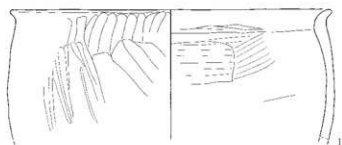
床面 暗褐~黄褐色土を0.11mほど貼って平坦な床面を構築している。中央の北東隅寄りから直径0.79m、深さ0.16mの浅い円形を呈する土坑1を検出した。

掘方 XII・XIII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで、掘方を構築している。土坑1の周辺や北西隅の壁際から不定形の浅い窪みを検出した。



- 1 暗褐色土 少量の礫名二ツ岳白色軽石・炭化物を含む。やや硬く締る。
- 2 暗褐色土 焼土・炭化物・黄褐色土ブロックを含む。硬く締り良。粘性有。
- 3 灰褐色土 多量の灰と焼土ブロックを含む。硬く締り良。粘性非常に有。
- 4 暗褐色土 焼土・灰を含む。硬く締り良。粘性有。
- 4' 褐色土 焼土ブロック・炭化物粒子を含む。やや硬く締る。
- 5 黒色土 炭化物主体。黄褐色土ブロックを含む。硬く締り良。粘性非常に有。
- 6 赤褐色土 焼土主体。硬く締り良。粘性有。
- 7 赤褐色土 多量の焼土ブロックを含む。やや硬く締る。
- 8 暗褐色土 少量の炭化物粒子・焼土粒子を含む。やや硬く締る。
- 9 炭化物中心層
- 10 褐色土 焼土ブロック・炭化物・灰を含む。硬く締り良。
- 11 赤褐色土 焼土主体。硬く締り良。
- 12 暗褐色土 少量の焼土ブロックを含む。柔らかい。粘性少し有。
- 13 黄褐色土 少量の礫名二ツ岳白色軽石・炭化物粒子を含む。やや硬く締る。粘性有。
- 14 灰褐色土 少量の礫名二ツ岳白色軽石・炭化物粒子を含む。硬く締る。
- 15 暗褐色土 少量の礫名二ツ岳白色軽石・炭化物粒子を含む。やや硬く締る。粘性有。

0 1:30 1m



0 1:2 5cm
0 1:3 10cm

第513図 X区2号住居の出土遺物

カマド 東壁の南東隅に位置する。カマドの燃焼部は壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、緩やかに立ち上がり煙出しに接続する。燃焼部の左右壁掘方からは長径0.24～0.30mの小ピットが検出され、これらは位置や形状からカマド構築材の痕跡と考えられる。また、燃焼部底付近の埋土から長径0.19mの垂円礫が出土した。燃焼部底～焚口では炭化物の広がりが検出された。カマド埋土は焼上ブロックを含む暗褐色土が成層する。煙道を含むカマドの長さは1.97m、煙出し幅0.20m、カマドの幅0.77m、深さ0.32mである。

貯蔵穴 南西隅の床面から長径0.89m、短径0.75m、深さ0.40mの楕円形の土坑を検出した。土坑は位置や形状から貯蔵穴と考えられる。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 埋土から須恵器の椀(1)、カマド埋土から灰釉陶器の椀(2)、掘方から刀子(3)が出土した。出土遺物は10世紀内に年代幅を有する。

時代 平安時代10世紀。

12号住居(第514・517・518図, PL.282)

グリッド 3 F 19

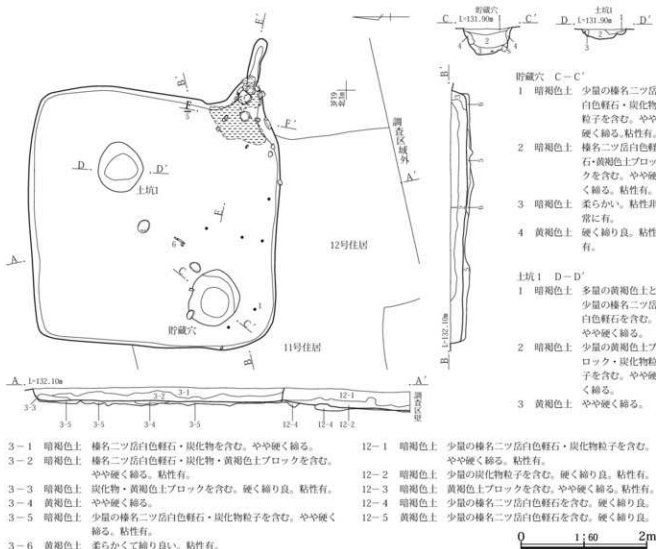
主軸方位 N84°E

重複 3号住居に切られる。11号住居を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、方形を呈する竪穴で、北部は3号住居により失われ、南部は調査区外に存在する。長辺は2.81m+、短辺2.40m+、深さは0.21m、検出された最大の面積は5.66㎡である。

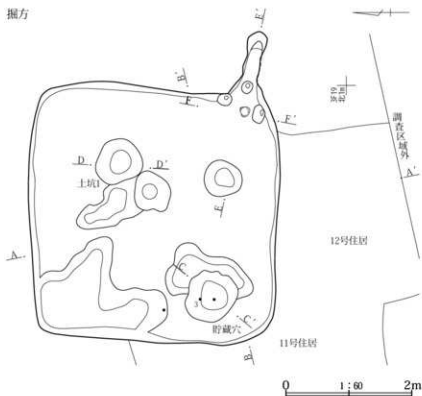
埋土 ニツ岳の白色軽石を含む暗褐色土からなる。

床面 暗褐色～黄褐色土を0.10mほど貼って平坦な床面を



第514図 X区3号住居(1)

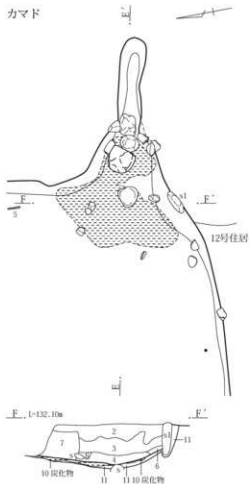
掘方



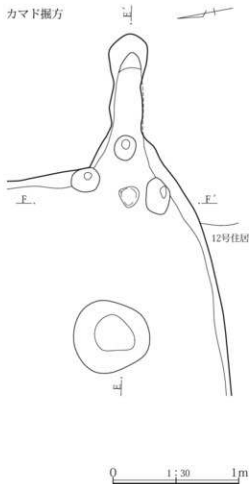
カマド

- 1 暗褐色土 椽名二ツ岳白色軽石を含む。やや硬く締る。粘性有。
- 2 灰褐色土 少量の椽名二ツ岳白色軽石・炭化物を含む。やや硬く締る。粘性有。
- 3 暗褐色土 黄褐色土ブロック・炭化物粒子を含む。硬く締り良。粘性有。
- 4 暗褐色土 炭化物を含む。硬く締り良。粘性有。
- 5 暗褐色土 黄褐色土ブロック・白色軽石を含む。やや硬く締る。
- 6 茶褐色土 少量の炭化物粒子を含む。硬く締り良。粘性有。
- 7 黄褐色土 やや硬く締る。粘性有。
- 8 灰褐色土 少量の炭土・灰を含む。やや硬く締る。粘性有。カマド天井部の崩落か。
- 9 赤褐色土 焼土主体。柔らかい。
- 10 炭化物中心層
- 11 暗褐色土 少量の炭化物粒子を含む。やや硬く締る。粘性有。
- 12 黄褐色土 上層に炭化物の薄い層がある。柔らかい。粘性有。
- 13 焼土中心層
- 14 褐色土 焼土・炭化物を含む。柔らかい。粘性非常に有。

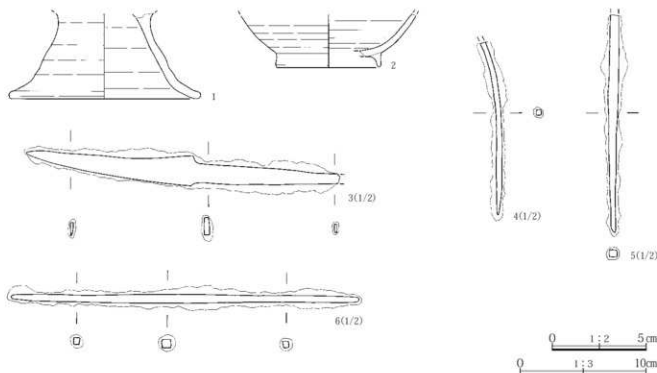
カマド



カマド掘方



第515図 X区3号住居(2)



第516図 X区3号住居の出土遺物

構築している。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで、ほぼ平坦な掘方を構築している。

カマドと貯蔵穴 カマドと貯蔵穴は検出されなかった。
柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から須恵器の羽釜(3)、埋土から土師器の碗(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀前半。

11号住居(第517・518図、PL.282)

グリッド 3 F19

主軸方位 N78° E

重複 3・12号住居に切られる。

形状と規模 北西～南東方向に長軸を有し、隅丸方形を呈する竪穴で、東部は3・12号住居により失われている。長辺は4.03m、短辺1.83m+、深さは0.24m、検出された最大の面積は5.46㎡である。

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む暗褐色土からなる。

床面 暗褐色土を0.03mほど貼って平坦な床面を構築している。

掘方 XII・XII層の黄褐色砂礫層を掘り込んで、ほぼ平坦

な掘方を構築している。

カマド カマドは検出されなかった。3・12号住居により失われた可能性がある。

貯蔵穴 南西隅の床面から長径0.86m、短径0.65m、深さ0.19mの楕円形の土坑を検出した。底直上から灰軸陶器の碗(1)が出土した。11号住居は3号住居の西縁の規模が同一で、同じ規模の土坑が南西隅に存在することから、土坑は貯蔵穴と考えられる。

柱穴 床面で主柱穴と思われる柱穴は検出されなかった。主柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 なし。

時代 平安時代10世紀前半。

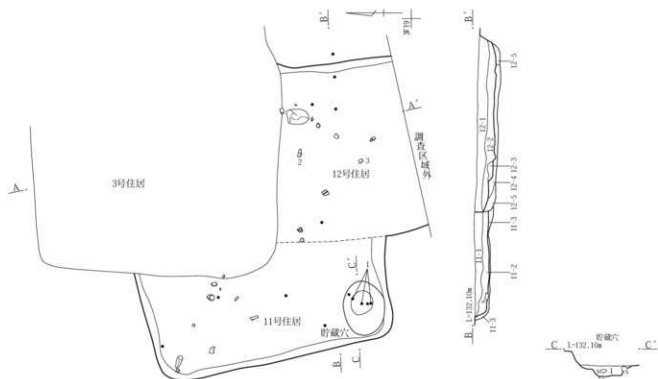
4号住居(第519・520図、PL.274・432)

グリッド 3 G20

主軸方位 N78° E

重複 15・27号住居、60号土坑を切る。

形状と規模 南北方向に長軸を有し、隅丸方形を呈する竪穴住居でカマドと東壁周辺のみを検出した。竪穴の西部にあたる大部分は調査区外に存在する。長辺は4.40m、短辺は0.68m+、深さは0.42m、検出された最大の面積は1.91㎡である。

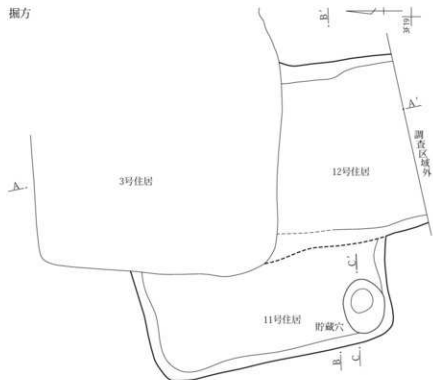


- 11-1 暗褐色土 少量の榛名ニッ岳白色軽石・炭化物粒子を含む。やや硬く締る。粘性有。
- 11-2 暗褐色土 11-1層土より暗い色調。硬く締り良。粘性有。
- 11-3 暗褐色土 榛名ニッ岳白色軽石を含む。やや硬く締る。
- 12-1 暗褐色土 少量の榛名ニッ岳白色軽石・炭化物粒子を含む。やや硬く締る。粘性有。
- 12-2 暗褐色土 少量の炭化物粒子を含む。硬く締り良。粘性有。

- 11号住居貯蔵穴 C-C'
- 1 暗褐色土 少量の黄褐色土粒子を含む。硬く締り良。粘性非常に有。

- 12-3 暗褐色土 黄褐色土ブロックを含む。やや硬く締る。粘性有。
- 12-4 暗褐色土 少量の榛名ニッ岳白色軽石を含む。硬く締り良。
- 12-5 黄褐色土 少量の榛名ニッ岳白色軽石を含む。硬く締り良。

掘方

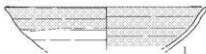


0 1:60 2m

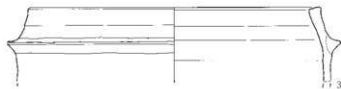
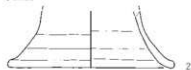
第517図 X区11・12号住居

第4章 第2面の遺構と出土遺物

11号住居

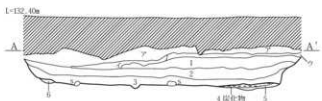
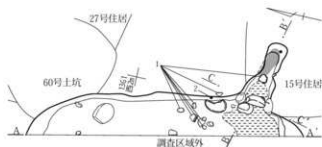


12号住居



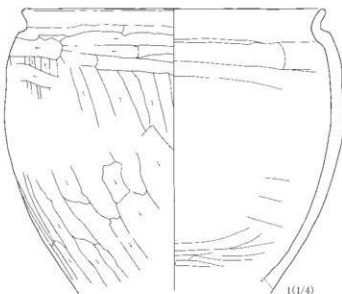
0 1:3 10cm

第518図 X区11・12号住居の出土遺物



0 1:60 2m

- ア 暗褐色土 榛名二ツ岳白色軽石を含む。硬く締る。
 イ 暗褐色土 砂層を含む。やや硬い。
 ウ 酸化鉄分層
 1 暗褐色土 少量の榛名二ツ岳白色軽石・炭化物粒子を含む。
 浅間B軽石を全体的に含む。やや硬く締る。
 2 暗褐色土 榛名二ツ岳白色軽石・黄褐色土ブロックを含む。
 やや硬く締る。粘性有。
 3 暗褐色土 炭化物粒子・黄褐色土ブロックを含む。硬く締り
 良。粘性非常に有。
 4 黒色土 炭化物主体の層。硬く締り良。粘性非常に有。
 5 黄褐色土 少量の炭土粒子・炭化物粒子を含む。硬く締り良。
 6 暗褐色土 硬く締り良。粘性非常に有。



1(1/4)

0 1:2 5cm

0 1:4 10cm



第519図 X区4号住居と出土遺物

埋土 ニツ岳の白色軽石を含む暗褐色土からなる。

床面 部分的に暗褐～黄褐色土を薄くはり、大部分はⅫ・Ⅺ層の黄褐色砂質土を削り出して平坦な床面を構築している。

掘方 Ⅻ・Ⅺ層の黄褐色砂質土を掘り込んで平坦な掘方を構築している。

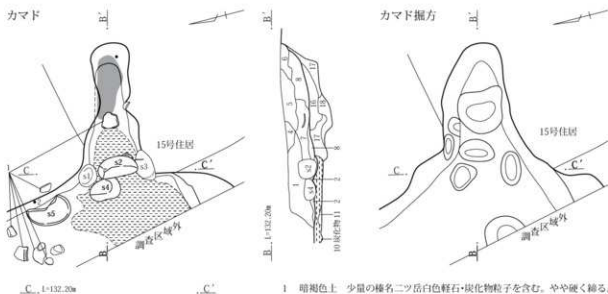
カマドと貯蔵穴 東壁の南東隅に位置する。カマドの燃焼部は壁から奥を掘り込んで壁の外側に構築している。燃焼部底は水平で、緩やかな勾配で立ち上がる。燃焼部の左右壁には長径0.29～0.30m、短径0.13～0.16m、厚さ0.18～0.25mの亜円礫2点が据えられており、これらの礫の間には長径0.39m、短径0.12m、厚さ0.16mの棒状亜円礫が出土した。これらは前者が焚口付近のカマド

構築材、後者は天井高架材である。燃焼部底から焼土、焚口では炭化物の広がりを検出した。カマド埋土は暗褐～灰褐色土が成層する。カマドの長さは1.24m、カマドの幅0.62m、深さ0.32mである。貯蔵穴は検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかった。床面に支柱穴を持たない構造の竪穴住居と想定される。

遺物 床面から土師器の甕(1)、床面付近から完形の鉄製品(2)が出土した。

時代 平安時代10世紀後半。



- 1 暗褐色土 少量の種名ニツ岳白色軽石・炭化物粒子を含む。やや硬く締る。粘性有。
- 2 暗褐色土 少量の炭化物粒子・焼土粒子を含む。硬く締り良。粘性有。
- 3 黒褐色土 炭化物粒子・焼土粒子を含む。柔らかい。粘性非常に有。
- 4 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子を含む。やや硬く締る。
- 5 暗褐色土 焼土・炭化物粒子・種名ニツ岳白色軽石を含む。やや硬く締る。
- 6 赤褐色土 多量の焼土ブロックを含む。硬く締る。
- 7 暗褐色土 焼土粒子・炭化物粒子・灰を含む。硬く締り良。粘性有。
- 8 灰褐色土 焼土・炭化物・灰を含む。硬く締り良。粘性有。
- 9 暗褐色土 種名ニツ岳白色軽石・焼土を含む。やや硬く締る。粘性有。
- 10 黒褐色土 炭化物を主体に焼土ブロック・黄褐色土ブロックを含む。硬く締り良。粘性非常に有。
- 11 黄褐色土 焼土ブロックを含む。硬く締り良。粘性非常に有。
- 12 暗褐色土 少量の炭化物粒子・焼土粒子・白色軽石を含む。やや硬く締る。粘性有。
- 13 暗褐色土 少量の炭化物粒子を含む。やや硬く締る。粘性非常に有。
- 14 暗褐色土 焼土ブロック・炭化物を含む。柔らかい。粘性非常に有。
- 15 暗褐色土 炭化物を含む。柔らかい。粘性非常に有。
- 16 赤褐色土 多量の焼土ブロック、少量の炭化物を含む。硬く締り良。粘性非常に有。
- 17 暗褐色土 少量の焼土粒子・炭化物粒子を含む。硬く締り良。粘性非常に有。
- 18 黄褐色土 少量の焼土ブロックを含む。硬く締り良。粘性非常に有。

0 1:30 1m